

人類のあけぼの

下 卷

エレン・G・ホワイト著

清 野 喜 夫 訳

福 音 社

PATRIARCHS AND PROPHETS

by

ELLEN G. WHITE

Fukuinsha
Yokohama, Japan

目次

[illegible]

第四六章	祝福とのろい・・・・・・・・・・	124
第四七章	ギベオン人との同盟・・・・・・・・	129
第四八章	カナンの分配・・・・・・・・・・	137
第四九章	ヨシユアの決別の言葉・・・・・・・・	153
第五〇章	十分の一献金とささげ物・・・・・・・・	159
第五一章	貧しい者への神の配慮・・・・・・・・	166
第五二章	年ごとの祭り・・・・・・・・・・	176
第五三章	初期の士師たち・・・・・・・・・・	188
第五四章	サムソン・・・・・・・・・・	208
第五五章	幼児サムエル・・・・・・・・・・	220
第五六章	エリとむすこたち・・・・・・・・・・	230
第五七章	契約の箱ペリシテ人に奪われる・・・・・・・・	239
第五八章	預言者の学校・・・・・・・・・・	253
第五九章	イスラエル最初の王サウル・・・・・・・・	256

第六〇章	サウルの不遜な態度	284
第六一章	サウル退けられる	296
第六二章	ダビデ油を注がれる	310
第六三章	ダビデとゴリアテ	316
第六四章	サウル、ダビデを追う	324
第六五章	ダビデの寛容	339
第六六章	サウルの死	358
第六七章	古代と現代の魔術	367
第六八章	チクラグにおけるダビデ	377
第六九章	ダビデの即位	387
第七〇章	ダビデの治世	396
第七一章	ダビデの罪と回心	414
第七二章	アブサロムの反逆	431
第七三章	ダビデの晩年	456

これらの事が彼らに起ったのは、他に対する警告としてであつて、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいゝるわたしたちに対する訓戒のためである。だから、立つていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。

コリント人への第一の手紙一〇ノ一一、一二

イスラエルの流浪

イスラエルの人々は、約四十年のあいだ荒野に消息を絶った。モーセは、「カデシ・バルネアを出てこのかた、ゼレデ川を渡るまでの間の日は三十八年であって、その世代のいくさびとはみな死に絶えて、宿営のうちにいなくなつた。主が彼らに誓われたとおりである。まことに主の手が彼らを攻め、宿営のうちから滅ぼし去られたので、彼らはついに死に絶えた」と書いている(申命記二ノ一四、一五)。

この年月の間、人々は自分たちが神の懲罰のもとにあることを常に思い起こさせられた。彼らは、カデシで反逆を起こして神を拒んだ。そして、神も、しばらくの間彼らを拒否された。彼らは、神の契約に不忠実であつたから、契約のしるしである割礼の儀式にあづかつてはならなかつた。彼らは、奴隷の地に帰りたいと願つて、自由を獲得する資格がないことを明示した。であるから、奴隷の境遇からの解放を記念して制定された過越の祭りを行なつてはならなかつたのである。

しかし、幕屋での務めが続いていたことは、神が人々を全くお見捨てになつたのではないことを証拠立ててい

た。また、神は摂理的に彼らの必要を満たされた。モーセは、民の放浪の歴史をくり返して述べた。「あなたの神、主が、あなたのするすべての事において、あなたを恵み、あなたがこの大いなる荒野を通るのを、見守られたからである。あなたの神、主がこの四十年の間、あなたと共におられたので、あなたは何も乏しいことがなかった」(同・二ノ七)。ネヘミヤが記録したレビ人たちによる賛美の言葉には、彼らが神に捨てられて、放浪していた年月の間にもなお、神がイスラエルの民を保護なさったことが、目に見えるように描写されている。「あなたは大きいなるあわれみをもって彼らを荒野に見捨てられず、昼は雲の柱を彼らの上から離さないで道々彼らを導き、夜は火の柱をもって彼らの行くべき道を照されました。またあなたは良きみたまを賜わって彼らを教え、あなたのマナを常に彼らの口に与え、また水を彼らに与えて、かわきをとどめ、四十年の間彼らを荒野で養われたので、彼らはなんの欠けるところもなく、その衣服も古びず、その足もはれませんでした」(ネヘミヤ記九ノ一九 二一)。

荒野の放浪は、謀叛を起こし、つぶやいた人々に対する罰として決められただけでなく、成長しつつあった次の世代を訓練して、約束の国にはいる準備を与えるためのものでもあった。モーセは、彼らに言った。「人がその子を訓練するように、あなたの神、主もあなたを訓練される」。「それはあなたを苦しめて、あなたを試み、あなたの心のうちを知り、あなたがその命令を守るか、どうかを知るためであった。それで主はあなたを苦しめ、あなたを飢えさせ、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナをもって、あなたを養われた。人はパンだけでは生きず、人は主の口から出るすべてのことばによって生きることあなたに知らせるためであった」

(申命記八ノ五、二、三)。

「主はこれを荒野の地で見だし、獣のほえる荒れ地で会い、これを巡り囲んでいたわり、目のひとみのように守られた。」「彼らのすべての悩みとき、主も悩まれて、そのみ前の使をもって彼らを救い、その愛とあわれみとによって彼らをあがない、いにしえの日、つねに彼らをもたげ、彼らを携えられた」(同・三二ノ一〇、イザヤ書六三ノ九)。

それにもかかわらず、荒野における彼らの唯一の記録は、彼らの主に対する反逆であった。コラの謀叛の結果一万四千人のイスラエル人が死んだ。ほかに、同じように、神の権威を無視した精神を示した事件が起こった。

あるときには、エジプトからイスラエル人と共にやって来た寄り集まり人のひとりであるエジプト人と、イスラエルの女との間のむすこが、彼の属する宿営を離れて、イスラエル人の場所へはいり、そこに自分の天幕を張る権利を主張したのである。これは、神の戒めが禁じていたことであって、エジプト人の子孫は三代まで会衆から除外されていたのである。そこで、彼とイスラエル人との間の争いは、裁判にかけられて、彼の負けと決まった。

彼は、この決定に激怒し、裁判官をのろい、興奮のあまり、神の名を汚したのである。彼は、ただちにモーセの前に連れてこられた。「自分の父または母をのろう者は、必ず殺されなければならない」という戒めはあったが、このような場合のことについては、なんの規定もなかった(出エジプト記二一ノ一七)。これは、非常に恐ろしい犯罪であったので、神からの特別の指示を仰ぐ必要があった。この人は、神のみこころがはっきりするまで監禁された。神ご自身が判決をくだされた。神を汚した者は、神の指示のもとに宿営の外に連れ出されて、石で、打たれた。彼の罪の証人たちが、彼の頭に手をおき、彼に対する告訴が真実であることを厳粛に証明した。それ

から、彼らが最初に石を投げ、そのあとで、そばに立っていた人々が刑の執行に加わった。

これに続いて、同じような違反に対する律法が布告された。「あなたはまたイスラエルの人々に言いなさい、『だれでも、その神をのろう者は、その罪を負わなければならない。主の名を汚す者は必ず殺されるであろう。全会衆は必ず彼を石で撃たなければならない。他国の者でも、この国に生れた者でも、主の名を汚すときは殺されなければならない』」(レビ記二四ノ一五、一六)。

このようなきびしい刑罰が、興奮のあまり口にした言葉に課せられるなら、果たして神は愛と正義の神であるかという疑問をもつ人々もあるう。しかし、神に敵意をいだいて発した言葉は大罪であることを示すことは、愛も正義もともに要求するところである。最初の違反者に与えられた罰は、他の者に対して、神のみ名を敬わなければならないという警告であった。しかし、もしこの人の罪が罰せられずにすんだならば、他の者たちは、規律を乱し、そのために多くの人の命が犠牲にされたことであろう。

イスラエルの民と共に、エジプトから来た寄り集まり人は、いつも誘惑と紛争の原因であった。彼らは、偶像礼拝を捨て、真の神を礼拝すると言っていた。しかし、彼らの幼少期の教育と訓練は、彼らの習慣と品性をすでに形成しており、偶像礼拝と不敬虔な精神に少なからず感化されていた。彼らは、だれよりも争いを起こし、まづ先に不平を言い、偶像礼拝の習慣や神に対するつばやきを宿営のなかに満たした。

荒野に引き返してから間もなく、安息日違反者が出るというできごとが起こった。これは、その事情から見ても、特に罪深い事件であった。主がイスラエルに約束の国を与えないといわれたのを聞いて、人々は反逆の精神を抱いた。民のひとりが、カナンにはいられないことを怒って、安息日にたぎぎを拾いに出かけ、公然と第四条を犯

し、神の戒めに反抗を示したのである。荒野を放浪していた間は、七日めに火をたくことはきびしく禁じられていた。この禁令は、気候が寒くなり、火が必要なきもあるカナンでは施行されるものではなかった。しかし、荒野では、暖をとるために火をたく必要はなかった。この人の行為は、故意に第四条の戒めを犯したのであった。すなわち、それは、不注意や無知の罪ではなくて、僭越の罪であった。

彼は、その場で捕えられて、モーセのところに連れて来られた。安息日を犯す者には、死刑の罰が与えられることになっていた。しかし、その罰がどのように執行されるかは、まだ示されていなかった。モーセが、このことを主の前に申し上げると、指示が与えられた。「その人は必ず殺されなければならない。全会衆は宿営の外で、彼を石で撃ち殺さなければならない」(民数記一五ノ三五)。冒流の罪と故意に安息日を犯した罪は、ともに神の權威に対する侮辱をあらわしたものであるために、同じ刑罰を受けた。

今日も創造を記念する安息日を、単なるユダヤの制度として、これを拒否し、もしそれを守るべきものであるとすれば、その違反は死刑でなければならないと主張する人が多くいる。しかし、神のみ名を汚す罪も、安息日を犯す罪と同じ刑罰が与えられているのである。それならば、第三条も、ユダヤ人だけに当てはまるものとして廃止すべきであろうか。死罪のことからこのように証明しようとすれば、それは第四条と同様に、第三条、第五条、そして十誡のほとんど全部に当てはまるのである。今、神は、神の戒めの違反者をすぐに罰せられないとしても、神のみことばは、罪の支払う報酬は死であると言っている。そして、最後の審判のときに、神の聖なる戒めを犯したものの運命は死であることが明らかにされる。

荒野の四十年間において、人々は、毎週マナの奇跡によって、安息日をきよく守らなければならないことを思

い起こさせられた。しかし、これでさえも彼らを従順に導くことはできなかった。彼らは、このように著しい刑罰に値する違反を公然と大胆に犯すことはなかったけれども、第四条の戒めの遵守が非常に不規則になった。神は、預言者を通して、彼らは、「大いにわたしの安息日を汚した」と宣言された(エゼキエル書二〇ノ一三 二四参照)。第一代めの人々が、約束の国から除外された理由の一つに、この点があげられている。しかし、彼らの子供たちも教訓を学ばなかった。彼らは、四十年間、荒野を放浪している間に、安息日をないがしろにしたのであった。神は、彼らがカナンにはいるのをおとどめにはならなかった。しかし、神は、彼らが約束の国に移住した後で、異邦の諸国に離散されるであろうと言われたのである。

イスラエルの人々は、カデシから荒野へ引き返した。そして、荒野の放浪期間を終えた。「イスラエルの人々の全会衆は正月になってチンの荒野にはいった。そして民はカデシにとどまった」(民数記二〇ノ一)。

ここで、ミリアムが死んで葬られた。大きな希望をもってエジプトを出た幾百万人のイスラエル人は、紅海のほとりで、主の勝利を祝って、歌い踊ったのであった。しかし、彼らは一生の間放浪を続けて、ついに荒野で死に絶えることになった。罪は、彼らのくちびるから、祝福の杯をはらいのけた。次の世代は、その教訓を学んだであろうか。

「すべてこれらの事があつたにもかかわらず、彼らはなお罪を犯し、そのくすしきみわざを信じなかった。…神が彼らを殺されたとき、彼らは神をたずね、悔いて神を熱心に求めた。こうして彼らは、神は彼らの岩、いと高き神は彼らのあがないぬしであることを思い出した」(詩篇七八ノ三二 三五)。しかし、彼らは、真心から立ち帰ることをしなかった。彼らは、敵に苦しめられたとき、唯一の救済者であられる神の助けを求めた。しかし、

「彼らの心は神にむかつて堅実でなく、神の契約に真実でなかった。しかし神はあわれみに富まれるので、彼らの不義をゆるして滅ぼさず、しばしばその怒りをおさえて、…また神は、彼らがただ肉であって、過ぎ去れば再び帰りこぬ風であることを思い出された」（同・七八ノ三七 三九）。

第 37 章

打たれた岩

本章は、民数記二〇ノ一 ― 三に基づく。

荒野におけるイスラエル人のかわきをいやした泉の水は、まず、最初にホレブの打たれた岩から流れ出た。彼らが、放浪していた全期間を通じて、必要な場合は、どんなところでも、神のあわれみ深い奇跡が行なわれて、水が供給された。しかし、水は、ホレブからいつまでも流れ出ていたのではなかった。彼らの旅の途中で、水が必要なきには、どこでも宿営のそばの岩の裂け目から水がわき出た。

清水をイスラエルのために流れ出させたのは、キリストが、「ご自分のみことばによってなさったのである。」「彼らについてきた霊の岩から飲んだのであるが、この岩はキリストにほかならない」(コリント第一・一〇ノ四)。彼は、霊的祝福と同様に、すべての物質的祝福の源である。真の岩なるキリストは、彼らの放浪期間を通じて、彼らと共におられたのである。「主が彼らを導いて、さばくを通らせられたとき、彼らは、かわいたことがなかった。主は彼らのために岩から水を流れさせ、また岩を裂かれると、水がほとばしり出た。」「かわいた地に川のように流れた」(イザヤ書四八ノ二一、詩篇一〇五ノ四一)。

打たれた岩は、キリストの型で、この象徴によつて、最も尊い靈的真理が教えられた。打たれた岩から生命を与える水が流れ出たように、「神にたたかれ」「われわれのとがのために傷つけられ」「われわれの不義のために砕かれた」キリストから、失われた人類のための救いの川が流れ出たのである（イザヤ書五三ノ四、五）。岩が一度打たれたように、キリストも「多くの人の罪を負うために、一度だけご自身をささげられた」のである（ヘブル九ノ二八）。われわれの救い主は、二度と犠牲にならるべきではなかった。キリストの恵みの祝福を求めるものは、悔い改めて、主のみ名によつて、心の願いを述べるだけである。こうした祈りは、イエスのみ傷を万軍の主の面前にもたらし、新たにもう一度、生命を与える血潮を流れさせるのである。イスラエルのために岩から水が流れ出たことによつて、それが象徴されていたのである。

荒野で岩から水が流れ出たことは、イスラエルがカナンに定住したのちも、非常な喜びをもつて祝われた。キリストの在世当時、この祝日は、最も感銘的な儀式となっていた。それは、各地からエルサレムに人々が集まつてくるときに行なわれた仮庵の祭りとともに祝われた。祭司は、毎日、祭りの七日間を通じて、音楽を奏するものとレビ人の合唱隊を伴つてシロアムの泉に行き、そこで金の一つの容器に水をくむのであった。礼拝に集まつた群衆は、彼らのあとに従つた。そして、泉に近づくことのできる者はみなその水を飲んだ。「あなたがたは喜びをもつて、救の井戸から水をくむ」と喜ばしい歌声があがるのであった（イザヤ書一二ノ三）。それから、祭司の手でくまれた水は、ラッパの響きと、「エルサレムよ、われらの足はあなたの門のうちに立っている」という歌声のなかを、宮までたずさえられた（詩篇一二二ノ二）。そして、賛美の歌声が高まり、群衆が、楽器と荘重なラッパの音に和して高らかに歌う合唱隊に加わつて歌っているとき、その水は、燔祭の壇の上に注がれた。

救い主は、この象徴的儀式によって、ご自分が彼らのためにもたらされた祝福に彼らの心を向けようとされた。

「祭の終りの大事な日に」イエスは、宮の庭に響き渡る大声で言われた。「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう。」「これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである」とヨハネは言った(ヨハネ七ノ三七 三九)。かわききった荒野にわき出て、荒れ果てた地に花を咲かせ、死にかけたものに生命を与えるために流れ出た新鮮な水は、キリストだけが与え得る神の恵みの象徴である。これは、命の水のよきに魂をきよめ、生きかえらせ、力づける。キリストが内住しておられる者のうちには、つきない恵みと力の泉がある。イエスは、真心から彼を求めるすべてのものの生活を楽しくし、その道を照らしてください。イエスの愛を心に受け入れるならば、それは、永遠の命に至るよいわざとなってわき出る。それは、泉がわき出た魂を祝福するばかりでなくて、その生きた水は、正しい言葉や行為となってわき出て、回りにいるかわいた人々をうるおすのである。

キリストは、この同じ象徴を、ヤコブの井戸のそばでサマリヤの女と語られたときに用いられた。「しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」(ヨハネ四ノ一四)。キリストは、二つの型を結合された。彼は、岩であり、生きた水である。

この同じ美しく意味深い象徴が、聖書全体に用いられている。キリストが来られる幾世紀も以前に、モーセは彼を救いの岩としてさし示した(申命記三二ノ一五参照)。詩篇記者は、彼のことを、「わがあがないぬし」「わ

が力の岩」「わたしの及びがたいほどの高い岩」「のがれの岩」「わが心の力」「わが避け所の岩」と歌っている。ダビデの詩のなかで、神の恵みは、天の羊飼いが、その群れを導かれるみどりの牧場のなかの冷たい「いのちのみぎわ」としても描かれている。また、「あなたはその楽しみの川の水を彼らに飲ませられる。いのちの泉はあなたのもとにあり」と彼は歌った(詩篇一九ノ四、六二ノ七、六一ノ二、七一ノ三、七三ノ二六、九四ノ二二、二三ノ二、三六ノ八、九)。賢者ソロモンは、「知恵の泉は、わいて流れる川である」といった(箴言一八ノ四)。エレミヤにとって、キリストは、「生ける水の源」であり、ゼカリヤにとっては、「罪と汚れとを清める一つの泉」であった(エレミヤ書二ノ一三、ゼカリヤ書一三ノ一)。

イザヤは、キリストを描写して、「とこしえの岩」また「疲れた地にある大きな岩の陰のよう」であると言った(イザヤ書二六ノ四、三二ノ二)。彼は、尊い約束を記録し、イスラエルのために流れた生きた水のことを、まざまざと思い起こさせている。「貧しい者と乏しい者とは水を求めても、水がなく、その舌がかわいて焼けているとき、主なるわたしは彼らに答える、イスラエルの神なるわたしは彼らを捨てることがない。」「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ、」「…荒野に水がわきいで、さばくに川が流れるからである。」「さあ、かわいてゐる者はみな水にきたれ」との招待が発せられている(イザヤ書四一ノ一七、四四ノ三、三五ノ六、五五ノ一)。また、聖書の終わりのほうでも、この招待がくり返されている。生命の水の流れは、「水晶のように輝」き、神と小羊のみ座から流れ出ている。「いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」という恵み深い招声は、各時代を通じて響きわたっているのである(黙示録二二ノ一、一七)。

ヘブルの軍勢がカデシに到着する少し前に、宿営の外にわいていた泉の水が枯れた。主は、もう一度、人々を

試みようとなさったのである。彼らが、神の摂理に信頼するか、それとも、父祖たちの不信仰をまねるかどうかをためそうとされた。

彼らは、すでに、カナン（カナンの山々の見えるところにきていた。彼らは、あと数日の行進で約束の国の境に着くことができた。彼らは、エサウの子孫の国であるエドムから少し離れたところにいた。そして、カナンへの道はそこを通っていた。モーセに次のような指示が与えられた。「身をめぐらせて北に進みなさい。おまえはまた民に命じて言え、『あなたがたは、エサウの子孫、すなわちセイルに住んでいるあなたがたの兄弟の領内を通ろうとしている。彼らはあなたがたを恐れるであろう。』…あなたがたは彼らから金で食物を買って食べ、また金で水を買って飲まなければならない」（申命記二ノ三 六））のような指示が与えられたことによって、水が枯れた理由が十分に説明されたはずであった。彼らは、よく肥えた、水の豊富な地帯を通って、カナンに直行しようとしていた。神は、彼らが、何にも妨げられずに、エドムを通過し、食物を買う機会と、群衆のために十分な水とを約束しておられた。奇跡的な水の流出が止まったことは喜ぶべきことで、荒野の放浪が終わったしるしであった。もし彼らが不信仰のために盲目になっ（い）なかつたならば、このことを理解したはずであった。しかし、神の約束の成就の証拠となるべきことが、疑い（い）とつばやき（い）の原因となつた。人々は、神が彼らにカナンをお与えになるとい（い）う希望を全く捨ててしまったようであつた。そして、彼らは、荒野の祝福を求めてやまなかつたのである。

神が、人々をカナンに入国させる前に、人々は、神の約束を信じたことを示さなければならなかつた。彼らがエドムに到着する前に水は止まつた。彼らは、しばらくの間、見るところによらず、信仰によって歩かなければ

ならなかったのである。彼らは、この第一の試練にあつて、父祖たちと同じ狂暴で忘恩の精神をあらわした。宿営内で水を求める声があがるやいなや、彼らは、長年彼らの必要を満たしたみ手を忘れて、神に助けを求めるかわりに、神に向かつてつぶやいた。彼らは、絶望の叫びをあげて、「さきにわれわれの兄弟たちが主の前に死んだ時、われわれも死んでいたらよかったものを」と言った(民数記二〇ノ三)。それは、コラの反逆のときに滅ばされた人々の中に、自分たちもはいつていればよかったと望んだことである。

彼らの叫びは、モーセとアロンに向けられたものであつた。「なぜ、あなたがたは主の会衆をこの荒野に導いて、われわれと、われわれの家畜とを、ここで死なせようとするのですか。どうしてあなたがたはわれわれをエジプトから上らせて、この悪い所に導き入れたのですか。ここには種をまく所もなく、いちじくもなく、ぶどうもなく、ざくろもなく、また飲む水也没有せん」(同・二〇ノ四、五)。

そこで、指導者たちは幕屋の入口に行つて地にひれ伏した。ふたたび、「主の栄光が…現れ」、主は、モーセに指示をお与えになつた。「あなたは、つえをとり、あなたの兄弟アロンと共に会衆を集め、その目の前で岩に命じて水を出させなさい。こうしてあなたは彼らのために岩から水を出」させなさい(同・二〇ノ六、八)。

ふたりの兄弟は、群衆の前に出て行つた。モーセは、神のつえを手持っていた。彼らは、もう老人であつた。彼らは、長い間、イスラエルの強情と反抗に耐えてきた。だが、ついに、モーセは忍耐しきれなかつた。「そむく人たちよ、聞きなさい。われわれがあなたのためにこの岩から水を出さなければならぬのであるうか」と叫んで、モーセは神の命令に従つて岩に命じるかわりに、ついで岩を二度も打つたのである(同・二〇ノ一〇)。水は豊かにわき出て、群衆を満足させた。しかし、大きなあやまちがなされた。モーセは、短気を起こして語

った。彼の言葉は、神のみ栄えが汚されたことに対する義憤からではなくて、人間の感情の表現であつた。彼は「そむく人たちよ、聞きなさい」と言つた。この譴責の言葉は事実であつた。しかし、真実でさえも、感情的になり、短気を起こして語るべきではない。神がかつてイスラエルの反逆を責めるようにモーセに命じられたとき、その言葉は、彼にとつては苦痛であり、彼らにも耐えがたいものであつた。しかし、神は彼をささえて、その言葉を語る力をお与えになつたのである。しかし、彼が自分で彼らを責めようとしたとき、彼は、神の霊を悲しませ、民に害毒を及ぼしただけであつた。彼が忍耐と自制を欠いたことは明らかであつた。こうして、これはモーセのこれまでの行動が神の指導のもとにあつたかどうかを人々に疑わせ、彼ら自身の罪の弁解をする機会を与えた。民と同様に、モーセも神を怒らせた。彼の行動は、最初から、批評非難の的であつたと彼らは言つた。今や彼らは、そのしもべによつて語られた神のすべての譴責を拒もうとして待機していた口実をみつけたのである。

モーセは、神に対する不信をあらわした。「われわれがあなたのために……水を出さなければならぬのであるうか」と彼は言つて、主が約束を果たされないかのように尋ねた。「あなたがたはわたしを信じないで、イスラエルの人々の前にわたしの聖なることを現さなかつた」と主はふたりの兄弟に言われた(同・二〇ノ一二)。水が枯れ、人々がつぶやき反抗したときに、神の約束に対する彼ら自身の信仰は動揺した。親たちは、不信仰のために荒野で滅びる運命にあつたが、彼らと同じ精神が子供たちにもあらわれた。彼らも約束を受けそこなうのであるうか。疲れ果て、意気消沈したモーセとアロンは、人々の間にゆきわたつた考えを止めようと努力しなかつた。もし彼らが神に対する不動の信仰をいだいていることを明らかにし、人々に事情をよく説明したならば、彼らがこの試練に耐えられるようにすることができたことであろう。行政官として、彼らに与えられた権限を敏

速に、決断をもって行使したならば、彼らは、つぶやきをしずめることができたかも知れなかった。神に援助を仰ぐ前に、自分たちの最善を尽くして、事態を收拾することが彼らの責任であつた。カデシにおける不平がすみやかにしずめられていたならば、どれほどの害毒が防がれたことであろう。

モーセは、性急な行動によつて、神が教えようとされた教訓の効果を無にしてしまった。キリストを象徴した岩は、一度打たれたのである。そのように、キリストは一度さざげられたのであつた。二度めには、ただ岩に命じるだけでよかつたのである。それは、われわれがイエスの名によつて、祝福を求めさえすればよいのと同じである。岩を二度打つことによつて、この美しいキリストの象徴の意味がなくなつてしまった。

それだけでなく、モーセとアロンは、ただ神だけに属する力をわがものがおに装つた。神の介入が必要であるということは、非常に厳肅な事態であつた。イスラエルの指導者たちは、これを機会に人々の敬神の念を助長し神の力と恵みに対する信仰を強めなければならなかつた。「われわれがあなたがたのためにこの岩から水を出さなければならぬのであるうか」と彼らは、怒つて叫んだ。彼らは人間的弱さと情をもつた彼ら自身にその力があるかのようにふるまい、自分たちを神の位置においたのである。モーセは、絶えず、つぶやき反抗する民に疲れ果てて、全能者なる神が彼の援助者であられることを忘れた。そして、彼は、神の力を受けることをせずに、人間の弱さをあらわして、彼の記録に汚点を残したのである。彼は、仕事を完成するまで、純潔、堅実、無我の精神を保つことができたのであるが、ついに敗北した。神は賛美され、高められなければならないときに、イスラエルの会衆の前で、恥辱をこうむられたのである。

神は、この場合、その悪行によつてモーセとアロンを怒らせた人々に罪の宣告をなさらなかった。譴責は、す

べて指導者に下った。神の代表者が、神を尊ばなかった。モーセとアロンは、民のつぶやきが、彼らに対してではなく、神に対して行なわれたものであることを忘れて、人々が彼ら自身につぶやいていると感じた。彼らは、自分自身をながめて、自分たちを哀れに思い、無意識のうちに罪を犯し、神の前における人々の大きな罪を、彼らに示すことをしなかった。

非常にきびしく、屈辱的な刑罰がすぐに宣告された。「あなたがたはわたしを信じないで、イスラエルの人々の前にわたしの聖なることを現さなかったから、この会衆をわたしが彼らに与えた地に導き入れることができないであろう」(同・二〇ノ一二)。彼らは、ヨルダンを渡る前に、反抗的なイスラエルと共に死ななければならなかった。もし、モーセとアロンが自尊心をいだいたり、神の警告と譴責に対して怒りをいだいたりしたならば、彼らの罪はさらに大きくなったことであろう。しかし、彼らは、故意、または、計画的な罪を犯したのではなかったから、その責めは受けなかった。彼らは、突然の誘惑に負けたのであって、それをすぐに心から悔い改めたのである。主は、彼らの悔い改めを受け入れられた。しかし、彼らの罪が民の間におよぼす害を考えられたときに、刑罰を免じることはおできにならなかった。

モーセは、自分に下った宣告を隠そうとしなかった。彼は、神に栄光を帰さなかったために、彼らを約束の国に導くことができないことを人々に告げた。彼は、自分の上に下ったきびしい刑罰に注目することを人々に命じた。そして、彼らが自分自身の罪によって招いた刑罰を、単なる人間のせいにしてつぶやいたことを、神がどうみなされるかをよく考えるようにとモーセは言った。彼は、また、神にその宣告の取り消しを嘆願したが、拒否されたことを彼らに告げた。「主はあなたがたのゆえにわたしを怒り、わたしに聞かれなかった」と言った(申

命記三ノ二六。

イスラエルの人々は、困難や試練に会ったときには、いつでも神がそのことに無関係であって、モーセが彼らをエジプトから導きだしたと非難するのであった。彼らがその放浪期間を通じて、旅の苦難についてつぶやき、指導者に不平を言ったとき、モーセは、「あなたがたのつぶやきは、神に対するものである。あなたを救われたのは、わたしではなくて、神である」と言うのであった。しかし、「われわれがあなたのためにこの岩から水を出さなければならないのか、と彼が岩の前で早まって言ったときに、彼は、人々の非難を事実上承認したことになった。こうして、彼らの不信をますます強め、彼らのつぶやきを正当化したことになったのである。主は、こうした印象を人々の心から永久に取り除くために、モーセが約束の地にはいることを禁じられたのである。彼らの指導者は、モーセではなく、偉大な天使であられたというまちがいのない証拠が与えられた。主は、彼についてこう言われた。「見よ、わたしは使をあなたの前につかわし、あなたを道で守らせ、わたしが備えた所に導かせるであろう。あなたはその前に慎み、その言葉に聞き従い(なさい)……わたしの名が彼のうちにあるゆえに」(出エジプト記二三ノ二〇 一一)。

「主は、あなたがたのゆえに、わたしを怒られた」とモーセは言った。全イスラエルの目はモーセに向けられた。そして、彼の罪は、彼を神の民の指導者として選ばれた神の名誉を傷つけた。彼の罪は、全会衆に知れわたった。もし、それが軽々しく扱われたとすれば、責任の地位にある者が激しく試みられた場合ならば、不信仰も短気も許されるのであるという印象が残ったことであろう。しかし、一つの罪のために、モーセとアロンがカナンに入国できないと宣告されたときに、人々は、神が人をかたよりみるかたでなく、罪を犯す者を必ず罰せられるかた

であることを知ったのである。

イスラエルの歴史は、後世の人々の警告と教訓のために記録されなければならなかった。未来のすべての人々は、天の神が、公平な支配者で、どんな場合でも罪を正当化なさらないかたであることを知らなければならない。しかし、罪が、どんなにはなはだしい害毒を及ぼすものであるかを認めるものは少ない。神は、非常に恵み深いから、罪人を罰せられないと、人間は、自分かつてな考えをいだくものである。しかし、聖書の歴史に照らしてみれば、恵みと愛の神は、罪を、宇宙の平和と幸福を破壊する致命的悪として処理されることが明白である。

モーセのあの誠実さと忠実さをもつてしても、彼のあやまちに対する懲罰を避けることはできなかった。神は人々の大きな罪をお許しになったのであるが、指導者の罪は、指導されるものの罪と同一に扱うことはできなかった。神は、地上のいかなる人よりも、モーセを尊ばれた。神は、ご自分の栄光を彼にあらわされた。また、彼によって、神の戒めをイスラエルに伝達されたのである。モーセが、大きな光と知識を与えられていたことが、彼の罪をさらに重いものにした。過去の忠誠も、一つの誤った行為の償いにならない。人に与えられた光と特権が大きければ大きいほど、その責任も大きくなり、その失敗がはなはだしければはなはだしいほど、刑罰も重くなるのである。

モーセは、人々が考えるほどの重罪を犯したわけではなかった。彼の罪は、普通一般のものであった。詩篇記者は、「彼がそのくちびるで軽卒なことを言ったからである」と言った(詩篇一〇六ノ三三)。人間の判断では、これはささいなことに思われるであろう。しかし、もし神が、ご自分の最も忠実で尊ばれたしもべの罪に対してこれほどきびしい処置を取られたのであれば、他の者の罪も許されないことであろう。自己高揚の精神、兄弟た

ちを非難する意向を、神はお喜びにならない。こうした悪にふける者は、神のみわざに疑惑を投げかけ、懷疑論者の不信に対するよい口実を与えるのである。人間の地位が重要であればあるほど、その感化は大きい。であるから、それだけで、忍耐とけんそんを養う必要も大きいのである。

神の子供たち、特に責任の地位に立つ人が、神に帰すべき栄光を自分に帰したりするならば、サタンが狂喜するのである。サタンは勝利したのである。サタンも、こうして墮落した。彼は、こうして実に巧みに他の者を墮落させる。神は、われわれが彼の策略に警戒するために神のみ言葉のなかに、自己高揚の危険に関する教訓を数多くお与えになったのである。われわれの心の衝動、思考能力、性質などは、一瞬でも神の霊の支配下になくてもよいものはない。もし、ほんの少しのすきでも与えるならば、サタンは、神が人にお与えになる祝福、または、神の許しのもとに臨む試練などを利用して、人間を試み、苦難を与え、滅ぼそうとするのである。であるから、その人の霊的光がどんなに大きくても、また、どんなに神の恵みと祝福にあずかつていても、常に主の前にけんそんに歩み、神がすべての思いを導き、すべての衝動を支配されるように嘆願しなければならないのである。

神を信じると公言する者は、すべて、どんなに腹だたしいことが起こっても、心を守り、自制するという神聖な責任が負わせられている。モーセに負わせられた重荷は非常に重かった。彼のようなきびしい試練を受ける人は、今後、またとないであろう。しかし、そうだからといって、これは彼の罪の許しの口実にはならなかった。神は、神の民のために十分の準備をしておられたのである。そして、もし彼らが神の力に信頼していたならば、彼らは環境にもてあそばれるようなことはなかったであろう。どんなに激しい誘惑であっても、罪の言いわけにはならない。どんな圧力が魂に加えられたにしても、犯罪は、われわれ自身の行為なのである。この世と陰府の

いかなる力も、人間に悪を強制することはできない。サタンは、われわれの弱点を攻撃するが、われわれは負ける必要はない。攻撃がどんなに激しく、不意に襲ってきても、神はわれわれに助けを備えられた。われわれは、神の力によって勝利することができるのである。

エドムを回避して

本章は、民数記二〇ノ一四 二九、二二ノ一 九に基づく。

イスラエルが、カデシで宿営を張ったところは、エドムの国境からわずかの距離のところにあつたので、モーセも民も、エドムを通つて、約束の地に進みたいと切望した。そこで彼らは、神の指示のもとに、エドムの王に使者をつかわした。

「あなたの兄弟、イスラエルはこう申します、『あなたはわたしたちが遭遇したすべての患難をご存じです。わたしたちの先祖はエジプトに下つて行つて、わたしたちは年久しくエジプトに住んでいましたが、エジプトびとがわたしたちと、わたしたちの先祖を悩ましたので、わたしたちが主に呼ばわったとき、主はわたしたちの声を聞き、ひとりの天の使をつかわして、わたしたちをエジプトから導き出されました。わたしたちは今あなたの領地の端にあるカデシの町にあります。どうぞ、わたしたちにあなたの国を通らせてください。わたしたちは畑もぶどう畑も通りません。また井戸の水も飲みません。ただ王の大路を通り、あなたの領地を過ぎるまでは右にも左にも曲りません』」(民数記二〇ノ一四 一七)。

このていねいな依頼に対する返答は、おどしの言葉であった。「あなたはわたしの領地をとってはなりません。さもないと、わたしはつるぎをもつて出て、あなたに立ちむかうでしょう」(同・二〇ノ一八)。

イスラエルの指導者たちは、この拒絶に驚いて、ふたたび願ひ出て、こう約束した。「わたしたちは大路を通ります。もしわたしたちとわたしたちの家畜とが、あなたの水を飲むことがあれば、その価を払います。わたしは徒歩で通るだけですから何事もないでしょう」(同・二〇ノ一九)。

「あなたは通ることはありません」というのが答えであった(同・二〇ノ二〇)。困難な通路には、すでに、武器をもったエドムの軍隊が配置されていたので、その方向に、人々を安全に進めることは不可能であった。しかもヘブル人は、武力に訴えることを禁じられていた。彼らは、エドムの地を回避して、長い旅をしなければならなかった。

もし、人々が試練に会ったときに、神に信頼したならば、主の軍勢の将であられたおかたは、彼らを導いてエドムを通られたことであろう。そして、まわりの国民たちは、彼らに恐れをいだき、敵意ではなくて、むしろ好意を示したことであろう。しかし、イスラエル人は、敏速に、神の言葉に従って行動しなかった。そして、彼らが、ぶつぶつ不平を言っている間に、絶好の機会は去ってしまった。やっと王に願ひ出る準備ができたときに、それは拒否されてしまった。彼らが、エジプトを去ったときから、サタンは、絶えず彼らの道に妨害や誘惑を投げかけて、彼らに約束の地力ナンを継がせないようにしていた。そして人々は、不信仰であったために、サタンの活動する道を開き、神の目的に逆らった。

神の天使が、われわれのために働こうと待機しているときに、神のみ言葉を信じて、敏速に行動することは、

重要なことである。悪天使はわれわれが前進することに戦いをいどんでくる。神の摂理が、神の子供たちに前進を命じ、彼らのために大いなることをしようとされるとき、サタンは、ためらいと遅延とによって、主を怒らせようと彼らを誘惑する。彼は、争いの精神をあり、つばやきや不信の念を起こさせ、こうして、神が与えようと望まれた祝福を奪い去ろうとするのである。神のしもべたちは、神の摂理によって、道が開かれるときには、即座に行動する義勇兵でなければならない。彼らのがわで時を延ばせば、それはサタンに彼らを滅ぼすために働く時間を与えることになる。

エドム人は、イスラエルを恐れるであろうという宣言に続いて、エドムを通過することに関してモーセに最初に与えられた指示のなかで、神は、神の民が、この有利な立場を利用することを禁じられた。イスラエルのために神の力が働き、エドム人は恐怖に襲われていたから、彼らを打ち負かすことは容易であつた。しかし、ヘブル人は、彼らを襲撃してはならなかつた。彼らは、こう命じられた。「それゆえ、あなたがたはみずから深く慎み、彼らと争つてはならない。彼らの地は、足の裏で踏むほどでも、あなたがたに与えないであろう。わたしがセイル山をエサウに与えて、領地とさせたからである」(申命記二ノ四、五)。エドム人は、アブラハムとイサクの子孫で、神は、これらの神のしもべたちのゆえに、エサウの子孫に恵みをお与えになつた。神は、彼らに、セイル山を領土としてお与えになつた。そして、彼らが罪を犯して、神の恵みの圏外に行つてしまうまで、彼らを妨害してはならなかつた。ヘブル人は罪の升目を満したカナンの住民の土地を奪い、彼らを全滅させることになつていた。しかし、エドム人は、まだ猶予されていたので、そのように恵み深く彼らを扱わなければならなかつた。神は、あわれみを喜ばれる。そして、刑罰を下すに先だつて、慈悲をあらわされる。神は、カナンの住民を滅ぼ

すことを要求されるに先だって、エドムの人々を猶予することを、イスラエルに教えられる。

エドムとイスラエルの先祖は、兄弟であつた。であるから、兄弟の情けと礼儀がお互いの間にあるべきであつた。イスラエル人は、国の中を通ることを拒否されて侮辱されたことのふくしゅうを、そのときもまた将来も、してはならなかつた。彼らは、エドムの地は、少しでも所有することを期待してはならなかつた。イスラエル人は、神に恵まれた選民であつたとはいえ、神が定められた制限に従わなければならなかつた。神は、大きな嗣業を彼らに約束された。しかし、彼らだけが地の権利を所有しているように考えて、他の者をすべて押し出してはいけなかつた。彼らは、エドム人とのすべての交渉に注意して、不正を行なわないようにという指示が与えられた。また、必要な食糧の購入や彼らとの取り引きの際には、すぐに支払いをすべきであつた。イスラエルが、神に信頼し、神のみ言葉に服従することを促すために、「あなたの神、主が、…あなたを恵み、…あなたは何かも乏しいことがなかつた」という言葉が彼らに語られた(同・二ノ七)。彼らは、豊かな資源を持つておられる神を持つていのであるから、エドム人に依存してはならなかつた。イスラエル人は、武力、または欺瞞的行為によつて、彼らのどんな所有をも獲得しようとしてはならなかつた。彼らは、すべての交渉において、「あなたを愛するように、あなたの隣人を愛せよ」という神の律法の原則を実践しなければならなかつた(マタイ二二ノ三九、ローマー三ノ九、ガラテヤ五ノ一四、レビ記一九ノ一八参照)。

もし彼らが、神のみこころに従つて、こういう態度でエドムを通過したならば、それは、彼らばかりでなくてエドムの住民たちにも祝福となつたことであろう。なぜなら、それは、神の民と神の礼拝に対する親しみを彼らに与え、ヤコブの神が、神を愛しおそれる者をいかに繁栄させられるかを目撃する機会を与えたからである。し

かし、イスラエルの不信仰は、こうしたことをすべて妨げた。神は、人々の欲求に応じて、水をお与えになったけれども、その不信仰の罰を彼らが受けることを許された。彼らは、ふたたび荒野へ引き返し、奇跡の泉からの水を飲んで、かわきをいやすことになるのであった。しかし、もし彼らが神に信頼していたならば、それはもはや不必要なことであつた。

したがって、イスラエルの群衆はふたたび南に向かい、エドムの山々や谷間に点在する緑地をながめたあとでは、なおさら、もの寂しく思われる不毛の荒地を進んでいった。この陰うつな荒野を見おろしている山々の峰のかなたにホル山がそびえていた。その頂上は、アロンの死と埋葬の場となる場所であつた。イスラエル人がこの山に到着したとき、神は、モーセにお命じになった。

「あなたはアロンとその子エレアザルを連れてホル山に登り、アロンに衣服を脱がせて、それをその子エレアザルに着せなさい。アロンはそのところで死んで、その民に連なるであろう」(民数記二〇ノ二五、二二六)。

この老人ふたりと青年は、共に山の頂上によじ登つた。百二十年の風雪に耐え、モーセとアロンの髪は雪のように白かつた。彼らの長年の波乱に富んだ生涯は、人間に課せられた最も激しい試練に耐えるとともに、最も大きな榮譽に輝いたものであつた。彼らは、生まれながらの豊かな才能の人であつた。そして、彼らのすべての能力は、無限の神との交わりによつて啓発され、高尚にされ、高貴なものにされたのである。彼らの生涯は、神と人間とに対する無私の活動のために費やされた。彼らの容貌は、その偉大な知力、堅固で高尚な目的、そして、激しい情熱をあらわしていた。

モーセとアロンは、長年、その責任や労苦を共に負つてきた。彼らは、共に無数の危険に遭遇し、共に神の驚

くべき祝福にあずかった。しかし、いまやふたりが別れなければならないときが近づいた。彼らは、非常にゆくり進んで行った。お互いが一緒にいる一瞬一瞬がたいせつなものだったのである。登り坂はけわしく、苦しいものであった。彼らは、たびたび立ち止まって休息することに、過去や未来のことを語り合った。彼らの前にはさまよい歩いた荒野の光景が、一面に広がっていた。眼下の平原にはイスラエルの群衆の宿営があった。選ばれたふたりは、その生涯の大部分を彼らのために費やしたのである。そして、彼らの幸福を切に願って、大きな犠牲を払ってきた。エドムの山々の向こうに、約束の地への道が通じているのであった。しかし、モーセとアロンは、その祝福にあずかれないのであった。彼らの心に反抗的感情はなく、つぶやきの言葉も彼らの口からもれなかった。しかし、彼らを父祖たちの嗣業から除外したものが何であつたかを、彼らが思い出したとき、彼らの顔には、厳粛な悲しみがただようのであった。

イスラエルのためになすべきアロンの仕事は終わった。四十年の昔、神は重大な任務を負わせられたモーセと力を合わせるように、八十三才の彼を召されたのである。彼は、兄弟と協力して、イスラエル人をエジプトから導き出した。彼は、ヘブルの軍勢がアマレクと戦ったとき、偉大な指導者の手をささえたのである。彼は、シナイ山に登り、神の臨在に近づき、神の栄光を見ることを許された。主は、アロンの家族を祭司の職務に任じ、アロンを大祭司の聖職に任じて、榮譽をお与えになった。神は、コラと彼の仲間を滅ぼして、刑罰の恐ろしさを示し、彼の聖職を支持された。疫病が止められたのは、アロンのとりなしによつてであつた。彼のふたりのむすこが神の明白な命令を無視して殺されたときも、彼は反抗もせず、つぶやきもしなかった。しかし、彼の高貴な生涯の記録に汚点がついた。アロンは、シナイで民の要求に屈して金の子牛を造り、悲しむべき罪を犯した。また

彼は、ミリアムと共にモーセをねたみ、つぶやいて罪を犯した。彼は、カデシにおいて岩に命じて水を出させるべきときに、モーセと共に命令にそむいて主の怒りをこうむった。

神は、神の民のこの偉大な指導者たちが、キリストの代表者であることを望まれた。アロンは、胸にイスラエルの名をかけていた。彼は、神のみこころを人々に伝えた。彼は、贖罪の日に、すべてのイスラエルの会衆の仲保者として至聖所にはいり、「血をたずさえないで行くことはな」かった（ヘブル九ノ七）。キリストが、民のための贖罪のわざを終えて、彼を待っている民を祝福するために、おいでになるように、アロンは務めを終えて、会衆を祝福するために出て来るのであった。われわれの大祭司の代表としての聖職が崇高な性質のものであったことが、カデシにおけるアロンの罪をきわめて大きなものとしたのである。

モーセは深い悲しみに沈みながら、アロンのきよい衣服を脱がせて、エレアザルに着せた。こうして、エレアザルは、神の命令によつてアロンの後継者になった。アロンは、カデシでの罪のために、カナンで神の大祭司の務めを行なう特権を失った。彼は、約束の地で最初の犠牲をささげ、イスラエルの嗣業を聖別することができなかったのである。モーセは、民を国境まで導く責任を続いてになわなければならなかった。彼は、約束の国が見えるところまで来るのであったが、なかにはいることはできなかった。これらの神のしもべたちが、カデシの岩の前に立ったときに、遭遇した試験につぶやくことなく耐え得たならば、彼らの将来はどんなに変わったことであらうか。一つのまちがった行為は、二度と元にもどすことができない。一瞬の誘惑、または、無分別によつて失われたものは、一生かかってもとり返すことができない。

ふたりの大指導者が宿営からいなくなり、アロンの聖職の後継者と一般に認められていたエレアザルが同行し

たということは、人々にある種の不安感を与えた。そして、民は、憂慮して彼らの帰還を待ったのである。民が周囲の大群衆をみわたしたときに、エジプトを出たおとなのほとんどが、荒野で死んでしまったことに気づいた。一同は、モーセとアロンに与えられた宣告を思い出し、不吉な予感に襲われた。ホル山頂への神秘的な旅の目的に気づいた者もあって、苦い思い出と自責の念にかられて、彼らの指導者たちの身の上を案じていた。

ついに、モーセとエレアザルが、ゆっくりと山をおりてくる姿が現われた。しかし、アロンは彼らと一緒にいなかった。エレアザルは、祭司服を身にまとい、父の聖職を受け継いだことを示していた。人々は悲しみながら指導者のまわりに集まってきた。モーセは、アロンがホル山上で彼の腕に抱かれて死んだことと、彼らが、彼をそこに葬ってきたことを告げた。会衆は声をあげて嘆き悲しんだ。彼らは、何度もアロンを悲しませたけれども、みな、アロンを愛していたのである。「イスラエルの全家は三十日の間アロンのために泣いた」(民数記二〇ノ二九)。

イスラエルの大祭司の埋葬に関して、聖書は、簡単に「アロンはその所で死んでそこに葬られ」た、と記録しているだけである(申命記一〇ノ六)。神の明白な命令のもとに行なわれたこの埋葬と、今日の習慣とは、なんと著しく異なっていることであろう。現代、高い地位の人の葬式は、虚飾と度を越した誇示の場となっている。世界最大の人物のひとりであったアロンが死んだときには、彼の近親の友がふたり、彼の死を見守り、埋葬に列しただけであった。そして、ホル山上のあのものさびしい墓は、永久にイスラエルの目から隠されたのである。死者のためには、とかく大げさな行事が行なわれ、彼らの肉体を土に帰らせるのに多額の費用がかけられるが、それは、神をあがめることにはならない。



モーセは、深い悲しみのうちに、祭司の服をアロンから脱がせて、後継者エレアザルに着せた。それから、アロンは死んで葬られた。

全会衆は、アロンのために悲しんだ。しかし、彼らはモーセがどれほど心を痛めたかを知ることではできなかった。モーセは、アロンの死によつて、自分自身の生涯の終わりが近づいたことを痛感させられた。彼の地上の生涯はあとわずかしかなかったが、長年、喜びや悲しみ、また希望や恐れなどを共に分かちあつた忠実な友を失つたことを彼は悲しんだ。モーセは、ひとりで仕事を続けなければならなかった。しかし、彼は、神が自分の友であられることを知り、なおいつそう神によりすがつたのである。

ホル山を去つてから間もなくして、イスラエル人は、カナンの王のひとりのアラドと戦つて敗北した。しかし、彼らは、熱心に神の助けを祈り求めたので、神からの援助が与えられて敵を追い返すことができた。ところが、この勝利は、人々に感謝の気持ちと、神に依存していることを感じさせるかわりに、高慢と自尊の精神をいだかせた。やがて彼らは、以前の習慣にもどつてつばやいた。約四十年前、斥候たちの報告を聞いて反逆を起こした後、すぐにカナンにイスラエルの軍勢を進軍させることを許されなかったことを、今、彼らは不満に感じたのである。彼らは、現在と同様に、これまでも敵を征服することができたかも知れなかったと考え、荒野の放浪は unnecessary 遅延であつたと言つた。

彼らが南に向かつて旅を続けたとき、行く手には、緑も、影もない熱い砂の溪谷が横たわつていた。道は長くけわしく思われ、彼らは、疲労とかわきに悩まされた。ふたたび彼らは、信仰と忍耐の試練に耐えることができなかった。彼らは、自分たちの経験の暗い面ばかりをながめて、ますます神から遠ざかった。もし、カデシで水が止まったときに、つぶやきさえしなかったならば、エドムを迂回して旅をしなくてもよかつたであろうということに、彼らは気づかなかつた。神は、彼らのために、もっとすぐれたことを計画しておられた。彼らは、自分

たちの罪に対する神の罰が軽かったことを、神に感謝しているべきであつた。しかし、彼らはそうしないで、もし神やモーセが妨害しなかつたならば、今ごろは、約束の国を所有していたことであろうとぬぼれた。彼ら自身で問題を引き起こして、自分たちの運命を神のご計画よりもはるかに困難なものにしながら、彼らの不運をすべて神のせいにした。こうして、彼らは、自分たちに対する神の取り扱いに不平をいだき、ついにはすべてのことに不満をいだくようになった。自由と、神が導き入れようとしておられる国よりも、エジプトのほうがはるかに輝かしく好ましく思われるのであつた。

イスラエルの人々は、不満をいだき、彼らの受けた祝福に対してさえ不平を言うようになった。「民は神とモーセとにむかい、つぶやいて言った、『あなたがたはなぜわたしたちをエジプトから導き上つて、荒野で死なせようとするのですか。ここには食物もなく、水也没有せん。わたしたちはこの粗悪な食物はいやになりました。』」

(民数記二一ノ五)。

モーセは、忠実に彼らの罪の大きさをさし示した。「あの大きな恐ろしい荒野、すなわち火のへびや、さそりがいて、水のない」ところで彼らを守ることできたのは、神の力だけであつた(申命記八ノ一五)。彼らは旅の間じゅう、毎日、神のあわれみ深い奇跡によつて守護されていたのであつた。彼らは、神が導かれるすべての道において、かわきをいやす水や、飢えを満たす天からのパンが与えられた。そして、昼は雲のかげ、夜は火の柱に守られて平和と安全が保たれた。彼らが岩山に登るときも、荒野のけわしい道をぬつて進むときも、天使は彼らを守っていた。さまざまの困難にあつたにもかかわらず、彼らのあらゆる隊列のなかにひとりの弱い者もなかつた。彼らの足は、長い旅の間はれることもなく、彼らの衣服も古びなかつたのである。神は、彼らの先に立つ

て森林やさばくの猛獣と毒へびとを制御せられた。こうした神の愛のあらゆる証拠を見ながらもなお、人々がつぶやき続けるならば、主は、彼らが神のあわれみ深い保護を感謝し、悔い改めて、心を低くして神のもとに帰ってくるまで、神の保護を差しひかえられるのである。

彼らは、神の力に保護されていたために、彼らを常に取り囲んでいた無数の危険に気づかなかったのである。彼らは、忘恩と不信のうちに死んでしまうと思っていた。そこで、主は、彼らに死がのぞむことをお許しになった。荒野にはびこっていた毒へびは、それにかまれると激しい炎症を起こして死ぬので、火のへびと呼ばれていた。神の保護のみ手がイスラエルから取り除かれると、多くの人々が毒へびにかまれた。

こうして、宿営全体が恐怖と混乱に陥った。すでに死んだ人や、死にかけた人がどの天幕にも出た。だれひとり安全ではなかった。時おり、新しい犠牲者が出たことを示す激しい叫びが、夜の静けさを破った。すべての者は患者の看護をしたり、あるいは、まだかまれていない者たちを保護しようとしていたりして必死に努めていた。いま、彼らのくちびるからは、つぶやきの言葉は漏れなかった。今の苦痛と比べるならば、これまでの彼らの困難や試験は、全くとるに足りないもののように思われた。

人々は、今、神のみにへりくだった。彼らは、モーセのところに来て告白し、嘆願して言った。「わたしたちは主にむかい、またあなたにむかい、つぶやいて罪を犯しました」（民数記二一ノ七）。人々は、ついさきほどまで、モーセを彼らの最悪の敵とし、彼らのすべての困難と苦難の原因であると攻撃した。しかし、そういうことを言うやいなや、その非難が誤っているのに気づいた。真の苦難に当面したとき、彼らは、神にとりなすことができるただひとりの人、モーセのところに来た。「どうぞへびをわたしたちから取り去られるように主に祈っ

てください」と彼らは叫んだ(同節)。

モーセは、本物に似せて青銅のへびを作り、それを人々のなかにかかげるようという命令を神から受けた。かまれた者は、すべて、このへびを見上げて助かるのであった。彼は言われたとおりにした。そして、かまれたものは、みな、青銅のへびを見上げよ、そうすれば救われるという喜ばしい知らせが宿営中にひびきわたった。すでに死んだ者も多かった。そして、モーセがへびをさおの上にかかげたとき、青銅のへびの像を見上げただけでいやされるということを信じようとしないう人もあった。そのような人は、不信仰のために滅びた。しかし、神が用意されたものを信じたものも多かった。父親、母親、兄弟、姉妹たちが、なんとかして苦しむ肉親の者や、瀕死の友人たちの生気のない目をへびに向けさせようと努めた。たとえどんなに弱り果てて、死にそうになっていても、もし彼らが一目でも見ることであれば、完全にいやされるのであった。

人々は、それを見上げる者にこうした変化を起こさせる力が、青銅のへびにはないことをよく知っていた。いやしの力は、神からだけ来るものであった。知恵に富まれる神は、このような方法によって、ご自分の力をあらわされた。この簡単な方法によって、この苦難が、自分たちの罪のために起こったことを人々はさとらされた。それと共に、神に服従するならば、何も恐れることはないという保証が与えられたのである。なぜなら、神は、彼らを守られるからであつた。

青銅のへびを掲げたことは、イスラエルに重大な教訓を教えるためであつた。彼らは、その致命傷から自分を救うことができなかった。ただ神だけが彼らをいやすことがおできであつた。しかし、彼らには、神がお備えになった方法に、信仰を表明することが要求された。生きるためには、見なければならなかった。神が、お受けに

なつたのは彼らの信仰であつた。そして、へびを見ることによって彼らの信仰が表わされた。へびそのものにはなんの力もなく、それがキリストの象徴であつたことを、彼らは知っていた。こうして、キリストの功績に信仰をいただく必要が彼らに示された。これまで多くの者が神にささげものを携えてきて、それで自分たちの罪の贖いを十分にしたと考えていた。彼らは、やがて来られる贖い主に頼らなかつた。こうしたささげものは贖い主の象徴に過ぎなかつた。彼らのささげものは、ただそれだけでは、青銅のへび以上に何の力も功績もないもので、それは、へびと同様に、偉大な罪祭であられるキリストに、彼らの心を向けるためだけのものであることを、主は、ここに教えようとなさつた。

「ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」(ヨハネ三ノ一四、一五)。この地上に生を受けたものはみな、「悪魔とか、サタンとか呼ばれ」た「年を経たへび」の毒牙にかまれた(黙示録二ノ九)。罪の致命的結果は、神がお備えになつた方法によつてのみ除くことができる。イスラエルの人々は、上げられたへびを見ることによって救われた。こうしてながめたことは、信仰を意味していた。彼らは神の言葉を信じ、神が彼らの回復のためにお備えになつた方法に信頼したから、生きたのである。そのように、罪人は、キリストを仰ぎ見て生きることができる。罪人は、贖罪の犠牲を信じる信仰によつて許しを受ける。命のない動かないへびとは違って、キリストは悔い改める罪人をいやす力と功績を、ご自身のうちに持つておられる。

罪人は、自分自身を救うことはできない。しかし、救いを得るためには、彼のなすべきことがある。「わたしに来る者を決して拒みはしない」とキリストは言われる(ヨハネ六ノ三七)。われわれは、彼のところに来なければ

ばならない。そして、罪を悔い改めるときに、キリストはわれわれを受け入れ、ゆるしてくださることを信じなければならぬ。信仰は、神の賜物である。しかし、信仰を働かせる力は、われわれに与えられている。信仰は神の恵みとあわれみの招待を、魂が把握する手である。

われわれを恵みの契約の祝福にあずからせるのは、キリストの義にほかならない。これらの祝福にあずかろうと長く望んで努力したものが多くあったが、受けることができなかった。というのは、何かをすることによって自分たちをその恵みにあずかる価値のあるものにするということができるといふ考えを、彼らがいだいていたからである。彼らは、イエスが満ちあふれる力をもった救い主であることを信じて、自分から目を離すことをしなかった。われわれは、自分たち自身の功績が、われわれを救うと考えてはならない。キリストが、われわれの救いの唯一の希望である。「この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝四ノ一二)。

われわれが神に全く信頼し、罪をおゆるしになる救い主としてイエスの功績によりたのむならば、希望するすべての助けを受けることができる。あたかも自分自身を救う力が自分にあるかのように、自分をなげめないことにしよう。われわれには、そうする力が全くないのであるから、イエスは、われわれのために死なれた。彼のうちにわれわれの希望、われわれの義、われわれの正義がある。われわれは、自分たちの罪深さを見て失望し、自分たちには救い主がないとか、主は、われわれをあわれんでくださらないと考えて、恐れてはならない。彼は、今という今、われわれが力のないままの姿で主に近づき、救われるようにと招いておられる。

天の神がお定めになったいやしの方法に、何の価値も認めなかったイスラエル人が多くあった。彼らのまわり

には、すでに死んだ人や死にかけた人々が、一面に横たわっていた。そして、神の助けがなければ、彼ら自身の運命がどうなるかも明らかであった。彼らには、いやしが瞬間的に与えられるのであったが、彼らは、その傷の痛みと、刻々と迫ってくる死とを悲しみ続け、ついに、その力はつき果て、目は光を失った。もし、われわれが自分の必要を感じたならば、そのことを悲しんでばかりいてはならない。キリストがなければ自分たちはどんなに無力であるかを自覚しても失望することなく、十字架につけられ復活なさった救い主の功績に頼らなければならぬ。見よう、そして、生きよう。イエスは、約束なさった。イエスは、彼に来るすべての者をお救いになる。いやしを受けるべき幾百万の人々が、イエスのあわれみの招きを拒んだとしても、イエスの功績に頼る者は、ひとりも滅びることはない。

救いの計画の神秘が、ことごとく明らかにされるのでなければ、キリストを受け入れようとしぬ者が多い。すでに幾千という多くの人々が、キリストの十字架をながめ、そして、ながめることによって、力を得たことを知っていたが、彼らは、信仰をもつて見ようとしぬ。多くの者は、哲学の迷路にさまよい、理由や証拠を発見しようとするが見つかからない。彼らは、神がお与えになった証拠を拒んでいる。彼らは、義の太陽の輝きの理由が説明されるまでは、その光の中を歩こうとしない。このようなたくな人はみな、真理の知識を得ることはできない。神は、疑惑の種を全部取り去ってしまった。神は信仰を持つだけの十分の証拠をお与えになる。そして、人がそれを受け入れなければ、人の心は暗黒に閉ざされる。もしも、へびにかまれた人々が、見ることを承知する前に、疑ったり質問したりしていたならば、彼らは死んでしまったことであろう。まず、見ることとがわれわれの義務である。そして、信仰をもつて見ることで、われわれに命を与えるのである。

第 39 章

バシヤンの征服

本章は、申命記二章、三ノ一―一に基づく。

イスラエル人は、エドムの南方を通過したあと、北に向きをかえ、ふたたび約束の地に向かった。今、彼らの道は広大な高原を横切つて走つていた。そこには、山からの冷たく気持ちのよいそよ風が吹きわたつていた。彼らがこれまで歩いてきた焼けつくような谷に比べれば、それはうれしい変化であつた。彼らは元氣と希望に満ちて前進し、ゼレデ川を渡つてモアブの国の東にはいった。それは、「モアブを敵視してはならない。またそれと争い戦つてはならない。彼らの地は、領地としてあなたに与えない。ロトの子孫にアルを与えて、領地とさせたからである」との命令が与えられていたからである（申命記二ノ九）。また同じ命令が、同様にロトの子孫であつたアンモン人にも与えられていた。

イスラエルの軍勢は、なお北方に進み、まもなくアモリ人の国にはいった。この頑強で好戦的な民族は、もととカナンの国の南部にいたが、数が増したためヨルダン川を渡り、モアブ人と戦いを交えて、その領土の一部を占領した。彼らはここに定住し、アルノンから、北はヤボクに至る全土にゆるぎない支配をうちたてた。イス

ラエル人が通過したいと思つたヨルダンへの道は、この地域をまっすぐに通つていた。そこでモーセは、その都にいるアモリ人の王シホンに友好的な伝言を送つた。「あなたの国を通らせてください。わたしは大路をとおつていきます、右にも左にも曲りません。金で食物を売つてわたしに食べさせ、金をとつて水を与えてわたしに飲ませてください。徒歩で通らせてくださるだけでよいのです」(同・二一ノ二七、二一八)。ところが、答えは断固とした拒絶であつた。こうして、全アモリ軍は召集され、侵入者の行く手をはばもうとした。この大軍は、イスラエル人を恐怖に陥れた。彼らには武装を整え、訓練の行き届いた軍隊と戦う準備がなかつた。戦闘の技術では、敵が有利であつた。人間の見るところでは、イスラエルがすぐ滅ぼされるのは明らかであつた。

しかし、モーセは雲の柱にしっかりと目をとめ、神の臨在のしるしが今なお彼らと共にあると語つて民を励ました。同時に、彼は、人力の限りを尽くして戦いの備えをするように命じた。敵は戦争にはやり立ち、用意のないイスラエルを国内から抹殺することができると確信した。しかし、すでに全地の所有者である神からイスラエルの指導者にこのような指令がでていたのである。「あなたがたは立ちあがり、進んでアルノン川を渡りなさい。わたしはヘシボンの王アモリびとシホンとその国とを、おまえの手に渡した。それを征服し始めよ。彼と争つて戦え。きょうから、わたしは全天下の民に、おまえをおびえ恐れさせるであらう。彼らはおまえのうわさを聞いて震え、おまえのために苦しむであらう」(同・二一ノ二四、二一五)。

もし、カナンの辺境にあるこれらの国々が、神のことばに反抗せず、イスラエルの進軍をさまたげなかつたならば、滅びをまぬかれたことであらう。主は、これら異教の民にさえ、ご自身が忍耐強く、やさしく、あわれみ深いおかたであることを示してこられた。アブラハムが幻の中で彼の子孫のイスラエルの子らが四百年の間、異

国の旅人となるであろうと告げられたとき、主は彼にこのような約束をお与えになった。「四代目になって彼らはここに帰って来るでしょう。アモリびとの悪がまだ満ちないからです」（創世記一五ノ一六）。アモリ人は偶像教徒であつて、彼らが滅ぼされるのは、当然彼らの大いなる悪のゆえであつたが、神は、ご自身が唯一の眞の神であり、天地の創造主であることのまちがいのない証拠を彼らに与えるために、四百年の間、彼らに生きることをおゆるしになった。彼らは、イスラエル人がエジプトから導き出されたときに行なわれた神のすべての不思議なみわざを知っていた。十分な証拠が与えられていた。彼らは、もし、その偶像崇拜と放縱な生活から離れようと決心していたなら、眞理を知ったことであろう。しかし彼らは光を拒み、偶像を捨てなかつた。

主が、その民を二度めにカナンの国境に導かれたとき、これらの異教国に主の力の証拠がさらに多く与えられた。イスラエル人がアラデ王とカナン人に対して勝利を得たことや、へびにかまれて死になつた者が救われた奇跡などによつて、神がイスラエルと共におられることを彼らは見た。イスラエル人は、エドムの地を通ることを許されず、長く困難な紅海の道をたどることを余儀なくされたのであつたが、エドム、モアブ、アンモンの地を通る旅と宿営を続けた間じゅう、彼らは何の敵対心も示さず、その地の民と持ち物に何の危害も加えなかつた。アモリ人の国境に来たとき、イスラエル人はこれまで他の国々と交渉のあつたときに用いた同じ規則を守ることを約束して、ただ国の中をまっすぐに通過する許可を求めたのであつた。アモリ人の王が、この礼を尽くした願いを退け、無礼にも戦いをいどんで軍勢を召集したとき、彼らの悪の杯は満ちた。神は今、彼らをくつがえすためにその力を發揮されるのであつた。

イスラエル人は、アルノン川を渡り、敵に向かつて進んだ。イスラエル軍は彼らと戦つて勝利した。その勢い

に乗じて、彼らはまもなくアモリ人の国を占領した。神の民の敵を追い払われたのは、主の軍勢の将なる主であった。もし、イスラエル人が彼に信頼していたならば、彼は同じことを三十八年前にしてくださったはずであった。

イスラエル軍は、希望と勇氣に満ちてどんどん前進した。彼らはなお北方に進み、まもなく、彼らの勇氣と神に対する信仰を試みるに足る一つの国に到着した。彼らの前には、強力で人口も多いバシャン王国があった。「町は六十。…皆、高い石がきがあり、門があり、貫の木のある堅固な町であった。このほかに石がきのない町は、非常に多かった」（申命記三ノ一——参照）。そこは、今日も世界の驚異となっている大きな石造りの町が群がっていた。家々は巨大な黒い石で造られ、その時代にそれを攻めるために用いられたどんな武力に対しても絶対に動かされないほどの巨大なものであった。その国土は、天然の洞穴、大絶壁、大きく開いた裂け目、岩の要塞にみちていた。この国の住民は、巨人族の子孫であつて、驚くほど大きく、力が強かった。また、暴力と残酷さは、はなはだしく、周囲のすべての国々から恐れられていた。国王オグは、巨人の国においてさえ、体格と武勇にきわだった存在であつた。

しかし、雲の柱は前へ進んだ。その導きに従つてヘブルの軍勢はエデレイに進んだ。そこに巨人の王は、軍勢を従えて彼らの近づくのを待っていた。オグは巧妙に戦いの場所を選んだ。エデレイの町は平原が急に高くなつた高地のはずれにあつて、でこばこの火山岩でおおわれていた。そこに登るには、狭い曲がりくねつた登りにくい道があるだけであつた。負けた場合には、彼の軍隊はあの岩の荒野にかくれ場を見いだすことができ、外国人が彼らのあとを追うことは不可能であつた。

王は、勝利を確信して、大軍を従えて平原に姿をあらわした。高台からは、神を汚すわめき声が聞こえ、勇みたった幾千の兵士のやりが見えた。ヘブル人が、その軍勢の中でもきわ立つ巨人中の巨人の雄姿を見、また、彼をとりまく軍勢を見、背後に幾千の軍勢をひかえた、一見、難攻不落のようなどりでを見たとき、イスラエルの多数のものの心は恐れで動揺した。しかし、モーセは冷静で落ちついていて、それは、主がバシヤンの王についてこう言われたからである。「彼を恐れてはならない。わたしは彼と、そのすべての民と、その地をおまえの手に渡している。おまえはヘシボンに住んでいたアモリびとの王シホンにしたように、彼にするであらう」(同・三ノ二)。

指導者の冷静な信仰は民の心に神に対する確信をいだかせた。彼らは、主の全能のみ腕にすべてをゆだねた。そして主は彼らを見捨てられなかった。強力な巨人も、城壁のある町々も、武装した軍勢も、岩のとりでも、主の軍勢の将の前に立つことはできなかった。主は、軍を導かれた。主は、敵を散らされた。主は、イスラエルに勝利をもたらされた。巨人の王とその軍勢は敗北した。イスラエル人は、まもなく、その全土を手中におさめた。こうして悪と、憎むべき偶像礼拝を行なっていた異邦の民族は、地からぬぐい去られた。

ギレアドとバシヤンを征服したとき、四十年近く前、カデシにおいて、イスラエルが長い間さばくを放浪する運命に定められたときのことを思い起こすものが多くあった。彼らは約束の地に関する斥候の報告が多く、点において正しいものであるのを知った。町々は城壁で囲まれ、非常に大きく、そこには巨人が住んでいて、それと比べるとヘブル人は小人にすぎなかった。しかし、今彼らは、彼らの父たちの重大な過失は、神のみ力に信頼しなかったことであつたのに気づいた。ただこれだけが、彼らをすぐに良い地にはいることを妨げたのであつた。

彼らが、最初、カナンにはいる準備をしていたときには、その企てに伴う困難は今回よりはるかに少なかった。もし、民が神のみ声に従ったならば、神が彼らに先だつていき、彼らのために戦うと約束されたのであった。また、その地の民を追い出すために、くまばちを送ると約束された。国々の恐怖心はまだ広く行きわたっていないかつたし、彼らの進軍を阻止する準備もなかった。しかし、主がイスラエルに前進を命じられた今は、目をさました強力な敵に向かって進まなければならず、彼らの進撃に備えて、武装を整えた大軍と戦わなければならなかった。

民は、オグとシホンとの戦いにおいて、彼らの父親たちがみごとに失敗したのと同じ試練に出会った。しかし、試練は神が以前にイスラエルに前進を命じられたときよりも、はるかにきびしかった。彼らが主のみ名によつて前進することを命じられて、それを拒んで以来、彼らの道に横たわる困難は大いに増大した。こうして、神はなお、神の民を試みておられる。もし彼らが、その試みに耐えられないならば、神は彼らをふたたび同じ地点にもどされる。そして、二度めの試練は、以前のよりはきびしく苛酷なのである。このことは、彼らが試練に耐えるまで続くのである。もし、彼らがなおそむくならば、神は、彼らから光を取り去り、彼らを暗黒の中に捨ておかれるのである。

ヘブル人は、前に軍隊が戦いに出たときに敗北し、数千の者が殺されたことを思い出した。そのとき、彼らは神の命令に全く反対して出て行つたのであった。彼らは神が任命された指導者モーセも、神の臨在のしるである雲の柱も、また契約の箱もないままで出陣したのであった。しかし、今は、モーセが彼らと共にいて、希望と信仰の言葉を語って彼らの心を強めた。神のみ子は雲の柱につつまれて彼らの道を導かれた。そして、きよい箱

は軍勢と共にあった。この経験は、われわれに教訓を与える。イスラエルの力ある神は、われわれの神である。われわれは彼に信頼することができる。もし、われわれがそのご要求に従うならば、神は、昔の民のためになされたのと同じ著しい方法で、われわれのために働かれるのである。義務の道をたどっていこうとする者は、だれでも、ときには疑いと不信の念をいだくことがある。その道は、一見、越せそうもない障害物で閉ざされているように思われ、気の弱い者を落胆させることがある。しかし、神はこう言われる、前進せよ。どんな価を払っても、あなたの義務を行ないなさい。どのように恐ろしく見え、心を恐怖で満たすような困難でも、けんそんに、神に信頼して服従の道を前進するときに消え去るのである。

第 40 章

欲に目がくらんだバラム

本章は、民数記二二 二四章に基づく。

イスラエル人は、バシャンを征服したあとで、ヨルダン川が死海に注ぎ込む少し上流の地域に陣を張り、カナンに侵入する準備をすぐ整えた。そこは、エリコの平原の反対がわに当たっていた。彼らは、モアブの国境にはいつていたので、モアブ人は、侵略者の接近によって恐怖に満たされていた。

モアブの人々は、イスラエル人から何の危害も受けてはいなかった。しかし、周囲の国々に起こったすべてのことを見て、恐ろしい予感をいだいていた。彼らは、アモリ人から敗走したのであつたが、そのアモリ人が、ヘブル人に征服され、アモリ人がモアブから奪った領地は、今イスラエル人の所有になっていた。バシャンの軍勢は、雲の柱の中に秘められた不思議な力の前に降伏し、巨大なとりでは、ヘブル人に占領された。モアブ人は、彼らを攻めてはこなかった。どんな武器を用いても、イスラエル人のために働く超自然的力には、勝つ望みがない。しかし、モアブ人はパロのように、魔術の力を借りて、神の働きに立ち向かおうとした。彼らは、イスラエルをのろおうとした。

モアブ人とミデアン人は、種族と宗教のきずなによって堅く結ばれていた。モアブの王バラクは、同族のミデアン人の恐怖心をかき立て、「この群衆は牛が野の草をなめつくすように、われわれの周囲の物をみな、なめつくそうとしている」と伝え、イスラエルに敵対する彼の計画に協力させた(民数記二二ノ四)。メソポタミヤの住人バラムは、超自然的能力の持ち主として知られ、その評判はモアブの地にまで聞こえていた。そこで、彼を呼んで助けてもらうことにした。彼に、イスラエルをのろい、魔法をかけてもらうために、「モアブの長老たちとミデアンの長老たち」がつかわされた(同・二二ノ七)。

使者たちはすぐに長い旅に出発し、山を越え、さばくを横切ってメソポタミヤに行った。彼らは、バラムに会って王の言葉を伝えた。「エジプトから出てきた民があり、地のおもてをおおっています。どうぞ今きてわたしのために彼らをのろってください。そうすればわたしは戦って、彼らを追い払うことができるかもしれません」(同・二二ノ一)。

バラムは、かつては、善人であつて、神の預言者であつたが、背教して欲に目がくらんでいた。それでいてもなお自分はいと高き者のしもべであると自称していた。彼は、神がイスラエルのためになされたみわざについて無知ではなかったから、使者が用向きを伝えたとき、自分としては、バラクの報酬を拒み、使者を去らせるのが義務であることをよくわきまえていた。それにもかかわらず、彼はあえて誘惑に手を出し、主に勧告を求めるまでは、はつきりした解答を与えるわけにはいかないと言って、その夜は、使いの者たちを泊まらせた。バラムは自分ののろいがイスラエルに災いをもたらし得ないことを知っていた。神が、彼らについておられ、彼らが神に誠実であるかぎり、地の上、また、黄泉のどんな敵対力も勝つことはできなかった。しかし、「あなたが祝福す

る者は祝福され、あなたがのろう者はのろわれる」と使者に言われて、彼はうぬぼれた(同・二二ノ六)。高価な贈り物の贈与、また、高い地位の約束などによって、彼は欲を起こした。彼は、贈られた宝を欲ばって受け取った。そして、口では神のみ旨に厳格に従うと言いながら、バラクの願いに応じようとした。

夜、神の使いがバラムを訪れ、こう伝えた。「あなたは彼らと一緒に行ってはならない。またその民をのろってはならない。彼らは祝福された者だからである」(同・二二ノ一二)。

朝になってバラムは、不本意ながら使いの者たちを帰した。しかし、彼は主が言われたことは彼らに話さなかった。利得と名誉の夢が、もろくも破れてしまったので、彼は怒って気むずかしく叫んだ。「あなたがたは国にお帰りなさい。主はわたしがあなたがたと一緒に行くことを、お許しになりません」(同・二二ノ一三)。

バラムは「不義の実を愛し」た(ペテロ第二・二ノ一五)。神が、偶像であると言明されたむさぼりの罪によって、彼は日和見主義者となってしまうた。この一つの過失によって、サタンは、彼を完全に支配するようになった。彼を破滅に陥れたのは、このむさぼりであった。誘惑者は、人々を神に仕えさせないようにしようとして、常にこの世の利得と名誉を提供する。あまり良心的すぎでは繁栄しないとサタンは人々に言う。こうして、多くの者は、厳格な誠実の道から離れるように誘われるのである。悪の一步は、次の一步をたやすくする。彼らは、ますます僭越になる。彼らはひとたび貪欲と権力欲に支配されると、どんな恐ろしいことでも、あえてするようになる。多くの者は、自分はこの世の利得のために一時的に厳格な誠実の道を離れてもかまわないと思い、そして、目的が達せられたならば、いつでもそれをやめられると考えている。そのような人はサタンのわなに陥り、それから逃げるできないのである。

預言者が来ることを拒んだことを、使いの者たちがバラクに報告したとき、彼らは、神がそれを禁じられたとは言わなかった。バラムは、もつと多くの報酬を得たいために来ないのだと簡単に考えた王は、最初の者たちよりもつと身分の高いつかさたちを多く送って、さらに高い榮譽を約束し、バラムが命じることは何でも承認する権威を彼らに与えた。バラクは、預言者に懇願して言った。「どんな妨げをも顧みず、どうぞわたしのところへおいでください。わたしはあなたを大いに優遇します。そしてあなたがわたしに言われる事はなんでもいたします。どうぞきてわたしのためにこの民をのろってください」(民数記二二ノ一六、一七)。

バラムは、二度試みられた。彼は、使者の懇請に答えて、自分が非常に良心的で誠実であつて、金銀がどんなに積まれても、神のみ旨に逆らつて出かけることはできないことを強調した。しかし、彼は、王の求めに応じたいと願っていた。神のみ旨が、すでにはつきりと知らされていたにもかかわらず、彼は、使者たちに、しばらくとどまるように勧め、もう一度神に尋ねてみようと言つた。彼は永遠の神を、あたかも人間のように説得できると思つた。

夜、主はバラムにあらわれて言われた。「この人々はあなたを招きにきたのだから、立つてこの人々と一緒に行きなさい。ただしわたしが告げることだけを行わなければならない」(同・二二ノ二〇)。バラムはすでに心に決めていたので、主は、ここまでバラムが自分の思い通りにすることを許されたのである。バラムは、神のみ旨を行なうことを求めず、かえつて自分の道を選び、主の承認を得ようとつとめたのである。

今日も、同様のことをするものが数多くいる。彼らは、自分たちの傾向と一致しているならば、どんな義務も困難なく理解する。それは、聖書が明らかにし、環境と理性も共にそれをはつきり示しているのである。しかし

こうした証拠が彼らの欲望と傾向に反するものであるため、彼らは、しばしば、それをないがしろにして、神のみ前に出て、自分の義務を知ろうとする。彼らは、一見、非常に良心的にふるまい、光を求めて長い祈りをささげる。しかし、神を軽んじることはできない。神は、そのような人々が、欲望のままに行なって、その結果、苦しむことをお許しになることがよくある。「しかしわが民はわたしの声に聞き従わず、……それゆえ、わたしは彼らをそのかたくなな心にまかせ、その思いのままに行くにまかせた」(詩篇八一ノ一、一二)。義務をはつきり示されたとき、それを実行しなくてもよいという許しを受けるために、神に祈ろうなどと思つてはならない。かえつて謙虚なへりくだつた心をもつて、その要求を履行するために、神の力と知恵を求めるべきである。

モアブ人は墮落した偶像教徒であつた。しかし、彼らが受けた光からすると、彼らの罪はバラムの罪ほど天の目に大きくはなかつた。バラムは神の預言者であると言つていたのであるから、彼が語るすべてのことは、神の權威によつて語られたものと受けとるべきであつた。それゆえ、彼は自分かつてなことを話すことを許されていなかった。彼は、神が彼にお与えになる使命を伝えねばならなかつた。「わたしが告げることだけを行わなければならぬ」というのが神の命令であつた。

バラムは、もしモアブの使者たちが朝のうちに彼を迎えに来るならば、彼らといつしよに行つてもよいという許可をうけた。しかし、彼らは、彼が遅いのに困り果て、またもや断わられるのではないかと思つて、彼に相談せずに家路についてしまった。こうなつては、もう、バラクの求めに応じなければならぬ理由は、すべてなくなつてしまつた。しかし、バラムは報酬を得ようと決心した。彼はいつも乗っている動物を引き出して出かけた。彼は今にも神の許可がとり去られはしないかと恐れた。彼は、欲した報酬を何かに妨げられて取りそこなうまい

第 40 章 欲に目がくらんだバラム



途中で主の使いが三度現われた。怒った預言者バラムは、神が彼を行かせまいとしておられるのも知らず、口バを三度も激しく打った。

とあせりながらけんめいに道を急いだ。

しかし、「主の使は彼を妨げようとして、道に立ちふさがっていた」(民数記二二ノ二二)。獣は、人には気づかない神の使いを見て、道を横にそれで畑にはいった。バラムは獣を激しくむちで打って元の道に引きもどした。しかし、石垣にはさまれた狭い場所で、天使がもう一度現われると、獣はその恐ろしい姿を避けようとして、主人の足を石垣に押しつけた。バラムには天の介入が見えなかった。また、神が彼の道をはばんでおられることを知らなかった。バラムは激怒し、ろばを情け容赦なく打ち、前進させようとした。

もう一度、「右にも左にも、曲る道がな」い「狭い所に」前と同じように、恐ろしい姿をした天使が現われた(同・二二ノ二六)。あわれな獣は、すっかりおびえて立ち止まり、バラムを乗せたまま地面にかがんでしまった。バラムは怒り狂って、ついで、これまで以上にひどく獣を打った。このとき、神は獣の口を開かれた。「ものを言わないるだが、人間の声でものを言い、この預言者の狂気じみたふるまいをはばんだのである」(ペテロ第二・二ノ一六)。「わたしがあなたに何をしたといのですか。あなたは三度もわたしを打ったのです」(民数記二二ノ二八)。

バラムは、行く手を妨げられたのを怒って、言葉のわかるものに語るように獣に答えた、「お前がわたしを侮ったからだ。わたしの手につるぎがあれば、いま、お前を殺してしまうのだが」(同・二二ノ二九)。この自称魔術師は、自分が乗っている動物さえ殺す力がないのに、一つの民族全体をのろって、彼らの力をまひさせようとして、道を進んでいたのである。

このとき、バラムの目が開かれた。彼は、抜き身の刀を持って彼を殺そうとかまえている神の使いを見た。彼

は恐れ、「頭を垂れてひれ伏した」。天使は彼に言った、「なぜあなたは三度もろばを打ったのか。あなたが誤った道を行くので、わたしはあなたを妨げようとして出てきたのだ。ろばはわたしを見て三度も身を巡らしてわたしを避けた。もし、ろばが身を巡らしてわたしを避けなかったなら、わたしはきっと今あなたを殺して、ろばを生かしておいたであろう」(同・二二ノ三一 三三)。

バラムは、彼が残酷に扱ったあわれな動物に命を守ってもらったのであった。主の預言者であることを公言し、目が開かれて「全能者の幻を」見たと主張した者が、貪欲と野心のために、彼のろばにはよく見えた神の使いを見ることができなかったのである(同・二四ノ四)。「この世の神が不信の者たちの思いをくらませて」いる(コリント第二・四ノ四)。いかに多くの者がこのように盲目であることが。彼らは、禁じられた道を進み、神の律法を破りながら、神と天使が彼らに敵対していることを見分けることができないのである。バラムと同じように、彼らは、自分が破滅するのをとどめる者に怒りを発するのである。

バラムはろばの扱いによって、彼がどんな心の状態にあったかを示した。「正しい人はその家畜の命を顧みる、悪しき者は残忍をもって、あわれみとする」(箴言一二ノ一〇)。動物を虐待したり、怠慢によって彼らに苦痛を与えたりすることがどんなに罪深いかを認める者は少ない。人間を創造されたおかたは、下等な動物をもお造りになったのである。「そのあわれみはすべてのみわざの上にあります」(詩篇一四五ノ九)。動物は人間に仕えるために造られた。しかし、人間は無情な取り扱いや残酷な使役によって彼らに苦痛を与える権利はもっていない。「被造物全体が、…共にうめき共に産みの苦しみを続けている」原因は、人間の罪である(ローマ八ノ二二)。そのために人類だけでなく、動物もまた、苦しんで死ぬようになった。であるから、神が造られたものの上に罪

がもたらした苦痛の重荷を増すかわりに、軽くしてやるように努めることが人間としてのつとめである。動物が自分の権威の下にいるからと言って、彼らを虐待する者は卑怯者であり暴君である。隣人であれ、動物であれ、それらに苦痛を与える性質は悪魔的である。あわれな物言わぬ動物たちは、話すことができないので、多くの者は自分たちの残酷な行為が知られるとは思っていない。しかし、もしこれらの人の目が、バラムと同じように、開かれたならば、彼らは神の使いが天の法廷で証人として立ち、彼らに有罪の証言をしているのを見るであろう。記録は天にのぼる。そして、神が造られたものを虐待する者にさばきが宣告される日が来るのである。

神の使いを見たとき、バラムは恐れて叫んだ、「わたしは罪を犯しました。あなたがわたしをとどめようとして、道に立ちふさがっておられるのを、わたしは知りませんでした。それで今、もし、お気に召さないのであれば、わたしは帰りましょう」(民数記二二ノ三四)。主は彼が道を進んで行くことを許された。しかし、彼の言葉は、神の力に支配されなければならないことを、彼に理解させられた。神は、ヘブル人が神の保護の下にある証拠をモアブ人に示そうとされた。そして、このことは、神の許しがなければ、バラムは無力で、一言もイスラエルをのろうことができないことを彼らに明示して、効果的に行なわれたのである。

モアブの王は、バラムが来ているという知らせを聞いて、大ぜいの家来を従えて、彼を国境まで出迎えた。多額の報賞が与えられるのに、どうして早く来なかったのかと王が驚いてバラムに言うと、預言者は答えた。「ごらんない。わたしはあなたのところにきています。しかし、今、何事かをみずから言うことができませんか。わたしはただ神がわたしの口に授けられることを述べなければなりません」(同・二二ノ三八)。バラムは、この制限を非常に残念に思っていた。彼は主が彼を支配しておられるので、自分の目的が達成されないのではないか

と恐れた。

王は国家の高官たちと共に威儀をととのえ、バラムを「バアルのたかきところ」へ案内していき、そこからヘブルの軍勢をながめさせた(同・二二ノ四一・文語訳)。高い所に立ち、神が選ばれた民の陣営を見おろす預言者をながめて見よう。イスラエル人は、自分たちのすぐ近くで起こっていることを何も知らないでいる。日に夜に神の守りが自分たちをおおっていることを彼らは少しも知らない。神の民の目のなんと鈍いことであろう。いつの時代でも、彼らは、神の大いなる愛とあわれみを理解するのがなんとおそいことであろう。もし彼らが、彼らのために絶えず働く神の驚くべき力をはっきり知ることができたならば、彼らの心は、神の愛に対する感謝で満たされ、その威厳と力に対する畏敬の念に満たされないであろうか。

バラムは、ヘブル人の犠牲のささげものについていくらか知っていた。そこで、彼は、彼らにまさる高価なさげものをするにによって神の祝福を得て、自分の罪深い計画を確実になしとげたいと思った。こうして偶像教徒のモアブ人の感情が彼の心を支配していった。彼の知恵は愚かとなり、彼の霊的視界は曇った。彼はサタンの力に屈服して目がくらんだ。

バラムの指示によって七つの祭壇がたてられ、彼は祭壇ごとに犠牲をささげた。それからバラクに、主がどう言われるかを知らせる約束をして、神に会うために「たかきところ」にしりぞいた。

王は、モアブの貴族やつかさたちと共に、犠牲のかたわらに立っていた。そのまわりを群衆がとりまき、預言者の帰りをいまかいまかと待っていた。ついに彼が出てきた。人々は憎むべきイスラエル人のために働いたあの不思議な力を、永久に無能にする言葉を待ちかまえた。バラムは言った。

「バラクはわたしをアラムから招き寄せ、

モアブの王はわたしを東の山から招き寄せて言う、

『きてわたしのためにヤコブをのろえ、

きてイスラエルをのろえ』と。

神ののろわない者を、わたしがどうしてのろえよう。

主ののろわない者を、わたしがどうしてのろえよう。

岩の頂からながめ、

丘の上から見たが、

これはひとり離れて住む民、

もろもろの国民のうちに並ぶものはない。

だれがヤコブの群衆を数え、

イスラエルの無数の民を数え得よう。

わたしは義人のように死に、

わたしの終りは彼らの終りのようでありたい」。

(同・二三ノ七一〇)

バラムは、イスラエルをのろうために来たことを告白した。しかし、彼の言葉は彼の心の思いと正反対であった。彼の心はのろいで満ちていたが、祝福を宣言するようにしいられたのであった。

バラムはイスラエルの陣営を見たとき、彼らの繁栄の証拠をながめて驚嘆した。彼は、彼らが組になってここに出没し、国を荒らしまわる、粗野で無秩序な群衆であって、周囲の国々からきらわれ、恐れられていると聞かされていた。しかし、彼らの外観は、それとは全く反対であった。彼は、彼らの陣営の驚くべき広さと完全な秩序を見た。すべてのものは、完全な規律と秩序のもとにあった。彼は、神がイスラエルにくだされた恵みと選民としての彼らの特殊な性質を示された。彼らは他の国々と同じ水準のものではなく、それらすべてをはるかに越えて高められたものであった。

「これはひとり離れて住む民、もろもろの国民のうちに並ぶものはない」(同・二三ノ九)。これらの言葉が語られたとき、イスラエル人はまだ定住地をもたず、彼らの特性、習慣風習はバラムに知られていなかった。しかしイスラエルの後の歴史において、この預言はなんと正確に成就したことであろう。その捕囚のすべての年を通じて、また、国々に離散してからも、すべての時代にわたって彼らは異なつた民として存在していた。同様に神の民真のイスラエルは、すべての国々に散らばっているけれども、地上においては国籍を天に持つ旅人にすぎない。

バラムは国家としてのヘブル人の歴史を示されただけでなく、時の終わりに至るまでの神のまことのイスラエルの増加と繁栄を見た。彼は、いと高きものの特別なめぐみが、神を愛し、おそれる者にとどまるのを見た。彼らが、死の陰の暗い谷にはいるとき、神のみ腕が彼らをささえるのを彼は見た。さらに、彼は、彼らが光栄と誉

れと不死の冠をいただいて墓から出てくるのを見た。彼はあがなわれた者が、新しくされた地の朽ちない栄光の中に喜んでいるのを見た。その光景を凝視しながら彼は叫んだ、「だれがヤコブの群衆を数え、イスラエルの無数の民を数え得よう」(同・二三ノ一〇)。すべてのものの額に栄光の冠を見、すべてのものの顔から輝き出る喜びを見、純粋な幸福に満ちた永遠の生命をながめたとき、彼の口から厳粛な祈りがほとばしった。「わたしは義人のように死に、わたしの終りは彼らの終りのようでありたい」(同・二三ノ一〇)。

もし、バラムに神から与えられた光を受ける気持ちがあったならば、彼はここでその言葉どおりに実行したことであろう。彼はすぐにモアブ人とのすべての関係を断ち切ったであらう。もはや神のあわれみを僭越に求めることをせず、深い悔い改めによって神に立ち返ったことであらう。しかし、バラムは不義の報酬を愛した。そして、それを得ようと決心した。

バラムは、のろいが草を枯らす害虫のように、イスラエルにかけられるものと心から期待していた。しかし、預言者の言葉に彼は怒って叫んだ。「あなたはわたしに何をするのですか。わたしは敵をのろうために、あなたを招いたのに、あなたはかえって敵を祝福するばかりです」(同・二三ノ一一)。バラムは、神の力に動かされて、いって言わざるを得なかった言葉を、あたかも自分が神のみ心に対する良心的な服従をしたかのように公言した。そしてやむを得ずしたにかかわらず、それを自分のてがらにしようとした。「わたしは、主がわたしの口に授けられる事だけを語るように注意すべきではないでしょうか」と彼は答えた(同・二三ノ一二)。

バラムはこのときに至ってもなお彼の目的を放棄できなかった。彼は、バラムが、ヘブル人の大陣営の堂々とした光景をながめておじけづき、彼らをのろうことができなかったのだと思った。王は、軍勢のごく一部分しか

見えない地点に、預言者を連れていくことに決めた。もしバラムに隔離された部隊をのろわせることができれば全陣営は、やがて破滅に陥るであろう。ピスガの山の頂上で、もう一度行なわれることになった。また、七つの壇が築かれ、最初のとく同じささげ物がおかれた。王とつかさたちは、犠牲のそばに立ち、バラムは、神と会うために退いた。預言者は、ふたたび、自分では変えることも止めることもできない神の言葉を託された。

氣をもんで待ちかまえていた人々は、彼が現われたときに、「主はなんと言われましたか」と尋ねた(同・二三ノ一七)。彼の答えを聞いて、王とつかさたちは前と同様に恐怖に満たされた。

「神は人のように偽ることはなく、

また人の子のように悔いることもない。

言ったことで、行わないことがあるうか、

語ったことで、しとげないことがあるうか。

祝福せよとの命をわたしはうけた、

すでに神が祝福されたものを、

わたしは変えることができない。

だれもやコブのうちに災のあるのを見ない、

またイスラエルのうちに悩みのあるのを見ない。

彼らの神、主が共にいまし、

王をたたえる声がその中に聞える」。

(同・二三ノ一九 一二)

この啓示によって、畏敬の念に満たされたバラムは、「ヤコブには魔術がなく、イスラエルには占いが無い」と叫んだ(同・二三ノ二三)。大魔術師バラムは、モアブ人の希望に応じて、彼の魔法の力を使おうとした。しかし、神は、このとき、イスラエルのためになんと驚くべきことをなさったことであろう。彼らが、神に保護されているかぎり、いかなる民族や国家が、サタンの全勢力の援助を受けて彼らに立ち向かって来ても、彼らに勝つことはできないのである。全世界は、神がその民のためになされた不思議なわざに驚くのである。すなわち、罪の道に進もうと決心した人が、神の力に支配されて、のろいの言葉のかわりに、壮大で、熱情に満ちた詩によって、最も豊かで尊い約束を語るようになったのである。またこのとき、イスラエルに対して表わされた神の恵みは、すべての時代の従順で忠実な神の子らに対する神のみ守りの保証であつた。サタンが悪人を扇動して神の民を悪く言い、苦しめ、滅ぼそうとするとき、神の民はこのときのできことを思い起こして、勇気を出し、神に対する信仰を強めるのである。

モアブの王は失望落胆し、「彼らをのろふことも祝福することも、やめてください」と叫んだ(同・二三ノ二五)。しかし、かすかな望みがなお彼の心に残っていた。彼はもう一度試みてみようと思つた。今度、彼は、バラムをペオル山へ連れていった。そこには彼らの神、バアルのみだらな礼拝にささげられた神殿があつた。そこに前と同じ数の壇がたてられ、同じ数の犠牲がささげられた。しかし、バラムは前のときのように、神のみ旨を知

るためにひとりになることをしなかった。彼は、魔術を使うようには見せかけなかった。ただ壇のそばに立ってイスラエルの天幕を見おろしていた。ふたたび神の霊が彼に臨んだ。そして神の言葉が彼のくちびるから聞こえた。

「ヤコブよ、あなたの天幕は麗しい、

イスラエルよ、あなたのすまいは、麗しい。

それは遠く広がる谷々のよう、

川べの園のよう、

主が植えられた沈香樹のよう、

流れのほとりの香柏のようだ。

水は彼らのかめからあふれ、

彼らの種は水の潤いに育つであらう。

彼らの王はアガゲよりも高くなり、

彼らの国はあがめられるであらう。…

彼らは雄じしのように身をかがめ、

雌じしのように伏している。

だれが彼らを起しえよう。

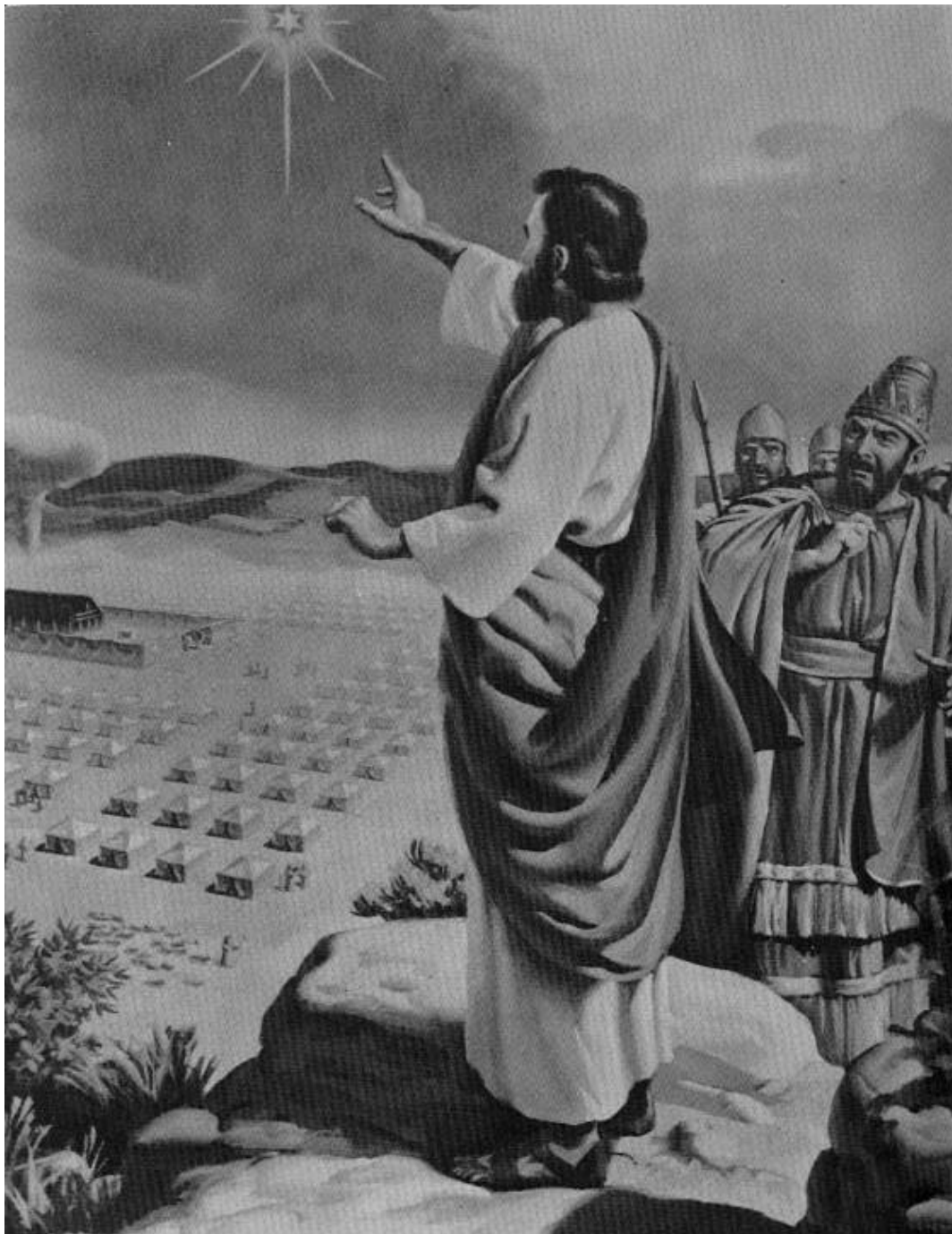
あなたを祝福する者は祝福され、

あなたをのろう者はのろわれるであろう」。

(同・二四ノ五 九)

ここに神の民の繁栄が自然界の最も美しいものにたとえて表わされている。預言者はイスラエルを豊かな産物でおおわれた肥えた谷、かれることのない泉の水でうるおう庭、かおり高いびゃくだんや堂々たる香柏になぞらえた。この最後の象徴は、靈感の言葉の中に見いだされる最も美しく、全く適切なものの一つである。レバノンの香柏は東方のすべての人々に尊ばれた。この種に属する木は、人が行くところ世界のどこにでも見いだされる。それは、極地から熱帯地方にいたるまで、炎天を楽しみ、しかも、寒気に耐えて繁茂する。それは流れのほとりでは豊かに繁つて育ち、ひからびた水のない荒地でも高くそびえる。それは根を深く山の岩間におろし、たけり狂う嵐にもおおしく立つ。冬の風が吹いてすべての葉が枯れるときにも、その葉はみずみずしい緑をたたえている。他のすべての木にまさって、レバノンの香柏は、その強さ、その堅さ、その不滅の活力がきわだっている。それゆえ、これはそのいのちが、「キリストと共に神のうちに隠されている」人々の象徴として用いられているのである(コロサイ三ノ三)。聖書は、「正しい者は…レバノンの香柏のように育ちます」と言っている(詩篇九二ノ一二)。神のみ手は香柏を森の王に高められた。「もみの木もその枝葉に及ばない。けやきもその枝と比べられない。神の園のすべての木も、その麗しきこと、これに比すべきものはない」(エゼキエル書三一ノ八)。香柏はくりかえし忠誠のしるしとして用いられている。聖書の中でそれが正しい人を表わすために用いられていることは、天が神のみ旨を行なうものをどのように見ているかを示すものである。

第 40 章 欲に目がくらんだバラム



バラムはイスラエルをのろうことができなかったので、バラク王は失望した。その代わりに、バラムは預言者の霊に燃えて、眼下に広がる神の民の陣営に神の祝福を宣言した。

バラムは、イスラエルの王がアガグより偉大で、力の強いものとなることを預言した。アガグとは、当時非常に強い国であったアマレク人の王たちに与えられた名であった。しかし、イスラエルが神に忠実であるならば、すべての敵を従えることができる。イスラエルの王とは神のみ子をさしていた。その王座はいつの日か地上にすえられ、その権威はすべての地上の国の上に高められるのであった。

バラクは、預言者の言葉を聞いて失望落胆し、恐怖と激しい怒りをおぼえた。彼は、万事が自分に不利であっても、バラムがなんとかよい答えをして、わずかも彼を励ますことができたものと憤慨した。彼は、預言者の妥協と欺きの行為を軽べつした。王は、激しく叫んで言った、「それで今あなたは急いで自分のところへ帰ってください。わたしはあなたを大いに優遇しようと思った。しかし、主はその優遇をあなたに得させないようにされました」(民数記二四ノ一)。バラムはそれに答えて、自分は神より与えられた言葉だけしか語ることができないことは、王も前もって聞かれたはずだと言うのであった。

バラムは、自分の民のところへ帰る前に、世の救い主と神の敵の破滅について最も美しく崇高な預言を語った。

「わたしは彼を見る、しかし今ではない。

わたしは彼を望み見る、しかし近くではない。

ヤコブから一つの星が出、

イスラエルから一本のつえが起り、

モアブのこめかみと、

セツのすべての子らの脳天を撃つであろう」。

(同・二四ノ一七)

そして、彼は、モアブ人、エドム人、アマレク人、ケ二人らの完全な滅亡を預言して口を閉じ、モアブの王に希望の光を残さなかった。

バラムは、富を与えられて昇進する望みもなくなり、王にうとんぜられ、神の不興を被ったことを感じながら自分から進んで行なった務めから離れていった。彼が家に帰ったあとで、神の霊の支配力が彼から離れた。これまで制せられたに過ぎなかった貪欲が勢いをもちかえした。彼は、どんな手段に訴えてでもバラクが約束した報酬を得ようと決心した。バラムは、イスラエルの繁栄が、彼らの神に対する服従にあることを知っていた。そこで彼らを敗北させるには彼らを罪に誘う以外に方法はないと思った。今や彼はイスラエルにのろいを招く手段をモアブ人に勧告することによって、バラクの歡心を得ようと心に決めた。

彼はすぐにモアブの国にひきかえした。そして、彼の計画を王に説明した。モアブ人自身も、イスラエルが神に忠実であるかぎり、神が彼らの盾となれることをはつきり悟った。バラムの提案は彼らを偶像礼拝に誘って神から彼らを引き離すことであつた。もし彼らをバアルやアシタロテのみだらな礼拝に加わるように誘うことができれば、彼らの全能の守護者は彼らの敵となり、彼らはまもなくまわりの残忍で好戦的な国々の餌食となるのであつた。王はこの計画を喜んで受け入れた。バラム自身はとどまってその計画の実施を助けることとなった。

バラムは、彼の悪魔的な企てが成功するのを見た。彼は神ののろいがその民にくんだり、幾千の者が刑罰を受け

るのを見た。しかし、イスラエルの中の罪を罰した神の義は、誘惑者がのがれるのを許さなかった。イスラエルとミデアン人とが戦ったときに、バラムは殺された。彼が、「わたしは義人のように死に、わたしの終りは彼らの終りのようでありたい」と叫んだとき、彼は自分の終わりが近いことを予感したのであった(同・二三ノ一〇)。しかし、彼は義人の生涯を送ることを選ばなかった。彼は、神の敵と同じ運命に陥った。

バラムの運命はユダのそれと同じであつた。彼らの性質は、互いによく似ている。両者とも神と富にかな仕えようとして、完全に失敗した。バラムは真の神を知り、彼に仕えることを公言した。ユダはイエスをメシヤとして信じ、彼に従う者たちに加わつた。しかし、バラムは主の奉仕を富と世俗のほまれを得る踏み石にしようと望み、これに失敗して、つまずき倒れ、滅びた。ユダは、キリストと結合することによつて、メシヤがまもなく樹立すると彼が信じたこの世の王国において、富と昇進にあずかるうと期待した。彼の希望が裏切られると、彼は背教して破滅した。バラムもユダも大きな光を受け、大きな特典にあずかつた。しかし、心にいだいた一つの罪が全人格を毒し、滅亡の原因となつた。

心の中にキリスト教徒にふさわしくない性質をとどめておくことは危険である。心に秘められた一つの罪は、徐々に性質を堕落させ、その高尚な能力をすべて悪い欲望に屈服させる。良心から一つの保護物を取り除くこと、一つの悪い習慣にふけること、義務の重要な要求を一度怠ることなどは魂の防壁を破り、サタンがつけ入って、われわれを誤らせる道を開くのである。唯一の安全な道は、ダビデのように、次の祈りを、毎日、まごころからささげることである。「わたしの歩みはあなたの道に堅く立ち、わたしの足はすべることがなかったのです」(詩篇一七ノ五)。

第 41 章

ヨルダンにおける背教

本章は、民数記二五章に基づく。

勝ち誇ったイスラエルの軍勢は、喜びに満ち、神に対する信仰を新たにしてい、バシヤンから帰った。彼らは、すでに、貴重な地域を占領していた。そして、すぐにカナンを征服することができると確信していた。彼らと約束の国との間には、ヨルダン川があるだけであつた。川の向こうには、緑でおおわれた肥えた平原があつた。そこには、泉から豊富にわき出た流れにうるおされ、おい茂つたしゅろの木陰があつた。平原の西の端に、エリコの塔と宮殿が立ち並んでいた。そして、それが、しゅろの森に囲まれていたために、エリコは「しゅろの町」と呼ばれていた（申命記三四ノ三）。

ヨルダンの東側、すなわち、彼らを通つてきた高原と川までの間にも、その幅数マイルに及ぶ平原が、川に沿って長く伸びていた。天然の保護を受けたこの流域は熱帯性の気候で、ここに、シツテム、すなわちアカシヤの木が茂っていた。そのために、この平原は、「シツテムの谷」と呼ばれた（ヨエル書三ノ一八）。イスラエルが宿営したのは、ここで、川沿いのアカシヤの森が、彼らにこころあいの宿り場となつた。

しかし、こうした魅力のある環境のなかで、武装した大軍や荒野の野獣以上に恐ろしい悪事に、彼らは当面しなければならなかった。自然の条件に恵まれた国土は、住民によって汚されていた。バアルが彼らのおもだった神であつたが、その公の礼拝には、最も墮落した邪悪な行為が常に行なわれていた。いたるところに偶像礼拝とみだらなことで著名な場所があつて、その名そのものが、人々の卑しさと腐敗を示していた。

こうした環境は、イスラエル人に悪影響を及ぼした。彼らの心は、絶えずほめかされた卑しい思いになれてきた。彼らは、安楽と怠惰な生活によって風紀をみだした。そして、ほとんど無意識のうちに神から離れ、やすやすと誘惑に負ける状態に陥っていた。

ヨルダン河畔に宿営していた間に、モーセはカナン占領の準備を進めた。この偉大な指導者は、この務めに没頭していた。しかし、民にとつてこの不安と期待の時期はどうにも耐えがたかった。幾週もたたないうちに、彼らの生活は徳と忠誠から恐ろしいまでに離れてしまっていた。

最初、イスラエル人とこれらの異教徒との間には、ほとんど交渉がなかったのであるが、やがて、ミデアンの女たちがひそかに宿営に出入りするようになった。彼女たちの出現に警戒の色をみせるものもなかった。また、彼らのすることが、目だたないように行なわれたために、モーセの注意もこれに向けられなかった。この女たちがヘブル人と交わる目的は、彼らをだまして神の律法に違反させ、異教の儀式と習慣に注意を引き、偶像礼拝に誘ふことであつた。こうした動機は、友愛という名目の下に隠されていたため、民の守護に当たる者たちでさえそれに気づかなかった。

バラムの提案によつて、モアブの王は、神々をたたえる大祭を催すことにきめた。そして、バラムが、イスラ

エル人の参加を促すということがひそかに取り決められた。イスラエル人は、彼を神の預言者と見なしていたので、この目的を果たすのはそうさなかった。大ぜいの民が、彼と共に祭りを見物した。彼らは禁じられた場所に足を踏み入れ、サタンのわなに捕えられた。歌と踊りに浮かされ、異邦の女たちの美しさに魅せられて、彼らは主への忠誠心を捨ててしまった。一緒になって歡樂に身をゆだねるにつれて、酒が感覚をくもらせ、自制心を失わせた。情欲がすべてを支配し、みだらな思いで良心を汚した彼らは、勧められるままに、偶像にひざをかがめた。彼らは異教の祭壇に犠牲をささげ、最も墮落した儀式に参加した。

この害毒が、恐ろしい伝染病のように、イスラエルの宿営に広がるには長時間を要しなかった。戦いにおいて敵を征服したはずの者たちが、異教の女の惑わしに負けてしまった。民は、魂を抜かれてしまったようであつた。つかさたちや、おもだった人々が先頭に立って罪を犯した。そして多くの人々が罪を犯したため、背信は全国的なものとなった。「イスラエルはこうしてペオルのバアルにつきしたがった」(民数記二五ノ三)。モーセがこの悪に気づいたときは、すでに敵の計画は完全に成功し、イスラエル人はペオルの山のみだらな礼拝に参加していたばかりでなく、この異教の儀式がイスラエルの宿営の中でも行なわれようとしていた。モーセは憤りに満ち、神の怒りは燃え上がった。

バラムのどのような魔術もイスラエルに対してなし得なかったことを、彼らのよこしまな風習はなしとげた。つまり、彼らは、イスラエルを神から引き離したのである。直ちに襲った刑罰によって、人々は、自分たちの罪の大きさにめざめた。恐ろしい疫病が宿営に発生し、幾万の人々がたちまちのうちに、その犠牲になった。この背信の指導者たちは、さばきびとによって殺されなければならないと、神は、お命じになった。この命令は、直

ちに実行された。罪人たちは殺され、その死体は全イスラエルの目の前につるされた。それは、会衆が、指導者たちの受けたきびしい刑罰を見て、彼らの罪に対する神の嫌悪と彼らに対する神の怒りの恐ろしさを痛感するた
めであった。

処罰の正しさをすべての者が認め、民は幕屋に急いで来て、涙を流し、心からへりくだった思いをいだいて、罪を告白した。幕屋の入口で、彼らがこうして神の前に泣いているとき、そして疫病がなお人々に死をもたらし
ていたときに、イスラエルのつかさのひとりであるジムリが、臆面もなく、「ミデアンの民の一族のかしら」の娘である遊女を伴って宿営にやってきて、彼女を自分の天幕に連れていった(同・二五ノ一五)。これほど大胆不敵な罪はまたとなかった。酒に酔いしれたジムリは、「ソドムのように」その罪をあらわして自分の恥を誇った(イザヤ書三ノ九)。祭司と指導者たちが悲嘆と屈辱にうちひしがれて、「廊と祭壇との間で」泣き(ヨエル書二ノ一七)、主が民のいのちをゆるし、神の選民をはずかしめないようにと、主に嘆願していたそのおりもあり、このイスラエルのつかさは、あたかも神の報復にいどみ、民のさばきびとをちよう笑するかのように、全会衆の前で、自分の罪をこれ見よがしに誇ったのであった。大祭司エレアザルの子ピネハスは会衆のうちから立ち上がり、やりを手にとり、「そのイスラエルの人の後を追って、奥の間に入り」、ふたりを殺した(民数記二五ノ八)。こうして疫病はやみ、神の刑罰を執行したこの祭司は、全イスラエルの前で名誉を受け、祭司職は彼とその家のものとして、永久に確認された。

天来の言葉はこうであった。ピネハスは、イスラエルのうちから「わたしの怒りを…取り去った」「このゆえにあなたは言いなさい、『わたしは平和の契約を彼に授ける。これは彼とその後の子孫に永遠の祭司職の契約

となるであろう。彼はその神のために熱心であって、イスラエルの人々のために罪のあがないをしたからである』
と（同・二五ノ一―一三）。

シテムにおける罪のためにイスラエルにくだった刑罰は、四〇年近く以前に、「彼らは必ず荒野で死ぬであろう」という宣告を受けていたあの大群衆の残存者を滅ぼしてしまった（同・二六ノ六五）。ヨルダンの平野の宿営で、神のさしずにしたがって民を数えたところ、「モーセと祭司アロンがシナイの荒野でイスラエルの人々を数えた時に数えられた者はひとりもなかった。…彼らのうちエフンネの子カレブとヌンの子ヨシュアのほか、ひとりも残った者はなかった」（同・二六ノ六四、六五）。

神は、ミデアン人の誘惑に屈したイスラエルに刑罰をくだされたが、誘惑した者たちも神の正義の怒りをのがれることができなかった。レピデムで、イスラエルを攻め、疲れ果てて軍勢のあとに従っていた者たちを襲ったアマレク人は、長く後まで罰せられなかったが、イスラエル人を罪にいらしたミデアン人は、もっと危険な敵として、ただちに神の刑罰を受けた。神はモーセに命じられた。「ミデアンびとにイスラエルの人々のあだを報いなさい。その後、あなたはあなたの民に加えられるであろう」（同・三一ノ二）。この命令はすぐに実行された。各部族から一千人が選ばれ、ピネハスの指揮のもとに送り出された。「彼らは主がモーセに命じられたようにミデアンびとと戦った。その殺した者のほかにまたミデアンの王五人を殺した。…またベオルの子バラムをも、つるぎにかけて殺した」（同・三一ノ七、八）。軍勢が捕虜とした女たちも、最も罪深く最も危険なイスラエルの敵であったので、モーセの命令によって殺された。

これが、神の民に対して災いを図った民の最後であった。詩篇作者はこううたっている。「もろもろの国民は

自分の作った穴に陥り、隠し設けた網に自分の足を捕えられる」(詩篇九ノ一五)。「主はその民を捨てず、その嗣業を見捨てられないからです。さばきは正義に帰る。人々が「相結んで正しい人の魂を責め」るとき、「主は彼らの不義を彼らに報い、彼らをその惡のゆえに滅ぼされます」(詩篇九四ノ一四、一五、二一、二三)。

バラムは、ヘブル人をのろうように求められたとき、魔術のすべてを尽くしても彼らに災いをもたらすことができなかった。それは主が、「ヤコブのうちに災のあるのを見」ず、また「イスラエルのうちに悩みのあるのを見ない」からであつた(民数記二三ノ二一)。だが彼らが誘惑に屈して神の律法を犯したとき、保護が彼らから取り去られた。神の民が戒めに忠実であるとき、「ヤコブには魔術がなく、イスラエルには占いが無い」のである(同・二三ノ二三)。したがって、サタンの力と策略は、すべて、彼らを罪にいざなうために用いられる。神の律法の保管者であることを告白する者たちが、戒めを破るならば、それは彼らを神から引き離してしまう。そして彼らは、敵の前に立つことができなくなる。

ミデアンの軍勢、また、魔術によつても征服されなかつたイスラエル人は、ミデアンの遊女たちに負けてしまつた。サタンに仕える女が魂をわなにかけて滅ぼす力は、こんなに強力なのである。「彼女は多くの人を傷つけて倒した、まことに、彼女に殺された者は多い」(箴言七ノ二六)。こうして、セツの子孫は誘われて誠実の道からそれ、清い人々は墮落した。ヨセフも、また、こうした誘惑を受けた。このようにして、サムソンは自分の力、イスラエルの守りをペリシテ人の手に渡した。この点においてダビデもつまづいた。また、三度にわたり神に愛された者と呼ばれた諸王の中の最も賢明な王ソロモンは情欲の奴隷となり、同じ魅惑の力のためにその誠実を犠牲にした。

「これらの事が彼らに起つたのは、他に対する警告としてであつて、それが書かれたのは、世の終りに臨んでい
るわたしたちに対する訓戒のためである。だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい」

(コリント第一・一〇ノ一一、一二)。サタンは人間の心を扱うのに用いる材料を熟知している。彼は数千年にわ
たり、うむことなく研究してきたので、あらゆる人間を最も容易に攻撃することのできる点を知っている。彼は
各世代にわたつて、ペオルのバアルにおいてみごとに成功したのと同じ誘惑により、最も強固な人間、イスラエ
ルのつかさたちをくつがえそうと働いてきた。どの時代にも、官能の耽溺という岩に乗り上げて難破した人々が
大ぜいいた。時が終わりに近づき、神の民が天のカナンの境界に立つとき、サタンは、昔と同じように、彼らを
よい地にはいらせまいとして、いつそう努力する。彼はひとりひとりにわなをしかける。気をつけなければなら
ないのは、無知で無教育な人々ばかりではない。彼は最も高い地位、最も聖なる職務の人々をも誘惑する。もし
彼らをいざなつてその魂を墮落させることができれば、彼らを通して多くの人々を滅ぼすことができる。そして
彼は今も、三千年前に用いたのと同じ手段を用いる。この世の交わり、美貌の魅力、快楽の追求、歡樂、安樂、
飲酒などによって、彼は第七条を犯させようとする。

サタンは、イスラエルを偶像礼拝に導くにさきだつて、みだらな生活にいざなつた。神のかたちであるべき人
間性はずかしめ、自分自身のうちにある神の宮を汚す者は、下劣な心の欲望を満足させて神をどんなにはずか
しめてもためらわない。官能の耽溺は精神を弱め、魂を墮落させる。動物的な性質の満足によって、道徳的、知
的能力はまひして無感覚となる。だから情欲の奴隷が神の律法の神聖な義務を自覺したり、贖罪を感謝したり、
あるいは魂の価値を正しく評価することはできない。善、純潔、眞実、神への崇敬、聖なることがらへの愛など、

人間を天の世界とつなぐこうした聖なる思いと気高い願望のすべてが、情欲の火で焼き尽くされる。魂は暗い荒涼とした荒地、悪霊の住み家、「あらゆる汚れた憎むべき鳥の巣くつ」となる(黙示録一八ノ二)。神のかたちに造られた人間が、野獣と同等の水準に引き下げられる。

ヘブル人が神の律法を犯すようにいざなわれ、民族に神の刑罰をもたらすことになったのは、偶像礼拝者と交わり、彼らの歡樂に加わったためであつた。そのように今も、キリストに従う者を不信心な者と交わらせ、その娛樂に加えることによって、サタンは巧みに彼らを罪にさそい出す。「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触れてはならない」(コリント第二・六ノ一七)。神は昔のイスラエルに要求なさつたと同じように、今のご自分の民にも、風習と習慣と原則において、この世とはつきり分離することを要求なさる。神のことばが教えることに忠実に従うなら、この区別は存在し、それはあいまいであることはあり得ない。ヘブル人が異教徒に同化してはならないことを戒めた警告は、現在、不信心な者の精神と風習に、クリスチャンが同調することを禁じている警告と同様に明白なものであつた。キリストはわれわれにこう語つておられる。「世と世にあるものとを、愛してはいけない。もし、世を愛する者があれば、父の愛は彼のうちにない」(ヨハネ第一・二ノ一五)。「世を友とするのは、神への敵対であることを、知らないか。おおよそ世の友となろうと思う者は、自らを神の敵とするのである」(ヤコブ四ノ四)。キリストに従う者は罪人と分離し、善を行なう機会のあるときだけ彼らと交わるのでなければならぬ。われわれを神から引き離す感化力を持つ人々との交わりを避けるについては、どんなに断固とした態度を取っても取りすぎることはない。「わたしたちを試みに会わせないで」くださいと祈る一方、できるだけ誘惑を避けなければならない(マタイ六ノ一三)。

イスラエル人が罪にいざなわれたのは、外面的には安楽で、安全な状態にあったときであった。彼らは、常に神を自分たちの前に置くことを怠り、祈りをおろそかにし、自負心をいだいた。安楽と放縦が魂のとりでを無防備にし、いやしい考えを起こさせた。原則という要塞をくつがえし、イスラエルをサタンの手に渡したのは、城壁の内部の反逆者たちであった。今なおこのようにして、サタンは魂の滅亡をはかっている。クリスチャンが公然と罪を犯すまでには、世間には知られない長い予備的な過程が心の中で進行している。精神は、たちまちにして純潔と聖潔から墮落と腐敗と犯罪へと急降下するのではない。神のかたちに造られた者を、獣、あるいは悪魔のかたちに墮落させるには時間がかかる。われわれは仰ぎ見ることによって変えられる。不純な思いにふけることによって、人間は、かつては嫌悪していた罪を快いものと思うようになることができる。

サタンはあらゆる手段を尽くして、犯罪と墮落的な悪徳を広めようとしている。都市の通りを歩けば、必ず、小説に描かれた犯罪、または劇場で上演される犯罪のはでな広告にぶつかる。心は罪に慣らされてしまう。心の下劣な人物のたどった道が、今日、雑誌に掲載され、人々の欲望をかきたてるあらゆるものが刺激的な物語の中で示される。人々は墮落的な犯罪について聞いたり、読んだりすることが多いため、かつてはこうした情景を嫌悪して目をそむけた敏感な良心も、感覚がにぶって、こうしたことをむさぼるごとく心に思い浮かべるようになるのである。

今日、この世界で、クリスチャンと称する人々にさえ人気のある娯楽の多くは、あの異邦人たちを陥れたのと同じ運命に至らせるものである。事実、そのなかで、サタンが魂を滅ぼすために活用しないものは、ほとんどない。サタンは、各時代を通じて、演劇によって、情欲を刺激し、悪徳をたたえてきた。サタンは、歌劇の魅惑的

表現と心を奪う音楽、ダンス、仮面舞踏会、トランプ遊びなどを用いて、原則の防壁を破り、肉欲にふける道を開くのである。誇りが助長され、欲求がほしいままに満たされるあらゆる快樂の集い、また、神のことを忘れて永遠のことが見失わせるあらゆるところで、サタンは、魂を彼のくさりでしばりつけている。

「油断することなく、あなたの心を守れ、命の泉は、これから流れ出るからである」と賢者は勧告している(箴言四ノ二三)。人間は、その心に思うとおりの人がらになっていく(箴言二三ノ七・文語訳参照)。心は天の恵みによって新たにされるのでなければ、生活のきよめを求めても無益である。キリストの恵みとは関係なしに、高く正しい品性を築こうとする者は、くずれる砂の上に家を建てているのである。それは、激しい誘惑のあらしが襲ってくると、倒れるにきまっている。「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」というダビデの祈りが、すべての魂の祈りでなければならぬ(詩篇五一ノ一〇)。天の賜物を受けてはじめて、われわれは「信仰により神の御力に守られ」ながら完全に向かって進むことができる(ペテロ第一・一ノ五)。

だが、誘惑に抵抗するためにわれわれにもしなければならぬことがある。サタンの策略の犠牲になりたくない者は、魂の道をよく守り、不純な思いを起こさせるものを読んだり、見たり、聞いたりしないようにしなければならない。魂の敵がほめかしてくることになんのみさかいかもなく、心が移ることのないようにしなければならない。使徒ペテロは言っている。「心の腰に帯を締め、身を慎み、……無知であつた時代の欲情に従わず、むしろ、あなたがたを召して下さった聖なるかたにならつて、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい」(同・一ノ一三 一五)。また、パウロは言っている。「すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、

すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと、すべてほまれあること、また徳といわれるもの、称賛に値するものがあれば、それらのものを心にとめなさい」(ピリピ四ノ八)。それには真剣に祈り、絶えず目ざめていることが必要である。われわれは、心を上に引きつけ、純潔で聖なるものに向けさせる聖霊の変わらぬ感化力の助けを受けなければならない。そして、神のみことばを勤勉に学ばなければならない。「若い人はどうしておのが道を清く保つことができるでしょうか。み言葉にしたがって、それを守るよりほかにありません。」「わたしはあなたにむかつて罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました」と詩篇作者は言っている(詩篇一一九ノ九、一一)。

ベテペオルにおけるイスラエルの罪は民族の上に神の刑罰をもたらしした。そして同じ罪が、今はそのようにすみやかに処罰されないかもしれないが、それが報復を受けることはそのときと同じく確実である。「もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう」(コリント第一・三ノ一七)。自然はこれらの罪に恐ろしい刑罰を与えてきたが、この刑罰は遅かれ早かれ、罪人のひとりびとりに課せられるものである。人類を恐ろしいまでに退化させ、病と悩みの重荷を世界に負わせているのは、ほかの何にもましてこれらの罪である。自らの罪を人には隠すことができるかもしれないが、しかし、苦痛、病氣、虚弱、死などによって、まちがいなくその結果を刈り取るのである。そして、この世のあなたには、永遠の刑罰をもって報いる最後の審判がある。「このようなことを行ふ者は、神の国をつぐことが」できず、サタンや悪天使たちと一緒に、「第二ノの死」である「火の池」を受けるであろう(ガラテヤ五ノ一二、黙示録二〇ノ一四)。

「遊女のくちびるは蜜をしたたらせ、その言葉は油よりもなめらかである。しかしついには、彼女はにがよもぎ

のように苦く、もろ刃のつるぎのように鋭くなる。」「あなたの道を彼女から遠く離し、その家の門に近づいてはならない。おそらくはあなたの誉を他人にわたし、あなたの年を無慈悲な者にわたすに至る。おそらくは他人があなたの資産によつて満たされ、あなたの労苦は他人の家に行く。そしてあなたの終りが来て、あなたの身と、からだが減びるとき、泣き悲し」む。「その家は死に下り、」「すべて彼女のもとへ行く者は、帰らない」「彼女の客は陰府の深みにおる」(箴言五ノ三、四、八 一一、二ノ一八、一九、九ノ一八)。

第 42 章

律法の反復

本章は、申命記四 六章、二八章に基づく。

主は、カナンを占領するために定められていた時が迫ったことを、モーセにお告げになった。老預言者モーセは、ヨルダン川と約束の地を見おろす高台に立って、深い興味をもって、民の嗣業をながめた。彼がカデシで犯した罪に対する宣告は、取り消すことができるのであろうか。彼は、熱心に嘆願した。「主なる神よ、あなたの大きな事と、あなたの強い手とを、たった今、しもべに示し始められました。天にも地にも、あなたのようなわざをなし、あなたのような力あるわざのできる神が、ほかにありませんか。どうぞ、わたしにヨルダンを渡って行かせ、その向こう側の良い地、あの良い山地、およびレバノンを見ることのできるようにしてください」

(申命記三ノ二三 二五)。

その答えはこうであった。「おまえはもはや足りている。この事については、重ねてわたしに言うてはならない。おまえはピスガの頂に登り、目をあげて西、北、南、東を望み見よ。おまえはこのヨルダンを渡ることができないからである」(同・三ノ二六、二七)。

つぶやくことなく、モーセは、神のみ旨に従った。そして今、彼の大きな心配はイスラエルのことであつた。

彼が思ったほどに彼らの幸福を願う人がいたであらうか。彼は、心を尽くして祈りをささげた。「すべての肉なるものの命の神、主よ、どうぞ、この会衆の上にひとりの人を立て、彼らの前に出入りし、彼らを導き出し、彼らを導き入れる者とし、主の会衆を牧者のない羊のようにしないでください」(民数記二七ノ一六、一七)。

主はご自分のしもべの祈りを聞いて答えられた。「神の霊のやどっているヌンの子ヨシユアを選び、あなたの手をその上におき、彼を祭司エレアザルと全会衆の前に立たせて、彼らの前で職に任じなさい。そして彼にあなたの權威を分け与え、イスラエルの人々の全会衆を彼に従わせなさい」(同・二七ノ一八、二〇)。ヨシユアは長くモーセに仕えてきた。そして、彼は知恵と能力と信仰の人であつたので、彼の後継者として選ばれた。

モーセの手が置かれるとともに、最も印象的な訓示が与えられて、ヨシユアは厳肅にイスラエルの指導者として聖別された。彼は、また、そのときすぐに統治に参加することを許された。ヨシユアに関する主のことばが、モーセを通して全会衆に与えられた。「彼は祭司エレアザルの前に立ち、エレアザルは彼のためにウリムをもって、主の前に判断を求めなければならない。ヨシユアとイスラエルの人々の全会衆とはエレアザルの言葉に従つていで、エレアザルの言葉に従つてはいらなければならない」(同・二七ノ二二)。

イスラエルの目に見える指導者としての任務を退く前に、モーセは、エジプトからの解放と荒野の旅路との歴史をくり返し、シナイで告げられた律法を概括して教えるように命じられた。このときの会衆の中には、律法が与えられたとき、その光景の恐るべき厳肅さを理解できる年ごろになつていた者はほとんどいなかった。やがてヨルダンを渡つて約束の地を占有しようとしているこのときに当たつて、神は、彼らの前にご自分の律法の要求

するとことを示し、繁栄の条件として彼らに従順を求められるのであった。

モーセは、最後の警告と勧告を与えようとして民の前に立った。その顔は聖なる光に輝いていた。髪は年を刻んで白かったが、姿勢は直立、顔色は壮健そのもの、目は澄んで曇りがなかった。それはおごそかなひとときであった。彼は深い感動をこめて、全能なる守護者の愛とあわれみを描き出した

「試みにあなたの前に過ぎ去った日について問え。神が地上に人を造られた日からこのかた、天のこの端から、かの端までに、かつてこのように大いなる事があつたであろうか。このようなことを聞いたことがあつたであろうか。火の中から語られる神の声をあなたが聞いたように、聞いてなお生きていた民がかつてあつたであろうか。

あるいはまた、あなたがたの神、主がエジプトにおいて、あなたがたの目の前に、あなたがたのためにもろもろの事をなされたように、試みと、しるしと、不思議と、戦いと、強い手と、伸ばした腕と、大いなる恐るべき事をもつて臨み、一つの国民を他の国民のうちから引き出して、自分の民とされた神が、かつてあつたであろうか。あなたにこの事を示したのは、主こそ神であつて、ほかに神のないことを知らせるためであつた」(申命記四ノ三二―三五)。

「主があなたがたを愛し、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの国民よりも数が多かったからではない。あなたがたはよろずの民のうち、もつとも数の少ないものであつた。ただ主があなたがたを愛し、またあなたがたの先祖に誓われた誓いを守ろうとして、主は強い手をもつてあなたがたを導き出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手から、あがない出されたのである。それゆえあなたは知らなければならない。あなたの神、主は神にましまし、真実の神にましまして、彼を愛し、その命令を守る者には、契約を守り、恵みを施して千代に及」

ぶことを(同・七ノ七 九)。

イスラエルの民は、自分たちの悩みをいつもモーセのせいにしてきたが、今は、モーセが自負と野心と利己心に支配されているという疑いも晴れ、信頼に満ちて彼のことを聞いた。モーセは、彼らのあやまちと、彼らの父祖の罪をありのままに述べた。彼らは長い荒野の流浪のために、たびたび忍耐しきれず反抗してきた。しかしカナンの占領が遅れたことの責めは主にはなかった。むしろ主は、すぐにも約束の地を彼らに占領させて、神の民を解放する彼の大きな力を万国民の前にあらわすことができないことを、彼らよりもっと深く悲しまれた。彼らは自負心と不信仰のゆえに、神を信頼せず、カナンにはいる備えができていなかった。彼らは、神を主とする民を少しもあらわそうとしなかった。つまり、彼らは神のご性格である純潔と善良と慈愛とを身につけていなかったのである。彼らの父祖たちが信仰をもって神の命令に従い、そのおきてに統治され、その定めに従って歩いていたならば、彼らはずっと以前にカナンに定着し、繁栄した、清い幸福な民族となっていたはずであった。良い地にはいるのが遅れたために、周囲の諸民族の前で、神の名誉は傷つけられ、神の栄光は汚されたのである。

神の律法の性格と価値を理解していたモーセは、ヘブル人に与えられたような知恵と正義とあわれみに満ちた律法を持っている国家はほかにないことを民に保証した。彼は言った。「わたしはわたしの神、主が命じられたとおり、定めと、おきてとを、あなたがたに教える。あなたがたがはいって、自分のものとする地において、そのように行つたためである。あなたがたは、これを守って行わなければならない。これは、もろもろの民にあなたがたの知恵、また知識を示す事である。彼らは、このもろもろの定めを聞いて、『この大いなる国民は、まことに知恵あり、知識ある民である』と言うであろう」(同・四ノ五、六)。

モーセは彼らの注意を、「あなたがホレブにおいて、あなたの神、主の前に立った日」に向けた。そして、彼はヘブルの民に訴えた。「いずれの大いなる国民に、このように近くおる神があるであろうか。また、いずれの大いなる国民に、きょう、わたしがあなたがたの前に立てるこのすべての律法のような正しい定めと、おきてとがあるであろうか」(同・四ノ一〇、七、八)。今日、イスラエルに対して言われたこの訴えがくり返されてよい。神が昔の民にお与えになった法律は、世界の文明諸国の法律よりは、はるかに知恵深く、優秀でより人道的であった。諸国の法律は、新しくされていない心のもつ弱点と、激しい感情を表示している。しかし、神のおきては天の刻印を帯びている。

「主はあなたがたを取って、鉄の炉すなわちエジプトから導き出し、自分の所有の民とされた」とモーセは言った(同・四ノ二〇)。彼らが間もなくはいるうとしていいる地、すなわち、神の律法に従うことを条件として、彼らのものになる土地が、次のように描写された。ところが、よい地の祝福を情熱をこめて描いたモーセが、神の民の罪のために、彼らの嗣業を受けることができなくなっているのを思い出して、イスラエルの人々は、こうした言葉を、どんなに感慨深く聞いたことであろう。

「あなたの神、主があなたを良い地に導き入れられる。」「あなたがたが行って取ろうとする地は、あなたがたが出てきたエジプトの地のようではない。あそこでは、青物畑できるように、あなたがたは種をまき、足でそれに水を注いだ。しかし、あなたがたが渡って行って取る地は、山と谷の多い地で、天から降る雨で潤っている。」「そこは谷にも山にもわき出る水の流れ、泉、および澍のある地、小麦、大麦、ぶどう、いちじく及びざくろのある地、油のオリブの木、および蜜のある地、あなたが食べる食物に欠けることなく、なんの乏しいこともない地で

ある。その地の石は鉄であつて、その山からは銅を掘り取ることができる。」「その地は、あなたの神、主が顧みられる所で、年の始めから年の終りまで、あなたの神、主の目が常にその上にある」(申命記八ノ七 九、一一ノ一〇 一二)。

「あなたの神、主は、あなたの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに向かつて、あなたに与えると誓われた地に、あなたをはいらせられる時、あなたが建てたものでない大きな美しい町々を得させ、あなたが満たしたものでないもろもろの良い物を満たした家を得させ、あなたが掘ったものでない掘り井戸を得させ、あなたが植えたものでないぶどう畑とオリブの畑とを得させられるであらう。あなたは食べて飽きるであらう。その時、あなたはみずから憤み、…主を忘れてはならない。」「あなたがたは憤み、あなたがたの神、主があなたがたと結ばれた契約を忘れて…はならない。あなたの神、主は焼きつくす火、ねたむ神である」。主の前に悪を行なうのであれば、そのとき、「あなたがたはヨルダンを渡って行って獲る地から、たちまち全滅するであらう」とモーセは言った(同・六ノ一〇 一二、四ノ二三、二四、二六)。

律法を公に復唱したのち、モーセは神がお与えになつたすべてのおきてと、定めと、さとしと、そして犠牲制度に関するすべての規定とを書き終えた。これをするした書物は、係りの者にあずけられ、あかしの箱の横に保管された。それでもなお、モーセは、民が神から離れはしないかと恐れた。彼はおごそかに、従順を条件として与えられる祝福と、みことばに従わない場合にくだるのろいとを彼らに示した。

「もしあなたが、あなたの神、主の声によく聞き従い、わたしが、きょう、命じるすべての戒めを守り行ふならば…あなたは町の内でも祝福され、畑でも祝福されるであらう。またあなたの身から生れるもの、地に産する

物、家畜の産むもの……は祝福されるであらう。またあなたのかごと、こねばちは祝福されるであらう。あなたは、はいるにも祝福され、出るにも祝福されるであらう。敵が起つてあなたを攻める時は、主はあなたにそれを撃ち敗らせられるであらう。……主は命じて祝福をあなたの倉と、あなたの手のすべてのわざにくだ……されるであらう」(同・二八ノ一 八)。

「しかし、あなたの神、主の声に聞き従わず、きよう、わたしが命じるすべての戒めと定めとを守り行わないならば、このもろもろののろいがあなたに臨(む)……であらう。」「あなたは主があなたを追いやられるもろもろの民のなかで驚きとなり、ことわざとなり、笑い草となるであらう。」「主は地のこのはてから、かのはてまでのもろもろの民のうちにあなたがたを散らされるであらう。その所で、あなたもあなたの先祖たちも知らなかった木や石で造ったほかの神々にあなたは仕えるであらう。その国々の民のうちであなたは安きを得ず、また足の裏を休める所も得られないであらう。主はその所で、あなたの心をおのかせ、目を衰えさせ、精神を打ちしおれさせられるであらう。あなたの命は細い糸にかかっているようになり、夜昼恐れおののいて、その命もおぼつかなく思うであらう。あなたが心にいだく恐れと、目に見るものによつて、朝には『ああ夕であればよいのに』と言ひ、夕には『ああ朝であればよいのに』と言うであらう」(同・二八ノ一五、三七、六四 六七)。

靈感によつて、モーセは各時代を見通し、国家としてのイスラエルの最後の破滅と、ローマ軍によるエルサレム滅亡の恐るべき光景を描いた。「主は遠い所から、地のはてから一つの民を、はげたかが飛びかけるように、あなたに攻めきたらせられるであらう。これはあなたがその言葉を知らない民、顔の恐ろしい民であつて、彼らは老人の身を顧みず、幼い者をあわれま」ない(同・二八ノ四九、五〇)。

ずっとあとでエルサレムが、ローマ皇帝ティトゥスに包囲されたときの国土の荒廃と国民の苦悩がなまなく描写された。「これは、……あなたの家畜が産むものや、地の産物を食って、……ついにあなたを全く滅ぼすであろう。その民は全国ですべての町を攻め囲み、ついにあなたが頼みとする、堅固な高い石がきをことごとく撃ちくず(す)……であろう。あなたは敵に囲まれ、激しく攻めなやまされて、ついにあなたの神、主が賜ったあなたの身から生れた者、むすこ、娘の肉を食べるに至るであろう。」「またあなたがたのうちのやさしい、柔和な女、すなわち柔和で、やさしく、足の裏を土に付けようともしない者でも、自分のふところの夫や、むすこ、娘にもかくして、……自分の産む子をひそかに食べるであろう。敵があなたの町々を囲み、激しく攻めなやまして、すべての物が欠乏するからである」(同・二八ノ四九 五三、五六、五七)。

モーセは次のような感銘深い言葉で訓示を閉じた。「わたしは、きょう、天と地を呼んであなたがたに対する証人とする。わたしは命と死および祝福とのろいをあなたの前に置いた。あなたは命を選ばなければならない。そうすればあなたとあなたの子孫は生きながらえることができるであろう。すなわちあなたの神、主を愛して、その声を聞き、主につき従わなければならない。そうすればあなたは命を得、かつ長く命を保つことができ、主が先祖アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた地に住むことができるであろう」(同・三〇ノ一九、二〇)。

これらの真理をすべての人の心にさらに深く刻むために、モーセはこれを韻文の形で表現した(同・三二章参照)。この歌は歴史的であるばかりでなく、預言的でもあった。それは、過去において、神がご自分の民にとられた驚くべき態度を回顧すると共に、未来の大いなるできごと、キリストが力と栄光のうちに二度めにおいになるときの忠実な者の最終的な勝利を予表していた。民はこの詩にうたわれた歴史を暗唱し、それを子や孫にまで

教えるように命じられた。それは礼拝に集まった会衆によってうたわれ、人々が日常の仕事にとりかかるときにくり返されることになった。物覚えのよい子供の頭にこの言葉を刻み込んで、決して忘れないようにすることが親の勤めであった。

イスラエル人は特別な意味で神の律法の守護者、保管者となるのであるから、とりわけその戒めの意義と服従の重要さが彼らに教えられなければならなかった。また、彼らを通してその子や孫にまで教えられなければならなかった。主は、ご自分の定めについてこう命じられた。「努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならない。…またあなたの家の入口の柱と、あなたの門とに書きしるさなければならない」(同・六ノ七 九)。

「われわれの神、主があなたがたに命じられたこのあかしと、定めと、おきてとは、なんのためですか」(同・六ノ二〇)と子供たちが問うときが来たなら、親は、歴史にあらわされた神の恵みあるとりあつかい、すなわち彼らが、主の律法に従うことができるように、彼らをどのように解放してくださったかを述べ、彼らにこう告げなければならなかった。「主はこのすべての定めを行えと、われわれに命じられた。これはわれわれの神、主を恐れて、われわれが、つねにさいわいであり、また今日のように、主がわれわれを守って命を保たせるためである。もしわれわれが、命じられたとおりに、このすべての命令をわれわれの神、主の前に守って行うならば、それはわれわれの義となるであろう」(同・六ノ二四、二五)。

第 43 章

モーセの死

本章は、申命記三一 三四章に基づく。

神が、神の民をあつかわれるときは、いつでも、そこに神の愛とあわれみとともに、神の厳正公平な正義が混じっているものである。それが、ヘブル人の歴史のなかで実証されている。神は、イスラエルに大きな祝福をお与えになっていた。彼らに対する神のいづくしみが、感動的に描かれている。「わしがその巢のひなを呼び起し、その子の上に舞いかけり、その羽をひろげて彼らをのせ、そのつばさの上にこれを負うように、主はただひとりで彼を導かれ」た(申命記三二ノ一一、一二)。だが、彼らの罪に対しては、なんとすみやかできびしい報復が臨んだことであろう。

神の無限の愛は、失われた人類をあがなうために、ひとり子を賜わったことに示されている。キリストは父のご品性を人にあらわすために地上においでになったのであり、その生涯は天来の柔和と同情に満ちていた。しかし、キリストご自身が、「天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされる」と仰せになる(マタイ五ノ一八)。みもとに来て、ゆるしと平安を得るようと忍耐強く愛情をもって罪人を

招く同じ声が、審判に当たっては、ご自分のいづくしみを退ける者に、「のろわれた者どもよ、わたしを離れ」よ、とお命じになる(同・二五ノ四一)。聖書全体を通して、神はやさしい父であるばかりでなく、公正な審判者としてあらわされている。神は喜んであわれみを示し、「悪と、とがと、罪とをゆるす」が、しかし、「罰すべき者をば決してゆるさ」ないおかたである(出エジプト記三四ノ七)。

諸国の偉大な統治者であられる神は、モーセがイスラエルの会衆を良い地に導き入れることはできないと言明しておられた。そして、モーセの熱心な願いもこの宣告を取り消すことはできなかった。彼は、自分が死ななければならぬことを知っていた。しかし、彼は、一瞬でもイスラエルの世話をやめなかった。彼は、会衆を約束の地に入れる準備を忠実に果たしてきた。モーセとヨシユアは、神の命に従って、幕屋に行った。すると、雲の柱がその入口の上に立った。ここで民は、おごそかにヨシユアの監督にゆだねられた。イスラエルの指導者としてのモーセの務めは終わった。それでもなお、彼は自分を忘れて民のことを思っていた。集まった群衆の中で、モーセは神の名により、後継者ヨシユアにこう語って励ました。「あなたはイスラエルの人々をわたしが彼らに誓った地に導き入れなければならない。それゆえ強くかつ勇ましくあれ。わたしはあなたと共にいるであろう」(申命記三一ノ二三)。それから、彼は、民の長老たちや役人たちに向きなおし、彼が神から受けて彼らに伝えた教えに忠実に従うようにという厳粛な訓示を与えた。

まもなく彼らの間から取り去られねばならない年老いたモーセを人々が見つめたとき、彼らは、新たに深い感謝にあふれ、彼の父親のようなやさしさ、賢明な勧告、疲れをいとわない労苦を思い起こした。彼らの罪が、神の公正な審判を招いたとき、彼らはモーセのとりなしによって救われたことが幾たびあったことであろう。彼ら

は心を責められて悲嘆にくれた。自分たちのかたくな思いがモーセに罪を犯させ、そのために彼が死ななければならなかったことを思い起こして、彼らの心は痛んだ。

モーセの命と彼の務めが、なおも続いて、彼から人々が譴責されることよりも、この愛する指導者を取り去られることのほうが、イスラエルにとっては、さらに大きな譴責であつた。彼らが、モーセの生涯を苦しいものにしたように、将来の指導者の生涯は苦しいものにすまいという自覚を、彼らに持たせることを神は望まれた。神は、祝福を与えて、民に語られた。そして、それが感謝して受け入れられないと、その祝福を取り去って、彼らが自分たちの罪をさとり、心から神に立ち帰るように導かれる。

その当日、モーセは次のような命を受けた。「あなたは……ネボ山に登り、わたしがイスラエルの人々に与えて獲させるカナンの地を見渡せ。あなたは登って行くその山で死に、あなたの民に連なるであらう」(同・三二ノ四九、五〇)。モーセはそれまで、たびたび天の招きに従って宿営を離れて神と交わったことがあつた。しかし彼は今、新しい神秘的な旅に出ようとしていた。彼は出かけて行って、自分の命を創造主の手にゆだねなければならなかつた。モーセはただひとりで死に、地上の友はだれも彼の最後を見とるのを許されないことを知っていた。前途には神秘と恐れが横たわり、それを思つて彼の心はひるんだ。何よりもつらいのは、彼が保護し、愛してきた民、長い間彼の関心と生命とが結びついていた民と別れなければならないことであつた。だが、彼は、神に信頼することを学んでいた。彼は、自分と自分の民とを疑うことなく神の愛とあわれみにゆだねた。

モーセが民の集まりの中に立つのはこれが最後であつた。神の霊がふたたび彼に宿り、彼は最も崇高で、感動的な言葉で各部族に祝福を宣言し、次のような言葉ですべてを祝福して終わった。

「エシユルンよ、神に並ぶ者はほかにない。

あなたを助けるために天に乗り、

威光をもつて空を通られる。

とこしえにいます神はあなたのすみかであり、

下には永遠の腕がある。

敵をあなたの前から追ひ払って、

『滅ぼせ』と言われた。

イスラエルは安らかに住み、

ヤコブの泉は穀物とぶどう酒の地に、

ひとりいるであろう。

また天は露をくだすであろう。

イスラエルよ、あなたはしあわせである。

だれがあなたのように、

主に救われた民があるであろうか。

主はあなたを助ける盾」。

(同・三三ノ二六 二九)

モーセは会衆をあとに、黙々とただひとり山を登った。彼は「ネボ山に登り、…ピスガの頂へ行った」(同・三四ノ一)。彼はその寂しい山頂に立ち、くもりのない目で前方に開けた光景をながめた。遠く西には地中海の青い水が見え、北にヘルモン山が空にそびえ、東にモアブの高原と、その先にはイスラエルの勝利の地バシヤンが広がり、南には遠く長く旅を続けてきた荒野が続いていた。

モーセは、ただひとりで神の民と運命を共にするために、エジプトの宮廷の栄誉と将来の王位を捨てたときから始まった、彼の人生の変転と辛苦をふり返った。長年にわたり荒野でエテロの羊を飼ったこと、燃えるしばの中に天使が現われたこと、また、彼がイスラエルを解放するように召されたことを思い起こした。彼はまた、選民のためにあらわされたみ力の奇跡と、放浪と反抗の年月を導かれた神の忍耐とあわれみに思いをはせた。神がこうして彼らに尽くしてこられたにもかかわらず、そして、また、彼が祈りと労苦を重ねてきたにもかかわらず、エジプトを出た大群集の成人のうち、忠実であつて約束の地にはいることのできたのはたつたふたりしかいなかった。自分の労苦の結果をふりかえったとき、彼の試練と犠牲の生涯はほとんど徒勞であつたように思われた。

だが、彼は重荷を負ってきたことを悔いなかった。彼は、自分の任務と仕事は、神ご自身がお定めになったものであることを知っていた。はじめイスラエルを奴隷の境遇から導き出す者となるように召されたとき、彼はその責任からしりごみしたが、ひとたび任務についた以上は、その重荷を投げ捨てなかった。彼を解放し、反抗的なイスラエルを滅ぼそうと主が言われたときにも、モーセは同意することができなかった。彼の試練は大きかったが、彼には特別な神の恵みのしるしが与えられていた。彼は荒野の旅のあいだに神の力と栄光の現われを目撃

し、その愛の交わりに豊かにあずかってきた。彼は、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に苦しむことを選んだのは賢明な決断であったと思った。

神の民の指導者としての自分の生涯をふりかえってみると、一つの誤った行為がその記録を傷つけていた。もしあの罪が消されるものなら、死も恐ろしくないと彼は思った。彼は、悔い改めと、約束のいけにえに対する信仰こそ、神のお求めになるすべてであるという確証が与えられた。そして、モーセは、ふたたび自分の罪を告白し、イエスの名によってゆるしを願った。

やがて約束の地のパノラマが彼の目に展開された。国土のすみずみが、彼の前にひろがった。それは遠くの不明瞭な光景ではなく、喜びにあふれた彼の目に、はっきりと美しく浮き出たのである。このながめは、その当時にあつたままのものが見えたのではなく、それがイスラエルの領土となり、神の祝福のもとに将来どうなるかという光景であつた。彼は第二のエデンを見ているようであつた。山々はレバノンの杉でおおわれ、丘はオリブの木にいろどられ、ぶどうのかおりを放っていた。広い緑の平野には花が咲いて豊かに実り、ここには熱帯のしゅろの木が繁り、むこうには小麦、大麦が波立ち、日の当たる谷間では流れがささやき、小鳥がうたっていた。美しい町とみごとな庭園が趣をそえ、湖水は、「海の富」(同・三三ノ一九)にあふれ、丘では羊が草をほみ、岩間にさえはちみつのしたたりがあつた。それは神の霊に動かされて、かつてモーセが描き出した国土であつた。「どうぞ主が…祝福されるように。上なる天の賜物と露、下に横たわる淵の賜物、日によって産する尊い賜物、…いにしえの山々の産する賜物、…地とそれに満ちる尊い賜物…が、…くだるように」(同・三三ノ一三一六)。

モーセは、選民がカナンに定着し、各部族がそれぞれの所有を与えられるのを見た。彼は、約束の地に定住した後の彼らの歴史を見た。彼らの背教と刑罰の長い悲しい物語が彼の目の前にひろがった。罪のために彼らが異邦人のあいだに散らされ、栄光がイスラエルを離れ、美しい都市が廃虚となり、民が異国に捕えられて行くのを見た。また、彼らが先祖の国に帰還し、ついにはローマの支配下に置かれるのを見た。

彼は時の流れをくだって、われらの救い主の初臨を見ることを許された。彼はベツレヘムの幼子イエスを見た。

天使の大群が、神には栄光、地には平和と賛美して喜びうたう声を聞いた。彼は東方の博士をイエスのもとに導いた星を天に見た。そして、「ヤコブから一つの星が出、イスラエルから一本のつえが起」る(民数記二四ノ一七)という預言のことばを思い出して、彼の心は大いなる光でみなぎりあふれた。彼は、キリストが、ナザレで質素な生活を送り、愛と同情といやしの奉仕をされたあとで、高慢で不信仰なユダヤ民族から拒否されるのを見た。彼は、彼らが神の律法を誇らかに高めながら、その律法をお与えになつたかたをさげすみ退けるのを驚いて聞き入った。彼は、オリブ山で愛する都に涙の別れを告げられるイエスを見た。神から大きな祝福を受けた民、すなわち、彼が労苦と祈りと犠牲をはらい、彼らのためなら自分の名がいのちの書から消されるのもいとわなかった民が最終的に退けられるのを見、「見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう」(マタイ二三ノ三八)という恐るべきことばを聞いたとき、モーセの心は苦悩にうめき、神のみ子の悲しみをしので悲嘆の涙があふれ落ちた。

彼は、ゲッセマネまで救い主につき従い、園の中の苦悶、裏切り、ちょう笑、むち打ち　そして十字架を見た。モーセは、ちょうど自分が荒野でへびをあげたように、信じる者が「すべて永遠の命を得るため」に、神の

子もあげられなければならないことを知った(ヨハネ三ノ一五)。ユダヤ民族が、彼らの贖い主、父祖たちの偉大な指導者であつたみ使いに対し、偽善と悪魔的な憎しみを示すのを見て、モーセの心は悲嘆と、義憤と、戦慄をおぼえた。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになつたのですか」というキリストの苦悩の叫びを彼は聞いた(マルコ一五ノ三四)。ヨセフの新しい墓に横たえられたキリストを彼は見た。どうすることもできない絶望の暗やみが世界を包んだように思われた。しかし、彼がふたたび目をあげると、キリストは勝利者として現われ、大ぜいのとりこを引き連れ、賛美の歌をうたう天使たちを従えて、昇天なさるのが見えた。光り輝く門が開かれ、天の万軍が凱旋の歌声高らかに彼らの司令官を迎えるのを、彼らは見た。そして、彼自身は、そこで救い主に従い、とこしえの門を開いて、キリストを迎える者になることが示された。その情景をながめるにつれて彼の顔は清い輝きを帯びてきた。神のみに比べるならば、彼の生涯の試練と犠牲はなんと小さく見えたことであらう。そして「永遠の重い栄光」と比べてなんと軽く見えたことであらう(コリント第二・四ノ一七)。彼は、ほんのわずかであるとはいえ、キリストの苦難にあずかる者とされたことを喜んだ。

モーセは、イエスの弟子たちが出て行つて、全世界に福音を伝えるのを見た。「肉による」イスラエルの民は、神から召されていた高い召しに答えることができず、不信仰のために世の光となり得なかつた。また、彼らは神のあわれみを軽んじ、選民としての祝福を失つてしまつた。しかし、神は、アブラハムの子孫をお捨てにならず、イスラエルを通して果たそうとなさつた輝かしいみ旨が実現されることを彼は知つた。キリストを通して、信仰の子となる者はみな、アブラハムの子孫に数えられるのであつた。彼らは契約の約束を継ぐ者であつた。彼らはアブラハムのように、神の律法と、み子の福音を守り、これを世に知らせる務めに召された。福音の光が、イエ

スの弟子たちを通して、「暗黒の中に住んでいる」(マタイ四ノ一六)人々に輝き、異邦の国から幾千の人々がそののぼる輝きに集まってくるのをモーセは見た。彼はこれを見て、イスラエルの数が増加し、繁栄するのを喜んだ。

次に、もう一つの光景が彼の前を通り過ぎた。彼は、先に、ユダヤ人が天父の律法をあがめると言いながら、キリストを拒絶するように導いたサタンのわざを示されていたが、今度はキリスト教界が、キリストを信じると言いながら、神の律法を拒絶するという同様な惑わしに陥るのを見た。彼は、祭司たちや長老たちが、「イエスを殺せ」、「十字架につけよ」と狂い叫ぶのを聞いていたが、今度は、キリスト教の教師と自称する者たちが「律法を廃止せよ」と叫ぶのを聞いた。安息日が足の下に踏みつけられ、それに代わってにせの制度が確立されるのを彼は見た。ふたたびモーセは驚愕と戦慄に満たされた。キリストを信じる者が、聖なる山で主ご自身がお告げになった律法を、どうして拒むことができるのであろう。神を恐れる者が、天と地の統治の基礎である律法をどうして退けることができるのであろう。しかしモーセは、神の律法を尊びあがめる忠実な者たちが少数ながらもいることを知って喜んだ。彼は、地上の諸勢力が神の律法を守る者たちを滅ぼそうとする最後の大きい戦いを見た。彼はさらに、その先に目を向けて、神が立ち上がり、罪を犯した地の住民を罰するのを望み見ると共に、み名を恐れる者たちは、その怒りの日におおいかくされるのを知った。神が、その「聖なるすみか」から語り、天と地を震わせて、律法を守った者たちと平和の契約を結ばれるのを彼は聞いた。栄光のうちにキリストが再臨し死んだ義人が不朽のいのちによりみがえり、生きている聖徒は死を見ないで天に移され、喜びの歌をうたいながら共に神の都にのぼるのを彼は見た。

さらに、もう一つの光景が彼の眼前に展開される。それは、のろいのなくなった地、今しがた彼の前にひろげられた美しい約束の地よりなお美しくなった地である。そこには、罪はなく、死も侵入することができない。救われた諸民族は、そこに永遠の故郷を見いだす。言葉に言い尽くせない喜びをもって、モーセはこの情景をなめる。それは、彼のどんな輝かしい想像も及ばぬ栄光に満ちた解放の実現である。地上の放浪は永久に終わり、神のイスラエルは、ついに良い地にはいったのであった。

ふたたび幻は消え、彼の目は遠くにひろがるカナンの地を見た。そして疲れ果てた戦士のように、彼は横たわって休んだ。「こうして主のしもべモーセは主の言葉のとおりモアブの地で死んだ。主は彼をベテペオルに對するモアブの地の谷に葬られたが、今日までその墓を知る人はない」（申命記三四ノ五、六）。モーセの在世中、彼の勧告に聞き従おうとしなかった多くの者は、もし彼の埋葬の場所を知ったならば、彼の遺体を偶像礼拝の對象とする危険があつた。このために、それは人々から隠されたのであつた。しかし神の使いたちが、この忠実なしもべのなきがらを埋葬し、さびしい墓を見守っていた。

「イスラエルには、このちモーセのような預言者は起らなかった。モーセは主が顔を合わせて知られた者であつた。主は…彼を…つかわして、もろもろのしるしと不思議を行わせられた。モーセはイスラエルのすべての人の前で大いなる力をあらわし、大いなる恐るべき事をおこなつた」（申命記三四ノ一〇 一二）。

もし、モーセの生涯が、カデシの岩から水を出す誉れを神に帰さなかつたあの一つの罪で傷ついていなくなつたならば、彼は約束の地にはいり、死を見ずに天に移されたことであろう。けれども、彼は長く墓の中にとどまらなかつた。モーセを埋葬したみ使いたちを従えて、キリストご自身が天からおりてこられ、眠りについた聖徒を

呼び起こされるのであった。サタンは、モーセに罪を犯させ、彼を死の支配下に置くことができたのを大いに喜んでいた。サタンは、「あなたは、ちりだから、ちりに帰る」という神の宣告どおり、死者は自分のものだと言張した（創世記三ノ一九）。墓の力は、かつて、打ち破られたことがなく、墓の中に入れられた者はみな自分のとりこであつて、その暗い牢獄から解放することができない、と彼は主張した。

このときはじめて、キリストは、死者に命を与えようとしておられた。いのちの君と輝く天使たちが墓に近づくと、サタンは自分の主権が脅かされるのを感じた。彼は悪天使たちと共に、自分のものと主張する領域を犯されまいとして抵抗した。サタンは、神のしもべが彼の牢獄に入れられたことを誇った。モーセでさえ、神の律法を守ることができず、主に帰すべき栄光を自分に帰し、サタンが天から追放されるに至つたのと全く同じ罪を犯して、そのために自分の支配下に置かれたのであるとサタンは言った。この反逆者の首領は、彼がかつて神の統治に対して投げた最初の非難をくり返し、彼に対する神の不正をつぶやいた。

キリストは、サタンと論争しようとはされなかつた。キリストは、惑わしによつて多数の天の住民を滅ぼした残忍な彼のしうちを非難することがおできであつた。また、アダムを罪に誘い、人類に死をもたらしたエデンの欺瞞を指摘することもおできになつた。あるいは、イスラエルをいざない、不平と反抗にかり立てて、モーセの寛容と忍耐の緒を切らせ、無防備の一瞬について罪を犯させ、死の力のもとに陥れたことをサタンに思い起こさせることもおできになつた。だが、キリストはすべてを天父にゆだね、「主がおまえを戒めて下さるように」と仰せになつた（ユダ九）。キリストはサタンと論じられなかつたが、そのときその場で、この墮落した敵の力を打ち破り、死者を生き返らせるみわざをお始めになつた。ここに、サタンの言い争うことのできない神のみ子の権

威が現わされた。永遠に復活が確かなものとされた。サタンは自分のとりこを奪われ、死んだ義人はふたたび生きる事となった。

罪の結果、モーセはサタンの権力のもとに置かれていた。彼自身の功績によつては、彼は当然死の捕虜であった。だが彼は、贖い主のみ名の権威によつて、永遠の命によみがえった。モーセは、栄光のからだで墓から現われ出て、救い主と共に神の都にのぼった。

キリストの犠牲によつて実証されるまで、モーセをあつかわれた神の方法ほどに、著しく神の正義と愛をあらわしたものはほかになかった。神は、忘れてならない教訓、すなわち、神は厳密な従順をお求めになるところと、また、人は創造主に帰すべき栄光を自分に帰してはならないということを教えるために、モーセをカナンから締め出された。神は、イスラエルの嗣業にあずからせてほしいというモーセの祈りを、受け入れることがおできにならなかった。しかし彼は、ご自分のしもべを忘れたり、捨てたりならなかった。天の神は、モーセが耐えてきた苦悩を理解し、争闘と試練の長い年月を忠実に仕えてきた一つ一つの行為をご存じであった。神は、ピスガの頂上で、地上のカナンとは比較にならないほど輝かしい嗣業にモーセをお召しになったのであった。

モーセは、天に移されたエリヤと共に変貌の山に現われた。彼らは、天父からみ子に光と栄光を伝えるためにかわされた。こうして幾世紀も前にささげられたモーセの祈りがついに果たされた。彼は、神の民の嗣業の中にある「良い山地」に立ち、イスラエルの約束がことごとく集中しているおかたについてあかしをした(申命記三ノ二五)。天の神に尊ばれたモーセが、歴史において、人間の目の前に現われたのはこれが最後である。

モーセはキリストの型であった。彼は、自らイスラエルに告げていた。「あなたの神、主はあなたのうちから、

あなたの同胞のうちから、わたしのようなひとりの預言者をあなたのために起されるであろう。あなたがたは彼に聞き従わなければならない」(同・一八ノ一五)。イスラエルの群集を地上のカナンに導く準備をさせるために、神は、モーセを苦難と困窮の学校で訓練するのをよしとされた。天のカナンに向かう神のイスラエルには、天来の指導者としての務めを果たすのに、人間の教えを必要としない指揮官がおられる。だが、その彼も苦難を通して全うされ、こうして、「主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである」(ヘブル二ノ一八)。われらの贖い主は、一つとして人間的弱さや欠陥を表わされなかったが、われわれが約束の地にはいることができるために、お死になされた。

「さて、モーセは、後に語らるべき事がらについてあかしをするために、仕える者として、神の家の全体に対して忠実であったが、キリストは御子として、神の家を治めるのに忠実であられたのである。もしわたしたちが、望みの確信と誇とを最後までしっかりと持ち続けるなら、わたしたちは神の家なのである」(同・三ノ五、六)。

第 44 章

ヨルダン川を渡って

本章は、ヨシユア記一 四章五ノ一 一二に基づく。

イスラエル人は、モーセの死を深く悲しみ、三〇日の間彼を記念して特別の式を行なった。彼らは、彼が取り去られるまでは、彼の賢明な勧告、父親のような柔和、不動の信仰などを十分に理解することはできなかった。彼らは、改めて深い感謝をあらわして、彼の生前の尊い教訓を思い起こした。

モーセは死んだ。しかし、彼の感化力も共に死んだのではなかった。それは、生き続けて民の心に再現されるのであった。あの聖なる無私の生活は、長く人の心におぼえられ、生前彼の言葉をないがしろにした人々の生活までも形造る無言の説得力を持っていた。太陽が沈んだ後も長く落日の輝きが山頂を照らすように、純粋な人、聖潔な人、善良な人の行為はその人が去った後も長く世に光を投げ続ける。彼らの行為、彼らの言葉、彼らの模範は永久に生きる。「正しい人は…とこしえに覚えられる」(詩篇一一二ノ六)。

彼らは、大きな損失をこうむったことを悲しんだが、そのまま放任されてはいないことを知っていた。昼は雲の柱が、夜は火の柱が幕屋の上に宿り、彼らが神の戒めに従って歩くなら、神は依然として彼らの導き手であり

助け手であることを確証していた。

今や、ヨシユアがイスラエルの指導者として認められた。彼は、これまで、主として軍人として知られてきており、その才能と人からは、民の歴史のこの段階において、特に価値の高いものであった。彼は、勇気と決断力にすぐれ、忍耐強いと共に敏活、清廉で、自分にゆだねられた者たちを自分を忘れて世話し、とりわけ神に対する生きた信仰に動かされていた。これが、約束の地にはいるに際して、イスラエルの軍勢を指揮するように神から選ばれた人の特質であった。荒野を旅した間、彼はモーセに仕える首相として行動し、その静かで二心のない誠実と、他の人々が動揺したときにも堅く立ち、危険のさなかにあつて真理を維持しようとした信念の強さによって、神のみ声によってその地位に召される以前でさえ、すでにモーセの後継者としてふさわしいことが明らかであった。

ヨシユアは、彼の前にある仕事のことを考えたときに、大きな不安と自己に対する不信任をいだいたのであるが、神からの保証が与えられて、恐怖が取り除かれた。「わたしは、モーセと共にいたように、あなたと共にあるであらう。わたしはあなたを見放すことも、見捨てることもしない。…あなたはこの民に、わたしが彼らに与えると、その先祖たちに誓った地を獲させなければならない。」「あなたがたが、足の裏で踏む所はみな、わたしがモーセに約束したように、あなたがたに与えるであらう」(ヨシユア記一ノ五、六、三)。はるか遠くのレバノンの高地まで、また、地中海の岸べまで、そして、東はユフラテ川の岸べまで、そのすべてが彼らのものとなるのであった。

この約束に命令が加えられた。「ただ強く、また雄々しくあつて、わたしのしもべモーセがあなたに命じた律

法をことごとく守って……行わなければならない。」主はまた言われた、「この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜もそれを思い、「これを離れて右にも左にも曲ってはならない」「そうするならば、あなたの道は栄え、あなたは勝利を得るであろう」(同・一ノ七、八)。

イスラエル人は、まだ、ヨルダン川の東がわに宿営していたが、このヨルダン川がカナン占領の最初の障害であった。神はまず、ヨシユアに、「あなたと、このすべての民とは、共に立って、このヨルダンを渡り、わたしが……与える地に行きなさい」と命じられた(同・一ノ二)。どのようにして渡るのかは、何も指示が与えられなかったが、ヨシユアは、神が何をお命じになろうとも、神の民がそれを果たすことができる道を開いてくださることを知っていた。この勇敢な指導者は、信仰をもって、直ちに前進の手配を始めた。

川の数マイル向こう側で、イスラエル人が宿営している場所のちょうど反対のところに、強大な要塞都市エリコがあった。この都市は、事実上全土を攻め取るかぎであり、イスラエルの勝利の前に立ちちはだかる、侮りがたい障害であった。そこで、ヨシユアは、ふたりの若者をつかわして町を偵察させ、その住民の数や、資源、また要塞の強固さなどを確かめさせた。恐怖と疑惑をいだいた町の住民は、常に警戒体制をとっていたので、ふたりの使者は大きな危険にさらされた。しかし、エリコの女ラハブが、自分の命の危険もかえりみず、彼らをかきまってくれた。彼女の心づくしに報いて、ふたりは町を攻め取るときに彼女を保護することを約束した。

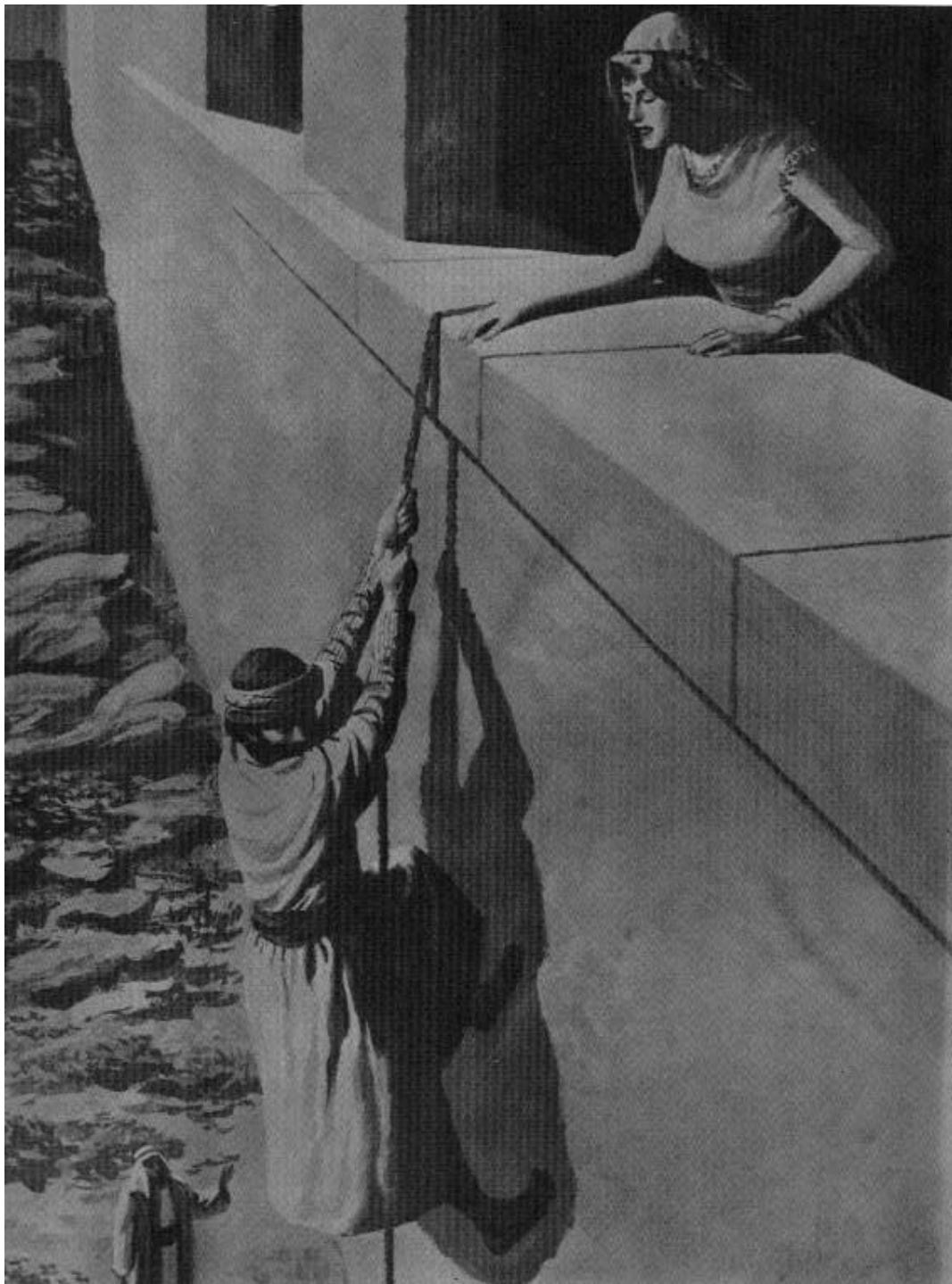
ふたりは偵察から無事に帰り、「ほんとうに主はこの国をことごとくわれわれの手にお与えになりました。この国の住民はみなわれわれの前に震えおののいています」と報告した(同・二ノ二四)。エリコでふたりは、こう言われてきた。「あなたがたがエジプトから出てこられた時、主があなたがたの前で紅海の水を干されたこと、

およびあなたがたが、ヨルダンの向こう側にいたアモリびとのふたりの王シホンとオグにされたこと、すなわちふたりを、全滅されたことを、わたしたちは聞いたからです。わたしたちはそれを聞くと、心は消え、あなたがたのゆえに人々は全く勇気を失ってしまいました。あなたがたの神、主は上の天にも、下の地にも、神でいらせられるからです」(同・二ノ一〇、一一)。

今や前進の準備をととのえるようにという命令がくだされた。民は三日分の糧食を用意し、軍勢は戦闘の用意をしなければならなかった。すべての者がヨシユアの計画を心から受け入れ、信頼と支援を誓った。「あなたがたに命じられたことをみな行います。あなたがたがつかわれる所へは、どこへでも行きます。われわれはすべてのことをモーセに聞き従ったように、あなたに聞き従います。ただ、どうぞ、あなたの神、主がモーセと共におられたように、あなたと共におられますように」(同・一ノ一六、一七)。

シッテムのアカシヤの森の宿営をあとに、全軍は、ヨルダン川の岸にくだった。しかし、神の助けがなければとうてい渡る望みのないことが、だれにもわかっていた。その季節、すなわち春には山々の雪が溶けてヨルダンの水位を上げ、水は堤にまであふれて、いつもの浅瀬を歩いて渡することは不可能であった。神は、イスラエルのヨルダン川を渡ることが奇跡的に行なわれることを意図なさった。ヨシユアは神の指令に従って、人々に自分たちを清めるように命じた。彼らは罪を捨て、すべての外面の汚れを払わなければならなかった。「あす、主があなたをたのうちに不思議を行われるからである」と彼は言った(同・三ノ五)。「契約の箱」が全軍の前を行かなければならなかった。祭司たちのかついだこの主の臨在のしるしが、宿営の中央のその場所を離れて川のほうに進むのを見たなら、彼らも「その所を出立して、そのあとに従わなければならな」かった(同・三ノ三)。川を渡

第 44 章 ヨルダン川を渡って



エリコにつかわされたふたりの斥候は、町の城壁に住んでいた女ラハブに保護された。彼らは綱を伝わって窓から逃げる事ができた。

る方法を前もって細かに述べたあとで、ヨシユアは言った。「生ける神があなたがたのうちにおいになり、あなたがたの前から、カナンびと……を、必ず追ひ払われることを、次のことによつて、あなたがたは知るであらう。ごらんなさい。全地の主の契約の箱は、あなたがたに先立つてヨルダンを渡ろうとしている」(同・三ノ一〇、一一)。

定められたときに前進が始まり、祭司の肩にかつがれた箱が先陣の前を行つた。民は退いて、箱との間に半マイル以上の距離を置くように命じられていた。祭司たちがヨルダンの岸をくだつて行くのを、皆は非常な興味をもつて見つめた。彼らは、祭司たちが聖なる箱をかついで一步一步、波立ちうねる流れのほうに進み、やがて、足が水につかるほどになるのを見た。そのとき突然、上の流れがうず高く立ち、下の水が流れ去り、川底が現われた。

神の命令を受けて、祭司たちが、川の中央にまで進んで立ちどまると、全軍が川に下つて行つて向こう岸に渡つた。こうしてすべてのイスラエル人の心に、このヨルダン川の流れをとめたのは、四十年前、先祖たちのために紅海を開いたのと同じ力であることが、強く刻みつけられた。民がみな渡つてしまうと、箱自身も西岸にかつぎ上げられた。それが安全な場所に達し、「祭司たちの足の裏がかわいた地にあがると同時に」、とどめられていた水は、元どおりに動き出し、川をどつとばかりに流れ下つた(同・四ノ一八)。

後々の世代のために、この大いなる奇跡の証拠が残されることになった。箱をかついだ祭司たちが、なおヨルダン川のまん中にいる間に、前もつて各部族から一名ずつ選ばれていた十二人が、祭司の立っている川底の石を一つずつ取つて西の岸に運んだ。これらの石は、川向こうの最初の宿営地に記念碑として立てられるのであった。

「地のすべての民に、主の手に力のあることを知らせ、あなたがたの神、主をつねに恐れさせるため」とヨシユアが言ったように、人々は、神が行なわれた解放の物語を、子や孫に語り伝えるように命じられた(同・四ノ二四)。

この奇跡のもつ影響力は、ヘブル人に対してもその敵に対しても重大なものであった。それは神が絶えず臨在して守ってくださることをイスラエルに保証し、神がモーセを通して働かれたように、ヨシユアを通して彼らのために働いてくださることを明らかにした。こうした保証は、その地の征服、すなわち、四十年前に父祖たちの信仰を動揺させた驚くべき任務に着手した彼らの心を強めるのに必要であった。川を渡る前に、主は、ヨシユアに、「きょうからわたしはすべてのイスラエルの前にあなたを尊い者とするであらう。こうしてわたしがモーセと共にいたように、あなたとともにいることを彼らに知らせるであらう」と言っておられたが、この奇跡が約束の成就となった。「この日、主はイスラエルのすべての人の前にヨシユアを尊い者とされたので、彼らはみなモーセを敬ったように、ヨシユアを一生のあいだ敬った」(同・三ノ七、四ノ一四)。

こうして、イスラエルのために現わされた神の力は、彼らに対する隣接諸民族の恐怖心を増大し、彼らをたやすく、しかも、完全に征服するためのものでもあった。神が、イスラエルの子らの前で、ヨルダンの水をとめたという知らせが、アモリ人の王やカナン人の王の耳に達したとき、彼らはふるえおののいた。ヘブル人はすでにミデアンの五人の王と、アモリ人の力ある王シホンと、バシャンのオグを殺していた上、今度は増水したヨルダンの急流を渡ってきたことが、すべての隣接諸民族を恐怖に陥れた。カナン人にとっても、全イスラエルにとっても、またヨシユア自身にとっても、天と地の王であられる生ける神が、その民のうちにおられて、見放すこと

も、見捨てることもしないことが、まちがいなく明らかであった。

ヘブル人は、ヨルダン川からさほど遠くないところに、カナンにおける最初の宿営を張った。ここでヨシユアは、「イスラエルの人々に割礼を行った。」「イスラエルの人々はギルガルに宿営し……過越の祭を行った」(同・五ノ三、一〇)。カデシにおける反逆のとき以来、割礼の儀式が中止されていたことは、割礼が象徴している神と彼らとの契約が破られたことを絶えずイスラエルに証言してきた。そして、エジプトからの解放の記念である過越の祭りが中断していたのは、彼らが奴隷であった国へ帰りたいという願いを主がきらわれたことを現わすものであった。しかし、今、拒絶の年月は終わりを告げた。もうひとたび、神はイスラエルをご自分の民として認め、契約のしるしが回復された。割礼の儀式は、荒野で生まれた民のすべてに行なわれた。「きょう、わたしはエジプトのはずかしめを、あなたがたからころがし去った」と主はヨシユアに言われた(同・五ノ九)。そして、このために、彼らの宿営の場所は、ギルガル、すなわち「ころがし去」と呼ばれた。

異邦の諸国は、エジプトを出たヘブル人が、彼らが期待していたほど早くカナンを占領しなかったために、主と主の民を軽べつしていた。イスラエルが長い間、荒野をさすらったために、敵が勝利を得てしまった。そして彼らは、ヘブル人の神は、民を約束の地に導き入れることができないのだと言ってちよう笑っていた。しかし今、主は、力と恵みを著しくあらわして、民の前にヨルダン川を開かれたので、敵はもはや彼らをさげすむことができなくなった。

「その月の十四日の夕暮」、エリコの平野で、過越の祭りが行なわれた。「そして過越の祭の翌日、その地の穀物、すなわち種入れぬパンおよびいり麦を、その日に食べたが、その地の穀物を食べた翌日から、マナの降ることは

第 44 章 ヨルダン川を渡って



祭司たちは、奇跡的にかわいた川底のまん中まで、神の命令により神の箱をかついで行った。そして、イスラエル全軍が行進し終わるまでそこに立っていた。

やみ、イスラエルの人々は、もはやマナを獲なかった。その年はカナンの地の産物を食べた」（同・五ノ一〇
一二）。長い年月におよぶ荒野のさすらいは終わった。ついにイスラエルの足は、約束の地を踏んだのであった。

エリコの陥落

本章は、ヨシュア記五ノ一三 一五。六章七章に基づく。

ヘブル人は、カナンに入国はしたものの、国土を征服していなかった。そして、国土占領の戦いは、人間の目に、長く困難なものに思われた。そこには、強大な種族が住んでいて、その領土が侵されるのを防ごうとしていた。種々の種族は、共通の危険を感じて団結した。彼らの馬と鉄の戦車、彼らの国土に関する知識、そして、彼らの軍事的訓練などは、彼らにとって大いに有利であった。その上、国土は要塞に守られ、「その町々は大きく、石がきは天に達していた（申命記九ノ一）。このさし迫った戦いにおいて、イスラエル人が勝つためには、彼らの力以上の力の確証によるほかにはなかった。

国の強大な要塞の一つ、すなわち、巨大で富裕なエリコの町が、ギルガルの彼らの宿営から、少し離れて彼らの眼前にあった。熱帯のさまざまな産物を豊かに産出する肥沃な平野の縁に、華美と悪徳の住居であるほこらかな宮殿や神殿があった。そして、この高慢な町が、巨大な城壁に守られて、イスラエルの神に挑戦した。エリコは特に月の女神アシタロテにささげられた偶像礼拝の本拠の一つであった。カナン人の宗教において、最も卑し

く、墮落的なものがごとくここに集まっていた。ベテペオルで犯した自分たちの罪の恐るべき結果が、まだ心になまなましいイスラエルの民は、嫌悪と戦慄をもってこの異教の町を見ることができたのであった。

ヨシユアには、エリコを降伏させることがカナン征服の第一歩と思われた。だが、彼はまず神の指導の保証を求め、それが与えられた。彼が宿営を退いて瞑想し、イスラエルの神に、民に先立って進まれるように祈っていると、「抜き身のつるぎを手に」した背たけの高い威風堂々たる武装戦士の姿を彼は見た。「あなたはわれわれを助けるのですか。それともわれわれの敵を助けるのですか」とヨシユアが問うたところ、「わたしは主の軍勢の将として今きたのだ」という答えが与えられた。ホレブにおけるモーセと同じく、「あなたの足のくつを脱ぎなさい。あなたが立っている所は聖なる所である」と命じられた(ヨシユア記五ノ一三―一五)。このことは、この不思議なおかたがどなたであるかを示していた。イスラエルの指導者の前に立ったのは、高められたおかた、キリストであった。ヨシユアは恐れおののいて、ひれ伏して拝した。そのとき、「わたしはエリコと、その王および大勇士を、あなたの手にわたしている」という保証のことは与えられた(同・六ノ二)。そして、彼は町を占領するための指示を受けた。

ヨシユアは、神の命令に従ってイスラエルの軍勢を整列させた。攻撃はいっさいしてはならなかった。彼らはただ、神の箱をかつぎ、ラツパを鳴らして、町の周囲を巡るのであった。選ばれた一団の戦士たちが先頭を行つたが、この場合、勝利は、自分たちの技量と武勇によって得るのではなく、神から与えられた指示に従うことによって得るのであった。ラツパを吹き鳴らす七人の祭司がそれに従った。その次に、栄光に輝く神の箱を、聖識にふさわしい衣服を身につけた祭司がかついで歩いた。そして、イスラエルの軍勢の各部族がそれぞれの旗をひ

るがえして従った。これが滅びる運命にあった町を取り囲んだ行軍であった。この強力な軍勢の足音と、おごりかなラツパの音が山々にこだまし、エリコの町になり響いたほかは、何の物音も聞こえなかった。一周は終わる軍勢は静かに天幕に帰り、箱は幕屋の所定の場所にもどされた。

エリコの見張りは驚いて、すべての行動に注目して、当局に報告した。彼らは、この行動のすべての意味はわからなかったが、聖なる箱と祭司たちとともに、この強力な軍勢が、一日に一度、町のまわりを行軍するのを見て、その情景の不思議さに、祭司も民も恐怖をいだいた。もう一度、彼らは強固な要塞を点検し、どんな激しい攻撃にも耐えられることを確かめた。こうした奇妙な示威行進からは、なんの損害を受けることかといって笑う者も多かった。毎日、町を一周する行進を見て恐れる者もいた。紅海が、かつてこの民の前で分かれたこと、また、彼らのためにヨルダン川に道ができたばかりであることを、彼らは思い起こした。彼らのために神がさらにどんな不思議なことを行なわれるかわからなかった。

六日の間、イスラエルの軍勢は町のまわりを巡った。七日めになり、夜が明けそめると、ヨシユアは主の軍勢を集めた。そして彼らは、エリコのまわりを七回行進して、ラツパを力強く吹き鳴らし、大声で叫ぶように指令された。神が彼らにこの町をお与えになったからである。

大軍は、滅びに定められた城壁のまわりをおごそかに行進した。規律正しい足並みと、時おり早朝の静けさを破るラツパの音以外は、すべてが静寂であった。堅い石でできた巨大な城壁は、人間の包囲をもしめないように思われた。一周が終わり、二周めが続く、三周、四周、五周、六周と進むにつれて、城壁の見張りの恐れは増していった。いったい、この不思議な行進はなんのためなのだろう。どんな大事件がこれから起ころうとして

いるのであろう。それには長い時間がかからなかった。第七周が終わると、長い行進が休止した。ひととき沈黙していたラッパが一度にどつと吹き鳴らされ、大地は震えた。堅固な石の城壁と巨大な塔と要塞は基礎からゆれ動いて、大音響を立てて地にくずれ落ちた。エリコの住民は、恐怖のために力を失い、イスラエルの軍勢は侵入して町を攻め取った。

イスラエル人は、自分たちの力で勝利を得たのではなく、この征服はまったく主のものであった。そして、この地の初なりとして、エリコとその中のすべてのものは神への供えものとしてささげなければならなかった。カナン征服にあたって、彼らは自分たちで戦うのではなく、ただ神のみ旨を果たす器として戦うにすぎないこと、また、財産や自己賞揚のためではなく、彼らの王であられる主の栄光を求めるべきことが、イスラエルに深く印象づけられなければならなかった。占領に先だって次のような命令が与えられていた。「この町と、そのすべてのものは、主への奉納物として滅ぼされなければならない。」「また、あなたがたは、奉納物に手を触れてはならない。…その奉納物をみずから取って、イスラエルの宿営を、滅ぼさるべきものとし、それを悩ますことのないためである」(同・六ノ一七、一八)。

町の住民と、その中の命あるものは、「男も、女も、若い者も、老いた者も、また牛、羊、ろば」も、みなつるぎにかけられた(同・六ノ二二)。斥候の約束どおりに、忠実なラハブとその家の者だけが助けられた。町は焼き払われ、宮廷と寺院、豪華な住居とそのぜいたくな設備、きらびやかな織物と高価な衣服は焼かれた。火で焼くことのできないもの、すなわち「銀と金、青銅と鉄の器」は、幕屋の奉仕のためにささげなければならなかった(同・六ノ二四)。町のあった場所はのろわれた場所となり、エリコは、要塞として再建されてはならなかった。

第 45 章 エリコの陥落



イスラエル軍勢のラッパとときの声と共に、エリコの巨大な城壁は要塞もろとも地にくずれ落ちた。

神の力によって崩壊された城壁を復興しようとする者があれば、その人の上に刑罰が下るのであった。全イスラエルの前で厳粛な宣言が下された。「おおよそ立って、このエリコの町を再建する人は、主の前にのろわれるであろう。その礎をすえる人は長子を失い、その門を建てる人は末の子を失うであろう」(同・六ノ二六)。

エリコの住民の完全な滅亡は、以前カナンの住民についてモーセを通して与えられていた、「あなたは彼らを全く滅ぼさなければならない。」「これらの民の町々では、息のある者をひとりも生かしておいてはならない」という命令の実現であった(申命記七ノ二、一〇ノ一六)。この命令は、聖書の他の箇所にも命じられている愛とあわれみの精神に反していると思う人が多いが、実際、それは、無限の知恵と恵みに満ちた命令であった。神はカナンにイスラエルを定住させ、地上における神の王国の表示となるべき国家と政府を彼らのうちに展開しようとしておられた。彼らは、ただ、真の宗教を継ぐだけでなく、その原則を全世界に広めなければならなかった。カナンは最も邪悪で墮落的な異教に陥っていた。であるから、神の恵み深いみ旨を妨害するにきまっているものをその国土から一掃する必要があった。

カナンの住民には、悔い改めの機会が十分に与えられていた。四十年前、紅海が開かれたことと、エジプトに刑罰がくだったことが、イスラエルの神の最高の能力を証明したのである。そして、今度は、ミデアンの王ギレアドと、バシヤンの王の敗北によって、主がすべての神々の上におられることがさらに明らかに示された。神のご品性の神聖さと不潔をきらわれるお気持ちには、バアルペオルのいまわしい儀式に加わったイスラエル人にくだった刑罰にあらわされた。こうしたできごとは、みな、エリコの住民に知られていた。そして、多くの者は、服従することは拒んだものの、ラハブと同じく、イスラエルの神、主は、「上の天にも、下の地にも、神でいらせ

られる」と悟った(ヨシュア記二ノ一)。カナン人の生活は、洪水前の人々と同様に、ただ天をのしり、地を汚すだけであつた。神に反逆し、人間に敵するこうした人々が、すみやかに処罰されることを、愛と義は共に要求していた。

四十年前、不信仰な斥候たちを恐怖に陥れた高慢な町エリコの城壁を、天の軍勢は、なんとやすやすと打ち破つたことである。「わたしはエリコ……を、あなたの手にわたしている」とイスラエルの全能者は言われた(同・六ノ二)。このみことばに対して、人間の力は無力である。

「信仰によつて、エリコの城壁は、……くずれおちた」(ヘブル一ノ三〇)。主の軍勢の将は、ヨシュアにだけお語りになつた。彼は、全会衆には、ご自分をあらわされなかつた。それで、ヨシュアの言葉を信じるか疑うか、また、彼が、主の名によつて語つた言葉に従うか、それとも彼の権威を拒否するかは人々にかかつていた。神のみ子の指揮のもとに、彼らに付き添つていた天使の軍勢を、彼らは見ることができなかった。「これは、なんとこの無意味な運動である。雄羊の角のラッパを吹いて、毎日町の城壁の周囲を回することは、なんとおかしなことである。このようなことは、そびえ立つ城塞になんの効果もあり得ない」と彼らは考えることができた。しかし、城壁がついにくずれ落ちるに先だつて、このように長い間、儀式を継続する計画そのものが、イスラエルの人々の信仰を助長する機会となつた。それは、彼らの力が、人間の知恵や能力にあるのではなく、ただ彼らの救いの神だけにあることを、人々の心に印象づけるためであつた。こうして、彼らは、天来の指導者に全く信頼するようになっていくのであつた。

神は、彼に信頼する者のために、大きなことをなさる。神を信じると言っている人々に、もっと力がないのは、

彼らが自分たち自身の知恵に頼りすぎ、主が、彼らのためにみ力をあらわす機会を主に与えないからである。しかし、彼らが、全く主に信頼し、忠実に彼に従うならば、どのような事態が起こっても、主は、主を信じる子供たちをお助けになる。

ヨシユアは、エリコを滅ぼしてから、しばらくしてヨルダンの谷を西に数マイル進んだ谷間の小さな町、アイを攻撃することにした。派遣された斥候の報告によれば、住民は少なく、町を滅ぼすにはほんのわずかの軍勢でよいであろうということであつた。

神が、イスラエルのために大勝利をお与えになつたために、彼らは自己過信に陥つた。神が、彼らにカナンの国を約束なさつたために、彼らは安心し、神の助けだけが、彼らに成功を与え得ることを自覚しなかつた。ヨシユアでさえ、神の勧告を仰がないで、アイ征服の計画をたてた。

イスラエルの人々は、自分自身の力を賛美し、彼らの敵を軽視しはじめた。勝利は、たやすく得られるように思われ、占領には、三千人で十分であると思われた。彼らは、神がいつしよにおられることを確かめもせず、攻撃した。彼らは、門のすぐそばまで突進したところ、そこで、頑強な抵抗を受けた。敵の数とその十分な準備にあつてふためいた彼らは、列を乱してがけをかけおりた。カナン人は、すぐその後を追つてきた。「彼らを門の前から……追つて、下り坂で彼らを殺した」(ヨシユア記七ノ五)。損害は少なく、死者は三十六人に過ぎなかつたが、この敗北は会衆全体を失望させた。「民の心は消えて水のようになつた」(同・七ノ五)。彼らが、実際の戦場で、カナン人に会つたのは、これが最初であつた。そして、この小さな町の防衛軍の前から彼らが逃げ去つたのであれば、彼らの前にあるもつと大きな戦闘の結果はどうなることであろうか。ヨシユアは、彼らの不成

功を、神の怒りの表現とみなし、悲嘆と不安のうちに、「衣服を裂き、イスラエルの長老たちと共に、主の箱の前で、夕方まで地にひれ伏し、ちりをかぶった」(同・七ノ六)。

「ああ、主なる神よ、あなたはなにゆえ、この民にヨルダンを渡らせ、われわれをアモリびとの手に渡して滅ぼさせられるのですか。…ああ、主よ。イスラエルがすでに敵に背をむけた今となって、わたしはまた何を言い得ましょう。カナンびと、およびこの地に住むすべてのものは、これを聞いて、われわれを攻めかこみ、われわれの名を地から断ち去ってしまうでしょう。それであなたは、あなたの大いなる名のために、何をしようとされるのですか」と彼は叫んだ(同・七ノ七 九)。

「立ちなさい。あなたはどうして、そのようにひれ伏しているのか。イスラエルは罪を犯し、わたしが彼らに命じておいた契約を破った」と、主はお答えになった(同・七ノ一〇、一一)。それは、失望したり、悲しんだりするときではなくて、すぐに、決定的行動をとるべきときであった。宿営の中に、隠れた罪があった。そして、主が神の民と共におられて祝福してくださるためには、まず、それをさがし出して、除かなければならなかった。

「あなたがたが、その滅ぼされるべきものを、あなたがたのうちから滅ぼし去るのでなければ、わたしはもはやあなたがたとは共にいないであろう」(同・七ノ一二)。

神の刑罰を実行するように命じられた者のひとり、神の命令を無視した。そして、その犯罪人の罪が全国民に問われた。「**彼らは奉納物を取り、盗み、かつ偽つ**」た(同・七ノ一二)。ヨシユアには、犯人を発見して、罰するようにという指示が与えられた。罪ある者を見破るために、くじが引かれることになった。罪人は、すぐに指摘されたのではなくて、しばらくの間、不明のままにされていた。それは、人々が、自分たちのなかにある罪

の責任を感じるためであった。そして、深く心をさぐって、神の前にへりくだるためであった。ヨシユアは、朝早く、部族ごとに人々を集めた。そして、厳肅で印象的な儀式が始まった。調査は一步一步進められた。恐ろしい試験が、人々の身近に迫った。第一に部族、それから氏族、その次に家族、そして、そのなかの男と進行していき、ユダの部族のカルミの子アカンが、イスラエルを悩ます者として、神の指によって指摘されたのである。

アカンがまちがいなく罪を犯し、不当の罰を受けたという非難が起こる余地を残さないために、ヨシユアは、アカンに、その事実を認めることを厳肅に命じた。アカンは、自分の犯罪を全部告白した。「ほんとうにわたしはイスラエルの神、主に対して罪を犯しました。……わたしはぶんどり物のうちに、シナルの美しい外套一枚と銀二百シケルと、目方五十シケルの金の延べ棒一本のあるのを見て、ほしくなり、それを取りました。わたしの天幕の中に、地に隠してあります」(同・七ノ二〇、二二)。使者たちがすぐに天幕につかわされた。そして、指示された場所を掘ってみた。「それは彼の天幕に隠してあって、銀もその下にあった。彼らはそれを天幕の中から取り出して、ヨシユアと……主の前に置いた」(同・七ノ二二、二三)。

宣告は下され、その執行もすぐに行なわれた。「なぜあなたはわれわれを悩ましたのか。主は、きょう、あなたを悩まされるであろう」とヨシユアは言った(同・七ノ二五)。人々は、アカンの罪の責任を問われ、その罪の結果悩んだ。であるから、人々はその代表者によって、アカンの刑の執行に参加するのであった。「すべてのイスラエルびとは石で彼を撃ち殺し」た(同・七ノ二五)。

そうしてから、アカンの上に石塚を大きく積み上げ、罪とその罰の記念とした。「その所の名は今日までアコ

ルの谷と呼ばれている」。それは、「悩み」という意味である(同・七ノ二六)。「アカルは……イスラエルを悩ました者である」と歴代志にしるされているのはアカンのことである(歴代志上二ノ七)。

アカンは、最も明瞭で厳肅な警告と、最も偉大な神のみ力のあらわれに反抗して、罪を犯した。「あなたがたは、奉納物に手を触れてはならない。……滅ぼさるべきものと」ならないためであるとの警告が全イスラエルに発せられていた(ヨシユア記六ノ一八)。この命令は、彼らが奇跡的にヨルダン川を渡り、割礼を行なつて、神の契約を認め、過越の祭りを祝つた後、また、契約の天使、主の軍勢の将が彼らにご自分を現わされた後に与えられた。その後、エリコが滅びて、すべて神の律法を犯す者の当然受けなければならない滅びの証拠となつた。イスラエルの勝利が、ただ神の力だけによるものであつて、人々が自力でエリコを占領したのでないという事實は、ぶんどり物を私有することを禁じた命令をさらに厳肅で重要なものにした。神は、神ご自身のみ言葉の力によつて、この城塞をくつがえされた。征服は神ご自身のものであつた。だから、町とその中のすべてのものは、神だけに帰すべきであつた。

そうした勝利と刑罰の厳肅なときに、幾百万のイスラエルの中のただひとりが、あえて神の命令にそむいた。アカンは、シナルの高価な衣服を見て、それがほしくなつた。彼は死に直面したときでさえ、それを「シナルの美しい外套一枚」と呼んだ(同・七ノ二二)。一つの罪は次の罪へと導いた。そして彼は、主の倉にささげられた金と銀とを自分のものにした。彼は、カナンの国の初穂を神から奪つた。

アカンを死に至らせた恐ろしい罪の根は貪欲であつた。これは、すべての罪の中で最も一般的のもので、最も軽視されている。他の罪は、発見されて罰せられるのであるが、第十条の罪は、非難されることさえまれである。

この罪がどんなに極悪で、その結果がどんなに恐ろしいものであるかという教訓をアカンの生涯が教えている。貪欲は、徐々にひろがる悪である。アカンがいだいた貪欲心は、ついに習慣となり、断ち切れない鎖のように彼を束縛した。彼は、この悪を心にいだいて、それが、イスラエルに災いをもたらすことを考えて、恐怖心をいだいたことであろう。しかし、彼の感覚は、罪のために鈍くなった。そして、誘惑にあったとき、彼はもろくも負けてしまった。

同様に厳粛で明瞭な警告があるにもかかわらず、同じような罪がなお、行なわれていないであろうか。アカンがエリコのぶんどり物について禁じられていたのと同様に、われわれも貪欲心をいなくことを明らかに禁じられている。神は、それを偶像礼拝であるといわれた(コロサイ三ノ五、エペソ五ノ五参照)。「あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない」(マタイ六ノ二四)。「あらゆる貪欲に対してよくよく警戒しなさい」(ルカ一二ノ一五)。「あなたがたの間では、口にすることさえしてはならない」(エペソ五ノ三)という警告が与えられている。アカン、ユダ、アナニヤ、サツピラなどの恐ろしい運命に陥った人々の例が与えられている。これらの人々の背後に、「黎明の子」ルシファアがいる(イザヤ書一四ノ一二)。彼は、さらに高い地位を求めたために天の栄光と祝福を永遠に失ってしまった。しかし、このような警告が発せられているにもかかわらず、貪欲は、いたるところで見られる。

どこにでも貪欲のみにくい足あとが見える。それは、家族の中に不満と争いを起こし、貧者の心に、金持ちに対するねたみと憎しみを起こす。それは、また、金持ちが貧者を、搾取、圧迫する原因でもある。この罪悪は世の中だけにとどまらず、教会の中にもはいっている。ここでも、利己心をいただき、強欲で、人を欺き、慈善を怠

り、「十分の一と、ささげ物」において、神のものを奪うことが、なんと一般に行なわれていることであろう(マラキ書三ノ八)。悲しいことであるが、「正規の」教会員の中に多くのアカンがいる。堂々とした風采の人が多く教会に来て、主の聖餐に連なる。しかし、彼らの持ち物のなかには、不法の利益、神がのろわれたものが隠されている。シナルの美しい衣服のために、良心の声にそむき、天国の希望を犠牲にする者が数多くある。自分たちの誠実さと有用性を、銀貨の袋と交換してしまう者も多い。貧者の苦しい叫びを聞く者はいない。福音の光は、途中でさえぎられている。キリスト教の教えを裏切る行為を見て、世の人々は軽べつの目を向ける。それにもかかわらず、貪欲な信者は宝をたくわえている。「人は神の物を盗むことをするだろうか。しかしあなたがたは、わたしの物を盗んでいる」と主は言われる(マラキ書三ノ八)。

アカンの罪は、国民全体を不幸にした。ひとりの罪をさがし出してそれを取り除くまで、神の怒りは教会の上にとどまる。教会が最も恐れなければならない勢力は、公然と攻撃する反対者や、無神論者や、神を汚す者などではなくて、キリストを信じるといいながら、矛盾した生活を送る人々である。イスラエルの神の祝福をさえぎり、神の民を弱めるのは、このような人々なのである。

教会が困難に陥り、人々が冷淡になって、靈的に衰えて、神の敵に勝利を与えるようなとき、教会の人々は、いたずらに手をこまねいて、不幸な状態を悲しむことなく、宿営のなかにアカンがいまいかどうかをたずねよう。各自は、けんそんに自分の心をさぐり、神の臨在をさえぎる隠れた罪を発見するように努めよう。

アカンは罪を告白したけれども、時はすでにおそく、彼にはなんの役にも立たなかった。彼は、イスラエルの軍勢がアイで敗北し、失望したのを見た。しかし、彼は進み出て罪を告白しなかった。彼は、ヨシユアとイスラ

エルの長老たちが、言葉で表現できない大きな悲しみのうちに、地にひれ伏したのを見た。もし彼がそのときに告白していたならば、それは、真の悔い改めの証拠となったことであろう。しかし、彼は、まだ黙したままであった。彼は、大きな犯罪が行なわれたこと、そして、その罪の性質さえもはっきり宣言されたのを聞いた。しかし、彼は、くちびるを閉じていた。それから厳粛な調査が始まった。彼の部族、氏族、そして家族が指摘されたとき、彼の心は、恐怖にふるえたことであろう。それでも彼は告白しなかったので、ついに、神の指が彼を指さすにいたった。こうして、彼は、罪をこれ以上かくすことができなくなつて事実を認めた。同様の告白が、なんと多くなされていることであろう。事実が証明されたあとで、それを認めることと、神とわれわれだけに知られた罪を告白するのとは、非常な相違がある。アカンは、告白することによって、犯罪の罰をのがれようとする気がなかったならば、告白はしなかったことであろう。しかし、彼の告白は、その刑罰の正当なことを示したに過ぎなかった。彼は、罪に対する真の悔い改めも、悔悟も、目的の変更も、悪に対する憎しみも感じていなかった。

すべての人の運命が、生か死かに決定したあとで、罪人が神のさばきの座の前に立つとき、同じような告白をする。各自は、自分に与えられる罰によって、自分の罪を認める。罪の宣告を受けた恐ろしさと、恐怖すべき審判のことを考えて、魂は、そう言わないではおられない。しかし、そうした告白は、罪人を救うことができない。

多くの者は、アカンのように、自分たちの罪を人間の目から隠すことができれば、安全であると思い、神は、厳格に罪を指摘なさらないだろうと安易に考えている。しかし、犠牲やささげ物では永遠に清めることができないその日に、罪が発見されたのでは、すでにおそいのである。天の記録が開かれるとき、審判の主は、人の罪を言葉で宣言されるのではなくて、心の奥底まで見抜き、人を納得させずにはおかまいなさしでござらんになる。

そうすると、すべての行為や、人生のすべての取り引きが、悪者の記憶にまざまざと印象づけられる。ヨシユアの時代のように、部族から氏族と人をさがし出す必要はない。彼自身のくちびるが、その恥を告白する。そのとき、人に知られなかった隠れた罪が、全世界に広く知られるのである。

第 46 章

祝福とのろい

本章は、ヨシユア記八章に基づく。

アカンに対する罪の宣告が執行された後で、ヨシユアは、すべての勇士たちを召集して、アイへ進撃するように命じられた。神の力が、人々と共にあったので、彼らはすぐに町を占領した。

イスラエル全体が、厳粛な宗教的礼拝を行なうために、ここで軍事活動が停止された。人々は、カナンに定住したいと熱望していた。しかし、まだ、家族のための家もなければ、土地もなかった。それらを手に入れるためには、カナン人を追い出さなければならなかった。しかし、この重要な働きは、延期しなければならなかった。彼らは、それよりもっと重要なことをさきに果たさなければならなかった。

民は、嗣業を手に入れる前に、神に対する忠誠の誓いを新たにしなければならなかった。部族をシケムのエバル山とゲリジム山に召集し、神の律法を厳粛に認めるようにとの指示が、モーセの最後の教えのなかで、二回与えられていた。この命令に従って、人々は、みな、男ばかりでなく、「女と子どもたち、ならびにイスラエルのうちに住む寄留の他国人」もギルガルの陣営を出て、カナンの地の中央に近いシケムの谷へ、敵国を通って進ん

で行った(ヨシュア記八ノ三五)。彼らは、まだ征服していない敵にとり囲まれていたが、神に忠実であるかぎり、神の保護のもとに安全であった。ちょうどヤコブの時のように、「大いなる恐れが周囲の町々に起ったので」ヘブル人は妨害されなかった(創世記三五ノ五)。

この厳肅な礼拝のために定められた場所は、すでに彼らの父祖たちの歴史とつながりのある聖なる場所であった。ここは、アブラハムがカナンの地で主に最初の祭壇を築いたところであった。ここは、アブラハムとヤコブが天幕を張ったところであった。ここにヤコブは畑を買い、部族の人たちはヨセフの遺体をそこに埋葬することになった。ここはまた、ヤコブの掘った井戸と、彼が家族の偶像をその下にうめたかしの木があった。

選ばれた土地は、パレスチナ全地で最も美しい土地の一つで、この大いなる印象的な光景が演じられる舞台としてふさわしかった。緑の野にオリーブの森が点在し、こんこんとあふれて尽きない泉から流れ出る川にうるおされ、野の花に色どられている美しい谷間が、不毛の山々の間に魅力をとたえてひろがっていた。その谷間の両がわに、エバル山とゲリジム山が近くに向かい合っていて、その低いところにある突出部が自然の講壇のようにみえ、その一方の上で話されることばの一つ一つが向かいがわにはつきり聞こえ、後方に広がる山腹は、おびただしい会衆の集場所となっていた。

モーセから与えられた指示に従って、大きな石の記念碑がエバル山に建てられた。この石に前もってしつこくをぬっておき、その上に律法が書き込まれた。それはシナイ山で語られて石の板に刻まれた十誡ばかりでなく、モーセに伝えられて本に書かれた律法もあった。この記念碑のそばに、切り出されたものでない石で祭壇が築かれ、その上で主にいけにえがささげられた。のろいをかけられた山であるエバル山に祭壇が築かれたことには意

味があつて、それは、イスラエルが神の律法を犯したゆえに当然神の怒りを招いたのであり、もし、いけにえの祭壇によつて象徴されたキリストの贖いがなければ、神の怒りがすぐにものぞむであろうということを示していた。

レアとラケルから出た六つの部族はゲリジム山に、一方、召使の女たちから出た部族は、ルベン、ゼブルンと一緒にエバル山にそれぞれ場所をとつた。祭司たちは、契約の箱と共に、中間の谷に場所を占めた。合い図のラツパの音で静肅が宣言された。そして、その深い静けさとこの大会衆の面前で、ヨシユアは、聖なる契約の箱の横に立つて、神の律法に従うことに伴う祝福を読み上げた。ゲリジム山の全部族は、アーメンをもつてこれに応じた。次にヨシユアがのろいを読み上げると、エバル山の全部族が同じように同意をあらわし、幾千の声がひとりの声のように相和して、厳肅に応答した。続いて神の律法と、モーセから民に伝えられたさだめと戒めが朗読された。

イスラエルは、律法をシナイ山で神の口から直接に与えられ、そして、神ご自身の手によつて書かれたその聖なる戒めは、まだ契約の箱の中に保存されていた。いま、それは再びだれもが読めるところに書かれたのであつた。カナンを占領できる契約条件をだれもが自分の目で見る特権が与えられた。だれもが契約の条件を受け入れることを表示し、これに従えば祝福を受け、これに従わなければのろいを受けることに同意するのであつた。律法は、記念の石に書かれたばかりでなく、ヨシユア自身によつて全イスラエルの聞いている前で読み上げられた。モーセが申命記全部を民に語り終えてから幾週間もたたない今、ヨシユアがふたたび律法を読み上げたのであつた。

イスラエルの男たちばかりでなく、女も子供たちも律法の朗読に聞き入った。彼らも、また、義務を知って実行することが重要であった。神はご自分のさだめに關して、イスラエルにこう命じておられた。「これらのわたしの言葉を心と魂におさめ、またそれを手につけて、しるしとし、目の間に置いて覚えとし、これを子供たちに教え…なければならない。そうすれば、主が先祖たちに与えようと誓われた地に、あなたがたの住む日数およびあなたがたの子供たちの住む日数は、天が地をおおう日数のように多いであろう」(申命記一一ノ一八 一一)。

律法の全部は、モーセが命じたように、七年めごとにイスラエルの全会衆の前で読まれるのであった。「七年の終りごとに、すなわち、ゆるしの年の定めの際になり、かりいおの祭に、イスラエルのすべての人があなたの神、主の前に出るため、主の選ばれる場所に来るとき、あなたはイスラエルのすべての人の前でこの律法を読んで聞かせなければならない。すなわち男、女、子供およびあなたの町のうちに寄留している他国人など民を集め、彼らにこれを聞かせ、かつ学ばせなければならない。そうすれば彼らはあなたがたの神、主を恐れてこの律法の言葉を、ことごとく守り行うであろう。また彼らの子供たちでこれを知らない者も聞いて、あなたがたの神、主を恐れることを学ぶであろう。あなたがたがヨルダンを渡って行って取る地にながらえる日のあいだ常にそうしなければならない」(申命記三一ノ一〇 一一三)。

サタンは、神の語られたことを人々に曲解させ、心をくもらせ、理解力を暗くして、彼らを罪に陥れようと絶えず働きかけている。であるから、主は、この点を明確にし、だれもご自分の要求をまちがえることがないように、明らかにしておられるのである。神は、サタンが、神の民に残忍で欺瞞的な力を及ぼさないように、絶えず彼らをご自分の保護の下に引き寄せようとしておられる。神はおそれ多くもご自身の声で彼らに語り、ご自身の

手で生きたみ言葉をお書きになった。生命力が満ちて、真理の光を放っているこれらの祝福の言葉は、完全な指針として人に与えられているのである。サタンが心を捕え、主の約束と要求から人々の気持ちをそらせようとするので、これを頭にきざみつけ、心に印象づけるには、いつそうの努力が必要である。

聖書の歴史の事実と教訓および主の警告と要求について人々に教えることに、宗教教師はいつそうの注意を払わねばならない。それには子供たちの理解力に適した単純な言葉で説明しなければならない。若い人たちが聖書によって教えられるように留意することが牧師と親たちの働きの一部でなければならない。

親は子供たちを聖書のなかにあるいろいろな知識によって教育することができる。また、そうすることが彼らの義務である。しかし、むすこ娘たちに神のみ言葉に対する興味を持たせるには、親がみずから興味を持たねばならない。親が聖書の教えをよく知り、神がイスラエルに命じられたように、「家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も」これについて語らねばならない（申命記一一ノ一九）。子供たちが神を愛し、おそれるようになることを望む者は、み言葉と、創造のわざにあらわされている神の恵みと威光と力について語らねばならない。

聖書のどの章どの節も、神からの人類への伝達である。われわれは、その教えを手につけてしとし、目の間に置いて覚えとしなければならない。われわれがそれを学んで従うときに、イスラエル人が、昼は雲の柱、夜は火の柱で導かれたように、それは神の民を導くのである。

ギベオン人との同盟

本章は、ヨシユア記九、一〇章に基づく。

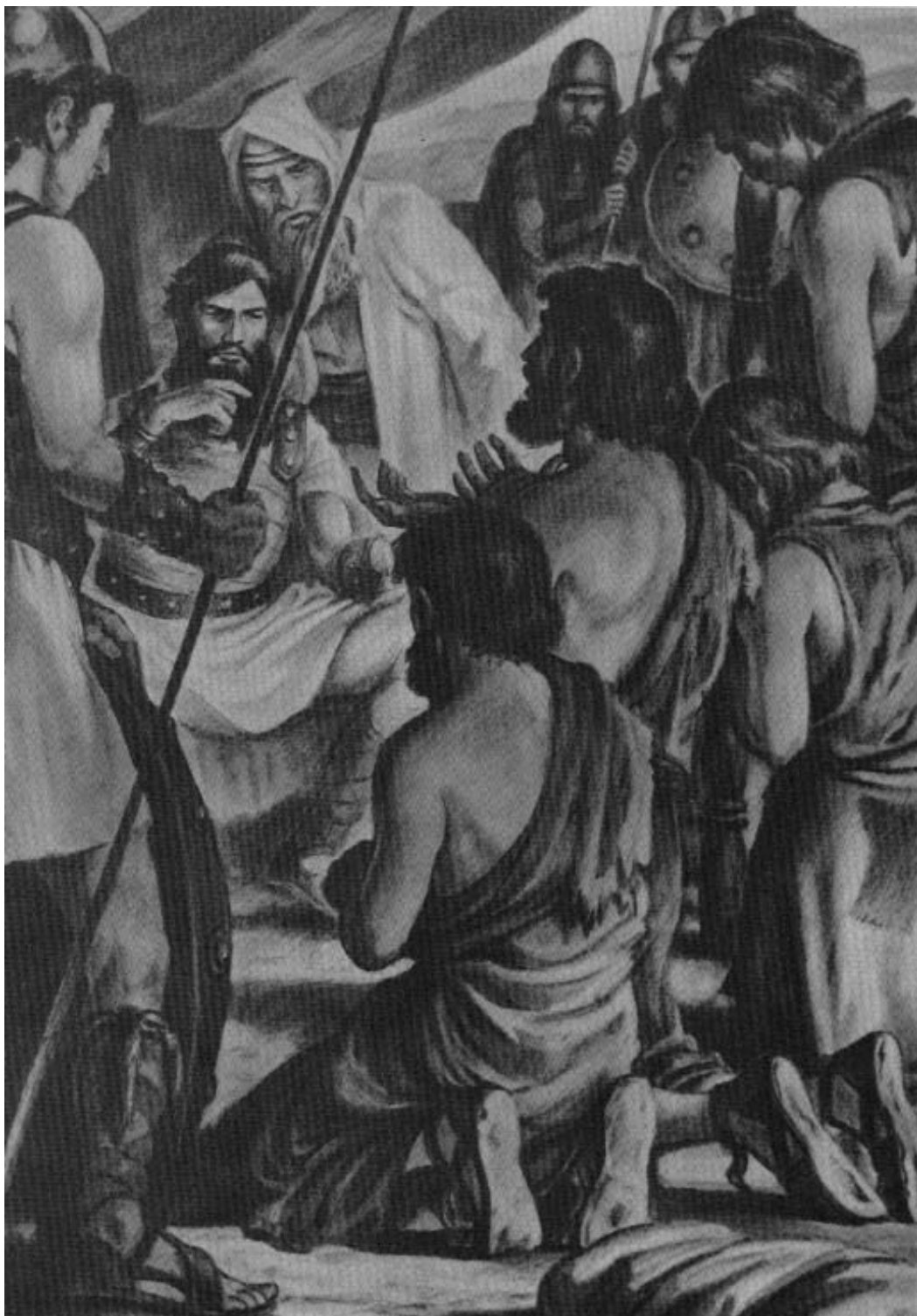
イスラエル人は、シケムからギルガルの陣営へもどった。するとまもなく、ここに見知らぬ代表团がやってきて、協定を結びたいと希望した。使節団は、遠い国からやってきたと言い、彼らのようすからすればそれが真実らしく思えた。彼らの衣服は古びて破れ、くつはつぎ当てがしてあり、食料品はかびがはえ、酒を入れる皮袋は破れたのを旅の途中で急いでつくろったかのようにしびりつけてあった。

パレスチナの国境の向こうの遠国で、彼らの同胞は、神が、神の民のために行なわれた不思議なわざを聞き、イスラエルと同盟を結ぶことを望んで、彼らを派遣したのだと、彼らは言うのであった。ヘブル人はカナンの偶像礼拝者たちと同盟を結ばないということを特別に警告されていたので、この来訪者たちの言っていることが真実かどうかについて一抹の疑いが指導者たちの心に浮かんだ。「あなたがたはわれわれのうちに住んでいくのかも知れない」と彼らは言った。これに対して使節団は、「われわれはあなたのしもべです」と答えただけだった。しかしヨシユアが、「あなたがたはだれですか。どこからきたのですか」と単刀直入につっこんで聞く

と、彼らは前と同じ答えをくりかえして、それが真実である証拠として、こうつけ加えた。「ここにあるこのパンは、あなたがたの所に来るため、われわれが出立する日に、おのおの家から、まだあたたかなのを旅の食料として準備したのですが、今はもうかわいて砕けています。またぶどう酒を満たしたこれらの皮袋も、新しかったのですが、破れました。われわれのこの着物も、くつも、旅路がひじょうに長かったので、古びてしまいました」(ヨシユア記九ノ七、八、一二、一三)。

この陳情は成功した。ヘブル人は、「主のさしずを求めようとはしなかった。そしてヨシユアは彼らと和を講じ、契約を結んで、彼らを生かしておいた。会衆の長たちは彼らに誓いを立てた」(同・九ノ一四、一五)。こうして契約が結ばれた。それから三日のちに事実が暴露した。「彼らはその人々が近くの人々で、自分たちのうちに住んでいるということを聞いた」(同・九ノ一六)。ギベオン人は、ヘブル人に抵抗することが不可能であることを知って、生き残るために策略を用いたのであった。

自分たちが欺かれたことを知ったとき、イスラエル人の憤激は大きかった。その怒りは、彼らが三日間の旅のち、カナンの地の中央に近いギベオン人の町に到着したとき、いっそう高まった。「会衆はみな、長たちにおかってつぶやいた」。しかし長たちは、欺瞞によって結ばれた契約ではあつても、「イスラエルの神、主をさして彼らに誓いを立てていたので」その契約を破ろうとしなかった。「イスラエルの人々は彼らを殺さなかった」(同・九ノ一八)。ギベオン人は、偶像礼拝をやめて主の礼拝を受け入れることを誓ったのであった。だから彼らを生かしておくことは、偶像礼拝のカナン人を滅ぼすようにとの神のご命令にそむくことではなかった。だからヘブル人が誓ったことは罪を犯すことにはならなかった。その誓いは欺瞞によるものではあつたが、無視してはなら



遠国からの使者をよそあって、ギベオン人はほろをまとい古びたパンをもってヨシュアのところへ来た。彼らは、偽りによって同盟を結んだ。

なかった。義務を誓ったからには、それが、悪い行為を義務づけるものでない以上、尊重すべきである。利益、報復、自己中心などを考慮に入れて、誓いを破るようなことがあってはならない。「偽りを言うくちびるは主に憎まれ」る(箴言一二ノ二二)。「主の山に登るべき者はだれか。その聖所に立つべき者はだれか」。それは、「誓った事は自分の損害になっても変えること」のない者である(詩篇二四ノ三、一五ノ四)。

ギベオン人は、生かしておくことになったが、聖所のいやしい下働きをする奴隷となった。「ヨシユアは、その日、彼らを、会衆のため、また主の祭壇のため、主が選ばれる場所で、たぎぎを切り、水をくむ者とした」(ヨシユア記九ノ二七)。彼らは、この条件を喜んで受け入れ、自分たちがまちがっていたことに気づいて、生命を贖うためならどんな条件にも喜んで従った。「われわれは、今、あなたの手のうちにあります。われわれにあなたがして良いと思い、正しいと思うことをしてください」と彼らはヨシユアに言った(同・九ノ二五)。彼らの子孫は何百年もの間、聖所の奉仕に従事した。

ギベオン人の領地は四つの町から成っていた。民は王の統治下にはなくて、長老たちに支配されていた。中でも一番重要な町、ギベオンは、「大きな町であつて、王の都にもひとしいものであり、…そのうちの人々が、すべて強かった」(同・一〇ノ二二)。このような町の住民が、命を救うために屈辱的な手段に訴えたことは、イスラエル人がどれほどカナンの住民に恐れられていたかということの大きな証拠である。

しかし、ギベオン人が正直にイスラエル人と交渉したのだったら、事はもつとうまくいったであろう。彼らは主に服従したことによって生かされたが、彼らの欺瞞は不名誉と苦役をもたらしたにすぎなかった。神は、異教を捨ててイスラエルに加わりたい者は、だれでも契約の祝福を受けられるように道を備えておられた。「あなた

がたと共にいる寄留の他国人」(レビ記一九ノ三四)の条件に彼らは含まれ、この種の人たちは、ほとんど例外なしに、イスラエルと同じ恩典と特権を受けられるのであった。主の命令は次のようなものであった。「もし他国人があなたがたの国に寄留して共にいるならば、これをしえたげてはならない。あなたがたと共にいる寄留の他国人を、あなたがたと同じ国に生れた者のようにし、あなた自身のようにこれを愛さなければならぬ」(レビ記一九ノ三三、三四)。過越の祭りといけにえのささげ物については、こう命令されていた。「会衆たる者は、あなたがたも、あなたがたのうちに寄留している他国人も、同一の定めに従わなければならない。…他国の人も、主の前には、あなたがたと等しくなければならない」(民数記一五ノ一五)。

もしギベオン人が欺瞞的な手段に訴えなかったら、このような立場を与えられたのであった。「王の都にもひしい」町の住民で、「そのうちの人々が、すべて強かった」といわれていた人々にとって、子孫末代まで、たぎぎを切ったり、水をくんだりする者となることは、けっしてなまやさしい屈辱ではなかった。彼らは、欺瞞の目的で貧しい着物を身につけていたが、それは彼らがいままで人に使われる身分であるしとして、彼らにつけられた。こうして、何代にもわたって、彼らの奴隷状態は、神が虚偽を憎まれる証拠となるのであった。

ギベオン人がイスラエルに屈服したことから、カナン之王たちはうばいした。侵入者と和を講じた者に対してただちに報復手段がとられた。エルサレムの王アドニゼデクをかしらにして、五人のカナンの王たちがギベオンに対抗して同盟を結んだ。彼らの行動は早かった。ギベオン人は防衛の備えができていなかったで、彼らはギルガルのヨシユアに使者をつかわして言った。「あなたの手を引かないで、しもべどもを助けてください。早く、われわれの所に上ってきて、われわれを救い、助けてください。山地に住むアモリびとの王たちがみな集ま

って、われわれを攻めるからです」(ヨシユア記一〇ノ六)。危険はギベオンの住民ばかりでなく、イスラエルにも迫った。この町は、中央および南部パレスチナへの交通路にまたがっていて、国を征服するにはここを確保しなければならなかった。

ヨシユアは、ただちにギベオンの救援に向かう手はずをととのえた。包囲されたこの町の住民は、自分たちが行なった欺瞞行為のために、ヨシユアが彼らの訴えを拒絶するのではないかと恐れた。しかし、ギベオン人はイスラエルの支配に服し、神への礼拝を受け入れたのであるから、彼らを保護する義務があると、ヨシユアは感じた。彼は、こんどは、神の助言なしに行動しようとはしなかった。主はその企てを激励された。次のような神の言葉が与えられた。「彼らを恐れてはならない。わたしが彼らをあなたの手にわたしたからである。彼らのうちには、あなたに当てることのできるものは、ひとりもないであろう。」「そこでヨシユアはすべてのいくさびとと、すべての大勇士を率いて、ギルガルから上って行った」(同・一〇ノ八、七)。

徹夜の強行軍で、ヨシユアの軍隊は朝方にはギベオンの前方に到着した。同盟軍の王たちは、ヨシユアが彼らを襲撃したときには、やっと軍勢を町の周囲に集結したばかりのところであつた。結果は同盟軍の大敗北に終わった。おびただしい軍勢はヨシユアの前から敗走して、山道からベテホロンへ逃げた。山の頂上まで登りきると彼らは向こうがわの急な下り坂を一気にかけおいた。すると激しい雷の嵐が彼らを見舞った。「主は天から彼らの上に大石を降らし……イスラエルの人々がつるぎをもって殺したものよりも、雷に打たれて死んだもののほうが多かった」(同・一〇ノ一一)。

アモリ人が、山の要塞に逃げ込もうとして、無謀な戦いを続けている間、ヨシユアは、山の頂上から見おろし

ていたが、戦いを完結するには日が短いことに気がついた。もし徹底的に打ち破らなければ、敵はふたたび勢いをもりかえして、戦いをくりかえすだろう。「ヨシユアはイスラエルの人々の前で主にむかって言った、

『日よ、ギベオンの上にとどまれ、

月よ、アヤロンの谷にやすらえ』

民がその敵を撃ち破るまで、日はとどまり、月は動かなかった。…日が天の中空にとどまって、急いで没しなかつたこと、おおそ一日であつた」(同・一〇ノ一二、一三)。

夜になる前に、ヨシユアに対する神の約束は果たされた。敵の全軍は彼の手に渡された。その日のできごとはいつまでもイスラエルの記憶に残ることになった。「これより先にも、あとにも、主がこのように人の言葉を聞きいれた日は一日もなかつた。主がイスラエルのために戦われたからである」(同・一〇ノ一四)。「飛び行くあなたの矢の光のために、電光のようにならめく、あなたのやりのために、日も月もそのすみかに立ち止まった。あなたは憤って地を行きめぐり、怒って諸国民を踏みつけられた。あなたはあなたの民を救うため、…出て行かれた」(ハバクク書三ノ一―一二)。

神の霊が、ヨシユアを動かして、イスラエルの神の力の証拠がふたたび与えられるようにと彼に祈らせたのであつた。だから、この願いは偉大な指導者ヨシユアの超越を示したものではなかつた。ヨシユアは、神が必ずイスラエルの敵を打ち破られるという約束を受けていたのであつたが、あたかも成功はイスラエルの軍勢にのみかかっているかのように熱心に努力した。彼は人間の力のかぎりを尽くしてから、信仰をもって神の助けを求めた。成功の秘けつは神の力と人間の努力の結合である。最高の結果を達成する者は、全能者の腕に絶対の信頼をおく

人である。「日よ、ギベオンの上にとどまれ、月よ、アヤロンの谷にやすらえ」と命じた人は、ギルガルの陣營で、何時間も祈りのうちに地にひれ伏していた人である。祈りの人は力の人である。

この偉大な奇跡は、被造物が創造主の支配下にあることの証拠である。サタンは、物質界における神の力を人の目から隠し、神のたゆまぬ活動を見せまいとする。この奇跡によって、自然の神よりも自然をあがめる者は譴責されるのである。

神はみこころのままに、「火よ、あられよ、雪よ、霜よ、み言葉を行うあらしよ」と、自然の勢力を呼び集めて敵の力を打破される(詩篇一四八ノ八)。異教のアモリ人が神の目的にさからったとき、神はみ手をくだして、イスラエルの敵の上に「天から……大石を降ら」された。地上歴史の最後の場面で、「主は武器の倉を開いてその怒りの武器を取り出された」ときに、もっと大きな戦いが、起こるといわれている(エレミヤ書五〇ノ二五)。「あなたは雪の倉にはいったことがあるか。ひよりの倉を見たことがあるか。これらは悩みの時のため、いくさと戦いの日のため、わたしがたくわえて置いたものだ」と、神はたずねておられる(ヨブ記三八ノ二二、二三)。

黙示録の記者は、「大きな声が聖所の中から……『事はすでに成った』と宣告するときに起こる破滅について書いている。彼は、「一タラントの重さほどの大きな雹が、天から人々の上に降ってきた」と言っている(黙示録一六ノ一七、二一)。

カナンの分配

本章は、ヨシュア記一〇ノ四〇 四三。一一章、一四 二二章に基づく。

ベテホロンでの勝利のあと、たちまち、カナンの南部が征服された。「こうしてヨシュアはその地の全部、すなわち、山地、ネゲブ、平地、および山腹の地…を撃ち滅ぼし…た。…イスラエルの神、主がイスラエルのために戦われたので、ヨシュアはこれらすべての王たちと、その地をいちどきに取った。そしてヨシュアはイスラエルのすべての人を率いて、ギルガルの陣営に帰った」(ヨシュア記一〇ノ四〇 四三)。

パレスチナ北部の部族は、イスラエル軍の勝利に恐怖を感じ、これに対抗して同盟を結んだ。この同盟軍のかしらはメロム湖の西側までの地域であるハゾルの王ヤビンであった。「そして彼らは、そのすべての軍勢を率いて出てきた」(同・一一ノ四)。この軍勢はイスラエルがこれまでにカナンで遭遇したどの軍勢よりも大きかった。

「その大軍は浜べの砂のように数多く、馬と戦車も、ひじょうに多かった。これらの王たちはみな軍を集め、進んできて、共にメロムの水のほとりに陣をしき、イスラエルと戦おうとした」(同・一一ノ四、五)。ふたたび激励の言葉がヨシュアに与えられた。「彼らのゆえに恐れてはならない。あすの今ごろ、わたしは彼らを皆イスラ

エルに渡して、ことごとく殺させるであらう」(同・一一ノ六)。

ヨシユアは、メロム湖の近くで同盟軍の陣営を襲い、その軍勢を徹底的に壊滅させた。「主は彼らをイスラエルの手に渡されたので、これを撃ち破り……ついにひとりも残さず撃ちとった」(同・一一ノ八)。カナン人の誇りであり自慢の種であった戦車と馬は、イスラエルのぶんどり品としてはならなかった。神の命令によって戦車は焼かれ、馬はかたわにさせられて戦いの役に立たなくなった。イスラエル人は、戦車や馬に頼らず、「彼らの神、主のみ名」に信頼すべきであった。

町は次々と攻撃され、同盟軍の要塞ハゾルは焼かれた。戦いは数年続いたが、ついにヨシユアはカナンの支配者となった、「こうしてその地に戦争はやんだ」(同・一一ノ二三)。

しかし、カナン人の勢力は打ち破られたが、彼らは完全に土地から立ちのかされていなかった。西部ではまだペリシテ人が海岸ぞいの肥沃な平野を占領しており、その北にはシドン人の領地があった。レバノンもまたシドン人の領有であった。南部では、エジプトまでの地域がイスラエルの敵によって占領されていた。

しかし、ヨシユアが戦いを続けるのではなかった。この偉大な指導者は、イスラエルの指導から手をひく前にしなければならなかった。全地は、征服した土地も、まだ平定していない土地も、部族に割り当てねばならなかった。そして、それぞれの部族が自分たちの嗣業を完全に平定しなければならなかった。もし人々が神に忠実であつたら、神は、彼らの前から敵を追いつけてくださるのであった。そして、彼らが神の契約に忠実でありさえしたら、もっと大きな所有を与えるであらうと、神は約束された。

土地の分配は、ヨシユアと大祭司エレアザルおよび部族の首長たちに任せられ、各部族の配置はくじで定められ

た。モーセは、民がカナンを占領したときに、部族間に分配するように土地の境界を定め、各部族の首長がその分配に参加するように定めておいた。レビ族は、聖所の奉任に専念していたので、この割り当ての中にはいなかった。レビ人には、国内のあちらこちらにある四十八の都市が、彼らの嗣業として指定された。

土地の分配をはじめる前に、カレブが、彼の部族の首長たちを従えて、特別な要求をもって出頭した。ヨシユアを除けば、カレブは、今や、イスラエルで最年長者であった。斥候たちの中で、カレブとヨシユアだけが、約束の地について、よい報告をもち帰って、人々に主の名によつてのぼつて行つてそこを占領するようにと励ましたのであった。カレブは今、彼の忠誠の報いとして、そのとき与えられた約束、すなわち、「おまえの足で踏んだ地は、かならず長くおまえと子孫との嗣業となるであろう。おまえが全くわが神、主に従つたからである」という約束をヨシユアに思い出させた(同・一四ノ九)。そこで彼は、ヘブロンを自分の所有としてもらいたいといひ出した。ここは、長年の間、アブラハム、イサク、ヤコブの土地であった。ここのマクペラの洞穴に、彼らが埋葬されていた。ヘブロンは、その手ごわい外見で斥候たちを恐れさせ、そのため全イスラエルの勇気をくじいたおそるべきアナキ人の土地であった。ここは、とりわけカレブが神の力に信頼して自分の嗣業としてえらんだ土地であった。

カレブは言った、「主がこの言葉をモーセに語られた時からこのかた、イスラエルが荒野に歩んだ四十五年の間、主は言われたように、わたしを生きながらえさせてくださいました。わたしは今日すでに八十五歳ですが、今もなお、モーセがわたしをつかわした日のように、健やかです。わたしの今の力は、あの時の力に劣らず、どんな働きにも、戦いにも堪えることができます。それで主があの日語られたこの山地を、どうか今、わたしにく

ださい。あの日あなたも聞いたように、そこにはアナキびとがいて、その町々は大きく堅固です。しかし、主がわたしと共におられて、わたしはついには、主が言われたように、彼らを追い払うことができるでしょう」(同・一四ノ一〇 一二)。ユダのおもだった人々が、その願いを支持した。カレブ自身がユダ族から土地の分配について任命されていたので、彼はその権限を利己的な特典に用いたようにみられないように、首長たちの同意を得た上で、彼の主張を持ち出すことにしていたのである。

彼の要求はすぐにはかなえられた。この巨大な要塞の征服は、だれよりも彼にまかせるのが一番安全であった。

「そこでヨシユアはエフンネの子カレブを祝福し、ヘブロンを彼に与えて嗣業とさせた」(同・一四ノ一二)。彼が全く主なる神に従ったからである。カレブの信仰は、今も、かつて斥候たちの悲観的な報告と反対のあかしをたてたときと全く同じであった。彼は神がご自分の民にカナンを占領させると言われた約束を信じていた。この点において彼は全く主に従ったのであった。彼は、民と共に荒野での長年の放浪に耐えて、失望と罪の重荷を共に味わった。それでも、彼はそのことについてなんの不平も言わずに、荒野で兄弟たちが滅ぼされたときにも彼を生き長らえさせてくださった神をあがめた。荒野の放浪中の困難と危険と疫病のさなかにも、カナンにはいつてからの戦いの年月の間にも、主は彼を生き長らえさせられた。そしていま、八十才を越えても彼の力は衰えていなかった。彼はすでに征服された土地を自分のために求めず、よりによつて斥候たちが征服は不可能と考えた土地を求めた。彼は、イスラエルの信仰をたじろがせた力強い巨人たちから、神の助けによつて奪取しようというのである。カレブの願いの動機は、名誉欲や権勢欲ではなかった。この勇敢な老戦士は、神の栄えとなる模範を人々に示し、父祖たちが征服不可能と考えていた土地を征服するように部族を大いに激励しようと熱望してい



カレブは忠実な斥候であった。四十年前に、彼が歩いた地を与えるという神の約束に基づいて、ヘブロンの町をもらうことを申し出た。

たのであった。

カレブは、四十年間心にきめていた嗣業を手に入れた。そして神が共にいてくださることに信頼して、「アナクの子三人を追い払った」（ヨシュア記一五ノ一四）。自分と自分の一族のために土地を獲得してから、彼の熱意は衰えなかった。彼は自分の嗣業に安住しないで、国のためと神の栄えのために、征服を拡大して行った。

臆病者と反逆者は荒野で滅びた。しかし、正しい斥候たちはエスコルのぶどうを食べた。おのおのその信仰に従って与えられた。信じない者は、彼らの恐れていたことが実現するのを見た。神の約束にもかかわらず、彼らはカナンを継ぐことは不可能だと断言し、そしてその通りカナンを所有することができなかった。しかし、神に信頼した人々は、遭遇すべき困難を見ないで全能者の力を見、よい地にはいった。昔の偉人たちが、「国々を征服し、……つるぎの刃をのがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者となり、他国の軍を退かせた」のは信仰によってであった（ヘブル一ノ三三、三四）。「わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である」（ヨハネ第一・五ノ四）。

土地の分配についてのもう一つの要求は、カレブの精神と全く異なつた精神をあらわしていた。それはヨセフの子らであるエフライムの部族とマナセの半部族から持ち出されたものであった。この部族は人数が多いことから、二倍の地域を要求した。彼らのために指定された土地は最も肥えた土地で、シャロンの肥沃な平野を含んでいた。しかし、谷間の主要な町の多くは、まだカナン人が占領していたので、この部族は彼らの領地を征服するほねおりと危険にしりごみし、すでに平定された地域を余分につけ加えてほしいと希望した。エフライムの部族はイスラエルの最も大きい部族の一つで、また、ヨシュア自身の属している部族であったので、彼らは当然特別

な考慮をしてもらう資格があると考えた。「わたしは数の多い民となったのに、あなたはなぜ、わたしの嗣業として、ただ一つのくじ、一つの分だけを、くださったのですか」と彼らは言った(ヨシユア記一七ノ一四)。しかしこの妥協することを知らない指導者に、厳格な公正を曲げさせることはできなかった。

彼は答えて言った。「もしあなたが数の多い民ならば、林に上って行って、そこで、ペリジびとやレバيلمびとの地を自分で切り開くがよい。エフライムの山地が、あなたがたには狭いのだから」(同・一七ノ一五)。

彼らの答えは不平の真因を暴露していた。彼らはカナン人を追い払う信仰と勇氣に欠けていたのである。「山地はわたしどもに十分ではありません。かつまた平地におけるカナンびとは、……みな鉄の戦車を持っています」と彼らは言った(同・一七ノ一六)。

イスラエルの神の力は民に対して保証されていたので、もし、エフライム人がカレブの勇氣と信仰をもっていたら、どんな敵も彼らの前に立つことはできなかったであろう。困難と危険を避けようという彼らの明らかな願いに對して、ヨシユアはこう言って応じた。「あなたは数の多い民で、大きな力をもっています。……カナンびとは鉄の戦車があつて、強くはあるが、あなたはそれを追い払うことができます」(同・一七ノ一七、一八)。こうして彼らの議論は自身たちに不利な結果をもたらした。彼らが主張するように、彼らは強大な民だから、兄弟たちと同じように、自分たちの道を十分に切り開いて行くことができたのである。神の助けによって、彼らは鉄の戦車を恐れるにはおよばなかったのである。

それまで、ギルガルが国家の本部であり、幕屋の所在地であつた。しかし、今、幕屋はその恒久的な所在地として選ばれた場所へ引越すことになった。それは、エフライムの土地にある小さな町シロであつた。シロは力

ナンの地の中央に近く、どの部族にとっても都合のよい場所だった。国のこの部分は完全に平定されていたので、礼拝者たちは妨害される恐れがなかった。「そこでイスラエルの人々の全会衆は、……シロに集まり、そこに会見の幕屋を立てた」(同・一八ノ一)。幕屋がギルガルから引越したとき、まだ宿営していた部族はそれと一緒に移動して、シロの近くに営を張った。それから自分たちの嗣業の土地に散って行くまで、これらの部族はここにどまっていた。

契約の箱は、シロに三〇〇年間とどまっていたが、ついにエリの一家の罪のためにベリシテ人の手に落ち、シロも滅ぼされた。契約の箱はふたたびこの幕屋にもどることなく、聖所の奉仕はついにエルサレムの神殿に移され、シロは忘れ去られた。そこにはかつて幕屋があった場所の跡があるだけである。ずっと後に、その運命はエルサレムに対する警告に用いられた。主は預言者エレミヤによってこう宣告された。「わたしが初めにわたしの名を置いた場所シロへ行き、わが民イスラエルの悪のために、わたしがその場所に対して行ったことを見よ。……それゆえわたしはシロに対して行ったように、わたしの名をもって、となえられるこの家にも行つ。すなわちあなたがたが頼みとする所、わたしがあなたがたと、あなたがたの先祖に与えたこの所に行う」(エレミヤ書七ノ一二、一四)。

「こうして国の各地域を嗣業として分け与えることを終ったとき」、すなわち、全部の部族にそれぞれの嗣業が割り当てられたあとで、ヨシユアは自分の要求を出した(ヨシユア記一九ノ四九)。カレブと同じに、ヨシユアに対しては嗣業について特別な約束が与えられていた。しかし、彼は広い領地を求めないで、一つの町だけを要求した。「イスラエルの人々は……彼が求めた町を与えたが、……彼はその町を建てなおして、そこに住んだ」(同・

一九ノ四九、五〇）。この町につけられた名は、テムナテ・セラすなわち、「残った部分」という意味の名であった。それは、征服の戦利品をまっさきに自分のものとしなくて、民の一番いやしい者にいたるまでの分配がすむまで自分の要求を延ばした征服者のりっぱな品性と無我の精神を永久にあかしするのであった。

レビ人に割り当てられた町のうちの六つ　ヨルダン川の両側にそれぞれ三つずつ　が、のがれの町として指定され、人を殺した者が逃げ込んで身の安全を保つことができた。これらの町を指定することについてはモーセから命じられていた。「あなたがたのために町を選んで、のがれの町とし、あやまって人を殺した者を、そこにのがれさせなければならない。これは……のがれる町であって、人を殺した者が会衆の前に立って、さばきを受けないうちに、殺されることのないためである」（民数記三五ノ一一、一二）。この情け深い措置は、昔、個人的に報復する慣習があつたために必要となつたのである。すなわち、殺人者の処罰は、遺族の一番近親の者が跡継ぎの者にまかされていたのである。有罪が明瞭な場合には、役人の裁判を待つ必要はなかった。報復者は犯人をどこでも追跡して、見つけ次第殺してよかった。主は当時この慣習を廃止することを適当と思われなかった。そこで、故意でなく、人を殺した者の安全を保証する道を講じられたのであった。

のがれの町は、国のどこからでも半日で歩いて行けるところに配置されていた。町へ通じる道はいつも手入れが行きとどいていて、道のいたるところにはつきりと太い字で「のがれ」という言葉が書かれている道しるべが立てられていて、逃げて行く人が一刻も遅れることがないようになっていた。ヘブル人でも、他国人でも、滞在者でも、だれでもこの町に逃げることができた。しかし無罪の人が早まって殺されることがなかった一方、有罪の人は処罰をまぬかれることができなかった。のがれてきた人の事件は当局者によって公平な審判を受け、故意

の殺人でなかったことが判明したときだけ、のがれの町の中で保護されるのであった。有罪の者は報復する人に引き渡された。また、保護を受ける資格のある人は、定められたのがれの町の内部にとどまっているという条件つきで保護された。もし定められた境界外に出て、血の報復をする人にみつかったら、彼は主が備えられた方法を見殺した罰にその生命を奪われるのであった。しかし、大祭司が死ねば、のがれの町にかくまわれていた人々は自由にその嗣業にもどることができた。

殺人の裁判では、被告は、たとえ外部の証拠がどんなに不利であろうと、ひとりの証人の証言で刑を宣告されることはなかった。主は、「人を殺した者、すなわち故殺人はすべて証人の証言にしたがって殺されなければならない。しかし、だれもただひとりの証言によって殺されることはない」と命じられた(同・三五ノ三〇)。イスラエルに対するこの命令をモーセに与えられたのは、キリストであった。大教師イエスは、この地上に弟子たちと共に、人としておられたとき、まちがっている者を取り扱う方法を教えるにあたって、ひとりの人の証言で罪の有無を定めてはならないという教えをくりかえされた。ひとりの見解や意見によって、論議的となっている問題を解決してはならない。これらのことにおいてはどんなときでも、ふたり以上の者が一緒になって、共に責任を負うべきである。「それは、ふたりまたは三人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられるためである」(マタイ一八ノ一六)。

殺人の裁判を受けた者が有罪ときまれば、どんな身のしろ金によっても贖うことはできなかった。主は、こう命じておられた。「人の血を流すものは、人に血を流される」(創世記九ノ六)。「あなたがたは死に当る罪を犯した故殺人の命のあがないしろを取ってはならない。彼は必ず殺されなければならない」(民数記三五ノ三一)。「そ

の者をわたしの祭壇からでも、捕えて行つて殺さなければならない」(出エジプト記二一ノ一四)。「地の上に流された血は、それを流した者の血によらなければあがなうことができない」(民数記三五ノ三三)。国民の安全と純潔のために、殺人の罪はきびしく罰せられることが要求された。人間の命は、神だけが与えになることができるのであつて、それは神聖に守られねばならない。

古代の神の民に定められたのがれの町は、キリストのうちに備えられているのがれを象徴している。この世のがれの町をお定めになった情け深い救い主が、ご自身の血を流すことによって、神の律法を犯した者に確実なのがれの道をお備えになっているのであつて、彼らはそこに逃げ込んで第二の死から守られることができるのである。ゆるしを求めて彼のもとに行く魂を、どんな権力も彼の手から引き離すことはできないのである。「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない。」「だが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえつて、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである。」「それは、…前におかれていた望みを捕えようとして世をのがれてきたわたしたちが、力強い励ましを受けるためである」(ローマ八ノ一、三四、ヘブル六ノ一八)。

のがれの町に逃げ込む者はくずくずしていることができなかった。家族も職業も放棄した。愛する人々に別れを告げるひまさえない。彼は死ぬか生きるかの境目にいたのであつて、ほかのことは全部、安全な場所にたどりつくという一つの目的のために、犠牲にしなくてはならない。疲れも忘れ、困難も気にかけていられない。のがれる人は、町の壁の中にはいるまでは一刻も歩みをゆるめようとしなかった。

罪人は、キリストのうちにかくれ場を見いだすまでは永遠の死にさらされている。のがれる者は、ぶらついた

り、軽率であつたりすれば生きる唯一の機会が失われるかもしれない。同じように、ぐずぐずしたりむとんちやくであつたりすることによつて魂は滅びるかもしれないのである。大敵サタンは、神の聖なる律法を破る人のあとを追っているので、自分の危険に気づかないで、永遠のがれの町の中に保護を熱心に求めようとする人は、この破壊者の手に陥るであらう。

囚人が、のがれの町の外へ出たならば、いつでも血の報復者に引き渡された。こうして人々は、彼らの安全を守るために限らない知恵によつて定められた方法を守らねばならないことを教えられた。そのように、罪人が、罪のゆるしを求めてキリストを信じるだけでは十分でない。彼は、信じ、従うことによつて、キリストの内になければならないのである。「もしわたしたちが、真理の知識を受けたのちにもなお、ことさらに罪を犯しつつけるなら、罪のためのいけにえは、もはやあり得ない。ただ、さばきと、逆らう者たちを焼きつくす激しい火とを、恐れつつ待つことだけがある」(ヘブル一〇ノ二六、二七)。

イスラエルの二つの部族、ガドとルベンは、マナセの半部族と共に、ヨルダンを渡る前に嗣業をもらっていた。牧畜を仕事とする民にとつて、羊の群れや家畜にとつて、見渡すかぎり牧草地となつてゐるギレアデとバシヤンの広大な高原と深い森は、カナンそのものにも見いだせなかつた魅力であつた。二部族と半部族はここに定住を希望した。そして、彼らに割り当てられた軍勢で、ヨルダン川を渡る兄弟たちと共に行かせ、彼らがその嗣業を手に入れるまで共に戦わせることを約束していた。この義務は忠実に果たされた。十部族がカナンにはいつたとき、「ルベンの子孫とガドの子孫、およびマナセの部族の半ばは、……戦いのために武装し、……主の前に渡つて、エリコの平野に着いた」(ヨシユア記四ノ一二、一三)。何年もの間、彼らは兄弟たちの側に立つて勇敢に戦

ってきた。今、彼らの嗣業の地にはいるときが来た。彼らは兄弟たちと共に戦い、戦利品も共にしてきた。彼らは、「多くの貨財と、おびただしい数の家畜と、金、銀、青銅、鉄、および多くの衣服を持って天幕に帰り」、それらを家族や羊群と共に残った人々に分け与えた(同・二二ノ八)。

彼らはこれから主の聖所から遠く離れたところに住むのであった。ヨシユアは、彼らが孤立して放牧の生活を送るときに、彼らの境界付近に住んでいる異教の部族の慣習に陥る誘惑が強いことを知って、彼らのことを気づかいながら、その出発を見送った。

ヨシユアやその他の指導者たちが、まだ不安な予感に襲われていたとき、奇妙な知らせがとどいた。ヨルダン川のほとりで、イスラエルが奇跡的に川を渡った場所の近くに、二部族半の人々が、シロの燔祭の祭壇に似たような大きな祭壇を建てたというのであった。神の律法には、聖所以外に礼拝の場所を設けることは死刑をもって禁じられていた。もしその祭壇の目的がこのようなものであったら、そのままにしておけば、人々を真の信仰から離れさせることになるだろう。

民の代表者たちはシロに集まり、激しい興奮と義憤のうちに、すぐに違反者たちと戦うことが提案された。しかし、慎重派の説得によつて、まず代表団を送つて二部族半の人々から彼らの行為についての説明を求めることにした。各部族から十人のつかさが選ばれた。そのかしらはピネハスで、彼はペオルの問題で特に熱心だった人である。

二部族半の人々が、なんの説明もしないで、このように重大な疑惑を招く行為をしたことは、彼らの過失であった。代表者たちは、この兄弟たちがまちがっていることはもちろんのこととして、鋭い譴責をもって彼らに迫

った。代表者たちは、彼らの行為は主に対する反逆であると言つて責め、イスラエルがバアル・ペオルに加わつたとき、どのように刑罰がくだつたかを思い出すようにと告げた。全イスラエルを代表して、ピネハスは、ガドとルベンの子孫に、もし彼らがいけにえをささげる祭壇のない土地に住みたくないのだったら、こちら側の兄弟たちの所有と特権をよるこんで分けるつもりだと述べた。

これに答えて、二部族半の人々は、彼らの祭壇はいけにえをささげるためのものではなくて、川によつて分けられてはいるけれども、彼らもカナンの兄弟たちと同じ信仰であるという証拠にすぎないのだと説明した。将来彼らの子孫が、イスラエルと関係のない者として幕屋から除外されるのではないかと彼らは恐れたのであつた。もしそういうことになったら、この祭壇は、シロの主の祭壇に型どつて造られているので、これを建てた人々も生きた神の礼拝者であるという証拠になるというのであつた。

代表団は、この説明を非常な喜びをもつて受け入れ、すぐにその知らせを、彼らを派遣した人々のもとへ持ち帰つた。戦う気持ちは消え去り、人々は喜んで一致し、神をほめたたえた。

ガドとルベンの子らは、今その祭壇の上に、それが建てられた目的を示す碑文を刻んだ。それには、「これは、われわれの間にあつて、主が神にいますというあかしをするものである」と書かれた(同・二二ノ三四)。こうして彼らは将来の誤解を防ぎ、誘惑のもとになりそうなものをとり除くことに努力した。

最も価値のある動機に動かされている人々の間でさえ、ちよつとした誤解から重大な問題がなんとよく起こることである。そして、礼儀と寛容が実行されないときに、なんという重大で致命的になりかねない結果が起こり得ることである。十部族は、アカンの事件のときに、彼らが自分たちの間にあつた罪を発見する注意力に欠

けていたことを神から譴責されたことを思い出したのである。そこで彼らは、敏速かつ熱心に行動しようと決心した。しかし、先の過失を避けようとするあまりに、極端になり過ぎたのだった。事情の真相を礼儀をもってたずねようとしなくて、彼らは譴責と非難をもって兄弟たちに迫った。ガドとルベンの男たちが、同じ精神でこれに応じたら、戦う結果になったであろう。罪をゆるやかにあしらうことは避けねばならないが、一方、またきびしすぎる批判と、根拠のない疑いを避けることもたいせつである。

自分自身の行為についてのちよつとした非難にも敏感であるにかかわらず、まちがっていると思われる人をあつかうのにはきびしすぎる人が多い。まちがった立場から、非難や譴責によって救われた者はない。むしろそのため正しい道からいつそう遠く離れ、良心の声にさからって心をかたくなにするようになる人が多い。親切な精神、礼儀正しい、寛容な態度は、あやまっている人々を救い、多くの罪をおおうのである。

ルベン人とその仲間たちが示した知恵は、まねる価値がある。彼らは真の宗教運動を推進させようとまじめに努力していたのに、あやまって判断され、譴責されたが、怒りを表わさなかった。彼らは自己弁護を試みる前に礼儀をもって忍耐強く兄弟たちの非難に耳を傾け、それから自分たちの動機を説明し、悪意がないことを示した。こうして、重大な結果をはらんだ問題が友好的に解決された。

まちがって非難されても、正しい人は冷静で思慮深い態度をとることができる。神は、人から誤解され、まちがったことを言われていることを全部ご存じであるから、問題を神のみ手にまかせて安心してすることができる。神は、アカンの罪をさぐり出されたのと同じように確実に、ご自分に信頼する人の主張を弁護してくださる。キリストの精神に動かされている人は、寛容で情け深い愛の心をもつのである。

民の間に一致と兄弟の愛があることが神のみこころである。十字架におつきになる前のキリストの祈りは、ご自分が父と一つであられるように弟子たちが一つであるように、また、神がキリストをつかわされたことを世が信じるようにということであつた。この最も感動的で驚くべき祈りは、各時代を通じて、われわれの耳にまで聞こえてくるのである。キリストのみことばは、「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします」であつた(ヨハネ一七ノ二〇)。真理の原則は一つでも犠牲にすべきではないが、このような一致の状態に達することがわれわれのふだんの目標でなければならない。これこそわれわれが弟子であることの証拠である。イエスは言われた。「互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであらう」(同・一三ノ三五)。使徒ペテロは、教会にこう勧めている。「あなたがたは皆、心をひとつにし、同情し合い、兄弟愛をもち、あわれみ深くあり、謙虚でありなさい。悪をもって悪に報いず、悪口をもって悪口に報いず、かえって、祝福をもって報いなさい。あなたがたが召されたのは、祝福を受け継ぐためなのである」(ペテロ第一・三ノ八、九)。

第 49 章

ヨシユアの決別の言葉

本章は、ヨシユア記二三、二四章に基づく。

征服の戦いは終わり、ヨシユアは、彼の故郷のテムナテ・セラの平和な家に引退した。「主がイスラエルの周囲の敵を、ことごとく除いて、イスラエルに安息を賜わったのち、久しくたち、…ヨシユアはイスラエルのすべての人、その長老、かしらたち、さばきびと、つかさびとたちを呼び集め」た(ヨシユア記二三ノ一、二)。

人々が、それぞれの領地に落ちついてから、数年が経過した。そして、以前、イスラエルに刑罰をもたらした同じ罪悪が、すでに現われているのを見ることができた。ヨシユアは、自分のからだは徐々に老衰していくのを感じ、まもなく務めを終えなければならないことを自覚して、彼の民の将来を非常に憂慮した。人々がもう一度この年老いた指導者のまわりに集まったとき、彼は父親以上の愛情をもって、彼らに語りかけたのである。「あなたがたは、すでにあなたがたの神、主が、このもろもろの国びとに行われたすべてのことを見た。あなたがたのために戦われたのは、あなたがたの神、主である」と、彼は言った(同・二三ノ三)。カナン人はすでに征服されたとは言っても、彼らは、まだ、イスラエルに約束された土地の相当の部分を所有していた。だからヨシユア

は、人々が安楽に落ちつくことなく、これらの偶像教国の人々を全く追放するように主が命じておられることを忘れないように勧告した。

人々は、一般に、異教徒を追放する仕事の完成を急がなかった。部族は、おのおのの領地に分散し、軍隊も解散されたことだから、戦いを再開することは困難で、できそうもない企てのように思われた。しかし、ヨシユアは宣言した。「あなたがたの前から、その国民を打ち払い、あなたがたの目の前から追い払われるのは、あなたがたの神、主である。そしてあなたがたの神、主が約束されたように、あなたがたは彼らの地を獲るであろう。それゆえ、あなたがたは堅く立って、モーセの律法の書にしていることを、ことごとく守って行わなければならぬ。それを離れて右にも左にも曲ってはならない」(同・二三ノ五、六)。

ヨシユアは、人々自身を証人として、彼らに訴え、彼らが条件に应じていたかぎり、神は、忠実に約束を成就なさったことを告げた。「あなたがたがみな、心のうちにまた、肝に銘じて知っているように、あなたがたの神、主が、あなたがたについて約束されたものもろの良いことで、一つも欠けたものはなかった。みなあなたがたに臨んで、一つも欠けたものはなかった」と、彼は言った(同・二三ノ一四)。彼は、主がその約束を成就なさったように、刑罰の警告もまた成就なさるであろうと言った。あなたがたの神、主があなたがたについて約束された、もろもろの良いことが、あなたがたに臨んだように、主はまた、もろもろの悪いことをあなたがたに下す。「もし、あなたがたの神、主が命じられたその契約を犯すならば「主はあなたがたにむかって怒りを発し、あなたがたは、主が賜わった良い地から、すみやかに滅びうせるであろう」(同・二三ノ一五、一六)。

神が、神の民を愛される愛は非常に大きいから、民の罪をお許しになるというもつともらしい説を唱えて、サ

タンは多くの人々を欺くのである。神の脅迫の言葉は、神の道徳的政府のなかで、ある種の役割を果たしはするが、それは文字通り成就するものではないと、サタンは言うのである。しかし、神は、その被造物に対するすべての扱いにおいて、罪の本性を明らかにあらわし、その確実な結果は、悲惨と死であることを実証して、義の原則を維持なさった。罪を無条件で許すことは、これまでになかったし、これからもないのである。そのような許しは神の政府の基礎そのものである義の原則を廃棄することになる。それは、墮落しない宇宙を驚嘆させることである。神は、忠実に罪の結果を指摘なさった。ところが、もしその警告が真実でないとすれば、どうして、神の約束が成就することを確かめることができようか。正義を廃棄するようないわゆる慈愛は、慈愛ではなくて弱さである。

神は、生命の与え主である。初めから、神の律法はみな生命を与えるように定められたものである。しかし、罪が、神のお設けになった秩序を破壊して、不調和をもたらした。罪が存在するかぎり、苦難と死は避けられない。人間が罪の恐ろしい結果から、自分でのがれる希望を持つことができるのは、ただ、贖い主がわれわれに代わって罪ののろいを負ってくださったことのみによるのである。

ヨシユアの死に先だって、部族のかしらと代表者たちは、彼の命令に従って、シケムに集まった。占領したすべての地のなかで、この場所ほど思い出の多い場所はなかった。彼らは、アブラハムとヤコブに対する神の契約を思い出し、カナン入国に際して彼ら自身が行なった厳粛な誓いをも想起した。ここにはエバル山とゲリジム山があつて、彼らが、今、死期の近づいた指導者の前に集まって、くり返そうとしている誓約の無言の証人として立っていた。どこを向いても、神が彼らのために行なわれた証拠があつた。神は、彼らが労することをしなかつ

た地、彼らが建てなかった町、彼らが植えなかったぶどう畑やオリブ畑を、彼らにお与えになった。ヨシユアはもう一度イスラエルの歴史を回顧し、神の驚くべきお働きをふたたび述べて、すべての者が神の愛と恵みを深く感じて、「まごころと、真実とをもって」主に仕えるように勧めた(同・二四ノ一四)。

ヨシユアの指示に従って、契約の箱がシロから持って来られた。これは、非常に厳粛な時の一つであって、この神の臨在の象徴は、彼が人々に与えようとした印象を強固なものにした。彼は、イスラエルに対する神の恵みを示したあとで、主の名によつて、彼らがだれに仕えるかを選べと人々に呼びかけた。偶像礼拝は、なお、ある程度まで、ひそかに行なわれていた。それでヨシユアは、彼らに決心を促して、イスラエルから、この罪を除こうとしたのである。「もしあなたがたが主に仕えることを、こころよしとしないのならば、…あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい」と彼は言った(同・二四ノ一五)。ヨシユアは、強制的でなくて、彼らが心から神に仕えるようになることを望んだ。神を愛することが、宗教の基礎そのものである。報酬を望んだり、あるいは、刑罰を恐れたりする気持ちだけから奉仕に携わるのでは、なんの益もない。神は、公然と反逆することと同様に、偽善と単なる形式的礼拝をおきらいになる。

年老いた指導者は、人々に、自分が言ったことをあらゆる方面からよく考えて、彼らの周囲の墮落した偶像教国のような生活を真に望むかどうかを決定するように勧告した。もし力と祝福との根源である主に従うのがいけなければ、アブラハムが召し出されてきた「あなたがたの先祖が…仕えた神々でも」また、「あなたがたの住む地のアモリびとの神々でも」、彼らが仕える者をきょう選べと言った(同・二四ノ一五)。彼のこうした最後の言葉は、イスラエルにとつて鋭い譴責であつた。アモリ人の神々は、その礼拝者を保護することができなかった。

あの、アモリという悪い国は、その憎むべき、退廃的罪のために滅ぼされて、彼らがかつて所有していたよい国土は、神の民に与えられたのである。アモリ人が礼拝して滅ぼされたような神々を、イスラエルの人々が選んで礼拝するとは、なんと愚かなことであろう。「わたしとわたしの家とは共に主に仕えます」とヨシユアは言った（同・二四ノ一五）。指導者の心に燃えたのと同じ清い熱望が人々に伝わった。彼の訴えに全員は答えて言った。

「主を捨てて、他の神々に仕えるなど、われわれは決していたしません」（同・二四ノ一六）。

「あなたがたは主に仕えることはできないであろう。主は聖なる神であり、…あなたがたの罪、あなたがたのとがを、ゆるされないからである」とヨシユアは言った（同・二四ノ一九）。真の改革が伴なわれるに先だつて、人々は、自分たちの力だけでは、神に従うことが全く不可能であることを自覚しなければならなかった。彼らは律法を犯したために、罪人とされ、なんののがれる道も与えられなかった。彼らが自分自身の力と義にたよっているかぎり、罪の許しを得ることは不可能であつた。彼らは、神の完全な律法の要求を満たすことはできず、神に仕えると誓つてもむだであつた。ただキリストを信じる信仰によつてのみ、罪の許しが与えられ、神の律法に従う力を受けることができるのである。彼らが神に受け入れられようとするならば、自分の力にたよつて救いを得ようとするのをやめ、約束の救い主の功績に全的に信頼しなければならぬ。

ヨシユアは、聴衆がよく自分たちの言葉を熟考して、彼らがなしとげられないような誓いをしないように、彼らを導こうと努めた。彼らは、熱誠こめて宣言をくり返した。「いいえ、われわれは主に仕えます」（同・二四ノ二一）。彼らは主を選んで、主に仕えることの証人と自らなることをおごそかに承認して、「われわれの神、主に、われわれは仕え、その声に聞きしたがいます」と、彼らの忠誠の誓約をもう一度くり返したのである（同・二四

ノ二四)。

「こうしてヨシユアは、その日、民と契約をむすび、シケムにおいて、定めと、おきてを、彼らのために設けた」(同・二四ノ二五)。彼は、この厳肅な誓約の記録を書いて、律法の書と共に、契約の箱のそばに置いた。そして彼は、記念の柱を建てて言った。『見よ、この石はわれわれのあかしとなるであろう。主がわれわれに語られたすべての言葉を、聞いたからである。それゆえ、あなたがたが自分の神を捨てることのないために、この石が、あなたがたのあかしとなるであろう』。こうしてヨシユアは民を、おのおのその嗣業の地に歸し去らせた」(同・二四ノ二七、二八)。

イスラエルのためになすべきヨシユアの働きは終わった。彼は、「全く主に従った」(民数記三二ノ一二)。そして彼は、神の書の中で「主のしもべ」と書かれている(ヨシユア記二四ノ一九)。彼の労苦の恩恵をこうむった時代の人々の歴史は、公の指導者としての彼の品性の尊い証言である。「イスラエルはヨシユアの世にある日の間、また…ヨシユアのあとに生き残った長老たちが世にある日の間、つねに主に仕えた」(同・二四ノ三一)。

十分の一献金とささげ物

ヘブル人の制度では、人々の収入の十分の一は、神を公に礼拝することを支持するために、聖別されていた。モーセは、このようにイスラエルに言明した。「地の十分の一は地の産物であれ、木の実であれ、すべて主のものであつて、主に聖なる物である。」「牛または羊の十分の一については、すべて…十番目…は、主に聖なる物である」(レビ記二七ノ三〇、三二)。

しかし、十分の一制度は、ヘブル人が創設したものではなかった。主は、初期のころから、十分の一をご自分のものとして主張され、それは、人々が認めて尊んだことであつた。アブラハムは、いと高き神の祭司、メルキゼデクに十分の一をささげた(創世記一四ノ二〇参照)。ヤコブは、家を追われて放浪の旅に出たとき、ベテルで「あなたがくださるすべての物の十分の一を、わたしは必ずあなたにささげます」と主に約束した(同・二八ノ二二)。イスラエルの国が建設されたときに、十分の一の律法は、神のお定めになった定めの一つとして再確認された。彼らの繁栄は、これに従うか否かにかかつていた。

十分の一とささげ物の制度は、神が、被造物にあらゆる祝福をお与えになる根源であるとともに、人間は、神が摂理の中にお与えになるよい賜物に対して、人間は、神に感謝すべきであるという大真理を人々に強く印象づけるためのものであつた。

「神は、すべての人々に命と息と万物とを与え」られた(使徒行伝一七ノ二五)。「林のすべての獣はわたしのもの、丘の上の千々の家畜もわたしのものである」(詩篇五〇ノ一〇)。「銀はわたしのもの、金もわたしのものである」と主は言われる(ハガイ書二ノ八)。そして、人間に、富を得る力をお与えになるのも神である(申命記八ノ一八参照)。万物は、神からのものであることを認めたとし、主の恵みの一部を、神の礼拝を維持するために供え物やささげ物として、主にお返しすることを指示なさつた。

「十分の一は…主のものである」(ここに、安息日の律法に用いられたのと同じ表現形式が用いられている)。「七日目はあなたの神、主の安息である」(出エジプト記二〇ノ一〇)。神は、人間の時間と財産の一定の部分をご自分のものとして保留なさつた。そこで、人間は、そのどちらであつても私用に供すれば、罪を犯すことになるのである。

十分の一は、聖所の奉仕のために聖別された部族、レビ人のためだけに用いるためにささげられた。しかし、宗教的やささげ物は、これだけではなかつた。初めの幕屋も、後に建てられた神殿も同様に、全く人々の自由献金によつて建設されたのである。さらに、修理その他の諸費用のために、モーセは、人口調査のたびに各自は半シケルずつを「幕屋の用に当てる」ためにささげることを指示した。ネヘミヤの時代には、こうした目的のために毎年ささげ物をした(出エジプト記三〇ノ一二—一六、列王紀下一二ノ四、五、歴代志下二四ノ四—一三、ネヘ

ミヤ記一〇ノ三二、三三参照)。罪祭や酬恩祭も、ときどき神の前にささげられた。年ごとの祭りのときには、こうした供え物がおびただしくささげられた。そして、貧者のためには、最もゆるやかな規則が設けられていた。

十分の一の保留以前でさえ、神の要求を認めなければならなかった。地のすべての産物の最初に実ったものは、神にささげられた。羊の毛を刈ったときや、麦を脱穀したときの最初のもの、油や酒の最初のものは、神のものとされた。それと同様にすべての動物のういごは、神のものであった。また、長子のためには、贖いの価を払ったのである。最初の実は、聖所で主の前にささげられ、それから、それは祭司たちの用に供された。

こうして、人々は常に神が彼らの畑や羊の群れや家畜などの真の所有者であって、神が、彼らの種まきや収穫のときに日光と雨をお与えになったこと、また、彼らの所有のすべては、神がお造りになったものであって、神が、彼らを神の財産の管理人になさったことを思い起こさせられた。

イスラエルの人々が、畑や果樹園やぶどう畑の初物をたくさん携えて、幕屋に集まったとき、彼らは、人々の前で神の恵みをたたえたのである。祭司が、そのささげ物を受け取ったときに、それをささげた人はあたかも自分が主の面前にあるかのように言うのであった。「わたしの先祖は、さすらいの—アラムびとでありました」(申命記二六ノ五)。そして、彼らがエジプトに下って行って、しいたげられたことと、そこから救い出されたことを述べ、「主は強い手と、伸べた腕と、大いなる恐るべき事と、しるしと、不思議とをもって、われわれをエジプトから導き出し、われわれをこの所へ連れてきて、乳と蜜の流れるこの地をわれわれに賜わりました。主よ、ごらんください。あなたがわたしに賜わった地の実の初物を、いま携えてきました」と言った(同・二六ノ八一〇)。

宗教と慈善の目的のためにヘブル人に要求された献金額は、彼らの収入の四分の一に及んだ。人々の財産に、

このような重税が課せられたのでは、人々は貧困に陥ってしまうと思われるであろう。ところが、この規則に忠実に従うことが、彼らの繁栄の条件の一つであった。彼らの服従を条件に、神は、こう約束なさった。「わたしは食い滅ぼす者を、あなたがたのためにおさえて、あなたがたの地の産物を、滅ぼさないようにしよう。…こうして万国の人は、あなたがたを祝福された者となえるであろう。あなたがたは楽しい地となるからであると、万軍の主は言われる」(マラキ書三ノ一、一二)。

預言者ハガイの時代には、人々が任意のささげ物すら出し惜しんで神のご用のためにささげなかった結果の著しい例があげられている。ユダヤ人は、バビロンの捕囚から帰還後、主の神殿の再建にとりかかった。ところが頑強な敵の反対に会って、工事は中断された。そして、ひどいひでりがやって来て、彼らは困窮状態に陥り、神殿の建築完成は不可能だと思ふようになった。「主の家を再び建てる時は、まだこない」と人々は言っていた。しかし、主の預言者は彼らに言った。「主の家はこのように荒れはてているのに、あなたがたは、みずから板で張った家に住んでいる時であろうか。それで今、万軍の主はこう言われる、あなたがたは自分のなすべきことをよく考えるがよい。あなたがたは多くまいても、取入れは少なく、食べても、飽きることはない。飲んで、満たされない。着ても、暖まらない。賃銀を得ても、これを破れた袋に入れていようなものである」(ハガイ書一ノ二 六)。そして、その理由が述べられている。「あなたがたは多くを望んだが、見よ、それは少なかった。あなたがたが家に持ってきたとき、わたしはそれを吹き払った。これは何ゆえであるかと、万軍の主は言われる。これはわたしの家が荒れはてているのに、あなたがたは、おのおの自分の家の事だけに、忙しくしている。それゆえ、あなたがたの上の天は露をさし止め、地はその産物をさし止めた。また、わたしは地にも、山にも、穀物

にも、新しい酒にも、油にも、地に生じるものにも、人間にも、家畜にも、手で作るすべての作物にも、ひでりを呼び寄せた」(同・一ノ九 一一)。「二十柘の麦の積まれる所に行ったが、わずかに十柘を得、また五十桶をくもうとして、酒ぶねに行ったが、二十桶を得たのみであった。わたしは立ち枯れと、腐り穂と、ひょうをもつてあなたがたと、あなたがたのすべての手のわざを撃った」(同・二ノ一六、一七)。

こうした警告に目をさまして、人々は神の家の建築にとりかかった。すると、主の言葉が彼らに与えられた。「あなたがたはこの日より後、すなわち、九月二十四日よりの事を思うがよい。また主の宮の基をすえた日から後の事を心にとめるがよい。……わたしはこの日から、あなたがたに恵みを与える」(同・二ノ一八、一九)。

「施し散らして、なお富を増す人があり、与えるべきものを惜しんで、かえって貧しくなる者がある」と賢者は言っている(箴言一一ノ二四)。同じ教訓を、使徒パウロは新約聖書で教えている。「少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。」「神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである」(コリント第二・九ノ六、八)。

神は、神の民イスラエルが、地のすべての住民に光を掲げる者になることをお望みであった。彼らは、神を公に礼拝することを維持して、生きた神の存在と主権のあかしを立てていたのである。そして、神に対する彼らの忠誠と愛の表現として、この礼拝を保っていくことが彼らの特権であった。主は、天からの賜物を受けた者たちの努力とささげ物によって、光と真理が地に行きわたるようになることをお定めになった。神は、天使たちを、神の真理の使者になさることもおできであった。シナイ山から律法を宣言なさったように、ご自分の声で、みこ

ころを人に知らせることもおできであった。しかし、神は無限の愛と知恵によって、人間を召して、神ご自身の共労者となし、彼らを選んでこの働きをおさせになった。

イスラエルの時代に、十分の一と任意のささげ物とは神の礼拝の儀式を維持するために必要であった。この時代に、神の民は、それ以下のものをささげるべきであろうか。キリストがお与えになった原則によれば、われわれのささげ物は、われわれに与えられた光と特権に比例してなされるべきである。「多く与えられた者からは多く求められ」る(ルカ二ノ四八)。救い主は、弟子たちを送り出されたとき、「ただで受けたのだから、ただで与えるがよい」と彼らに言われた(マタイ一〇ノ八)。われわれの祝福と特権が増加するに従い、特に、栄光に包まれた神のみ子の無比の犠牲を前にしては、救いの使命を他の人々に伝えるために、もっと多くのささげ物をして、感謝を表わすべきではないだろうか。福音の事業は、拡大するにつれて、昔よりは多くの資金がその維持のために必要である。それで、十分の一とささげ物の律法は、ヘブル時代におけるよりは、今日、さらにその必要が緊急度を加えた。もし神の民が、非キリスト教的の清められていない方法で資金を得る代わりに、多くの任意のささげ物によって神の働きを支持したならば、神のみ名があがめられ、もっと多くの魂が、キリストに導かれることであろう。

幕屋建設のためのモーセの募金計画は、大成功であった。勧める必要はなかった。現代の教会がよく行なうような方法は何一つ用いなかった。彼は、大宴会を開かなかった。また、人々をはなやかなところ、ダンスの場所、一般の娯楽場などに招待しなかった。神の幕屋の建設資金を得るために、宝くじや、この種の世俗の方法を制定なさらなかった。主は、イスラエルの子らに、ささげ物を携えてくるように頼めとお命じになった。モーセは、

心から喜んでささげる者からは、だれからでもささげ物を受け取った。そして、全部用いることができないほどたくさんのおささげ物を人々が携えて来たので、モーセは、人々にもう持つて来ないようにと命じたほどであった。

神は、人々を神の管理者になさった。神が人々の手にお任せになった財産は、福音を広く伝えるために神がお備えになった資金である。忠実なしもべには、もっと大きな責任が神から負わせられる。「わたしを尊ぶ者を、わたしは尊ぶ」と主は言われる(サムエル記上二ノ三〇)。「神は喜んで施す人を愛して下さるのである」。そして神の民が、「惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく」感謝して供え物やささげ物を神のところに携えて来るとき、神が約束なさったように、神の祝福がそれに伴うのである(コリント第二・九ノ七)。「わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもつてわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる」(マラキ書三ノ一〇)。

第 51 章

貧しい者への神の配慮

貧者のために備えると同様に、人々が集会に集まることを奨励するために、すべての収入の第二の十分の一が要求された。第一の十分の一について、主は、「わたしはレビの子孫にはイスラエルにおいて、すべて十分の一を嗣業として与え」と言われた(民数記一八ノ二二)。しかし、第二の十分の一については、次のようにお命じになった。「そしてあなたの神、主の前、すなわち主がその名を置くために選ばれる場所で、穀物と、ぶどう酒と、油との十分の一と、牛、羊のういごを食べ、こうして常にあなたの神、主を恐れることを学ばなければならぬ」(申命記一四ノ二三。同一四ノ二九、一六ノ一一 一四参照)。この十分の一、または、それと同額の金を二年の間、聖所が建てられたところに携えてくることになっていた。神に感謝のささげ物をささげ、祭司のために規定された分もささげたあとで、献納者はその残りの部分を宗教的祭りに用い、レビ人、他国人、孤児、寡婦などと呼んで食べさせなければならなかった。こうして年ごとの祭りのときに、感謝のささげ物をして、祭りを行なう準備がされていて、人々は、祭司やレビ人との交わりに導かれ、神の奉仕について教えと励ましを受ける



年ごとの祭りにおいてささげられる感謝のささげ物や祭司への贈り物の中には、貧しい人々に対する贈り物が含まれていた。こうしてすべての者が共に楽しむことができた。

ことができた。

ところが、三年めになるといつでもこの第二の十分の一は、「町のうちで彼らに飽きるほど食べさせ」とモーセが言ったように、レビ人や貧者を、家庭でもてなすことになっていた（申命記二六ノ一二）。この十分の一は、慈善とてなしの資金を提供した。

貧者のためには、さらに考慮が払われていた。神のご要求に応じることについて、貧者に対する物惜しみしない、慈愛のこもったもてなしの精神ほど、モーセの律法のなかで著しく表わされているものはほかにない。神は神の民を大いに恵むとお約束になったとは言え、貧困が全く彼らの間からなくなることは、神のみ旨ではなかった。神は、地上から貧者がいなくなることはないと言われた。神の民の間には、常に、彼らの同情、親切、愛を働かせる人々があるものである。今日と同様に、そのときでも、不幸な人や病氣の人、また財産を失った人がいた。しかし、彼らが神から受けた教えに従っているかぎり、彼らの間にこじきをする者も、食に困る者もないはずであった。

神の律法は、貧者が地の産物の幾分かを分けまえとして受ける権利を与えた。飢えたときには、隣人の畑、果樹園、ぶどう園などに行つて、自由に穀物やくだものを食べて飢えを満たしてもよかった。イエスの弟子たちが安息日に畑を通りながら穀物を取つて食べたのは、そうしてよいことになっていたからであった。

収穫の畑、果樹園、ぶどう園などの落ち穂は、すべて貧者のものであった。「あなたが畑で穀物を刈る時、もしその一束を畑におき忘れたならば、それを取りに引き返してはならない。……あなたがオリブの実をうち落すときは、ふたたびその枝を捜してはならない。……またぶどう畑のぶどうを摘み取るときは、その残ったものを、

ふたたび捜してはならない。それを寄留の他国人と孤児と寡婦に取らせなければならない。あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったことを記憶しなければならない」とモーセは言った(同・二四ノ一九 二二。レビ記一九ノ九、一〇参照)。

七年めごとに、貧者のために特別の用意がなされた。それは、安息の年と呼ばれて、収穫の終わったときから始まった。収穫の次の種まきのときには、種をまいてはならなかった。彼らは、春、ぶどう畑の手入れをしてはならなかった。そして、収穫もぶどうの実りも期待してはならなかった。地から自然に実ったものは、生のまま食べてもよかったが、そのどの部分でも倉にたくわえてはいけなかった。この年の収穫は、寄留の他国人、孤児、寡婦、また、野の獣さえも自由に食べてよかった(出エジプト記二三ノ一〇、一一、レビ記二五ノ五参照)。

しかし、土地が通常人々の必要を満たすだけを産出していたのであれば、収穫を集めない年は、いったいどのようなにして生きていたのであろうか。これに対して、神は十分のものを備えることを約束なさった。「わたしは命じて六年目に、あなたがたに祝福をくだし、三か年分の産物を実らせるであろう。あなたがたは八年目に種をまく時には、なお古い産物を食べているであろう。九年目にその産物のできるまで、あなたがたは古いものを食べることができるであろう」(レビ記二五ノ二一、二二)。

安息の年を守ることは、土地にも人々にも共に有益なことであつた。一季節の間、耕さないでおいた土地は、その後生産力が増大した。人々は畑の労働から解放された。そして、その間、種々の活動に従事することができるのであつたが、すべての者は、暇のあるゆつくりした生活を楽しみ、その次の年からの労働に備えて体力をたぐわえる機会としたのである。彼らは、もっと多くの時間を瞑想と祈祷に用い、主のお教えと要求なさることを

学び、家族の者らを教えるために費やした。

安息の年に、ヘブルの奴隷は解放され、しかも、何も持たせずに送り出してはならなかった。主は、こうお命じになった。「彼に自由を与えて去らせる時は、から手で去らせてはならない。群れと、打ち場と、酒ぶねのうちから取って、惜しみなく彼に与えなければならぬ。すなわちあなたの神、主があなたを恵まれたように、彼に与えなければならぬ」(申命記一五ノ一三、一四)。

労働者の賃銀はすみやかに払わなければならなかった。「貧しく乏しい雇人は、同胞であれ、またはあなたの国で、町のうちに寄留している他国人であれ、それを虐待してはならない。賃銀はその日のうちに払い、それを日の入るまで延ばしてはならない。彼は貧しい者で、その心をこれにかけているからである」(同・二四ノ一四、一五)。

また、仕事を逃げてきた者の取り扱いについても特別の指示が与えられた。「主人を避けて、あなたのところに逃げてきた奴隷を、その主人にわたしてはならない。その者をあなたがたのうちに、あなたと共におらせ、町の一つのうち、彼が好んで選ぶ場所に住ませなければならない。彼を虐待してはならない」(同・二三ノ一五、一六)。

貧者にとって、安息の年は、負債から解放される年であつた。ヘブル人は、常に利息なしで金を貸して、貧しい兄弟を助けるように命じられていた。貧者から利息を取ることは堅く禁じられていた。「あなたの兄弟が落ちぶれ、暮して行けない時は、彼を助け、寄留者または旅びとのようにして、あなたと共に生きながらえさせなければならぬ。彼から利子も利息も取ってはならない。あなたの神を恐れ、あなたの兄弟をあなたと共に生きな

がらせなければならぬ。あなたは利子を取って彼に金を貸してはならない。また利益を与えるために食物を貸してはならない」(レビ記二五ノ三五 三七)。もし負債が、解放の年まで未払いのままであれば、元金そのものを取り立てることはできなかった。このために、困っている兄弟に対する援助を差し控えないように、はつきりした警告が与えられていた。「もしあなたの兄弟で貧しい者がひとりでも……おるならば、その貧しい兄弟にむかつて、心をかたくなにしてはならない。また手を閉じてはならない。……あなたは心に邪念を起し、『第七年のゆるしの年が近づいた』と言って、貧しい兄弟に対し、物を惜しんで、何も与えないことのないように慎まなければならぬ。その人があなたを主に訴えるならば、あなたは罪を得るであろう。」「貧しい者はいつまでも国のうちに絶えることがないから、わたしは命じて言う、『あなたは必ず国のうちにいるあなたの兄弟の乏しい者と、貧しい者とに、手を開かなければならない。』」その必要とする物を貸し与え、乏しいのを補わなければならない」(申命記一五ノ七 九、一一、八)。

多く施しても、困るようになるなどと憂慮する必要はだれもなかった。神のいましめに従えば、必ず繁栄するのであった。「あなたは多くの国びとに貸すようになり、借りることはないであろう。またあなたは多くの国びとを治めるようになり、彼らがあなたを治めることはないであろう」と神は言われた(同・一五ノ六)。

「安息の年を七たび」「七年を七回」数えると、大いなる解放の年、ヨベルの年になる。「あなたは……全国にラッパを響き渡らせなければならぬ。その五十年目を聖別して、国中のすべての住民に自由をふれ示さなければならぬ。この年はあなたがたにはヨベルの年であって、あなたがたは、おのおのその所有の地に帰り、おのおのその家族に帰らなければならない」(レビ記二五ノ八、九、一〇)。

「七月の十日」の「贖罪の日」に、ヨベルのラツパが鳴り響いた。ユダヤ人の住んでいるあらゆる場所で、その音が響き、ヤコブのすべての子らに、解放の年を迎えるように呼びかけた。贖罪の日、イスラエルの罪の償いが完了し、人々は、喜ばしい心をもって、ヨベルの年を迎えた。

安息の年と同様に、土地には種をまかず、収穫もしてはならなかった。そして、地が生じたものは、すべて貧者の正当な所有とみなされた。ヘブルの奴隷のある階級のもの、すなわち、安息の年に自由を得なかった者は、すべてこの時に自由にされた。しかし、ヨベルの年を特に著しいものにしたのは、すべての土地が、その初めの所有主にもどったことであつた。神の特別の指示に従つて、土地はくじによつて分配されていた。分配が行なわれたあとでは、だれもそれを自由に交換することはできなかった。貧しくなつて、売らなければならないようになるまで、土地を売つてはならなかった。それでも、なお、その人かその人の親族が買いもどしたければ、買い手は売ることを拒んではならなかった。そして、買いもどされないままであれば、その土地はヨベルの年に、最初の所有主かその子孫に返ってきたのである。

主は、イスラエルに言われた。「地は永代には売つてはならない。地はわたしのものだからである。あなたがたはわたしと共にいる寄留者、また旅びとである」(同・二五ノ二三)。土地は神のものであつて、彼らは、一時所有することを許されたこと、神が最初の所有主であり、正当な持ち主であること、そして、神は、貧者や不幸な人々を特に考慮することを望んでおられるという事実を、人々の心に強く印象づけなければならなかった。貧者は、富者と同様に、神の世界において同じ権利を持っていることを、すべてのものに印象づけなければならなかった。

慈愛に富みたもうわれわれの創造主は、このような規定を設けて、苦しみを和らげ、希望の光を与え、欠乏と困苦の生活を送っている者に、日の光を輝かされたのである。

主は、人々が過度に財産と権力を持つと欲する心を持たないように、制限をおこうとされた。一方の階級は富の蓄積を続け、他方では貧困と墮落に陥れば大きな弊害が起こる。何かそこに制限がなければ、金持ちは権力を独占するようになり、貧者は、神の目の前にはすべての点において同様の価値があるにもかかわらず、繁栄している兄弟たちよりは劣っているようにみなされて取り扱われるのである。このような圧迫感が、貧しい階級の怒りの原因になる。失望と絶望感が、社会の道德を退廃させ、あらゆる種類の犯罪の動機となるのである。神がお定めになった規定は、社会の平等を助長するためのものであった。安息の年とヨベルの年の規定は、その期間内に、国家の社会と政治組織にできたひずみを、大いに改善するものであった。

こうした規定は、貧者と同様に富者を祝福するために考案された。それは、強欲と自己高揚の性質を抑制し、気高い慈善心を養い、そして、すべての階級間の友好と信頼をはぐくみ、社会秩序を助長して、国家を強固にするものであった。われわれはみな、大人類という織物の中に織り込まれていて、他を益し、向上させるための努力は、なんであれ、われわれの祝福となつて返ってくる。相互依存の法則は、社会のすべての階級に行き渡っている。貧者は富者に依存し、富者は、また貧者に依存している。一階級は、神が金持ちにお与えになった祝福の一部を求めるが、他方、富者のがわでは、忠実な奉仕、頭脳や筋骨の力を必要としている。これらは、貧者の資本である。

主の指示に従うことを条件にして、イスラエルには大きな祝福が約束された。主は、こう言われた。「わたし

はその季節季節に、雨をあなたがたに与えるであらう。地は産物を出し、畑の木々は実を結ぶであらう。あなたがたの麦打ちは、ぶどうの取入れの時まで続き、ぶどうの取入れは、種まきの時まで続くであらう。あなたがたは飽きるほどパンを食べ、またあなたがたの地に安らかに住むであらう。わたしが国に平和を与えるから、あなたがたは安らかに寝ることができ、あなたがたを恐れさすものはないであらう。わたしはまた国のうちから悪い獣を絶やすであらう。つるぎがあなたがたの国を行き巡ることはないであらう。……わたしはあなたがたのうちに進み、あなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となるであらう。……しかし、あなたがたがもしわたしに聞き従わず、またこのすべての戒めを守らず、……わたしの契約を破るならば、……あなたがたが種をまいてもむだである。敵がそれを食べるであらう。わたしは顔をあなたがたにむけて攻め、あなたがたは敵の前に撃ちひしがれるであらう。またあなたがたの憎む者があなたがたを治めるであらう。あなたがたは追う者もないのに逃げるであらう」(同・二六ノ四 一七)。

神の物質的祝福を万人が平等に分配すべきであるということを熱心に力説する人々が多くいる。しかし、これは、創造主のみこころではなかった。いろいろな事情が異なることは、品性をためし、啓発するために、神が有用になる方法の一つである。けれども、世的財産を所有する者が自分たちは神の財産の単なる管理人に過ぎないことを自覚することを、神は望まれる。つまりそれは、苦しみ、悩む者たちの幸福のために用いるように、神から託された財産とみなすべきである。

キリストは、貧しい人々はいつもあなたがたと共にいると言われ、苦しむ人々とご自分の利害を一つにされた。われわれの贖い主は、地上の子らの最も貧しく、最も卑しい者に同情なさる。主は、彼らはこの地上の主の代表

者であると言われる。主は、彼らをわれわれの間に置いて、主が苦しむ者や押えられた者にお感じになる愛を、われわれの心に呼び起こそうとなさるのである。彼らに対するあわれみと慈愛は、キリストご自身に対してあらわしたものであるかのように、キリストはお受けになるのである。彼らに対する残酷と無視は、主に対して行なったのと同じようにみなされる。

神が貧者の幸福のためにお与えになった律法が守られていたなら、現在の世界の状態は、道徳的に、靈的に、物質的にどんなに異なったところとなったであろうか。利己心と自尊は今ほどあらわされず、お互いの幸福と繁栄を願う思いやりの精神を互いに持っていることであろう。そして、今日のように貧困が各国の広大な地域に及ぶことはないであろう。

神がお命じになった原則は、富者が貧者を圧迫し、貧者が富者を疑い憎んだ結果、各時代に起こった恐ろしい罪惡を阻止することであろう。それは、巨万の富の蓄積と過度のぜいたくな生活にふけることを防止するとともに、巨額の富の蓄積に必要な幾千、幾万の人々の労働賃銀が低いために必然的に起こる無知と墮落をも防ぐことであろう。この原則は、現在世界を無政府状態と流血ざたに陥れようとしている諸問題に平和的解決を与えることであろう。

第 52 章

年ごとの祭り

本章は、レビ記二三章に基づく。

全イスラエルが、礼拝のために聖所に集まるのは、年に三回あった。しばらくの間、シロがこうした集会の場所になっていたが、後に、エルサレムが全国の礼拝の中心地になり、各部族は厳粛な祭りを行なうためにここに集まった。

人々は、彼らの土地を奪おうとする荒々しい好戦的種族に取り囲まれていた。しかし、からだのじょうぶな男たちと旅行に耐え得る者は皆、その家を離れて全国の中心近くにあった集会の場所へ行くように命じられていた。敵が、こうした無防備の家々に攻め込んで、火と剣で荒らすのを、いったい何が防いだのであろうか。神が、人の保護者になることをお約束になっていたのである。「主の使は主を恐れる者のまわりに陣をしいて彼らを助けられる」(詩篇三四ノ七)。イスラエル人が、礼拝に行っている間、神の力が彼らの敵を押えていた。「わたしは国々の民をあなたの前から追い払って、あなたの境を広くするであろう。あなたが年に三度のぼって、あなたの神、主の前に出る時には、だれもあなたの国を侵すことはないであろう」(出エジプト記三四ノ二四)。

こうした祭りの第一のものは、ユダヤ暦の第一月、すなわちアビブの月に行なわれた過越の祭りと種入れぬパンの祭り、これは（太陽暦の）三月末から四月の初めに当たる。寒い冬が過ぎ、後の雨も終わり、自然はことごとく春の新鮮さと美を楽しんでいた。岡や谷の草は緑にもえ、いたる所に野の花が咲き乱れて、陽気であった。月は満月に近かったので、夜も楽しかった。聖書の歌人は、この季節を次のように美しく歌っている。

「見よ、冬は過ぎ、

雨もやんで、すでに去り、

もろもろの花は地にあらわれ、

鳥のさえずる時がきた。

山ばとの声がわれわれの地に聞える。

いちじくの木はその実を結び、

ぶどうの木は花咲いて、かんばしいにおいを放つ」。

（雅歌二ノ一 一三）

人々は、全国からエルサレムへの巡礼の旅に出た。羊飼いは羊の群れから、牧者は山々から、漁師はガリラヤ湖から、預言者の子らは、預言者の学校からというふうに、すべての者が神の臨在のあらわされた場所へと、その足を向けた。徒歩で旅する者が多かったので、彼らは、休み休み進んでいった。旅人の群れは、続々合流して

聖都に到着するまでには、大群集になることもしばしばあった。

美しい自然をながめて、イスラエルの人々の心は喜びに満ち、すべてのよい物の与え主なる神に感謝をあらわすのであった。彼らは、壮大なヘブルの詩を歌い、主の栄光と威光とをたたえた。合い図のラッパの響きに、シンバルの音も加わって、感謝の合唱が始まると、それに幾百の声が和して、とどろき渡った。

「人々がわたしにむかって『われらは主の家に行こう』

と言ったとき、わたしは喜んだ。

エルサレムよ、われらの足は

あなたの門のうちに立っている。

…エルサレムよ、

もろもろの部族すなわち主の部族が、…

…主のみ名に感謝する…

エルサレムのために平安を祈れ、

『エルサレムを愛する者は栄え』」。

(詩篇一二二ノ一 六)

彼らの回りに、かつて異教徒がその祭壇の火をともした山々を見たときに、イスラエルの子らは歌った。

「わたしは山にむかって目をあげる。

わが助けは、どこから来るであろうか。

わが助けは、天と地を造られた主から来る」。

(詩篇一二二ノ一、二)

「主に信頼する者は、動かされることなく、

とこしえにあるシオンの山のようにある。

山々がエルサレムを囲んでいるように、

主は今からとこしえにその民を囲まれる」。

(詩篇一二五ノ一、二)

聖なる都の見える山まで登り、礼拝者の大群が、神殿に向かって進むのを見て、彼らの心は畏敬の念に満たされた。彼らは、香の煙が立ちのぼるのを見た。そして、聖なる儀式の時刻を知らせるレビ人のラツパの響きを聞いたとき、彼らも、深い感動をおぼえて歌った。

「主は大いなる神であつて、

われらの神の都、その聖なる山で、

大いにほめたたえらるべき方である。

シオンの山は北の端が高くて、うるわしく、

全地の喜びであり、大いなる王の都である」。

（詩篇四八ノ一、二）。

「その城壁のうちに平安があり、

もろもろの殿のうちに安全があるように」。

「わたしのために義の門を開け、

わたしはその内にはいつて、主に感謝しよう」。

「わたしはすべての民の前で

主にわが誓いをつぐないます。

エルサレムよ、あなたの中で、

主の家の大庭の中で、これをつぐないます。

主をほめたたえよ」。

（詩篇一二二ノ七、一一八ノ一九、一一六ノ一八、一九）

エルサレムの住宅は、全部、旅人のために開放されて、へやは無料で提供された。しかし、それでも、集まっ



過ぎ越しの祭りのときには、エルサレムに向かって各地から人々が集まった。
春の自然界の美しさをながめて、彼らの心は神への感謝にあふれた。

た多くの人々を収容するには不十分で、都や回りの山々のあき地というあき地には、天幕が張られた。

その月の十四日の夕方に、過越の祭りが行なわれた。それは、エジプトの奴隷からの解放を記念するとともに人々を罪から解放する犠牲を予表した厳肅で印象深い儀式であった。救い主がカルバリーでおなくなりになったときに、過越の祭りの意義はもうなくなり、過越の祭りが象徴していた同じ事件の記念として、主の晩餐儀式が制定された。

過越の祭りに引き続いて、七日間の種入れぬパンの祭りがあった。その初めの日と第七日は聖会であって、どのような労働もしてはならなかった。祭りの第二日に、その年の収穫の初穂を神の前にささげなければならなかった。パレスチナでは、大麦が一番早い穀物で、祭りの初めに実り始めていた。祭司は、大麦の穂を神の祭壇の前で揺り動かし、すべての物が神のものであることを認めた。この儀式がすまなければ、作物を集めてはならなかった。

初穂をささげてから五十日めは、ペンテコステであった。それは、また、収穫の祭り、または七週の祭りととも呼ばれた。穀類が、食物として備えられたことの感謝の表現として、種を入れて焼いたパンを二つ、神の前にささげた。ペンテコステは、ただ一日だけであったが、その日は、宗教の行事にささげられた。

七月に、仮庵の祭り、または、取り入れの祭りがあった。この祭りは、神が果樹園やオリブ畑やぶどう園の産物を豊かに恵まれたことを認めたものであった。これは一年の祭りの中の最大の祭りであった。土地は産物を生じ、収穫は集めて倉に収められ、くだもの、油、酒などもたくわえられ、初穂は保存された。そして、今や、人は、このように豊かに彼らをお恵みになった神に、感謝の供え物を携えてきたのである。

この祭りは、特に、喜びにあふれた祝典であつた。それは、大いなる贖罪の日の直後で、彼らの罪はもはや記憶されないという確証が与えられたあとであつた。彼らは、神との和らぎを得て、神の恵みを感謝し、神の慈悲をたたえるために、今、神のみ前に来たのであつた。収穫の労働はすみ、新しい年の労苦はまだ始まっていないので、人々は、なんの心配もなく、この聖なる、歡喜にあふれた祭りのふんい氣に、心から溶け込むことができたのである。祭りに出席することを命じられたのは、父とむすこたちだけであつたけれども、できるだけ全家族が出席すべきであつた。そして、しもべたち、レビ人、他国人、貧者などが、彼らのもてなしにあずかつたのである。

仮庵の祭りは、過越の祭りと同様に、過ぎ去つたできごとの記念であつた。人々は、彼らの荒野の旅を記念して、家を離れ、仮庵、または、「美しい木の実と、なつめやしの枝と、茂つた木の枝と、谷のはこやなぎの枝」などの緑の枝で作つた仮小屋に住んだ(レビ記二三ノ四〇。四二、四三参照)。

第一日めは、聖会であつた。そして、祭りの七日間は第八日めが加えられて、これも同様のことが行なわれた。こうした年ごとの集会において、年長の者も青年も、神に仕える精神を助長される。それとともに、各地から参集した人々との交わりは、彼らと神との交わりと、お互いの間の交わりを強固にするのであつた。現代においても、神の民が仮庵の祭りを祝うのはよいことである。それは、彼らに与えられた神の祝福を感謝して記念することであつた。イスラエルの子らが、先祖のために行なわれた神の救済とエジプトからの旅の間の奇跡的保護とを祝つたように、われわれは、神があらゆる方法を講じて、われわれをこの世と誤りの暗黒の中から救い出して神の恵みと真理の尊い光の中に入れてくださったことを思い出して感謝すべきである。

幕屋から遠方のところに住んでいた者は、毎年、一か月以上も、年ごとの祭りに列席するために費やさなければならなかった。このような神への献身の例を見ると、宗教的礼拝の重要性と、われわれの利己的で世的な関心をおさえて、靈的で永遠に関することを助長することの必要性和を強く感じるべきである。神に仕えて、お互いを力づけ励まし合うために、共に交わる特権を怠るときに、われわれは損失をこうむる。神の言葉の真理は、われわれの心の中で、その活気と重要性を失ってしまう。われわれの心は、清めの力によって、啓発覚醒されなくなり、靈的に低下する。お互いに同情が欠けているために、クリスチャンとしてのわれわれの交わりにおいて大きな損失を招くのである。自分を自己の殻の中に閉じこめてしまうものは、神が彼のためにご計画になった場所を満たしていない。われわれは、みな、ひとりの天の父の子供たちで、お互いにその幸福は他に依存している。神の要求と人類の要求が、われわれに負わせられている。われわれの性質の社交的方面を正しく啓発させることによって、われわれは兄弟たちに同情を寄せるようになる。そして、他を祝福しようと努力することによって、われわれは幸福になるのである。

仮庵の祭りは、ただ単に記念であるだけでなく、象徴でもあった。それは、荒野の旅をふり返っていただけでなく、収穫の祭りと同様に、大いなる日の最後の収穫を予表していた。収穫の主は、そのとき、刈り入れ人をつかわして、毒麦をたばねて火に焼き、麦は倉に収める。そのとき、すべての悪人は滅ぼされる。彼らは、「かつてなかったようになる」(オバデヤ書一六)。そして、全宇宙のすべての者は、神に対する喜ばしい賛美の声をあげる。「またわたしは、天と地、地の下と海の中にあるすべての造られたもの、そして、それらの中にあるすべてのものの言う声を聞いた、御座にいますか」と小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々

限りなくあるように」(黙示録五ノ一三)。

イスラエルの人々は、神が彼らをあわれんでエジプトの奴隷から解放し、荒野を旅していたときも、情け深くお守りになったことを思い出して、仮庵の祭りのときに神を賛美した。彼らは、また、終わったばかりの贖罪の日の儀式によって、許され、受け入れられたことを自覚して喜んだ。しかし、主に贖われた者が、天のカナンに無事集められ、「被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けている」のろいから永遠に解放されるときに、彼らは、言葉で言い表わせない喜びを味わい、栄光に満たされるのである(ローマ八ノ二二)。

人類のためのキリストの贖罪の働きはそのときに終わるし、彼らの罪は、永久に消し去られるのである。

「荒野と、かわいた地とは楽しみ、

さばくは喜びて花咲き、さふらんのように、

さかんに花咲き、

かつ喜び楽しみ、かつ歌う。

これにレバノンの栄えが与えられ、

カルメルおよびシャロンの麗しさが与えられる。

彼らは主の栄光を見、われわれの神の麗しさを見る」。

「その時、目しいの目は開かれ、

耳しいの耳はあけられる。

その時、足なえは、しかのように飛び走り、
おしの舌は喜び歌う。

それは荒野に水がわきいで、
さばくに川が流れるからである。

焼けた砂は池となり、

かわいた地は水の源となり、…

そこに大路があり、

その道は聖なる道となえられる。

汚れた者はこれを通り過ぎることはできない、

愚かなる者はそこに迷い入ることはない。

そこには、ししはおらず、

飢えた獣も、その道にのぼることはなく、

その所でこれに会うことはない。

ただ、あがなわれた者のみ、そこを歩む。

主にあがなわれた者は帰ってきて、

その頭に、とこしえの喜びをいただき、
歌うたいつつ、シオンに来る。

彼らは楽しみと喜びとを得、
悲しみと嘆きとは逃げ去る」。

(イザヤ書三五ノ一、二、五
一〇)

第 53 章

初期の士師たち

本章は、士師記六 八、一〇章に基づく。

部族は、カナン定住後、国土の征服を完成するために活発な努力をしなかった。すでに得た領土に満足して、やがて、彼らの気力は衰えて戦争をやめてしまった。「イスラエルは強くなったとき、カナンびとを強制労働に服させ、彼らをことごとくは追い出さなかった」(士師記一ノ二八)。

主は、ご自分がイスラエルになさった約束を忠実にお果たしになった。ヨシユアは、カナン人の力をくじき、国土を部族の間に分配した。あとは、彼らが神の援助の確証を信頼して、土地に住んでいる住民を追い出す仕事を完成すればよかった。しかし、彼らはそれをしなかったのである。彼らは、カナン人と同盟を結んで、神の命令に直接反逆し、そうすることによって、神が彼らにお与えになったカナン所有の約束の条件を履行しなかった。

神が、シナイにおいて、彼らと交わられた一番初めのときから、彼らには、偶像礼拝に対する警告が与えられていた。律法宣言の直後、カナンの国々について、モーセによって次のような知らせが、彼らに与えられた。「あなたは彼らの神々を拜んではならない。これに仕えてはならない。また彼らのおこないにならってはならない。

あなたは彼らを全く打ち倒し、その石の柱を打ち砕かなければならない。あなたがたの神、主に仕えなければならない。そうすれば、わたしはあなたがたのパンと水を祝し、あなたがたのうちから病を除き去るであろう」(出エジプト記二三ノ二四、二五)。彼らが忠実であるかぎり、神は、彼らの前の敵を滅ぼされるという確証が与えられた。「わたしはあなたの先に、わたしの恐れをつかわし、あなたが行く所の民を、ことごとく打ち破り、すべての敵に、その背をあなたの方へ向けさせるであろう。わたしはまた、くまばちをあなたの先につかわすであろう。これはヒビびと、カナンびと、およびヘテびとをあなたの前から追い払うであろう。しかし、わたしは彼らを一年のうちには、あなたの前から追い払わないであろう。土地が荒れすたれ、野の獣が増して、あなたを害することのないためである。わたしは徐々に彼らをあなたの前から追い払うであろう。あなたは、ついにふえひろがって、この地を継ぐようになるであろう。…この地に住んでいる者をあなたの手にわたすであろう。あなたは彼らをあなたの前から追い払うであろう。あなたは彼ら、および彼らの神々と契約を結んではならない。彼らはあなたの国に住んではならない。彼らがあなたをいざなって、わたしに対して罪を犯させることのないためである。もし、あなたが彼らの神に仕えるならば、それは必ずあなたのわなとなるであろう」(同・二三ノ二七三三)。モーセは、こうした指示を、その死の前にいと厳肅に反復し、それをまたヨシユアがくり返した。

神は、道徳的罪惡の潮流をとめ、世界じゅうが洪水になるのを防ぐ防壁として、神の民をカナンにおかれた。もし、イスラエルが忠実であつたならば、神は、彼らが征服に征服を続けていくようにご計画になった。神は、カナン人よりも強大な国家を彼らの手に渡そうとしておられた。約束は、こうであつた。「もしわたしがあなたがたに命じるこのすべての命令をよく守って行…うならば、主はこの国々の民を皆、あなたがたの前から追い

払われ、あなたがたはあなたがたよりも大きく、かつ強い国々を取るに至るであろう。あなたがたが足の裏で踏む所は皆、あなたがたのものとなり、あなたがたの領域は荒野からレバノンに及び、また大川ユフラテから西の海に及びであろう。だれもあなたがたに立ち向かうことのできる者はないであろう。あなたがたの神、主は、かつて言われたように、あなたがたの踏み入る地の人々が、あなたがたを恐れおののくようにされるであろう」(申命記一ノ二二 二五)。

彼らは、こうした崇高な運命のもとにあつたにもかかわらず、安易と放縦の道を選んだ。彼らは、国土征服を完成する機会を逸した。そして、彼らは、幾世代もの間、これらの偶像教徒の子孫に悩まされた。その人々は、預言者が預言していたとおり、彼らの目に「とげ」となり、彼らのわきに「いばら」となったのである(民数記三三ノ五五)。

イスラエル人は、「かえつてもろもろの国民とまじつてそのわざになら」つた(詩篇一〇六ノ三五)。彼らは、カナン人と雑婚し、偶像礼拝は、疫病のように国中に広がった。「自分たちのわなとなつた偶像に仕えた。彼らはそのむすこ、娘たちを悪霊にささげ、……こうして国は血で汚された。……それゆえ、主の怒りがその民にむかつて燃え、その嗣業を憎ん」だ(同・一〇六ノ三六 四〇)。

ヨシユアの教えを受けた世代がなくなつてしまふまでは、偶像礼拝はほとんど広がらなかつた。しかし、両親が子供たちの背信の道を開いた。カナンを占領した人々が、主の制限を無視したことが悪の種となり、その後、幾世代もの間、苦い果実を結び続けた。ヘブル人の単純な習慣は、彼らを肉体的に健康にした。ところが、異教徒と交際して食欲と情欲にふけり、徐々に体力を衰えさせ、知的、道德的能力を弱めてしまった。イスラエル人

は、自分たちの罪のために、神から離れた。神の力が彼らから去り、もはや、敵に勝てなくなった。こうして、彼らは、神によって征服するはずであったその国々に負けてしまったのである。

「かつてエジプトの地から彼らを導き出し、彼らを荒野で羊の群れのように導かれた先祖たちの神、主を捨てて、彼らは高き所を設けて神を怒らせ、刻んだ像をもって神のねたみを起した」。そこで、「神は人々のなかに設けた幕屋なるシロのすまいを捨て、その力をとりことならせ、その栄光をあだの手にわたされた」（士師記二ノ一二、詩篇七八ノ五二、五八、六〇、六一）。しかし、主は、主の民を全くお見捨てになったのではなかった。常に、主に忠誠を尽くす残りの者が存在していた。主は、ときどき、忠実で勇敢な人々をお立てになって偶像礼拝をやめさせ、イスラエルを彼らの敵からお救いになった。しかし、救済者が死んでしまうと、人々は、彼の権力から解放されて、徐々に偶像に逆もどりするのであった。このようにして、神に反逆しては懲らしめを受け、告白しては救済されるという物語が、幾度もくり返されたのである。

イスラエルは、メソポタミヤの王、モアブの王に続いて、ペリシテ人、そして、シセラを大将とするハゾルのカナン人などに次々と圧迫された。オテニエル、シャムガル、エホデ、デボラ、バラクなどが、人々の救済者として立てられた。しかし、「イスラエルの人々はまた主の前に悪をおこなったので、主は彼らを…ミデアンびとの手にわたされた」（士師記六ノ一）。これまで、圧迫者の手は軽くヨルダンの東の部族に加えられたに過ぎなかった。しかし、今回の災難では、彼らのところがまず最初であった。

東の国境にミデアン人がいるのと同様に、カナンの南にはアマレク人がおり、さばくの向こうには、まだ、手きびしいイスラエルの敵があった。ミデアン人は、モーセの時代にほとんどイスラエル人に滅ぼされたのであ

たが、その後、大いに増加し、数が多くなり強くなった。彼らは、報復心に燃えていた。そして、神の保護の手がイスラエルから除かれたのであるから、その機会がやってきた。ヨルダンの東の部族だけでなく、全国が彼らの攻撃に苦しんだ。さばくの残忍な住民が、「いなこのように多く」、彼らの家畜とともに、国内に侵入してきた（同・六ノ五）。彼らは滅ぼし尽くす疫病のように全国に広がって、ヨルダン川からペリシテの平原にまで及んだ。彼らは、作物が実り始めるやいなややって来て、地の最後のくだものの取り入れが終わるまでいた。彼らは、畑の産物を奪い、住民のものを盗んで虐待してはさばくにもどって行った。こうして、畑に住んでいたイスラエル人は、家を捨てて城壁の中の町に集まったり、城に避難したり、時には、山中の岩陰や洞穴の中に隠れなければならなかった。この圧迫は七年間続いた。そして、人々が、その苦難の中で主の譴責に従って、彼らの罪を告白したので、神は、ふたたび彼らのために救済者を起こされたのである。

ギデオンは、マナセの部族のヨアシの子であった。この家族の属した家系は指導的位置にはなかったが、ヨアシの家族は勇気と誠実との点で頭角をあらわしていた。彼の勇敢なむすこたちについては、「みな王子のように見えました」と言われている（同・八ノ一八）。ミデアン人との戦いで、むすこたちは、ひとりを除いてみな倒れた。そして、侵略者は、彼の名を非常に恐れたのである。ギデオンに、人々を救えという神の召しが与えられた。彼は、そのとき、麦を打っていた。彼は、隠してあったわずかばかりの麦を、一般の麦打ち場で打とうとしないで、酒ぶねの近くの場所に行った。まだ、ぶどうの熟するときはずっと先だったので、ぶどう畑のほうに注意をするものはいなかったからである。ギデオンは隠れて黙って働いていたが、イスラエルの状態を悲しく思い、どうしたなら人々から圧迫者のくびきを除くことができるだろうか、と、思索していた。

すると突然、「主の使」が現われて、彼に言った。「大勇士よ、主はあなたと共にあられます」(同・六ノ一二)。
彼は答えた。「ああ、君よ、主がわたしたちと共にあられるならば、どうしてこれらの事がわたしたちに臨んだのでしょうか。わたしたちの先祖が『主はわれわれをエジプトから導き上られたではないか』といって、わたしたちに告げたそのすべての不思議なみわざはどこにありますか。今、主はわたしたちを捨てて、ミデアンびとの手にわたされました」(同・六ノ一三)。

天からの使者は答えた。「あなたはこのあなたの力をもって行って、ミデアンびとの手からイスラエルを救い出さない。わたしがあなたをつかわすではありませんか」(同・六ノ一四)。

ギデオンは、今自分に語っているおかたが、契約の天使で、昔イスラエルのために働かれたおかたであるという証拠を与えられることを望んだ。神の天使は、アブラハムと語り、あるときはとどまって彼のもてなしをお受けになった。そして、ギデオンは、今、天の使者に、とどまって彼の客となることを願ったのである。彼は、急いで天幕に行つて、乏しい中からやぎの子と種入れぬパンの準備をして、それを持ってきて天使の前に置いた。すると、天使は、彼にこう命じた。「肉と種入れぬパンをとって、この岩の上に置き、それにあつものを注ぎなさい」(同・六ノ二〇)。ギデオンはその通りにした。すると、彼が求めたしるしが与えられた。天使は、手に持ったついで、肉と種入れぬパンに触れると、岩から火が燃え上がってささげ物を焼き尽くした。そして、天使は、彼の視界から去って見えなくなつた。

ギデオンの父、ヨアシは、国の人々と一緒になつて神にそむき、彼の住んでいたオフラに大きな祭壇をバアルのために築いていた。ギデオンは、この祭壇を破壊し、これまでささげ物がささげられていた岩の上に、主の祭

壇を築くように命じられた。神に犠牲をささげることは祭司にゆだねられ、シロの祭壇に制限されていた。しかし、儀式礼典を制定なさったおかた、そして、そのすべてのささげ物が予表していたおかたは、その要求を変更する力がありであった。イスラエルの救済は、バアル礼拝に対する断固たる反対によって始められなければならないかった。ギデオンは、イスラエルの民の敵と戦う前に、偶像礼拝との宣戦を布告しなければならなかった。

神の命令は、忠実に行なわれた。ギデオンは、もしも公然と行なえば、反対に会うことがわかっていたのでひそかに事を運んだ。彼は、しもべたちの援助によって、一晚のうちにそれをやり遂げてしまった。次の朝、バアルを礼拝しようとして来たオフラの人々の怒りは、たいへんなものであった。ヨアシは、主の使の来訪を聞いていたが、もし彼が自分のむすこを弁護しなかったならば、人々はギデオンの命を取ったことであろう。ヨアシは言った。「あなたがたはバアルのために言い争うのですか。あるいは彼を弁護しようとなさるのですか。バアルのために言い争う者は、あすの朝までに殺されるでしょう。バアルがもし神であるならば、自分の祭壇が打ちこわされたのだから、彼みずから言い争うべきです」(同・六ノ三二)。もしバアルが自分の祭壇を守ることができなければ、どうして、彼を礼拝する者の保護を依頼することができようか。

ギデオンに暴力を働こうとする考えは、すべて取りやめになった。そして、戦いのラッパが鳴り響いたとき、まず最初にギデオンの旗の下に集まった者の中にオフラの人もいた。彼自身の部族のマナセにも知らせが伝えられ、アセル、ゼブルン、ナフタリにも伝えられ、皆、召しに答えた。

ギデオンは、神が彼をこの働きに召し、神が彼と共におられるという証拠がさらに与えられるのでなければ、自分からは軍隊の長の地位につこうとはしなかった。彼は祈った。「あなたがかつて言われたように、わたしの

手によってイスラエルを救おうとされるならば、わたしは羊の毛一頭分を打ち場に置きますから、露がその羊の毛の上にだけあつて、地がすべてかわいているようにしてください。これによってわたしは、あなたがたが言われたように、わたしの手によってイスラエルをお救いになることを知るでしょう」(同・六ノ三六、三七)。翌朝、地はかわいているのに、羊の毛はぬれていた。しかし、空気に湿気があれば、羊の毛はぬれるから、これでは決定的試験であるとは言えないという疑念がわいた。そこで、彼は、しるしが反対になるように求め、彼の極端な用心深さを神がお怒りにならないことを嘆願した。彼の要求は受け入れられた。

こうして、ギデオンは励まされて、侵略者と戦うために軍勢をひきいて出て行った。「時にミデアンびと、アマレクびとおよび東方の民がみな集まってヨルダン川を渡り、エズレルの谷に陣を取った」(同・六ノ三三)。ギデオンのもとに集まった全軍は、わずか三万二千人であつた。しかし、敵の大軍を前にして、主は彼に言われた。「あなたと共にいる民はあまりに多い。ゆえにわたしは彼らの手にミデアンびとをわたさない。おそらくイスラエルはわたしに向かつてみずから誇り、「わたしは自身の手で自分を救つたのだ」と言つてあろう。それゆえ、民の耳に触れ示して、『だれでも恐れおののく者は帰れ』と言いなさい」(同・七ノ二、三)。喜んで危険と困難に当面しない者、または、神の働きよりは世俗のことに心を奪われている者は、イスラエルの軍隊の力にならない。彼らがいることは、ただ軍隊を弱体化させるだけであつた。戦争に出かける前に次のような宣言が全軍に行なわれることが、イスラエルの律法になつていた。『新しい家を建てて、まだそれをささげていない者があれば、その人を家に帰らせなければならぬ。そうしなければ、彼が戦いに死んだとき、ほかの人がそれをささげるようになるであらう。ぶどう畑を作つて、まだその実を食べていない者があれば、その人を家に帰らせなければな

らない。そうしなければ彼が戦いに死んだとき、ほかの人がそれを食べるようになるであろう。女と婚約して、まだその女をめとっていない者があれば、その人を家に帰らせなければならぬ。そうしなければ彼が戦いに死んだとき、ほかの人が彼女をめとるようになるであろう。つかさたちは、また民に告げて言わなければならぬ。

『恐れて気おくれする者があるならば、その人を家に帰らせなければならぬ。そうしなければ、兄弟たちの心が彼の心のようにくじけるであろう』(申命記二〇ノ五 八)。

ギデオンは、敵の数と比較して自分のほうがいかにも少なかったもので、いつもの宣言をするのを差し控えていた。彼は、自分の軍隊がまだ大きすぎるといふ宣告を聞いて、驚きに満たされた。しかし、主は、彼の民の心に誇りと不信仰があるのをごらんになった。彼らは、ギデオンの力強い訴えを聞いて奮い立ったものではあるが、ミデアン人の大軍をながめて恐怖をいだいたものが多かった。それにもかかわらず、もし、イスラエルが勝利をおさめるならば、勝利を神に帰すかわりに、自分たちに栄光を帰してしまったことであろう。

ギデオンは、主の指示に従った。彼は、全軍の三分の二以上の二万二千人が家に帰るのを見て、非常に心を痛めた。ふたたび、主の言葉が彼に与えられた。「民はまだ多い。彼らを導いて水ぎわに下りなさい。わたしはそこで、あなたのために彼らを試みよう。わたしがあなたに告げて、『この人はあなたと共に行くべきだ』と言う者は、あなたと共に行くべきである。またわたしがあなたに告げて、『この人はあなたと共に行くべきだ』と言う者は、だれも行つてはならない」(士師記七ノ四)。すぐに敵に向かって行くつもりで、人々は水ぎわにつれていかれた。進みながら手で水をすくつて、急いで水を飲んだ者がわずかながらいたが、大部分は、ひざをかがめて、水面に口をあててゆっくり飲んだ。手を口にあてて水を飲んだ者の数は、一万人のうちわずかに三百人で

あつた。けれども彼らが選ばれて、残りの者はみな、家に帰ることを許された。

品性は、ごく簡単な方法で試みられるものである。危機に際して、自分の必要を満たすことに心を奪われているような者は、危急の場合に信頼できる人ではない。主は、怠惰で放縱な人をご用にお用いになることはできない。主が選ばれる人は、自己の必要のために義務の遂行を遅らせたりしないわずかの人々である。三百人は、勇気と自制があるばかりか信仰の人であつた。彼らは、偶像礼拝によってその身を汚していなかった。神は、彼らを導き、彼らによってイスラエルを救済することがおできであつた。成功は、数によらない。神は、多数によると同様に、少数によつても救うことがおできである。神は、神に仕える者の数の大きさよりは、むしろ、彼らの品性によつて、榮譽をお受けになる。

イスラエルの人々は、敵の大軍が陣をしいている谷を見おろす山の頂上に陣取つていた。「ミデアンびと、アマレクびとおよびすべての東方の民はいなごのように数多く谷に沿つて伏していた。そのらくだは海への砂のよつに多くて数えきれなかった」(同・七ノ一二)。ギデオンは、翌日の戦いを考えておそれおののいた。しかし、主は、夜、彼に語り、従者プラを連れてミデアン人の陣地に行けば、何か励ましになることを聞くであろうとお命じになった。彼が出て行つて、暗いところで黙つて聞いていると、ある兵士が仲間に夢を語つていた。「わたしは夢を見た。大麦のパン一つがミデアンの陣中にころがつてきて、天幕に達し、それを打ち倒し、くつがえしたので、天幕は倒れ伏した」(同・七ノ一三)。仲間の答えた言葉が、隠れて聞いていた者の心を励ました。「それはイスラエルの人、ヨアシの子ギデオンのつるぎにちがいない。神はミデアンとすべての軍勢を彼の手にわたされるのだ」(同・七ノ一四)。ギデオンは、これらのミデアンの異国人を通じて彼にお語りになられる神のみ声

を聞いたのである。ギデオンは、彼の指揮下にある少数の者のところへもどって言った。「立てよ、主はミデアンの軍勢をあなたがたの手にわたされる」(同・七ノ一五)。

神の指導の下に攻撃計画が示され、彼は、すぐにそれを実行に移した。彼は、三百人を三組に分けた。おのおのには、ラツパとつぼの中にかくしたたいまつが与えられた。兵士たちは、ミデアンの陣地をちがった方角から攻撃するように配置された。夜陰に乗じて、ギデオンのラツパを合図に、三組はラツパを吹き鳴らした。そしてつぼを打ち砕いて燃えさかるたいまつを出し、「主のためのつるぎ、ギデオンのためのつるぎ」というときの声をあげて、敵に突進した(同・七ノ二〇)。

眠っていた軍隊は急に目をさました。どちらをむいても、燃えたいまつが火が見えた。各方面からラツパと敵のときの声が聞こえた。ミデアン人は、おびたしい軍隊に取り囲まれたと思い込んで、あわてふためいた。彼らは、恐怖のあまり大声をあげて逃げ出し、味方を敵とまちがえて、同志打ちをした。勝利の知らせを聞いて家に帰らせられた幾千というイスラエルの人々がもどってきて、逃げる敵の追跡に参加した。ミデアン人は、ヨルダン川に向かって逃げ、川向こうの自分たちの領地に行くことを望んだ。ギデオンは、エフライムの部族に使者を送り、逃げる軍隊を南の渡し場で迎え撃つように鼓舞した。一方、ギデオンは、「疲れながらもなお追撃」する三百人と共に、流れを渡って、すでに向こうがわに行った者のあとを追った(同・八ノ四)。全軍を指揮し、一万五千の軍隊と共に逃げていたふたりの君、ゼバとザルムンナは、ギデオンに追跡されて、軍隊は全滅し、指揮者はつかまって殺された。

この大敗によって、侵入軍は十二万人以上の戦死者を出した。ミデアン人の力はくじかれ、その後、二度とイ

イスラエルに戦いをいどむことができなくなった。イスラエルの神が再び神の民のために戦われたという知らせがすぐに広く遠くまで伝わった。彼らがどんなに簡単な方法で、勇ましい好戦的民族に勝ったかということを知ったときに、回りの国々のいだいた恐怖は言葉では尽くせない。

ミデアン人を倒すために、神がお選びになった指導者は、イスラエルの高い地位を占めた人ではなかった。彼は、つかさでも祭司でもレビ人でもなかった。しかし、神は、彼が勇氣と誠実の人であることをごらんになった。彼は、自己にたよらず、主の指導に喜んで従った。神は、神の働きのために、必ずしも偉大な才能を持った人をお選びになるとはかぎらず、神が最もよく用いることができる人々をお選びになる。「謙遜は、榮譽に先だつ」(箴言一五ノ三三)。自己の不十分さをよく自覺して、神を指導者とし、力の源として信賴する者を、神は、最も効果的にお用いになる。神は、彼らの弱さを神の力に結びつけて強くし、彼らの無知を神の知恵に結合して、彼らを賢くなさるのである。

もしも彼らが真のけんそんを持ち続けるならば、主は神の民のために、はるかに多くのことをなさることがおできになる。しかし、大きな責任または成功が与えられても、なお、自己過信に陥ることなく、自分たちが神に依存していることを忘れない者は、実に少ない。主が、神の働きをする器を選ぶに当たって、世の人々から、偉大でタラント(才能)があり、そうめいであるとはめそやされている人々を見過ごされるのは、そのためである。このような人々は、とかく高慢で、自己過信に陥っているものである。彼らは、神の指示を仰がないで、行動することができると思っている。

ヨシユアの軍隊がエリコの回りでラツパを吹き、ギデオンの小隊が、ミデアンの大軍の回りでラツパを吹くと

いうごく簡単な行為が、神の力によつて効果をあげ、神の敵の力をくつがえした。神の力と知恵を離れては、どんなに完全な人間的制度も失敗に帰する。しかし、どんな見込みのない方法も神がお命じになるとき、それをけんそんと信仰をもつて実行するならば、必ず成功するのである。ギデオンやヨシユアが、カナン人と戦ったときと同様に、神に信頼し、神のみこころに従うことは、クリスチャンの霊の戦いに必要である。神は、イスラエルのために、神の力をくり返しあらわされて、彼らが神を信じ、どんな危機においても信頼をいだいて神の助けを求めるように導こうとなさった。神は、今日も同様に、神の民と力を合わせてお働きになり、弱い器によつて偉大なことをなしとげられようとしておられる。全天は、われわれが、神の知恵と力を求めるのを待っている。神は、「わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えてかなえて下さることができる」(エペソ三ノ二〇)。

ギデオンが、国の敵の追跡を終えて帰つてくると、自国民の非難と譴責が彼を待っていた。彼が、ミデアン人と戦うためにイスラエルの人々に呼びかけたときに、エフライムの部族は出てこなかった。彼らは、そのような企ては危険だと考えた。そして、ギデオンは、彼らを特別に召集しなかったので、彼らはそれをよいことにして兄弟たちに加わらなかつた。しかし、イスラエルの勝利の知らせが彼らのところにとどいたとき、エフライムの人々は、自分たちが参加していなかつたので彼らをねたんだ。ミデアン人を追放したあとで、エフライムの人々は、ギデオンの指示のもとにヨルダンの渡しを占領し、彼らが逃げるのを防いだ。こうして、多数の敵が殺されその中には、オレブとゼエブというふたりの君がいた。こうして、エフライムの人々は、戦いのあと始末をして勝利の完成に貢献した。しかし、彼らはねたんで怒った。彼らは、ギデオンが自分の意志と判断で行なったもの

と思った。彼らは、イスラエルの勝利のうちに神のみ手を認めず、神の力とあわれみによって自分たちが救われたことを感謝しなかった。彼らは、この事実そのものによって、特別の器に選ばれる価値のなかったことを示した。

彼らは、戦利品を携えて帰ってきて、怒ってギデオンを責めた。「あなたが、ミデアンびとと戦うために行かれたとき、われわれを呼ばれなかったが、どうしてそういうことをされたのですか」（士師記八ノ一）。

ギデオンは彼らに言った。「今わたしのした事は、あなたがたのした事と比べものになりましょうか。エフライムの拾い集めた取り残りのぶどうはアビエゼルの収穫したぶどうにもまさるではありませんか。神はミデアンの君オレブとゼエブをあなたがたの手にわたされました。わたしのなし得た事は、あなたがたのした事と比べものになりましょうか」（同・八ノ二、三）。

ねたみの精神は、とかく、あおり立てられると争いを起こし、争闘と流血の原因になりやすい。しかし、ギデオンのけんそんな答えが、エフライムの男たちの怒りをしずめた。そして、彼らは心を和らげて家へ帰った。ギデオンは、原則に関しては堅く立って妥協せず、戦いに出ては、「大勇士」であつたが、また、まれに見る思いやりの精神を表わした。

イスラエルの人々は、ミデアン人から救い出されたことを感謝して、ギデオンが彼らの王となり、彼の子孫が代々王となることにしようと申し出た。この申し出は、神政政治の原則とは全く正反対のものであつた。神がイスラエルの王であられた。であるから、彼らが人間を王座につけることは、彼らの王であられる神を拒むことになる。ギデオンは、この事実を認めた。彼の返答は、その動機がいかに真実で気高いものであつたかを示した。

「わたしはあなたがたを治めることはいたしません。またわたしの子もあなたがたを治めてはなりません。主があなたがたを治められます」と彼は言った(同・八ノ二三)。

しかし、ギデオンは別の過失に陥り、彼の家とイスラエルの全家を不幸に陥れた。大きな争闘に続く不活動の期間は、苦闘の期間以上に大きな危険をはらんでいることがある。ギデオンは、このような危険にさらされた。彼は、不安な気持ちに襲われた。彼は、これまで、神の指示を実行することに満足していた。しかし、今、彼は神の指導を待たずに自分で計画を立て始めた。主の軍勢が大勝利を得ると、サタンは、神の働きをくつがえそうとして、その努力を倍加する。こうして、ギデオンの心に考えや計画が暗示され、イスラエルの人々はそれに迷わされていた。

ギデオンは、主の使いが彼に現われた岩の上で犠牲をささげるように命令を受けたので、自分は祭司としての役目を果たすように任命を受けたものと考えた。彼は、神の許しを得ようともしないで、適当な場所を備え、幕屋で行なわれている礼拝に似た制度を始めようとした。一般の人々の強力な支持もあつたので、その計画の実行はなんの困難もなかった。彼の要求に従って、ミデアン人からぶんどった金の耳輪が全部彼の分け前として与えられた。人々はまた、ミデアンの王たちの美しく飾った衣服とともに、ほかにも多くの高価な品物を集めた。こうして備えられたものを用いて、ギデオンは大祭司が着ているものをまねて、エポデと胸当てをつくった。彼のこととは、イスラエルと同様に彼と、彼の家のわなとなつた。この神の許しを得なかつた礼拝は、ついに、多くの人々を主から離し、偶像に仕えるようにさせたのである。ギデオンが死んだあとで、多くの者がこの背信に加わり、その中には彼の家族の者もいた。人々は、かつて彼らの偶像礼拝をやめさせたことのあるその同じ人に

よって、神から引き離されていった。

自分たちの言行が、どんなに大きな影響を及ぼすものであるかを自覚する者は少ない。親の過失は、それを行なった者が墓に横たえられて後も長く子々孫々に至るまで、最も悲惨な実を結ぶ。人はだれでも他に感化を及ぼして、その感化の結果の責任を問われるのである。言葉と行為は非常な力を持っていて、この世のわれわれの生涯の影響を後世まで長く残す。われわれが、言葉と行為によって残す印象は、必ず、祝福となるかまたは、のろいとなってわれわれにもどってくる。こう考えるとき、人生は実に厳粛である。われわれは、心を低くして祈り、神に近づき、神の知恵に導かれるようにしなければならない。

最高の地位に立つ人が、誤った方向に導くかも知れない。最も賢明な人も過失を犯す。最も強力な人もよろめき、つまづくことである。上からの光が常にわれわれの道を照らす必要がある。「わたしに従ってきなさい」といわれた主になんの疑いもいだかずに、信賴することが唯一の安全な道である(マルコ二ノ一四)。

ギデオンが死んだあとで、「イスラエルの人々は周囲のもろもろの敵の手から自分たちを救われた彼らの神、主を覚え、またエルバアルすなわちギデオンがイスラエルのためにしたもろもろの善行に応じて彼の家族に親切をつくすこともしなかった」(士師記八ノ三四、三五)。イスラエルの人々は、彼らの士師であり、救済者であったギデオンから受けた恩のすべてを忘れて、ギデオンの妾腹の子のアビメレクを彼らの王として受け入れた。アビメレクは、自己の権力を保つために、ただひとりだけを除いて、ギデオンの正式の子供たちを全部殺してしまった。人間は、神を恐れなくなると、やがて、名誉と誠実からも離れる。主のあわれみに対する感謝があれば、ギデオンのように、神の民を祝福する器に用いられた者に対しても感謝するようになる。ギデオンの家に対して

とったイスラエルの残酷な行為は、神に対して大きな忘恩を示した人々としては当然のことであった。

アビメレクの死後、主を恐れる士師たちの支配は、一時、偶像礼拝を阻止したのであったが、やがて、人々は回りの異教社会の習慣にもどっていった。北方の部族の間では、シリヤやシドンの神々を拝む者が多くいた。西南方面では、ペリシテ人の偶像、東では、モアブとアンモンの偶像などが、イスラエルの人々の心を彼らの祖先の神から離れた。しかし、背教は、すぐに罰せられた。アンモン人は、東の部族を征服し、ヨルダン川を渡ってユダとエフライムの領地に侵入してきた。西からは、ペリシテ人が海のそばの平原から、あちらこちらを焼き払ったり、略奪したりして攻めてきた。イスラエルは、ふたたび容赦なく攻めてくる敵の手中に陥ったように思われた。

人々は、今まで忘れ、軽んじていた主の助けを再び仰いだ。「そこでイスラエルの人々は主に呼ばわって言った、『わたしたちはわたしたちの神を捨ててバアルに仕え、あなたに罪を犯しました』」（同・一〇ノ一〇）。しかし、それは、悲しんだだけであって、真の悔い改めに至っていなかった。人々は、罪を犯して苦しみ会ったことを悲しんだのであって、神の聖なる律法を犯して、神の栄えを汚したことを悲しんだのではなかった。真の悔い改めは、罪について悲しむだけではない。それは、罪悪から断固として離れることである。

主は、預言者のひとりによって彼らにお答えになった。「わたしはかつてエジプトびと、アモリびと、アンモンびと、ペリシテびとからあなたがたを救い出したではないか。またシドンびと、アマレクびとおよびマオンびとがあなたがたをしえたげた時、わたしに呼ばわったので、あなたがたを彼らの手から救い出した。しかしあなたがたはわたしを捨てて、ほかの神々に仕えた。それゆえ、わたしはかさねてあなたがたを救わないであろう。

あなたがたが選んだ神々に行つて呼ばわり、あなたがたの悩みの時、彼らにあなたがたを救わせるがよい」(同・一〇ノ一—一四)。

このような厳肅で恐るべき言葉を聞くと、将来のもう一つの光景、最後の審判の大いなる日のことを考える。その日、神のあわれみを拒み、神の恵みを軽べつした者は、神の義と顔を合わせなければならない。神から与えられた、時、財産、知性などのタラントを、この世の神に仕えるために浪費した者は、その裁判のときに申し開きをしなければならぬ。彼らは、彼らの真の愛する友である主を捨てて、便宜主義とこの世の快樂の道を歩んだのである。彼らは、いつかは神に帰ろうと思つていた。しかし、世俗は、その罪惡とまどわしによつて注意を奪つていた。輕薄な娛樂、衣服の誇り、食欲の満足などが心を無感覺にし、良心をまひさせ、真理の声を聞こえなくしていた。義務はさげすまれた。無限の価値あるものが輕々しく扱われて、ついに人の心は、人間のためにこれほど多くをお与えになつたおかたのために、犠牲を払おうという望みを全く失つてしまった。彼らは、收穫のときに、自分たちのまいたものを收穫するのである。

主は言われる。「わたしは呼んだが、あなたがたは聞くことを拒み、手を伸べたが、顧みる者はなく、かえつて、あなたがたはわたしのすべての勧めを捨て、わたしの戒めを受けなかった……これは恐慌が、あらしのようにあなたがたに臨み、災が、つむじ風のように臨み、悩みと悲しみとが、あなたがたに臨む時である。その時、彼らはわたしを呼ぶであろう、しかし、わたしは答えない。ひたすら、わたしを求めるであろう、しかし、わたしに会えない。彼らは知識を憎み、主を恐れることを選ばず、わたしの勧めに従わず、すべての戒めを輕んじたゆえ、自分の行いの実を食らい、自分の計りごとに飽きる」しかし、わたしに聞き従う者は安らかに住まい、

災に会う恐れもなく、安全である」(箴言一ノ二四 三一、三三)。

こうしてイスラエルの人々は、主の前に心を低くした。「そうして彼らは自分たちのうちから異なる神々を取り除いて、主に仕えた」。そして、主の愛の心は痛んだ。すなわち、「イスラエルの悩みを見るに忍びなくなった」(士師記一〇ノ一六)。ああ、われわれの神は、なんと忍耐強く、あわれみ深いことであろう。神の民が、主の臨在を妨げていた罪を捨てたときに、神は彼らの祈りを聞き、すぐに彼らのために活動をお始めになった。

ギレアド人エフタが指導者に選ばれた。彼は、アンモン人と戦って、りっぱに彼らの勢力をくじいた。このとき、イスラエルは、十八年間も敵の圧迫に苦しんでいたのであるが、彼らは、苦難によって教えられた教訓をふたたび忘れてしまった。

神の民が、彼らの悪い行ないにもどると、主はまたもや彼らが強力な敵、ペリシテに圧迫されることをお許しになった。彼らは、長年の間、この残酷で好戦的な国民に絶え間なく悩まされ、時には完全に征服された。彼らは、こうした偶像教徒と交わり、その快楽や礼拝に参加し、ついには、その精神も同じになってしまった。そして、これらのイスラエルのみかけだけの友人は、彼らの最も恐ろしい敵となり、あらゆる手段を講じて、彼らを滅亡させようとしたのである。

イスラエルと同様に、クリスチャンも、神を信じない人々と友だちになるために、世俗の影響に負け、世の原則や習慣に同調しがちである。しかし、最後には、これらの自称友人たちは最も危険な敵であることが判明する。聖書は、明らかに、神の民と世の間的一致があり得ないことを教えている。「兄弟たちよ。世があなたがたを憎んでも、驚くには及ばない」(ヨハネ第一・三ノ一三)。「あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを、知っ

ておくがよい」と救い主は言われる(ヨハネ一五ノ一八)。

サタンは、神を敬わない人々を友人のように装わせて、神の民を罪に誘い、彼らを神から引き離そうとする。そして、彼らを防御しているものが除かれると、サタンは、その部下たちに、彼らを攻撃させて滅ぼしてしまおうとするのである。

第 54 章

サムソン

本章は、士師記一三 一六章に基づく。

国じゅうが背信状態に陥っているときに、神の忠実な礼拝者たちは、イスラエルが救済されることを神に祈り求めていた。その答えはすぐに与えられそうにもなく、年々、圧迫者の力は、国土に重くのしかかってくるのであったが、神は、摂理のうちに、彼らに援助を与える準備をしておられた。ペリシテ人の圧迫の初期に、この大敵の力をくじくために神が用いようとされた子がすでに生まれていた。

ペリシテの平原を見おろす丘陵地帯の境に、ゾラという町があった。ここにダンの部族のマノアの一家が住んでいた。この家族は、一般の背反の中で、主に忠誠を尽くすわずかの家族の一つであった。うまずめであったマノアの妻に、「主の使」が現われて、彼女が男の子を生むことと、その子によって、神がイスラエルをお救いになることを告げた。そのため、主の使いは、彼女の習慣について勧告を与えるとともに、子供の取り扱い方も指示した。「それであなたは気をつけて、ぶどう酒または濃い酒を飲んではいけません。またすべて汚れたものを食べてはいけません」(士師記一三ノ四)。そして、子供にも初めからこの同じ禁令が課せられ、それに頭の毛を

切つてはならないことが追加された。というのは、その子は、生まれたときから、神にささげられたナジル人になるからであった。

女は、夫のところに来て天使のようすを語ったあとで、天使が告げたことを話した。彼らは、自分たちにゆだねられた重大な任務を果たすのにまちがいを犯してはいけないと思って、マノアは祈っていった。「ああ、主よ、どうぞ、あなたがさきにつかわされた神の人をもう一度わたしたちに臨ませて、わたしたちがその生れる子になすべきことを教えさせてください」(同・一三ノ八)。

主の使いがふたたび現われたとき、マノアは熱心にたずねた。「その子の育て方およびこれになすべき事はなんでしょうか」(同・一三ノ一二)。すると、以前の教訓がまくり返された。「わたしがさきに女に言ったことは皆、守らせなければなりません。すなわちぶどうの木から産するものはすべて食べてはなりません。またぶどう酒と濃い酒を飲んではいけません。またすべて汚れたものを食べてはなりません。わたしが彼女に命じたことは皆、守らせなければなりません」(同・一三ノ一三、一四)。

神は、マノアの約束の子に、重大な働きをさせようとしておられた。そして、母親と子供の両方の習慣を注意深く調整したのは、この働きに必要な資格をこの子に得させるためであった。「ぶどう酒と濃い酒を飲んではいけません」と、天使はマノアの妻に教えた。「またすべて汚れたものを食べてはなりません。わたしが彼女に命じたことは皆、守らせなければなりません」。子供は、母親の習慣によって、よい影響を受けることもできるし、悪い影響を受けることもできる。母親は、子供の幸福を願うならば、彼女自身が原則に支配され、節制と自制を實行しなければならぬ。賢明でない勧告者は、母親がすべての欲求や衝動を満足させる必要があると勧めるが、

こうした教えは誤りで有害である。母親は、神ご自身の命令によって自制を働かせるという、最も厳粛な義務のもとにおかれている。

母親と同様に父親にも、この責任が負わせられている。両親が、彼ら自身の知的、体的特徴、性質、欲求などを子供たちに伝える。親の不節制の結果として、子供たちの体力、知的、道德的能力が欠けていることがある。酒を飲み、タバコを吸う人々は、そのような満足することを知らない欲求、刺激された血液、興奮しやすい神経を、彼らの子供たちに伝えるかも知れず、現に伝えている。不品行な者は、彼らの邪悪な欲望を子孫に伝え、いまわしい病気を遺産として残すことさえある。子供たちの激しい気性やゆがめられた欲望だけでなく、幾千という生まれながらの聴力や視力のない人、病気または白痴などの虚弱体質は、大部分が親の責任である。

どの父親や母親も、「わたしたちがその生れる子になすべきことを教えてください」とたずねなければならぬ。多くの者は、生まれる前の影響ということを軽視している。しかし、天からヘブルの両親に与えられ、しかも最も明瞭で厳粛な方法で二度もくりかえされた教えによれば、創造主がこのことをどのようににこらになるかがわかる。

そして、約束の子が、両親からよい遺産を受けるだけでは十分ではなかった。これは、注意深い訓練と正しい習慣の形成によって継続していかなばならなかった。将来のイスラエルの士師であり救済者となるものは、幼いときから厳格な節制の訓練を受けなければならなかった。彼は、誕生のときからナジル人となり、永久にぶどう酒または濃い酒を飲んでいなかった。節制、克己、自制の教訓は、赤子のときから子供たちに教えなければならない。

天使の禁令のなかには、「すべて汚れたもの」も含まれていた。食物を清いものと汚れたものとに分けたことは、単に礼典的、また、独断的に定められたのではなくて、衛生の原則に基づいていた。ユダヤ人が幾千年の間、驚くべき生命力を保持したのは、主として、この区別を守ったからであつた。節制の原則は、単に、アルコール性の飲料の使用に関することだけにとどまらず、もっと広く応用されなければならない。刺激的で消化の悪い食物は、同様に健康に有害で、醉酒の原因になることが多い。眞の節制は、有害なものを全く使用せず、健康的なものを適度に使用することを教える。食習慣が、健康、品性、この世界での有用性、そして、永遠の運命にどれほど深い関係をもつたものであるかを自覚している者は少ない。食欲は、常に道徳力と知力の支配のもとにおいておかねばならない。からだは、心のしもべであるべきで、心がからだのしもべであつてはならない。

マノアに与えられた神の約束は、やがて実現して男の子が生まれ、その子にサムソンという名が与えられた。少年が成長するにつれて、驚くべき体力の持ち主であることが明らかになつた。これは、サムソンと両親たちがよく知っていたように、彼のたくましい筋肉によるのではなくて、彼のそらない髪の毛が象徴していたように、彼がナジル人であるということによるのであつた。サムソンが忠実に、彼の親と同じように神の命令に従つたならば、彼はもっと気高く、幸福な一生を送つたことであろう。しかし、偶像教徒との交わりが、彼を腐敗させた。

ゾラの町は、ペリシテ人の国に近かつたので、サムソンは、彼らと交わつて仲よくなつた。こうして、彼が若いときに結んだ親しい交わりが、彼の全生涯を暗くした。ペリシテ人の町テムナに住む若い婦人が、サムソンの心をつかんだので、サムソンは彼女を自分の妻にしようと決心した。神を敬う両親は、なんとかして彼の心を変えさせようと努力したが、彼は、「彼女はわたしの心にかないますから」と答えるだけであつた(同・一四ノ三)。両

親は、ついに折れて、彼の希望をかなえ、結婚を許した。

彼がちょうど成人し、神の任命を実行しなければならないとき、他のどんなときよりも神に忠誠を尽くすべきときに、サムソンは、イスラエルの敵と結合してしまった。彼は自分の選んだ者と結婚することによって、神に栄光を帰すことができるか、それとも、自分の生涯によつて完成しようとしている目的を達成できない地位に自分をおいているのかどうかをよく問うてみなかった。神をまずあがめようと求めるすべての者に、神は知恵を約束なさった。しかし、自己を喜ばせようとする者には、なんの約束もない。

サムソンが歩んだのと同じ道をたどる者が、なんと多いことであろう。自分の好みに支配されて、夫や妻を選ぶために、神を信じる者と信じない者との結婚が、なんと多く行なわれていることであろう。その人々は、神の勧告を求めもしなければ、神の栄光をあらわそうとも考えていない。キリスト教は、結婚関係に支配的影響を及ぼさなければならぬのに、この結合の動機がキリスト教の原則に一致していないことがあまりにも多い。サタンは、神の民にサタンの部下と結合するようにしむけて、自分の勢力を強化しようと常につとめている。サタンはそれを実現するために、清められていない欲望を心に起こそうとつとめているのである。しかし、主は、主のみことばの中で、神の民は、神の愛の宿っていない人々と一つになつてはならないと明らかに教えておられる。「キリストとペリアルとなんの調和があるか。信仰と不信仰となんの関係があるか。神の宮と偶像となんの一致があるか」(コリント第二・六ノ一五、一六)。

サムソンは、彼の結婚式のときに、イスラエルの神を憎む者と親しく交わつた。このような関係に自分から進んではいない者は、彼の仲間の習慣や風習に、いくぶんかは従わねばならぬと感ずるのである。こうして費やされ

た時間は浪費以上にいけなかった。そこでは、原則のとりでを破壊し、魂の要塞を弱める思いをいただき、言葉が語られていた。

サムソンが神の戒めを犯して得た妻は、結婚の祝宴が終わる前に、夫を裏切るのであった。サムソンは、彼女の不信を怒って、しばらく彼女を捨ててひとりでゾラの家に帰った。後に、気を取りもどして花嫁のところへもどつてみると、彼女は他人の妻になっていた。サムソンは、ペリシテ人の麦畑やオリブ畑を焼きはらって仕返しをした。女が彼らにおどされてだましたことから騒動は起こったのであったが、彼らは怒って女を殺してしまった。サムソンは、すでに、単独で若いししを殺したり、アシケロンで三十人の男を殺したりして、その驚くべき力の証拠を示していた。ところが、サムソンは彼の妻が無残に殺されたのを怒って、ペリシテ人を撃ち、「大ぜい殺した」。こうして、サムソンは、敵をのがれて、ユダの部族の中にある「エタムの岩」に退いた(士師記一五ノ八)。

この場所まで、大軍が彼を追ってきた。驚いたユダの住民は、卑屈にも彼を敵の手に引き渡すことにした。そこで、三千人のユダの人々が、彼のところにやって来た。しかし、こんなに大ぜいで来ていながら、彼らは、サムソンが自国民に害を加えないということを確かめるまでは、彼のところへ近づこうとしなかった。サムソンは縛られてペリシテ人に渡されることに同意した。しかし、まず、ユダの人々に彼を攻撃しないという約束をさせた。そうでないと、サムソンが彼らを殺さなければならなくなるからであった。彼は、自分を二本の新しい綱で縛ることを許した。こうして、彼は、大声をあげて喜ぶ敵の陣地に引き立てられていった。しかし、彼らの叫び声が山々に反響していたとき、「主の霊が激しく彼に臨んだ」(同・一五ノ一四)。彼は、強い新しい綱を火に焼

いた亜麻のように切ってしまった。そして、サムソンは、ろばのあご骨に過ぎなかったが、剣ややりよりも効果的であった手近の武器をとり、ペリシテ人を打ったところが、彼らはあわてふためいて、千人の死者を戦場に残して逃げ去った。

もしイスラエルの人々がサムソンと一つになって勝利を完成していたら、彼らは、このとき圧迫者の力から自由になっていたことであろう。しかし、彼らは、おじけて臆病になった。彼らは、神が彼らにお命じになった働きを怠って、異教徒を追放しなかった。そして、異教徒の墮落した風習に合流し、彼らの残酷な行為を大目に見、直接自分たちに対してなされるのではないかぎり、彼らの不正をさえ黙認した。彼らは、圧迫者の支配下におかれたとき、もし神に従ってさえいたらのがれることができたはずの墮落に、やすやすと陥った。主が彼らのために救済者をお立てになったときさえ、彼らは、しばしばその人を捨てて、彼らの敵に合流してしまったりしたのであった。

サムソンが勝利を収めたあとで、人々は彼を士師にした。彼は、二十年の間、イスラエルを治めた。しかし、二つの悪は、さらに次の悪へと導くのであった。サムソンは、すでにペリシテ人の妻をめぐって、神の戒めを犯したが、彼は、また、彼を憎悪している敵、ペリシテ人の間にいつて、道ならぬ欲望を満たした。彼は、ペリシテ人を恐怖に陥れた自分の大力をたのみとして、臆するところなく、ガザの遊女を訪れた。彼が町に來たことを知った町の人々は、なんとかして報復をしようとした。彼らの敵は、彼らのすべての町々の中の最も強固な町の城壁の中にしっかりと閉じこめられていた。彼らは、まちがいなく獲物を捕えることができると思い、朝まで待って、勝利の喜びを味わおうとしていた。サムソンは、夜中に目がさめた。彼は、ナジル人の誓いを破ったこと

を思い出して、良心に責められ、心が苦しめられた。しかし、神は彼がこのような罪を犯したにもかかわらず、彼をあわれみ、お捨てにはならなかった。彼の大力は、また、ここで彼を救った。彼は、町の門へ行って、門の柱と貫の木もろともに、門を引き抜いて、ヘブロンにいく途中の山の頂上まで持って行った。

しかし、こうした危機から救い出されても、彼の悪い行為はやまなかった。彼は、ペリシテ人のところへは出かけていかなかったが、彼は、彼の身を破滅に陥れる肉の快楽を求め続けた。サムソンは、その故郷からあまり遠くない「ソレクの谷にいる……女を愛した」(同・一六ノ四)。その女はデリラ(消費者)という名であった。

ソレクの谷は、ぶどう畑が有名で、これは、また、心の落ちつかないナジル人にとっては誘惑であった。彼は、すでに酒を飲み、純潔と神とに彼を結びつけていた今一つのきずなを破っていた。ペリシテ人は、敵の行動を絶えず見張っていた。彼が新しい女を愛して墮落したときデリラを用いて、彼を破滅させようとした。

ペリシテの各地方の代表者から成る一団が、ソレクの谷を訪れた。彼らは、サムソンが大力を持っているまま彼を捕えようとはせず、できれば彼の力の秘密がどこにあるのかを聞き出そうとした。そこで、彼らは、それを見つけ出して知らせるようにデリラを買収した。

裏切り者のデリラが、いろいろと手を尽くしてたずね出そうとしたところ、サムソンは、ある一定の方法でわたしを縛れば、わたしはほかの人のように弱くなるといって、彼女をだました。彼女が言われた通りにしてみると、うそがばれてしまった。それで、女は、サムソンがうそを言ったことを責めて言った。「あなたの心がわたしを離れているのに、どうして『おまえを愛する』と言うことができますか。あなたはすでに三度もわたしを欺き、あなたの大力がどこにあるかをわたしに告げませんでした」(同・一六ノ一五)。サムソンは、ペリシテ人が

サムソンの愛人と組んで、三回も自分を殺そうとしている明らかな証拠をみた。それが失敗するたびに、彼女はそれをただのたわむれのように装ったので、サムソンは愚かにも恐れを感じなかった。

ゲリラは、毎日彼に迫ったので、ついに「彼の魂は死ぬばかりに苦しんだ」(同・一六ノ一六)。それでも彼は不思議な力にひかれて、彼女のそばにいた。サムソンは、とうとうたまらなくなつて、秘密を明かした。「わたしの頭にはかみそりを当てたことがあります。わたしは生れた時から神にさげられたナジルびとだからです。もし髪をそり落されたなら、わたしの力は去つて弱くなり、ほかの人のようになるでしょう」(同・一六ノ一七)。ペリシテ人の君たちのところへ、すぐに彼女のところへ来るようにという知らせがとんだ。勇士サムソンが眠っている間に、ふさふさした髪の毛が彼の頭からそり落とされた。そうして、前にも三回したのと同じように、デリラは、「サムソンよ、ペリシテびとがあなたに迫っています」と言った。サムソンは、急に目をさまして前と同じように、力を出して敵を殺そうとした。しかし、彼の腕からは力が抜けて言うことをきかなかった。彼は、「主が自分を去られたこと」を知った(同・一六ノ二〇)。デリラは、サムソンの髪の毛をそったときに、彼を苦しめ痛みを与えて、その力をためした。ペリシテ人は、サムソンの力が完全になつたことを十分確かめないうちは近づいてこなかったからである。こうして、彼らは、サムソンを捕えて、両眼をえぐつてガザへ連れて行った。そこで、彼は獄屋のかせにつながれて重労働を課せられた。

イスラエルの士師であり、勇士であつた彼が、今は、力なく、盲目になり、獄屋につながれて、最もいやしい仕事をさせられるとは、なんという変わりようであろう。彼は、自分の聖なる任務の条件を少しずつ破つていったのである。神は、彼を長く忍耐なさつた。しかし、彼が自分の秘密を明かすほどに罪の力に身をゆだねてしま

ったときに、主は、彼を去られたのである。彼の長い髪だけに力があつたのではなくて、それは、彼が神に忠誠を尽くしているしるしであつた。そして、その象徴が、肉欲をほしいままにして犠牲にされたときに、それが象徴していた祝福もまた取り去られた。

サムソンは、ペリシテ人の見せ物となつて、苦しみとはずかしめを受け、これまでになかつたほどに、自己の弱さを知つた。そして、彼は、苦難によつて悔い改めるに至つた。髪が伸びるにつれて、彼の力も徐々にもどつてきた。しかし、敵は、彼をくさりにつながれた無力な囚人であると思つて、恐怖を感じなかつた。

ペリシテ人は、彼らの勝利を彼らの神々に歸した。そして、勝ち誇つてイスラエルの神をあなどつた。「海の守護神」魚の神、ダゴンをあがめる祭りの日が定められた。ペリシテの平原全体の町々村々から、人々や君たちが集まつた。礼拝者の群れが大きな神殿に満ち、屋根のまわりの棧敷にあふれた。それは、祭りの楽しい光景であつた。莊嚴な犠牲をささげる式に続いて、音楽と祝宴が開かれた。それから、ダゴンの力を示す最高の戦利品として、サムソンが引き出された。彼が現われたとき、人々は歡呼の声をあげた。一般の人々も、君たちも、サムソンのみじめな姿をあざ笑ひ、「われわれの国を荒し」た者を倒した神をたたえた(同・一六ノ二四)。しばらくして、サムソンは、疲れたようなふりをして、神殿をささえているまん中の二本の柱にもたれて、休むことを許してほしいと願つた。そうして、彼は、神に黙禱をささげた。「ああ、主なる神よ、どうぞ、わたしを覚えてください。ああ、神よ、どうぞもう一度、わたしを強くして、……ペリシテびとにあだを報いさせてください」(同・一六ノ二八)。彼は、こう祈つて、その強い腕で柱をかかえ、「わたしはペリシテびとと共に死のう」と叫び、身をかがめた。すると、屋根が落ちて、そこにいた大群衆を一度に殺してしまつた。「こうしてサムソンが

死ぬときに殺したものは、生きているときに殺したものよりも多かった」(同・一六ノ三〇)。

偶像とその礼拝者たちは、祭司も農民も、勇士も、つかさたちも共にダゴンの神殿の瓦礫の下に葬られてしまった。その中に、神が、神の民の救済者としてお選びになった人の大きな遺体があった。恐るべき破壊の知らせがイスラエルの国に伝わったので、サムソンの身内の人々が、彼らの住んでいた山から降りてきて、だれの妨害も受けずに、倒れた英雄の遺体を引き取った。そして、彼らは、「彼を……携え上って、ゾラとエシタオルの間にある父マノアの墓に葬った」(同・一六ノ三一)。

サムソンを用いて、神が「ペリシテびとの手からイスラエルを救い始める」という約束は実現した(同・一三ノ五)。しかし、神の賛美と国家の栄光となり得た生涯の記録は、なんと暗く恐ろしいものであったことであろう。もしサムソンが、神の任命に忠実であつたなら、神の目的は、彼の栄誉と昇進によつて、成しとげられたことであるう。しかし、彼は誘惑に負け、信頼にそむき、その働きは、敗北と捕囚と死によつて成しとげられた。

サムソンは肉体的には、世界で一番強い人であつた。しかし、自制、誠実、堅実という点では、最も弱い人のひとりであつた。激しい感情の人を強い性格の人と考える者が多いが、実は激情に支配される人は弱い人である。

人間の真の偉大さは、その人が支配する感情によるのであつて、彼を支配する感情によるのではない。

神は、サムソンが召された働きを達成する準備が与えられるように、常に摂理的に、彼をお守りになつた。彼の生涯の三番初めから、肉体的力、知的活力、道徳的純潔を養うたためによい環境に囲まれていた。しかし、悪い友だちの感化によつて、彼は、人間の唯一の保護であつた神を手放し、悪の潮流に流された。義務の道を歩んでいて試練に会うならば、必ず神が守つてくださることを確信してよい。しかし、人間が、故意に誘惑の力に身を

さらすときに、おそかれ早かれ倒れるのである。

神がご自分の器として、特別の働きのために用いようとなさるその人々を、サタンは全力を尽くして挫折させようとする。サタンは、われわれの弱点を攻撃し、品性の欠点を通じて、人間全体を支配しようとする。そしてサタンは、こういう欠点が人の心にいだかれているかぎり、自分の成功はまちがいないことを知っている。しかし、だれでも打ち負かされる必要はない。人間は、自分の弱い力で悪の力を征服するように、放任されていない。援助は手近にある。そして、だれでも真にそれを望む者には与えられる。ヤコブが幻に見たはしごを上り下りする神の使いたちは、最高の天にまでもものぼろうと志すすべての魂に助けを与えるのである。

第 55 章

幼児サムエル

本章は、サムエル記上二章二ノ一——一に基づく。

エフライムの山地のレビ人エルカナは、富と勢力を持った人で、主を愛しおそれる人であつた。彼の妻ハンナは、信仰のあつい女であつた。優しく、けんそんで、非常な熱心さとあつい信仰とが彼女の性質の特徴であつた。

ヘブル人ならだれでも、熱心に求める祝福が、この敬神深い夫婦には与えられなかつた。彼らの家庭には、子供たちの喜ばしい声がなかつた。そして、家名を永続させたいという願いは、他の多くの者と同じように、第二の結婚契約を結ばせるにいたつた。しかし、これは、神に対する信仰の足りなさによるものであつたために、幸福をもたらさなかつた。家庭に、むすこ、娘は加えられた。しかし、神の聖なる制度の喜びと美とは傷つけられ、家族の平和は破られた。新しい妻のペニンナは、しつと深くて、心が狭く、高慢で横柄な態度を取つた。ハンナにしてみれば、希望はくじかれ、人生は耐えられない重荷のように思われるのであつた。しかし、彼女は、つばやくことなく柔和に試練に耐えた。

エルカナは、忠実に神の定めを守つた。シロでの礼拝は、なお続けられていたが、礼拝の勤めが不規則であつ

たために、レビ人として果たすべきであった当然の奉仕は、聖所で要求されていなかった。それでも、彼は、定められた集会に家族と共に礼拝に行き、犠牲をささげた。

神の勤めに関連した聖なる祭りの中でさえ、彼の家庭にわざわざをもたらしたよこしまな精神が、頭をもたげた。感謝のささげ物をすませた後、家族の者はすべて、定められた習慣に従って、厳粛ではあるが喜ばしい祝宴にあずかった。こうした際に、エルカナは、子供たちの母に一人前を与え、彼女のむすこ、娘たちにそれぞれ一人前の分け前を与えた。そして、ハンナには、彼女に対する思いのしるしとして、二人前を与えた。これは、彼女がむすこを持ったのと同様に、彼の、彼女に対する愛情を表わしたものであった。すると、第二の妻は、しつとに燃えて、自分は大いに神に恵まれている者として優位を誇り、ハンナに子供がないのは神の怒りのしるしであるといつて彼女を悩ました。こうしたことが毎年くりかえされ、ついにハンナは耐えられなくなった。彼女は悲しみを隠しきれずに泣き伏して、祝宴の席から去った。夫の慰めのことはもむだであった。「ハンナよ、なぜ泣くのか。なぜ食べないのか。どうして心に悲しむのか。わたしはあなたにとって十人の子どもよりもまさっているではないか」と彼は言った(サムエル記上 一ノ八)。

ハンナは、人を責める言葉を出さなかった。地上の友に打ち明けられない重荷を、彼女は神にゆだねた。ハンナは、神が恥を除いて、彼女にむすこという尊い賜物を賜わり、その子を神のために養育し、訓練することができると熱心に願い求めた。そして、彼女は、自分の願いがかなえられるならば、その子を生まれたときから神にささげることを厳粛に神に誓った。ハンナは、幕屋の入口近くに寄って、深く悲しみ、「祈って、はげしく泣いた」(同・一ノ一〇)。しかし、ハンナは、何も言わずに静かに神と交わった。当時の邪悪な時代にあつて

こうした礼拝の光景はめったに見られなかった。宗教的な祭りのときでさえ、神を敬わない飲食、酔酒などはいつものことであった。そして、大祭司のエリは、ハンナを見ていて、彼女が酒に酔ったものと考えた。彼は、譴責のつもりできびしく言った。「いつまで酔っているのか。酔いをさましなさい」と(同・一ノ一四)。

ハンナは心を痛め、驚いて、静かに答えた。「いいえ、わが主よ。わたしは不幸な女です。ぶどう酒も濃い酒も飲んだではありません。ただ主の前に心を注ぎ出していたのです。はしためを、悪い女と思わないでください。積る憂いと悩みのゆえに、わたしは今まで物を言っていたのです」(同・一ノ一五、一六)。

大祭司は、神の人であったので、非常に心を動かされた。そして、譴責の代わりに祝福を与えた。「安心して行きなさい。どうかイスラエルの神があなたの求める願いを聞きとどけられるように」(同・一ノ一七)。

ハンナの祈りは、聞きとどけられた。彼女は、心から願い求めた賜物を受けたのである。彼女は子供を見て、サムエル(神に求めた)と名づけた。幼児が母親から離れられるほどになるやいなや、ハンナは、誓いを果たした。ハンナは、世の母親の持つ愛情の限りを尽くして、自分の子を愛した。日ごとにむすこの力が強くなり、子供らしい片言に耳を傾けるにつれて、彼女は、ますます深くサムエルを愛した。彼は、ハンナのひとり子であり天からの特別の賜物であった。しかし、彼女は、サムエルを神にささげた宝として受けた。そして、神ご自身のものを与え主なる神に返さず、留めておこうとはしなかった。

ハンナは、もう一度、夫と共にシロに出かけて、神の名のもとに、彼女の尊い賜物を祭司にささげて言った。「この子を与えてくださいと、わたしは祈りましたが、主はわたしの求めた願いを聞きとどけられました。それゆえ、わたしもこの子を主にささげます。この子は一生のあいだ主にささげたものです」(同・一ノ二七、二八)。

エリは、イスラエルのこの女の信仰と献身に深く感動した。エリは、自分自身が子供を甘やかして育てた父親であつたので、神の奉仕にささげるために、自分のひとり子と離れる母親の崇高な犠牲を見て、畏敬の念に打たれ恥ずかしく思うのであつた。彼は、自分の利己的な愛を責められ、へりくだって、うやうやしく主の前に頭をたれて礼拝した。

母親の心は、喜びと賛美にあふれた。そして、神に対する感謝の気持ちを表わしたいと思った。彼女は靈感に満たされた。「ハンナは祈つて言つた、

『わたしの心は主によって喜び、

わたしの力は主によって強められた、

わたしの口は敵をあざ笑う、

あなたの救によつてわたしは楽しむからである。

主のように聖なるものはない、

あなたのほかに、だれもない、

われわれの神のような岩はない。

あなたがたは重ねて高慢に語つてはならない、

たかぶりの言葉を口にするをやめよ。

主はすべてを知る神であつて、

もろもろのおこないは主によって量られる。…

主は殺し、また生かし、

陰府にくだし、また上げられる。

主は貧しくし、また富ませ、

低くし、また高くされる。

貧しい者を、ちりのなかから立ちあがらせ、

乏しい者を、あくたのなかから引き上げて、

王侯と共にすわらせ、

栄誉の位を継がせられる。

地の柱は主のものであつて、

その柱の上に、世界をすえられたからである。

主はその聖徒たちの足を守られる、

しかし悪いものどもは暗黒のうちに滅びる。

人は力をもつて勝つことができないからである。

主と争うものは粉々に砕かれるであろう、

主は彼らにむかつて天から雷をとどろかし、

地のはてまでもさばき、

王に力を与え、

油そそがれた者の力を強くされるであらう」。

(サムエル記上・二ノ一 一〇)

ハンナの言葉は、イスラエルの王として支配するダビデと、主に油そそがれたメシヤとの両方を預言したものであった。歌は、まず、無礼で争いずきな女の高慢さを歌っているが、神の敵が滅ぼされて、神に贖われた人々が最後の勝利を得ることをさしている。

ハンナは、大祭司の教育のもとで、神の家の奉仕のための訓練を受けることができるように、幼児サムエルを残して、静かにシロからラマの家に帰った。子供の物ごころがつき始めたころから、彼女は、その子に神を愛し敬うことを教え、子供自身が主のものであることを自覚するように教えた。彼女は、サムエルの回りにある見られたあらゆるものによって、彼の心を創造主に導こうと努めた。子供と別れてからも、彼女の忠実な母としての心づかいがやんだのではなかった。サムエルは、彼女の日ごとの祈りの主題であった。彼女は、毎年、手ずから彼の仕事着を作った。そして、主人と共にシロに礼拝に上ったとき、彼女はこの愛のしるしを子供に与えたのである。小さな着物の一系一系は、サムエルが、清く気高く真実になるようにという祈りによって織られた。ハンナは、そのむすこが世的に偉大になることを求めるのでなくて、彼が天の認める偉大さに達することを熱心に求めた。すなわち、それは彼が神をあがめ、同胞を祝福することであった。

ハンナには、どんな報いが与えられたことであらう。そして、彼女の模範は、忠実であることに對してなんと
いう激励を与えていることであらう。測り知れない価値のある機会と、無限に尊い有利な立場とが、すべての母

親にゆだねられている。女がたいくつな仕事と考える日常のいやしい務めは、偉大で高貴な働きとみなされなければならぬ。母親には、その感化力によって世界を祝福するという特権がある。そして、そうすれば、彼女自身の心にも喜びがわくのである。彼女は、照つても曇つても輝くみ国へ行く子供たちの足のために、まっすぐな道を備えるのである。しかし、それは、母親が自分自身の生活において、キリストの教えに従おうとするときのみ、子供たちの品性を神のみかたちにかたどつて形成することを望みうるのである。世の中には、腐敗的感化がみなぎっている。流行や慣習が青年たちに強く働きかけている。もしも母親が、教え、導き、制する義務を怠るならば、子供たちは、自然と悪に従い、善から離れていく。すべての母親は、たびたび救い主のみもとに行つて、「どのように子供をしつけ、子供に何をしたらよいかを教えてください」と祈らなければならない。母親は神がみことばの中にお与えになつた教えに心を向けるとよい。そうすれば、必要に応じて、知恵が与えられることである。

「わらべサムエルは育つていき、主にも、人々にも、ますます愛せられた」（サムエル記上二ノ二六）。サムエルの青年時代は、神の礼拝のためにささげられて、神殿で過ごしたとは言え、罪深い生活の悪い感化がなかったわけではない。エリのむすこたちは、神をおそれず、彼らの父を尊ばなかった。しかし、サムエルは、彼らとの交わりを求めず、彼らの悪い行為をまねなかった。彼は、神のお望みになるものになろうと常に努力した。これはすべての青年の特権である。神は、小さい子供たちでも、神のご用のために自分自身をささげることをお喜びになる。

サムエルは、エリの指導のもとにおかれた。そして、サムエルの美しい品性にひかれて、年老いた祭司は、非



老祭司エリは、神への奉仕に、ひとり子をささげるサムエルの母の大きな犠牲を見て深く感動した。

常に彼をかわいがった。サムエルは、親切、寛大、従順、ていねいであつた。エリは、自分の子供たちのわがまに心を痛めていたが、サムエルが彼にゆだねられてから、休息と慰めと祝福とが与えられた。サムエルは、よく手助けをし、愛情がこまやかであつた。そして、エリはこの地上のどの父親よりも優しくサムエルを愛した。国家の政治をつかさどる者との間に、このような暖かい愛情が通い合うとは、不思議なことであつた。エリが老齡のためにだんだん衰弱してくると、彼自身のむすこたちの放縱な生活を憂えて苦しむのであつたが、彼は、サムエルに慰めを求めた。

レビ人は、二十五才になつて初めてそれぞれの任務につくのが慣例になつていたが、サムエルは例外であつた。サムエルには、毎年、さらに重要な任務が負わせられた。そして、彼がまだ子供であつたうちから、聖所の働きに献身したしるしとして、布のエポデをつけていた。サムエルは、幕屋の働きをするために連れてこられたときは、幼かつたけれども、そのときでさえ、彼の力量に応じた任務を負わせられて、神のご用を果たした。初め、このような仕事は、非常にいやしいことで、必ずしも快いものではなかつた。しかし、彼は、最善を尽くして、喜んでその務めを果たした。彼は、人生のすべての義務を宗教的信念をもつて行なつた。彼は、自分を神のしもべとみなし、彼の働きを神の働きと考えた。彼の努力は受け入れられた。それは、彼の努力が、神への愛と、神のみこころを行なおうとする真剣な願望によるものであつたからである。こうして、サムエルは、天地の主と共に働く者となつた。そして、神は、彼をイスラエルのために、大事業を完成するにふさわしい者となさつた。

日常の小さな義務をくりかえして行なうことは、主が子供たちのために指示された道であり、それは、彼らが忠実に力ある奉仕をするための訓練を受ける学校であることを、子供たちに教えるならば、彼らの仕事は、どん

なに楽しく尊いものとなることであろう。すべての義務を主のためにするように行なうことは、どんなにいやしい仕事をも魅力あるものにし、地上の働き人を、天で神のみこころを行なう天使たちと結合させるのである。

この世で成功を収め、来世の獲得にも成功することは、小事を忠実に、良心的に行なうことにかかっている。完全さは、神のお造りになったものの中の大きいものと同様に、小さいものの中にも見られる。宇宙に諸世界を掛けた手は、巧みに野の花を造った手であった。そして、神がその領域で完全であられるように、われわれも、われわれの領域で完全でなければならない。均整のとれた強く美しい品性は、一つ一つの義務を行なう行為によって築かれる。そして、われわれの人生の大きな事と同様に小さい事においても、忠実さが特徴とならなければならない。小事に忠実であること、小さい忠誠の行為や小さい親切の行為は、人生の道を楽しいものにする。そして、われわれの地上の仕事が終わったときに、われわれが忠実に行なった義務の一つ一つは、よい感化を及ぼしたことを知る。そうした感化は、いつまでも消えないのである。

サムエルと同様に、現代の青年も神の御目に尊いものとみなされることができる。彼らは、クリスチャンとしての忠誠を保つことによつて、改革の働きのために強い感化を及ぼすことができる。こうした人が今日必要である。神は、彼らのひとりびとりのなすべき働きを持っておられる。今日、神の信頼に忠実である者は、これまでどんな人もなし得なかった大きなことを、神と人類のためになしとげるのである。

第 56 章

エリとむすこたち

本章は、サムエル記上二ノ一二 三六に基づく。

エリは、イスラエルの祭司であり、士師であつた。彼は、神の民の中で、最高で最も責任ある地位を占めていた。祭司の聖職に選ばれた人、また、国じゅうで最高の裁判権を持った者として、エリは、人々の模範として尊敬され、イスラエルの部族に大きな感化を及ぼしていた。ところが、彼は、人々を治める任命は受けたが、自身の家は治めなかつた。エリは、甘い父親であつた。彼は平和と安易を愛したので、彼の權威を行使して子供たちの悪習慣と情欲を是正しなかつた。彼は、子供たちと争つたり彼らを罰したりしないで、子供たちのほしいほうだいのことをやらせておいた。彼は、子供たちの教育が、彼の最も重大な責任の一つであることを自覚しないで、そのことを軽視した。イスラエルの祭司であり、裁判官である者は、神がおゆだねになつた子供たちを制し、治める義務について、無知であつたわけではなかつた。しかし、エリは、義務を行なうことを恐れてしなかつた。なぜなら、それは、むすこたちの意志にさからい、彼らを罰し、拒むことを必要としたからであつた。エリは、彼のこうした態度がどんなに恐ろしい結果をもたらすのかをも考えないで、子供たちの好むままのことを

行なわせ、彼らを神の奉仕と、人生の義務のために準備することを怠った。

神は、アブラハムについて言われた。「わたしは彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知ったのである」(創世記一八ノ一九)。しかし、エリは、子供たちのするがままになっていた。父親は、子供たちの家来であった。犯罪ののろいは、彼のむすこたちの行為にあらわれた腐敗と悪に明らかに見られた。彼らは、神の品性も神の律法の神聖さも正しく理解しなかった。彼らにとって、神に仕えることは、普通のことであった。彼らは、子供のときから聖所とその務めになれていた。しかし、彼らは、もつと敬神深くなるかわりに、その神聖さと意義とを、まったく見失ってしまった。父親は、子供たちが、自分の權威を敬わないことを是正せず、厳肅な聖所の務めを尊ばないのを抑制しなかった。それで、彼らが成人したときに、彼らは、懷疑と反逆の恐ろしい実に満ちていた。

彼らは、その職務に全然適していなかったけれども、祭司の地位を占めて、聖所で神の前の奉仕をしていた。主は、犠牲をささげることに關して、厳格な指示を与えておられた。しかし、この悪い人々は、神の奉仕においても、權威を無視する精神を表わし、供え物は、最も厳肅に行なわれるべきであるのに、供え物の律法に注意を払わなかった。キリストの死を予表した犠牲は、来たるべき贖い主に対する信仰を人々の心に抱かせておくために計画されたものであった。であるから、それに関する主の指示には、厳格に従うことが何より重大なことであった。酬恩祭は、特に、神への感謝を表現したものであった。これらの犠牲においては、ただ脂肪のみが、祭壇で焼かれた。ある定められた部分が祭司のために保留された。しかし、その大部分は、ささげた人が、犠牲にあずかる祝宴を開いて、友人たちと食べるために返された。こうして、すべての人の心が、世の罪を取り除く大い

なる犠牲に、感謝と信仰をもって、向けられるのであった。

エリのむすこたちは、この象徴的な務めの厳肅さを理解する代わりに、ただそれを自己満足的手段にすることしか考えなかった。彼らに割り当てられた酬恩祭のささげ物の部分で満足せず、彼らは、追加の部分も要求した。そして、年ごとの祭りのときにささげられたこれらのささげ物の多くは、人々を犠牲にして自分たちの腹を肥やす機会を祭司たちに与えた。彼らは、当然受けるべき分以上を要求しただけでなくて、脂肪が神へのささげ物として焼かれるまで待とうとすらしなかった。彼らは、どの部分でも好むところを強引に手に入れ、もし拒まれでもすると暴力をふるってでも取るとおどすのであった。

祭司のがわの不敬虔な態度は、間もなく、務めの聖にして厳肅な意義を失わせ、人々は、「主の供え物を軽んじた」。彼らが待望すべきであった偉大な犠牲の実体であられるおかたは、もはや認められなかった。「このように、その若者たちの罪は、主の前に非常に大きかった」(サムエル記上二ノ一七)。

これらの不忠実な祭司たちは、また、彼らの悪徳と墮落した行為によって、神の戒めを破り、彼らの聖職を汚した。それでも、なお、彼らはそこにいて、神の幕屋を汚し続けた。ホフニとピネハスの悪行に怒った多くの人は、礼拝の場所に来なくなつた。こうして、神がお定めになつた務めは、悪人の罪と関連があつたために軽んじられ、おろそかにされた。それと共に、悪の傾向をもつた者は、大胆に罪に走つた。不信心、不品行、偶像礼拝すらが、恐ろしく広く行なわれた。

エリは、自分のむすこたちを聖職につかせて、大きな過失を犯した。エリは、あれやこれやにかこつけて、彼らの行動を黙認し、彼らの罪に盲目になつていた。しかし、ついに、エリは、彼のむすこらの罪に目をそむけて

いることができなくなってしまった。人々が、彼らの非行を非難し、大祭司は、悲しみと悩みに沈んだ。彼はもう黙ってはおれなくなった。しかし、彼のむすこたちは、自分のこと以外は、だれのこととも考えないように育てられていた。それで、彼らは、人のことは何もかまわなかった。彼らは、父親の悲しみを見たが、その堅い心は動かなかった。彼らは、父の穏やかな勧告を聞いたが感銘を受けなかった。その罪の結果の警告を聞いたけれども、その悪行を改めようとしなかった。もし、エリが、その悪いむすこたちを正当にあつかっていたならば、彼らは、祭司職から退けられて、死に処せられていたことであろう。こうして、エリは、彼らの恥と処罰を公にすることを恐れて、最も聖なる信頼の地位に彼らを留めておいた。エリは、むすこたちが、神の聖なる務めを腐敗させ、長年にわたって消し去ることのできない害を、真理の働きに及ぼすのを、なおも許した。しかし、イスラエルの士師が、その任務を怠ったときに、神が、それを処理なさるのであった。

「このとき、ひとりの神の人が、エリのもとにきて言った、『主はかく仰せられる、「あなたの先祖の家がエジプトでパロの家の奴隷であったとき、わたしはその先祖の家に自らを現した。そしてイスラエルのすべての部族のうちからそれを選び出して、わたしの祭司とし、わたしの祭壇に上って、香をたかせ、わたしの前でエポデを着けさせ、また、イスラエルの人々の火祭をことごとくあなたの先祖の家に与えた。それにどうしてあなたがたは、わたしが命じた犠牲と供え物をむさぼりの目をもって見るのか。またなにゆえ、わたしよりも自分の子らを尊び、わたしの民イスラエルのささげるもろもろの供え物の、最も良き部分をもって自分を肥やすのか。それゆえイスラエルの神、主は仰せられる、「わたしはかつて、『あなたの家とあなたの父の家とは、永久にわたしの前に歩むであろう』と言った。しかし今、主は仰せられる、「決してそうはしない。わたしを尊ぶ者を、わたし

は尊び、わたしを卑しめる者は、軽んぜられるであろう。…わたしは自分のために、ひとりの忠実な祭司を起す。その人はわたしの心と思いとに従って行うであろう。わたしはその家を確立しよう。その人はわたしが油そそいだ者の前につねに歩むであろう』(同・二ノ二七―三五)。

神は、エリが神よりも子供たちを尊んだと責められた。エリは、彼らの神を恐れずに行なう憎むべき行為に恥をこうむらせるよりは、神がイスラエルの祝福として定められたさざげ物が、憎むべきものにされることを許した。自分の好きかってなことを行なつて、子供たちを盲愛し、子供たちの利己的な欲望をほしいままにさせる者、また、神の権威によつて、子供たちの罪を責め、悪を是正しない者は、神を尊ぶよりは、彼らの悪い子供たちを尊んでいることを示している。彼らは、神に栄光を帰するよりは、彼らの評判を保護することにもっと気を使っている。主を喜ばせ、主のご用をあらゆる種類の悪から守ることよりは、彼らの子供たちを喜ばせることを望んでいる。

神は、イスラエルの祭司また士師としてのエリに、彼の民の道徳的、宗教的状态、特に彼のおすこたちの品性の責任を負わせられた。彼は、まず最初に、穏やかな手段で、悪を抑制しようとすべきであつた。ところが、その効果がなければ、きびしい方法で、悪を押えるべきであつた。彼は、罪を責めず、罪人を正当に罰しなかつたために、神の怒りをこうむつた。イスラエルを純潔に保つために、彼に信頼することはできなくなつた。悪を譴責する勇氣に乏しく、怠慢または関心が欠けているために、家族または神の教会を清める努力を熱心にしない者は、その義務の怠慢の結果生じた悪の責任を問われる。親として、または牧師としての権威によつて、とどめることができた人の悪は、あたかもそれが自分の行為であるかのように責任を問われる。

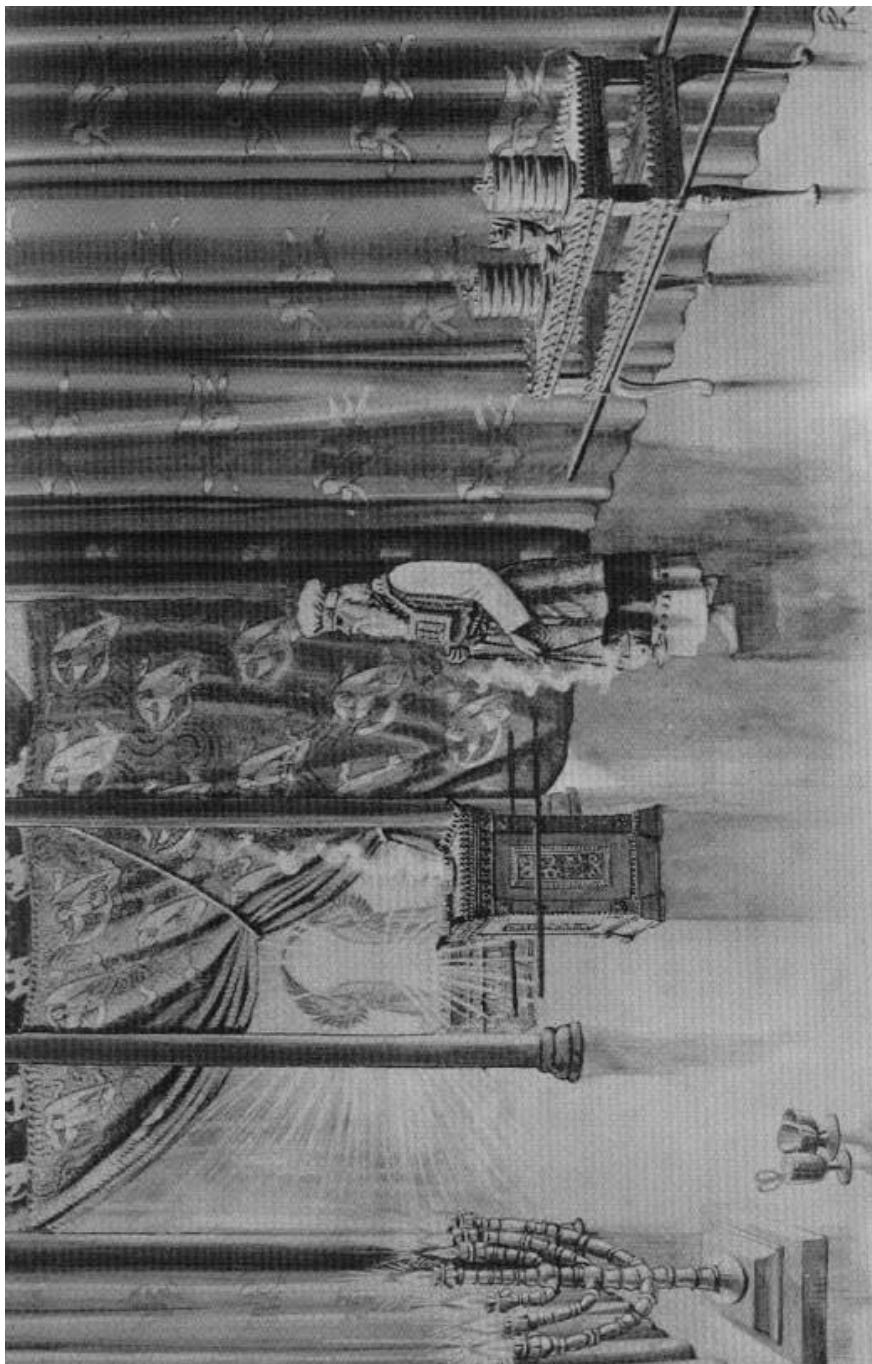
エリは、家族の管理に関する神の規則に従って、彼の家を治めなかった。彼は、自分の判断に従った。甘い父親は、彼のむすこたちの子供時代の欠点や罪を見過ごしにし、しばらくすれば、彼らの悪い性癖はなおるものだろうと安易に考えた。今も、それと同じようなまちがいを犯している者が多い。彼らは、神がみことばのなかにお与えになった方法よりも、さらにすぐれた子供の教育法を知っていると思っている。彼らは、子供たちに悪い癖をつける。そして、「彼らは、まだ小さくて、罰することはできない。大きくなるまで待つて、よく言いかけよう」と申しわけをする。こうして、悪癖は助長されて、第二の天性になってしまう。子供たちは、抑制を受けず、彼らの生涯を通じてののろいとなり、また他の人にも伝染する可能性のある品性の傾向をもって成長する。青年たちに、好きかってなことをさせておくことほど家庭にとって大きなのろいはない。親が、子供たちの欲することをみな許し、彼らのためでないと知っていることをしたいままにさせておくとき、まもなく子供たちは親に対する尊敬を全く失い、神または人の権威も全然認めなくなり、サタンの意のままに捕虜になってしまう。よく治められない家庭の感化は遠くまで及び、社会全体を不幸に陥れる。それは、悪の潮流のように高まって、家族、社会、国家に影響を及ぼす。

エリは、地位の高い人であったから、彼が一般の人であった場合よりは、はるかにその感化の範囲は広がった。イスラエルじゅうの人々が、彼の家庭生活をまねた。彼の怠慢、安易な生活の悪い結果は、それをまねた幾千の家庭に見られた。両親が信仰を持っていると言いながら、子供たちが悪い行為をするのを放任しておくならば、神の真理がそしりを受ける。家庭のキリスト教がどんなものであるかの最良の試験は、その影響によって、どんな型の品性が生まれるかということである。どんな明確な信仰の表明よりも、行動のほうがより大きな力がある。

信仰をもっているという者が、神を信じることの有益なことについてのあかしとして、秩序ある家庭を築くように、熱心にうまずたゆまず、努力することをしないで、家の治め方がゆるく、子供たちの悪い欲望をほしいままにさせるならば、エリと同様に、神の働きにそしりを招き、子供たちとその家を破滅させる。しかし、どのような環境のもとにあっても、両親が不忠実であるということは、大きな悪であるが、それが人々の教師として任じられた者の家庭の場合ならば、十倍も大きいのである。彼らが自分たちの家をよく管理できないならば、その悪い例によって、多くの人々をつまずかせる。彼らは、責任のある地位の者であつたから、他の人々よりは、罪がはるかに大きかった。

アロンの家は、常に神の前を歩くであろうという約束が与えられていたが、しかし、この約束は、彼らが誠実をもつて、聖所の働きに献身し、すべての道で神をあがめ、自己に仕えず、自分の曲がつた性質に従わないという条件のもとになされた。エリとそのむすこたちは、試練を受けて、神の聖所の祭司の高い地位には全く値しないことが主にわかった。そこで、神は、「決してそうはしない」と言われた(同・二ノ三〇)。彼らが自分たちのすべき分をしなかつたために、神は、彼らに与えようとなさつた恵みを実現することがおできにならなかつた。

聖なることのために働く者は、神を敬うことと、神を怒らせることを恐れることを深く人々に印象づける模範を与えなければならない。人が「キリストに代つて」(コリント第二・五ノ二〇)、人々に、神のあわれみと和解の使命を語るとき、その聖職を利己心や情欲の満足のためのおおいとするならば、彼らは、サタンの最も有力な部下になる。ホフニとピネハスのように、彼らは人々に、「主の供え物を軽んじ」させる。彼らは、その悪行をしばらくは隠れて行なうことであろう。しかし、ついには、その本性を暴露させる。そして、人々の信仰は、



幕屋の前の部分は燭台と机と供えのパンと香壇とが置かれており聖所と呼ばれた。幕の後は至聖所で、そこには契約の箱が置かれその上に置かれたケルビムの間から神の臨在を示すシェキナーが輝いていた。このような中で大祭司はおごそかに奉仕した。

大きな打撃をうけて、宗教に対する確信を失ってしまう結果にもなる。人々の心は、神の言葉を教えると称する者をすべて信じないようになる。キリストの真のしもべの言葉が、疑惑の念をもって受け取られる。「この人は、わたしたちが清いと思っていたのに、あんなに墮落していたあの人のようになるのではないだろうか」という疑念が、絶えず起こる。こうして、神の言葉は、人の魂に及ぼす力を失うのである。

むすこたちへのエリの譴責のなかに、厳粛で恐るべき言葉がある。その言葉は、清いもののために奉仕するすべての者がよく考えなければならぬものである。「もし人が人に対して罪を犯すならば、神が仲裁されるであろう。しかし人が主に対して罪を犯すならば、だれが、そのとりなしをすることができようか」(サムエル記上二ノ二五)。もし、彼らの罪が、彼らの同胞だけを傷つけたものであれば、裁判官が、罰と弁償を命じて、和解させることができた。こうして、犯罪者は、許されることができたであろう。また、彼らが僭越の罪を犯したのであれば、彼らのために罪祭をささげることができた。しかし、彼らの罪は、至高者の祭司としての務め、罪のために犠牲をささげることに深い関係があった。神の働きは、人々の前で、汚され、名誉を傷つけられてしまったために、どのような償いも受け入れられなかった。大祭司であつた彼ら自身の父でさえ、彼らのためにとりなしをしようとしなかった。彼は、聖なる神の怒りから彼らを守ることができなかった。すべての罪人の中で、天が人間の救いのために与えた手段を軽べつし、「またもや神の御子を、自ら十字架につけて、さらしものにする」者が最も罪深いのである(ヘブル六ノ六)。

契約の箱ペリシテ人に奪われる

本章は、サムエル記上三 七章に基づく。

エリの家に、もう一つの警告が与えられなかった。神は、それを大祭司やそのむすこたちには伝えることができなかった。彼らの罪が、厚い雲のように、神の聖霊の臨在をさえぎっていた。しかし、悪のなかにあつて、幼児サムエルは、天の神に忠実であつた。そして、いと高き神の預言者として、エリの家に譴責の言葉が語ることがサムエルにゆだねられた。

「そのころ、主の言葉はまれで、黙示も常ではなかった。さてエリは、しだいに目がかすんで、見ることができなくなり、そのとき自分のへやで寝ていた。神のともしびはまだ消えず、サムエルが神の箱のある主の神殿に寝ていた時、主は『サムエルよ、サムエルよ』と呼ばれた」（サムエル記上三ノ一 四）。サムエルは、エリが呼んだものと思つて、急いで祭司の寝台のところへ行つて、「あなたがお呼びになりました。わたしは、ここにおります」と言つた。しかし、「わたしは呼ばない。歸つて寝なさい」とエリは答えた（同・三ノ五）。サムエルは、三回呼ばれて、三回ともエリは同じような返答をした。そのとき、エリは、その不思議な呼び声が、神の声であ

ることを確信した。主は、ご自分が選ばれた白髪のしもべをさしおいて、幼児に語られた。このこと自体がエリとエリの家に対してはつらいことであつたが、当然の譴責であつた。

エリには、ねたみ、うらやむ気持ちはなかつた。彼は、もう一度呼ばれたならば、「しもべは聞きます。主よ、お話しください」と言うように、サムエルに指示を与えた。声は、もう一度聞こえた。それで、サムエルは、「しもべは聞きます。お話しください」と言つた(同・三ノ九、一〇)。彼は、偉大な神が自分にお語りになるというので、非常におそれ、エリが言うように命じた言葉をその通り覚えられないのではないかと思つた。

「その時、主はサムエルに言われた、『見よ、わたしはイスラエルのうちに一つの事をする。それを聞く者はみな、耳が二つとも鳴るであらう。その日には、わたしが、かつてエリの家について話したことを、はじめから終りまでことごとく、エリに行うであらう。わたしはエリに、彼が知っている悪事のゆえに、その家を永久に罰することを告げる。その子らが神をけがしているのに、彼がそれをとめなかつたからである。それゆえ、わたしはエリの家に誓う。エリの家の悪は、犠牲や供え物をもつてしても、永久にあがなわれないであらう』」(同・三ノ一一—一四)。

神からこの使命を受ける前、「サムエルはまだ主を知らず、主の言葉がまだ彼に現されなかつた」(同・三ノ七)。それというのは、彼が、まだ、神の預言者に与えられる神の臨在のこのような直接のあらわれを知らなかつたということである。主は、予期しない方法で、ご自分をあらわし、少年の驚きと質問とによって、エリがそのことを聞くようになることをご計画になつた。

サムエルは、恐ろしい言葉が彼にゆだねられたことを考えて、恐怖と驚きに満たされた。彼は、朝、いつもの

務めを果たしていたが、心は重かった。主はまだ恐ろしい非難の言葉を語るようにお命じになっていなかったのだ、彼は黙っていた。そして、できるだけエリと一緒にいないようにした。彼は、何か質問されて、自分が愛し敬っているひとに降下する神の刑罰を言わなければならないのではないかと恐れおののいた。エリは、その言葉が、彼と彼の家の大きな不幸を予告するものであるに違いないと思った。彼は、サムエルを呼んで、主がおあらしになったことをそのまま話すように命じた。少年は従った。そして、年とったエリは、心を低くして、恐ろしい宣言に聞き従った。「それは主である。どうぞ主が、良いと思うことを行われるように」と彼は言った（同・三ノ一八）。

しかし、エリは、真の悔い改めの実を示さなかった。彼は、罪を告白したが、その罪を捨てなかった。主は、何年も刑罰をくだすことを延ばされた。その間に、過去の失敗を償う多くのことができたのであったが、年をとった祭司は、主の聖所を汚し、イスラエルの幾千という魂を滅びに陥れていた悪を正すために、効果的な手段を取らなかった。神の忍耐は、ホフニとピネハスの心を堅くし、さらに大胆に罪を犯させた。エリは、自分の家と与えられた警告と譴責の言葉を、全国に知らせた。彼は、こうした方法で、彼の過去の怠慢の悪影響をいくらかでも取り消そうと望んだ。しかし、祭司たちと同様に、人々も警告を無視した。イスラエルのなかで悪が公然と行なわれるのを知っていた回りの国々の民も、さらに大胆に偶像礼拝を行ない、犯罪を続けた。彼らは、もし、イスラエルの人々が忠誠を尽くしていたならば感じたはずの罪の意識を、自分たちの罪に対して持たなかった。しかし、報復の日は接近していた。神の権威は退けられ、神の礼拝は、無視され、軽べつされた。それで、神の名の名誉を維持するために、神が手を下さなければならなくなった。

「イスラエルびとは出てペリシテびとと戦おうとして、エベネゼルのほとりに陣をしき、ペリシテびとはアペクに陣をしいた」（同・四ノ一）。イスラエルの人々は、神の指示も仰がず、大祭司または預言者の同意も得ないでこの遠征に着手した。「ペリシテびとはイスラエルびとにむかつて陣備えをしたが、戦うに及んで、イスラエルびとはペリシテびとの前に敗れ、ペリシテびとは戦場において、おおよそ四千人を殺した」（同・四ノ二）。敗北して失望した軍勢が陣営に帰ってきたときに、イスラエルの長老たちは言った、「なにゆえ、主はきよう、ペリシテびとの前にわれわれを敗られたのか」。国家に神の刑罰が下るときは、熟していた。それにもかかわらず、彼らは、自分たちの罪がこの恐ろしい災いの原因であることを悟らなかった。そして、彼らは言った。「シロへ行って主の契約の箱をここへ携えてくることにしよう。そして主をわれわれのうちに迎えて、敵の手から救っていただく」（同・四ノ三）。主は、箱を軍勢の中に持ち出す命令も許可もお与えにならなかった。しかし、イスラエルの人々は、箱が、エリのむすこたちによって陣営に運ばれてきたときに、勝利を確信して大声をあげた。

ペリシテ人は、契約の箱が、イスラエルの神であると思った。彼らは、主が主の民のために行なわれた偉大なわざを、みなその力のせいにしていた。彼らは、契約の箱が近づいたときに上がった喜びの叫びを聞いて言った。

『「へブルびとの陣営の、この大きな叫び声は何事か」。そして主の箱が、陣営に着いたことを知った時、ペリシテびとは恐れて言った、『神々が陣営にきたのだ』。彼らはまた言った、『ああ、われわれはわざわいである。このようなことは今までなかった。ああ、われわれはわざわいである。だれがわれわれをこれらの強い神々の手から救い出すことができようか。これらの神々は、もろもろの災をもつてエジプトびとを荒野で撃つたのだ。ペリシテびとよ、勇気を出して男らしくせよ。へブルびとがあなたがたに仕えたように、あなたがたが彼らに仕える

ことのないために、男らしく戦え。」(同・四ノ六 九)。

ペリシテ人は、猛烈に戦った。そのため、イスラエルは敗れ、多くの死者を出した。三万人が戦場で倒れ、神の箱は奪われ、エリのふたりのむすこは箱を守って戦っているときに倒れた。こうして、神の民であると自認する人々の罪は、必ず罰せられるということが、将来のすべての時代のためのあかしとして、もう一度、歴史に書き残された。神のみこころの知識があればあるほど、それを無視する者の罪は大きいのである。

イスラエルには、最も戦慄すべき災害がくだった。神の箱は奪われ、敵の手中に陥った。主の臨在と能力の象徴が、彼らの中から取り去られて、栄光は、イスラエルから離れた。神の真理と能力の最も驚くべき啓示が、この聖なる箱に結びつけられていた。以前には、箱が現われるたびに、奇跡的勝利が行なわれたのであった。それは、金のケルビムの翼でおおわれ、至高者なる神の、目に見える象徴であるシェキーナーの、言葉で表現できない栄光が、至聖所のなかで箱の上に宿っていた。しかし、それは、今は勝利を与えなかった。この場合、それは防御とはならなかった。そして、イスラエル全体は悲しみに沈んだ。

彼らは、自分たちの信仰が、ただ名だけの信仰であって、神を動かす力を失っていたことに気づかなかった。箱の中の神の律法も神の臨在の象徴であった。しかし、彼らは、律法を軽べつしてその要求をさげすみ、彼らの中の主の霊を悲しませた。人々が聖なる戒めに従ったときには、主は彼らと共にあって、主の無限の力によって彼らのために働かれた。しかし、彼らが箱を見ても、それを神と結びつけず、神の律法に従って神の啓示されたみこころを尊ばないならば、それは、普通の箱と同様になんの役にも立たない。彼らは、偶像国の人々が、その神々を見るように箱をながめ、あたかもそれ自体に能力と救いの要素があると思った。彼らは、そのなかの律法

を犯した。箱の礼拝そのものが、彼らを形式主義と偽善と偶像礼拝に陥れた。彼らの罪が、彼らを神から引き離した。だから神は、彼らが悔い改めて悪を捨てるまでは、彼らに勝利を与えることがおできにならなかった。

契約の箱と聖所が、イスラエルの中にあるだけでは十分でなかった。祭司が犠牲をささげ、人々が神の子供と呼ばれるだけでは十分でなかった。主は、よこしまな心をいだいた者の願いを聞かれない。「耳をそむけて律法を聞かない者は、その祈りさえも憎まれる」と記されている(箴言二八ノ九)。

軍勢が戦いに出て行ったとき、盲目の老人エリは、シロにとどまっていた。彼は、不安な予感におののきながら、戦いの結果を待った。「その心に神の箱の事を気づかっていたからである」(サムエル記上四ノ一二)。彼は幕屋の門の外に場所を設けて、毎日道のかたわらにすわり、戦場からの使者の到着を待ちわびていた。

ついに、ひとりのベニヤミン人が、「衣服を裂き、頭に土をかぶって」町に通じる坂を急いでやってきた(同・四ノ一二)。彼は、道のそばの老人には目もくれずに通りすぎて、熱狂した群集に敗北と損害の知らせを伝えた。

泣き叫ぶ声が、幕屋のそばで待ちかまえていたエリの耳に達した。使者が、彼のところへ連れて来られた。彼は、エリに言った。「イスラエルびとは、ペリシテびとの前から逃げ、民のうちにはまた多くの戦死者があり、あなたのふたりの子、ホフニとピネハスも死に」ました、と。これは、恐ろしいことではあったが、エリは、それを予期していたので、耐えることができた。しかし、使者が、「神の箱は奪われました」とつけ加えたときに言葉には表現できない苦悩の色が彼の顔をよぎった(同・四ノ一七)。彼は、彼の罪のためにこのように神をはずかしめ、神の臨在がイスラエルから取り去られるに至ったことを考えたときに、もう耐えることができなかった。彼は、力が抜けて倒れ、「首を折って死んだ」(同・四ノ一八)。

ピネハスの妻は、夫が不信心であつたにもかかわらず、主をおそれる女であつた。義父と夫の死、とりわけ、神の箱が奪われたという恐ろしい知らせが、彼女の死の原因であつた。彼女は、イスラエルの最後の希望が消えたと感じた。彼女はこの不幸なときに生まれた子を、イカボデ「栄光は去つた」と名づけた。彼女は、臨終の息の中から、悲しそうに、「栄光はイスラエルを去つた。神の箱が奪われたからです」と言い続けた(同・四ノ二二)。

しかし、主は、その民を全く捨て去られたのではなかつた。また、異教徒が勝ち誇るのを長くお許しにならなかつた。彼は、イスラエルを罰する器として、ペリシテ人を用いられたが、ペリシテ人を罰するために、契約の箱を用いられた。以前、それには、神の臨在が宿り、神に従う人々の能力と栄光になつた。その目に見えない臨在は、なお宿つていて、神の聖なる律法を犯すものに、恐怖と滅びをもたらすのであつた。主は、しばしば、神の民と称する人々の不忠実を罰するために、最もうらみ重なる敵をお用いになる。悪人は、しばらく勝ち誇つてイスラエルが罰せられるのを見るであろう。しかし、彼らもまた、神聖で罪を憎まれる神の宣告を受けなければならぬときが来る。心に悪がいだかれているならば、どこであつても、急速で確実な神の刑罰がくだるのである。

ペリシテ人は、勝ち誇つて彼らの五大都市の一つであるアシッドに契約の箱を持って行き、彼らの神ダゴンの神殿の中においた。彼らは、これまで、箱にあつた力が彼らのものになり、この力が、ダゴンの力と結合して、彼らを何物にも負けないものにすると考えた。ところが翌日、彼らは、宮にはいつて驚嘆すべき光景をながめた。ダゴンが主の箱の前に、うつむきに地に倒れていた。祭司たちは、うやうやしく偶像を起こして、元の所にもどした。しかし、その像は、翌朝も不思議に破損して、また、箱の前に倒れていた。この偶像の上部は人間の形をしていて、下部は魚になっていた。それで人間の形をしていた部分が全部切りとられ、魚のからだの部分だけが

残っていた。祭司と人々は、恐怖に襲われた。彼らは、この不思議な事件を、彼らと彼らの偶像がヘブルの神の前で滅ぼされる凶兆であると考えた。そこで、彼らは箱を宮から移して、それだけを一つの建物に入れておいた。

アシドドの住民は、苦しい、致命的病気に悩まされた。人々は、イスラエルの神が、エジプトにくだされた災害を思い出して、この苦しみは箱が彼らのところにあるからだと思った。彼らは、箱をガテに移すことにきめた。

すると災いが移されたところにも及んだので、その町の人々は、箱をエクロンに送った。この人々は、箱が来ると恐れて叫んだ。「彼らがイスラエルの神の箱をわれわれの所に移したのは、われわれと民を滅ぼすためである」(同・五ノ一〇)。彼らは、ガテやアシドドの人々と同様に、彼らの神に助けを求めた。しかし、破壊者の働きは、なお続き、人々は非常な苦しみに会い、「町の叫びは天に達した」(同・五ノ一二)。人々は、これ以上箱を人家の間に置くことを恐れて、今度はそれを屋外の畑に置いた。すると、地を荒らすねずみの災いが起こり、倉の中や畑にある地の産物を両方とも荒らした。こうなつては、病氣とききんのために、国家は全滅するばかりになった。

箱は、七か月の間、ペリシテ人の地にあつた。その間、イスラエルの人々は、それを取り返そうと努めなかった。しかし、ペリシテ人は、今、それを手に入れたときと同じ熱意をもつて、それを、彼らの間から取り去ろうとしていた。それは、彼らの力の根源となるどころか、大きな重荷となり、苦しいのろいとなった。しかし、彼らは、どうしてよいかわからなかった。それをどこへ持って行つても、神の刑罰がそこに下つたからである。ペリシテ人は、国のつかさたち、祭司や占い師たちを呼んで、しきりにたずねた。「イスラエルの神の箱をどうしましうか。どのようにして、それをもとの所へ送り返せばよいか告げてください」(同・六ノ二)。彼らは、高

価な、とがの供え物をそえて箱を返せばよいと勧められた。「そうすれば、あなたがたはいやされ、また彼の手がなぜあなたがたを離れないかを知ることができるであろう」と祭司たちは言った(同・六ノ三)。

災害を避けたり、除去したりするためには、金、銀、その他の金属で、破壊をもたらしたものの、または、特に影響を受けた物、または身体の部分の像を作ることが古代の習慣であつた。これが、柱の上、または、どこかよく目立つところに置かれた。こうして像は、それが代表している災害から保護する力があると思われる。同様のことが、今日でも、ある異教徒の間で行なわれている。病気で苦しんでいる人が、いやしを求めて偶像の宮に行くと、彼は、病氣の部分の像を持って行つて、それを神への供え物としてささげる。

ペリシテ人のつかさたちが、彼らを苦しめた災害の像を作るように指示したのは、一般に行なわれていた迷信に従つたものであつた。「ペリシテびとの君たちの数にしたがつて、金の腫物五つと金のねずみ五つである。あなたがたすべてと、君たちに臨んだ災は一つだからである」と彼らは言った(同・六ノ四)。

これらの賢者たちは、箱に不思議な力があることを認めた。彼らは、その力に対抗する知恵を持ち合わせなかった。それにもかかわらず、彼らは、偶像礼拝をやめて、主に仕えることを人々に勧告しなかった。彼らは、圧倒的刑罰によつて、神の権威に従わなければならなくなつたにもかかわらず、イスラエルの神を憎んだ。こうして、罪人は、神に逆らつて戦うことが無益であることを、神の刑罰によつて悟るようになる。心では、神の支配に反逆していても、やむを得ず神の力に従うであろう。このような服従は罪人を救うことができない。われわれは、心を神にささげなければならない。人間の悔い改めが受け入れられる前に、まず、心が神の恵みによつて和らげられなければならない。

悪人に対する神の忍耐は、なんと大きいことであろう。偶像を礼拝するペリシテ人も、背信したイスラエルも同様に、神の摂理の賜物を受けていた。人の気づかぬ無数の恵みが、恩を忘れて反逆する人間の歩む道に、静かに降り注いでいた。どの祝福も、与え主であられる神のことを語っていたが、彼らは、神の愛に無関心であった。人間の子らに対する神の忍耐は非常に大きかった。しかし、彼らが心をかたくなにして、悔い改めを拒み続けていると、神は、彼らから保護の手を取り除かれた。彼らは、神の創造のみわざ、また、神の言葉の警告、勧告、譴責などの中に、神のみ声を聞くことを拒んだので、神はやむを得ず、刑罰を通して彼らに語らなければならなくなつた。

ペリシテ人の中には、箱を本国に返すことに反対して立ち上がるものもいくらかいた。そんなことをして、イスラエルの神の力を認めることは、ペリシテ人の誇りを傷つけるものであった。しかし、「祭司や占い師」は、パロとエジプト人の頑迷さのまねをして、さらに大きな災難を招かないようにしようと、人々に勧告した。こうして、すべての人が賛成した計画が提出されて、すぐに実行に移されることになつた。箱は、金で作つたがの供え物と共に、新しい車に乗せられて、汚れる危険が全くないようにした。この荷車に、まだくびきをつけたことのない乳牛が二頭つけられた。彼らの子牛は、室内に閉じ込められていて、乳牛はどこにでも行きたいところに自由に行かせることにした。もし箱が、レビ族の一番近い町、ベテシメシの方向へ行つて、イスラエル人に返されるならば、ペリシテ人はこの大きな災害をくだしたのはイスラエルの神であるとするのであつた。「しかし、そうしない時は、われわれを撃つたのは彼の手ではなく、その事の偶然であつたことを知るであろう」と彼らは言つた（同・六ノ九）。

放された乳牛は、その子牛から離れて、ベテシメシへの道をまっすぐに、なきながら進んで行った。忍耐強い牛は、人手に導かれなくて進んで行った。神の臨在が箱に伴って行った。箱は、安全に定められた場所に到着した。

それは麦刈りの季節で、ベテシメシの人々は谷で刈り入れていた。「目をあげて、その箱を見、それを迎えて喜んだ。車はベテシメシびとヨシユアの畑にはいつて、そこにとどまった。その所に大きな石があった。人々は車の木を割り、その雌牛を燔祭として主にささげた」「ベテシメシの境まで」そのあとについてきたペリシテ人の君たちは、それが迎えられたのを見て、エクロンに帰っていった(同・六ノ二三、一四、一二)。こうして、災害はやんだ。そして、人々は、彼らの災害がイスラエルの神の刑罰であったことを悟った。

ベテシメシの人々は、箱が自分たちの手中にあるという知らせを、すぐに広めたので、回りに住んでいる人々は、それが帰ってきたのを歓迎するために群がってきた。箱は、石の上に置かれた。その石は、まず、祭壇の用を果たしたが、その前で、ほかの犠牲もそれと共に主にささげられた。もし、礼拝者たちが、罪を悔い改めたならば、神の祝福が彼らに与えられるのであった。しかし、彼らは、忠実に神の律法に従っていなかった。そして彼らは幸福の前兆として、箱が帰ってきたことを喜んだけれども、その神聖さをほんとうに理解していなかった。箱を受け入れるために適当な場所を用意するかわりに、それを収獲の野にそのままにして置いた。聖なる箱をながめ、驚くべき方法で、それが返還されたことなどを話し合っているうちに、どこにそのような特殊な能力がひそんでいるのかを、彼らは推測しはじめた。ついに、好奇心にかられて、彼らは、おおいを除き、あえてふたを開こうとした。

イスラエル全国の人々は、箱を畏敬の念をもって見るように教えられていた。箱を移動させなければならぬ

ときに、レビ人は、それをながめてもいけなかった。年に一度、ただ大祭司だけが神の箱を見ることを許されていた。異教のペリシテ人でさえ、そのおおいを取ろうとはしなかった。目には見えなかったが、天使たちがその行くところに常に従っていた。ベテシメシの人々の不敬虔な行動は、すみやかに罰せられた。多くの者が、突然殺されたのである。

生き残った人々は、この刑罰によって、彼らの罪を悔い改めようとはせず、箱を迷信的恐怖で見たにすぎなかった。ベテシメシの人々は、箱を取り除きたいと願いながらも、あえて移動しようともせず、キリアテ・ヤリムの住民に使いを送って、箱を持って行ってくれるように頼んだ。この人々は、非常に喜んで、聖なる箱を歓迎した。彼らは、箱が神に従う忠実な者に対する神の恵みの誓いであることを知っていた。厳粛なうちにも喜びに満ちて、彼らは箱を彼らの町に携えてきて、レビ人アビナダブの家に置いた。アビナダブは、むすこのエレアザルにその管理を命じた。こうして、箱は長年そこにとどまっていた。

主がご自身を、最初にハンナのむすこにお現わしになって以来ずっと、サムエルが預言者の職務に召されたことが、全国民に認められるようになった。サムエルは、苦しいことではあったが、忠実に、エリの家に神の警告を伝えて、主の使者としての彼の忠実さを実証した。「主が彼と共におられて、その言葉を一つも地に落ちないようにされたので、ダンからベエルシバまで、イスラエルのすべての人は、サムエルが主の預言者と定められたことを知った」(同・三ノ一九、二〇)。

イスラエルの人々は、国家として、まだ不信仰で偶像礼拝の状態を続け、その罰としてペリシテ人に屈服した状態が続いた。その間、サムエルは、全国の町々村々を巡回して、人々の心を彼らの先祖の神に向けようと努め

た。そして、彼の努力は、よい結果をもたらした。二十年間も敵の圧迫に苦しんだあとで、イスラエルの人々は「主を慕って嘆いた」のである(同・七ノ二)。サムエルは彼らに勧告した。「もし、あなたがたが一心に主に立ち返るのであれば、ほかの神々とアシタロテを、あなたがたのうちから捨て去り、心を主に向け、主にのみ仕えなければならぬ」(同・七ノ三)。イエスが、地上におられたときにお教えになったのと同じ実際の敬虔と心の宗教が、サムエルの時代に教えられたことをここに見るのである。古代のイスラエルにとって、キリストの恵みがないならば、宗教の外的形式は無価値なものであった。それは、現代のイスラエルにとっても同じである。

古代イスラエルが経験したのと同じ真の心の宗教のリバイバルが、今日必要である。神に帰ろうとする者のとるべき第一歩は、悔い改めである。だれも人に代わって、悔い改めることはできない。われわれ個人個人が、神の前にへりくだり、偶像を捨てなければならない。われわれのなし得るすべてを尽くしたときに、主は、彼の救いをあらわされる。

部族の首長の協力によつて、大群衆がミツパに集まった。ここで彼らは、厳粛な断食を行なった。人々は、心を低くして罪を告白した。そして彼らは、教えられた命令に従う決意の証拠として、サムエルに士師の権を授けた。ペリシテ人は、この会合を戦争のための相談をしていると思ひこみ、その計画が熟する前にイスラエルの人々を散らそうとして、大軍を率いて攻めてきた。彼らの接近の知らせにイスラエルの人々は非常に恐れた。彼らはサムエルに言った。「われわれのため、われわれの神、主に叫ぶことを、やめないうください。そうすれば主がペリシテびとの手からわれわれを救い出されるでしょう」(同・七ノ八)。

サムエルが、小羊を犠牲にささげようとしていたとき、ペリシテ人は、戦いをいどんで近づいてきた。そのと

き、火と煙と雷鳴の中で、シナイに降りて来られた偉大な神、紅海を分け、イスラエルの人々のために、ヨルダン川の中に道を開かれた偉大なおかたが、ふたたび、彼の力をあらわされた。攻撃軍の上に恐ろしい暴風が起った。そして、強力な戦士たちの死体が地上に乱れ散った。

イスラエルの人々は、希望と恐怖に震えて、黙って恐れながら立っていた。彼らは敵が殺されたのを見たときに、神が彼らの悔い改めをお受け入れになったことを知った。彼らは、戦いの用意はなかったけれども、殺されたペリシテ人の武器を握って敗走軍をベテカルまで追った。この著しい勝利は、イスラエルが二十年前、ペリシテ人に敗れ、祭司たちが殺され、神の箱が奪われたその同じ場所でかち得たものであった。国家であろうと、個人であろうと、神に服従する道は、安全と幸福の道であるが、罪の道は、ただ不幸と敗北に至らせるだけである。ペリシテ人は、完全にうちのめされて、前にイスラエルから奪った城を明け渡し、その後長年にわたって敵対行為に出ることはなかった。他の国々もこの模範にならない、イスラエルは、サムエルの単独統治時代が終わるまで平和を楽しんだ。

サムエルは、このできごとを人々が忘れないために、ミツパとエシャナの間に大きな石を記念碑として建てた。彼は、それを「主は今に至るまでわれわれを助けられた」と人々に言って、「エベネゼル」（助けの石）と名づけた（同・七ノ一二）。

預言者の学校

イスラエルの教育は、主ご自身が指導された。彼の関心は、彼らの宗教的福祉だけに限られてはいなかった。彼らの知的、また体的幸福に影響を与えるものは、なんでも神の摂理の課題であり、神の律法の範囲内にあった。

子供たちに神の要求を教え、先祖たちに対する神の処置のすべてを彼らによく教えるように、神はヘブル人に命じておられた。これは、すべての親の特別の義務で、他人に委託できないものであった。他人のくちびるではなくて、父親と母親の愛の心からの教えが、子供たちに与えられなければならないかった。日ごとの生活のすべてのできごとに、神の思想が関連づけられなければならないかった。神の民の救済にあらわされた神の大きなみわざ、そして、来たるべき贖い主の約束は、イスラエルの家庭で、くり返して語られるべきであった。そして、典型や象徴を用いて、その教訓をしっかりと心に銘記することができたのであった。神の摂理と来世に関する大真理が、若い心に強い印象を与えた。若い心は自然の光景にも、啓示の言葉にも、同じように神を認める訓練を受けた。天の星々、平原の樹木、草花、高山、小川のせせらぎなどのすべては、創造主について語っていた。聖所の厳肅



預言者の学校は、聖書や歴史、そして信仰上の教えだけではなくて、職業的訓練を生徒に授けた。

な犠牲の儀式、聖所の礼拝、預言者の言葉は神の啓示であった。

モーセは、ゴセンのそまつな住宅でこのような教育を受けたのである。サムエルは、忠実なハンナから教えられた。ダビデは、ベツレヘムの丘の住居で、こうした訓練を受け、ダニエルは、捕虜として連れ去られるまで、父の家で、こうした訓練を受けた。ナザレにおけるキリストの幼少時の生活も、このようなものであった。また少年テモテが祖母ロイスと母ユニケのくちから聖書の真理を学んだのも、こうした訓練によってであった(テモテ第二・一ノ五、三ノ一五参照)。

さらに、青年教育の施設として、預言者の学校が建てられた。もし、青年が、神の言葉の真理をもっと深くさぐり、上からの知恵を求めて、イスラエルの教師になろうと望むならば、彼らは、こうした学校にはいることができた。預言者の学校は、腐敗が広がるのを防ぐ防壁としてサムエルが創立したもので、青年の道德的、靈的幸福に貢献し、指導者や助言者として、神をおそれて行動する資格のある人物を養成して、国家の将来の繁栄に資するためであった。サムエルは、この目的を達成するために、神をおそれ、知的で勤勉な青年を多く集めた。彼らは預言者の子と呼ばれた。彼らが神と交わり神の言葉と神のみわざを学んだときに、彼らの生来の賜物に天の知恵が加えられた。教師は、神の真理によく通じているばかりでなくて、自分たち自身が神との交わりを経験し、神の靈の特別な賜物を受けた人々であった。彼らは、学識と信仰の両面において、人々の尊敬と信頼をかち得ていた。

こういう学校は、サムエルの時代に二つあって、一つは、預言者の故郷のラマにあり、もう一つは、そのとき箱が置かれていたキリアテ・ヤリムにあった。その後、ほかにも学校が設立された。

学校の生徒は、土を耕すとか、あるいは何かの筋肉労働に従事して、自分で働いて自活した。イスラエルにおいてこれは不思議でも卑しいことでもなかった。実際、子供に有用な仕事を教えないで育てることは、罪悪であると思われていた。どのような高い地位につくための教育を受ける子供であっても例外なく、すべての子供に、何かの職業を教えることが、神の命令であった。宗教の教師のなかには、肉体労働によって自給した者が多くあった。使徒時代に及んでも、パウロとアクラは、天幕作りを職業として生計を立てたが、そのために卑しめられることはなかった。

学校的主要科目は、神の律法とモーセに与えられた教訓、神の民の歴史、聖樂、詩歌などであった。その教授法は、現代の神学校の教授法とは非常に異なっていた。今日、多くの学生は、入学したときよりも、神と宗教的真理に関して真の知識をもたずに神学校を卒業する。昔の預言者の学校では、神のみこころと神に対する人間の義務を学ぶことが、すべての研究の大目的であった。神の民の歴史の記録の中に、主の足跡をたどることができ、偉大な真理が型によって明らかに示され、その全制度の中心目的が、世の罪を取り除く神の小羊であることを、彼らは信仰によって悟ったのである。

彼らは、献身の精神をいだいていた。学生は、祈りの義務について教えられただけでなくて、祈る方法と創造主に近づく方法、神に対する信仰の働かせ方、そして、聖靈の教えを理解して服従する方法などを教えられた。彼らは、清められた知性によって、神の蔵から新しいものや古いものを取り出した。そして、神の霊は、預言と聖歌の中に表わされた。

音楽は聖なる目的のために用いられ、清く、気高く、高尚なことに人の思想を高め、魂のうちに、神への献身

と感謝の念を起こさせた。こうした古代の習慣と、現在音楽がしばしば用いられている方法との間には、なんと大きな相違があることであろう。神に栄光を帰すために用いるかわりに、自己を高めるためにこの賜物を用いる者がなんと多いことであろう。不注意な者は、音楽を愛好する心から、世俗愛好者と一緒になって、神が神の子らに行くことを禁じられた快樂の集会に行くようになる。こうして、正しく用いられるならば、大きな祝福であるものが、義務と永遠のことがらを瞑想することから人の心をそらすサタンの最も有効な道具となる。

音楽は、天の宮廷の神の礼拝の一部になっている。であるから、われわれは、できるかぎり、天の合唱隊と調和した声で、賛美の歌をうたうように努力しなければならない。声の正しい訓練は、教育の重要な一面であつて怠つてはならないことである。歌は、祈りが礼拝の行為であるのと同様に、宗教的礼拝の一部である。歌を正しく表現しようとするには、歌の精神をよく心に感じなければならない。

神の預言者が教えたこれらの学校と現代の教育機関との間には、なんと大きな相違があることであろう。世の教訓と習慣に支配されない学校は、なんとその数が少ないことであろう。適宜に制限を加えたり、正当な罰を与えたりすることが、嘆かわしいほど欠けている。現在、クリスチャンと自称する人々の間での神の言葉に関する無知は、驚くばかりである。表面的な話や、単なる感傷主義が、道徳や宗教の教えとして通用している。神の正義とあわれみ、美と聖、正しい行為の確実な報賞、罪の恐ろしい性質とその恐ろしい結果の確実性などが、若い者の心に強く教え込まれていない。悪友たちが、犯罪と気晴らしと放縱との道を青年たちに教えている。

今日の教育家が古代のヘブルの学校から、何か有益な教訓を学ぶことができないものであるうか。人間を創造されたかたは、そのからだと心と魂の発達のために必要なものをお備えになった。であるから、教育の真の成功

は、人間が創造主の計画を忠実に実行するか否かにかかっている。

教育の真の目的は、魂のうちに神のみかたちを回復することである。最初に、神は、ご自分のかたちにかたどって人を創造された。神は、人間にすぐれた性質をお授けになった。人間の心は、よく均衡がとれていて、そのすべての能力には調和があつた。しかし、墮落とその結果によつて、これらの賜物はゆがめられてしまった。罪は、人間の中の神のかたちを、ほとんど消し去つた。これを回復するために、救いの計画がたてられ、人間に猶予の期間が与えられた。最初に創造されたときの完全な状態に、人間を回復することが、人生の大目的であつてその他のすべてのものの根底に流れる目的である。青年の教育に当たつて、神の目的に協力することが、親や教師の務めである。そうすれば、彼らは、「神の同労者である」(コリント第一・三ノ九)。

人間が持っている心と魂とからだの種々の能力は、すべて神から授かつたものであるから、それらを活用して最高にすぐれたものにしなければならぬ。しかし、これは、利己的で排他的修練ではない。なぜなら、われわれが、似ようとしている神の品性は、慈悲と愛に富んだものだからである。創造主が、われわれにお授けになつたすべての能力とすべての性質は、神の栄光と同胞の向上のために用いなければならない。そして、このように活用することが、最も清く、最も気高く、最も幸福な活動である。

この原則の重要性を認めて、それに忠実に従うならば、現代の教育法のどこかに根本的变化が起こることであろう。教師は、誇りと利己的野心に訴えて、競争心をかき立てようとせず、善と真理と美を愛する心を起こさせ、美德を望む心を起こさせようと努力するであろう。学生は、他を越えるためではなくて、創造主のみこころを実現し、神のかたちに似るために、自分に与えられた神の賜物を伸ばそうとするであろう。単に、地上の標準

をめざしたり、それ自身萎縮作用をもっている自己高揚の欲望に動かされたりするかわりに、心は創造主に向けられて、彼を知り、彼のようになろうとするであろう。

「主を恐れることは知恵のもとである、**聖なる者を知ること**は、悟りである」（箴言九ノ一〇）。人生の大事業は品性の建設であつて、神を知ることがすべての真の教育の基礎である。この知識を与え、それに調和した品性を形成することが、教師の仕事の目的でなければならない。神の律法は、神の品性の写しである。だから、詩篇記者は言っている。「あなたのすべての戒めは正しい」「わたしはあなたのさとしによって知恵を得ました」（詩篇一一九ノ一七二、一〇四）。神は、神のみことばと創造のわざの中に、ご自身を現わされた。靈感によって書かれた書物と自然の書物とによって、われわれは神の知識を得なければならない。

人間の心は、考えるように訓練された問題に、次第に順応してくるものである。ただありふれたつまらぬことだけを考えると、心は、萎縮して衰弱する。困難な問題と取り組むことが全然なければ、しばらくするうちに、成長する力をほとんど失ってしまう。教育する力として、聖書に匹敵するものはない。心は、神のことばの中に最も深遠な思想と最も崇高な熱望の主題を見いだす。聖書は、人間が所有する最も教訓の豊かな歴史である。それは、永遠の真理の根源から直接与えられたものである。そして、神のみ手が各時代を通じて、その純粋性を保持してきた。それは、人間的研究によつては、見通すことのできない遠い遠い過去を照らし出している。神のみことばの中に、地球の基礎をすえ、天を張つた力を見る。人間の偏見と誇りに汚されていない人類歴史を発見できるのは、ただここだけである。ここに、世界最大の人物の苦闘と敗北と勝利とが記録されている。ここに、義務と運命の大問題が展開されている。見える世界と見えない世界を隔てている幕が揚げられて、罪が最初に侵入し

たときから、義と真理が最後に勝利するまでの善と悪の軍勢の争闘を見るのである。そして、すべては、神の品性の啓示に過ぎない。神の言葉に示された真理を敬虔な心で瞑想するとき、学生の心は、無限の心との交わりに入れられる。こうした研究は、品性を洗練して高尚にするばかりでなく、知力を拡大し、活気づけずにはおかないのである。

聖書の教訓は、この生涯のあらゆる関係における人間の繁栄に、重大な関連を持っている。それは、国家の繁栄の礎石である原則を提示している。それは社会の幸福と密接に結びつき、家庭を保護する原則である。この原則を度外視しては、だれひとり現世で有用な人物として幸福になり、栄誉を受けることはできない。また、将来永遠の生命を受けることを望むこともできない。人生のどんな地位、どんな経験であつても、聖書は、それに対する必要な準備を教えている。神の言葉を研究して服従するならば、人間哲学のあらゆる分野の周到な研究にまさつて、もつと強力で知性の活発な人物が、世に送り出されることであろう。それは、力と強固な品性をもつた人物、鋭い洞察力と正しい判断の人、神を敬い、世界の祝福となる人々を起こすであろう。

科学の研究においても、また、創造主の知識を得なければならぬ。すべての真の科学は、物質界における神のみ手の跡の解釈に過ぎない。科学は、その研究の中から、創造主の知恵と能力の新しい証拠を提出するに過ぎない。自然の書物と書かれた言葉とは、正しく理解するならば二つとも神がお用いになる法則が、知恵と慈愛に満ちたものであることをわれわれに教えて、われわれを神に近づけるのである。

学生は、創造のすべてのわざの中に神を見るように導かれる必要がある。教師は、自然の卑近な光景から例話を引いて教えを単純にし、聴衆の心に深い印象をお与えになった大教師の模範にならなければならない。葉の

茂った木の枝でさえずる小鳥、谷の草花、巨大な樹木、実り豊かな田畑、芽を出す穀類、不毛の土地、空を黄金色に染める日没などは、皆、教育の資料であった。彼は、創造主の目に見えるみわざと、彼が語られた生命の言葉とを統合された。それで、彼の聴衆が、それらの光景を見たときには、いつでも、彼がそれらに結びつけられた真理の教訓を思い出すのであった。

啓示のページに明らかな神の印は、高山や、実り豊かな谷間、広く深い大海に見られる。自然界は、創造主の愛を人間に語る。神は、天と地の中の無数のしるしによって、ご自身をわれわれに結びつけられた。この世界はすべてが悲しみと悲惨ではない。「神は愛である」(ヨハネ第一・四ノ一六)という言葉が、すべての開くつぼみに、すべての花びらに、すべての草の上に書かれている。罪ののろいが、地にとげやあざみを生えさせたけれども、あざみには花が咲き、とげはばらの花でおおわれている。自然界のものは、みな、父親のように思いやりのある神の保護と、子供たちの幸福を願う神の心を証拠立てている。神の禁止や命令は、ただ神の權威を誇示するだけのものではない。神は、神の子供たちの幸福を考えて万事を行なわれる。神は、彼らが所有することが最も幸福であるものを、何一つ捨てることをお命じにならない。

社会の一部の人々は、宗教が健康または、この世の幸福を増進するものでないと考えているが、これは、はなはだしいまちがいの一つである。聖書には次のように書いてある。「主を恐れることは人を命に至らせ、常に飽き足りて、災にあうことはない」(箴言一九ノ二三)。「さいわいを見ようとして、いのちを慕い、ながらえることを好む人はだれか。あなたの舌をおさえて悪を言わず、あなたのくちびるをおさえて偽りを言わずな。悪を離れて善をおこない、やわらぎを求めて、これを努めよ」(詩篇三四ノ一二―一四)。「それは、これを得る者の命で

あり、またその全身を健やかにするからである」と知者は言っている(箴言四ノ二二)。

真の宗教は、体的、知的、道德的に、人間を神の律法に調和させる。それは、自制と落ち着きと節制とを教える。宗教は、精神を高尚にし、趣味を洗練し、判断を清める。それは、人間を天の清らかさを持った者とする。神の愛と摂理の支配を信じる信仰は、心配や苦勞の重荷を軽くする。それは、人間がどんなに高められようが、どんなに低い境遇におかれようが、心を喜びと満足で満たす。宗教は、直接健康の増進と長寿に寄与し、人生のすべての祝福の楽しみを増す。それは、人の心に尽きることのない幸福の泉を開く。それは、人々が求めているものよりもはるかにすぐれたものを、キリストは与えようとしておられることを、キリストを受け入れていないすべての者が悟ることを望むのである。人間が神のみこころに反して思考し、行動するとき、その人は、自分自身に対して、最大の危害と不正を行なっているのである。被造物の最善を知って、彼らの幸福のためにご計画になる神が禁じられた道で、真の喜びを見いだすことはできない。罪の道は、不幸と破滅に陥れるが、知恵の「道は楽しい道であり、その道筋はみな平安である」(同・三ノ一七)。

ヘブルの学校で行なわれた体育教育は、宗教教育と同様に有益な研究である。こうした教育の価値が認められていない。精神と肉体は、非常に密接な関係がある。であるから、道德的、また、知的に高い標準に達しようと思ふならば、われわれの身体をつかさどる法則に注意しなければならない。強力で平均のとれた品性を得ようとするれば、知的、体的能力の両方を運動させて、発達させなければならない。青年が、神から与えられたこの驚くべき身体について研究し、からだを健康に保つための法則を研究すること以上に重要な研究がほかにあるうか。イスラエルの時代と同様に、現在でも、すべての青年は實際生活の義務について教えを受けなければならない。

だれでも、何かの職業の知識を獲得し、もし必要ならば、生計を立てられるようにしなければならない。これは人生の浮沈に対する備えとしてばかりでなく、体的、知的、道德的発達上からも重要なことである。肉体労働によつて生計を立てる必要がないことがはつきりわかっている者であつても、なお働くことを教えなければならない。肉体の運動をしなければ、だれもじょうぶなからだに活気に満ちた健康を保持することはできない。そして規律に従つた労働の訓練は、強く活気のある精神と、高貴な品性の獲得に欠くことのできないものである。

学生は、だれでも一日の一部分を活発な労働に当てなければならない。こうして、青年は、勤勉の習慣が身につき、自分に自信が持てるようになるとともに、怠慢の結果陥りがちな多くの悪習慣から守られるのである。そして、これは、教育の主要目的になつてゐる。というのは、活動、勤勉、純潔を奨励することによつて、われわれは創造主と調和するからである。

青年たちに、彼らの造られた目的が、神をあがめ、同胞を祝福することであることを理解させよう。天の父が彼らにあらわされた慈悲深い愛を彼らに認めさせよう。また、彼らが人生の訓練によつて、大きな運命に対する準備が与えられ、神の子となるように、尊く榮譽ある召しにあづかっていることを悟らせよう。そうすれば、幾千という青年たちは、低い利己的な目的と、これまで彼らの心を奪つていた軽はずみな快樂をきらつて離れることである。彼らは、報賞を望む心や、罰を恐れる気持ちからではなくて、罪そのものの卑劣さを感じて、罪を憎み、それを避けるようになる。なぜなら、それが神から与えられた能力を低下させ、神のかたちに造られた人間性に汚点をつけるからである。

神は、青年たちに大望をいだくなどはお命じにならない。成功を収めて、人々の尊敬をかち得る品性の特質、

すなわち、何か大きな善事をしたいという押えきれない願望、不屈の意志、奮闘努力、堅忍不拔の精神といったものは、打ちくだいてしまつてはならない。そうしたものは、神の恵みによつて、天が地よりも高いのと同じように、ただ利己的で現世的のものよりは、はるかに高尚な目的に向けられなければならない。そして、現世で始められた教育は、来世にまで続くのである。神の驚くべきみわざ、宇宙を創造してそれを支持しておられる神の知恵と能力の証拠、救いの計画に表わされた愛と知恵の無限の神秘が、日ごとに新しい美しさをもつて人の心に開かれる。「目がまだ見えず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」(コリント第一・一二ノ九)。われわれは、現世でも神の臨在をかすかながら悟り、天の交わりの喜びを味わうことができる。しかし、その完全な喜びと祝福を達成できるのは、来世である。神のかたちに戻された人間の輝かしい運命を示すことができるのは、ただ永遠だけである。

イスラエル最初の王サウル

本章は、サムエル記上八 一二章に基づく。

イスラエルの政治は、神の名とその権威のもとに行なわれた。モーセと七十人の長老、つかさと士師たちの務めは、単に、神がお与えになった律法を実施することであつた。彼らには、国家の法律を制定する権はなかつた。これが、イスラエルの国家としての存在のあり方であり、そのように継続すべきものであつた。どの時代においても、神の靈感を受けた人々が送られて、民を教え、律法の実施の指示を与えた。

主は、イスラエルが王を要求するようになることを予見なさつたが、国家制定の原則が変化することを許可しなかつた。王は、至高者なる神の代理人であるべきであつた。神を国家の首長と認め、神の律法を国の最高の法律として、実施しなければならなかつた。

イスラエルの人々が、最初にカナンに定住したとき、彼らは、神政政治の原則を認めた。そして、国家は、ヨシヤの指導のもとに繁栄した。しかし、人口の増加と他国との交渉がそれに变化をもたらした。人々は、隣接する異邦の風習を数多くとり入れ、彼ら自身の特異性と清い性質とを大部分犠牲にした。彼らは、徐々に、敬神

の念を失い、神の選民であることを誇りとしなくなった。彼らは、異邦の諸王の外見の壮麗さに心をひかれ、自分たちの簡素なことにあき果てた。部族間には、ねたみやそねみが起こった。内部の紛争が、彼らを弱くした。彼らは、絶えず異邦の敵の侵入の危険にさらされていた。人々は、国家間における彼らの地位を保持するために、部族を強力な中央政権のもとに統一する必要があると痛感するようになった。彼らは神の律法に従わなくなり、天の神の支配からのがれたいと望んだ。こうして、王を要求する声がイスラエル全土に広がった。

政治が、サムエルの支配下におけるほどに大きな知恵と成功のもとに行なわれた時代は、ヨシユアの時代以来なかったことであつた。サムエルは、士師、預言者、祭司という三つの職責を神からゆだねられて、彼の民の幸福のために、たゆまず熱烈な無我の精神をもつて働いた。そして、国家は、彼の賢明な支配のもとに栄えたのである。秩序は回復し、信仰は深まり、不平の精神は一時おさまった。

しかし、預言者は、年を取るにつれて政務を他の者にゆだねなければならなくなった。そして、彼は自分のふたりのむすこを彼の助手に任命した。サムエルが、ラマにおける任務を継続する一方、青年たちは、ベエルシバに配置されて、国土の南の国境付近で、人々の裁判を行なった。

サムエルは、国民一同の賛成のもとに、むすこたちを職務に任命したのであつたが、彼らは、父親の選択に値しないむすこたちであつた。主は、モーセによつて神の民に特別の命令を与え、イスラエルの指導者は、正しい裁判を行ない、やもめや孤児を正しくさばき、わいろを受けてはならないことを命じておられた。しかし、サムエルのむすこたちは、「利にむかい、まいないを取つて、さばきを曲げた」（サムエル記上八ノ三）。預言者のむすこたちは、預言者が彼らの心に強く刻みこもうと努めた教えに注意しなかった。彼らは、父親の、清い無我の

生涯にならわなかった。サムエルはエリに与えられた警告を、深く肝に銘じておかなければならなかったのに、それを怠った。彼は、むすこたちを甘やかし過ぎる傾向があった。そして、その結果が、彼らの品性と生活に表われた。

こうした士師たちの不正に、人々は大きな不満をいだいた。そして、彼らが長い間ひそかに希望していた政変を要求するきっかけを与えた。「イスラエルの長老たちはみな集まってラマにあるサムエルのもとにきて、言った、「あなたは年老い、あなたの子たちはあなたの道を歩まない。今ほかの国々のように、われわれをさばく王を、われわれのために立ててください」(同・八ノ四、五)。

人々の間で行なわれた悪事の数々は、サムエルに知らされなかった。もし、むすこたちの悪行が彼に知らされたならば、彼は、すぐに彼らを解任したことであろう。しかし、人々の望んだことは、それではなかった。サムエルは、彼らの真の動機が不満と自尊心であり、彼らの要求が、熟慮と断固とした決意のもとに行なわれたものであることを悟った。サムエルに対しては、なんの不平も述べられなかった。万人が、彼の統治の潔白と知恵とを認めた。しかし、老預言者は、その要求を自己に対する非難、また、彼を除こうとする直接行動であると考えた。しかし、彼は、自分の気持ちを表面にあらわさなかった。彼は、譴責の言葉を言わなかった。彼は、このことについて祈り、主に訴えて、ただ主からの勧告を求めたのである。

主は、サムエルに言われた。「民が、すべてあなたに言う所の声に聞き従いなさい。彼らが捨てるのはあなたではなく、わたしを捨てて、彼らの上にわたしが王であることを認めないのである。彼らは、わたしがエジプトから連れ上った日から、きょうまで、わたしを捨ててほかの神々に仕え、さまざまの事をわたしにしたように、

あなたにもしているのである」(同・八ノ七、八)。預言者は、民の行動を彼個人に対するものであると思って悲しんだことを譴責された。彼らは、彼に対する不敬ではなくて、神の民の指導者を任命された神の権威に対する不敬をあらわしたのである。神の忠実なしもべを軽べつして拒絶する者は、人間だけでなく、彼を送られた主に対する侮りを示すのである。軽べつされたのは、神の言葉であり、神の譴責と勧告であった。拒否されたのは神の権威であった。

イスラエルが最も繁栄した時代は、彼らが、主を彼らの王として認め、神が制定された律法と統治を、他のすべての国々の統治よりもすぐれたものとみなしたときであった。モーセは、主のいましめについて、イスラエルに宣言した。「これは、もろもろの民にあなたがたの知恵、また知識を示す事である。彼らは、このもろもろの定めを聞いて、『この大いなる国民は、まことに知恵あり、知識ある民である』と言うであろう」(申命記四ノ六)。しかし、ヘブル人は、神の律法に従わなかったために、神が望まれたような国民になることができなかった。そして、彼らは自分たち自身の罪と愚かさの結果として生じたすべての災いを、神の統治のせいにした。彼らは罪のために、全く目がくらんでしまったのである。

主は、イスラエルが王の統治を受けることを、預言者によって預言しておられた。しかし、この政治形態が最善であって、神のみどころにかなったものであるというわけではなかったのである。

神は、人々が、神の勧告に従うことを拒んだために、彼らの選んだ通りにすることを許された。主は、怒りをもって彼らに王を与えたと、ホセアは言った(ホセア書一三ノ一一参照)。人々が神の勧告を求めず、または、神が啓示されたみこころに反して自分かつての道を選び、それに付随した苦い経験にあうとき、彼らが自分たちの

愚かさを自覚して、罪を悔い改めるに至るために、神はしばしば彼らの願いを許される。人間の誇りと知恵は、危険な道案内となる。神のみこころに反して心が欲求するものは、ついには祝福ではなくてのろいとなるのである。

神は、神の民が、彼らの立法者および力の源泉として、ただ神だけを仰ぐことを望まれた。こうして彼らは、自分たちが、神に依存していることを認めて、常に神に近づくのであった。彼らは、高められ高貴にされて、神の選民として召された大いなる運命にふさわしいものとされるのであった。ところが、人間が王座にすわるようになる、人心を神から引き離す傾向があった。彼らは神の力よりは、人間の力に頼るようになる。そして、王の犯す誤りは、彼らを罪に陥れ、国家を神から離反させるのであった。

サムエルは、人々の願いを聞き入れはするが、主が承知されなかったことを彼らに警告し、こうした行動はどういう結果を招くかを知らせるように命じられた。「サムエルは王を立てることを求める民に主の言葉をことごとく告げ」た(サムエル記上八ノ一〇)。彼は、彼らに負わせられる重荷を忠実に述べ、こうした圧迫下の状態と現在の比較的自由と繁栄の状態との比較を示した。彼らの王は、他の王たちの栄華を模倣し、それを維持するために、人員や財産をきびしく要求しなければなくなる。王は、国民の優秀な青年たちに服役を要求するであろう。彼らは、戦車隊や騎兵に徴集されて、王の前に走らなければならないであろう。彼らは、王の軍隊の責任を負わせられるであろう。彼らは、王の土地を耕し、王の作物を刈り、王のために武器を製造しなければならぬであろう。イスラエルの娘は、王家のために香を作る者、パンを焼く者とされるであろう。王は、王としての威厳を保つために、主ご自身が、人々に授けられた土地の最もよい物を取るであろう。また、彼らのしもべたち牛、ろばなどの最もよいものを取って、「自分のために働かせ」るであろう(同・八ノ一六)。そのほか、王は、

彼らの収入の十分の一、彼らの労働の利益、または、地の産物を要求するであろう。「あなたがたは、その奴隷となるであろう。そしてその日あなたがたは自分のために選んだ王のゆえに呼ばれるであろう。しかし主はその日にあなたがたに答えられないであろう」と預言者は結んだ(同・八ノ一七、一八)。王制が一度確立すれば、それが、どんなに煩雑で苛酷な要求をするものであっても、かつてに破棄することはできなかった。

しかし、人々は答えた。「いいえ、われわれを治める王がなければならぬ。われわれも他の国々のようになり、王がわれわれをさばき、われわれを率いて、われわれの戦いにたたかうのである」(同・八ノ一九、二〇)。「他の国々のようになる。イスラエルの人々は、この点で他国と同じでないことが、特別の特権と祝福であることを自覚しなかった。神は、イスラエルの人々を、他のすべての国民から分離して、神ご自身の特別の宝とされたのであった。しかし、彼らは、この大きな栄誉を無視して、異教徒の風習を模倣することを切望した。そして、世俗の風習に従おうとする切望は、今なお神の民と自称する人々の間にもあるのである。彼らが主から離れると、世の利益と栄誉を熱望するようになる。クリスチャンは、この世の神の礼拝者の風習を常に模倣しようと努めている。世の人々と一致し、彼らの風習に従うことによつて、神を信じない人々に強力な感化を及ぼすことができる」と力説する人々が多い。しかし、そうする者はみな、そのために、彼らの力の根源である神から離れる。世の友となれば、神の敵である。彼らは、地上の栄誉のために、暗やみから驚くべきみ光に招き入れてくださったかたのみわざを語り伝えるために神に召されたという、言葉では表現できない栄誉を犠牲にしてしまう(ペテロ第一・二ノ九参照)。

人々の言葉を聞いて、サムエルは深く悲しんだ。しかし、主は、「彼らの声に聞き従い、彼らのために王を立

てよ」と、サムエルに言われた(サムエル記上八ノ二二)。

預言者は、彼の義務を果たした。彼は、忠実に警告したのであったが、拒否されてしまった。彼は、重苦しい気持ちで人々を解散させ、自分自身は、大きな政変の準備をするためにそこを去った。

サムエルの清く無我の献身的な生活は、利己的な祭司や長老たちと、高慢で官能的なイスラエルの会衆の両方を絶えず譴責するものであった。彼は、華麗に装い誇示することはなかったが、その働きは、天の印を帯びていた。彼は、ヘブル民族を統治するために指示を仰いでいた世の贖い主の榮譽にあずかった。しかし、人々は、彼の敬神と献身に飽きてきた。彼らは、彼のつつましい權威を侮って、彼を拒否し、王として彼らを支配する人間を求めたのである。

われわれは、サムエルの品性の中に、キリストのかたちが反映していたのを見る。サタンを怒らせたのは、救い主の生涯の清さであった。その生涯は世の光であった。そして、人の心の中の隠れた墮落をあらわした。宗教のせ教師たちの心を激怒させて、彼に立ち向かわせたのは、キリストの神聖さであった。キリストは、富と榮譽をもって地上に來られなかった。しかし、彼のなさった働きは、彼がどの地上の王よりも偉大な力の所有者であることを示した。ユダヤ人は、メシアが現われて、圧迫者のくびきを折ることを待望したが、その心には、彼の首をくびきにつなぐ罪をいだいていた。もしも、キリストが彼らの罪をおおい隠して、彼らの敬神深さを賞賛されたならば、彼らは、キリストを王として受け入れたことであろう。しかし、彼らは、キリストの彼らの罪に対する大胆な譴責に耐えられなかった。慈愛と純潔と神聖さにみなぎり、罪以外の何ものをも憎まない品性の美しさを、彼らはさげすんだ。これは、世界のどの時代においても、その通りであった。天からの光は、その光の

中を歩くことを拒むすべての者を罪に定めるのである。罪を憎む者の模範的生活に譴責されるとき、偽善者はサタンの手下になって忠実な者を悩まし、迫害するのである。「いったい、キリスト・イエスにあつて信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける」(テモテ第二・三ノ一二)。

イスラエルの王朝政治は預言されていたとは言え、彼らの王を選択する権は、神ご自身が保留しておられた。ヘブル人は、神の権威を尊重して、王の選定を全く神にゆだねていた。ベニヤミンのキシのむすこサウルが選ばれることになった。

将来の王の人間的特質は、王を求めた人々の誇りを満足させるものでなければならなかった。「イスラエルの人々のうちに彼よりも麗しい人はな」かった(サムエル記上九ノ二)。背が高く、りっぱで気高い威厳を備えた壮年期の彼は、生まれながらの指導者のように思われた。サウルは、これらの外面的魅力はあつたが、真の知恵を構成するのに必要な気高い特質に欠けていた。彼は、青年時代に、その性急な激情を支配することを学ばなかった。彼は、神の恵みの改変の力を感じたことがなかった。

サウルは、有力で裕福な首長のむすこであつたが、当時の素朴な風習に従つて、彼の父と共に農夫の卑しい仕事に従事していた。彼の父の家畜が、数頭山の中で道に迷つた。そこでサウルは、しもべを連れてさがしに出かけた。彼らは三日さがしたが見つからなかった。彼らは、サムエルのいるラマから遠くなかったので、しもべがいなくなった家畜のことについて、預言者に聞いて見ようと言つた。「わたしの手に四分の一シケルの銀があります。わたしはこれを、神の人に与えて、われわれの道を示してもらいましょう」と彼は言つた(同・九ノ八)。こつすることは、そのころの習慣に従つたものであつた。位や地位の高い人に近づくときには、尊敬のしるしに

ささやかな贈り物をした。

彼らは、町に近づいたときに、水をくみに出て来た娘たちに会ったので、彼らに預言者のことを聞いた。娘たちは、問いに答えて、宗教の行事がすぐに開かれようとしていて、預言者はもう到着していることと、「高き所」で犠牲がささげられること、そして、それがすんでから祝宴があることなどを教えてくれた。サムエルの統治下において、大きな変化が起こった。彼が最初召されたころには、聖所の祭りは侮られていた。「この人々が主の供え物を軽んじた」(同・二ノ一七)。しかし、神の礼拝は、今、全土で行なわれるようになった。そして、人々は、宗教の行事に興味を示した。幕屋の奉仕はなかったから、犠牲は臨時に他の場所でささげられた。そして、そのために人々が教えを受けるために集まった祭司の町やレビ人の町が選ばれた。そうした町の一番高い所が、通常、犠牲の場所に選ばれたので、高き所と呼ばれた。

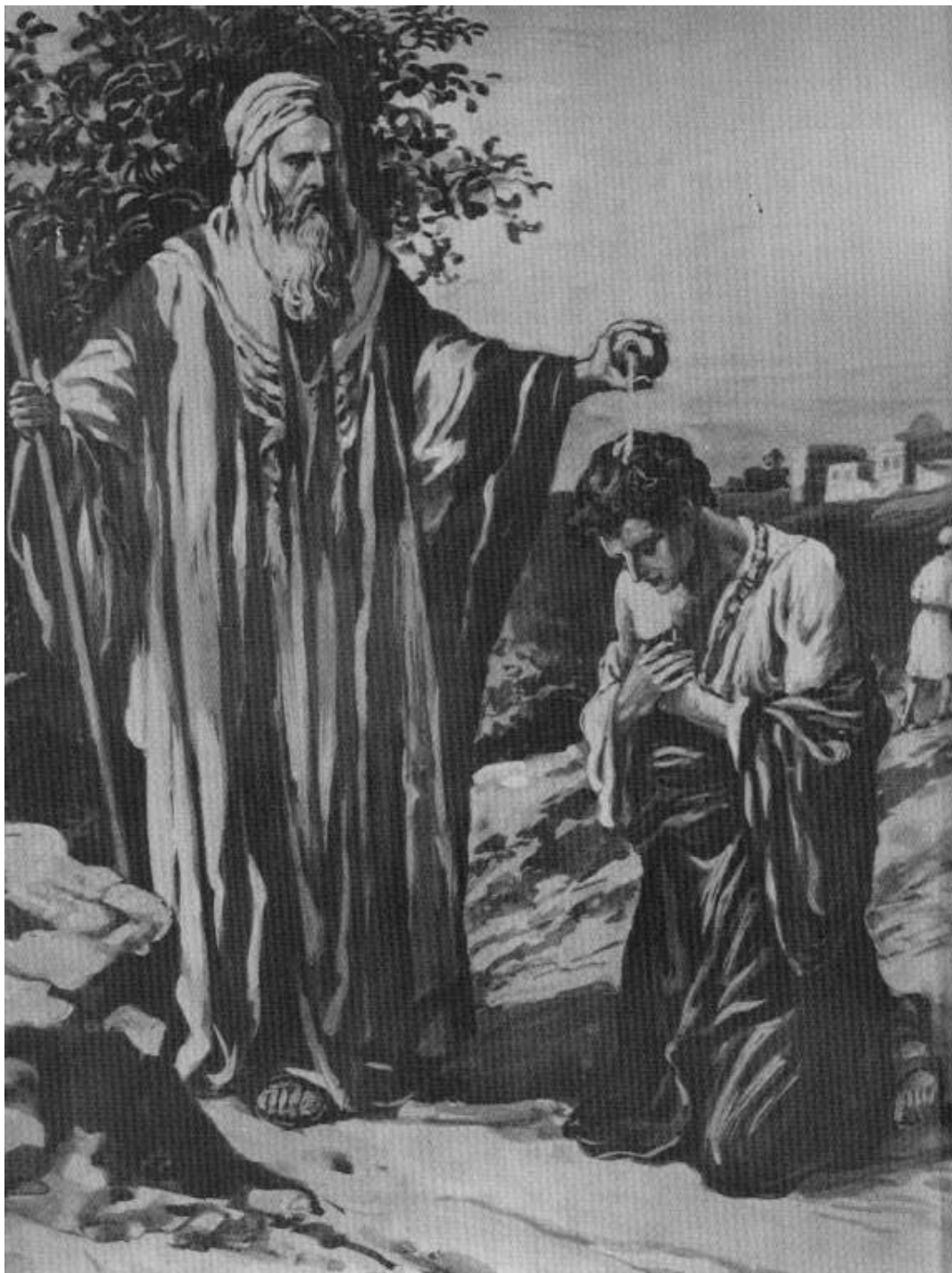
サウルは、町の門で、預言者自身に出会った。神は、ちょうどそのときに、イスラエル王として選ばれた者が彼の面前に現われることを、サムエルに示されたのであった。こうして、彼らが向かい合ったとき、主は、サムエルに言われた。「見よ、わたしの言ったのはこの人である。この人がわたしの民を治めるであろう」(同・九ノ一七)。

サウルが、「先見者の家はどこですか。どうか教えてください」とたずねると、サムエルは、「わたしがその先見者です」と答えた(同・九ノ一八、一九)。サムエルは、道に迷った家畜が、もう見つかったことをも話した上で、彼に、とどまって食事をするように勧めるとともに、彼の前に、大きな運命が待っていることをほのめかしたのである。「イスラエルのすべての望ましきものはだれのものですか。それはあなたのもの、あなたの父の

家のすべての人のものではありませんか」(同・九ノ二〇)。預言者の言葉を聞いて、サウルの心は大きな感動を覚えた。彼は、その言葉の意味深さを感じないわけにかなかった。王に対する要求が、全国の重大関心事となっていたからである。しかし、サウルはけんそんに自分を卑下して言った。「わたしはイスラエルのうちの最も小さい部族のベニヤミンびとであつて、わたしの一族はまたベニヤミンのどの一族よりも卑しいものではありませんか。どうしてあなたは、そのようなことをわたしに言われるのですか」(同・九ノ二一)。

サムエルは、サウルを町のおもだった人々の集まるところへ連れて行つた。サウルは、その人々の中でサムエルの指示に従つて、上座にすわらせられて、最高のごちそうが彼の前に並べられた。サムエルは集会後、客を自分の家に連れていき、屋上で彼と話し合い、イスラエルの政治の基礎である大原則を示した。こうして、サムエルは、彼のつくべき高い地位に対する準備をいくぶんかでも与えようと努めたのである。

預言者は、翌日の朝早くサウルが発務するときに、彼と一緒に出かけた。彼は、町はずれまで来ると、しもべに先に行くように命じた。そして彼は、サウルに立ち止まって、神が彼にお送りになつた言葉を聞くように命じた。「その時サムエルは油のびんを取つて、サウルの頭に注ぎ、彼に口づけして言った、『主はあなたに油を注いで、その民イスラエルの君とされたではありませんか』」(同・一〇ノ一)。サムエルは、これが神の權威によつて行なわれたものであるという証拠として、帰りみちで彼が会合できくことを預言した。そして、サウルを待ち受けている地位に対して、神の霊が彼に資格を与えるであつたと言つた。「主の霊があなたの上にもはげしく下つて、あなたは…変つて新しい人となるでしょう。これらのしるしが、あなたの身に起つたならば、あなたは手当りしだいになんでもしなさい。神があなたと一緒におられるからです」(同・一〇ノ六、七)。



次の日、サウルは預言者と共に出かけた。サムエルは、しもべを先に行かせておいて、新しいイスラエル王国の最初の王として、サウルに油を注いだ。

サウルが道を進んで行くと、預言者の言ったことがみな起こった。彼は、ベニヤミンの境の近くで、迷った家畜が見つかったことを聞いた。タボルの平原では、ベテルで神を礼拝しようとする三人の者に会った。ひとり犠牲のための三頭の子やぎを連れ、次は三つのパンを携え、第三の人は犠牲の食事のために、ぶどう酒の皮袋を携えていた。彼らは、サウルにいつものあいさつをして、三つのうち二つのパンをくれた。彼自身の町、ギベアでは、「高き所」から降りてきた預言者の一団が、笛や琴、立琴や手鼓の音楽に合わせて、神を賛美して歌っていた。サウルが彼らに近づくと、主の霊が彼の上にも降り、彼も、彼らと一緒に賛美して預言した。彼は、非常な雄弁と知恵をもって語り、熱心に礼拝に参加したので、彼を知っていた人々は驚いて叫んだ。「キシの子に何事が起ったのか。サウルもまた預言者たちのうちにいるのか」(同・一〇ノ一二)。

サウルが、預言者たちの礼拝に加わったとき、聖霊による大変化が彼のうちに起こった。天来の清い神聖な光が、生まれながらの心の暗黒を照らした。彼は、神の前に立つ自分の姿を見たのである。彼は、神聖の美を見た。彼は、今、罪とサタンに対する戦いを始めるために召された。そして、この争闘において、彼の力は、全く神から来なければならないことを悟らされた。これまで、あいまいで不明瞭だった救いの計画が、彼の心に明らかにされた。主は、彼の高い地位のための勇氣と知恵を、彼に賜わった。主は、彼に能力と恵みの根源を示し、神の要求と彼自身の義務について、十分な理解をお与えになった。

サウルが王として、油を注がれたことは、まだ、全国に知らされなかった。神の選択は、くじによって広く知らされることになった。サムエルは、その目的のために、人々をミヅパに集めた。神の指導を求める祈りがささげられた。それに続いて、くじを引く厳粛な儀式が行なわれた。集まった群衆は、黙って結果を待った。部族、

氏族、家族と次々に定められていって、キシの子サウルが選ばれた。しかし、サウルは会衆の中にいなかった。彼は、彼に負わせられようとする重大な責任を強く感じて、ひそかに身を隠していた。彼は、会衆のところに連れてこられた。会衆は、彼が、「肩から上は、民のどの人よりも高く、王の威厳と氣品を備えていたのを見て誇りと満足をおぼえた(同・一〇ノ二三)。サムエルも、人々に彼を紹介したときに叫んだ。「主が選ばれた人をごらんさい。民のうちに彼のような人はいませんか」。そして、それに答えて、大群衆の中から「一万歳」という、長く大きな歓呼の声があがった(同・一〇ノ二四)。

そのとき、サムエルは、「王国のならわし」を人々に語って、王政政治の基礎をなす原則を述べ、それに従って、支配されなければならないことを告げた。王は、絶対君主となるのではなくて、至高者なる神のみこころに従って権力を保持するのであった。君主の大権と国民の義務と特権を述べたこの演説は、書物に記録された。国民は、サムエルの警告を軽んじた。しかし、忠実な預言者は、民の要求に屈服させられてもなお、できるかぎりを尽くして、彼らの自由を擁護しようと努力した。

人々は、一般に、サウルを王として認める用意はあったが、多数の反対派もあった。最大で最も強力なユダとエフライムの両部族を無視して、イスラエルの部族中最小のベニヤミンから王が選ばれることは、彼らのとうてい忍ぶことのできない侮辱であった。彼らは、サウルに忠誠を誓うことを拒否し、慣例の贈り物を持ってこなかった。王を最も熱烈に要求した当人たちが、神によって選ばれた人を、感謝して受けることを拒否したのである。各派の者たちは、それぞれ王位の候補者をもっていたし、指導者の中の数名は、自分自身が、その榮譽にあずかりたいと願っていた。多くの人の心に、ねたみとそねみの火が燃えた。誇りと野心から起こった運動は、失望と

不満に終わった。

サウルは、このような情勢下にあつて王位につくことは、適当でないと思った。それで、従来通り国家の行政はサムエルにゆだねておいて、彼は、ギベアへ帰った。彼は、榮譽をたたえる一団の人々につき添われて帰った。この人々は、彼が神に選ばれたのを見て、彼を支持することにしたのであつた。しかし、彼は、武力に訴えてまで、王権を確保しようとしなかつた。彼は、ベニヤミンの山地の故郷で、静かに農業に従事して、彼の権威が確立されるのをすべて神にまかせていた。

サウルが任命を受けて間もなく、アンモン人の王、ナハシが、ヨルダンの東の部族の領土に侵入し、ヤベシ・ギレアデの町を攻撃した。住民は、アンモン人にみつぎ物をおさめることを申し入れて、契約を結ぼうとした。しかし、残酷な王は、すべての住民の右の目をえぐり取つて、彼らを彼の権力の永久の証拠とするのでなければ承知しなかつた。

包囲された町の人々は、七日間の猶予を請うた。アンモン人は、彼らの期待した勝利をさらにはなばなくするため、これに同意した。ヤベシからは、すぐにヨルダン川の西の部族の援助を求めるために、使者が送り出された。彼らは、ギベアに知らせて、多くの人々を恐れさせた。サウルが牛のあとを追つて、夜、畑から帰つてくると、何か大きな悲劇が起こつたことを知らせる大きなうめきを聞いた。「民が泣いているのは、どうしたのか」と彼は言った(同・一一ノ五)。この屈辱的知らせを聞かされたとき、彼のうちに眠っていた力がごとく奮い立った。「神の霊が激しく彼の上に臨んだ……。彼は一くびきの牛をとり、それを切り裂き、使者の手によってイスラエルの全領土に送つて言わせた、『だれであつてもサウルとサムエルとに従つて出ない者は、その牛がこ

のようにされるであろう』」(同・一一ノ六、七)。

ベゼクの平原には、三十三万人がサウルの指揮下に集まった。包囲された町には、すぐに使者が送られて、その翌日必ず援軍が送られることが知らされた。その日は、彼らが、アンモン人に降伏することになっていた日であった。サウルと彼の軍勢は、夜の間にすばやく進軍して、ヨルダン川を渡り、「あかつきに」ヤベシに到着した(同・一一ノ一一)。彼は、ギデオンのように彼の軍を三組に分け、そうした早朝の時間に、アンモンの陣営を襲った。それは彼らがなんの危険も感じないで、最も防備のないときであった。彼らは、あわてふためいて、多数の死者を出して敗走した。「生き残った者はちりぢりになって、ふたり一緒にいるものはなかった」(同・一一ノ一一下句)。

このような大軍をみごとに指揮したサウルの指導力とともに、彼の敏速さと勇氣とは、イスラエルの人々が他国と競い合うために、王に求めた特質であった。今、彼らは、神の特別の祝福がなかったならば、彼らの努力はすべて無に帰すところであったことを忘れて、勝利の榮譽を人間の器に帰して、サウルを王として迎えた。熱狂のあまり、最初にサウルの権威を認めなかった者を殺そうと言う者もあった。しかし、王は、それをさえぎって言った。「主はきょう、イスラエルに救を施されたのですから、きょうは人を殺してはなりません」(同・一一ノ一三)。サウルは、ここで、彼の品性が変化した証拠を示した。彼は、自分に榮譽を帰する代わりに、神に栄光を帰した。ふくしゅう心をあらわす代わりに、情けと許しの精神をあらわした。これが、彼の心の中に、神の恵みが宿った明らかな証拠であった。

そこで、サムエルは、ギルガルにおいて、国民の集会を開き、正式にサウルが王であることを認めることにし

ようと言い、それが実行に移された。民は、「酬恩祭を主の前にささげ、サウルとイスラエルの人々は皆、その所で大いに祝った」(同・一一ノ一五)。

ギルガルは、イスラエルが約束の地で最初に天幕を張ったところであった。ヨルダン川を奇跡的に渡ったことを記念するために、ヨシユアが神の命令によって十二の石を立てたのはここであった。カデシでの罪と、荒野の放浪の後で、彼らはここで最初の過越の祭りを行なった。ここで、マナがやんだ。ここで、主の軍勢の将が、イスラエルの軍勢の指揮官として、ご自分を現わされた。彼らは、この場所から、エリコとアイの攻略に出かけた。ここでアカンは、彼の罪の罰を受けた。また、イスラエル人は、ここでギベオン人と同盟を結び、神の勧告を仰がなかった罰を受けた。多くのこうした感動的思いにつながる平原の上に、サムエルとサウルは立ったのである。王を迎える歓呼の声が静まったときに、老預言者は国家の指導者として、告別の言葉を語った。

彼は言った。「見よ、わたしは、あなたがたの言葉に聞き従って、あなたがたの上に王を立てた。見よ王は今、あなたがたの前に歩む。わたしは年老いて髪は白くなった。……わたしは若い時から、きょうまで、あなたがたの前に歩んだ。わたしはここにいる。主の前と、その油そそがれた者の前に、わたしを訴えよ。わたしが、だれの牛を取ったか。だれのろばを取ったか。だれを欺いたか。だれをしえたげたか。だれの手から、まいないを取って、自分の目をくらましたか。もしそのようなことがあれば、わたしはそれを、あなたがたに償おう」(同・一二ノ一 二三)。

人々は、声をそろえて答えた。「あなたは、われわれを欺いたことも、しえたげたこともありません。また人々の手から何も取ったことはありません」(同・一二ノ四)。

サムエルは、ただ自分自身の行動の正当なことを主張しようとしただけではなかった。彼は、以前に、王と国民がともに従わなければならない原則を説明してあるから、その言葉に彼自身の模範の重みを加えたいと思った。彼は、幼少のときから神の働きに連なり、神の栄光とイスラエルの最高の幸福を、その長い生涯の一大目標としてきた。

もし、彼らがイスラエルの繁栄を望むならば、神の前に悔い改めなければならなかった。彼らは、罪の結果、神に対する信仰を失い、国家を支配する神の能力と知恵を認めなくなり、神がご自身の働きを擁護する能力を持つておられることを確信しなくなった。彼らは、真の平和が与えられる前に、その犯した罪を認めて、告白しなければならなかった。王を求める目的は、「王がわれわれをさばき、われわれを率いて、われわれの戦いにたたかうのである」と彼らは言った(同・八ノ二〇)。サムエルは、神が民をエジプトから導き出されたときからのイスラエルの歴史をくりかえした。王の王であられる主が、彼らを率いて、彼らの戦いをたたかわれたのである。彼らは、しばしば、罪のために、敵の手中に陥ったけれども、彼らが悪の道から離れるやいなや、神は、彼らをあわれんで、救済者を起こされた。主は、ギデオンとバラク、「エフタとサムエルをつかわして、あなたがたを周囲の敵の手から救い出されたので、あなたがたは安らかに住むことができた」(同・二二ノ一一)。しかし、危機にさらされると、預言者が、「あなたがたの神、主があなたがたの王である」と言ったにもかかわらず、「われわれを治める王がなければならぬ」と彼らは言ったのである(同・二二ノ一二)。

サムエルは、続けて言った。「それゆえ、今、あなたがたは立って、主が、あなたがたの目の前で行われる、この大いなる事を見なさい。きょうは小麦刈の時ではないか。わたしは主に呼ばれるであろう。そのとき主は雷

と雨を下して、あなたがたが王を求めて、主の前に犯した罪の大いなることを見させ、また知らせられるであろう」(同・一二ノ一六、一七)。「そしてサムエルが主に呼ばわったので、主はその日、雷と雨を下された」(同・一二ノ一八)。小麦の収穫どきである五、六月ごろ、東方の国では、雨は降ったことがなかった。空は、晴れ渡って、空気は静かで穏やかであった。こういう季節に、激しい暴風雨が起ったので、人々はみな恐怖に満たされた。そこで人々は、心を低くして彼らの罪を告白した。彼らは、自分たちの犯した罪そのものを告白した。「しもべらのために、あなたの神、主に祈って、われわれの死なないようにしてください。われわれは、もろもろの罪を犯した上に、また王を求めて、悪を加えました」(同・一二ノ一九)。

サムエルは、人々を失望した状態のまま、放任しておかなかった。このままでは、さらに向上した生活に対する彼らの努力をすべて妨げてしまったことであろう。サタンは、人々に、神を厳格で許すことをしないかたのように思わせようとした。こうして、彼らは、多くの誘惑にさらされるのであった。神は、あわれみ深く、許すかたであって、神の民が、神の声に従うならば、常に恵みをほどこそうとされるのである。神は、そのしもべによって言われた。「恐れることはない。あなたがたは、このすべての悪をおこなった。しかし主に従うことをやめず、心をつくして主に仕えなさい。おなしい物に迷って行ってはならない。それは、あなたがたを助けることも救うこともできないおなしいものだからである。主は、…その民を捨てられないであろう」(同・一二ノ二〇—二二)。

サムエルは、自分が軽んじられたことについては、一言も言わなかった。彼の全生涯の献身に対するイスラエルの忘恩を責める言葉もいかなかった。彼は、彼らのために、なお深い関心を持ち続けることを約束した。「ま

た、わたしは、あなたがたのために祈ることをやめて主に罪を犯すことは、けっしてしないであろう。わたしはまた良い、正しい道を、あなたがたに教えるであろう。あなたがたは、ただ主を恐れ、心をつくして、誠実に主に仕えなければならない。そして主がどんなに大きいことをあなたがたのためにされたかを考えなければならない。しかし、あなたがたが、なおも悪を行うならば、あなたがたも、あなたがたの王も、共に滅ぼされるであろう」(同・一二ノ二三―二五)。

第 60 章

サウルの不遜な態度

本章は、サムエル記上一三、一四章に基づく。

サウルは、ギルガルにおける集会後、アンモン人を打ち破るために召集した軍隊を解散させ、彼の指揮下の二千人をミクマシに残し、一千人を王子のヨナタンと共にギベアにおいた。これは、大きなまちがいであった。彼の軍隊は、今度の勝利によって希望と勇氣にあふれていた。であるから、サウルがすぐにイスラエルの他の敵を攻めたならば、国家を自由にするために効果的打撃を与えることができたはずであった。

そうこうしているうちに、好戦的隣国のペリシテ人は活発に動いていた。彼らは、エベネゼルで敗北したあと、なお、イスラエル国内の山地に数か所の要塞を確保していたが、今度は、国の中央に陣取るようになった。ペリシテ人は、装備、軍備、設備などの点で、イスラエルよりは、はるかにすぐれていた。彼らは、彼らの長期にわたる圧制中、イスラエル人が鉄工に従事することを禁じて武器を作らせず、彼らの勢力の維持に努めた。ヘブル人は、和平を結んだあと、なお、ペリシテ人の陣地へ行つて、必要な細工をしてもらった。イスラエルの人々は長年の圧制のために安易を好み、卑劣な精神をいだくようになり、大部分のものは武器の準備を怠っている。

た。戦いときには弓や石投げが用いられ、こういうものは、イスラエル人も手に入れることができた。しかし、サウルと彼のむすこヨナタンのほかには、やりもつるぎも持っている者はいなかった。

サウル王の治世の第二年めになって、初めて、ペリシテ人を征服しようとする動きが起こった。王子ヨナタンが、まず攻撃を開始し、ゲバにある彼らの要塞を攻撃して打ち破った。この敗北に激怒したペリシテ人は、すぐにイスラエルを急襲する準備を開始した。ここで、サウルはラッパを吹きならして、全国に戦いの布告を伝え、ヨルダンの向こうの部族も含めて、すべての戦士をギルガルに召集した。人々は、この召集に応じた。

ペリシテ人は、ミクマシに巨大な軍勢を結集した。「戦車三千、騎兵六千、民は浜べの砂のように多かった」(サムエル記上―三ノ五)。この知らせが、ギルガルのサウルとその軍勢に伝えられたとき、人々は、彼らの戦わなければならない敵の大軍に、びっくりぎょうてんした。彼らには、敵に当面する準備がなかった。多くの者は恐怖におびえて、あえて戦ってみようとしなかった。ヨルダンを渡った者もあれば、その地域一帯に多くあった穴や岩に隠れる者もあった。合戦のときが近づいたときには、脱走者が急激に増加して、隊にふみとどまっていた者も、不吉な予感と恐怖に満たされた。

サウルが、最初、イスラエルの王として、油を注がれたときにもこのときの行動について、明確な指示がサムエルから与えられていた。「あなたはわたしに先立ってギルガルに下らなければならない。わたしはあなたのもとに下っていつて、幡祭を供え、酬恩祭をささげるでしょう。わたしがあなたのもとに行つて、あなたのしなければならぬ事をあなたに示すまで、七日のあいだ待たなければならない」と預言者は言った(同・一〇ノ八)。サウルは、いく日もとどまっていたが、その間に、人々を励まし、神に対する信頼心を起こさせるためになん

の決定的努力もしなかった。定められた期間が完了する前に、彼は遅延にしばれを切らし、周囲の困難な状況に失望してしまった。サムエルが到着して行なうことになっていた儀式のために、忠実に人々の準備を促す代わりに、彼は、不信と不安感をいだいた。犠牲をささげて神に祈り求めることは、最も厳粛で重要な務めであった。そして、ささげ物が神に受け入れられ、彼らの敵を征服しようとする努力が神に祝福されるためには、神の民が心をさぐり、罪を悔い改めることを神はお求めになった。しかし、サウルは落ち着きを失った。そして人々は、神の助けに信頼する代わりに、彼らの選んだ王の指導を期待した。

しかし、主は、なお彼らをみ心にとめ、もし彼らが弱い肉の腕だけに頼ったとしたなら陥ったであろう不幸には、会わせられなかった。神は、彼らが人間に頼ることの愚かさを悟って、神だけをたよりにするようになるために、彼らを窮地に陥れられた。サウルを試みる時が来た。ここで、彼は、神に信頼するかどうか、また神の命令に従って忍耐して待つかどうかを明らかにしなければならなかった。こうして、彼は、困難に直面した場合、神の民の指導者として、神の信頼を受けるに足る人物であることを示すか、それとも、動揺して、彼にゆだねられた聖なる責任を負う価値がないかを示すことになった。イスラエルが選んだ王は、諸王の王なる神に聞き従うであろうか。彼は、氣力を失った兵隊たちの心を、永遠の力と救いの所有主に向けるであろうか。

彼は、サムエルの到着を、今か今かと待った。そして、軍勢の混乱と兵の脱走事件などは、預言者が来ないためであると思った。定められた時が来たのに、神の人はすぐに現われなかった。神の摂理が、神のしもべを引き留めたのであった。しかし、サウルの落ち着かない衝動的気持は、これ以上制しておくことができなかった。何かをして人々の恐怖を静めなければならぬと思って、彼は宗教的祭りの集会を開き、ささげ物をささげて、神

の助けを求めることにした。神は、その務めのために聖別されたものだけが、神の前でささげ物をささげなければならぬという指示を与えておられた。しかし、サウルは、「幡祭……をわたしの所に持ってきてなさい」と命じた（同・一三ノ九）。彼はよろいを着て、武器を持ったまま祭壇に近づいて、神の前に犠牲をささげた。「その幡祭をささげ終ると、サムエルがきた。サウルはいさつをしようと、彼を迎えに出た」（同・一三ノ一〇）。サムエルは、すぐにサウルが明白な指示とは反対のことを行なったことを悟った。主は、この危機において、イスラエルがなすべきことを、このときに示すと、神の預言者を通じて語っておられたのである。もしサウルが、神からの援助を受ける条件に従っていたならば、主は、王に忠誠を尽くした少数の者を用いて、イスラエルのために驚くべき救いをもたらされたことであろう。しかし、サウルは自分と自分の業績に満足し、譴責ではなく賞賛に値するもののように、預言者を出迎えた。

サムエルの表情は、心配と苦悩に満ちていた。「あなたは何をしたのですか」という彼の問いに答えて、サウルは、彼の不遜な行為の言いわけをした。「民はわたしを離れて散って行き、あなたは定まった日のうちにこられないのに、ペリシテびとがミクマシに集まったのを見たので、わたしは、ペリシテびとが今にも、ギルガルに下ってきて、わたしを襲うかも知れないのに、わたしはまだ主の恵みを求めることをしていないと思い、やむを得ず幡祭をささげました」と彼は言った（同・一三ノ一一、一二）。

「サムエルはサウルに言った、『あなたは愚かなことをした。あなたは、あなたの神、主の命じられた命令を守らなかった。もし守ったならば、主は今あなたの王国を長くイスラエルの上に確保されたであろう。しかし今は、あなたの王国は続かないであろう。主は自分の心にかなう人を求めて、その人に民の君となることを命じられた』」。

…こうしてサムエルは立って、ギルガルからベニヤミンのギベアに上っていった」(同・一三ノ一三 一五)。

イスラエルは、神の民でなくなるか、それとも、王国の基礎である原則を維持して、神の力に支配される国になるかのどちらかにならなければならなかった。もし、イスラエルが、全く主のがわに立ち、人間的で地上的の意志を神の意志に服従させるならば、神は、引き続きイスラエルの支配者になられるのであった。王と国民とが神に従属したものとして行動するかぎり、神は彼らの防御となられるのであった。しかし、イスラエルでは、すべてにおいて神の至上権を認めない王国は栄えることができなかった。サウルが、この試練のときに、神の要求に対する尊敬を示したならば、神は、彼によって、神のみこころをなさることができたのである。ところが、彼は、そうしなかったために神の民の代表者としての資格を失った。彼は、イスラエルを迷わせるのであった。神の意志でなくて、彼の意志が支配力になるのであった。もし、サウルが忠実であつたならば、彼の王国は、永遠に確立されたことであろう。しかし、彼の失敗のために、神の計画は他の者によつて完成されなければならなかった。イスラエルの統治権は、天の神のみこころに従つて、人々を治める者にゆだねられなければならなかった。

われわれは、神の試練を受けるときに、それがどのような重大事にかかわりがあるかを知らない。神のみ言葉に、全的に服従する以外に安全はない。神の約束は、すべて、信仰と服従を条件にして与えられたもので、神の命令に応じなければ、聖書に示されている豊かな恵みにあずかることができない。われわれは衝動にかられたり、人間の判断に頼つたりしてはならない。われわれはどんな環境にあつても、神の啓示されたみこころを仰ぎ神の明らかな戒めに従つて歩かなければならない。結果は、神が責任を負つてくださる。われわれは、試練のときに、神のみことばに忠実に従い、どんな困難な事態においても、神に信頼され、神のみ名に栄光を歸し、神の

民の祝福とすることができ、人々と天使の前で実証することができるのである。

サウルは、神のみこころを痛めたが、それでも悔い改めて心を低くしようとしなかった。彼は、真の敬神の念の欠乏を、宗教の形式に対する熱意によって補おうとした。サウルは、ホフニとピネハスが神の箱を陣営に持ち出して、イスラエルの敗北を招いたことを知らなかったわけではなかった。しかし、サウルは、こうしたことをみな知りながら、聖なる箱とそれに付き添っている祭司を迎えにやった。こうして彼は、人々の信頼を得ることができれば、離散した軍勢をふたたび結集して、ペリシテ人と戦うことができる并希望していた。彼は、サムエルがそこに來て彼を支持することを待たずに実行した。こうして彼は、預言者のうれしくない批評と譴責をのがれようとした。

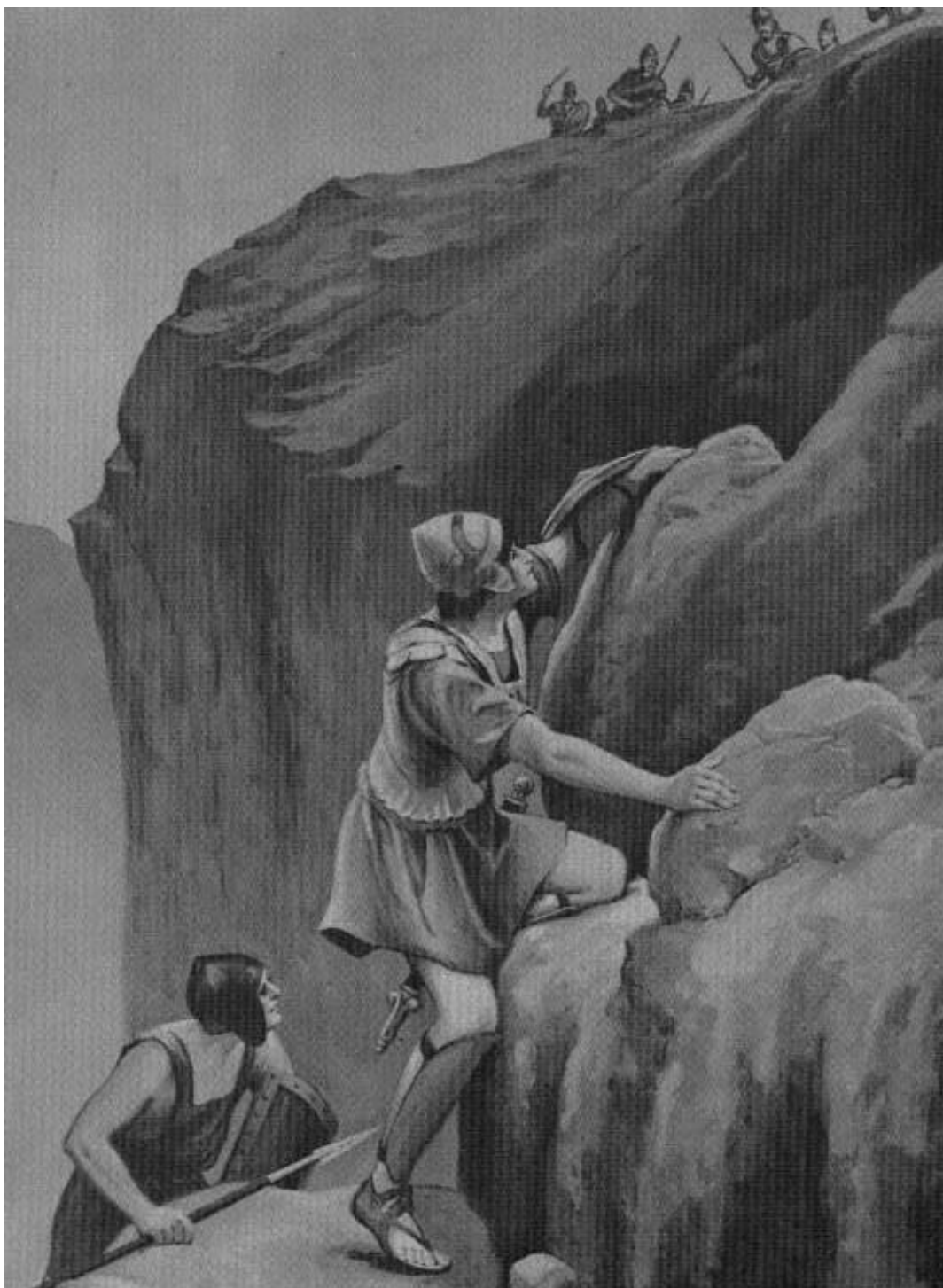
サウルには、彼の理解を深め、心を和らげるために、聖霊が与えられていた。彼は、神の預言者の忠実な指示と譴責を受けていた。それにもかかわらず、彼は、なんと邪悪な心の持ち主であったことであろう。イスラエルの最初の王の生涯は、幼少のころの悪習慣の力がどんなに強いかを示す悲しい実例である。サウルは、若いころ神を愛しおそれなかった。そして、幼いときに服従を教えられなかった性急な精神が、常に神に反抗した。若いときに、神のみこころを尊重し、自分の置かれた立場の義務を忠実に果たすものは、後年、さらに大きな奉仕をするための準備が与えられる。しかし、神がお与えになった能力を長年にわたって乱用しておきながら、急にそれを全然反対の方向に向けて生き生きと自由に活動させることはできない。

サウルが、人々を奮起させようとした努力は失敗に終わった。サウルは、軍勢が六百人になってしまったのでギルガルを去って、さきごろペリシテ人から占領したゲバの城塞に退いた。この城塞は、深く、けわしい峡谷の

南側にあつて、エルサレムの北方約数マイルのところにあつた。同じ谷間の北側が、ペリシテ人の陣地のミクマシで、彼らは、そこから軍隊を方々に送つて国じゅうを荒らしていた。

神は、サウルの強情な心を譴責し、神の民にけんそんと信仰の教訓を与えるために、事態が、こうした危機に陥ることをお許しになつた。主は、サウルが、僭越にもささげ物をささげて罪を犯したために、ペリシテ人を滅ぼす榮譽を彼にお与えにならなかつた。主をおそれた王子のヨナタンが、イスラエルを救う器に選ばれた。彼は神からの感動を受けて、武器をとる若者に向かつて、敵の陣地にひそかに乗り込もうと言つた。「主がわれわれのために何か行われるであろう。多くの人をもつて救うのも、少ない人をもつて救うのも、主にとっては、なんの妨げもないからである」と彼は言つた（同・一四ノ六）。

武器をとる若者も、また信仰と祈りの人で、その計略を実行することを勧め、他の者に反対されるのを避けるために、ふたりでひそかに陣地を抜け出た。彼らは、先祖たちを導かれた神に熱心な祈りをささげてから、その後の行動に移る場合の合図をきめた。こうして、彼らは、両軍を隔てている谷間におり、だんがいの陰に隠れたり、山々の峰の間をぬつたりして黙々と前進した。やがて彼らは、ペリシテ人の陣地に近づいて、敵前に姿を現わした。すると、ペリシテ人は彼らをあざけて、「見よ、ヘブルびとが、隠れていた穴から出てくる」と言つた（同・一四ノ一一）。彼らは、「われわれのところの上つてこい。目に、もの見せてくれよう」といどみかけ、接近してきたこのふたりのイスラエル人に罰を与えようと考えた（同・一四ノ一二）。この挑戦は、主が彼らの企てを成功させてくださる証拠として、ヨナタンと武器をとる若者とが定めておいた合図であつた。勇者たちは、ペリシテ人の前から姿を消して、けわしい隠れた通路を選び、接近するのが不可能と思われていただんがいの頂



ヨナタンと彼の従者は、神を信じて、道もない、けわしいがけをよじ上って、番兵を倒し、ペリシテ人を敗走させた。

上に進んで行った。そこは、強固な防備がどこされていなかった。こうして、彼らは、敵の陣地に侵入して、守備兵を殺した。敵は不意を打たれて、あわてふためき、なんの抵抗もしなかった。

天使たちが、ヨナタンと武器をとる若者を守護し、彼らと共に戦ったので、ペリシテ人は、彼らの前に敗れ去った。騎兵と戦車の大軍が接近するかのように、地は、震え動いた。ヨナタンは、神の助けの証拠を認めた。そして、ペリシテ人でさえ、神がイスラエルを救済するために働かれたことを知った。ペリシテ人は、野にいる者も陣営にいる者も、全軍が大きな恐怖に襲われ、大混乱を起こし、味方を敵軍とまちがえて同志打ちを始めた。やがて、戦いの音が、イスラエルの陣営に聞こえてきた。王の見張りは、ペリシテ人の間に大混乱が起こり、その数が減少していることを報告した。しかし、ヘブルの軍勢の中から、陣営を離れた者があることは、まだわからなかった。調査の結果、ヨナタンと武器をとる者のふたりだけが不在であることがわかった。しかし、ペリシテ人が退却しているのを見て、サウルは軍勢を率いて攻撃に加わった。敵軍のがわに逃亡していたヘブル人たちも、今度は逆にペリシテ人に立ち向かった。隠れがから出て来た者も多くいた。サウルの軍勢は計略が破れて敗走するペリシテ人をさんざんに苦しめた。

サウルは、彼の優位を最大限に活用しようと思い、向こう見ずにも、丸一日間食物をとることを兵隊たちに禁じ、「夕方まで、わたしが敵にあだを返すまで、食物を食べる者は、のろわれる」と言って、厳粛な誓いのもとに命令を断行した（同・一四ノ二四）。こうした事態になったことを知って、サウルが協力するまでもなく、勝利はすでにきまっていた。しかし、彼は、敵を全滅させて自分の名をあげようとした。王が断食の命令を出したことは、利己的野心からであって、自己を賞揚するためには、民の必要などには無関心であることを明らかにした。

その禁令を誓つてまでも厳守させたことは、サウル王が向こう見ずで、神を敬わない人間であることをあらわした。のろいの言葉自体も、サウルのこの熱心さが、神の栄光のためではなくて、自己のためであることを証明している。彼の目的は、「主が敵にあだを返される」ことではなくて、「わたくしが敵にあだを返す」ことであると彼は言った。

禁令は、人々に神のおきてを犯させることになった。彼らは、何も食べずに一日じゅう戦つたので倒れそうになった。それで、禁令の時間が過ぎるやいなや、彼らは、ぶんどり物をほふつて、その肉を血のまま食べて、血を食べることを禁じていたおきてを犯した。

王が、禁令を出したことを知らなかったヨナタンは、昼間、戦つていたときに通つた森の中ではち蜜を少し食べて、禁令を知らずに犯した。夕方になって、サウルはこのことを聞いた。禁令の違反者は、死に処せられると彼は言っていた。ヨナタンは故意にそむいたのではなかった。また、彼の生命は奇跡的に保護され、彼によつて救済がもたらされたにもかかわらず、王は、刑の執行を命令した。サウルが王子の命を救うことは、このような向こう見ずの誓いをさせた自分が、罪を犯していたことを自認することになるのであった。それでは、彼の誇りが傷つけられるのであった。「神がわたしをいくえにも罰してください。ヨナタンよ、あなたは必ず死ななければならぬ」と、彼は恐ろしい宣告を下した（同・一四ノ四四）。

サウルは、勝利の栄光を自分に帰することはできなかった。しかし、誓いの神聖さを保とうとする彼の熱意によつて誉れを得ようと望んだ。彼は、自分のむすこを犠牲にしても、王の権威を保つべきであるということに国民に印象づけようとした。サウルは、この少し前に、ギルガルにおいて、差し出がましくも、神の命令に反し

て祭司の務めを行なったのであった。彼は、サムエルの譴責を受けると、頑強に自分を正当化した。ところが、彼の命令の違反者があれば、その命令が不合理で、しかも、知らずに犯したものであっても、王であり父であるサウルは、王子の死を宣告したのである。

人々は、その宣告の執行を拒否した。彼らは、王の怒りを恐れずに言った。「イスラエルのうちにこの大いなる勝利をもたらしたヨナタンが死ななければならないのですか。決してそうではありません。主は生きておられます。ヨナタンの髪の毛一すじも地に落してはなりません。彼は神と共にきょう働いたのです」(同・一四ノ四五)。

高慢な王は、この満場一致の裁決を無視することはできなかった。そして、ヨナタンは救われた。

サウルは、王子が自分以上に神からも人々からも愛されていることを感じないわけにいかなかった。ヨナタンが救われたことは、王の無分別に対するきびしい譴責であった。彼は、自分ののろいが自分の頭にかえってくるを感じた。彼は、ペリシテ人との戦いを長く続けないで、ゆううつと不満のうちに家に帰った。

すぐに自分の罪の言い訳をしたり、弁解をしたりする人は、他人をきびしくさばき非難する人でもある。多くの者は、サウルのように、神の不興を招くのであるが、勧告を拒み、譴責を軽べつする。主が彼らと共におられないことが明らかになっても、悩みの原因が、自分たち自身にあったことを認めようとしない。彼らは、高慢で自尊心をいだいている。その反面、彼らは、彼らよりも善良な他の人々を残酷にさばき、きびしく譴責する。こうして、自分たちを裁判官の座にすわらせる人々は、次のキリストの言葉をよく考えるがよい。「あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであらう」(マタイ七ノ二)。

自己を高めようとする者は、その本性を暴露する立場に置かれることがよくある。サウルの場合もその通りであった。人々は、王が、正義、あわれみ、愛よりも、王の栄誉と権威を重んじたことを、彼自身の行動によってはっきりと知ることができた。こうして、人々は、神がお与えになった統治を拒否したことが誤りであったことを悟らされた。彼らは、彼らのために祝福を祈り求めた敬神深い預言者の代わりに、盲目的熱心さをもって祈り彼らにのろいを下す王を選んだのであった。

もし、イスラエルの人々が、ヨナタンを救うために介入しなかったならば、彼らの救済者は、王の命令によって殺されてしまったことであろう。その後、人々はどんな不安感をいだいて、王に従ったことであろう。人々は、彼ら自身がサウルを王位につけたことを、どんなに悲しんだことであろう。主は、人々の頑強さを長く忍ばれる。そして、すべての者に、罪を認めて悔い改める機会をお与えになる。神のみこころを無視し、神の警告を軽べつする者は、栄えるように見えても、神がお定めになった時が来れば、必ずその愚かさをあらわすのである。

第 61 章

サウル退けられる

本章は、サムエル記上一五章に基づく。

サウルは、ギルガルで難局に直面したときに、信仰の試練に耐えられずに、神の礼拝をはずかしめた。しかし、彼のまちがいは、取りかえしのつかないものではなかった。それで、主は、彼に再び機会を与えて、彼が神のみことばを無条件に信じ、神の命令に従うという教訓を学ばせようとしておられた。

サウルは、ギルガルで預言者から譴責されたときに、自分の行為が、大きな罪であるとは思わなかった。彼は自分が不当な扱いを受けたと感じた。そして、自己の行為を正当化して過失の言い訳をした。彼は、このとき以来、預言者と交渉を持たなくなった。サムエルは、サウルをわが子のように愛していた。そして、サウルも大胆で気性は激しかったが、預言者を尊敬していた。しかし、彼は、サムエルの譴責に憤慨し、このとき以来できるだけ彼を避けた。

しかし、主は、彼のしもべをつかわして、サウルにもう一つの使命をお与えになった。サウルは、服従することによって、神に対する忠誠とイスラエルを指導する彼の資格とをまだ証明することができた。サムエルは、王

のところに来て、主の言葉を伝えた。サムエルは、命令に従うことの重要性を王に認めさせるために、神の権威すなわちサウルを王位につけたのと同じ権威によって語っていることを声明した。預言者は言った。「万軍の主は、こう仰せられる、『わたしは、アマレクがイスラエルにした事、すなわちイスラエルがエジプトから上つてきた時、その途中で敵対したことについて彼らを罰するであろう。今、行ってアマレクを撃ち、そのすべての持ち物を滅ぼしつくせ。彼らをゆるすな。男も女も、幼な子も乳飲み子も、牛も羊も、らくだも、ろばも皆、殺せ』」(サムエル記上二五ノ二、三)。アマレク人は、荒野でイスラエルに戦いをいどんだ最初の民族であつた。この罪と彼らの神への反抗と彼らの墮落した偶像礼拝のゆえに、主は、モーセによって彼らに宣告を下された。神の命によつて、彼らのイスラエルに対する残酷の歴史は記録され、「あなたはアマレクの名を天の下から消し去らなければならぬ。この事を忘れてはならない」と命じられていた(申命記二五ノ一九)。この宣告は、四百年の間執行が延ばされていた。しかし、アマレク人は、彼らの罪を離れなかつた。この邪悪な民族は、もしできることなら、神の民と神の礼拝とを地上からぬぐい去ろうとしていたことを主は知っておられた。今、長く延期されていた宣告の執行の時が来ていた。

神が悪人を長く忍ばれるために、人々は大胆に罪を犯す。しかし、長く延期されても、刑罰の確実なことに恐ろしさにはなんの変わりもない。「主はペラジム山で立たれたように立ちあがり、ギベオンの谷で憤られたように憤られて、その行いをなされる。その行いは類のないものである。またそのわざをなされる。そのわざは異なつたものである」(イザヤ書二八ノ二一)。あわれみ深い神にとって、刑罰のわざは不思議な行為である。「主なる神は言われる、わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生きるの

を喜ぶ」(エゼキエル書三三ノ一一)。主は、「あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、…悪と、とがと、罪とをゆるす者」であるが、「罰すべき者をば決してゆるさ」ない(出エジプト記三四ノ六、七)。神は刑罰を喜ばれないが、神の律法を犯す者には刑罰を与えられる。地の住民が全く腐敗して滅亡することを防ぐために、神はやむをえずこれをなさなければならない。神は、いくらかの人々を救うために、罪にかたくなになった人々を滅ぼさなければならない。「主は怒ることおそく、力強き者、主は罰すべき者を決してゆるされない者」である(ナホム書一ノ三)。主は、義をもって恐ろしいことを行ない、彼のふみにじられた律法の権威を擁護される。主が刑罰の執行を延ばしておられること自体が、神の刑罰を招いた罪の恐ろしさと、罪人に臨もうとする報復のきびしさを証明している。

神は、刑罰を与えながらも、あわれみを忘れられない。アマレク人は、滅ぼされなければならないが、彼らの中に住んでいたケニ人は救われた。この人々は、偶像礼拝から全く離れてはいなかったが、真の神の礼拝者で、イスラエルの友であった。モーセの義理の兄弟ホバブは、この種族の出身で、荒野のことをよく知っていたので、イスラエル人の荒野の旅に同行してよい助言を与えた。

サウルは、ミクマシで、ペリシテ人を滅ぼしてから、モアブ、アンモン、エドム、アマレク、ペリシテなどの国々と戦った。そして、彼の行くところ連戦連勝であった。彼は、アマレク人を撃滅する任命を受けるやいなやすぐに宣戦を布告した。彼自身の権力に預言者の権力も加えられた。そして、イスラエルの人々は、召集に応じて彼の旗のもとに集まった。この遠征は、自己誇張のために行なわれるものではなかった。イスラエルの人々は勝利の栄誉も敵のふんどり物をも受けてはならなかった。彼らは、ただ、アマレク人に対する神の刑罰の執行の

ために、神に対する服従の行為として戦いに従事するだけであった。神は、すべての国々が、神の主権に逆らった国民の運命を見、彼らが軽べつしたその国自身に滅ぼされることを注目するように計画された。

「サウルはアマレクびとを撃つて、ハビラからエジプトの東にあるシュルにまで及んだ。そしてアマレクびとの王アガグをいけどり、つるぎをもつてその民をことごとく滅ぼした。しかしサウルと民はアガグをゆるし、また羊と牛の最も良いもの、肥えたものならびに小羊と、すべての良いものを残し、それらを滅ぼし尽すことを好まず、ただ値うちのない、つまらない物を滅ぼし尽した」(サムエル記上一五ノ七 九)。

アマレク人に対するこの勝利は、サウルのこれまでの勝利中の最大のものであった。そして、これは、彼にとって最も危険な誇りをふたたび燃え上がらせた。神の敵を全滅させよという神の命令は、部分的にしか行なわれなかった。サウルは、王を捕虜にして連れて帰り、凱旋の栄光を盛り上げるために、周囲の国々の習慣をまね、勇猛果敢なアマレクの王アガグを生かしておいた。人々は、羊と牛と家畜の最もよいものを残しておき、それらを主に犠牲としてささげるために保留したと彼らの罪の弁解をした。しかし、彼らは、自分たちの家畜の代わりに、これらをささげようとしていたに過ぎなかった。

サウルは、ここで、最後の試練に直面したのであった。彼は、神のみこころをあえて無視し、独立した王として国を治めようと決意したことを示したので、主の代表者として王権を委託されることができないことになった。サウルと彼の軍勢が、勝ち誇って帰途についたとき、預言者サムエルの家では大きな苦悩があった。彼は、王の行動を非難した主からの言葉を聞いたのであった。「わたしはサウルを王としたことを悔いる。彼がそむいて、わたしに従わず、わたしの言葉を行わなかったからである」(同・一五ノ一一)。預言者は反逆した王の行為を深

く悲しんだ。そして、彼は、この恐ろしい宣告の取り消しを求めて、一晚じゅう泣いて祈った。

神の悔いとは、人間の悔いのようなものではない。「イスラエルの栄光は偽ることもなく、悔いることもない。彼は人ではないから悔いることはない」(同・一五ノ二九)。人間の悔いは心の変化を言うのである。神の悔いは環境と関係の変化を意味する。人間は、神の恵みにあずかることのできる条件に應じることによって、彼の神との関係を変えることができる。それとも、自己の行為によって、恵まれた状態の圏外に自分を置くこともできる。しかし、主は、「きのうも、きょうも、いつまでも変えることがない」(ヘブル一三ノ八)。サウルの不服従は、彼の神との関係を変えた。しかし、彼が神に受け入れられる条件に変わりはなかった。神の要求は、なお、同じであつた。神には、「変化とか回転の影とかいうものはない」のである(ヤコブ一ノ一七)。

翌朝、預言者は、悲痛な思いをいだいて、誤った王に会うために出かけた。サムエルは、サウルが自分の罪を認め、悔い改めて心を低くして、神の恵みにふたたびあずかるようになることを希望していた。しかし、罪の道に一步踏み込めばその先はやさしい。不服従によつて心がゆがんだサウルは、サムエルに会いに来て偽りを言つた。彼は、「どうぞ、主があなたを祝福されますように。わたしは主の言葉を実行しました」と叫んだ(サムエル記上一五ノ二三)。

預言者の耳に聞こえた音は、不服従な王の言葉が偽りであることを証明した。「それならば、わたしの耳にはいる、この羊の声と、わたしの聞く牛の声は、いったい、なんですか」と鋭く質問されて、サウルは言った。「人がアマレクびとの所から引いてきたのです。民は、あなたの神、主にささげるために、羊と牛の最も良いものを残したのです。そのほかは、われわれが滅ぼし尽しました」(同・一五ノ一四、一五)。人々は、サウルの命令

に従ったのであったが、サウルは自分を弁護するために、その不服従の罪を彼らのせいにしてしまった。

神がサウルを拒否されたというお告げば、サムエルの心に、口では表現できない悲しみを与えた。この言葉はイスラエルの全軍の前で言わなければならなかった。しかも彼らが誇りと凱旋の喜びに満ち、勝利を王の勇気とその指揮に帰しているときにおいてであった。サウルはこの戦いにおいてイスラエルが勝利したことは、神の助けによるものであることを認めていなかった。しかし、預言者は、サウルの反逆の証拠を見たときに、彼が、神の大いなる恵みにあずかっていながら、天の神の律法を破り、イスラエルを罪に陥れたことに激しい怒りを感じるのであった。サムエルは、王の口実にまどわされなかった。悲しみに怒りを混じえて、彼は言った。「おやめなさい。昨夜、主がわたしに言われたことを、あなたに告げましょう。……たとい、自分では小さいと思っても、あなたはイスラエルの諸部族の長ではありませんか。主はあなたに油を注いでイスラエルの王とされた」と(同・一五ノ一六、一七)。預言者は、アマレクに対する主の命令をくりかえし、王の不服従の理由をたずねた。

サウルは自分を弁護し続けた。「わたしは主の声に聞き従い、主がつかわされた使命を帯びて行き、アマレクの王アガグを連れてきて、アマレクびとを滅ぼし尽しました。しかし民は滅ぼし尽すべきもののうち最も良いものを、ギルガルで、あなたの神、主にささげるため、ぶんどり物のうちから羊と牛を取りました」(同・一五ノ二〇、二一)。

預言者は、鋭く、きびしい言葉で、こうした偽りの口実を払いのけて、取り消すことのできない宣告を下した。

「主はそのみ言葉に聞き従う事を喜ばれるように、燔祭や犠牲を喜ばれるであろうか。見よ、従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる。そむくことは占いの罪に等しく、強情は偶像礼拝の罪に等しいからで



預言者は、きびしい語調で、王の不服従を責めた。「あなたが主のことばを捨てたので、主もまたあなたを捨てて、王の位から退けられた。」

ある。あなたが主のことばを捨てたので、主もまたあなたを捨てて、王の位から退けられた」(同・一五ノ二二、二三)。

この恐ろしい宣告を聞いて、王は叫んで言った。「わたしは主の命令とあなたの言葉にそむいて罪を犯しました。民を恐れて、その声に聞き従ったからです」(同・一五ノ二四)。サウルは、預言者の告発に震えおののいてこれまで頑強に拒否していた罪を認めた。しかし、彼は、なお、罪を犯したのは、人々を恐れたからであると言って民を非難していた。

イスラエルの王は、罪を悲しんだためではなくて、刑罰を恐れたために、サムエルに嘆願して言った。「どうぞ、今わたしの罪をゆるし、わたしと一緒に帰って、主を拝ませてください」(同・一五ノ二五)。もし、サウルが真に悔い改めていたならば、彼は、自分の罪を公に告白していたことであろう。しかし、彼は、自分の権威を保ち、民の忠誠を保持することをまず第一に考えていた。彼は、自分の国民に与える影響を強化するために、サムエルが臨席してくれることを希望した。

預言者は答えて言った。「あなたと一緒に帰りません。あなたが主の言葉を捨てたので、主もあなたを捨てて、イスラエルの王位から退けられたからです」(同・一五ノ二六)。こうして、サムエルが去ろうとすると、王は、震えおののき、彼の上着をつかまえて引きもどそうとしたところ、それは裂けてしまった。そこで預言者は言った。「主はきょう、あなたからイスラエルの王国を裂き、もっと良いあなたの隣人に与えられた」(同・一五ノ二八)。

サウルは、神の不興を招いたことよりは、サムエルから見捨てられることのほうが、さらに不安であった。彼

は、人々が自分よりは預言者をはるかに信頼していることを知っていた。今、神の命令によって他の者が王として油を注がれるならば、自分の権威を維持することはできないとサウルは考えた。もしサムエルが彼を全く見捨ててしまうならば、すぐに反乱が起こるのではないかと彼は恐れた。サウルは、預言者が彼と共に公に宗教的儀式を行ない、人々と長老たちの前で、彼に榮譽を帰してくれることを懇願した。サムエルは、神の指示に従って王の願いを聞き入れた。それは、反乱を引き起こさないためであつた。しかし、彼は、ただ黙って礼拝を見守っているだけであつた。

きびしく、恐ろしい法的行為が、まだ行なわれなければならなかつた。サムエルは、公に神の栄光を擁護し、サウルの行為を譴責しなければならなかつた。サムエルは、アマレクの王を、彼の前に連れ出すことを命じた。アガゲは、これまでイスラエルの剣に倒れたすべての人々にまさつて最も罪深く、残酷な人間であつた。彼は、神の民を憎んで滅ぼそうとし、偶像礼拝を強力に押し進めた。彼は、預言者の命によつて引き出されて、死の苦しみは、もう過ぎ去つたと思つて喜んだ。サムエルは言つた。『あなたのつるぎは多くの女に子供を失わせた。そのようにあなたの母も女のうちに最も無惨に子供を失う者となるであろう。サムエルはギルガルで主の前に、アガゲを寸断した』（同・一五ノ三三）。こうしてサムエルは、ラマの彼の家に帰り、サウルはギベアの彼の家に歸つた。このとき以来、預言者と王が顔を合わせたのはただ一度だけであつた。

サウルは、王位に召されたとき、自分自身の力量についてけんそんな考えを持ち、教えを受ける気持ちがあつた。彼は、知識も経験も乏しく、品性の重大な欠陥を持っていた。しかし、主は聖霊を指導者また援助者として彼に与え、イスラエルの支配者として必要な特質を伸ばすことができる地位に彼をおかれた。もしも、彼

がけんそんで、常に神の知恵を仰ぎ求めていたならば、その高い地位における任務を果たして成功を収め、榮譽にあずかることができたことであろう。神の恵みの力によってすべてのよい特質は強められ、悪い傾向は、その力を失っていくのであった。こうしたことは、主に献身するすべての者のために、主がしようとしておられることである。けんそんで教えを受ける精神を持っているために、神の働きの中の種々の地位に召される人々が多くある。神は、み摂理のうちに、彼らを、神について学ぶことができるところにおかれる。神は、品性の欠点を彼らに示される。そして、神は、助けを求めるすべての人々に、彼らの誤りに打ち勝つ力をお与えになる。

しかし、サウルは、彼の高い地位に心がおごり、不信と不服従によって、神のみ栄えを汚した。彼は、最初王位に召されたときには、けんそんで自己の力にたよっていなかったが、成功するにつれて、自己過信に陥った。彼の治世の一番最初の勝利が、心の誇りを燃え立たせて、彼を最大の危険に陥れた。ヤベシギレアデの救出に当たってあらわされた彼の勇氣と軍事的技量は、全国民を熱狂させた。人々は、王に榮譽を歸し、王が単に神に用いられた器に過ぎないことを忘れた。サウルは初めのうちは神に栄光を歸したが、あとになってからは、それを自分の榮譽に歸した。彼は自分が神に依存していることを忘れ、主から離れていった。こうして彼が、ギルガルで不遜と冒瀆の罪を犯す素地がつくられていったのである。同様の盲目的自己過信が、サムエルの譴責を彼に拒否させるに至ったのである。サウルは、サムエルが神からつかわれた預言者であることを知っていた。であるから、彼は、自分では罪を犯したような気がしなくても、その譴責を受け入れるべきであった。もし彼が快く自分の誤りを認めて告白したならば、この苦い経験は、将来の安全を守るものとなったことであろう。

もし主が、このときサウルから全く離れてしまわれたならば、彼の預言者を通じて、ふたたび彼に語りかける

こともなく、一定の務めをなすことを彼にゆだねて、過去の過失を正させようとはなさなかったことであろう。自分は、神の子であるとなえているものが、神のみこころを行なうことをなおざりにし、そのために、人々に主の戒めに対する不敬と冷淡の念をいだかせることもあるう。しかし、彼が真に悔い改めて譴責を受け入れ、けんそんと信仰によって、神に立ち帰るならば、彼は、失敗を勝利に変えることができる。敗北の恥辱は、われわれに神の助けがなければ神のみこころを行なう力がないことを示して、祝福となることがよくある。

サウルは、聖霊によって与えられた譴責を拒否し、頑強に自分を弁護し続けたとき、自我から彼を救うことができる神の唯一の方法を拒否したのであった。彼は、故意に神から離反した。罪を告白して、神に立ち帰るののであれば、神の助けも導きも受けることはできなかった。

サウルは、ギルガルでイスラエルの軍隊の前に立って犠牲をささげたとき、非常に良心的にふるまった。しかし、彼の敬神は純粹ではなかった。神の命令に真正面から反対して行なった宗教の儀式は、ただサウルの手を弱め、神が彼に与えようとされた援助を受けられただけであった。

サウルはアマレクの遠征に関して、主が彼に命じられた重要なことは、皆、行なったと考えた。しかし、主は部分的服従を喜ばれず、もつともらしい動機によって彼がおろそかにしたことを、不問に付されないのである。

神は、人間が神の要求にそむく自由を与えておられない。主は、イスラエルに言われた。「めいめいで正しいと思うようにふるまってはならない。……あなたはわたしが命じるこれらの事を、ことごとく聞いて守らなければならぬ」(申命記二二ノ八、二二八)。どんな行為の決定に当たっても、われわれは、その結果が有害かどうかではなくて、それが神のみこころにかなっているかどうかをたずねなければならない。「人が見て自ら正しいとす

る道でも、その終りはついに死に至る道となるものがある」(箴言一四ノ一二)。

「従うことは犠牲にまさり」(サムエル記上・一五ノ一二)。犠牲のささげ物は、ただそれだけでは、神の前になんの価値もない。それは、犠牲をささげる者が、罪の悔い改めとキリストを信じる信仰を表わし、将来神の律法に従うことを約束することをあらわすためのものであった。しかし、悔い改めと信仰と服従心がないならば、ささげ物に価値はない。サウルは、神の命令に真正面から反逆して、神が滅ばせと言われたものをささげ物にしようとしたときに、彼は、公然と神の権威を軽べつした。儀式は、天の神に対する侮辱であった。それなのにサウルの罪とその結果を眼前に見ながら、なんと多くの者が同じ道を歩いていることであろう。彼らは、主の要求の一部を信じて従うことを拒んでいるにもかかわらず、形式的な礼拝は熱心に続けている。こうした礼拝には、神の霊の応答がない。もし人々が、神の戒めの一つを故意に犯し続けているならば、彼らがどんなに熱心に宗教の儀式を守ったとしても、主は、それをお受けになることができない。

「そむくことは占いの罪に等しく、強情は偶像礼拝の罪に等しいからである」(同・一五ノ二三)。反逆の創始者はサタンである。神に対する反逆は、すべてサタンの直接の影響によるものである。神の統治に反逆する者は、大反逆者と同盟を結んだのである。そして、彼は、人々を魅惑して理解を誤らせるために、その能力と技能を働かせる。彼は、すべてのものを虚偽で色どる。彼の魔力に惑わされたものは、われわれの先祖と同様に、罪によって得ることができる大きな利益のことしか考えない。

サタンの欺瞞の力は、実に強力で、彼に従う多くの者が、実際に神に仕えていると思ひ込んでしまうほどである。コラ、ダタン、アビラムがモーセの権威に逆らったとき、彼らは、自分たちと同様の人間的指導者に反対し

ていると考えた。そして、彼らは、真に神のために働いていると信じこんだ。しかし、彼らは神が選ばれた器を拒むことによってキリストを拒んだ。彼らは、神の霊を侮辱した。そのように、キリストの時代の学者や長老たちは、神のみ栄えに対する非常な熱意をもっていると言いながら、キリストを十字架につけた。神のみこころにそむいて、自分の意志に従おうとする者の心に、同じ精神が宿っている。

サウルは、サムエルが神の靈感を受けたことについての十分な証拠を与えられていた。彼が預言者によって与えられた神の命令を彼があえて無視したことは、理性と健全な判断の命じることにそむいていた。彼の致命的な遜な態度は、サタンの魔術のためであつたに違いない。サウルは、非常な熱心さをもつて偶像礼拝と魔術とを禁止した。それにもかかわらず、彼は、神に対抗する同様の精神に支配されて、神の命にそむき、魔術を行なう人と同様に、実際にサタンの力に動かされていた。彼は譴責されたときに、反逆に強情の罪も加えた。彼がたとえ公然と偶像礼拝に加わつたとしても、神の霊をこれ以上侮辱することはできなかった。

神の言葉、または聖霊の譴責と警告を軽んじることは危険なことである。多くの者は、サウルのように誘惑に負けて目がくらみ、罪のほんとうの性質がわからなくなってしまう。彼らは、有意義な目標をめざしているという自負心をいだいていて、神の要求から離れても悪を行なつたとは思っていない。こうして、彼らは恵み深い霊を軽んじて、ついにその声を聞くことができなくなつて、自分たちの選んだ欺瞞の中に取り残されてしまう。

神は、人々が望んだ通りの王サウルをイスラエルにお与えになった。サムエルは、ギルガルでサウルを王に立てて言った。「それゆえ、今あなたがたの選んだ王、あなたがたが求めた王を見なさい」(同・二二ノ二三)。彼は眉目秀麗で背が高く、風采がりつぱであつたので、彼の外観は、人々の王に対する期待になつていった。そし

て、彼の勇氣と軍隊を指揮する能力とは、他国の尊敬と譽れとを得るために何よりもたいせつなものであると彼らが考えた特質であつた。彼らは、王が正義と公平とをもって、国を治めるためには、不可欠のより高尚な特質を持つていかどうかは少しも考えなかつた。彼らは眞に品性の氣高い人、神を愛しおそれる人を求めなかつた。彼らは、神の特選の民としての独特の清い生活を保つために、支配者が持つべき特質について、神の勧告を仰がなかつた。彼らは、神の望まれることではなくて、自分たちのしたいことをしようとしていた。であるから、神は、彼らが求めたような王を彼らに与え、彼らと同じ品性の持ち主をお与えになつた。彼らの心は、神に従つていなかつた。そして、彼らの王もまた、神の恵みに従つていなかつた。彼らは、この王の支配下にあつて、自分たちの誤りを認め、神に忠誠を尽くすようになるために必要な經驗を得るのであつた。

しかし、主は、サウルに王国の責任を負わせられたので、彼をそのまま放任なさらなかつた。神は、サウルに聖靈を与えて、彼の弱さと神の恵みの必要をあらわされた。だから、サウルが神に信賴したならば、神は、彼と共におられるのであつた。彼の意志が神のみこころに支配されているかぎり、そして、彼が靈の訓練に服するかぎり、神は、サウルの努力を成功させられるのであつた。しかし、サウルは、神を度外視して行動したときに、主は彼を指導することができなくなり、彼を捨てられたのである。そのとき、「主は自分の心になう人」を王位に召された(同・一三ノ一四)。彼は、品性の欠点がなかつたわけではなかつた。しかし、彼は自己にたよる代わりに神にたより、神の靈に導かれるのであつた。彼は、罪を犯したときには、譴責とこらしめに従うのであつた。

第 62 章

ダビデ油を注がれる

本章は、サムエル記上一六ノ一―一三に基づく。

「大いなる王の都」(詩篇四八ノ二)エルサレムの南方、数マイル離れたところにベツレヘムがある。幼子イエスが飼葉おけに寝かされ、東方から来た博士たちの礼拝を受けられたときから、千年以上もさかのぼった昔、ここでエッサイの子ダビデが生まれた。救い主降誕の何世紀も前に、活気に満ちた少年ダビデは、ベツレヘムのまわりの山々で、草を食べる羊の番をしていた。純朴な羊飼いの少年は、自分の作った歌をうたい、その新鮮で若々しい歌の調べに合わせてたて琴をかきならすのであった。主は、ダビデを選び、羊飼いの孤独な生活の中にあって、後年彼にゆだねようと計画された任務に対する準備をさせておられた。

こうして、ダビデが人里離れて身分の低い羊飼いの生活を送っていたときに、主なる神は、彼について預言者サムエルに語られた。「さて主はサムエルに言われた、『わたくしがすでにサウルを捨てて、イスラエルの王位から退けたのに、あなたはいつまで彼のために悲しむのか。角に油を満たし、それをもって行きなさい。あなたをベツレヘムびとエッサイのもとにつかわします。わたしはその子たちのうちにひとりの王を捜し得たからである』」。

……「一頭の子牛を引いて行って、「主に犠牲をささげるためにきました」と言いなさい。そしてエッサイを犠牲の場所に呼びなさい。その時わたしはあなたのすることを示します。わたしがあなたに告げる人に油を注がなければならぬ」。サムエルは主が命じられたようにして、ベツレヘムへ行った。町の長老たちは、恐れながら出て、彼を迎え、「穏やかな事のためにこられたのですか」と言った。サムエルは言った、「穏やかな事のためです」(サムエル記上二六ノ一 五)。長老たちは、犠牲の場への招待を受け入れた。そして、サムエルは、エッサイとそのむすこたちも招いた。祭壇が築かれ、犠牲が用意された。そこには羊のるす番をさせられた一番年下のダビデを除いて、エッサイの全家が集まっていた。羊を見張っていないと危険だったからである。

犠牲をささげ終わって、一同が供え物のふるまいにあずかるに先立ち、サムエルは堂々たる外見をしたエッサイのむすこたちを預言者の目で見始めた。最年長のエリアブは、背の高さといい美しさといい、他のだれよりもサウルに似ていた。彼の顔かたちとよく発達した体格は預言者の注目をひいた。彼の貴公子のような姿を見たサムエルは、「この人こそ、神がサウルの後継者として選ばれた人だ」と思った。そして、彼は、この人に油を注ぐようにという神のゆるしを待った。ところが主は、外観を見られなかった。エリアブは、主をおそれなかった。もしも彼が王位に召されたならば、高慢で苛酷な支配者になったことであろう。主は、サムエルに言われた。「顔かたちや身のたけを見てはならない。わたしはすでにその人を捨てた。わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見、主は心を見る」(同・一六ノ七)。顔かたちが美しいからといって、神によく思われることはできない。品性と行為にあらわれる知恵と美德が、人間の真の美を表現する。内面の価値と心の卓越性が、万軍の主を受け入れられるかいなかを決定するものである。われわれは、自己、または、他人を評価するに当た

って、この事実を深く感じなければならない。顔の美しさや姿の気高さによる評価が当てにならないことを、サムエルの失敗から学ばなければならない。天からの特別の光を受けなければ、われわれは人間の知恵では、人の心の秘密も、神の勧告も理解することができないことを悟るのである。被造物に対する神の思いと方法とは、われわれの有限な心の思いを越えている。しかし、もし、神の子供たちが、人間の曲がった心によって神の恵み深い計画を無にしないように心がけ、その意志を神に従わせていさえすれば、彼らは、必ずそれぞれの力量に応じた地位を占め、彼らにゆだねられた任務を完成することができるのである。

エリアブは、サムエルの検査を受けて立ち去り、礼拝に出ていた六人の兄弟たちも次々と預言者に観察されたのであるが、主は、その中からはだれもお選びにならなかった。サムエルは、不安に心を痛めながら若者たちの最後の人を見た。預言者は、全く途方にくれた。彼は、エッサイに尋ねた。「あなたのむすこたちは皆ここにいますか」。父は答えた、「まだ末の子が残っていますが羊を飼っています」。サムエルは、彼を呼んでくるように指示して、「彼がここに来るまで、われわれは食卓につきません」と言った(同・一六ノ一一)。

ひとりで羊を飼っていたダビデは、預言者がベツレヘムに来て彼を呼んでいるという、使いの者の不意の招きに驚いた。彼は、イスラエルの預言者であり士師であるサムエルが、なぜ自分に会いたいのだろうか、驚いてたずねた。しかし、彼は、すぐに招きに応じた。「彼は血色のよい、目のきれいな、姿の美しい人であった」。サムエルは、このりっぱで男らしいけんそんな羊飼いの少年を満足げに見ていた。すると、主は預言者に、「立てこれに油をそそげ。これがその人である」と言われた(同・一六ノ一二)。ダビデは、羊飼いの日常の仕事をしながら、勇敢さと忠実さを実証した。そこで、神は、彼を神の民の指導者に選ばれたのである。「サムエルは油

の角をとって、その兄弟たちの中で、彼に油をそそいだ。この日からのち、主の霊は、はげしくダビデの上に臨んだ」（同・一六ノ一三）。預言者は、ゆだねられた務めを果たして安心してラマへ帰った。

サムエルは、エッサイの家族にさえ、彼が来た用向きを知らせなかった。そして、ダビデに油を注ぐ式は、秘密のうちに行なわれた。これは若者に大きな運命が待っていることを暗示した。このことは、後になって、彼があらゆる種類の経験や危険に会いながらも、彼の生涯によって神が成し遂げようとされた神のみこころへの忠誠を彼に促すためであった。

ダビデには大きな栄誉が与えられたが、高慢にならなかった。彼は、高い地位に着くことになったが、静かに自分の職業を続け、主が、ご自身のときと方法によって主の計画を進められるのを待つて満足していた。羊飼いの少年は、油を注がれる前と同じけんそんな気持ちで、山にもどって、以前と同様に羊の群れをやさしく見守り保護した。しかし、彼は新しく靈感を受けて曲を作り、たて琴をかなでた。彼の前には、豊かで種々さまざまの美に満ちたけしきが展開された。ふさふさと実をつけたぶどうの木が、日の光に輝いていた。青葉をつけた森の木々がそよ風に揺れていた。花婿がその祝いのへやから出てくるように、また勇士が競い走るように、太陽があかかと空に輝いて上ってくるのを彼は見た。また、空高くそびえ立つ山々の頂があった。はるか遠方には、モアブの不毛の山々のがけが、壁のように連なっていた。こうしたすべてのものの上に澄みきった青空が広がっていた。そして、その向こうに神がおられた。彼は、神を見ることはできなかった。しかし、神が造られたものは神に対する賛美にあふれていた。太陽の光は、森や山、野や小川を照らし、あらゆるよい贈り物、あらゆる完全な賜物の与え主である光の父を心に思わせた。日ごとに創造主の品性と威光の啓示に接した若い詩人の心は、賛

美と歓喜に満たされた。ダビデの心の能力は、神と神のみわざを瞑想しているうちに、彼の将来の仕事のために啓発され強められた。彼は、日ごとに神と深く交わった。彼の心は、常に彼の歌に靈感を与え、彼のたて琴にメロディーを呼び起こす新しい主題を、深くさぐっていた。彼の豊かな歌の調べは、天の使いたちの歓喜の歌に応じるかのように、空気をふるわせ、山々に反響した。

いったいだれがこうした寂しい山の中の長年の苦勞と放浪の結果を知ることができよう。自然と神との交わり、羊たちの世話、危険と救出、悲哀と歓喜、低い境遇などは、ダビデの品性を形成し、彼の後の生涯に影響を与えただけではなかった。それは、イスラエルの美しい詩人の詩篇として書き残されて、その後のすべての時代の神の民の心に愛と信仰を呼び起こし、すべての被造物に命を与えられた主の愛の心に、彼らを近づけているのである。

青春の美と活気に満ちていたダビデは、地の高貴な人たちと同じ高い地位に着く準備をしていた。彼の才能は、神からの尊い賜物として、与え主であられる神の栄光を賛美するために用いられた。彼の熟考と瞑想の機会は、彼の知恵と敬神の念をいよいよ豊かにし、彼を神と人から愛される者にした。彼は、創造主の完全さを瞑想することによって、神のことをはつきりと理解することができたのである。不明瞭な問題は明らかにされ、困難なことは平易にされ、混乱の中に調和が見いだされていき、新しい光が与えられるたびに、彼は歓喜の声をあげ、神と贖い主の栄光に対して美しい献身の歌をうたった。彼を感動させた愛、彼を悩ました悲哀、彼の得た勝利などは、みな、彼の活発な心の主題であった。そして、彼が自分の生涯のすべての摂理の中に、神の愛をながめたと、彼の心は熱烈な賛美の感謝に脈打ち、彼の口からはさらに美しい旋律が流れ、たて琴は歓喜にあふれてかき

ならされた。こうして、羊飼いの少年は、力から力へ、知識から知識へと進んでいった。それは、神の霊が彼と共におられたからである。

第 63 章

ダビデとゴリアテ

本章は、サムエル記上一六ノ一四 二三、一七章に基づく。

サウル王は、自分が神に拒否されたことを認めた。そして、預言者が彼に対して言った非難の言葉の力強さを感じたときに、彼は、激しい反逆と絶望感に満たされた。高慢な王を屈服させたのは、真の悔い改めではなかった。彼は、自分の罪の憎むべき性質を明らかに悟らなかつた。そして、自分の生活の改革に努力しようとはせず、イスラエルの王座から彼を追ひ、継承権を彼の子孫から奪つたことを彼は神の不法行為であると考えて、憂いに沈んだ。彼は、自分の家にもたらされる破滅のことばかり考えていた。彼は、自分が敵と戦つたときにあらわした勇気が、不服従の罪を償うものと考えた。彼は、心を低くして、神の懲らしめを受け入れなかつた。しかし、彼の高慢な心は絶望的になり、今にも理性を失いそうになつた。王の家来たちは、美しい楽の音によつて王の心の悩みを和らげようとして、巧みに音楽を奏する者を捜し出すように勧告した。ダビデは琴をひくことが巧みであつたので、神の摂理によつて王の前に召し出された。天の靈感による彼の気高い旋律は、期待したとおりの効果があつた。黒雲のようにサウルの心をおおつた陰うつさが、不思議にも取り除かれた。

ダビデは、サウルの宮廷の務めがないときには、高原の自分の羊群のところへ帰って、彼の心と態度の単純さを持ち続けていた。彼は、必要なときには、いつでも王の前に召し出されて、悪霊が王を去るまで彼の悩む心をなだめるのであった。サウルは、ダビデと彼の音楽を楽しんでいるけれども、若い羊飼いは王宮から自分の牧場のある野や山へ帰って、ほっとしたうれしさを味わうのであった。

ダビデは、ますます神と人から愛された。彼は、主の道を歩くように教えられていたが、ここで、これまで以上に、もっと神のみこころを行なおうと決心した。彼は、新しい主題について考えていた。彼は、王の宮廷に入りして、王の責任がどんなものであるかを悟った。彼は、サウルの魂を悩ます誘惑を見だし、イスラエルの最初の王の性格と行状の秘密を見抜いた。彼は、王の栄光が悲哀の暗雲におおわれるのを見、サウルの一族の家庭生活が、幸福なものでないことを知った。イスラエルの王として油を注がれたダビデにとって、こうしたことはすべて心配の種であった。しかし、彼は、物思いに沈み、心が苦しくなると、琴をかきならしてすべてのよい物の与え主であられる神のことを考えるのであった。こうして、彼の将来をかげらせるように思えた暗黒が消えるのであった。

神は、ダビデに信頼という教訓を与えておられた。主は、モーセをその任務のために訓練されたように、エツサイのむすこに神の選民の指導者になる準備を与えておられた。彼は、自分の羊群の世話をしながら、偉大な牧者であられる主が、彼の牧場の群れを養われることを理解した。

ダビデが、羊群を連れて放浪した寂しい山や険しい谷間には、野獣が横行していた。ヨルダンの茂みからライオンが出てきたり、山のほら穴から腹をへらしてどう猛になった熊が出てきて、羊群を攻撃することもよくあっ

た。ダビデがそのころの習慣に従って持っていた武器は、石投げと羊飼いのつえだけであった。しかし、彼は、早くからゆだねられたものを保護する能力と勇氣を持っていたことを示した。後に彼は、こうしたできごとについて言った。「しもべは父の羊を飼っていたのですが、しし、あるいはくまがきて、群れの小羊を取った時、わたしはそのあとを追って、これを撃ち、小羊をその口から救いできました。その獣がわたしにとびかかってきた時は、ひげをつかまえて、それを撃ち殺しました」(サムエル記上二七ノ三四、三五)。ダビデは、こうした経験に会ってその心がためされ、勇氣と堅忍不拔の精神と信仰とが強められていった。

ダビデは、サウルの宮廷に召される以前から、勇敢な行動によって頭角を現わしていた。彼を王のところに連れてきた士官は、彼のことを「勇氣もあり、いくさびとで、弁舌にひいで、…また主が彼と共にあられます」と言った(同・一六ノ一八)。

イスラエルがペリシテ人に宣戦を布告したとき、エッサイの三人のむすこたちは、サウルの軍に加わった。しかし、ダビデは、家に残っていた。ところが、しばらくたつて、ダビデはサウルの陣営をたずねた。彼は、父の命によって、兄たちのところへ伝言と贈り物を持っていき、彼らが安全で元氣かどうかを見とどけてくることになった。父のエッサイには、何もわからなかったが、年若い羊飼いには、さらに大きな任命が託されていたのである。イスラエル軍は危機にひんしていた。そして、ダビデは、自分の国を救うために天使に導かれていたのである。

ダビデが軍隊に近づくと、今にも戦いが始まるような騒がしい物音がした。「軍勢は、ときの声をあげて戦線に出ようとしていた」(同・一七ノ二〇)。イスラエル人とペリシテ人とは戦列を敷いて両軍が向き合っていた。

ダビデは、兄たちのところへ走って行って、彼らの安否を尋ねた。彼が兄たちと話していると、ペリシテ人の勇士ゴリアテが現われ、無礼な言葉でイスラエルに戦いをいどみ、彼と一騎打ちをする者を出せと言った。彼は、くりかえして戦いをいどんだ。ダビデは、すべてのイスラエル人が恐怖に満ちているのを見た。そして、ペリシテ人の挑戦を毎日耳にしながらも、だれひとり高慢なゴリアテを沈黙させる勇士が現われないのを知って、ダビデは奮起した。彼は、生ける神の誉れと神の民の名誉を保つ熱心に燃え立った。

イスラエルの軍勢は、意気消沈していた。彼らは望みを失っていた。彼らは互いに言った。「あなたがたは、あの上ってきた人を見たか。確かにイスラエルにいどむために上ってきたのだ」(同・一七ノ二五)。ダビデは、恥と怒りをいだいて叫んだ、「この割礼なきペリシテびとは何者なので、生ける神の軍をいどむのか」(同・一七ノ二六)。

ダビデの一番上の兄のエリアブは、彼のこの言葉を聞いて、若者が何を感じ、何に心を動かされているのかを知った。ダビデは、羊飼いをしているときでさえ、まれに見る勇氣と力を表わした。また、サムエルが彼らの父の家を訪れ、黙って帰っていったので、いつたい彼はなんのために来たのかという疑念を兄弟たちにいだかせた。彼らは、ダビデがほかの者よりも榮譽を受けたのを見て、彼をねたみ、彼の誠実さと柔和な気持ちに対して、当然払うべき尊敬と愛を示さなかった。彼らは、ダビデを年若い羊飼いにすぎないと考えた。そしてエリアブは、この質問をペリシテの巨人を沈黙させるために何もしない自分の臆病に対する非難であると取ったのである。兄は、怒って言った。「なんのために下ってきたのか。野にいたはずかの羊はだれに託したのか。あなたのわがままと悪い心はわかっている。戦いを見るために下ってきたのだ」(同・一七ノ二八)。ダビデは、尊敬と堅い決心

をもって答えた。「わたしが今、何をしたというのですか。ただひと言いっただけではありませんか」(同・一七ノ二九)。

ダビデの言葉は王に伝えられて、王は、彼を召し寄せた。「だれも彼のゆえに気を落してはなりません。しもべが行ってあのペリシテびとと戦いましょう」という羊飼いの言葉を聞いて王は驚いた(同・二七ノ三二)。サウルは、ダビデの企てを思いとどまらせようとしたが、彼は動かなかった。彼は、父の羊群を守っていたときに起こったことを簡単に飾らずに話した。「ししのつめ、くまのつめからわたしを救い出された主は、またわたしを、このペリシテびとの手から救い出されるでしょう」。サウルはダビデに言った、「行きなさい。どうぞ主があなたと共におられるように」(同・一七ノ三七)。

イスラエルの軍勢は、四十日間もペリシテの巨人のこう慢な挑戦に震えていた。彼らは、身のたけが六キュビト半(約三メートル)もある巨大な姿を見ておじけづいた。彼は頭に青銅のかぶとをかぶり、身には重さ五千シケルのよるいを着ていた。また足には青銅のすね当てを着けていた。このよろいは、青銅の板をうるこのように重ねたもので、どんなやりや矢も通さないように細かく結び合わされていた。巨人は、肩には青銅の投げやりを背負っていた。「手に持っているやりの柄は、機の巻棒のようであり、やりの穂の鉄は六百シケルであった。彼の前には、盾を執る者が進んだ」(同・一七ノ七)。

ゴリアテは、朝夕、イスラエルの陣営に近づいて、大声で言った。「『なにゆえ戦列をつくって出てきたのか。わたしはペリシテびと、おまえたちはサウルの家来ではないか。おまえたちから、ひとりを選んで、わたしのところへ下ってこさせよ。もしその人が戦ってわたしを殺すことができたなら、われわれはおまえたちの家来となる。』

しかしわたしは勝つてその人を殺したら、おまえたちは、われわれの家来になって仕えなければならない』。またこのペリシテびとは言った、『わたしは、きょうイスラエルの戦列にいどむ。ひとりを出して、わたしと戦わせよ』(同・一七ノ八 一〇)。

サウルは、ダビデがゴリアテの挑戦を受けることを許したけれども、ダビデがこの勇敢な企てに成功するとはとうてい望めなかった。若者に、王自身のよろいを着せるように命令が出された。青銅の重いかぶとが彼の頭にかぶせられ、彼のからだにはよろいが着せられた。また、王のつるぎも帯びさせられた。こうして、彼は武器を整えて戦いに出かけたのであるが、まもなく引き返してきた。初めかたずをのんで見ていた人々は、ダビデがとうてい勝ちめのない大敵に手向かって命を捨てるのをやめたのだと思った。しかし、勇敢な青年は、それとは全く別のことを考えていた。彼は、サウルのところにもどってきて、重い武器を脱がせてほしいと願って言った。

「わたしはこれらのものを着けていくことはできません。慣れていないからです」(同・一七ノ三九)。彼は、王のよろいを脱ぎ、ただ羊飼いのつえと袋と簡単な石投げを持って行っただけであった。彼は、谷間からなめらかな石を五個選んで持っていた袋に入れ、手に石投げを持ってペリシテ人に近づいた。巨人は、イスラエルの最も強い勇士と対戦することを期待して、大またに進んできた。盾を執る者が彼の前に進んだ。彼に対抗することができる者は、だれもないように思われた。彼が、ダビデに近づいてみると、ダビデはまだ若々しい少年にすぎないことがわかった。ダビデの顔は健康で血色がよく、彼のよろいを着ていないからだは、がっちりしていて身軽で有利にみえた。しかし、若々しいダビデの姿と、ペリシテ人の巨大な体格とは、著しい対照であった。

ゴリアテは、驚きと怒りに満ちた。「つえを持って、向かってくるが、わたしは犬なのか」と彼は叫んだ(同

・一七ノ四三)。そして、彼は、自分の知っているすべての神々の名によって、恐ろしいのろいの言葉をダビデに浴びせた。彼は、あざわらって叫んだ。「さあ、向かってこい。おまえの肉を、空の鳥、野の獣のえじきにくれよう」(同・一七ノ四四)。

ダビデはペリシテ人の勇士の前に、ひるまなかった。彼は進みよって敵に言った。「おまえはつるぎと、やりと、投げやりを持って、わたしに向かってくるが、わたしは万軍の主の名、すなわち、おまえがいどんだ、イスラエルの軍の神の名によつて、おまえに立ち向かう。きょう、主は、おまえをわたしの手にわたされるであらう。わたしは、おまえを撃つて、首をはね、ペリシテびとの軍勢の死かばねを、きょう、空の鳥、地の野獣のえじきにし、イスラエルに、神があられることを全地に知らせよう。またこの全会衆も、主は救を施すのに、つるぎとやりを用いられないことを知るであらう。この戦いは主の戦いであつて、主がわれわれの手におまえたちを渡されるからである」(同・一七ノ四五 四七)。

彼の語調には豪胆さのひびきがあり、彼のりっぱな面持ちには、勝利と歓喜の色があつた。よく通る音楽のよくな声で語られたこの言葉は、空に鳴り響き、戦いに召集された幾千の者にはつきりと聞きとれた。ゴリアテの怒りはその極に達した。彼は激しい怒りに燃えて、彼のひたいを保護していたかぶとを押し上げて、敵に恨みを晴らすと走りよつた。エッサイのむすこは、敵に立ち向かう用意ができていた。「そのペリシテびとが立ちあがり、近づいてきてダビデに立ち向かつたので、ダビデは急ぎ戦線に走り出て、ペリシテびとに立ち向かつた。ダビデは手を袋に入れて、その中から一つの石を取り、石投げで投げて、ペリシテびとの額を撃つたので、石はその額に突き入り、うつむきに地に倒れた」(同・一七ノ四八、四九)。

両軍の兵隊たちは驚いた。彼らは、ダビデが殺されるものと思い込んでいた。しかし、石が宙に飛んで、目標に的中したときに、彼らは、大きな勇士がちょうど突然に撃たれて目がくらんだように、震えおののいて両手を上げるのを見た。巨人は、かしの木が倒れるように揺れ動いて、地に伏した。ダビデは、一瞬もためらわなかった。彼は、ペリシテ人のうつぶしたからだの上に飛びかかり、そのゴリアテの重い剣を両手でつかんだ。巨人は、ついさきほど、そのつるぎで青年の首を切つて、彼のからだを空の鳥に与えると豪語した。ところがそのつるぎが、今、高く振り上げられて、豪語した者の首は切り落とされ、そして、イスラエルの軍勢には、歓喜の叫びが起こったのである。

ペリシテ人は、恐怖に襲われ、あわてふためいて退却しだした。ヘブル人の勝利の叫びは山々にひびきわたり逃走する敵を追跡した。彼らは、「ペリシテびとを追撃し、ガテおよびエクロンの門にまで及んだ。そのためペリシテびとの負傷者は、シャライムからガテおよびエクロンに行く道の上に倒れた。イスラエルの人々はペリシテびとの追撃を終えて帰り、その陣営を略奪した。ダビデは、あのペリシテびとの首を取ってエルサレムへ持つて行ったが、その武器は自分の天幕に置いた」(同・一七ノ五二―五四)。

第 64 章

サウル、ダビデを追う

本章は、サムエル記上二八 二二章に基づく。

サウルは、ゴリアテが倒れたあとも、ダビデを自分のところにおき、彼が父の家に帰ることを許さなかった。

そして、「ヨナタンの心はダビデの心に結びつき、ヨナタンは自分の命のようにダビデを愛した」（サムエル記上 一八ノ一）。ヨナタンとダビデは兄弟の契約を結んだ。ヨナタンは、「自分が着ていた上着を脱いでダビデに与えた。また、そのいくさ衣、およびつるぎも弓も帯も、そのようにした」（同・一八ノ四）。ダビデは重要な責任を負わせられたが、けんそんな気持ちを持続し、王家の愛情とともに国民の愛情をもかち得た。

「ダビデはどこでもサウルがつかわす所に出て行って、てがらを立てたので、サウルは彼を兵の隊長とした」（同・一八ノ五）。ダビデは慎重で忠実であった。そして、神の祝福が彼と共にあることが明らかであった。サウルは時おり、自分がイスラエルを統治するには不適任であることを自覚し、主の教えを受けた者が彼と共にいたならば、王国はもっと安定するだろうと考えた。サウルは、また、ダビデと関係を保つことによって、自分の身を守ろうと望んだ。ダビデは主に恵まれ守られていたから、彼を戦いに連れて出れば、彼がいることによってサウル

は保護されることであろうと思われた。

ダビデとサウルの関係は、神の摂理によるものであった。ダビデの宮廷における地位は、彼に国務の知識を与え、将来彼が偉大な王になるよい準備となった。こうして、彼は国民の信任を得たのであった。彼は、サウルに憎まれてさまざまな苦難と困難を経験したが、それによって、彼は神によりすがり、全的に神に信賴するようになった。ヨナタンとダビデの友情も、また、神の摂理であって、将来のイスラエルの王の生命を救うためであった。神は、こうしたすべてのことにおいて、ダビデのため、ならびに、イスラエルの国民のために、その恵み深いみこころを行なっておられた。

しかし、ダビデに対するサウルの友情は、長く続かなかった。サウルとダビデが、ペリシテ人との戦いから帰ってきたときに、「女たちはイスラエルの町々から出てきて、手鼓と祝い歌と三糸の琴をもって、歌いつ舞いつ、サウル王を迎えた」(同・一八ノ六)。女たちの群れが、「サウルは千を撃ち殺し」と歌うと、別の群れがその歌に答えて、「ダビデは万を撃ち殺した」と歌った(同・一八ノ七)。王の心にしつと鬼がはいった。彼は、イスラエルの女たちが、彼よりもダビデをほめそやしたのを怒った。彼は、こうしたしつと心を押えないで、彼の品性の弱点を暴露して叫んだ。「ダビデには万と言い、わたしには千と言う。この上、彼に与えるものは、国のほかないではないか」(同・一八ノ八)。

サウルの性格の一大欠陥は、賞賛を愛する心であった。この特質が、彼の行動と思想を支配していた。何事においても、賞賛と自己賞揚を欲する気持ちがあらわれていた。彼の善悪の標準は、人々の賞賛という低い標準であった。まず第一に神を喜ばせようとせず、人間を喜ばせるために生活する人は安全ではない。サウルの野心は

人間から最高の賛辞を受けることであつた。そして、この賞賛の歌を聞いた王は、ダビデが人心を獲得し、彼に代わつて王になるにちがいないと思ひ込んだ。

サウルは、しつと心をいだいた。そして、彼の魂は、それに毒された。王は、預言者サムエルから、神がしよとされることは必ず実現し、何びともそれをはばみ得ないことを教えられていた。しかし、彼は、神の計画や神の力について、真の知識を持っていないことを明らかにした。イスラエルの王は、無限の神のみこころに反逆していた。サウルは、イスラエル王国を統治したが、自分の心を治めるべきことを学んでいなかった。彼は、衝動のままに物事を判断し、烈火のように怒り狂つた。彼は、感情を爆発させて、彼の意志に逆らう者を殺そうとするのであつた。彼は、こうした狂乱状態のあとで、意気消沈と自己嫌悪と後悔の念に襲われるのであつた。

彼は、ダビデのたて琴を聞くのが好きであつた。そして悪霊は、しばらく彼を離れたように思われた。しかしある日、ダビデが彼に仕えて、美しい楽の音に合わせて神を賛美していたときに、サウルは突然やりを投げて彼を殺そうとした。ダビデは、神の介入によつて助けられ、なんの危害も受けず、狂つた王の怒りをのがれることができた。

サウルのダビデに対する憎悪がつるにつれて、サウルはますますダビデの生命をとる機会をねらうようになった。しかし、主に油を注がれた者に対する彼の計画は、どれも成功しなかつた。サウルは、彼を支配している悪霊の命じるままになつた。しかし、ダビデは、大いなる助言者であり、力強い救済者であられる神に信頼した。「主を恐れることは知恵のもとである」(箴言九ノ一〇)。そして、ダビデは、神の前に正しく歩くことができるようにと、常に神に祈りをささげていた。

王は、彼の敵をそばに置くのを好まず、「ダビデを遠ざけて、千人の長とした」。イスラエルとユダのすべての人はダビデを愛した（サムエル記上―八ノ一三、一六）。人々は、ダビデが有能な人物であって、ゆだねられたことを賢く巧みに処理できることをすぐに認めた。若い彼の勧告は、賢明で思慮深いもので、人々が安心して従っていけるものであった。これに反して、サウルの判断は、時には信頼することができず、彼の決定は賢明でなかった。

サウルは常にダビデを殺す機会をねらっていたが、主が彼と共におられることが明らかであったので、彼を恐れていた。ダビデの非の打ちどころのない品性が、王を怒らせた。ダビデの生活と彼の存在そのものが、王に対する譴責であるように思われた。王自身の品性は、ダビデの品性と比較して見れば劣ってみえるのであった。サウルを悲惨に陥れ、彼の王国の国民のひとりの生命を危険にさらしたのは、ねたみであった。人の心のこの邪悪な特質が、この世界でなんと数多くの不幸をもたらしたことであろう。アベルの行為は正しく、神に喜ばれた。しかし、カインの行為は邪悪で、主の祝福を受けられなかった。そのため、カインは弟のアベルを憎んだ。それと同じ憎悪をサウルはいだいた。ねたみは、誇りから生じる。もし心にねたみをいだけば、それは憎悪となり、ついには、ふくしゅう、殺人を犯させることになる。なんの害も加えなかったダビデに対する激しい怒りをサウルにいだかせて、サタンは自分自身の本性を暴露したのである。

王は、ダビデに軽率で無分別な行動がないかとうかがって、彼をはずかしめようと嚴重に見張っていた。彼はダビデの生命を奪ったとしても、なお自分の悪行が国民の前で正当化されるのでなければ満足しなかった。彼はさらに、勢いよくペリシテ人と戦うことをダビデに勧め、その武勇の報賞として、王家のいちばん上の王女を妻

に与えることを約束して、彼をわなに陥れようとした。この申し出に対し、ダビデは、けんそんに答えて言った。「わたしは何者なのでしょう。わたしの親族、わたしの父の一族はイスラエルのうちで何者なのでしょう。そのわたしが、どうして王のむこになることができましょう」(同・一八ノ一八)。ところが、王は、王女を他の者にとつがせて、誠意のないことを示した。

サウルの末娘のミカルは、ダビデを愛した。それで、王は、これを機会にもう一度ダビデを陥れようとした。もしダビデが、一定の数の敵軍を打ち破って彼らを殺した証拠を持ってくるならば、ミカルが彼に与えられることになった。サウルは、彼を「ペリシテびとの手で殺そう」と思った(同・一八ノ一七)。しかし、神はそのしもべを守護された。ダビデは、戦いに勝って王の婿になるために帰ってきた。「サウルの娘ミカルはダビデを愛した」(同・一八ノ二〇)。こうして王は、殺してしまおうと思っていた相手を昇進させる結果に終わったことを見て憤激した。主が、サウルよりもすぐれた者、また彼に代わってイスラエルの王位につく者と言われたのはこの人にちがいないと、サウルははつきり悟ったのである。サウルは、彼の本心をあらわして、ヨナタンおよび王宮のすべての家来たちに、この憎いダビデの生命をとることを命じた。

ヨナタンは、王の考えをダビデに知らせ、彼に身を隠すように命じた。一方、彼は、イスラエルの救済者ダビデの命を救うように、父に訴えるつもりであった。彼は、ダビデが国家の榮譽と生命を維持するために行ったことを王に訴えた。そして、神が敵を退却させるために用いられた者を殺すということは、なんと恐ろしい罪であるかを語った。王の良心は動かされ、その心は和らげられた。「サウルは誓った、『主は生きておられる。わたしは決して彼を殺さない』」(同・一九ノ六)。ダビデは、サウルのところに連れて来られた。そして、これまでと

同様に、彼の前で仕えた。

イスラエルとペリシテ人の間には、ふたたび戦争が起こった。そしてダビデは、軍勢を引き連れて敵と戦った。ヘブル人は、大勝利を博し、国じゅうの人々は彼の知恵と勇壮な行爲をほめた。これは、サウルの以前の憎悪をかき立てることになった。ダビデが王の前で楽の音をかなで、宮中に美しい音楽を響かせていたときに、王は激情を押えることができず、ダビデにやりを投げつけて、彼を壁にくしざしにしようとしたのである。しかし主の使いが、その危険な武器を他にそらせた。ダビデは逃げて彼の家に帰った。サウルは、使者たちを送り、彼が朝出てくるところを捕えて殺そうとした。

ミカルは、父の意図していることをダビデに知らせた。彼女は、彼に父を避けて身の安全を計るように勧め、窓から彼をつりおろして逃がしてやった。彼は、ラマにいるサムエルのところにのがれた。そして、預言者は、王の立腹するのも恐れずに逃亡者を歓迎した。サムエルの家は、王の宮殿とは対照的に平和な場所であった。主に尊ばれたしもべサムエルが仕事を続けていたのは、山の中のこの場所であった。預言者の一群が彼と共にいた。彼らは、神のみ旨を綿密に研究していた。そして、サムエルのくちびるからもらえる教えの言葉にうやうやしく耳を傾けていた。ダビデがイスラエルの教師から学んだ教訓は、尊いものであった。ダビデは、サウルの軍勢がこの神聖な場所に侵入する命令を受けようとは信じられなかった。しかし、向こう見ずの王のくらんだ心に神聖な場所などはなかった。ダビデとサムエルとの結びつきは王のねたみを起こさせた。サウルは、イスラエル全国から神の預言者としてあがめられているサムエルが、彼の敵の昇進に力のかすのではないかと恐れた。王は、ダビデの居どころを知ると、使者たちを送って彼をギベアに連れ出し、そこで彼を殺す計画を実行しようとしていた。

使者たちは、ダビデの生命をとるために進んでいった。しかし、サウルよりも力のあるおかたが、彼らを支配した。彼らは、イスラエルをのろう途中にあったバラムと同様に、見えない天使の出迎えを受けた。彼らは、将来起こるできごとを預言し始め、主の栄えと威光とを宣言した。こうして、神は、人間の怒りを支配して、悪を抑制する神の力をあらわされた。他方、神は、神のしもべを天使たちによって取り囲み守護しておられた。

ダビデを手中におさめようと待ちかまえていたサウルにこの報告が伝えられた。しかし、彼は、神の譴責を感じるどころか、さらに激しく怒りに燃えて、別の使者たちを送った。この人々も神の霊に支配されて、最初の者といっしょになって預言した。王は、第三の使者たちを派遣した。しかし、彼らも預言者の仲間のところに来ると、神の霊が彼らに降下して預言した。サウルは、彼の激しい憎悪を抑制することができなくて、自分ででかけることにきめた。彼は、ダビデを殺す機会をこれ以上待つまいと決心した。もしダビデが手のとどくところに来たならば、サウルはどんな結果になろうと、彼を自分の手で殺そうとしていたのである。

しかし、神の天使が途中で彼を迎えて、彼を支配した。神の霊が、力強く彼を捕えた。彼は、預言したり聖歌をうたったりしながら、神に祈りつつ進んでいった。彼は、世界の救済者として来られるメシヤのことを預言した。彼がラマにある預言者の家に来ると、彼の地位のしるしであった上着を脱いだ。そして、彼は神の霊に動かされて、一日一夜、サムエルと彼の弟子たちの前に横たわった。人々は、この不思議な光景を見るために近づいてきた。王の経験したことは、国じゅうに広く伝えられた。こうして、サウルは、彼の治世の終わり近くで、彼もまた預言者の中にいたということが、イスラエルに言い伝えられた。

ふたたび、迫害者の計画は挫折した。彼は、ダビデと仲なおりをしたと確言したが、ダビデは、王の悔い改め

を信じなかった。彼は、王が以前と同様に心を変えろといけなかったので、この機会に逃亡することにした。彼は心に痛手を受けていたので、もう一度友人のヨナタンに会いたかった。彼は、自分になんの罪のおぼえもなかったので、王子ヨナタンを捜し求めて、涙ながらに訴えた。「わたしが何をし、どのような悪いことがあり、あなたの父の前にどんな罪を犯したので、わたしを殺そうとされるのでしょうか」(同・二〇ノ二)。ヨナタンは、彼の父が心を入れ替えて、もうダビデの生命を奪おうとしないと信じた。ヨナタンは彼に言った。「決して殺されることはありません。父は事の大小を問わず、わたしに告げないですることはありません。どうしても父がわたしにその事を隠しましょう。そのようなことはありません」(同・二〇ノ二)。ヨナタンは、こうした驚くべき神の力のあらわれのあとでもなお、父がダビデに害を加えるとは信じられなかった。なぜなら、それは、あきらかに神に対する反逆になるからであつた。しかし、ダビデは納得しなかった。彼は、熱誠こめてヨナタンに訴えた。「主は生きておられ、あなたの魂は生きています。わたしと死との間は、ただ一歩です」(同・二〇ノ三)。

イスラエルでは、月の始めに聖なる祭りが祝われていた。その祭りの日が、ダビデとヨナタンが顔を合わせた次の日になっていた。この祭りのときに、この青年たちは、ふたりとも王の食卓につくことになっていた。しかしダビデは、その席につくことを恐れた。それで、彼は、ベツレヘムの兄弟たちのところを訪問することにした。こうして、三日間、王の前から姿をかくしたあとで帰ってきたときに、彼は宴会場からあまり遠くない野原に身を隠していることにした。そしてヨナタンは、こうしたことがサウルにどんな影響を及ぼすかをうかがうのであつた。もし、エッサイのむすこはどこへ行ったのかと聞かれれば、彼は父の家の祭りに出るために家に帰りましてとヨナタンが言うことになっていた。もし、王が怒ったようすを見せず、「良し」と言うならば、ダビデは、

宮廷に帰っても安全であつた(同・二〇ノ七)。しかし、もし王がダビデの不在を怒るならば、彼は逃亡しなければならぬのであつた。

祭りの最初の日、王は、ダビデの不在について何も尋ねなかつた。しかし、二日めにも彼の席があいていたので、王は聞いた。『どうしてエッサイの子は、きのうもきょうも食事にこないのか』。ヨナタンはサウルに答えた、『ダビデは、ベツレヘムへ行くことを許してくださいと、しきりにわたしに求めました。彼は言いました、「わたしに行かせてください。われわれの一族が町で祭をするので、兄がわたしに来るようにと命じました。それでもし、あなたの前に恵みを得ますならば、どうぞ、わたしに行くことを許し、兄弟たちに会わせてください」。それで彼は王の食卓にこなかつたのです』(同・二〇ノ二七 二九)。この言葉を聞いたとき、サウルは怒りを押えることができなかった。王は、ダビデが生きているかぎり、ヨナタンの王位継承は不可能であると言つた。そして、すぐにダビデを呼び出して殺すように命令した。ヨナタンは、ふたたび友のためにとりなして言つた。「どうして彼は殺されなければならないのですか。彼は何をしたのですか」(同・二〇ノ三二)。こうした訴えは、王を悪魔のように激怒させるだけであつた。そして、王は、ダビデを殺すために用意したやりを、今度は自分のむすこに投げつけた。

ヨナタンは悲しみと怒りに満ちて、王の前を去り、その後は王と祭りの食事を共にしなかつた。彼は悲しみに打ちひしがれて、王のダビデに対する考えを、彼に知らせる場所に、約束の時間に出かけて行つた。彼らは、互いに首をいだいて激しく泣いた。王の激しい怒りが若者たちの生涯に暗い影を投げた。その深い悲しみは言葉では表現することができなかった。彼らがそれぞれの違った道を歩むために別れたときに、ヨナタンは決別の言葉



神の摂理の下に、ヨナタンとダビデは、堅い友情のちぎりを結んだ。こうして将来の王の生命は、サウルのねたみから守られた。

をダビデに言った。「無事に行きなさい。われわれふたりは、『主が常にわたしとあなたの間におられ、また、わたしの子孫とあなたの子孫の間におられる。』」（同・二〇ノ四二）。

王子はギベアに帰り、ダビデはほんの数マイルしか離れていなかったが、ベニヤミンに属していたノブの町へと急いだ。幕屋はシロからここへ移され、大祭司アヒメレクが、ここで奉仕していた。ダビデは、神のしもべのところ以外に、どこに隠れ場を求めて逃げてよいかわからなかった。祭司は、彼が心配と悲しみを顔に浮かべてあわただしくただひとりで来ているようすのを見て驚いた。祭司は、彼が、何の用でそこに来たのかと尋ねた。ダビデは、いつも、みつかるのではないかと恐れおののいていたので、この窮地にあつてうそをついた。彼は、急いで果たさなければならぬ秘密の任命を王からゆだねられて来たと祭司に言った。ここで、彼は、神を信じる信仰に欠けていたことをあらわした。そして、彼の罪のために大祭司は死ななければならなくなった。もしも彼が事実を明らかにしていたならば、アヒメレクは、自分の生命を保つために取るべき手段を知っていたことである。神は、どんな危機にあつても、神の民が真実であることを要求されるのである。ダビデは、祭司に五つのパンを求めた。神の人の手もとには聖別されたパンしかなかった。しかし、ダビデは彼がためらうのを説き伏せて、飢えを満たすためにパンを手に入れた。

さて、新しい危険が迫ってきた。ヘブル人の信仰を表明していたサウルの牧者の長ドエグが、礼拝の場所で誓いを果たしていた。ダビデはこの男を見たので、急いで他に隠れ場をさがすことにし、もし防御の必要が起こった場合に、自分を守るために武器を手に入れようとした。彼がアヒメレクに剣を求めると、幕屋に記念品として保存されていたゴリアテの剣のほか何もなかったことを知らされた。ダビデは答えた。「それにまさるものはありま

せん。それをわたしにください」(同・二二ノ九)。彼は、自分が以前にペリシテ人の勇士を殺すために用いた剣をにぎって勇気がよみがえった。

ダビデは、ガテの王アキシのところに逃げた。サウルの領内よりは、イスラエルの敵国の中のほうが安全であると彼は思った。しかし、ダビデは、幾年か前にペリシテ人の勇士を倒した人であることがアキシに伝えられた。そこでイスラエルの敵国に難を避けた者は、一大危機に陥った。ところがダビデは、気が狂ったまねをして、敵を欺き、逃げ出すことができた。

ダビデの第一の誤りは、ノブで神を信頼しなかったことである。第二の誤りは、アキシを欺いたことである。ダビデは、品性の気高さをあらわし、彼の道徳的価値は国民の愛情をかち得た。しかし、試練に出会ったときに彼の信仰は揺らぎ、人間的弱点を暴露した。彼は、だれを見ても、その人が密偵であるかまたは裏切り者であるかと思った。彼は、一大危機において、信仰の目をすっかり天に向けて神を仰ぎ、ペリシテの巨人を倒したのであった。彼は、神を信じ、神の名のもとに出て行つた。しかし敵に追われ、迫害されたときに、困惑と苦悩のために彼の天の父を見失ってしまうばかりであった。

しかし、この経験はダビデに知恵を与えたのである。それは、彼に自己の弱さを自覚させ、常に神に信頼する必要を感じさせた。失望または落胆した魂に働きかけ、気落ちした者を励まし、衰えた者を強め、試練の中にある主のしもべたちに勇気と力を与える神の霊のお働きはなんと尊いことであろう。また、われわれの神は、なんという神であろう。神は、誤つた者をやさしく扱い、われわれが逆境または、大きな悲しみに圧倒されているときにも忍耐深くあわれんでくださるのである。

神の子供たちの失敗は、みな彼らの信仰の欠如が原因である。魂が暗黒におおわれ、光と指導が必要になったときには、見上げなければならない。暗黒のかたに光がある。ダビデは、一瞬でも神に対する信頼を失ってはならなかった。彼は、神に信頼する十分の理由があった。彼は、主に油を注がれていた。そして、危険のさ中であつて、神の天使に守護されていたのである。彼は驚くべきことを行なう勇氣が与えられていたのである。そして、彼が、自分の置かれた窮地から目を離して、神の力と威光とを考えさえしたならば、彼は死の陰のさなかにあつても、平安を保つことができたのである。彼は確信をもつて、主の約束をくりかえすことができたのである。「山は移り、丘は動いても、わがいつくしみはあなたから移ることなく、平安を与えるわが契約は動くことがない」(イザヤ書五四ノ一〇)。

ダビデはユダの山の中で、サウルの追跡を避けていた。彼は、アドラムのほら穴へ逃げた。ここはわずかの人数で、大きな軍勢を防ぐことができた。「彼の兄弟たちと父の家の者は皆、これを聞き、その所に下つて彼のもとにきた」(サムエル記上二二ノ一)。ダビデの家族の者は、サウルがいつなんどきダビデの家族だということとどんな不合理な疑いをかけてくるかわからなかった。安心しておられなかった。彼らは、もう、イスラエル国内に広く知られるようになったこと、すなわち、ダビデが神の民の将来の王として選ばれたことを知っていた。そして、たとえ彼が寂しいほら穴にいる逃亡者であつても、ねたみ深い王の狂気にさらされているよりは、彼と共にいるほうが安全であると信じたのである。

アドラムのほら穴で、家族は同情と愛に結ばれた。エッサイのむすこは、楽の音に合わせて歌うのであつた。「見よ、兄弟が和合して共にいるのはいかに麗しく楽しいことであろう」(詩篇一三三ノ一)。彼は、自分の兄弟

たちに信用されないつらさも味わったことがあった。不和に代わって和合が実現したことをダビデは心から喜んだ。ダビデは、ここで詩篇第五七篇を作った。

その後間もなく、王の苛酷な要求から逃げようとする人々が、ダビデの一隊に加わった。多くの者は、イスラエルの王に対する信頼を失っていた。彼らは、すでに王が神の霊に導かれていないのを見ることができたからである。「しえたげられている人々、負債のある人々、心に不満のある人々も皆」ダビデのところに来た。「彼はその長となった。おおよそ四百人の人々が彼と共にあった」(サムエル記上二二ノ二)。ここでダビデは、彼自身の小王国を持った。そして、それは、秩序整然としたものであった。しかし、この山中の隠れ家にあつても、彼は心安まるひまがなかった。王はなお彼を捜し求めて、殺そうとしていることが明らかだったからである。

彼は、両親のための隠れ家をモアブの王のところに見つけた。それから彼は主の預言者から危険の警告を受けて彼の隠れ家を去って、ハレテの森へ行つた。ダビデのこうした経験は、不必要で無益なものではなかった。神は、彼が正しく恵み深い王であるとともに、賢明な將軍になるための訓練を与えておられた。彼は、一団の逃亡者たちと共に住んで、サウルが凶悪な殺意と盲目的無分別のために全く不適格になつてしまったその仕事につく準備を与えられていた。人間が神の勧告を離れるならば、正義と分別をもつて行動する冷静さと知恵を保つことができなくなる。神の知恵の指導を仰がないで、人間の知恵に従うことほど恐ろしく、絶望的狂気はない。

サウルは、アドラムのほら穴で、ダビデをわなにかけて捕えようとしていた。ところが王は、ダビデがこの隠れ家を去ったことを知って、非常に怒った。サウルは、どうしてダビデが逃亡したのかわからなかった。これは必ず陣営の中に裏切り者がいて、王の接近と計画とをエッサイのむすこに知らせたとしか考えられなかった。

彼は、自分に対する謀叛が起こったにちがいないと家来たちに告げ、多くの報賞と名誉ある地位を約束して、彼の国民のうちでだれがダビデの味方になったかを聞き出そうとした。エドム人のドエグが通報者になった。彼は、野心と貪欲に動かされるとともに、彼の罪を責めた祭司に対する憎悪とから、ダビデがアヒメレクを訪問したことを知らせ、神の人に対してサウルを激怒させるような言い方をした。あの邪悪な舌の言葉は、地獄の火を燃やし、サウルの心の最も醜い感情をかき立てた。彼は怒り狂って、祭司の全家族に死刑を宣告した。そして、その恐ろしい命令は執行された。アヒメレクだけでなく、彼の父の家族の者たち、「亜麻布のエポデを身につけている者八十五人」が王の命令のもとに、ドエグの手によって殺された(同・二二ノ一八)。

「彼はまた、つるぎをもつて祭司の町ノブを撃ち、つるぎをもつて男、女、幼な子、乳飲み子、牛、ろば、羊を殺した」(同・二二ノ一九)。サタンに支配されたサウルには、こうしたことができたのである。アマレク人の罪悪が満ちて、神が彼らを全滅させるように命令されたときに、サウルは彼らをあわれんで神の命令に従わず、滅ぼすべきものを残しておいた。しかし、今度、神の命令ではなく、サタンに支配されていたときには、主の祭司たちを殺し、ノブの住民を全滅させることができたのである。神の指導を拒む人間の心は、このように邪悪なのである。

この行為によって、イスラエル全土は恐怖に満ちた。この虐殺を行なったのは、彼らの選んだ王であって、彼は、神を恐れない他国の王のすることをまねたに過ぎなかった。契約の箱は彼らのところにあった。しかし、彼らが問うことにしていた祭司たちは、剣に倒れた。次に何が起こるのであろうか。

ダビデの寛容

本章は、サムエル記上二二ノ二〇 二三、二三 二七章に基づく。

サウルが、主の祭司たちを虐殺したあとで、「アヒトプの子アヒメレクの子たちのひとりで、名をアビヤタルという人は、のがれてダビデの所に走った。そしてアビヤタルは、サウルが主の祭司たちを殺したことをダビデに告げたので、ダビデはアビヤタルに言った、『あの日、エドムびとドエグがあそこにいたので、わたしは彼がきつとサウルに告げるであろうと思った。わたしがあなたの父の家の人々の命を失わせるもとなつたのです。あなたはわたしの所にとどまってください。恐れることはありません。あなたの命を求める者は、わたしの命をも求めているのです。わたしの所におられるならば、あなたは安全でしょう』」(サムエル記上二二ノ二〇 二三)。

ダビデは、まだ王に追われていたので、休息と安全の場所はなかった。ケイラにおいて、彼の勇敢な部隊は、ペリシテ人の襲撃から町を救ったが、こうして彼らが救い出した人々の中にあつても安全ではなかった。彼らはケイラからジフの荒野へ行つた。

このころ、ダビデの行く手には光明がほとんどなかったが、彼の隠れ家を知ったヨナタンが、思いがけなく訪

れて来て、彼を喜ばせた。このふたりの友が互いに話し合った時間は実に貴重なものであった。彼らは、互いの経験を話し合った。ヨナタンは、ダビデを励まして言った。「恐れるにはおよびません。父サウルの手はあなたに届かないでしょう。あなたはイスラエルの王となり、わたしはあなたの次となるでしょう。このことは父サウルも知っています」（同・二三ノ一七）。彼らは、神が不思議な方法でダビデを扱っておられることを話し合い、追われる身のダビデは、非常に勇気づけられた。

「こうして彼らふたりは主の前で契約を結び、ダビデはホレシにとどまり、ヨナタンは家に帰った」（同・二三ノ一八）。

ダビデは、ヨナタンの訪問を受けたあとで、賛美の歌をうたって自分を励ました。彼はたて琴の調べに合わせ歌った。

「わたしは主に寄り頼む。

なにゆえ、あなたがたはわたしにむかって言うのか、

『鳥のように山にのがれよ。

見よ、悪しき者は、暗やみで、

心の直き者を射ようと弓を張り、

弦に矢をつがえている。

基が取りこわされるならば、

正しい者は何をなし得ようか」と。

主はその聖なる宮にいまし、主のみくらは天にあり、

その目は人の子らをみそなわし、

そのまぶたは人の子らを調べられる。

主は正しき者をも、悪しき者をも調べ、

そのみ心は乱暴を好む者を憎まれる」。

(詩篇一一ノ一 五)

ダビデは、ケイラからジフ人の荒野へ行つたが、この人々は、ダビデが隠れているところを、ギベアのサウルに知らせ、そのかくれがまで王を案内すると進言した。しかし、ダビデは、彼らが陰謀を企てていることを聞いて、その居どころを変更し、マオンと死海の間に避難所をさがした。

また、人々は、サウルに告げて言った。「ダビデはエンゲデの野にいます」。そこでサウルは、全イスラエルから選んだ三千の人を率い、ダビデとその従者たちとを捜すため、『やぎの岩』の前へ出かけた(サムエル記上二四ノ一、二)。サウルが、三千の軍勢を率いて迫ってくるのに対して、ダビデはわずか六百しか率いていなかった。ダビデと彼の部下たちは、人里離れたほら穴の中で、どうしたらよいか、神の指示を待っていた。するとサウルは、山道を進んでいく途中で、ただひとり横道にそれて、ダビデと従者たちが隠れていたほら穴にはいつてきた。これを見たダビデの従者たちは、ダビデにサウルを殺すように勧めた。彼らは、王が彼らの手中に陥ったのは、

神ご自身が敵を彼らの手に渡して、殺させるようにされたものと解釈した。ダビデもそう考えるように試みられた。しかし、良心の声が彼に語って、言った。「主が油を注がれた者に手をのべるのはよくない」。

ダビデの従者たちは、サウルをそのままにしておくことを承知しないで、ダビデに神の言葉を思い起こさせて言った。「主があなたに告げて、「わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。あなたは自分の良いと思うことを彼にすることができると言われた日がきたのです」。そこでダビデは立って、ひそかに、サウルの上着のすそを切った」(同・二四ノ四)。しかし、ダビデはあとで、王の上着を切ったことを心に責められた。

サウルは立ち上がって、搜索を続けるためにほら穴を出た。すると彼は、「わが君、王よ」と呼ぶ声を聞いて驚いた(同・二四ノ八)。彼がふりかえって、だれであろうかと思ってみると、それは、長い間彼が捕えて殺そうとしていたエッサイのむすこであった。ダビデは、彼を自分の主人と仰いで、王の前にひれふした。そして、サウルに次のように言った。「どうして、あなたは『ダビデがあなたを害しようとしている』という人々の言葉を聞かれるのですか。あなたは、この日、自分の目で、主があなたをきょう、ほら穴の中でわたしの手に渡されたのをごらんになりました。人々はわたしにあなたを殺すことを勧めたのですが、わたしは殺しませんでした。『わが君は主が油を注がれた方であるから、これに敵して手をのべることはしない』とわたしは言いました。わが父よ、ごらんなさい。あなたの上着のすそは、わたしの手にあります。わたしがあなたの上着のすそを切り、しかも、あなたを殺さなかったことによつて、あなたは、わたしの手に悪も、とがもないことを見て知られるでしょう。あなたはわたしの命を取ろうと、ねらっておられますが、わたしはあなたに対して罪をおかしたことはないのです」(同・二四ノ九 一一)。



眠っていたサウル王を見て、ダビデの部下たちは、彼を殺すように勧めたが、ダビデは主に油注がれた者に対して手を上げることがしないで、ただ彼の水筒とやりを持ち去った。

サウルは、ダビデの言葉を聞いて非常に恥じ入り、その真実なことを認めないわけにいかなかった。彼は、自分がつけねらっていた者の手中に完全に陥っていたことを認めて、深く心を動かされた。ダビデは、自分にはなんの罪もないという自覚をもって、王の前に立っていた。サウルは心を和らげて、叫んだ。「わが子ダビデよ、これは、あなたの声であるか」(同・二四ノ一六)。そしてサウルは声をあげて泣いた。サウルは、またダビデに言った。「あなたはわたしよりも正しい。わたしがあなたに悪を報いたのに、あなたはわたしに善を報いる。…人は敵に会ったとき、敵を無事に去らせるでしょうか。あなたが、きょう、わたしにした事のゆえに、どうぞ主があなたに良い報いを与えられるように。今わたしは、あなたがかならず王となることを知りました」(同・二四ノ一七 二〇)。そして、ダビデはそういうときが来たならば、サウルの家に恵みを施し、彼の名を滅ぼし去らないということをサウルに誓った。

ダビデは、サウルのこれまでのことを知っていたので、王の確証の言葉を信頼することはできなかった。また彼の悔い改めも長く続くとは思わなかった。こうして、サウルは家に帰り、ダビデは山の要害に残っていた。

サタンの力に服した人々が、神のしもべたちに対していなく敵意が、時には、和解と好意の感情に変わることもある。しかし、この変化は長続きしないのが常である。悪い心を持った人々が、主のしもべたちに対して、悪いことを言ったり行なったりしたあとで、自分たちの誤りを深く悟ることがある。主の聖霊が彼らの心に働いた結果、彼らは、神と、彼らが敵対して戦った人々の前にへりくだり、彼らに対する行動を変更することがある。しかし、彼らが再び悪魔のささやきに耳を傾けると、以前の疑惑と敵意が再び頭をもたげ、悔い改めて、一時捨てていた同じ活動を再開する。彼らは、自分たちが平身低頭して罪を告白したその同じ人々を、再び激しく責め

非難してのしるのである。彼らは、さらに大きな光に対して罪を犯したために、サタンはこうした行動後の彼らを以前よりも大いなる力で活用することができる。

「さてサムエルが死んだので、イスラエルの人々はみな集まって、彼のためにひじょうに悲しみ、ラマにあるその家に彼を葬った」(同・二五ノ一)。サムエルの死は、イスラエルの国にとって、とりかえしのつかない損失であると思われた。偉大で善良な預言者、すぐれた士師が世を去ったので、人々は心から深く悲しんだ。サムエルは若いときから、イスラエルの人々の前で誠実に歩んだ。サウルは、王として人々に認められてはいたが、サムエルは、忠実と服従と献身の生涯を送ったために、サウルよりはいつそう大きな影響を及ぼしていたのである。彼は、一生の間イスラエルをさばいたとされるされている。

人々は、サウルの生涯とサムエルの生涯とを比較してみたときに、彼らが回りの国々と異なっていたはいけな
いと言って、王を要求したことがどんなまちがいであつたかを知った。多くの者は、社会情勢が急速に不信仰で
無神的になっていくのを見て驚いた。王の行動が、広く人々に影響を与えていた。主の預言者サムエルの死を、
イスラエルが悲しむのは当然であつた。

国家は、預言者の学校の創立者と校長を失ったが、それだけではなかった。国家は、人々が大きな問題をかか
えて相談に行っていた人、人々の幸福のために常に神にとりなしをしていた人を失った。サムエルのとりなしは
彼らに安定感を与えた。「義人の祈は、大いに力があり、効果のあるものである」(ヤコブ五ノ一六)。人々は、
神に見捨てられたように感じた。王は、狂人も同様であつた。正義は曲げられ、秩序は混乱に変わった。

国家が内紛に苦しみ、サムエルの沈着で敬虔な勧告が最も必要であると思われたときに、神は、彼の老僕に休

息をお与えになった。人々は、彼の休息の場をながめて、自分たちが彼を支配者として受け入れなかった愚かさを思い出して、痛く後悔した。彼は、天と密接な交わりを保って全イスラエルを主のみ座に結びつけるように思われたのであった。彼らに神を愛し、服従することを教えたのは彼であった。しかし、彼は、もう死んでしまったので、人々は、サタンと結束して彼らを神から引き離そうとする王のなすがままになってしまったと感じたのである。

ダビデは、サムエルの葬儀に出ることはできなかった。しかし、彼は、忠実なむすこが慈父のために悲しむように、真心から深く悲しんだ。サムエルが死んだことは、サウルの行動を抑制するもう一つのきずなが絶たれたことであるから、ダビデは、預言者が生きていたときよりも、いつそう身の危険を痛感した。サウルが、サムエルの死を悲しんでいるのをよい機会に、ダビデは、もつと安全な場所を捜し求めた。こうして、彼は、パランの荒野にのがれた。彼は、ここで詩篇一二〇篇と一二一篇を作った。その荒涼としたさばくの中で、預言者の死と自分に敵対する王のことを考えて、彼は歌った。

「わが助けは、天と地を造られた主から来る。

主はあなたの足の動かされるのをゆるされない。

あなたを守る者はまどろむことがない。

見よ、イスラエルを守る者は

まどろむこともなく、眠ることもない。……

主はあなたを守って、すべての災を免れさせ、

またあなたの命を守られる。

主は今からとこしえに至るまで、

あなたの出ると入るとを守られるであらう。」

(詩篇一一二ノ二八)

ダビデと従者たちが、パランにいたとき、その地方で多くの財産を持っていた裕福なナバルという人の羊や牛が盗人に略奪されないように守ってやった。ナバルは、カレブの子孫であったが、その性質は粗野で卑しかった。それは、羊の毛を切るときであり、もてなしの季節であった。ダビデと従者たちは、食物の欠乏に苦しんでいた。エッサイのむすこダビデは、当時の風習に従って、十人の若者をナバルにつかわし、若者たちの主人の名をもって、彼にあいさつすることを命じ、こう言わせた。「どうぞあなたに平安があるように。あなたの家に平安があるように。またあなたのすべての持ち物に平安があるように。わたしはあなたが羊の毛を切っておられることを聞きました。あなたの羊飼たちはわれわれと一緒にいたのですが、われわれは彼らを少しも害しませんでした。また彼らはカルメルにいる間に、何ひとつ失ったことはありません。あなたの若者たちに聞いてみられるならば、わかります。それゆえ、わたしの若者たちに、あなたの好意を示してください。われわれは祝の日に来たのです。どうぞ、あなたの手もとにあるものを、贈り物として、しもべどもとあなたの子ダビデにください」(サムエル記上二五ノ六八)。

ダビデと彼の部下たちは、ナバルの羊飼いと群れにとつては、防壁のようなものであった。ところで、この金持ちは、そのように尊い働きをした者の必要を満たすために、豊かな持ち物の中から与えることを求められた。ダビデと部下たちは、自分かつてに羊や牛を取ることができたのであるが、そうはしなかった。彼らは、誠実にふるまった。しかし、彼らの親切は、ナバルにはむだであった。ナバルのダビデへの返答は、彼の品性を表わしていた。「ダビデとはだれか。エッサイの子とはだれか。このごろは、主人を捨てて逃げるしもべが多い。どうしてわたしのパンと水、またわたしの羊の毛を切る人々のためにほふった肉をとつて、どこからきたのかわからない人々に与えることができるか」(同・二五ノ一〇、一一)。

若者たちが何も持たずに帰つてきて、この話をしたときに、ダビデは怒った。彼は、部下の者に戦いの用意をすることを命じた。ダビデは、当然彼が受けるべきであるものを拒んだうえに、彼に侮辱を加えた男を罰する決心をした。この衝動的行動は、ダビデよりはサウルの性質にふさわしいものであったが、エッサイの子は、まだ苦難の学校で忍耐を学ばなければならなかった。

ナバルがダビデの若者たちを帰したあとで、ナバルのしもべのひとり、このできごとをナバルの妻アピガイルに話した。「ダビデが荒野から使者をつかわして、主人にあいさつをしたのに、主人はその使者たちをのしられました。しかし、あの人々はわれわれに大へんよくしてくれて、われわれは少しも害を受けず、またわれわれが野にいた時、彼らと共にいた間は、何ひとつ失ったことはありませんでした。われわれが羊を飼つて彼らと共にいる間、彼らは夜も昼もわれわれのかきとなつてくれました。それで、あなたは今それを知つて、自分のすることを考えてください。主人とその一家に災が起きるからです」(同・二五ノ一四 一七)。

アビガイルは、夫に相談しなければ、自分が何をしようとしているかを知らせもせず、十分な食糧をろばに載せて、しもべたちを先につかわし、自分自身もダビデの一隊に会うために出発した。彼女は、山の陰で彼らに出会った。「アビガイルはダビデを見て、急いで、ろばを降り、ダビデの前で地にひれ伏し、その足もとに伏して言った、『わが君よ、このとがをわたしだけに負わせてください。しかしどうぞ、はしために、あなたの耳に語ることを許し、はしための言葉をお聞きください』」（同・二五ノ二三、二四）。アビガイルは、王に語るようにうやうやしい態度でダビデに語った。ナバルは、「ダビデとはだれか」と言ったが、アビガイルは、彼を「わが君よ」と呼んだ。彼女はやさしく語って、彼の怒りをなだめ、夫のためにとりなした。アビガイルは、見せかけや誇りではなくて、神の知恵と愛に満ち、彼女の家庭に対する強い献身を表わした。そして彼女は、彼女の夫の不親切な行動が、ダビデを侮辱しようと思っていたことではなくて、不幸な利己的性質の現われに過ぎないことを明らかにした。「それゆえ今、わが君よ、主は生きておられます。またあなたは生きておられます。主は、あなたがいて血を流し、また手ずから、あだを報いるのをとどめられました。どうぞ今、あなたの敵、およびわが君に害を加えようとする者は、ナバルのごとくになりますように」（同・二五ノ二六）。アビガイルは、このようにダビデを説き伏せて、彼に早まったことをさせなかったことを自分のてがらにせず、神に栄光と誉れを帰した。そして、彼女は、多くの食糧を感謝のささげ物として、ダビデの若者に与え、ダビデを怒らせたのが自分であったかのように、なおも嘆願するのであった。

「どうぞ、はしためのとがを許してください。主は必ずわが君のために確かな家を造られるでしょう。わが君が主のいくさを戦い、またこの世に生きながらえられる間、あなたのうちに悪いことが見いだされないからです」

(同・二五ノ二八)。アビガイルは、暗に、ダビデがどういう道を進むべきであるかを示した。彼は、主のいくさを戦うべきであった。彼は身に危害を加えられ、裏切り者として迫害されても、報復をしようとしてはならなかった。彼女は続けた。「たとい人が立つてあなたを追い、あなたの命を求めても、わが君の命は、生きている者の束にたばねられて、あなたの神、主のもとに守られるでしょう。…そして主があなたについて語られたすべての良いことをわが君に行い、あなたをイスラエルのつかさに任じられる時、あなたが、ゆえなく血を流し、またわが君がみずからあだを報いたと言うことで、それがあなたのつまずきとなり、またわが君の心の責めとなることのないようにしてください。主がわが君を良くせられる時、このはしためを思いだしてください」(同・二五ノ二九 三一)。

こうした言葉は、天からの知恵を受けた者だけが語ることのできるものである。アビガイルの敬神の念は、花のかおりのように、顔や言葉や行動に、無意識のうちにただよっていた。神のみ子の霊が、彼女の心に宿っていた。彼女の言葉は、恵みによって味つけられ、好意と平和に満ち、天の感化を及ぼしていた。ダビデは、われに返り、自分の早まった考えがどんな結果をもたらすものであったかを思って戦慄した。「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう」(マタイ五ノ九)。いらだった感情を和らげ、早まった衝動をとどめ、冷静さと正しい知恵の言葉によって、大きな悪をしずめようとしたこのイスラエルの女のような人々が、もっと多くあればどんなによいことであろう。

献身したクリスチャンの生活は、常に光と慰安と平安を放っている。それは、純潔、気転、単純、有用性などの特性を持っている。それは、感化力を清める無我の愛に支配されている。それは、キリストに満ち満ちていて

その人が行くところは、どこにでも、光の足跡を残すのである。アビガイルは、賢明な譴責者であり、勧告者であった。ダビデの怒りは、彼女の感化と道理にかなった話しぶりによっておさまった。彼は、自分が賢明でない行動をとり、自制を失ったことを自覚した。

彼は、へりくだって譴責を受け入れた。彼みずから、それについて次のように言っている。「正しい者にいくしきをもつてわたしを打たせ、わたしを責めさせてください」(詩篇一四一ノ五)。彼女が彼に正しい勧告を与えたために、彼は感謝して祝福した。譴責される場合に、腹を立てずに譴責を受け入れるならば、賞賛に値すると考えている人が多い。しかし、自分を誤った道から救おうとした人に、感謝と祝福の気持ちを持ってその譴責を受け入れる人はなんと少ないことであろう。

アビガイルが家に帰ってみると、ナバルと彼の客は、大宴会を開いて、酒に酔って大騒ぎをしていた。彼女はダビデと会ってどんなことが起こったかについては、次の朝まで何も彼に話さなかった。ナバルは臆病者であった。そして、彼が自分の愚かな行為によつて、突然の死が、どんなに迫っていたかを悟ったとき、彼のからだはまひしたようになった。彼は、ダビデがまだ、彼に報復しようとしているのではないかと恐れて、人事不省に陥った。彼は、十日後に死んだ。神が彼にお与えになった生命は、世をのろうだけのものではなかった。彼が、喜び楽しんでいた最中に、主がたとえの中の金持ちに言われたのと同じように、神は彼に言われた。「あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう」(ヘルカーニ二ノ二〇)。

ダビデはその後、アビガイルと結婚した。ダビデは、すでにひとりの妻の夫であったが、当時の国々の風習が彼の判断を誤らせ、こうした行動を取らせたのである。偉大で善良な人々でさえ、世の風習に従って道をふみ誤

った。ダビデは、多くの妻をめとったための苦しさを、一生を通じて痛感した。

ダビデは、サムエルの死後数か月の間、平和に過ごすことができた。彼はふたたび、ジフ人の人里離れたところへ行つた。しかし、ジフ人たちは、王の恵みを得ようと思つて、ダビデの居どころを王に知らせた。この知らせによつて、今までサウルの心の中に眠っていた悪魔的怒りが燃え上がった。サウルはまたもや兵隊たちを召集して、ダビデのあとを追つた。しかし、味方の斥候は、サウルがふたたび追跡していることをダビデに知らせた。

ダビデは、敵の位置を確かめるために出かけて行つた。それは夜であつた。彼らが注意深く進んでいくうちに、ある陣営のところに来た。よく注意してみると、王と従者たちの天幕が目前にあつた。彼らには、だれも気づいていなかった。陣営は静かに眠っていた。ダビデは、仲間の者に、敵のまん中にはいつて行こうと言つた。「だれがわたしと共にサウルの陣に下つて行くか」と彼が尋ねると、アビシャイはすぐ答えて言つた。「わたしが一緒に下つて行きます」(サムエル記上二六ノ六)。

ダビデとアビシャイは、山の暗い陰に隠れて、敵の陣営にはいつた。彼らが敵の正確な数を確かめようとしていたところ、やりを地につきさし、まくらもとに水のびんを置いて寝ているサウルのところへ来た。サウルのそばには、総指揮官のアブネルがいて、そのまわりに兵隊たちが眠っていた。アビシャイは、彼のやりを振り上げて言つた。「神はきょう敵をあなたの手に渡されました。どうぞわたしに、彼のやりをもつてひと突きで彼を地に刺しとおさしてください。ふたたび突くには及びません」(同・二六ノ八)。彼は許可の言葉を待った。しかしダビデは彼の耳にささやいて言つた。「『彼を殺してはならない。主が油を注がれた者に向かつて、手をのべ、罪を得ない者があるつか』。……『主は生きておられる。主が彼を撃たれるであらう。あるいは彼の死ぬ日が来るで

あろう。あるいは戦いに下って行って滅びるであろう。主が油を注がれた者に向かって、わたしが手をのべることを主は禁じられる。しかし今、そのまくらもとにあるやりと水のびんを取りなさい。そしてわれわれは去ろう。』
こうしてダビデはサウルの枕もとから、やりと水のびんを取って彼らは去ったが、だれもそれを見ず、だれも知らず、また、だれも目をさまさず、みな眠っていた。主が彼らを深く眠らされたからである」(同・二六ノ九一二)。主は、なんとたやすく力ある者を弱め、賢明な者を愚かにし、厳密に見張る者の企てをくじかれることであらう。

ダビデは陣営から遠く離れた安全な山の上に立って、大声で民とアブネルに叫んで言った。『あなたは男ではないか。イスラエルのうちに、あなたに及ぶ人があるうか。それであるのに、どうしてあなたは主君である王を守らなかったのか。民のひとり、あなたの主君である王を殺そうとして、はいりこんだではないか。あなたがしたこの事は良くない。主は生きておられる。あなたがたは、まさに死に値する。主が油をそそがれた、あなたの主君を守らなかったからだ。いま王のやりがどこにあるか。その枕もとにあった水のびんがどこにあるかを見なさい』。サウルはダビデの声を聞きわけて言った、『わが子ダビデよ、これはあなたの声か』。ダビデは言った、『王、わが君よ、わたしの声です』。ダビデはまた言った、『わが君はどうしてしもべのあとを追われるのですか。わたしが何をしたのですか。わたしの手になんのわいことがあるのですか。王、わが君よ、どうぞ、今しもべの言葉を聞いてください』(同・二六ノ一五 一九)。王は、ふたたび自分の誤りを悟って言った。『わたしは罪を犯した。わが子ダビデよ、帰ってきてください。きょう、わたしの命があなたの目に尊く見られたゆえ、わたしは、もはやあなたに害を加えないであらう。わたしは愚かなことをして、非常なまちがいをした』。ダビデは答

えた、『王のやりは、ここにあります。ひとりの若者に渡ってこさせ、これを持ちかえらせてください』(同・二六ノ二一、二二)。サウルは、「わたしは、もはやあなたに害を加えないであろう」と約束したけれども、ダビデは、彼の権下に身をおくことをしなかった。

ダビデが王の生命を尊重したこの第二のできごとは、サウルの心にさらに深い印象を与え、彼に、もっとけんそんになって、自分のあやまちを認めさせるに至った。彼は、こうした慈悲深い行為に驚き、圧倒された。サウルは、ダビデと別れるときに言った。「わが子ダビデよ、あなたはほむべきかな。あなたは多くの事をおこなって、それをなし遂げるであろう」(同・二六ノ二五)。しかし、エッサイのむすこは、王がこうした精神状態を長く持ち続けることを期待できなかった。

ダビデは、サウルと和解することに絶望した。ついには彼がサウルの憎悪の犠牲にならねばならないことは避けられないように思われた。そこで彼は、ふたたびペリシテ人の地に隠れ家を求める決心をした。彼は、六百人の部下を率いて、ガテの王アキシのところへ行った。

ダビデは、神の勧告を仰がず、サウルが自分を殺すものと思い込んでしまった。サウルは、ダビデを殺そうとたくらんで追跡していても、主は、ダビデに王国を確保させようとしておられたのである。人間の目には、神秘に思えても、神はそのご計画を完成なさる。人間には、神の方法は不可解である。そして、その外側を見て、神が彼らに起こることを許される困難や試練を、ただ彼らを苦しめ、滅ぼすものであると解釈する。こうして、ダビデは、外側をながめて、神の約束を見なかった。彼は、果たして自分が王位につけるかどうかを疑った。長い試練が、彼の信仰を弱らせ、忍耐力を消耗させた。

主は、イスラエルの宿敵ペリシテ人のところに、ダビデを保護するために送られたのではない。ペリシテ人は最後まで彼にとって恨み重なる敵の一つになるのであったにもかかわらず、彼は、困ったときに彼らに助けを求めて行った。彼は、サウルとサウルの従者たちを全く信頼できなくなり、彼の民族の敵のあわれみにすがったのである。ダビデは、勇敢な將軍であつた。そして、賢明で、栄えある勇士であつた。しかし、彼がペリシテ人のところへ行ったのは、全く彼にとって不利なことであつた。神は、神の旗じるしをユダの国に立てるように、彼を任命されたのであつた。彼が、神からの命令を仰がずに、自分の持ち場を捨てたのは、信仰に欠けていたためであつた。

ダビデの不信によつて、神のみ栄えが汚された。ペリシテ人は、サウルと彼の軍勢を恐れる以上に、ダビデを恐れていた。ダビデは、ペリシテ人に身を寄せて保護を受けたために、彼の自国民の弱点を彼らに暴露した。こうして彼は、この残酷な敵が、イスラエルを圧迫することを助けたのである。ダビデは、神の民を守護するために立ち上がるように油を注がれていた。主は、主のしもべたちが、神の民の弱点を暴露したり、その幸福に無関心をよそおつたりして、悪人たちを勇気づけることを望まれない。さらに、彼の兄弟たちは、彼が異教徒の神々を礼拝するために、彼らのところへ行つたという印象を受けた。彼のこうした行動は、人々に彼の動機を誤解させる原因となり、多くの者は、彼に対して偏見をいだいた。彼は、サタンが彼にさせようと願っていたちようどそのことをさせられた。なぜなら、彼がペリシテ人の中に隠れ家を求めたことによつて、神と神の民との敵を非常に喜ばせたからである。ダビデは、神の礼拝を捨てたり、神のわざに対する献身を取り消したりしたのでなかつた。しかし、彼は、自分の身の安全を求めて神に信頼しなかつた。こうして、彼は、神がしもべたちに要求

される公正で忠実な品性を傷つけたのである。

ダビデは、ペリシテ人の王に暖かく迎えられた。この暖かい歓迎は、王が彼を尊敬していたこととともに、ヘブル人が自分に保護を求めてきたという虚栄心の満足によるものでもあった。ダビデは、アキシの領土内では、裏切られる恐れを感じなかった。彼は、家族と一族の者の財産を移動させた。彼の部下もそのようにした。こうして彼は、見たところ、永久にペリシテ人の地に移住したように思われた。イスラエルの避難民の保護を約束したアキシは、万事に満足であった。

ダビデは、王の町を離れたいなかに住みたいと願った。王は快く承諾して、チクラグを彼の所有として与えた。ダビデは、自分も部下も偶像礼拝者たちの影響のもとにあるのは危険であると思った。ガテにいるよりは、彼らだけの町にいるほうが自由に神を礼拝することができた。ガテで行なわれる異教の儀式は、彼らに害毒を及ぼし種々の難問題を引き起こすことは明らかであった。

この孤立した町に住んでいた間に、ダビデは、ゲシウル人、ゲセル人、アマレク人などと戦い、彼らを全滅させたので、そのことをガテに知らせる者はなかった。彼が戦いから帰ってくると、自国民であるユダの人々と戦っていたかのように、アキシには思わせていた。こうした偽りによって、ダビデは、ペリシテ人の手を強めていた。王は言った。「彼は自分を全くその民イスラエルに憎まれるようにした。それゆえ彼は永久にわたしのしもべとなるであろう」(同・二七ノ一二)。ダビデは、これらの異邦の種族が滅ぼされることは、神のみ旨であることを知っていた。そして、自分にその任務がゆだねられていたことを知っていた。しかし、彼が、人をあざむいていたのでは、神の勧告に従って歩んでいるとは言えなかった。

「そのころ、ペリシテびとがイスラエルと戦おうとして、いくさのために軍勢を集めたので、アキシはダビデに言った、『あなたは、しかと承知してください。あなたとあなたの従者たちとは、わたしと共に出て、軍勢に加わらなければなりません』」（同・二八ノ一）。ダビデは、自分の民族にさからう気持ちは少しもなかった。彼の義務が何であるかを、事態が進展してはつきりと示すまで、彼はどのような行動をとってよいかわからなかった。彼は、王にあいまいな返事をして言った。「よろしい、あなたはしもべが何をするかを知られるでしょう」（同・二八ノ二）。アキシは、戦争が起これば、ダビデは王を援助すると約束したものとこの言葉を理解した。そしてダビデに大きな榮譽を与えることを誓い、ペリシテの宮廷の高い地位に彼をつけた。

ダビデの信仰は、神の約束をいくぶん疑った。しかし、彼は、サムエルがイスラエルの王として彼に油を注いだことをまだ忘れてはいなかった。彼は、神が、これまでにお与えになった勝利を思い出した。彼は、サウルの手から彼を守護された神の大きな恵みを回想して、神の信任を裏切るまいと決心した。イスラエルの王は、彼の生命をねらっていた。しかし、彼は、自国民の敵と協力するつもりはなかった。

第 66 章

サウルの死

本章は、サムエル記上二八、三一章に基づく。

ふたたびイスラエルとペリシテ人の間に、宣戦が布告された。「ペリシテびとが集まってきてシュネムに陣を取った」(サムエル記上二八ノ四)。これは、エズレルの野の北のはずれにあつたが、サウルと彼の軍勢は、そこからわずか数マイル離れたその南のはずれにあるギルボア山のふもとに陣を取った。ギデオンが三百人を率いて、ミデアン人を追い散らしたのは、この平原であつた。しかし、イスラエルの救済者を鼓舞した精神と、今王の心をかき立てているものとは、はるかに異なつたものであつた。ギデオンは、ヤコブの大いなる神を堅く信じて出かけた。しかし、サウルは、神に見捨てられて、寂しく無防備であることを感じていた。彼は、ペリシテの軍勢を見渡して、「恐れ、その心はいたくおののいた」(同・二八ノ五)。

サウルは、ダビデと彼の軍勢がペリシテ人と一緒になっていることを聞いていたので、これを機会に、エッサイのむすこは、彼の受けた不当な扱いの報復をすることだろうと考えた。王は、非常に苦しんだ。国家をこうした大危機に陥れたのは、彼自身が常軌を逸した憎悪をいだいて、神に選ばれた者を殺そうとして奔走したからで

あった。彼は、ダビデを追うことに夢中になって、国防を怠っていた。ペリシテ人は、この無防備状態につけ込んで、国の中心にまで侵入してきた。こうして、サタンは、サウルにはダビデを追跡して殺害することに全勢力を費やさせる一方、同じ悪霊はペリシテ人には、この機にサウルを殺し、神の民を滅亡させるように鼓舞していた。この同じやり方が、今でも大いなる敵サタンによって、なんと数多く用いられていることであろう。彼は、きよめられていない人に働きかけて、教会内にねたみと争いを起こさせ、そうした神の民の分離した状態に乗じて、彼らを破滅させるように、手下どもを扇動する。

サウルは、翌日には、ペリシテ人と戦闘を交えなければならなかった。刻々と迫ってくる運命の影が、彼のまわりに暗く立ちこめた。彼は援助と指導を切望した。しかし、神の勧告は、求めても得られなかった。「主は夢によっても、ウリムによっても、預言者によっても彼に答えられなかった」(同・二八ノ六)。主は、真心からへりくだって、主のもとに来る魂を退けられることはない。主は、なぜサウルに返答を与えず、退けられたのであるのか。それは王が、彼自身の行為によって、神に問うことができるあらゆる方法の特典に浴されなくなったからであった。彼は、サムエルの勧告を拒否した。彼は、神が選ばれたダビデを追放した。彼は、主の預言者たちを殺した。天の神が定められた伝達の方法を切断しておきながら、神の答えを期待することができるであろうか。彼は、罪を犯して、恵みの霊を去らせてしまった。彼は、夢または主の幻によって答えを得ることができようか。サウルは、へりくだって悔い改め、神に立ち帰らなかった。彼が求めたのは、罪の許しや神との和解ではなくて、敵からの救済であった。彼は、自分自身の強情と反逆によって、神から切り離された。ざんげと悔い改めによる以外に、彼が立ち帰る道はなかった。しかし、高慢な王は、苦悶と絶望のうちに、他に助けを求めることにした

のである。

「わたしのために、口寄せの女を捜し出しなさい。わたしは行ってその女に尋ねよう」(同・二一八ノ七)。サウルは占いがどんなものであるかをよく知っていた。主は、それをきびしく禁じておられ、汚れた魔術を行なう者には、みな死罪の宣告が下されていた。サムエルが生きていたときに、サウルは、すべての占い師や口寄せを殺すように命じたのであった。しかし、彼は絶望のあまり、以前自分が憎むべき罪悪であると宣告した託宣を求めるにいたった。

エンドルに、ひとりの口寄せの女がひそかに住んでいることが王に伝えられた。この女は、サタンの支配に服し、その思いのままに行動することを、彼に約束していた。その代わりに、悪の君は、彼女のために不思議なことを行ない、隠れたことを現わした。

サウルは変装して、ふたりの従者とともに、夜、口寄せの女の隠れ家を捜した。ああ、なんとあわれむべき光景であるう。イスラエルの王が、サタンに捕えられて、彼の意のままになっていた。神の霊の聖なる感化にそむいて、頑強に自分の望みどおりをしようとした者の道ほど、人間の足にとって暗い道があるうか。自己という最悪の暴君の支配に屈した者の束縛ほど恐ろしい束縛があるうか。サウルがイスラエルの王であり得る唯一の条件は、神を信頼し、神のみこころに服従することであつた。彼がその治世を通じて、この条件に応じていたならば彼の王国は安泰を保つたことであろう。神が彼を指導し、全能者が彼の盾となられたことであろう。神は、サウルを長く忍ばれた。そして彼は、反逆と頑強さによって彼の魂のうちの神の声をほとんど沈黙させてしまったとはいえ、まだ悔い改める機会は残されていた。しかし彼が、この危機において神から離れ、サタンの共謀者から

の光を得ようとしたときに、彼は、創造者との最後のきずなを切ってしまったのである。彼は、長年彼に働きかけ、ついに彼を破滅の淵に陥れた悪霊の支配に、完全に屈服してしまった。

サウルと従者たちは、夜陰に乗じて平原を横ぎり、安全に、ペリシテの軍勢の陣地を過ぎ、山の向こうのエンドルの口寄せの女のところへ行った。口寄せの女は、ひそかにその汚れた魔法を行なうために、身を隠していた。サウルは、変装はしていたけれども、その長身と王者らしいふるまいは、普通の兵士でないことを表わしていた。女は、訪問者がサウルではないかと思った。そして、高価な贈り物が、なおさら彼女にそう思い込ませた。「わたしのために口寄せの術を行って、わたしがあなたに告げる人を呼び起してください」という彼の願いに答えて女は言った。「『あなたはサウルがしたことをごぞんじでしょう。彼は口寄せや占い師をその国から断ち滅ぼしました。どうしてあなたは、わたしの命にわなをかけて、わたしを死なせようとするのですか』。サウルは主をさして彼女に誓って言った、『主は生きておられる。この事のためにあなたが罰を受けることはないでしょう』。女は言った、『あなたのためにだれを呼び起しましょうか』。サウルは言った、『サムエルを呼び起してください』」(同・二八ノ八 一一)。

彼女はじゅもんを唱えたあとで、言った。「『神のようなかたが地からのぼられるのが見えます。…ひとりの老人がのぼってこられます。その人は上着をまといつておられます』。サウルはその人がサムエルであることを知り、地にひれ伏して拝した」(同・二八ノ一三、一四)。

口寄せの女のじゅもんによって現われたのは、神の聖なる預言者ではなかった。サムエルは、あの悪霊の巣くつにいたのではなかった。この超自然的出現は、サタンの力によるものにほかならなかった。サタンは、荒野で

キリストを試みたときに、光の天使を装うことができたのと同様に、サムエルを装うことはやさしくできたのである。

口寄せの女のじゅもんの最初の言葉は、王に向かって言われた。「どうしてあなたはわたしを欺かれたのですか。あなたはサウルです」(同・二八ノ一二)。こうして、預言者を装った悪霊が、最初に行なったことは、この邪悪な女に、彼女が欺かれていることを、ひそかに知らせることであつた。にせの預言者は、こう言った。「なぜ、わたしを呼び起して、わたしを煩わすのか」。サウルは言った、「わたしは、ひじょうに悩んでいます。ペリシテびとがわたしに向かつていくさを起し、神はわたしを離れて、預言者によつても、夢によつても、もはやわたしに答えられないのです。それで、わたしのすべきことを知るために、あなたを呼びました」(同・二八ノ一五)。

サウルは、サムエルが生きていたときには、彼の勧告を軽んじ、その譴責に立腹した。しかし彼は、苦悩とわがわいのときに、預言者の勧告が彼の唯一の望みであることを認め、天の使者と交わるために地獄の使いにたよつたのであつたがむだであつた。サウルは、完全にサタンの支配に服してしまった。そして、不幸と破壊を唯一の喜びにしているサタンが、この優位な立場を十分に活用して、不幸な王を滅びに陥れようとした。サウルの悲痛な叫びに答えて、サムエルのくちびるからのものと称する恐ろしい言葉が語られた。「主があなたを離れて、あなたの敵となられたのに、どうしてあなたはわたしに問うのですか。主は、わたしによつて語られたとおりにあなたに行われた。主は王国を、あなたの手から裂きはなして、あなたの隣人であるダビデに与えられた。あなたは主の声に聞き従わず、主の激しい怒りに従つて、アマレクびとを撃ち滅ぼさなかつたゆえに、主はこの事を、



絶望のあまりサウルは、エンドルの口寄せ女を訪れ、神が禁じられた悪霊との交通によって将来を知ろうとした。

この日、あなたに行われたのである。主はまたイスラエルをも、あなたと共に、ペリシテびとの手に渡されるであろう。あすは、あなたもあなたの子らもわたしと一緒にいるであろう。また主はイスラエルの軍勢をもペリシテびとの手に渡される」（同・二八ノ一六 一九）。

サウルは、反逆の道を歩んでいた間、いつもサタンにおだてられ、欺かれていた。人々に罪を軽視させ、犯罪者の道を容易で好ましいものに思わせ、主の警告と脅迫とに、人々の心をくらませることが、誘惑者の仕事である。サタンは非常な魅惑力をもつて、サウルにサムエルの譴責と警告とを軽視させて、彼自身を正当化させた。しかし、今、彼が窮地に陥ったときに、サタンはサウルに背を向け、罪が大きくその許しを得ることが絶望的であることを指摘して、彼を自暴自棄に追いやった。彼の勇気をくじき、判断をあやまらせ、また、彼を絶望と自殺にかりたてるのに、これ以上の方法はほかになかった。

サウルは、疲労と断食のために気絶しそうであった。彼は、恐怖に襲われ、良心に責められた。恐ろしい予告を聞いたときに、彼のからだは、暴風に動かされるかしの木のように揺れて、地にうつぶせに倒れた。

口寄せの女は非常に驚いた。イスラエルの王が、彼女の前で死人のように横たわった。もしも彼が、彼女の隠れ家で死んだりしたら、どんなことが彼女に起こることであろうか。女は、サウルに、起きて食事をすることを勧めた。女は、命をかけて王の願いに従ったのであるから、彼も彼女の願いに耳を傾けて、彼の生命を保つようにと訴えた。彼のしもべたちも勧めたので、サウルは、ついにそれを承諾した。そこで女は、大急ぎで肥えた小牛と種入れぬパンを彼の前に出した。これは、なんとという光景であろう。たった今、運命の言葉が響いたばかりの口寄せの女の荒れ果てたほら穴の中で、しかも、サタンの使者の前で、イスラエルの王として神に油を注がれた

ものが、次の日の恐ろしい戦いに備えて、すわって食事をしたのである。

彼は、夜が明ける前に従者たちと共に、イスラエルの陣営に帰還し、戦闘の準備をした。サウルは、暗黒の靈に問うことによつて、自分を滅ぼした。絶望の恐怖に苦悩する彼は、軍勢を勇気づけることができなかった。彼は、力の源である神から離れたので、神をイスラエルの援助者として仰ぐように人々の心を導くことはできなかった。こうして、不吉な予告は実現されるのであった。

シユネムの平原とギルボア山の山腹で、イスラエルの軍勢とペリシテ人の軍勢は、決死の戦闘に従事した。サウルは、エンドルのほら穴の恐るべき光景によつて、絶望状態に陥っていたのであるが、王位と王国の擁護のために、必死で戦った。しかし、それはむだであつた。「イスラエルの人々はペリシテびとの前から逃げ、多くの者は傷ついてギルボア山にたおれた」(同・三一ノ一)。王の勇敢な三人のむすこたちは、王のかたわらで倒れた。

弓を射る者どもがサウルに迫つた。彼は、彼の軍勢が回りで倒れ、王子たちが剣で殺されるのを見た。彼自身も負傷して、戦うことも逃げることもできなかった。逃亡は不可能であつた。彼は、ペリシテ人に捕われまいとして、武器をとる者に言った。「つるぎを抜き、それをもつてわたしを刺せ」(同・三一ノ四)。しかし、その人は主に油を注がれた者に手をふりあげることを拒んだので、サウルはつるぎをとり、その上に伏して自害した。

こうして、イスラエルの最初の王は、自殺の罪を犯して死んだ。彼の生涯は失敗であつた。彼は、神のみこころにさからつて、自分の邪惡な意志を主張したために、不名誉と絶望のうちに世を去つた。

敗北の知らせが、広く伝えられて、全イスラエルを恐怖に陥れた。人々は町々から逃げ出したので、ペリシテ人は何の抵抗も受けずに占領した。神にたよらなかつたサウルの治世は、国民を破滅の淵に陥れたのである。

戦闘の翌日、ペリシテ人は戦場で殺された者から、はぎ取るために搜索しているうちに、サウルと三人のむすこたちの死体を見つけた。彼らは、自分たちの勝利を完全なものにするために、サウルの首を切り、そのよいをはぎ取り、血にまみれた首とよいを勝利の記念品としてペリシテの国へ送り、「この良い知らせを、その偶像と民とに伝えさせた」(同・三一ノ九)。よいは、最後に、「アシタロテの神殿」に置かれた(同・三一ノ一〇)。首はダゴンの神殿にくぎづけにされた。こうして、勝利の栄光は、これらの偽りの神々に帰せられ、主のみ名は、はずかしめられた。

サウルと三人のむすこたちの死体は、ギルボアの付近のヨルダン川に近い、ベテシヤンの町まで運ばれた。ここで、それらは鳥の餌食にするために鎖でつるされた。しかし、ヤベシ・ギレアデの勇敢な人々は、サウルが初めに幸福であった時代に、彼らの町を救ったことを覚えていて、王と王子たちの死体を取りおろして、丁重に葬り、感謝の気持ちを表わしたのである。彼らは、夜、ヨルダン川を渡り、「サウルのからだと、その子たちのからだをベテシヤンの城壁から取りおろし、ヤベシにきて、これをそこで焼き、その骨を取って、ヤベシのぎよりゆうの木の下に葬り、七日の間、断食した」(同上三一ノ一二、一三)。こうして、四十年前の気高い行為は報われて、サウルと三人のむすこたちは、あの敗北と不名誉の暗黒の中にあって丁重に葬られたのである。

古代と現代の魔術

サウルがエンドルの女のもとに行ったという聖書の記事は、多くの聖書学者を困らせた問題であった。サウルとのこの会見のときに、サムエルが実際に現われたという立場をとる人もあるが、聖書自身は、そうではないという証拠を十分に提供している。もし、ある人々の主張するように、サムエルが天にいたのであれば、彼の力の力かまたはサタンの力によつて、そこに呼ばれてきたにちがいない。しかし、墮落した女のじゅもんに答えて神の聖なる預言者を天から呼び出す力がサタンにあるとは、だれも信じることができない。また、神が口寄せの洞穴に彼を呼んだとも考えられない。主は、すでに、夢によつてもウリムによつても、また、預言者によつてもサウルに語ることを拒んでおられた(サムエル記上二八ノ六参照)。神は、こうした方法で人間と交わることに定めておられた。そして、神は、こうした方法を用いないで、サタンの使者によつて、お語りになることはない。言葉自身が、その言葉の出所を十分に証明している。その目的は、サウルを悔い改めに導くことではなくて、彼を滅亡に追いやることであつた。これは、神のわざではなくて、サタンのわざである。なおその上に、口寄せ

の女に問うたサウルの行為は、彼が神に拒否され、滅亡に陥るに至った理由の一つとして、聖書に記されている。「こうしてサウルは主にむかつて犯した罪のために死んだ。すなわち彼は主の言葉を守らず、また口寄せに問うことをして、主に問うことをしなかった。それで主は彼を殺し、その国を移してエッサイの子ダビデに与えられた」(歴代志上一〇ノ一三、一四)。サウルが主に問わず、口寄せの女に問うたことが、ここに明示されている。彼は、神の預言者サムエルと話したのではなかった。彼は、口寄せの女を通じて、サタンと話したのであった。サタンは、本物のサムエルを出して見せることはできなかったが、にせ物を出して見せて、欺瞞の目的を達成した。古代の魔術や魔法というものは、だいたいそのすべてが死者と交通することができるといふ信仰に基づいていた。降神術を行なっている者たちは、死者と交通することができて、死者から将来の事件について聞くことができる」と主張した。こうした死者に問う習慣について、イザヤの預言の中に次のようにしるされている。「人々があなたがたにむかつて『さえずるように、ささやくように語る巫子および魔術者に求めよ』という時、民は自分たちの神に求むべきではないか。生ける者のために死んだ者に求めるであろうか」(イザヤ書八ノ一九)。

死者との交通というこの同じ信仰が、異教の偶像礼拝の基礎になっている。異教の神々は、死んだ英雄の霊を神にまつられたものと信じられていた。であるから、異教の宗教は、死者の礼拝であつた。これは、聖書に明らかにしるされている。ペテペオルでのイスラエルの罪に関して、こう言われている。「イスラエルはシツテムにとどまっていたが、民はモアブの娘たちと、みだらな事をし始めた。その娘たちが神々に犠牲をささげる時に民を招くと、民は一緒にそれを食べ、娘たちの神々を拝んだ。イスラエルはこうしてペオルのバアルにつきしたがった」(民数記二五ノ一 三)。詩篇記者は、そうした犠牲がどういふ神にささげられたかを語っている。彼は、

イスラエル人の同じ背信について、このように言った。「また彼らはベオルのバアルを慕って、死んだ者にささげた、いけにえを食べた」(詩篇一〇六ノ二八)。

死者を神格化することが、ほとんどすべての異教制度の主要な部分を占め、それとともに死者との交通の主張もまた同様に重大な部分であった。神々は、自分たちの意志を人間に伝え、また、問われるならば、人々に勧告を与えると信じられていた。ギリシャやローマの有名な神託は、この種のものであった。

死者と交通することができるといふ信仰は、いわゆるキリスト教国において今なお行なわれている。心霊術という名称のもとに、死者の霊であるといわれているものと交わる習慣が、広く行なわれるようになった。これは、愛する人々を墓に横たえた者の共感を得るように企てられている。時には、霊的存在が、彼らの友人の姿をとって人々の前に現われて、自分たちの生活に関係のあったできごとについて話したり、彼らが生きていたときに行なったことをしたりする。こうして、人々は、彼らの死んだ友人は天使になっていて、彼らの上をとびかい、彼らと交通するものかと思ひこまされてしまうのである。このようにして、死んだ者の霊であると人々が思い込んだものは、ある種の偶像とみなされる。そして、多くの人々にとって、その言葉は、神の言葉よりもはるかに重大なものに思われるのである。

しかし、心霊術を単なる詐欺であると考える人々が多い。この人々は、心霊術が主張する超自然的現象は、霊媒の欺瞞によるものであると言っているのである。確かに、詐欺によって現われたものを、真の現象であるかのように思わせたこともあるにはあったが、超自然的能力の著しい証拠もまたあったのである。人間の熟練と巧妙な精神の働きの結果であるとして、心霊術を拒んでいた人々も、そういう考え方では説明できない現象に当面すると、

その主張を認めるようになってしまふ。

現代の心霊術と古代の魔術と偶像礼拝は、すべて、その重要な主張として、死者との交通をあげているが、これは、エデンでサタンがエバに言った最初の虚偽に基づいている。「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたは……神のように……なることを、神は知っておられるのです」(創世記三ノ四、五)。これらは共に、偽りの父から出たものであつて、同じ偽りに基づいて、同じものを永続させているのである。

ヘブル人は、死者との交通めいたことをどんな方法においても行なうことを、堅く禁じられていた。神は、この方面の扉をしっかりと閉じて言われた。「死者は何事をも知らない、……彼らはもはや日の下に行われるすべての事に、永久にかかわることがない」(伝道の書九ノ五、六)。「その息が出ていけば彼は土に帰る。その日には彼のもろもろの計画は滅びる」(詩篇一四六ノ四)。主はイスラエルに言われた。「もし口寄せ、または占い師のもとにおもむき、彼らを慕つて姦淫する者があれば、わたしは顔をその人に向け、これを民のうちから断つであらう」(レビ記二〇ノ六)。

「口寄せ」の霊は、死者の霊ではなくて、サタンの使者、すなわち、悪天使である。すでに指摘したとおり、古代の偶像礼拝は、死者の礼拝と死者との交通を主張することから成り、聖書は、それを悪魔の礼拝であると言明している。使徒パウロは、異教の隣人たちの偶像礼拝には絶対に加わらないように兄弟たちに警告して言っている。「人々が供える物は、悪霊ども、すなわち、神ならぬ者に備えるのである。わたしは、あなたがたが悪霊の仲間になることを望まない」(コリント第一・一〇ノ二〇)。詩篇記者は、イスラエルが、「そのむすこ、娘たち

を悪霊にささげ」た、と言った。彼らは、「カナンの偶像」に彼らを犠牲としてささげたと、その次の聖句で言われている（詩篇一〇六ノ三七、三八）。彼らは死者を礼拝していたが、実際は、悪霊を礼拝していたのである。

現代の心霊術は、これと同じ基礎に基づくもので、昔、神が堅く禁じられた魔術と悪霊の礼拝の形を新しくして復活したものに過ぎない。それは、聖書の中で次のように預言されている。「後の時になると、ある人々は、惑わす霊と悪霊の教とに氣をとられて、信仰から離れ去るであろう」（テモテ第一・四ノ二）。パウロは、テサロニケ人への第二の手紙の中で、サタンが心霊術によって、特別に活動することを指摘し、それが、キリスト再臨の直前に起こると言っている。彼は、キリストの再臨のことを述べ、サタンが、「あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議と」によって働いたあとで起こると言っている（テサロニケ第二・二ノ九）。また、ペテロは、最後の時代に教会が会わなければならない危険を描写して、昔、にせ預言者がイスラエルを罪に陥れたように、にせ教師が起こると言った。「彼らは、滅びに至らせる異端をひそかに持ち込み、自分たちをあがなって下さった主を否定して、…また、大ぜいの人が彼らの放縱を見習」うのである（ペテロ第二・二ノ一、二）。使徒ペテロは、ここに心霊術の教師の著しい特徴の一つをあげている。彼らは、キリストが神の子であることを認めない。こうした教師について愛するヨハネは言っている。「偽り者とは、だれであるか。イエスのキリストであることを否定する者ではないか。父と御子とを否定する者は、反キリストである。御子を否定する者は父を持たず」（ヨハネ第一・二ノ二二、二三）。心霊術は、キリストを否定することによって、父とみ子とともに否定する。そして聖書は、それを反キリストのしるしであると言っている。

サタンはエンドルの女によって、サウルの運命を予告し、イスラエルの人々を陥れようとたくらんだ。サタン



現代心霊術と古代の魔術とは、共に死者との交通を主張するが、これはエデンにおけるサタンの最初の欺瞞に基づくものである。

は彼らが、口寄せの女を信頼して、彼女に問うてくるようになることを望んだ。こうして、彼らは、神を彼らの助言者とせず、サタンの指導のもとに陥ってしまうのであった。心霊術が多くの人々を引きつける魅力を持っているのは、将来の幕を開いて神が隠されたものを、人間に示す力があると主張するからである。神は、われわれが知らなければならぬ将来の重大事件を皆、み言葉の中に示しておられる。そして、あらゆる危険の中にあつてわれわれの足を導く安全な道標をお与えになった。しかし、サタンは、神に対する人間の信頼を失わせ、この世において彼らが置かれた境遇に不満をいだかせる。また、神が知恵のうちに隠されたことを知ろうと思わせ、聖なるみ言葉の中に神が啓示されたことを軽べつするようにさせる。

事態の明白な結果を知ることができなければ、落ちつかない人々が多くいる。彼らは、不安定に耐えられない。そして、忍耐しきれないで、神の救いを見るのを待とうとしない。彼らは、災いを恐れて、狂気のようになる。彼らは、反逆的精神をいだいて、啓示されていないことを知ろうと求めて、悲嘆にくれ、あちらこちらを奔走する。もし彼らが神に信頼して、目をさまして祈っているならば、彼らは神の慰めを得ることができるであろう。彼らの心は、神との交わりによつて、平安が与えられる。重荷を負うて苦労している者は、イエスのもとに行きさえすれば休みが与えられる。しかし、神が彼らの慰めのためにお定めになった方法を無視して、神が隠されたことを知ろうとして、ほかのところへ行くとすれば、彼らは、サウルと同じあやまちを犯し、それによつて得るのは、ただ悪の知識だけである。

神は、こうした行為を喜ばれず、そのことを最も明白に言っておられる。こうした将来の幕を引き裂こうとする性急な態度は、神に対する信仰の欠けていることを表わし、大欺瞞者の言うことに耳をかすことになる。サタ

ンは、人々を導いて口寄せに問わせる。そして、過去の隠れたことを現わすことによって、将来のことを預言する力があると信じこませようとする。サタンは、各時代にわたる長い経験によって、原因から結果を判断し、相当の正確さをもって、人間の将来のできごとを予告することができる。こうして彼は、道を踏み誤ったあわれな魂を欺き、彼らを自分の勢力下において、彼の意のままに奴隷にしようとする。

神は、預言者によって、われわれに警告された。「人々があなたがたにむかつて『さえずるように、ささやくように語る巫子および魔術者に求めよ』という時、民は自分たちの神に求むべきではないか。生ける者のために死んだ者に求めるであろうか」(イザヤ書八ノ一九)。「ただ律法と證詞とを求むべし彼等のいふところ此言にかなはずば晨光あらじ」(同・八ノ二〇・文語訳、新改訳参照)。

無限の知恵と力を持たれる聖なる神を知っている者が、主の敵に問うて知識を得る魔術者に走ってよかるうか。神ご自身が神の民の光である。人間の目に隠された栄光を、信仰の目で見えるようにせよと、神は彼らに言われる。義の太陽は、輝かしい光を彼らの心に照らす。彼らは、天のみ座からの光が与えられている。彼らは、光の源泉から離れて、サタンの使者のところへ行こうとは望まないのである。

サウルに対する悪霊の言葉は、罪の譴責と報復の預言ではあったが、彼を悔い改めさせるものではなくて、失望と破滅に陥れるものであった。しかし、甘言によって、人を破滅に陥れることが、サタンの目的になつていくことが多い。古代の悪霊の教えは、最もいやしむべき乱行を助長した。罪を責めて義を行なうことを勧めた神の戒めは退けられた。真理は軽く扱われ、不純行為が許されるばかりか、それを行なうことを命じられていた。心霊術は、死も、罪も、審判も、報復もないと言い、人間は、「墮落しない半神半人」であつて、欲望が最高の

法則であり、人間は自分にだけ責任を負えばよいと言うのである。真理、純潔、敬神の念を守るために神が設けられた防壁はくずされ、多くの者が大胆に罪を犯すようになった。こうした教えは、それが悪霊の礼拝と同じところから来ていることを示さないであろうか。

主は、カナン人の憎むべきことを行ない、悪霊と交わることがどういう結果となるかを、イスラエルに示された。彼らは、無情な者となり、偶像礼拝者、不品行な者、殺人者、そして、あらゆる汚れた思いといまわしい行為にふける憎むべきものとなった。人々は、自分たちの心を知らない。「心はよるずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている」(エレミヤ書一七ノ九)。しかし、神は、人間の墮落した性質の傾向をごぞんじである。現在と同様に、当時においても、サタンは、反逆を誘発させる状態をひき起こそうと見張っていた。それは、カナン人と同様にイスラエル人も神の前に憎むべきものとなるためであった。魂の敵は、われわれの中に、なんの制限もなく悪を流し込める通路を開こうと常に目を開いている。彼は、われわれが滅びに陥り、神の前に罰せられることを願っている。

サタンは、カナンの地をしっかりと握っていようと思っていた。ところが、カナンがイスラエルの民の住むところとされ、神の律法が、その地の律法とされたときに、彼は、残酷で悪意に満ちた憎しみをもって、イスラエルを憎み、その破滅を計画した。悪霊の活動によって、異なった神々が持ちこまれた。そして、選民は、罪の結果、ついに約束の国から離散してしまった。サタンは、この歴史をわれわれの時代にもくりかえそうとしている。神は、神の民を世の憎むべき罪惡から導き出して、彼らが神の律法を守ることができるようにしようとしておられる。そのために、「われらの兄弟らを訴える者」は、激しく怒っている。「悪魔が、自分の時が短いのを知り、

激しい怒りをもって、おまえたちのところの下ってきたからである」(ヨハネの黙示録一二ノ一〇、一二)。真の約束の国が、われわれの眼前にある。そして、サタンは、神の民を滅ぼし、その嗣業を受けさせまいとしている。「誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい」という勧告が、今ほど必要な時はない(マタイ二六ノ四一)。

古代のイスラエルに与えられた主の言葉は、この時代の神の民にも与えられている。「あなたがたは口寄せ、または占い師のもとにおもむいてはならない。彼らに問うて汚されてはならない。」「主はすべてこれらの事をする者を憎まれるからである」(レビ記一九ノ三一、申命記一八ノ一二)。

チクラグにおけるダビデ

本章は、サムエル記上二九、三〇章。サムエル記下一章に基づく。

ダビデとその部下たちは、ペリシテ人とともに、戦場まで行進してきたが、サウルとペリシテ人との戦いにはまだ参加していなかった。両軍が戦闘の準備をしていたときに、エッサイのむすこは、非常に困難な立場に立たされた。彼は、ペリシテ人といっしょに戦うものと期待されていた。もしも戦闘の半ばで、彼が、守っていた戦線を捨てて退却するならば、彼は臆病者呼ばわりをされるだけでなく、彼を保護し信頼したアキシの恩を忘れて、反逆した者といわれることであろう。こうしたことは、彼の名折れになるばかりでなく、サウルよりも恐ろしい敵の怒りをこうむることになるのであった。しかし彼は、たとえ一瞬であっても、イスラエルを敵に回して戦うことはできなかった。もしも彼が、そんなことをするならば、彼は、自国の裏切り者となり、神と神の民との敵となるのであった。それは、イスラエルの王位につく道を永遠に閉ざしてしまったことであろう。そして、もしもサウルが、戦いにおいて殺されるようなことになれば、その責めはダビデに負わされたことであろう。

ダビデは、自分の行動がまちがっていたことを痛感した。主と主の民の仇敵のところよりは、山々の、神の城

塞に隠れたほうがどんなにかよかったのである。しかし、主は、深く彼をあわれんで、そのしもべの過失を罰することをせず、彼が苦悩と混乱に陥るままにしておかれた。ダビデは神の力を見失い、完全な忠誠の道からそれたとは言え、なお、神に忠実に仕えようと思っていたのである。

サタンと彼の軍勢が、忙しく神とイスラエルの敵を助け、すでに神に拒否された王に対抗して計画をたてていたときに、主の天使は、ダビデが陥った危険から彼を救うために働いていた。天使たちは、切迫した戦闘にダビデとその部下たちが参加していることに反対させようと、ペリシテの君たちを動かしていた。

ペリシテの君たちはアキシにつめよって叫んだ。「これらのヘブルびとはここで何をしているのか」。アキシはこの重要な同盟軍を去らせようとは思わないで言った。「これはイスラエルの王サウルのしもべダビデではないか。彼はこの日ごろ、この年ごろ、わたしと共にいたが、逃げ落ちてきた日からきょうまで、わたしは彼にあやまちがあつたのを見たことがない」(サムエル記上・二九ノ三)。

しかし、ペリシテ人の君たちは、怒って彼らの主張を曲げなかった。「この人を帰らせて、あなたが彼を置いたもとの所へ行かせなさい。われわれと一緒に彼を戦いに下らせてはならない。戦いの時、彼がわれわれの敵となるかも知れないからである。この者は何をもつてその主君とやわらぐことができようか。ここにいる人々の首をもつてするほかはあるまい。これは、かつて人々が踊りのうちに歌いかわして、『サウルは千を撃ち殺し、ダビデは万を撃ち殺した』と言った、あのダビデではないか」(同・二九ノ四、五)。ペリシテ人の君たちは、彼がペリシテの勇士を殺して、イスラエルを勝利に導いたときのことをはっきりと覚えていた。彼らは、ダビデが自国民と戦うとは思わなかった。もしも彼が戦いの最中に、敵の側につくならば、ダビデは、サウルの全軍以上の

損害を与えることができるのであった。

こうしてアキシは、彼らに従わなければなくなり、ダビデを呼んで言った。「主は生きておられる。あなたは正しい人である。あなたがわたしと一緒に戦いに出入りすることをわたしは良いと思っている。それはあなたがわたしの所にきた日からこの日まで、わたしは、あなたに悪い事があつたのを見たことがないからである。しかしペリシテびとの君たちはあなたを良く言わない。それゆえ今安らかに帰って行きなさい。彼らが悪いと思うことはしないがよかるう」(同・二九ノ六、七)。

ダビデは、自分のほんとうの気持ちをさとられまいとして答えた。「しかしわたしが何をしたといつのですか。わたしがあなたに仕えはじめた日からこの日まで、あなたはしもべの身に何を見られたので、わたしは行って、わたしの主君である王の敵と戦うことができないのですか」(同・二九ノ八)。

アキシの返答は、ダビデの心に恥辱と悔悟の戦慄を与えたにちがいない。彼は、主のしもべとしてあるまじき欺瞞行為を行なったことを痛感していたのである。王は言った。「わたしは見て、あなたが神の使のようにりっぱな人であることを知っている。しかし、ペリシテびとの君たちは、『われわれと一緒に彼を戦いに上らせてはならない』と言っている。それで、あなたは、一緒にきたあなたの主君のしもべたちと共に朝早く起きなさい。そして朝早く起き、夜が明けてから去りなさい」(同・二九ノ九、一〇)。こうしてダビデは、自分が落ちこんだわなをのがれて、自由になることができた。

ダビデと彼の六百人の従者たちは、三日の旅を終えて、彼らのペリシテの故郷チクラグに到着した。ところが彼らを迎えたのは、荒れ果てた光景であつた。アマレク人は、ダビデとその軍勢の不在に乗じて、彼らの領土に

対するダビデの襲撃の報復を行なった。彼らは、無防備の町を不意に襲撃して略奪し、火を放ってすべての女や子供たちを捕虜にし、多くの物を略奪して去ったのであった。

ダビデと従者たちは、その恐ろしさと驚きに声もなく、しばらくの間は、黒くくすぶる破壊の跡をながめて沈黙していた。そして、故郷がどんなに恐ろしい廃虚と化してしまっただかに気がついたとき、戦いになったこれらの戦士たちは、「声をあげて泣き、ついに泣く力もなくなった」(同・三〇ノ四)。

ダビデは、ここでもまた、彼に信仰がなく、ペリシテ人の中に身を隠したことの懲らしめを受けた。神と神の民との敵の中に、どれほどの安全があるかを見る機会がダビデに与えられた。ダビデの従者たちは、こうした不幸の原因を彼のせいにして反抗した。彼は、アマレク人を襲撃したために、彼らの報復を招いたのであった。しかし、彼は、彼の敵の中での安全を過信し、町を無防備のままにしておいたのであった。兵隊たちは、悲しみと激しい怒りに気も狂わんばかりになり、どんな暴挙にでるかわからず、ダビデを石で打とうとさえた。

ダビデは、すべての人間的支援から切り離されたように思われた。彼が、この地上で大切にしていたものは、みな奪い去られてしまった。サウルは、彼を国外に追放した。ペリシテ人は、彼を陣営から追い出した。アマレク人は、彼の町を略奪した。彼の妻たちと子供たちは、捕虜になってしまった。そして、彼の親しい友は団結して彼に反抗し、彼を殺そうとさえた。ダビデは、このようにどうしようもなくなったとき、この悲運を憂慮しないで、熱心に神に助けを仰いだ。彼は、「主によって自分を力づけた」(同・三〇ノ六)。彼は、自分の過去の生涯のいろいろの事件をふり返った。いったい、主が彼をお見捨てになったことがあろうか。彼は、神の恵みの証拠を数多く思い出して勇気づけられた。ダビデの従者たちは、不満とあせりによって、彼らの苦痛をさらに耐

えがたくしていた。しかし、神の人は、さらに大きな悲痛の原因があったにもかかわらず、あくまでも忍耐した。彼は心の中で言った。「わたしが恐れるときは、あなたに寄り頼みます」(詩篇五六ノ三)。彼自身は、この困難な事態から脱出する方法を認めることはできなかったが、神は、それを見ることができ、彼に何をすべきかを教えになるのであった。

ダビデは、アヒメレクの子、祭司アビヤタルを呼んで、「わたしはこの軍隊のあとを追うべきですか。わたしはそれに追いつくことができませんようか」とたずねた。彼は答えて言った。「追いなさい。あなたは必ず追いついて、確かに救い出すことができるであろう」(サムエル記上三〇ノ八)。

この言葉を聞いて、悲しみ怒っていた人々の騒ぎは治まった。ダビデと従者たちは、すぐに逃走している敵の追跡を始めた。彼らがガザの付近で地中海に注ぐベルソ川に到着したときには、あまりの強行軍のために、二百人は疲れ果ててあとに残った。しかし、ダビデは、他の四百人を率いて、少しもひるむ色なく、追撃した。

進軍の途中で、彼らは、疲労と飢えとで死にそうになっていたエジプトの奴隷をみつけた。彼は、食物と水を飲んで元気づいた。そして、彼は、侵入軍に加わっていた残酷なアマレク人の主人に捨てられて、死にそうになっていたことがわかった。彼は襲撃と略奪の模様を語った。そして、彼は、殺されたり主人に引き渡されたりしないという約束のもとに、ダビデの軍勢を敵の陣営に案内することになった。

陣営に近づいて、彼らが見たのは酒盛りの光景であった。勝利軍は、盛んな祝宴を開いていた。「彼らはペリシテびとの地とユダの地から奪い取ったさまざまな多くのぶんどり物のゆえに、食い飲み、かつ踊りながら、地のおもてにあまねく散りひろがっていた」(同・三〇ノ一六)。すぐに、攻撃命令が下されて、追撃軍は猛然と敵

に襲いかかった。アマレク人は、不意を打たれて、あわてふためいた。戦いは、その日一日じゅうと翌日の夕方
にまで及び、ほとんど全軍が壊滅した。らくだに乗った四百人が逃亡したただけであった。主の言葉は実現した。
「こうしてダビデはアマレクびとが奪い取ったものをみな取りもどした。またダビデはそのふたりの妻を救い出
した。そして彼らに属するものは、小さいものも大きいものも、むすこも娘もぶんどり物も、アマレクびとが奪
い去った物は何をも失わないで、ダビデがみな取りもどした」(同・三〇ノ一八、一九)。

以前にダビデがアマレクの領内に侵入したとき、彼は、彼の手中にはいった住民をみな殺しにしたのであった。
もしも神の抑制力がなかったならば、アマレク人は、チクラグの人々を殺して報復したことであろう。彼らは、
多くの捕虜を連れて帰って、彼らの勝利の榮譽をはなやかなものにし、後で彼らを奴隷に売ろうと思い、そのま
ま生かしておくことにした。こうして彼らは、無意識のうちに、神のみこころを実現し、捕虜たちに害を加える
ことなく、その夫や父のところへ返すことになった。

地上のすべての権力は、無限の神の支配下にある。最大の支配者や、最も残酷な圧制者に対して、神は言われる。
「ここまで来てもよい、越えてはならぬ」(ヨブ記三八ノ一一)。神の力は、悪の勢力をくじくために常に活動し
ている。神は、人を滅ぼすためではなくて、彼らを矯正して保護するために、常に人間の中で働いておられる。

勝利者たちは、喜び勇んで帰途についた。後方に残った人々のところへ来たときに、四百人の中の利己的で乱
暴な人々は、戦いに参加しなかった者には戦利品の分けまえを与えるべきではないと言い張った。彼らは、妻と
子供をとりかえただけで十分であるというのであった。しかし、ダビデは、そのような取りきめを許さなかつ
た。「兄弟たちよ、……主が賜わったものを、あなたがたはそうにしてはならない。……戦いに下って行つ

た者の分け前と、荷物のかたわらにとどまっていた者の分け前を同様にしなければならない。彼らはひとしく分け前を受けるべきである」(サムエル記上三〇ノ二三、二四)。こうして、このことは解決し、銃後の任務をりっぱに果たした者は、すべて、実戦に参加したものと同様に戦利品の分けまえに気づかることが、のちにイスラエルの律法として定められた。

ダビデとその従者たちは、チクラグから奪われた物を取り返しただけではなくて、アマレク人の羊や牛をおびただしく捕えた。「これはダビデのぶんどり物だ」と言われた(同・三〇ノ二〇)。ダビデは、チクラグに着くとこの戦利品の中から贈り物をユダの長老たちに送った。この分配の中には、ダビデが命をねらわれて、転々と場所を変えて逃亡しなければならなかったときに、山のとりでで彼とその従者に親切を尽くした人々が、皆忘れられないで含まれていた。追われる逃亡者の心にしみた彼らの親切と同情は、このようにして、心から感謝されたのである。

ダビデと彼の勇者たちが、チクラグに帰ってから、三日めのことであった。彼らは、破壊された家々の復旧を急ぎながら、イスラエルとペリシテ人との間に当然起こったにちがいない戦争の知らせを、今か今かと待っていた。すると、突然、ひとりの使者が、「その着物を裂き、頭に土をかぶって」町にはいつてきた(サムエル記下一ノ二)。彼はすぐにダビデの前につれ出された。彼は、ダビデの前にうやうやしく頭を下げ、彼を偉大な王として認めたことをあらわし、彼の恩恵にあずかるうとしていた。ダビデは、戦闘のなりゆきを熱心に聞いた。逃亡者は、サウルの敗北と死、そして、ヨナタンの死を報告した。しかし、彼は、ただ事実だけでなく、それ以上のことを言った。彼は、ダビデが、残酷な迫害者サウルに対して、恨みをいだいているにちがいないと考えて、自分が王を殺した榮譽を受けようと望んだのであった。彼は、戦っている間に、イスラエルの王が傷つき、敵に激

しく攻められているのを見、王の願いによって、自分が、彼を殺したと誇らかに言った。彼は、王の頭にあつた冠と、腕につけていた金の腕輪をダビデのところに持ってきた。彼は、こうした知らせが喜び迎えられて、彼の果たした役割に対して、大きな報賞が与えられるものと思っていた。

しかし、「ダビデは自分の着物をつかんでそれを裂き、彼と共にいた人々も皆同じようにした。彼らはサウルのため、またその子ヨナタンのため、また主の民のため、またイスラエルの家のために悲しみ泣いて、夕暮まで食を断つた。それは彼らがつるぎに倒れたからである」(同・一ノ一一、一二)。

恐ろしい知らせの最初の衝撃がおさまったときに、ダビデは、他国人の使者と、彼が自認した犯罪のことを思ひ出した。首領のダビデは、「あなたはどこの人ですか」と若者にたずねた。「彼は言った、『アマレクびとで、寄留の他国人の子です』。ダビデはまた彼に言った、『どうしてあなたは手を伸べて主の油を注がれた者を殺すことを恐れなかったのですか』」(同・一ノ一三、一四)。ダビデは、サウルを二度も自分の手の中に入れ、彼を殺すように勧められたけれども、イスラエルを支配するために神の命によって聖別された者に、手をふり上げることが拒んだのであつた。しかし、アマレク人は、イスラエルの王を殺したことを、恐れもせず誇つた。彼は、死に値する犯罪を犯したことを自認したのであつて、その罰はすぐに与えられた。ダビデは言った。「あなたの流した血の責めはあなたに帰する。あなたが自分の口から、『わたしは主の油を注がれた者を殺した』と言って、自身にむかつて証拠を立てたからである」(同・一ノ一六)。

ダビデは、サウルの死を心から深く悲しんだ。それは、ダビデの気高い心の広さをあらわしていた。彼は、敵が倒れたことを喜ばなかつた。彼がイスラエルの王座につく障害は除かれたけれども、彼はこれをうれしく思わ

なかった。サウルの不信と残酷さの記憶は、死によって消し去られて、氣高い王者としての彼の記憶のほかは、何も心に浮かばなかった。サウルの名は、真実で無我の友情の持ち主であったヨナタンの名と結び合わされた。

ダビデが、彼の気持ちを表現した歌は、彼の国の宝となり、その後の各時代の神の民の宝となった。

「イスラエルよ、あなたの栄光は、

あなたの高き所で殺された。

ああ、勇士たちは、ついに倒れた。

ガテにこの事を告げてはいけない。

アシケロンのちまたに伝えてはならない。

おそらくはペリシテびとの娘たちが喜び、

割礼なき者の娘たちが勝ちほこるであろう。

ギルボアの山よ、

露はおまえの上におりるな。

死の野よ、

雨もおまえの上に降るな。

その所に勇士たちの盾は捨てられ、

サウルの盾は油を塗らずに捨てられた。……

サウルとヨナタンとは、愛され、かつ喜ばれた。

彼らは生きるにも、死ぬにも離れず、

わしよりも早く、

ししよりも強かった。

イスラエルの娘たちよ、サウルのために泣け。

彼は緋色の着物をもつて、

はなやかにあなたがたを装い、

あなたがたの着物に金の飾りをつけた。

ああ、勇士たちは戦いのさなかに倒れた。

ヨナタンは、あなたの高き所で殺された。

わが兄弟ヨナタンよ、あなたのためわたしは悲しむ。

あなたはわたしにとって、いとも楽しい者であった。

あなたがわたしを愛するのは世の常のようではなく、

女の愛にもまさっていた。

ああ、勇士たちは倒れた。

戦いの器はうせた」。

(サムエル記下一ノ一九 二七)

ダビデの即位

本章は、サムエル記下二 四章、五ノ一 五に基づく。

サウルが死んだために、ダビデは追放のうきめにあつた危険状態から脱出した。彼が自国に帰る道が、今、開かれた。サウルとヨナタンのための悲しみの期間が過ぎたとき、「ダビデは主に問うて言った、『わたしはユダの一つの町に上るべきでしょうか』。主は彼に言われた、『上りなさい』。ダビデは言った、『どこへ上るべきでしょうか』。主は…『ヘブロンへ』」と言われた(サムエル記下二ノ一)。

ヘブロンは、ベエルシバから北方二〇マイルのところであり、ベエルシバと将来エルサレムになる場所の、ほぼ中間に位置していた。ここは、はじめアナクの父アルバの町、キリアテ・アルバと呼ばれていた(ヨシユア記一四ノ一五、二一ノ一参照)。のちに、それは、マムレと呼ばれ、ここに、父祖たちの埋葬場「マクペラのほら穴」があつた(創世記四九ノ三〇、三一参照)。ヘブロンは、カレブの所有であつて、今は、ユダの主都になっていた。それは、肥えた山々や実り豊かな土地にかこまれた谷間に位置していた。パレスチナの最も美しいぶどう園が、その周辺にあり、オリブその他の果樹園も数多く点在していた。

ダビデと彼の従者たちは、すぐに神から受けた指示に従う準備をした。やがて、六百人の武装した軍人とその妻子たちと、彼らの牛や羊が、ヘブロンに向かつて行った。この旅の一団が町にはいると、ユダの人々は、ダビデを将来のイスラエルの王として歓迎しようと待ちかまえていた。すぐに彼の即位式の準備が行なわれた。彼らは、「その所でダビデに油を注ぎ、ユダの家の王とした」（サムエル記下二ノ四）。しかし、武力によって、彼の權威を他の部族にまで確立しようとはしなかった。

新たに即位した王の最初の行動の一つは、サウルとヨナタンの死に対して、心から追悼の意を表することであった。ヤベシ・ギレアデの人々が、勇敢に倒れた指導者の遺体を取りもどして、丁重に葬ったのを知って、ダビデは、ヤベシに使者をつかわして言った。「あなたがたは、主君サウルにこの忠誠をあらわして彼を葬った。どうぞ主があなたがたを祝福されるように。どうぞ主がいまあなたがたに、いつくしみと真実を示されるように。あなたがたが、この事をしたので、わたしもまたあなたがたに好意を示すであろう」（同・二ノ五、六）。そして彼は、自分がユダの王位についたことを発表して、これまで誠実に彼に仕えた人々の忠誠を促した。

ユダの人々がダビデを王にしたことに対して、ペリシテ人は反対しなかった。彼らは、サウルの王国を弱めるために、放浪中のダビデを助けたのであった。そして、今、ダビデの勢力が拡大されたことは、かつて、彼らが彼を親切に扱ったために、結局、それが自分たちの利益になることを希望した。しかし、ダビデの治世には、困難がなかったわけではなかった。彼の即位と共に、謀叛と反逆の暗い記録が始まった。ダビデは、謀叛を起こして王位についたものではなかった。神が彼をイスラエルの王に選ばれたのであって、だれもそれに対して不信をいだき、反対するものはなかったのである。ところが、アブネルの策動によって、サウルの子のイシボセテが王で

あると宣言されて、イスラエルにおいて彼に敵対する王国が建設されたのであったが、そのとき、ユダの人々は、彼の権威を認めようとしなかった。

イシボセテは、サウル王家の弱い無能な代表者であったが、ダビデは、王国の責任をになうのにはるかに卓越した資格の持ち主であった。イシボセテを王位につけた主謀者のアブネルは、サウルの軍勢の指揮官で、イスラエルじゅうで最もすぐれた人物であった。アブネルは、ダビデが、イスラエルの王として、主に油を注がれていたことを知っていた。しかし、長い間、彼を捜し求めて追跡したために、エッサイのむすこが、サウルの支配した王国を継承することを快諾しなかった。

こうした事情のもとにあつて、アブネルは、彼の本性を現わし、彼が野心家で無節操な人間であることを暴露した。彼は、サウルと親しく交わっていたので、王の精神に感化され、神がイスラエルの王位に選ばれた人を軽べつした。サウルが陣営で眠っていて、王の水のびんとやりが彼のそばから奪われたときに、ダビデが彼を激しく責めたことがあつた。そのために、彼は、ますますダビデを憎んだ。彼は、ダビデが、王とイスラエルの人々の前で言ったことを覚えていた。「あなたは男ではないか。イスラエルのうちに、あなたに及ぶ人があるうか。

それであるのに、どうしてあなたは主君である王を守らなかったのか。…あなたがしたこの事は良くない。主は生きておられる。あなたがたは、まさに死に値する。主が油をそそがれた、あなたの主君を守らなかったからだ」(サムエル記上二六ノ一五、一六)。この譴責は、彼の心に食い入った。そして、彼は、報復を企てて、イスラエルを分裂させ、それによって自分の地位を高めようと決心した。彼は滅びた王家の一員を利用して、自分の利己的野心と目的を達成しようと企てた。彼は、人々がヨナタンを愛していたことを知っていた。ヨナタンの思

い出は、心に深く秘められていた。そして、軍勢は、サウルの最初の遠征の勝利を忘れてはいなかった。この逆の指導者は大義名分を掲げて、彼の計画の実行にとりかかった。

ヨルダン川の方このマハナウムが、王の住居に選ばれた。そこは、ダビデまたはペリシテ人の攻撃に対して最も安全であったからである。ここで、イシボセテの戴冠式が行なわれた。初め、ヨルダンの東の部族だけが彼の治世を承認したが、それは、ついにユダを除く全イスラエルに及んだ。サウルのむすこは、彼の隔離された都で、二年の間世を治めた。しかし、アブネルは、自分の権力をイスラエル全土に及ぼそうと考えて、攻撃の準備を進めた。「サウルの家とダビデの家との間の戦争は久しく続き、ダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱くなった」(サムエル記下三ノ一)。

ついに、敵意と野心によって築かれた王座は、裏切りによって転覆された。アブネルは、弱く無能なイシボセテに腹を立て、ダビデに走って、イスラエルの全部族を彼に引き渡すことを提言した。王は、アブネルの提案を承認した。彼は面目を保って、その計画を実施するために王の前を退いた。ところが、ダビデの軍勢の指揮官のヨアブは、この勇敢で名高い戦士が王に歓迎されたことをねたましく思った。アブネルとヨアブの間には流血ぎたがあった。アブネルは、イスラエルとユダとが戦ったときに、ヨアブの兄弟アサヘルを殺していた。ヨアブはこれを機会に、自分の兄弟のあだを打ち、自分に対抗することになる敵を倒そうと考えて、卑劣にもアブネルを待ち伏せて殺した。

ダビデは、この邪悪な攻撃のことを聞いて叫んだ。「わたしとわたしの王国とは、ネルの子アブネルの血に關して、主の前に永久に罪はない。どうぞ、その罪がヨアブの頭と、その父の全家に帰するように」(同三ノ二)



ダビデは神の定められた時と方法に従って、時の熟するのを待って、統一された国家の王位につき、国民の支持を受けた。

八、二九)。これには、ヨアブと彼の弟アビシャイが荷担していたダビデは、国家がまだ不安定であることと、殺人者たちが権力と地位を占めた人々であったために、その犯罪に正当な罰を下すことができなかった。しかし彼は、公然とこの流血ざたに対する憎悪を表明した。アブネルの葬式は、公式の行事であった。ヨアブを先頭に、軍隊は、衣服を裂き、荒布をまとい悲しみの列に加わることが要求された。王は、埋葬の当日、断食して悲しみを表わした。王は喪主として、棺のあとに従った。そして王は、墓で悲しみの歌をうたった。それは、殺人者たちに対しては痛烈な譴責であった。王は、アブネルを悲しんで言った。

「愚かな人の死ぬように、

アブネルがどうして死んだのか。

あなたの手は縛られず、

足には足かせもかけられないのに、

悪人の前に倒れる人のように、

あなたは倒れた」。

(サムエル記下三ノ三三、三四)。

ダビデが彼の恨み重なる敵を寛大な心をもって弔ったことは、イスラエル全土の信頼と賞賛をかちえた。「民はみなそれを見て満足した。すべて王のすることは民を満足させた。その日すべての民およびイスラエルは皆、

ネルの子アブネルを殺したのは、王の意思によるものでないことを知った」（同・三ノ三六、三七）。王は、信頼している大臣や家来たちに、この犯罪について内密に語り、自分が希望するとおりの罰を殺人者たちに与えることができないことを認めて、神の正義に彼らをゆだねた。「この日イスラエルで、ひとりの偉大なる將軍が倒れたのをあなたがたは知らないのか。わたしは油を注がれた王であるけれども、今日なお弱い。ゼルヤの子であるこれらの人々はわたしの手におえない。どうぞ主が悪を行う者に、その悪にしたがって報いられるように」（同・三ノ三八、三九）。

アブネルは、誠意をもってダビデに提言し、申し述べたのであったけれども、彼の動機は卑しく利己的であった。彼は、神が任命された王にしつこく反抗し、自分の榮譽を追求していた。彼が長い間努力してきた運動を放棄したのは、恨みと傷つけられた誇りと激情とのゆえにであった。彼は、ダビデのところに走って、彼の軍の最高の榮譽の地位につきたいと望んだ。もしも彼の企てが成功したならば、彼の才能と野心やその大きな勢力と敬神の念の欠如などが、ダビデの王位と王国と繁栄を危機に陥れたことであろう。

「サウルの子イシボセテは、アブネルがヘブロンで死んだことを聞いて、その力を失い、イスラエルは皆あわてた」（同・四ノ一）。王国を長く維持することができないことは明らかであった。やがて、もう一つの裏切りの行為によって、衰えつつあった勢力は完全に没落してしまった。イシボセテは、ふたりの部下の不意打ちに会って殺された。彼らは、彼の首を切って、ユダの王の歡心を買おうと思って、急いでそれを持って来た。

彼らは、ダビデの前に現われて、自分たちの犯罪の血なまぐさい証言を言った。「あなたの命を求めたあなたの敵サウルの子イシボセテの首です。主はきょう、わが君、王のためにサウルとそのすえとに報復されまし

た」(同・四ノ八)。しかし、神ご自身がダビデの王位を確立し、敵から彼を救ってくださったのであるから、ダビデは、なにも、彼の力を確立するために裏切りの援助を望まなかった。彼は、殺人者たちに、サウルを殺したと誇った者がどのような運命に陥ったかを語った。彼はつけ加えた。「悪人が正しい人をその家の床の上で殺したときは、なおさらのことだ。今わたしが、彼の血を流した罪を報い、あなたがたを、この地から絶ち滅ぼさないでおくであろうか」。そしてダビデは若者たちに命じたので、若者たちは彼らを殺し……た。人々はイシボセテの首を持って行って、ヘブロンにあるアブネルの墓に葬った」(同・四ノ一、一二)。

イシボセテの死後、イスラエルの指導者間に、ダビデをすべての部族の王にしようという気運が高まった。「イスラエルのすべての部族はヘブロンにいるダビデのもとにきて言った、『われわれは、あなたの骨肉です。……あなたはイスラエルを率いて出入りされました。そして主はあなたに、『あなたはわたしの民イスラエルを牧するであろう。またあなたはイスラエルの君となるであろう』と言われました」。このようにイスラエルの長老たちが皆、ヘブロンにいる王のもとにきたので、ダビデ王はヘブロンで主の前に彼らと契約を結んだ」(同・五ノ一三)。こうして、神の摂理によって、彼が王位につく道が開かれた。彼は、自分の野心を満足させようとは思わなかった。彼に与えられた榮譽は、自分で求めたものではなかったのである。

アロンとレビの子孫が、八千人以上もダビデに従った。人々の心持ちの変化は、著しく決定的であった。革命は、彼らの従事していた偉大な働きにふさわしく、静かに厳然と行なわれた。これまでサウルの臣民であった五十万近くの人々が、ヘブロンとその周辺に集まってきた。山々や谷間には、群衆が満ちあふれた。戴冠式の時間が定められた。ダビデは、サウルの宮廷を追放され、山や丘や地のほら穴に隠れて生きのびていたのであるが、

今や、同胞から受けることのできる最高の栄誉を受けようとしていた。式服を身にまとった祭司や長老たち、輝くやりやかぶとに身を固めた軍人や兵隊たち、遠方からの客などが、選ばれた王の戴冠式を見るために立っていた。ダビデは王衣をまとうていた。神聖な油が、大祭司によって彼のひたいに注がれた。サムエルに油を注がれたことは、王の就任式のときに行なわれることを預言的に示したものであった。そのときは来た。ダビデは、厳粛な儀式によって、神の代表者としての職務に聖別された。王の笏が彼に手渡された。彼の義の統治の契約が書かれて、人々は忠誠を誓った。彼の頭に王冠がかぶせられて、戴冠式は終了した。イスラエルは、神の命じられた王をいただいた。忍耐して主を待ち望んでいた者は、神の約束の実現を見たのである。「こうしてダビデはますます大いなる者となり、かつ万軍の神、主が彼と共におられた」（同・五ノ一〇）。

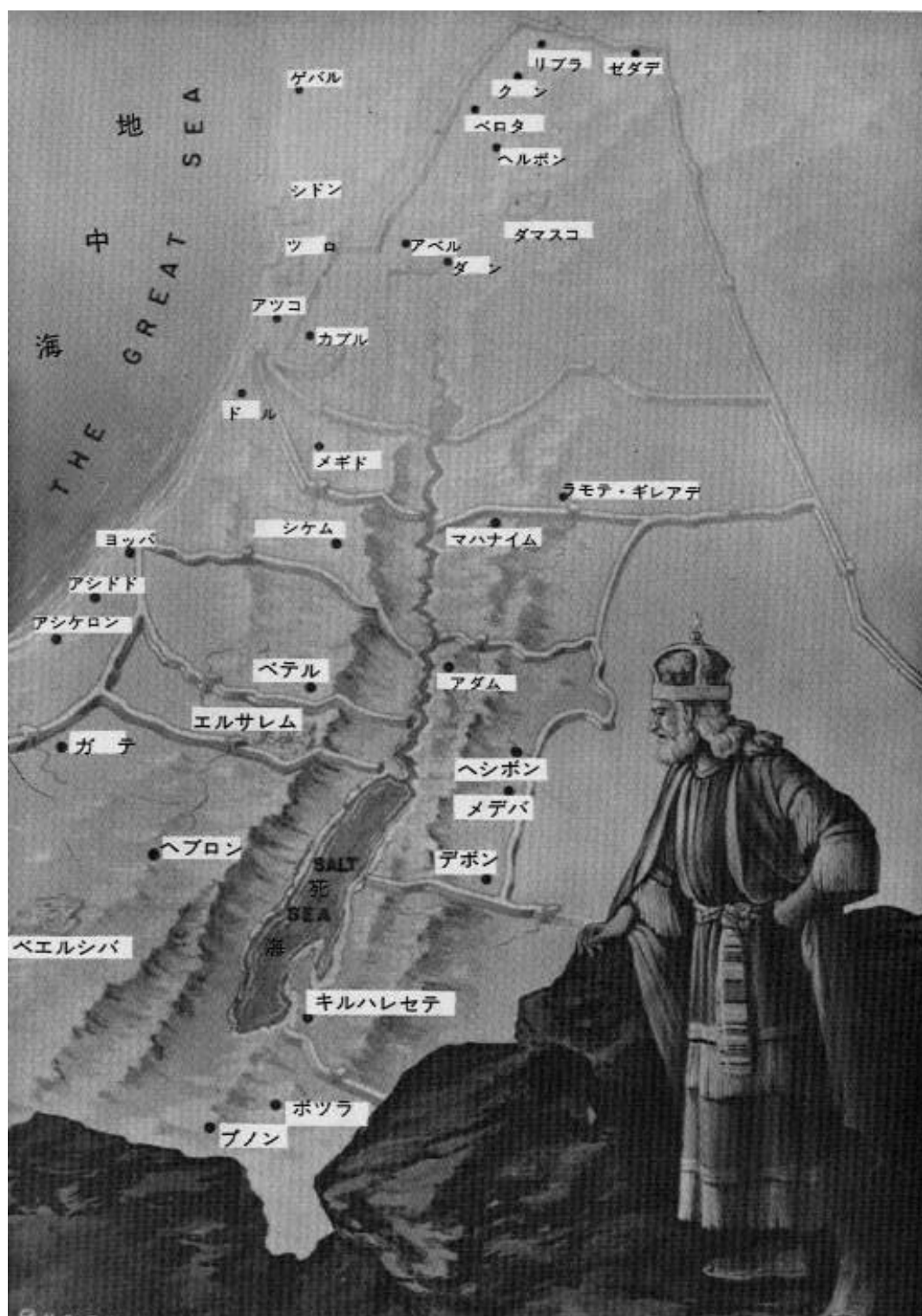
第 70 章

ダビデの治世

本章は、サムエル記下五ノ六 二五。六、七、九、一〇章に基づく。

ダビデは、イスラエルの王位が確立するとすぐ、彼の領土の都として、もつと適当な場所をさがし始めた。そして、ヘブロンから二〇マイル離れたところが、王国の将来の都に選ばれた。そこは、ヨシユアがヨルダン川を渡って、イスラエル軍を導き入れる前は、サレムと呼ばれていた。アブラハムは、この場所の近くで、彼の神に対する忠誠を証明した。ダビデが王位につく八百年前、それは、いと高き神の祭司、メルキゼデクの故郷であった。それは、国土の中心の高台にあつて、山々にかこまれて守備されていた。それは、ベニヤミンとユダの国境にあつたので、エフライムにも近く、他の部族にも近かった。

この場所を確保するために、ヘブル人はシオンとモリアの山々に城塞を構えていたカナン人の残りを追放しなければならなかった。この城塞はエブスと呼ばれ、その住民はエブス人と言われていた。エブスは、幾世紀の間、難攻不落の城と思われていた。しかし、ヨアブを指揮官とするヘブル人が、これを包囲して占領した。ヨアブは、その功を認められて、イスラエル軍の総指揮官に任じられた。こうして、エブスが国家の首都になり、異



イスラエルの領土は、まずアブラハムに与えられ、後にモーセにもくり返された約束のように、エジプトの川からユフラテ大川までの範囲が与えられた。

教の名がエルサレムと変更された。

地中海沿岸の富裕な町ツロの王ヒラムは、イスラエルの王と同盟を結ぶことを求めた。そして、エルサレムの宮殿建設に当たって、ダビデに援助を与えた。ツロから使者がつかわれて来た。それと共に大工と石工が送られ、高価な木材、香柏、その他の貴重な資材を積んだ長い行列が続いた。

イスラエルは、ダビデのもとに統一されて、強大な力を持ち、エブスの城塞を占領し、ツロの王ヒラムと同盟を結んだことが、ペリシテ人の戦意を刺激した。そこで、彼らはふたたび大軍を率いて、国内に侵入し、エルサレムのすぐ近くのレバイムの谷に陣取った。ダビデは、部下たちと共にシオンの要害に退き、神の指示を待った。

「ダビデは主に問うて言った、『ペリシテびとに向かつて上るべきでしょうか。あなたは彼らをわたしの手に渡されるでしょうか』。主はダビデに言われた、『上るがよい。わたしはかならずペリシテびとをあなたの手に渡すであろう』」(サムエル記下五ノ一九)。

ダビデは、すぐに敵に向かつて進撃し、彼らを打ち破って殺し、彼らが自分たちの勝利を確実にするために持ち出していた神々をぶんどった。ペリシテ人は、この屈辱的敗北に憤激して、再度襲来を試みた。彼らは、ふたたび上ってきて、『レバイムの谷に広がった』(同・五ノ二二)。ダビデは、もう一度主の助けを求めた。すると偉大な「わたしはある」と言われる神は、イスラエル軍の指揮に当たられた。

神は、ダビデに指示を与えて言われた。「上ってはならない。彼らのうしろに回り、バルサムの木の前から彼らを襲いなさい。バルサムの木の上に行進の音が聞えたならば、あなたは奮い立たなければならない。その時、主があなたの前に出て、ペリシテびとの軍勢を撃たれるからである」(同・五ノ二三、二四)。もしもダビデが、

サウルのように自分かつてなことをしていたならば、成功が与えられなかったことであろう。しかし、彼は主の命令に従った。そして、「ダビデは神が命じられたようにして、ペリシテびとの軍勢を撃ち破り、ギベオンからゲゼルに及んだ。そこでダビデの名はすべての国々に聞えわたり、主はすべての国びとに彼を恐れさせられた」（歴代志上一四ノ一六、一七）。

こうして、ダビデの王位は確立し、外敵の侵入もなくなったので、彼は、神の箱をエルサレムに移すという念願を達成しようと思った。箱は、長年の間、九マイル離れたキリアテ・ヤリムに置かれていた。しかし、国家の都に神の臨在のしるしを持つてくることは、ふさわしいことであつた。

ダビデは、それを非常な喜びと荘厳な式典にしたいと思つたので、イスラエルの指導者たち三万人を召集した。人々は、喜んで召集に応じた。大祭司と聖職についていた兄弟たち、部族のつかさたちや指導者たちは、キリアテ・ヤリムに参集した。ダビデは、聖なる熱意に燃えていた。箱は、アビナダブの家から運び出されて、新しい牛車にのせられた。そして、アビナダブのふたりのむすこがそれにつきそつた。

イスラエルの人々は、大喜びで叫び、歡喜の歌をうたつて従い、樂器の音に合わせて歌う群衆の声がそれに和した。「ダビデとイスラエルの全家は琴と立琴と手鼓と鈴とシンバルとをもつて歌をうたい、力をきわめて、主の前に踊つた」（サムエル記下六ノ五）。イスラエルが、このように勝ち誇つた光景を目撃したのは、久しぶりのことであつた。厳肅なうちにも喜びに満ちて、巨大な行列は山を越え谷を渡つて、聖都に向かつて進んだ。

ところが、「彼らがナコンの打ち場にきた時、ウザは神の箱に手を伸べて、それを押えた。牛がつまずいたからである。すると主はウザに向かつて怒りを発し、彼が手を箱に伸べたので、彼をその場で撃たれた。彼は神の

箱のかたわらで死んだ」(同・六ノ六、七)。突然、喜んでいた群衆は恐怖に襲われた。ダビデは、驚き、大いに恐れて、心の中で神の正義を疑った。彼は、神の臨在の象徴として箱を尊ぼうとしていたのである。それなのになぜこの恐ろしい罰が与えられて、喜ばしい光景が悲しみと嘆きの時とかわったのであろうか。ダビデは、箱を自分の身边に置くのは安全でないと考えて、そのままその場に止めておくことにした。それは近くにあったガテ人才ベデエドムの家に置かれた。

ウザの死は、明白な命令にそむいた罰であつた。主は、モーセによつて、箱を運ぶときの特別の指示を与えておられた。アロンの子孫の祭司以外は、それに触れることも、おおいをかけずに見ることさえできなかった。「その後コハテの子たちは、それを運ぶために、はいつてこなければならぬ。しかし、彼らは聖なる物に触れてはならない。触れると死ぬであろう」と命じられていた(民数記四ノ一五)。祭司が箱におおいをかけ、そのあとでコハテ人が、箱の両側の環に通して固定されたさおを持つて持ち上げなければならなかった。モーセは、幕屋の幕と板と柱の責任を負わせられたゲルシヨンの子たちとメラリの子たちには、ゆだねられたものを運ぶために牛車を与えた。「しかし、コハテの子たちには、何をも渡さなかった。彼らの務は聖なる物を、肩になつて運ぶことであつたからである」(同・七ノ九)。したがつて、彼らがキリアテ・ヤリムから箱を移動した場合、主の指示に対して直接、許すことのできない違反を犯したのであつた。

ダビデと彼の民とは、聖なる働きをするために集まり、心から喜んでそれに従事したのであつた。しかし、それが主の指示に従つて行なわれていなかったために、主はその奉仕を受け入れることがおできにならなかった。ペリシテ人は、神の律法を知らなかったから、箱をイスラエルに返すときに車に載せた。そして、主は、彼らの

努力をお受け入れになった。しかし、イスラエル人は、彼らの手中に、これらすべてのことに関する神のみむねを明らかにしたものを持っていた。そして、これらの指示をなおざりにすることは、神のみ栄えを汚すことであつた。ウザは僭越というさらに大きな罪を犯した。彼は神の律法を犯して、その神聖さを自覚しなくなり、告白しない罪をいだいたまま、神が禁じておられるにもかかわらず、神の臨在の象徴にあえて触れようとした。神は、部分的服従や神の戒めをあいまいに取り扱うことをお受け入れにならない。神は、ウザを罰することによって、神の要求に厳密な注意を払う重要性を、全イスラエルに印象づけようとされた。こうして、ひとりの人間の死によって、人々が悔い改めるようになり、幾千の人々を罰する必要があるようにするのであつた。

ダビデは、彼自身の心が、神の前に全的には正しい関係にないことを感じた。そして、ウザが撃たれたのを見て、自分も何かの罪のために罰せられるのではないかと思つて、箱を恐れた。しかし、オベデエドムは、喜びにふるえながらも、服従する者に対する神の恵みの契約として、神聖な象徴を歓迎した。今や、全イスラエルの注目がガテ人と彼の家族に向けられた。すべての者は、それが彼らのところかどうかを見守つた。「主はオベデエドムとその全家を祝福された」(サムエル記下六ノ一一)。

神の譴責は、ダビデに対して効果を現わした。彼は、これまでになかつたほどに、神の律法の神聖さと厳密に服従する必要とを自覚した。オベデエドムの家が祝福されたので、ダビデは、箱が彼と彼の民に祝福をもたらすであろうという希望をふたたびいただくことができた。

彼は、三か月後にもう一度箱を移動させようと考えた。そして、今度は、主の指示に厳密に従おうと真剣に注意するのであつた。ふたたび、国家のおもだった人々が召集され、大群衆がガテ人の家のまわりに集まつた。箱

はうやうやしく、神の命を受けた人々の肩に載せられた。群衆は、その後に従った。大行列は、震えおののきながら、ふたたび動き出した。六歩進むと、ラッパが鳴って大行列は止まった。ダビデの命によって、「牛と肥えた物」が犠牲としてさげられた(同・六ノ一三)。こうして、恐れとおののきが喜びに代わった。王は、王衣を脱いで、祭司が着るような亜麻布のエポデを身につけた。この行為によって、彼は、祭司の勤めをしようと思つたのではなかった。エポデは、時には、祭司以外の人も着ていた。しかし、彼は、この聖なる式典において、神の前に彼の国民と平等の立場をとりたかったのである。その日、あがめられるのは、主であつた。ただ主だけが尊崇の対象とならなければならなかった。

長い行列は、ふたたび動きだして、琴、角笛、ラッパ、シンバルなどの樂の音が、多くの人の歌声とまじって空に響いた。そして、ダビデは喜びに満ちて、歌の調子に合わせて、「主の箱の前で踊った」(同・六ノ一四)。

ダビデが神の前で、敬虔な喜びに満ちて踊ったことを引用して、快樂愛好者たちは今流行している社交ダンスを正当化しようとするが、これは、そうした議論の根拠にはならない。今日、ダンスといえ、道楽と夜半の酒宴と結びついている。快樂のために、健康と道徳が犠牲にされている。ダンス・ホールに行く人々は、神を考えたもなければ、敬いもしない。祈りや賛美の歌は、彼らのつどいの場には不適當に思われる。これが決定的試験でなければならぬ。クリスチャンは、神聖なことに關する愛を弱めたり、神に奉仕する喜びを減少したりする傾向のある娛樂を求めてはならない。箱を移動するに当たって、喜びにあふれて神をたたえた音楽と踊りは、今日のダンスという娛樂とは、少しも似通つたところがなかったのである。一つは、神をおぼえて神の神聖な名を高めるものであつた。他のものは、人々に神を忘れさせ、神のみ名を汚させるサタンの手段である。

凱旋の行列は、彼らの目には見えない王の神聖な象徴に従って、都に近づいた。すると、突然、人々は大声で歌いだして、城壁を守る者らに、聖都の門を開くように命じた。

「門よ、こうべをあげよ。とこしえの戸よ、あがれ。

栄光の王がはいられる」。

一団の歌う人々と楽器を奏する人々は答えた。

「栄光の王とはだれか」。

別の一団がそれに答えた。

「強く勇ましい主、戦いに勇ましい主である」。

すると幾百の声がそれに和して、凱旋の合唱の声は高まった。

「門よ、こうべをあげよ。とこしえの戸よ、あがれ。

栄光の王がはいられる」。

ふたたび、「この栄光の王とはだれか」という喜びに満ちた問いが聞こえた。すると、「多くの水の音」のような大群衆の声が、歓喜に満ちあふれて答えるのが聞こえた。

「万軍の主、これこそ栄光の王である」。

(詩篇二四ノ七 一〇、黙示録一九ノ六)

こうして門は広く開かれて、行列は都の中にはいり、箱は、それを迎えるために設けられた天幕の中にうやうやしく安置された。神聖な場所の前に、犠牲をささげる祭壇が築かれた。酬恩祭と燔祭の煙と、香の煙とがイス

ラエルの賛美と祈りとともに、天にのぼっていった。礼拝はこれで終わった。王は、自分で民を祝福した。そして、王は、恵み深くも食物とほしぶどうの贈り物を、茶菓として彼らに分け与えた。

この式典には、全部族が代表されていた。これは、ダビデのこれまでの治世のうちで、最も神聖な祝典であった。神の靈感が王に臨んだ。そして、沈みゆく太陽の光線が、幕屋を聖なる光に包んだときに、彼は、恵み深い神の臨在の象徴が、イスラエルの王座のそば近くに、いま、置かれたことを、心から感謝したのである。

ダビデは、こうした瞑想にふけりながら、「家族を祝福しようとして、」宮殿のほうに向かった(サムエル記下六ノ二〇)。しかし、ダビデの心を感動させた精神とは、全く異なった感情をいだいて、この喜ばしい光景を見たものがあつた。「主の箱がダビデの町にはいった時、サウルの娘ミカルは窓からながめ、ダビデ王が主の前に舞い踊るのを見て、心のうちにダビデをさげすんだ」(同・六ノ一六)。彼女は、腹を立てて苦り切り、ダビデが宮殿に帰ってくるまで待つことができず、彼を出迎えて、ダビデのやさしいあいさつの言葉に対して苦々しい言葉でしゃべりまくった。彼女の言葉は、鋭く心を刺す皮肉であつた。

「きようイスラエルの王はなんと威厳のあつたことでしょう。いたずら者が、恥も知らず、その身を現すように、きよう家来たちのはしためらの前に自分の身を現されました」(同・六ノ二〇)。

ダビデは、ミカルが軽べつして侮辱したのは、神の礼拝であることに気づいて、きびしい言葉で答えた。「あなたの父よりも、またその全家よりも、むしろわたしを選んで、主の民イスラエルの君とせられた主の前に踊ったのだ。わたしはまた主の前に踊るであろう。わたしはこれよりももっと軽んじられるようにしよう。そしてあなたの目には卑しめられるであろう。しかしわたしは、あなたがさきに言った、はしためたちに誉を得るであ

う」(同・六ノ二二、二三)。ダビデの譴責に、主の譴責も加えられた。ミカルは、彼女の誇りと高慢のゆえに、「死ぬ日まで子供がなかった」(同・六ノ二三)。

箱の移動に当たって行なわれた厳粛な儀式は、イスラエルの人々に忘れ得ぬ印象を与えた。それは、聖所の務めに深い関心を喚起し、主に対する熱心を新たに燃え立たせた。ダビデは、力のかぎりを尽くして、こうした印象を深めようと努力した。歌による礼拝が、定期集会の中で定まって行なわれるようになった。ダビデは、聖所の務めのときに祭司が歌う詩篇ばかりでなくて、年ごとの祭りの際に、国立の祭壇まで人々が旅をするときに歌うものも作った。こうした影響は非常に強くて、国家が偶像礼拝に陥るのを防いだ。周囲の人々の多くは、イスラエルの繁栄をながめて、その民のために、このような偉大なことをなさったイスラエルの神をよく思うようになった。

モーセが建てた幕屋は、箱を除くほかのすべての備品とともに、まだ、ギベアにあった。ダビデは、エルサレムを国家の宗教的中心にしようと考えた。彼は、自分のために宮殿を造った。それなのに、神の箱が天幕の中にあるのは、適当でないと考えた。ダビデは、彼らの王であられる主の臨在によって国家に与えられた榮譽に対して、イスラエルがいだいている感謝を表現するに足る壮麗な神殿を建てようと決心した。預言者ナタンにこの決意を伝えると、次のような励ましの返答があった。「主があなたと共におられますから、行って、すべてあなたの心にあるところを行いなさい」(同・七ノ三)。

しかし、その晩、主の言葉がナタンに臨み、王に対する言葉が与えられた。神のために家を建てる特権はダビデには与えられなかった。しかし、彼と彼の子孫とイスラエルの国に神の恵みの約束が授けられた。「万軍の主はこう仰せられる。わたしはあなたを牧場から、羊に従っている所から取って、わたしの民イスラエルの君とし、

あなたがどこへ行くにも、あなたと共におり、あなたのすべての敵をあなたの前から断ち去った。わたしはまた地上の大いなる者の名のような大いなる名をあなたに得させよう。そしてわたしの民イスラエルのために一つの所を定めて、彼らを植えつけ、彼らを自分の所に住ませ、重ねて動くことのないようにするであろう。また前のように、…悪人が重ねてこれを悩ますことはない」(同・七ノ八 一一)。

ダビデは、神のために家を建てたいと望んでいたので、約束が与えられた。「主はまた『あなたのために家を造る』と仰せられる。…わたしはあなたの…子を、あなたのあとに立てて、…彼はわたしの名のために家を建てる。わたしは長くその国の位を堅くしよう」(同・七ノ一 一三)。

ダビデが神殿を建てることのできない理由が明らかにされた。「おまえは多くの血を流し、大いなる戦争をした。…わが名のために家を建ててはならない。見よ、男の子がおまえに生れる。彼は平和の人である。わたしは彼に平安を与えて、周囲のもろもろの敵に煩わされないようにしよう。彼の名はソロモン(平和な)と呼ばれ、彼の世にわたしはイスラエルに平安と静穏とを与える。彼はわが名のために家を建てるであろう」(歴代志上二二ノ八 一〇)。

ダビデは、かねてからの彼の希望がかなえられなかったけれども、感謝してこの言葉を受け入れた。「主なる神よ、わたしがだれ、わたしの家は何であるので、あなたはこれまでわたしを導かれたのですか。主なる神よ、これはなおあなたの目には小さい事です。主なる神よ、あなたはまたしもべの家の、はるか後の事を語って、きたるべき代々のことを示されました」(サムエル記下七ノ一八、一九)。それから、彼は、彼の神との契約を更新した。ダビデは、心の中でしようと計画した工事をすることは、彼の名の栄誉であり、彼の政府に栄光をもたらすも

のであることを知っていたが、快く彼の意志を神のみこころに服従させた。このように感謝の気持ちをもって思い切ることは、クリスチャンの中でさえ、あまり見られない。壮年の力にあふれた時期が過ぎても、したいと思った何かの大事業を自分でやりとげようとする人が、なんとよくあることであろう。ところが、彼らは、それに不適任なのである。神の預言者がダビデに語ったように、神の摂理は、彼らがしようと望んでいる仕事、彼らに与えられないことを告げる。他のために道を備えるのが彼らの仕事である。しかし、多くの者は感謝して、神の指示に従うかわりに、自分たちが軽視または拒否されたものと思い、しりごみしてしまい、もし、自分たちがしようと思ったことができないのならば、何もするまいと思うのである。また、負う能力のない責任をなんとかして保持しようと努力する者が多い。彼らは、自分では十分することができないことをしようとしてむなしく努力する一方、彼らのできることをおろそかにしている。こうして、彼らが協力しないために、大事業が妨害されたり、挫折したりするのである。

ダビデは、ヨナタンと契約を結んで、敵との戦いが終わったならば、サウルの家の人に恵みを施すことを約束した。王は、成功したときに、この契約を覚えていてたずねた。「サウルの家の人で、なお残っている者があるか。わたしはヨナタンのために、その人に恵みを施そう」(同・九ノ二)。彼は、子供のときから足なえであったヨナタンの子メピボセテのことを聞いた。サウルが、エズレルでペリシテ人に敗れたとき、この子のうばが彼を連れて逃げるときに、誤って落として、取りかえしのつかぬ足なえにしてしまった。ダビデは、この青年を宮廷に呼び、心から親切に彼を迎え入れた。彼はメピボセテの家をささえるために、サウル個人の財産を彼に返した。しかし、ヨナタンの子メピボセテ自身は、いつも王の客となり、毎日王の食卓で食事をするのであった。メピボ

セテは、ダビデの敵の話を聞いて、彼を横領者のように考えて強い偏見をいだいていたが、王の寛大で丁寧な歓迎と親切な取り扱いは、彼の心を捕えた。彼は、ダビデに強く引きつけられた。そして、ヨナタンと同様に、神が選ばれた王に心からの忠誠を尽くすようになった。

ダビデの王座が確立してから後、イスラエルの国は、長い間平和であった。国家が強力に一致しているのを見た周囲の国々は、公然と戦争をしけないほうが得策であると考えた。そして、ダビデも、国家の組織と建設に力を注いで、戦いをしむけることはしなかった。しかし、ついに彼は、以前からの敵国ペリシテとモアブと戦って、両国を征服して属国とした。

その後、周囲の国々がダビデの王国に対抗して、大同盟軍を結成した。そのため、ダビデの治世中の最大の戦争が起こって、最大の勝利をおさめることになり、領土が最も拡大されるのであった。実は、この敵の同盟は、ダビデの勢力の増大をねたむ心から起こったもので、全然ダビデが挑発したものではなかった。それは、次のような事情によるものであった。

アンモン人の王ナハシの死が、エルサレムに伝えられた。この王は、ダビデがサウルの怒りを避けて逃亡していたときに、ダビデを親切にもてなした王であった。そこで、ダビデは、自分が苦しんでいたときの親切に対する感謝を表わすために、アンモン王の子で、その後継者のハヌンに使者を送って、弔意を表させた。「わたしはナハシの子ハヌンに、その父がわたしに恵みを施したように、恵みを施そう」と彼は言った(同・一〇ノ二)。

しかし、この丁寧な行為は誤解された。アンモン人は、真の神を憎み、イスラエルの恨み重なる敵であった。ナハシがダビデに親切をよそおったのは、全くイスラエルの王サウルに対する憎しみからであった。ハヌンのつ

かさたちは、ダビデの言葉を曲解した。「ダビデが慰める者をあなたのもとにつかわしたのは彼があなたの父を尊ぶためだと思われますか。ダビデがあなたのもとに、しもべたちをつかわしたのは、この町をうかがい、それを探つて、滅ぼすためではありませんか」と彼らは言った(同・一〇ノ三)。半世紀前、ヤベシ・ギレアドの人々がアンモン人に包囲されて和を請うたときに、ナハシは彼のつかさたちの勧告を入れて、残酷な条件を出したのである。ナハシは、彼らの右の目を全部くりぬくことを要求したのであった。ところが、イスラエルの王がアンモン人の残酷な策略の裏をかいて、彼らがはずかしめて不具にしようとした人々をどのようにして救つたかを、彼らはまだありありと覚えていた。イスラエルに対する同じ憎しみが、まだ彼らの行動を支配していた。彼らは慰めの言葉を伝えたダビデの寛大な精神を思い知ることができなかった。サタンが人の心を支配するとき、彼らにねたみと疑惑の念をいだかせて、どんな善意をも曲解させてしまうのである。ハヌンは、つかさたちの勧告に聞き従つて、ダビデの使者たちを斥候とみなし、彼らを軽べつして侮辱した。

アンモン人は、彼らの本性が、ダビデによくわかるように、何の抑制も受けずに、彼らの邪悪な計画を実行することが許されたのである。イスラエルが、この不実な異邦の民と同盟を結ぶことは、神のみこころではなかった。

現在と同様、昔も、大使の任務は神聖なものとされていた。国家間共通の法律によつて、大使はその身に暴力または侮辱を受けることがないように、その身の安全が保証されていた。王の代表者として立つ大使に加えられる侮辱は、すぐに報復に価するものであった。イスラエルに加えた侮辱が必ず報復されることを知っていたアンモン人は、戦争の準備をした。「アンモンの人々は自分たちがダビデに憎まれることをしたとわかつたので、ハ

ヌンおよびアンモンの人々は銀千タラントを送ってメソポタミヤとアラム・マアカ、およびザバから戦車と騎兵を雇い入れた。すなわち戦車三万二千……雇い入れた……そこでアンモンの人々は町々から寄り集まって、戦いに出動した」(歴代志上一九ノ六、七)。

これは、実に恐るべき同盟軍であった。ユフラテ川から地中海に至る地域の住民が、アンモン人と同盟を結んだ。カナンの北と東は、イスラエル王国を粉碎しようとして結束した敵軍にかこまれた。

ヘブル人は、敵が国内に侵入するまで待たなかった。ヨアブの率いるヘブルの軍勢は、ヨルダン川を渡って、アマレクの都に向かって前進した。ヨアブは、軍勢を戦場に率い出したとき、彼らを鼓舞しようとして言った。「勇ましくしてください。われわれの民のためと、われわれの神の町々のために、勇ましくしましょう。どうか、主が良いと思われることをされるように」(同・一九ノ一三、サムエル記下一〇ノ一二参照)。連合軍の軍勢は、第一戦で敗れ去った。しかし、彼らは、戦いをやめようとせず、翌年戦争を再開した。スリヤ王は、大軍を結集してイスラエルをおびやかした。ダビデは、この戦争の勝敗の結果の重大性を悟って自分みずから指揮に当たり、神の祝福のもとに、同盟軍に多大な損害を与えた。そして、レバノンからユフラテに至るスリヤ人が降参したばかりでなくて、イスラエルの属国になったのである。ダビデはアンモン人をも勇ましく攻め、ついに、彼らの城塞は落ちて、その全地域はイスラエルの領土となった。

国家の存在を脅かした危機は、神の摂理のもとにイスラエルを、これまでになく強大な国家にする手段そのものとなった。この驚くべき救済を記念して、ダビデは歌った。

「主は生きておられます。わが岩はほむべきかな。

わが救の神はあがむべきかな。

神はわたしにあだを報いさせ、

もろもろの民をわたしのもとに従わせ、

わたしの敵からわたしを救い出されました。

まことに、あなたはわたしに逆らって

起りたつ者の上にわたしをあげ、

不法の人からわたしを救い出されました。

このゆえに主よ、

わたしはもろもろの国民のなかであなたをたたえ、

あなたのみ名をほめ歌います。

主はその王に大いなる勝利を与え、

その油そそがれた者に、ダビデとその子孫とに、

としえにいつくしみを加えられるでしょう」。

(詩篇一八ノ四六 五〇)

ダビデの歌全体を通じて、人々は、主が彼らの力であり救いであるという印象を強く受けたのである。

「王はその軍勢の多きによつて救を得ない。

勇士はその力の大きいなるによつて助けを得ない。

馬は勝利に頼みとまらない。

その大いなる力も人を助けることはできない」。

(詩篇三三ノ一六、一七)

「あなたはわが王、わが神、

ヤコブのために勝利を定められる方です。

われらはあなたによつて、あだを押し倒し、

われらに立ちむかう者を、

み名によつて踏みにじるのです。

わたしは自分の弓を頼まず、わたしのつるぎもまた、

わたしを救うことができないからです。

しかしあなたはわれらをあだから救い、

われらを憎む者はずかしめられました」。

(詩篇四四ノ四七)

「ある者は戦車を誇り、ある者は馬を誇る。

しかしわれらは、われらの神、

主のみ名を誇る」。

(詩篇二〇ノ七)

こうして、イスラエル王国は、まずアブラハムに約束され、後にモーセにくりかえして与えられた約束どおりの範囲に達したのである。「わたしはこの地をあなたの子孫に与える。エジプトの川から、かの大川ユフラテまで」(創世記一五ノ一八)。イスラエルは、周囲の国々から尊敬され、恐れられる大国になった。国内におけるダビデの勢力も非常に大きくなった。彼は、どの時代においても見られなかったほど、国民の愛情と忠誠をかち得たのである。彼は、神をあがめたのであった。だから、神は、今、彼に栄誉を与えておられるのであった。

しかし、繁栄のさなかに危険がひそんでいた。ダビデは、外的に最大の勝利を収めていたときに、最大の危機に陥り、最も屈辱的敗北を喫したのである。

第 71 章

ダビデの罪と回心

本章は、サムエル記下 一一、一二章に基づく。

聖書には、人間を賞賛する言葉がほとんどない。この世に生存した最も善良な人々の美德でさえ、聖書にあまり書かれていないのである。この沈黙は無意味ではない。そこに教訓が隠されている。人間が持っている美点は皆、神の賜物である。彼らの善行は、キリストを通して与えられた神の恵みによつて行なわれた。彼らは、すべてを神に負っているのであるから、彼らがどんな人間で、どんな行為をしようとその誉れは神にだけ帰すべきである。彼らは、ただ、み手の中の器に過ぎないのである。そればかりではない。聖書歴史のすべての教訓が教えているように、人間を賞賛し、高めることは危険である。なぜなら、人間が、神に全く依存していることを見失い、自分自身の力にたよるようになると、彼は必ず墮落するからである。人間は、人間以上に強い敵と戦っている。「わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである」(エペソ六ノ一二)。われわれは、自分の力で戦い続けることはできない。そして、心を神からそらし、自己高揚と自己依存に陥れるものは何であっても、必ず、われわれを敗北させるも

のである。聖書は、人間の能力にたよらず、神の力にたよることを奨励するのをその主題としている。

ダビデを墮落させたのは、自己過信と自己高揚の精神であつた。甘言、陰險な権力の誘惑、ぜいたくなどが、彼に影響を与えにはおかなかつた。回りの国々との交際もまた悪影響を及ぼした。東方の諸王の間の習慣に従つて、国民の間では許されない犯罪が王には許された。王には、国民と同様の自制をする義務がなかつたのである。こうしたことは、すべて、罪が、はなはだしく憎むべきものであることを、ダビデに感じさせなくしたのである。そして、彼は心を低くして主の力にたよる代わりに、自分自身の知恵と力にたよりはじめた。サタンは、唯一の力の源である神から魂を引き離すとすぐに、人間の肉の心の汚れた欲望を起こさせようとする。敵の働きは、急激ではない。それは、最初は、突然でも驚くほどのものでもない。それは、原則の城塞をひそかにくつがえすことである。それは、初め、神に対する忠誠と、全く神に信頼することを怠るとか、世の風俗や習慣に従おうとする気持ちなどの、一見小さいことから始まる。

ダビデは、アンモン人との戦争を終結する前に、軍務をヨアブにゆだねて、エルサレムに歸つた。スリヤ人はすでにイスラエルに降伏していた。そして、アンモン人の全滅も確実に思われた。ダビデは、戦勝の成果と彼の賢明で有能な統治の栄光に包まれていた。誘惑者が彼の心を捕える機会をつかんだのは、彼がくつろいで油断していたときであつた。神が、ダビデを神との密接な交わりに入れ、大きな恵みを彼に現わされたということが、彼の品性を汚さずに守る最も強力な刺激となつていなければならなかつた。しかし、落ちついて、自己の安全が確保されたときに、彼は神を手放した。ダビデはサタンに敗れて、魂に罪の汚点をつけた。国家の指導者として神の命を受け、神の律法を施行するために神に選ばれた彼自身が、その戒めをふみにじつた。悪人を恐れさせる

べきであつた者が、自分自身の行為によつて、悪を勧めたのである。

ダビデは若いころ、危険のまつただ中であつたとき、自分の潔白を意識して、自分のことを神にゆだねることができた。主の手は、彼の足をつまずかせようとおかれた無数のわなの間を導いて、無事に通らせてくださった。しかし、彼は、今、罪を犯しても悔い改めず、天の神の助けも導きも求めずに、罪のために陥つた危険から、自分で脱出しようとしたのである。王を罪に陥れた美しい女バテシバは、ダビデの最も忠勇な將軍のひとりヘテ人ウリヤの妻であつた。もし、犯罪が明るみに出たら、どういふことになるかは、だれにも予測できなかった。神の律法は、姦淫の罪を犯したものに死の宣告を下していた。であるから、このように恥辱をこうむつた高慢な軍人は、王の生命をとるか、あるいは国民に反逆を扇動して報復を企てるかも知れなかつた。

罪を隠そうとするあらゆる努力は、すべてむだに終わつた。彼は、サタンの権下に自分を陥れてしまった。危険が、彼を取り巻き、死よりもきびしい恥辱が迫つていた。脱出する道はただ一つしかないように思われた。そして、彼は絶望のあまり、急いで姦淫に殺人の罪を加えたのである。サウルの滅びを企てた者が、ダビデをも滅ぼそうとしていた。誘惑は異なつていたが、それらは、ともに神の律法を犯させるものであつた。もし、ウリヤが戦場で敵の手によつて殺されたならば、彼の死の責任を王が問われることはない。そして、バテシバは、なんの妨げもなくダビデの妻になることができ、疑惑は排除され、王の名誉は維持されるのであつた。

ウリヤは、自分自身の死の命令書を持つて送り出された。彼によつて王からヨアブへ送られた手紙は、こう命じていた。「あなたがたはウリヤを激しい戦いの最前線に出し、彼の後から退いて、彼を討死させよ」(サムエル記下一一ノ一五)。ヨアブは、すでに非道な殺人の罪を一つ犯していたので、王の命令に従ふことをためらわな

った。こうして、ウリヤはアンモン人の手によって倒れた。

これまで、ダビデの王としての記録は、どんな王も及ばなかったほどのものであった。彼について、「すべての民に正義と公平を行った」と書かれている(同・八ノ一五)。彼の誠実さが、国民の信頼と忠誠を勝ち得たのであった。しかし、彼が神から離れ、悪魔に従ったときに、彼は、一時的にサタンの手下になったのである。しかし、彼は、なお神が彼にお与えになった地位と権威を保持していた。であるから、彼は従う者の魂を危険に陥れるような要求をしたのである。こうして、神に対してでなくて、王に忠誠を尽くしたヨアブは、王が命令を下したために、神の律法を犯したのである。

ダビデの権力は、神から与えられたものであつて、それは、神の律法と調和したときにだけ行使されるべきものであつた。彼が神の律法に反して命令を下したときには、それに従うことは罪となつたのである。「おおよそ存在している権威は、すべて神によつて立てられたもの」であるが、神の命令に反したものに従つてはならない(ローマー三ノ一)。使徒パウロは、われわれが従うべき原則をコリント人に書いた。「わたしがキリストにならう者であるように、あなたがたもわたしにならう者になりなさい」(コリント第一・一一ノ二)。

ダビデの命令が実行されたという報告が、彼に送られたが、それは、ヨアブにも王にもなんの関係もないように、注意深く表現されていた。ヨアブは、「その使者に命じて言った、『あなたが戦いのことをつづさに王に語り終つたとき、もし王が怒りを起して、……言われたならば、その時あなたは、『あなたのしもべ、ヘテびとウリヤもまた死にました』と言いなさい』。こうして使者は行き、ダビデのもとにきて、ヨアブが言いかわしたことをことごとく告げた」(サムエル記下一一ノ一九 一二)。

王は答えて言った。「この事で心配することはない。つるぎはこれをも彼をも同じく滅ぼすからである。強く町を攻めて戦い、それを攻め落しなさい」と。そしてヨアブを励ましなさい」(同・一一ノ二五)。

バテシバは、定められた日数の間、夫のために悲しんだ。その喪が過ぎたときに、「ダビデは人をつかわして彼女を自分の家に召し入れた。彼女は彼の妻となつた(同・一一ノ二七)。自分の生命が危機にひんしたときでさえ、主が油を注がれた者に手を下さなかつたほどに敏感な良心と強い榮譽尊重の心をもっていたダビデが、彼の最も忠実で勇敢な軍人のひとりに対して悪事を行なつて殺害し、罪によつて手にしたものを、ひそかに楽しもうとするまでに墮落したのである。ああ、精金はなんと曇つたことであろう。最も純粹な金は、なんと変化したことであろう。

サタンは、最初から罪によつて利益が得られると人々に言つてきた。こうして彼は、天使たちをあざむいた。同様に彼はアダムとエバを罪に誘惑した。彼は、今もなお、こうして多くの人々を神に従わせまいとしている。罪の道は好ましいもののように見せられているが、「その終りはついに死に至る道」である(箴言一四ノ一二)。この道に踏み込んでも、罪の結果の苦さを悟つて、早くその道から離れたものは幸福である。神は、ダビデをあわれんで、彼が罪のいつわりの報酬によつて完全な滅びに陥るままに放任されなかつた。

また、イスラエルのためにも、神の介入が必要であつた。時の経過につれて、バテシバに対して行なつたダビデの罪が明るみに出て、彼がウリヤの死を計画したのではないかという疑惑が起こつた。主のみ栄えが汚された。主は、ダビデを恵み、高められた。ところがダビデの罪は、神の品性を誤表し「神のみ名をはずかしめた。それは、イスラエルにおける敬神の念の標準を下げ、多くの人々の心の中の罪に対する嫌悪感を低下させるものであ

った。他方では、神を愛することも恐れない人々は、それによって、大胆に罪を犯すのであった。

預言者ナタンが、ダビデに譴責の言葉を伝えるように命じられた。それは、恐ろしくきびしい言葉であった。

たいていの王は、このような譴責を受ければ、譴責者を死刑に処することは確実であろう。ナタンは、神の言葉をひるまず伝えたが、それを天から授かった知恵によって語り、王の共感を呼び、良心を覚醒させ、彼自身のくちびるから、自分に死の宣告を下させたのである。預言者は、国民の権利を守るために神の任命を受けたダビデに、補償を必要とする不正と圧迫の物語を告げたのである。

「ある町にふたりの人があつて、ひとりには富み、ひとりには貧しかった。富んでいる人は非常に多くの羊と牛を持っていたが、貧しい人は自分が買った一頭の小さい雌の小羊のほかは何も持っていなかった。彼がそれを育てたので、その小羊は彼および彼の子供たちと共に成長し、彼の食物を食べ、彼のわんから飲み、彼のふところまで、彼にとっては娘のようであつた。時に、ひとりの旅びとが、その富んでいる人のもとにきたが、自分の羊または牛のうちから一頭を取つて、自分の所にきた旅びとのために調理することを惜しみ、その貧しい人の小羊を取つて、これを自分の所にきた人のために調理した」（サムエル記下二二ノ一四）。

王は怒つて叫んだ。「主は生きておられる。この事をしたその人は死ぬべきである。かつその人はこの事をしたため、またあわれまなかつたため、その小羊を四倍にして償わなければならない」（同・二二ノ五、六）。

ナタンは、王をみつめた。そして、彼の右手を天にあげ、厳肅に言った。「あなたがその人です」（同・二二ノ七）。彼は続けて言った。「どうしてあなたは主の言葉を軽んじ、その目の前に悪事をおこなつたのですか」（同・二二ノ九）。悪人は、ダビデのように、人間から犯罪を隠そうとする。彼らは、悪い行為を人間の目と記憶から永

久に葬り去ろうとする。しかし、「すべてのものは、神の目には裸であり、あらわにされているのである。この神に対して、わたしたちは言い開きをしなくてはならない」(ヘブル四ノ一三)。「おおわれたもので、現れてこないものはなく、隠れているもので、知られてこないものはない」(マタイ一〇ノ二六)。

ナタンは言った。「イスラエルの神、主はこう仰せられる、『わたしはあなたに油を注いでイスラエルの王とし、あなたをサウルの手から救いだし……た。……どうしてあなたは主の言葉を軽んじ、その目の前に悪事をおこなったのですか。あなたはつるぎをもってヘテびとウリヤを殺し、その妻をとって自分の妻とした。すなわちアンモンの人々のつるぎをもって彼を殺した。……つるぎはいつまでもあなたの家を離れないであらう』。……『見よ、わたしはあなたの家からあなたの上に災を起すであらう。わたしはあなたの目の前であなたの妻たちを取って、隣びとに与えるであらう。……あなたはひそかにそれをしたが、わたしは全イスラエルの前と、太陽の前にこの事をするのである』」(サムエル記下二ノ七 一一)。

預言者の譴責は、ダビデの心を感動させた。良心は目ざめた。彼の罪がどんなに憎むべきものであるかが明らかにされた。彼は、神の前に悔いくずおれた。彼は、くちびるをふるわせて言った。「わたしは主に罪をおかしました」(同・二ノ一三)。他人に対して犯した悪事は、すべて害を受けた者から神へとさかのぼるのである。ダビデは、ウリヤとバテシバの両方に恐ろしい罪を犯したことを痛感した。しかし、神に対する罪は、それより無限に大きかったのである。

主に油を注がれた者に死刑を執行するものは、イスラエルにおいて思いだすことはできなかったのであるが、罪を犯して、まだ許しを受けていないダビデは、神の急速な刑罰がくだって殺されるのではないかとおののいた。



バテシバとの罪を隠そうとして、ウリヤを殺害したことを譴責するために、預言者ナタンがダビデ王につかわされた。

しかし、預言者によって、彼に言葉が送られた。「主もまたあなたの罪を除きました。あなたは死ぬことはないでしょう」(同・一二ノ一三)。

しかし、正義は維持されなければならなかった。死の宣告は、彼から、彼の罪の子に移された。こうして、王は悔い改める機会が与えられた。彼にとつて、子供の苦痛と死とは、彼の刑罰の一部であったが、それは、自分の死よりもはるかに苦いものであった。預言者は言った、「あなたはこの行いによって大いに主を侮ったので、あなたに生れる子供はかならず死ぬでしょう」(同・一二ノ一四)。

ダビデは、子供が撃たれたとき、断食と深くへりくだった思いをもって、その子の命のために嘆願した。彼は王衣と王冠とをぬいで、毎夜、地に伏して自分の罪のために苦しむ幼児のために、はりさけるばかりに悲しんで嘆願した。「ダビデの家の長老たちは、彼のかたわらに立って彼を地から起そうとしたが、彼は起きようとはしなかった(同・一二ノ一七)。個人または、町に刑罰の宣告が下されたときに、けんそんと悔い改めによって災いが止められ、即座に許しをお与えになる恵み深い神が、和解の使者を送られることがよくあったのである。ダビデは、こうしたことに心を励まし、子供の生命がある間、嘆願し続けたのである。しかし、子供が死んだことを聞いて、彼は静かに神の命に従った。彼が、自分自身で正当であると宣言した罪の報復の第一撃がくだったのであった。しかし、ダビデは、神の恵みに信頼して、慰めを得たのである。

ダビデの墮落の記録を読んで、「なぜこの記録が公表されたのだろうか。天の神から非常な栄誉を与えられた者の生涯のこの暗いできごとを世界に知らせることを神はなぜよしとされたのだろうか」と尋ねる人が非常に多い。預言者は、ダビデを譴責したとき、彼の罪について言った。「なんじこのわざによりて、主の敵に大いなるの

する機会を与え」た(同・一二ノ一四・文語訳参照)。その後、各時代を通じて無神論者たちは、この暗いしきをもつダビデの品性を指摘し、勝ち誇るとともにちよう笑して、「これが神の心になつた人だ」と叫んだ。こうして、宗教が恥辱をこうむり、神と神の言葉が冒瀆された。人々は、神を信じようとせず、多くの者は、敬虔なよそおいの陰で大胆に罪を犯すようになったのである。

しかし、ダビデの生涯は、罪を犯すことを勧めてはいない。彼が、神のみこころになつた人だと言われたのは、彼が神の指示に従つて歩んでいたことであつた。彼が罪を犯したときに、悔い改めて、主に立ち返るまでは、そうではなかつたのである。神の言葉は、「ダビデがしたこの事は主の目に悪であつた」と明らかに宣言している(同・一二ノ二七・文語訳参照)。主は、預言者を通じてダビデに言われた。「どうしてあなたは主の言葉を軽んじ、その目の前に悪事をおこなつたのですか。…あなたがわたしを軽んじ…たので、つるぎはいつまでもあなたの家を離れないであろう」(同・一二ノ九、一〇)。ダビデは罪を悔い改めて許され、主に受け入れられたのではあつたが、彼は、自分自身がまいた種の痛ましい実を刈り取つたのである。彼と彼の家にくだつた刑罰は、罪に対する神の憎しみを証明している。

これまで、神の摂理は、敵のあらゆる策略からダビデを守り、直接サウルを制するために働いてきた。しかしダビデの罪は、彼と神との関係を変えた。主が、彼の悪を是認することは、どうしてもおできにならなかつた。主はサウルの敵意からダビデを保護したように、彼を、彼の罪の結果から保護する力を働かせることはおできにならなかつた。

ダビデ自身にも大きな変化が起こつた。ダビデは、彼の罪とその広範囲に及ぶ影響とを自覺して、心がくだか

れた。彼は、国民の前で恥辱をこうむった。彼の感化力は弱まった。これまで、彼の繁栄は、彼が主の戒めに忠実に従ったためであると考えられていた。しかし、彼の罪を知った国民は、さらにかつて気ままに罪を行なうに至った。彼自身の家の中での彼の権威と、むすこたちに尊敬と服従を要求する彼の力とは弱まった。彼は、罪を責めるべきときにも、自己の罪悪感のために、沈黙を守った。これは、彼の腕を弱めて、彼の家の中で正義を行なうことを不可能にした。彼の悪行がむすこたちに影響を及ぼした。そして、神は、そうした結果が起らないように介入することをされなかったのである。神は、物事を自然のなりゆきにまかせられた。こうして、ダビデはきびしく罰せられた。

ダビデは、墮落後、まる一年間というものは、一見、安泰に暮らしていた。表だった神の怒りのしるしはなかった。しかし、神の宣告は、彼の頭上にかかっていた。どんな悔い改めも避けることのできない刑罰と報復の日、急速にしかも確実に近づいていた。それは、彼の全生涯を陰うつにする苦悩と恥辱であった。ダビデの例を引用して、自己の罪のとがを軽減しようと試みるものは、不真実な者の道は滅びであることを聖書から学ばなければならぬ。彼らも、ダビデのように悪の道から立ち直っても、罪の結果はこの世においてさえ、苦く耐えがたいものであることを知るであらう。

ダビデの生涯は、神に大いに祝福され、恵まれた者でさえも、自分は安全であると思ったり、目をさまして祈ることを怠ったりすべきでないことを警告するためのものであった。こうして、これは心を低くして、神が教えるようにされた教訓を学ぼうと努める者たちに対する警告となったのである。このようにして、世代から世代を通じて幾千という人々が、誘惑者の力に襲われる危険を自覚したのである。主から大きな栄誉を与えられたダビデ

の墮落は、彼らに自己不信の念を起こさせた。信仰によって与えられる神の力だけが、彼らを守ることができることを彼らは悟ったのである。彼らは、神の中に、彼らの力と安全とがあることを知って、サタンの領分に一步でも踏み込むことを恐れた。

神の宣告がダビデに下される以前から、彼はすでに、罪の実を刈り始めていた。彼の良心は休まらなかった。そのときの彼の心の苦しみが、詩篇三二篇に描かれている。彼は言っている。

「そのとががゆるされ、

その罪がおおい消される者はさいわいである。

主によって不義を負わされず、

その霊に偽りのない人はさいわいである。

わたしが自分の罪を言いあらわさなかった時は、

ひねもす苦しむうめいたので、

わたしの骨はふるび衰えた。

あなたのみ手が昼も夜も、

わたしの上に重かったからである。

わたしの力は、夏のひでりによって

かれるように、かれ果てた」。(詩篇三二ノ一 四)

そして、詩篇五一篇は、神からの譴責の言葉が与えられて、ダビデが悔い改めたときの言葉である。

「神よ、あなたのいつくしみによって、

わたしをあわれみ、

あなたの豊かなあわれみによって、

わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。

わたしの不義をことごとく洗い去り、

わたしの罪からわたしを清めてください。

わたしは自分のとがを知っています。

わたしの罪はいつもわたしの前にあります。…

ヒソプをもって、わたしを清めてください、

わたしは清くなるでしょう。

わたしを洗ってください、

わたしは雪よりも白くなるでしょう。

わたしに喜びと楽しみとを満たし、

あなたが砕いた骨を喜ばせてください。

み顔をわたしの罪から隠し、

わたしの不義をことごとくぬぐい去ってください。

神よ、わたしのために清い心をつくり、

わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。

わたしをみ前から捨てないでください。

あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。

あなたの救の喜びをわたしに返し、

自由の霊をもつて、わたしをささえてください。

そうすればわたしは、とがを犯した者に

あなたの道を教え、

罪びとはあなたに帰ってくるでしょう。

神よ、わが救の神よ、

血を流した罪からわたしを助け出してください。

わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう」。

(詩篇五一ノ一 一四)

こうして、祭司、士師、つかさ、軍人たちの居並ぶ宮廷の国民の公の集会で歌われる聖歌の中で、彼の墮落は最後の世代にまで伝えられるのであった。イスラエルの王は、彼の罪と悔い改めと、神の恵みによって許される

希望とを語ったのである。彼は、自分の罪を隠そうとせずに、彼の墮落の悲しい物語によって、他のものが教訓を受けるようにと望んだのである。

ダビデは、心から深く悔い改めた。彼は、自分の罪の弁解をしようとはしなかった。彼は、自分に下る刑罰からのがれようと望まずに、神に祈りをささげた。しかし、彼は、神に対する自分の罪の大きさを認めた。彼は、自分の心の汚れを悟った。彼は、自分の罪を嫌悪した。彼が祈ったのは、ただ許されることだけでなくて、心が清められることであつた。ダビデは、絶望して苦闘を放棄することをしなかった。悔い改める罪人に対する神の約束の中に、許されて受け入れられる証拠を彼は見たのである。

「あなたはいけにえを好まれません。

たといわたしが燔祭をささげても

あなたは喜ばれないでしょう。

神の受けられるいけにえは砕けた魂です。

神よ、あなたは砕けた悔いた心を

かろしめられません」。

(詩篇五一ノ一六、二七)

ダビデは倒れたのであるが、主は彼を起こされた。彼は、墮落する以前よりもっと神と調和し、同胞と心を

一つにするようになった。彼は、解放された喜びを歌った。

「わたしは自分の罪をあなたに知らせ、

自分の不義を隠さなかった。

わたしは言った、

『わたしのとがを主に告白しよう』と。

その時あなたはわたしの犯した罪をゆるされた。…

あなたはわたしの隠れ場であつて、

わたしを守つて悩みを免れさせ、

救をもつてわたしを囲まれる」。

(詩篇三二ノ五 七)

神は、こうしたことよりは、はるかに軽く思われる罪を犯したサウルを拒否したあとで、このように大罪を犯したダビデを許すとは、不公平であると言つて、つぶやく人が多い。しかし、ダビデは、けんそんに自分の罪を告白したが、サウルは、譴責を軽んじて、心を頑固にして、悔い改めなかったのである。

ダビデの生涯の中のこのできごとは、悔い改める罪人にとって、非常に重大である。これは、人類の苦闘と誘惑、そして、神に対する悔い改めと、われらの主イエス・キリストに対する信仰に関して与えられた最も感銘深

い例の一つである。これは、各時代を通じて、墮落して罪の重荷にあえぐ魂を鼓舞してきたのであった。罪に負
け、今にも絶望に陥ろうとした神の子供たちの多くは、ダビデが罪に苦しんだとは言え、真心からの悔い改めと
告白によつて、神に受け入れられたことを思い出したのである。そして、彼らもまた勇気づけられて、悔い改め、
神の戒めの道を歩もうと、ふたたび試みたのである。

神の譴責を受けたときに、けんそんに罪を告白して悔い改める者は、だれでもダビデのように希望をもつこと
ができるのである。信仰をもつて神の約束を受け入れるものは、だれでも許されるのである。主は、真に悔い改
める魂をひとりでもお捨てにならない。彼は、このように約束しておられるのである。「わたしの保護にたよつ
て、わたしと和らぎをなせ、わたしと和らぎをなせ」(イザヤ書二七ノ五)。「悪しき者はその道を捨て、正しから
ぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊
かにゆるしを与えられる」(同・五五ノ七)。

アブサロムの反逆

本章は、サムエル記下一三 一九章に基づく。

預言者ナタンのたとえを聞いたダビデは、何気なく、「四倍にして償わなければならない」と言い、自分自身に宣告を下すことになった(サムエル記下一三ノ六)。彼は、自分自身の宣告どおりに罰せられるのであった。彼の四人のむすこたちは、死ななければならなかった。そして、その死の一つ一つは、父の罪の結果起こるのであった。

ダビデは、長子アムノンの不面目な犯罪を罰しも譴責もせずに見過ごした。律法は、姦淫を犯すものに死の宣告を下していた。それに、アムノンの人間性にもとつた犯罪は、彼を二重に罪深いものにした。しかし、ダビデは、自分自身の罪に心を責められていたので、犯罪者を罰することができなかった。このように非道な扱いを受けた妹の兄で保護者であったアブサロムは、まる二年の間、報復の計画を心に秘めて、最後に決定的打撃を加えようとしていた。近親姦を犯したアムノンは、王子たちの宴会で酒に酔っているところを、彼の兄弟の命令によって殺された。

ダビデは、二重の罰が与えられた。恐ろしい知らせが王に伝えられた。『アブサロムは王の子たちをことごとく殺して、ひとりも残っている者がいない』…王は立ち、その着物を裂いて、地に伏した。そのかたわらに立っていた家来たちも皆その着物を裂いた（同・一三ノ三〇、三一）。王子たちは、驚いてエルサレムに帰り、事件の真相を彼らの父に話した。アムノンだけが殺されていたのである。「王の子たちはきて声をあげて泣いた。王もその家来たちも皆、非常にはげしく泣いた」（同・一三ノ三六）。しかし、アブサロムは、彼の母方の祖父、ゲシウル王、タルマイのもとに逃亡した。

アムノンは、ダビデの他の王子たちと同様に、かつてなことをするままに放任されていた。彼は、神の要求が何であろうと、彼のすべての欲求を満たそうとしていた。神は、彼が大きな罪を犯したにもかかわらず、彼を長く忍ばれた。彼は、二年の間、悔い改める機会が与えられていた。しかし、彼は、罪の生活を続け、罪あるままに殺されて、恐ろしい審判にあずかる身となった。

ダビデは、アムノンの犯罪を罰する義務を怠った。そして、王であり父であるダビデの怠慢と、王子の頑迷さのゆえに、主は、事件が当然の経過をたどるのを許し、アブサロムを制止されなかった。両親または支配者が、罪惡を罰する義務を怠るならば、神ご自身がその事件の処理に当たられる。こうして、惡の勢力を押えていた神の制止力が、いくぶんか除かれて、罪をもつて罪を罰するようなできごとが起こるのである。

ダビデが、アムノンを不当に扱って放縱を許した悪影響は、これで終わったものではなかった。というのは、アブサロムの父に対する離反が、ここから始まったからである。彼がゲシウルへのがれたあとで、ダビデは、むすこの犯罪に何かの罰を与える必要を感じて、彼が帰ってくることを禁じた。そして、これは、王がすでにかかわ

っている不可避の害悪を少なくするどころか、それを増大させる傾向があった。活気と野心に満ちてはいるが、無節操なアブサロムは、追放されて国事に参加できなくなると、やがて危険な策動に熱中したのである。

ヨアブは、二年の期間が終わったので、父と子との和解をはかろうと試みた。そのために、彼は、賢い女として評判の高いテコアの女の援助を得ることにした。彼女は、ヨアブの指示に従って、自分が寡婦であることと、ふたりのむすこが、彼女の唯一の慰めでありささえであったとダビデに言った。このふたりが争い、ひとりはずいにもうひとりを殺した。ところが、全家族は、兄弟を打ち殺した者を報復者に引き渡せと要求した。「こうして彼らは残っているわたしの炭火を消して、わたしの夫の名をも、跡継ぎをも、地のおもてにとどめないようにしましょう」と母親は言った(同・一四ノ七)。王は、この訴えを聞いて心を動かし、むすこに王の保護が与えられることを、彼女に約束した。

彼女は、むすこの身の安全に関する約束を、何度も王から与えられたあとで、王が、追放の身にある者と呼びもどされないために、自分を罪ある者とされていると言って、王が寛大な処置を取ることを嘆願した。「わたしたちはみな死ななければなりません。地にこぼれた水の再び集めることのできないのと同じです。しかし神は、追放された者が捨てられないように、てだてを設ける人の命を取ることはなさいません」(同・一四ノ一四)。ヨアブのような粗野な軍人が、神の罪人に対する愛を、このようにあわれみ深く感動的に描いたということは、イスラエルの人々が、贖罪の大真理をよく知っていた著しい証拠である。彼自身、神のあわれみの必要を感じた王は、この訴えを拒むことができなかった。「行って、若者アブサロムを連れ帰るがよい」と、王はヨアブに命じた(同・一四ノ二二)。

アブサロムは、エルサレムに帰ることを許された。しかし、宮廷に現われることも、父に会うことも許されなかった。ダビデは、子供たちに放縱な生活をさせた悪い結果に気づき始めていた。彼は、この美しい才能あるむすこを深く愛してはいたが、アブサロムと国民とに対する教訓として、このような犯罪に対する憎悪を示さねばならないと考えた。アブサロムは、自分の家で二年を過ごし、宮廷からは追放されていた。彼は妹といっしょにいた。そして、それは、彼女のこうむった取りかえしのつかない不当な扱いを常に思い起こさせた。国民一般の評価するところから見れば、王子は、犯罪者ではなくて、英雄であつた。そこで、彼は、それをよいことにして人々の心を自分に引きつけようとした。彼の容貌は、彼を見るすべての者が感嘆するほどに美しかった。「さて全イスラエルのうちにアブサロムのように、美しさのためほめられた人はなかった。その足の裏から頭の頂まで彼には傷がなかった」(同・一四ノ二五)。アブサロムのように、野心家で衝動的で激しやすい性質の人間を、二年間も閉じこめておいて自己の非運を嘆かせることは、王にとって賢明ではなかった。そして、エルサレムに帰ることを許しながら、彼が王の前に出ることをダビデが拒んだために、人々の同情が彼に集まつた。

ダビデは、自分自身が神の律法を犯したことを、深く脳裏に刻まれていたために、道德的まひ状態に陥つたものと思われる。彼は、罪を犯す以前は、勇敢で決断力に富んでいたのに、今は弱く、優柔不断になっていた。彼の人々に及ぼす影響も弱まつた。そして、こうしたことは、すべて親不孝な王子の策動に有利であつた。

アブサロムは、ヨアブを介して、もう一度父の前に出ることを許された。しかし、表面の和解は成立したように思われたものの、彼の野心的策動は続いた。彼は、戦車と馬、および自分の前に駆ける者五十人を備えて、自分が王であるかのようにふるまつた。そして、王は、次第に人を避け、孤独を好むようになる一方においてアブ

サロムはなんとかして人心を獲得しようと努めた。

ダビデの無関心と決断の欠如は、彼の家来たちにも影響を及ぼし、裁判の執行はなおざりにされ、遅々としてはかどらなかった。アブサロムは、巧みに人々の不満を利用した。この気高い容貌の男は、毎日、多くの嘆願者たちが、苦情の解決を求めて群がる町の門に姿を現わした。アブサロムは、彼らの中に混じって、彼らの苦情を聞き、彼らの苦難に同情し、政府の無能を嘆いた。こうして、イスラエルのある人の話を聞いて、王子は答えた。

「あなたの要求は良く、また正しい。しかしあなたのことを聞くべき人は王がまだ立てていない」。彼は言葉を続けて言った。「ああ、わたしがこの地のさばきびとであつたならばよいのに。そうすれば訴え、または申立てのあるものは、皆わたしの所にきて、わたしはこれに公平なさばきを行うことができるのだが」。そして人が彼に敬礼しようとして近づくと、彼は手を伸べ、その人を抱きかかえて口づけした（同・一五ノ三 五）。

王子の巧みな暗示に刺激されて、政府に対する不満が高まった。すべての人々が、アブサロムを賞賛した。彼は、人々から、王位の継承者だと思われていた。人々は彼をこの高い地位に適した人物として誇りに思っていた。そして、彼を王位につけようとする希望が燃え上がった。「こうしてアブサロムはイスラエルの人々の心を自分のものとした」（同・一五ノ六）。それにもかかわらず、むすこを盲目的に愛していた王は、なんの疑念もいかなかった。アブサロムが王子らしくふるまっていることは、ダビデの宮廷に対する榮譽であり、アブサロムが和解を喜んでいる表現であるとダビデは考えていた。

人々の心は、次の事件のために準備されていた。アブサロムは反逆の策を練るために、ひそかに特使を各部族に送っていた。そして今、宗教的礼拝という口実の陰に、彼の反逆的謀略が隠されていた。彼が以前に追放され

ていたときに行なった誓いをヘブロンで果たさなければならぬことになっていた。アブサロムは王に言った。「どうぞわたしを行かせ、ヘブロンで、かつて主に立てた誓いを果させてください。それは、しもべがスリヤのゲシュルにいた時、誓いを立てて、『もし主がほんとうにわたしをエルサレムに連れ帰ってくださいならば、わたしは主に礼拝をささげます』と言ったからです」(同・一五ノ七、八)。甘い父親は、むすこの敬神深さに心を慰められ、彼を祝福して去らせた。反逆の機は熟した。アブサロムの欺瞞行為の頂点は、王の目をくramsただけでなく、人々の信頼を勝ち得て、神によって選ばれた王に彼らを反逆させることであった。

アブサロムは、ヘブロンに向かって出発し、「二百人の招かれた者がエルサレムからアブサロムと共に行った。彼らは何心なく行き、何事をも知らなかった」(同・一五ノ一)。この人々は、王子に対する彼らの愛が、彼らをダビデ王に反逆させるようになることは少しも知らずに、アブサロムと共に行った。アブサロムは、すぐに、ダビデの議官のひとりで、知者として著名で、その意見は神の言葉と同様に安全で賢明なものと思われていたアヒトペルを呼んだ。アヒトペルは、共謀者たちに加わった。そして、彼の支持を得て、アブサロムの陰謀は確実に勝利するものと思われ、イスラエルの全国から多くの有力者が、彼の旗下に集まった。反逆のラッパが鳴ったとき、全国に散らばっていた王子の斥候たちは、アブサロムが王になったという知らせを広めたので、多くの者が彼のところに集まった。

一方、警報は、エルサレムと王に伝えられた。ダビデは、反逆が王座のすぐそばから起こったのを見て驚いた。彼が愛し信頼していた王子が、彼の王位を奪い、彼の命をも取ろうとしていたことは疑いなかった。ダビデは、この大危機にあたって、これまで長く彼をおおっていた陰うつな気持ちを払いのけて、彼の若いときの精神をも

って、この恐ろしい緊急事態に当面する準備をした。アブサロムは、わずか二〇マイル離れたヘブロンで、彼の軍勢を結集していた。反逆軍は、間もなくエルサレムの門に迫ってくるのであった。

ダビデは、王宮から「うるわしく、全地の喜びであり、大いなる王の都である」彼の都をながめた（詩篇四八ノ二）。ここで、大虐殺と破壊が行なわれることを考えて、彼は身震いした。今でもなお、王に忠誠を誓っている国民の援助を求めて、彼の都を防衛すべきであろうか。エルサレムで多くの血が流されることを許してよいであろうか。彼は決心した。選ばれた都を、戦争の惨事に陥れてはならなかった。彼は、エルサレムを去ろうと思った。そして、人々に彼を支持する機会を与えて、彼らの忠誠をためそうと思った。この大危機に当たって、神が彼に与えられた権威を維持することが、神と民とに対する彼の義務であった。戦いの結果は、神に任せようと思っただけである。

ダビデは、恥辱と悲しみのうちに、エルサレムの門を出た。彼は、愛した王子の謀叛によって、王位と王宮と神の箱とから追われているのであった。人々は、葬列のように長く悲しい行列を作って従った。王の護衛をつとめたケレテ人と、ペレテ人と、イッタイの指揮下にあったガテから来た六百人のガテ人とが王に従った。しかしダビデは、彼独特の無我の精神から、彼の保護を求めて集まっていたこれらの異邦人が、彼の不幸に巻き込まれることを承知しなかった。彼らが彼のために、こうした犠牲を喜んで払おうとするのに、彼は驚いた。そして、王は、ガテ人イッタイに言った。「どうしてあなたもまた、われわれと共に行くのですか。あなたは帰って王と共にいなさい。あなたは外国人で、また自分の国から追放された者だからです。あなたは、きのう来たばかりです。わたしは自分の行く所を知らずに行くのに、どうしてきょう、あなたを、われわれと共にさまよわせてよい

でしょう。あなたは帰りなさい。あなたの兄弟たちも連れて帰りなさい。どうぞ主が恵みと真実をあなたに示してくださるように」(サムエル記下一五ノ一九、二〇)。

イッタイは王に答えた。「主は生きておられる。わが君、王は生きておられる。わが君、王のおられる所に、死ぬも生きるも、しもべもまたそこにおります」(同・一五ノ二一)。この人々は、異教から主の礼拝に改宗したのであった。そして、彼らは、ここで、神と王とに対してりっぱに忠誠を尽くしたのである。ダビデは、一見、没落していく彼に対する彼らの忠誠を感謝して受け入れ、キデロンの谷を渡って荒野へ進んでいくのであった。

ふたたび行列はとまった。聖なる衣服をまとった一団が近づいてきた。「見よ、ザドクおよび彼と共にいるすべてのレビびともまた、神の契約の箱をかいてきた」(同・一五ノ二四)。ダビデの従者たちは、これを吉兆とみなした。彼らは、その神聖な象徴が来たことによつて、彼らの救済と最後の勝利が約束されたものと考えた。それは、人々を勇気づけて、王の側につかせることであろう。それが、エルサレムを去ったことは、アブサロムの従者たちを恐怖に陥れることであろう。

箱を見たとき、ダビデの心は、しばし、喜びと希望にうちふるえた。しかし、彼は、すぐに別のことを考えた。

彼は、神の民の指導者として選ばれた者として、厳粛な責任を負わせられていた。イスラエルの王は、自分一個の利益でなくて、神の栄光と神の民の幸福を念頭におかなければならなかった。ケルビムの間に住まれる神は、エルサレムについて、「これは…わが安息所である」と言われたのである(詩篇一三二ノ一四)。祭司も王も、神の許しを得ないで、そこから神の臨在の象徴を移動させる権威はなかった。そして、ダビデは、彼の心と生活とが、神の戒めと調和していなければならないことを知っていた。さもなければ、箱は、勝利でなくて、災害を

もたらすものとなるのであった。彼は、あの大きな罪をいつも思い出していた。彼は、この謀叛が神の正当な罰であると考えた。彼の家から離れない剣のさやが払われたのであった。彼は戦いの結果がどうなるかは知らなかった。彼は、天の王のみこころを表現した神聖な律法を国の都から移してはならなかった。それは、国家の憲法であり繁栄の基礎であった。

彼は、ザドクに命じた。「神の箱を町にかきもどすがよい。もしわたしが主の前に恵みを得るならば、主はわたしを連れ帰って、わたしにその箱とすまいと見させてくださるであらう。しかしもし主が、『わたしはおまえを喜ばない』とそう言われるのであれば、どうぞ主が良しと思われることをわたしにしてください。わたしはここにおります」(サムエル記下一五ノ二五、二六)。

ダビデはまた言った。「見よ、あなたもアビヤタルも、ふたりの子たち、すなわちあなたの子アヒマアズとアビヤタルの子ヨナタンを連れて、安らかに町に帰りなさい。わたしはあなたがたから言葉があつて知らせをうけるまで、荒野の渡し場にとどまります」(同・一五ノ二七、二八)。祭司たちは、都にいて、反逆者たちの動向や策略をさぐり、それを彼らのむすこのアヒマアズとヨナタンによって、ひそかに王に知らせてよい奉仕をするこゝとができるのであった。

祭司たちが、エルサレムに引き返したとき、去っていく一団は、一段と暗い陰におおわれた。彼らの王は、亡命者であり、彼ら自身は神の箱にさえ捨てられた追放の身であった。将来は恐怖と不吉な前兆で暗かった。「ダビデはオリブ山の坂道を登ったが、登る時に泣き、その頭をおおい、はだしで行った。彼と共にいる民もみな頭をおおつて登り、泣きながら登った。時に、『アヒトペルがアブサロムと共謀した者のうちにいる』とダビデに

告げる人があった」（同・一五ノ三〇、三一）。ダビデは、この不幸の中で、もう一度自分自身の罪の結果を認めさせられた。最も有能で狡猾な政治家アヒトペルの離反は、ダビデが、彼の孫バテシバに悪を行なって家族をはずかしめたことに対する報復心から起こったものであった。

「ダビデは言った、『主よ、どうぞアヒトペルの計略を愚かなものにしてください』」（同・一五ノ三一）。山の頂上に着いたとき、王は、首をたれて祈り、心の重荷を神にゆだね、心を低くして神のあわれみを嘆願した。彼の祈りは、すぐに聞かれたように思われた。賢明で有能な議官のアルキ人ホシャイは、ダビデの忠実な友であったが、今、上着を裂き頭に土をかぶり、王位を追われている亡命中の王と、運命を共にするためにやってきた。ダビデは、あたかも天からの知らせを受けたかのように、この忠実で誠実な人が都の会議において、王の利益を計るために必要な人であることを悟った。ホシャイは、ダビデの要請によって、エルサレムに帰り、アブサロムのために仕えることを申し出て、アヒトペルの狡猾な策略を破ろうとするのであった。

王と彼の従者たちには、暗黒の中でこうした一条の光が与えられたのである。彼らは、オリブ山の東側の坂を下って進み、岩石の多い荒廃した荒野、けわしい峡谷、岩石と絶壁の小道を通って、ヨルダン川に向かった。「ダビデ王がバホルムにきた時、サウルの家の一族の者がひとりそこから出てきた。その名をシメイといい、ゲラの子である。彼は出てきながら絶えずのろった。そして彼はダビデとダビデ王のもろもろの家来に向かって石を投げた。その時、民と勇士たちはみな王の左右にいた。シメイはのろう時にこう言った、『血を流す人よ、よこしまな人よ、立ち去れ、立ち去れ。あなたが代って王となったサウルの家の血をすべて主があなたに報いられたのだ。主は王国をあなたの子アブサロムの手に渡された。見よ、あなたは血を流す人だから、災に会うのだ』」（同

一六ノ五 八。

シメイは、ダビデが栄えていたときには、自分が不忠な家来であることを言葉や行為によつては示さなかった。しかし、王が苦難に会ったときに、このベニヤミン人は、彼の本性を現わした。彼は、王座のダビデをあがめたが、恥辱のうちにある彼をのろつた。彼は、卑しい利己的性質の人であつたので、他人も自分と同じであると考え、サタンに扇動されて、神が懲らしめておられる者に恨みを晴らした。他人が苦難に会っているのを見て、喜び、あざけつたり苦しめたりする精神は、サタンの精神である。

シメイのダビデに対する非難は全くいつわりで、根拠のない、悪意から出た中傷であつた。ダビデは、サウルまた彼の家に何の悪事もしていなかった。サウルが、彼の手中に陥り、殺すことができたときにも、彼は、ただサウルの衣のすそを切つただけであつた。そして、彼は、主が油を注がれた者に、こうした無礼を行なつたことさえ申しわけなく思つたのである。

ダビデは、彼自身が、野の獣のように追われていたときでさえ、人命を尊重した著しい例があるのである。ある日、彼が、アドラムのほら穴に隠れていたとき、彼は、平和で自由だつた少年時代のことを思い出して叫んだ。「だれかベツレヘムの門のかたわらにある井戸の水をわたしに飲ませてくれるとよいのだが」(同・二三ノ一五)。そのとき、ベツレヘムは、ペリシテ人の手中にあつた。しかし、ダビデの軍勢の三勇士は、敵の守備を突き破つて、ベツレヘムの水を、ダビデのもとに持つてきた。ダビデは、それを飲むことができなかった。「わたしは断じて飲むことをいたしません。いのちをかけて行つた人々の血を、どうしてわたしは飲むことができましょう」と彼は叫んだ(同・二三ノ一七)。そして、彼は、その水を、神へのささげ物として、うやうやしく地に注いだの

である。ダビデは、軍人であつてその生涯の大半は、戦場で費やされた。しかし、そうした苦しい体験をしたすべての者の中で、ダビデほど、その苛酷で背徳的影響に染まなかつた者はない。

ダビデの指揮官中、最も勇敢で彼のおいであつたアビシャイは、シメイのあざけりの言葉をだまって聞いていることができず、「この死んだ犬がどうしてわが主、王をのろつてよかるうか。わたしに、行つて彼の首を取らせてください」と叫んだ(同・一六ノ九)。しかし、王は彼に言った。「わが子がわたしの命を求めている。今、このベニヤミンびととしてはなおさらだ。彼を許してのろわせておきなさい。主が彼に命じられたのだ。主はわたしの悩みを顧みてくださるかもしれない。また主はきよう彼ののろいにかえて、わたしに善を報いてくださるかも知れない」(同・一六ノ一一、一二)。

ダビデは、激しく良心に責められ、恥じ入るばかりであつた。彼の忠実な家来たちは、彼の突然の不運を不思議に思つたけれども、それは王にとつて、何の不思議でもなかつた。彼は、こうしたことの起こる予感がときどきあつたのである。彼は、神が彼の罪を長く忍び、彼が当然受けるべき報いを延ばされたのを怪しんだのである。そして、今、急いで、悲しみのうちにはだして、王衣の代わりに荒布をまとい町からのがれ、家来たちの嘆きの声が山々にこだましているときに、彼は、彼の愛する都のことを考えた。そして、そこは、彼が罪を犯した場所でもあつたが、彼は、神の恵みと忍耐を思い起こして、希望が全然ないわけではないと考えるのであつた。彼は、主が、なおも彼を恵み深くあしらつてくださることを感じたのである。

ダビデが墮落したことを引用して、自分の罪の申しわけをする悪者たちが多い。しかし、ダビデのような悔い改めとけんそんを表わすものがなんと少ないことであろう。彼が表わしたような忍耐と堅忍不拔の精神をもって



ダビデが屈辱と失意の底に沈んでいるのに乗じて、サウルの家来のひとりであったシメイが出て来て、ダビデに不当な非難をなげかけた。

譴責と刑罰とに耐える者は、なんと少ないことであろう。彼は、自分の罪を告白したのであった。そして、長年神の忠実なしもべとしての務めをしようと努めてきた。彼は、王国の建設のために活躍し、彼の治世のもとに王国は、これまでになかったほどの勢力を得て繁栄したのであった。彼は、神の家の建設のために豊富な資材を集めたのであったが、今、彼の一生の努力が水泡に帰してしまっているのである。長年の献身的努力の結果、天才と献身と政治的手腕をもつてなした業績などが、神の栄光もイスラエルの繁栄も考えない無鉄砲な反逆児の手に渡ってしまったわねばならぬのであろうか。こうした大きな苦難の中で、ダビデが神に向かってつぶやいても、当然のことのように思われる。

しかし、ダビデは彼の苦難の原因が、自分の罪にあることを認めた。預言者ミカの言葉が、ダビデの心を奮い立たせた精神を表わしている。「たといわしは暗やみの中にすわるとも、主はわが光となられる。主はわが訴えを取りあげ、わたしのためにさばきを行われるまで、わたしは主の怒りを負わなければならない。主に対して罪を犯したからである」(ミカ書七ノ八、九)。主は、ダビデをお捨てにならなかった。ダビデは、残酷きわまる取り扱いとちよう笑の中で、けんそん、無我、寛大、服従を示したのである。この経験は、彼の一生の経験の中で、最も高貴なものの一つであった。イスラエルの王が、一見、屈辱のどん底に沈んだこのときほど、彼が天の神の前に偉大であったことはなかった。

もし、神がダビデの罪を譴責せず、彼が神の戒めを犯しているにもかかわらず、平和と繁栄のうちに王座を占めていたとするならば、懐疑論者や無神論者は、ダビデの生涯を引用して、それを口実にして聖書の宗教を非難したことであろう。しかし、主は、ダビデにこうした経験をお与えになって、主は、罪を黙認することも許すこ

ともできないことを示された。われわれは、ダビデの生涯によって、神が罪を処理されるときに持つておられる大目的を悟り、どのように悲惨な刑罰の中にも神の恵みとあわれみに満ちたみ心の動きをたどることができるのである。神は、ダビデがむちの下を通るのを許されたが、彼を滅ぼされなかった。炉は、滅ぼすためではなくて清めるためであった。主は言われる。「もし彼らがわが定めを犯し、わが戒めを守らないならば、わたしはつえをもつて彼らのとがを罰し、むちをもつて彼らの不義を罰する。しかし、わたしはわがいつくしみを彼から取り去ることなく、わがまことにそむくことはない」(詩篇八九ノ三一 三三)。

ダビデが、エルサレムを去って問もなく、アブサロムと彼の軍勢が侵入し、戦いを交えないでイスラエルの要塞を手に入れた。まず初めに、新しい王を迎えた者の中に、ホシャイがいた。すると王子は、父の旧友であり、議官であつた彼を得て、驚き満足した。アブサロムは、必ず成功するものと考えた。これまでの彼の策略は、順調に進んだ。そして、彼は、王座を強固にし、国民の信任を得ようと熱望していたので、ホシャイを宮廷に歓迎した。

アブサロムは、すでに大軍に囲まれていたが、その大半は、戦いに不慣れな人々であつた。彼らは、まだ、戦つたことがなかった。アヒトペルは、ダビデの側が絶望状態に陥つていないことを熟知していた。国民の大部分は、なお彼に忠誠を誓つていた。ダビデ王は、彼に忠実な歴戦の勇士に囲まれており、彼の軍勢は有能で経験豊かな將軍の指揮下にあつた。新しい王に対する最初の熱烈な支持に続いて反動が起こることを、アヒトペルは知つていた。謀叛が失敗に終われば、アブサロムは、父と和解することができるであろう。そうなつた場合、彼の議官の長であつたアヒトペルが、謀叛を起こした最高の責任者とされ、最も重い罰が与えられるであろう。アブ

サロムの後退を防止するため、アヒトペルは、全国民の前で和解を不可能にすることを行なうように彼に勧めた。この狡猾で無節操な政治家は、憎むべき悪賢さを持って、謀叛に近親相姦の罪を加えることをアブサロムに促した。彼は、東方諸国の習慣に従って、全イスラエルの目前で、父のめかけたちを自分のものにするにより、父の王位についたことを宣言するのであった。こうして、アブサロムはこのいまわしい提言に従った。このようにして、預言者がダビデに語った言葉は実現した。「見よ、わたしはあなたの家からあなたの上に災を起すであろう。わたしはあなたの目の前でああなたの妻たちを取って、隣びとに与えるであろう。…あなたはひそかにそれをしたが、わたしは全イスラエルの前と、太陽の前にこの事をするのである」(サムエル記下二二ノ一、一二)。これは神が、これらの事を彼らに行なわせられたものではなかった。神は、ダビデの罪の結果、それを止める力を働かせられなかったのである。

アヒトペルは、彼の知恵をほめそやされていたが、神からの教えを受けていなかった。「主を恐れることは知恵のもとである」(箴言九ノ一〇)。アヒトペルは、これを持っていなかった。さもなければ、近親相姦の犯罪によつて、反逆を成功させようとは思わなかったことであろう。腐敗した心の人々は、彼らの策略をくじく神の摂理の支配がないかのように、悪をたくらんでいる。しかし、「天に座する者は笑い、主は彼らをあざけられるであろう」(詩篇二ノ四)。主は言われる。「わたしの勧めに従わず、すべての戒めを軽んじたゆえ、自分の行いの実を食らい、自分の計りごとに飽きる。思慮のない者の不従順はおのれを殺し、愚かな者の安樂はおのれを滅ぼす」(箴言一ノ三〇 三二)。

アヒトペルは、まず、自己の安全を確保する計画が成功を収めたので、すぐにダビデに対抗して行動する必要

をアブサロムに勧告した。「わたしに一万二千の人を選び出させてください。わたしは立つて、今夜ダビデのあとを追ひ、彼が疲れて手が弱くなっているところを襲つて、彼をあわてさせましょう。そして彼と共にいる民がみな逃げるとき、わたしは王ひとり撃ち取り、すべての民を……あなたに帰らせましょう」(サムエル記下七ノ一 三)。この計画は、王の議官たちに承認された。もし、この通りに行なわれたならば、主がダビデを助けるために直接介入なさらないかぎり、彼は殺されてしまったことであろう。しかし、名声高いアヒトベル以上に知恵のあるおかたが、事件を導いておられた。「それは主がアブサロムに災を下そうとして、アヒトベルの良い計りごとを破ることを定められたからである」(同・一七ノ一四)。

ホシャイは、会議に呼ばれていなかった。彼は、スパイだと疑われてはいけなから、求められもしないのに顔を出すことをしなかった。しかし、父の議官の判断を尊重していたアブサロムは、会議のあとでアヒトベルの計画を彼に話した。ホシャイは、その提案が実行されるならば、ダビデは敗北してしまうことを認めた。それで彼は言った。「このたびアヒトベルが授けた計りごとは良くありません」。ホシャイはまた言った、「ごぞんじのように、あなたの父とその従者たちとは勇士です。その上彼らは、野で子を奪われた熊のように、ひどく怒っています。また、あなたの父はいくさびとですから、民と共に宿らないでしょう。彼は今でも穴の中か、どこかほかの所にかくれています」(同・一七ノ七 九)。彼は、もしアブサロムの軍勢がダビデを追うならば、王を捕えることはできないと言った。そして、もし彼らが撃退されれば、彼らは失望に陥り、アブサロムの運動は大きな損害を受けるだろうと言った。「それはイスラエルのすべての人が、あなたの父の勇士であること、また彼と共にいる者が、勇ましい人々であることを知っているからです」(同・一七ノ一〇)。そして、ホシャイは、彼の虚栄と利

己心と誇示愛好心に訴える計画を提案した。「ところでわたしの計りごとは、イスラエルをダンからベエルシバまで、海べの砂のように多くあなたのもとに集めて、あなたみずから戦いに臨むことです。こうしてわれわれは彼の見つかる場所で彼を襲い、つゆが地におりるように彼の上に下る。そして彼および彼と共にいるすべての人をひとりも残さないでしょう。もし彼がいずれかの町に退くならば、全イスラエルはその町になわをかけ、われわれはそれを谷に引き倒して、そこに一つの小石も見られないようにするでしょう」(同・一七ノ一一―一二)。

「アブサロムとイスラエルの人々はみな、『アルキびとホシャイの計りごとは、アヒトベルの計りごともよい』と言った」(同・一七ノ一四)。しかし、これに欺かれないものが、ひとりいた。彼は、アブサロムのこの計画が致命的誤りで、ついにどうなるかはつきりと予想した。アヒトベルは、反逆の企てが失敗に終わったのを知った。そして彼は、王子の運命がどうなろうと、王子に最大の犯罪を犯すようにそそのかした議官には、助かる望みがないことを悟った。アヒトベルは、アブサロムに反逆を勧めたのであった。彼は、王子に最も憎むべき罪を犯して、父をはずかしめるように勧めたのであった。彼は、ダビデを殺すように助言して、その計画を実行しようとしていた。彼は、自分自身が王と和解する最後の可能性を断ち切ったのであった。ところが、今、アブサロムさえ、彼を捨てて他の者を選んだのであった。アヒトベルは、しつと怒りと絶望のうちに、「立って自分の町に行き、その家に帰った。そして家の人に遺言してみずからくびれて死」んだ(同・一七ノ二三)。豊かな才能に恵まれていながら、神の勧告に従わなかった者の知恵は、こうした結果に終わったのである。サタンは甘言によって、人を誘惑する。しかし、ついには、「罪の支払う報酬は死である」ことをすべての者は知るのである(ローマ六ノ二三)。

ホシャイは、心の落ち着かないダビデが、彼の勧告を聞くかどうかわからなかったもので、すぐにヨルダンの向こうに逃げるように彼に警告を発した。ホシャイは、祭司たちに次のように言った。これは、また彼らのむすこたちによって先方に伝えられるのであった。「アヒトペルはアブサロムとイスラエルの長老たちのためにこういう計りごとをした。またわたしはこういう計りごとをした。それゆえ、……『今夜、荒野の渡し場に宿らないで、必ず渡って行きなさい。さもないと王および共にいる民はみな、滅ぼされるでしょう』」(サムエル記下一七ノ五、一六)。

若者たちは敵に怪しまれて追跡されたが、無事にこの危険な任務をなしとげた。ダビデは、一日めの逃亡のため、疲労と悲哀でやつれきつてるところへ、王子が彼の生命をとろうとしているから、その晩のうちにヨルダンを渡らなければならないという知らせを受けた。

この恐ろしい危機に当面して、悲惨な目にあっている父であり王である彼の気持ちには、どんなものであったらう。王は、「勇気もあるいくさ人で、彼の命令は、そのまま法律であった(サムエル記上一六ノ一八)。彼は、愛し、甘やかし、愚かにも信頼していた王子には裏切られ、名誉と忠誠という最も堅いきずなで結ばれていた家来たちには不当に扱われて見捨てられた。ダビデは、彼の心の思いを、どのような言葉で吐露しているであろうか。ダビデは、彼の最悪の試練のときに、神に信頼していた。そして、彼は歌った。

「主よ、わたしに敵する者のいかに多いことでしょう。」

わたしに逆らって立つ者が多く、

『彼には神の助けがない』と、

わたしについて言う者が多いのです。

しかし主よ、あなたはわたしを囲む盾、わが栄え、

わたしの頭を、もたげてくださるかたです。

わたしが声をあげて主に呼ばわると、

主は聖なる山からわたしに答えられる。

わたしはふして眠り、また目をさます。

主がわたしをささえられるからだ。

わたしを囲んで立ち構える

ちよろずの民をもわたしは恐れない。…

救は主のものです。

どうかあなたの祝福が

あなたの民の上にありますように」。

(詩篇三ノ一 八)

ダビデと彼の一族、すなわち、軍人たちや政治家たち、老人も青年も、女子も小さい子供たちも、皆、暗い夜のうちに深い急流を渡った。「夜明けには、ヨルダンを渡らない者はひとりもなかった」(サムエル記下一七ノ二

二)。

ダビデと彼の軍勢は、イシボセテの都であったマハナイムに退いた。ここは、戦争のときに退くのに都合のよい山々に囲まれた堅固な要塞であった。その地方は産物が豊かで、人々はダビデに好意を持っていた。多くの支持者が、ここで彼に加わる一方、富裕な部族の人々が、食糧その他の必要な物資を多く贈り物として持ってきた。

ホシャイの勧告は、ダビデに逃亡の機会を与えて、その目的を達した。しかし、向こう見ずで血気にはやった王子を長くとめておくことはできなかった。間もなく、彼は、父のあとを追った。「またアブサロムは自分と共にいるイスラエルのすべての人々と一緒にヨルダンを渡った」(同・一七ノ二四)。アブサロムは、ダビデの姉妹アビガイルの子アマサを、彼の軍勢の将にした。彼の軍勢は、大きかった。しかし、父の熟練した兵隊たちに立ち向かうには、訓練もなく準備も不十分であった。

ダビデは、彼の軍勢を三つの部隊に分け、ヨアブ、アビシャイ、ガテ人イツタイにゆだねた。ダビデは、一隊を自分で率いて戦場に出るつもりであったが、それに対して、軍の指揮官たちや議官たち、また人々が、猛烈に反対した。彼らは言った。『あなたは出てはなりません。それはわれわれがどんなに逃げても、彼らはわれわれに心をとめず、われわれの半ばが死んでも、われわれに心をとめないからです。しかしあなたはわれわれの一万に等しいのです。それゆえあなたは町の中からわれわれを助けてくださる方がよろしい』。王は彼らに言った、『あなたがたの最も良いと思うことをわたしはしましょう』(同・一八ノ三、四)。

反逆軍の長い戦線は、町の城壁から一目で見えた。王位を奪ったアブサロムに従った大軍に比べると、ダビデの軍勢は、ほんの一握りのように思われた。しかし、王が敵の軍勢をながめたときに、まず考えたことは、この

戦いに王冠あるいは彼自身の命がかかっているということではなかった。父の心は、反逆した王子に対する愛とあわれみに満ちていた。軍隊が、町の門を出て行ったときに、ダビデは、彼の忠実な兵隊たちを励まし、イスラエルの神が勝利をお与えになることを信じて行くように命じた。しかし、ここでも彼は、アブサロムへの愛を押えることができなかった。ヨアブは、彼の第一分隊を率いて王の前を通った。この百戦の将は、誇らかな頭を下げて、王の最後の言葉を聞こうとした。王は、ふるえる声で、「わたしのため、若者アブサロムをおだやかに扱うように」と言った(同・一八ノ五)。アビシャイとイツタイも、「わたしのため、若者アブサロムをおだやかに扱うように」と同じ命令を受けた。しかし、王の嘆願は、王が、王国や王位に忠実な家来たちよりもアブサロムを愛しているという印象を与え、人道にそむいた王子に対する軍勢の怒りを激化したに過ぎなかった。

戦場は、ヨルダン川の近くの森であった。アブサロムの大軍も、ここでは、ただ邪魔になるだけであった。この訓練のない軍隊は、森の茂みや沼地で混乱し、統制がとれなくなった。「イスラエルの民はその所でダビデの家来たちの前に敗れた。その日その所に戦死者が多く、二万に及んだ」(同・一八ノ七)。アブサロムは、戦いに敗れたのを知って逃げようとしたところ、彼の頭が茂った木の枝にひっかかってラバは彼の下を通りぬけて行ってしまった。彼は宙づりになってどうすることもできず、敵のいいえじきになった。ひとりの兵隊が、こういう状態の彼を見つけたが、王を悲しませることを恐れて、王子に害を加えず、彼の見たことをヨアブに報告した。ヨアブは、なんのためらいも感じなかった。彼は、アブサロムを助け、二度もダビデとの和解を成立させたのであったが、彼の信頼は、無暴にも裏切られてしまった。ヨアブの仲介によって得た有利な地位がアブサロムになったならば、この恐ろしい反逆は起こり得なかったのである。今ヨアブは、こうしたすべての災いの張本人を

一撃のもとに倒すことができたのであった。「そこで、ヨアブは……手に三筋の投げやりを取り、……アブサロムの心臓にこれを突き通した。……人々はアブサロムを取って、森の中の大きな穴に投げいれ、その上にひじょうに大きい石塚を積み上げた」(同・一八ノ一四 一七)。

こうして、イスラエルの反逆の扇動者たちは倒れた。アヒトペルは自害していた。イスラエルが誇った美しい容貌の王子アブサロムは、若い盛りに倒されて、その死体は穴に投げ込まれ、石塚でおおわれて永遠の恥辱のしるしとなった。アブサロムは、生きていたころ、自分のために王の谷に高価な記念碑を建てたが、彼の墓の唯一の記念は、荒野の中の石塚であった。

反逆の指導者が殺されたので、ヨアブはラツパを鳴らして、逃亡する軍隊を追跡中の彼の軍を呼び集めた。そして、王に、このことを知らせるために、すぐに使者が送られた。

城壁の上の見張りの者が、戦場のほうを見ていると、ひとりの人が走ってくるのが見えた。間もなく二番めの人も見えた。最初の人が近づいたので、見張りの者は門のかたわらに待っていた王に言った。「まづ先に走って来る人はザドクの子アヒマアズのです」。王は言った、「彼は良い人だ。良いおとずれを持ってくるであろう」。時にアヒマアズは呼ばわって王に言った、「平安でいらせられますように」。そして王の前に地にひれ伏して言った、「あなたの神、主はほむべきかな。主は王、わが君に敵して手をあげた人々を引き渡されました」。『若者アブサロムは平安ですか』という王の切実な問いに、アヒマアズは、あいまいに答えた(同・一八ノ二七 一九)。二番めの使者が来て叫んだ。「わが君、王が良いおとずれをお受けくださるよう。主はきよう、すべてあなたに敵して立った者どもの手から、あなたを救い出されたのです」(同・一八ノ三一)。父は再び、「若者アブサロ

ムは平安ですか」と夢中でたずねた。使者は、悲しい知らせを隠し切れずに答えた。「王、わが君の敵、およびすべてあなたに敵して立ち、害をしようとする者は、あの若者のようになりますように」(同・一八ノ三二)。これでじゅうぶんであった。ダビデは、もう何も聞かなかった。彼は、頭をうなだれて、「門の上のへやに上って泣いた。彼は行きながらこのように言った、『わが子アブサロムよ。わが子、わが子アブサロムよ。ああ、わたしが代って死ねばよかったのに。アブサロム、わが子よ、わが子よ』」(同・一八ノ三三)。

勝ち誇った軍隊は戦場を引き上げ、町の門に近づいた。彼らの勝利の叫びは山々に反響した。しかし、彼らが町の門にはいると、叫びは静まり、彼らの旗は勢いがなくなり、彼らは、征服者というよりは、敗北者のようにうなだれて歩いていった。というのは、王が彼らを出迎えず、門の上のへやで、「わが子アブサロムよ。わが子、わが子アブサロムよ。ああ、わたしが代って死ねばよかったのに。アブサロム、わが子よ、わが子よ」と泣いていたからである(同・一八ノ三三)。

「こうしてその日の勝利はすべての民の悲しみとなった。それはその日、民が、『王はその子のために悲しんでいる』と人の言うのを聞いたからである。そして民はその日、戦いに逃げて恥じている民がひそかに、はいるように、ひそかに町にはいった」(同・一九ノ二、三)。

ヨアブは憤慨した。神は、勝ち誇って喜び理由をお与えになったのであった。イスラエルに起こった最大の反逆が鎮圧されたのである。それにもかかわらず、この大勝利は、幾千の勇士の命を犠牲にした犯罪者のための弔いとなったのである。粗暴で、無遠慮な大將は、王のもとに来て、臆せず言った。「あなたは、きょう、あなたの命と、あなたのむすこ娘たち……の命を救ったすべての家来の顔をはずかしめられました。それはあなたが自

分を憎む者を愛し、自分を愛する者を憎まれるからです。あなたは、きょう、軍の長たちをも、しもべたちをも顧みないことを示されました。きょう、わたしは知りました。もし、アブサロムが生きていて、われわれが皆きょう死んでいたら、あなたの目になつたでしょう。今立つて出て行って、しもべたちにねんごろに語ってください。わたしは主をさして誓います。もしあなたが出られないならば、今夜あなたと共にとどまる者はひとりもないでしょう。これはあなたが若い時から今までにこうむられたすべての災よりも、あなたにとって悪いでしょう」(同・一九ノ五 七)。

これは、悲嘆にくれた王にとって、きびしく残酷とさえ思われる譴責であつたが、ダビデは怒らなかつた。彼は、大将の言うことが正しいのを認めて、門におりて行き、彼の前を通る勇敢な兵隊たちに、勇気と賞賛の言葉をかけて、彼らを迎えたのである。

第 73 章

ダビデの晩年

本章は、サムエル記下二四章。列王紀上一章。歴代志上二一、二八、二九章に基づく。

アブサロムが倒れたからといって、王国がすぐに平和になつたわけではなかつた。国家の一部が長い間、反逆に荷担していたので、ダビデは、各部族からの招待がなければ、首都に歸つてふたたび権力の座につこうとしなかつた。アブサロム敗北後の混乱の中で、すぐに王を呼びもとそうとする動きはなかつた。それで、ついに、ユダの部族が、ふたたび王を迎えようとしたところ、他の部族がそれをねたんで、反革命が起こつた。しかし、これは急速に鎮圧されて、イスラエルは、平和をとりもどした。

ダビデの生涯は、権力、富、世的榮譽が、魂にどんな危険を及ぼすかを最も印象的に示した例の一つである。これらは、人々が最も熱心に追求しているものである。こうした試練に耐えられる準備として、彼以上の経験が与えられたものは少ない。ダビデが少年時代に、羊飼いとして、心を低くして忍耐強く働き、群れを優しく世話することを学んだこと、山の中で、ひとりで自然と交わり、音楽と詩の才能が啓発され、創造主について瞑想したこと、荒野の生活の長い訓練によつて、勇氣、堅忍不拔の精神、忍耐、神への信仰が養成されたことなどは、

イスラエルの王位につく準備として、主が定められたものであった。ダビデは、神の愛についての尊い経験が与えられ、聖霊を豊かに受けた。彼は、サウルの生涯をみて、単なる人間の知恵は全く無価値なものであることをさとった。それにもかかわらず、世的繁栄と栄誉によって、ダビデの品性は弱められ、いくども誘惑に負けてしまった。

異教徒との交わりは、彼らの風習をまね、世的偉大さを望む心を起こさせた。イスラエルは、主の民として、尊敬されるべきであった。しかし、誇りと自己過信が増大するにつれて、イスラエルは、こうした点で傑出することで満足しなくなった。彼らは、他の諸国家間における地位のことを重大視していた。この精神は、誘惑を避けられないものにした。ダビデは諸外国の征服を拡張するために適齢に達したものをすべて徴兵して、軍隊を拡充することを決意した。そのためには、人口調査が必要であった。王にこうしたことを行なわせたのは、誇りと野心とであった。人口の調査は、ダビデが王位についたときの王国の微弱な状態と、彼の治世下の力と繁栄との相違を示すことになるのであった。これは、すでに王も民も共に持っていた大きな自己過信を、さらに助長するものであった。聖書は、「時にサタンが起ってイスラエルに敵し、ダビデを動かしてイスラエルを数えさせようとした」と言っている(歴代志上二二ノ一)。ダビデの治世下のイスラエルの繁栄は、王の能力や軍隊の力によるものではなくて、神の祝福によるものであった。しかし、王国の軍事力の増強は、イスラエルが、主の能力にたよらず、軍隊にたよっているという印象を周囲の国々に与えるのであった。

イスラエルの人々は、国家の偉大さを誇ってはいたが、ダビデの軍事力増強計画には反対であった。徴兵計画には大きな不満が起こった。その結果、これまで調査に当たった祭司や司たちの代わりに、軍人を用いることが

必要になった。この企ての目的は、神政政治の原則に正反対のものであった。これまで無法者であったヨアブでさえ、抗議した。彼は言った。「『それがどのくらいあつても、どうか主がその民を百倍に増されるように。しかし王わが主よ、彼らは皆あなたのしもべではありませんか。どうしてわが主はこの事を求められるのですか。どうしてイスラエルに罪を得させられるのですか』。しかし王の言葉がヨアブに勝ったので、ヨアブは出て行って、イスラエルをあまねく行き巡り、エルサレムに帰って来た」(同・二二ノ三、四)。ダビデが自分の罪をさとしたときに、人口調査は終わっていなかった。彼は、自責の念にかられて、「わたしはこの事を行って大いに罪を犯しました。しかし今どうか、しもべの罪を除いてください。わたしは非常に愚かなことをいたしました」と言った(同・二二ノ八)。翌朝、預言者ガデが来て、ダビデに言った。「主はこう仰せられます、『あなたは選びなさい。すなわち三年のききんか、あるいは三月の間、あなたのあだの前に敗れて、敵のつるぎに追いつかれるか、あるいは三日の間、主のつるぎすなわち疫病がこの国にあつて、主の使がイスラエルの全領域にわたって滅ぼすことをするか』。いま、わたしがどういう答をわたしをつかわしたものにすべきか決めなさい」(同二二ノ一、一二)。

王は、答えて言った。「わたしは非常に悩んでいるが、主のあわれみは大きいゆえ、わたしを主の手に陥らせてください。しかしわたしを人の手に陥らせないでください」(同・二二ノ一三)。

地は疫病に悩まされ、イスラエルの人々のうち、七万人が倒れた。疫病は、まだエルサレムにはいっていないかった。「ダビデが目を見て見ると、主の使が地と天の間に立って、手に抜いたつるぎをもち、エルサレムの上にさし伸べていたので、ダビデと長老たちは荒布を着て、ひれ伏した」(同・二二ノ一六)。王は、イスラエル

のために神に訴えた。「民を数えよと命じたのはわたしではありませんか。罪を犯し、悪い事をしたのはわたしです。しかしこれらの羊は何をしましたか。わが神、主よ、どうぞあなたの手をわたしと、わたしの父の家にむけてください。しかし災をあなたの民に下さないでください」(同二一ノ一七)。

人々は、人口調査に不満をいだいた。しかし、彼ら自身も、ダビデにこうした行為を行なわせたのと同じ罪を心にいだいていた。主は、アブサロムの罪によって、ダビデに罰を与えられたように、ダビデの誤りによって、イスラエルの罪を罰せられた。

破壊の天使は、エルサレムの外でとまった。彼は、モリア山の「エブスびとオルナンの打ち場」に立った(同・二一ノ一八)。ダビデは、預言者に導かれて山に行き、そこで主のために祭壇を築き、「燔祭と酬恩祭をささげて、主を呼んだ。主は燔祭の祭壇の上に天から火を下して答えられた」(同・二一ノ二六)。「そこで主はその地のために祈を聞かれたので、災がイスラエルに下ることはとどまった」(サムエル記下二四ノ二五)。

祭壇が築かれた場所は、その後、聖地とみなされることになったが、オルナンは、これを王に贈り物としてさげすることを申し出た。しかし、王は、これを受け取ることを断わり、「わたしはじゅうぶんな代価を払ってこれを買います。わたしは主のためにあなたのものを取ることをしません。また、費えなしに燔祭をささげることをいたしません」。それでダビデはその所のために金六百シケルをはかって、オルナンに払った」(歴代志上二一ノ二四、二五)。アブラハムが、その子をささげるために祭壇を築いた記念すべきこの地、そして、今この大救済によって清められた地が、後に、ソロモンの神殿の建築されるところに選ばれたのである。

もう一つの暗雲が、ダビデの晩年をおおうことになっていた。ダビデは、七十才になった。若いときの苦勞と

きびしい放浪の生活、数多くの戦争、後年の心労と苦悩などが生命の泉をからした。彼の頭は、はつきりして、すっかりしてはいたが、衰弱と老齡のため、引きこもりがちになり、王国の事情にもうとくなくなった。そこへ、ふたたび、王座のすぐ近くから反逆が起こった。またもやダビデの子供を甘やかした結果がここにあらわれた。王位を奪おうとして立ち上がったのは、「非常に姿の良い人」で、堂々としてはいたが、節操に欠け、放縱なアドニヤであつた。彼は、若いときに、なんの制限も受けず、「彼の父は彼が生れてこのかた一度も『なぜ、そのよ
うな事をするのか』と言つて彼をたしなめたことがなかつた」（列王紀上二ノ六）。彼は、今、ソロモンを王位に任命された神の権威に反逆したのである。ソロモンは、素質においても、宗教性においても兄よりは、イスラエルの王になる資格が備わつていた。神の選択が明示されたにもかかわらず、アドニヤにも同情者がないことはなかつた。ヨアブは、多くの犯罪を犯したが、これまで王に忠誠を尽くしてきた。ところが、今彼は、ソロモンに対抗した陰謀に加わつた。そして、祭司のアビヤタルもまた加わつた。

反逆の機は熟した。謀叛人らは、町のすぐ外で大きな祝宴を開き、アドニヤを王であると宣言した。しかし、彼らの計画は、祭司ザドク、預言者ナタン、ソロモンの母のバテシバなど、少数ではあるが忠実な人々の迅速な行動によつて阻止された。彼らは、王に事のなり行きを説明し、神の命によつてソロモンが王位を繼承すべきことを王に思い起こさせた。ダビデはすぐに退位して、ソロモンに王位を譲つた。ソロモンは、さっそく油を注がれて王であることを宣言された。陰謀は粉碎された。その主要人物は死刑に処せられた。アビヤタルの命は、その職務と、前にダビデに忠誠を尽くしたことを考慮して助けられた。しかし、彼は大祭司の職を奪われ、それはザドクの子孫に与えられた。ヨアブとアドニヤも一時刑を免れたが、ダビデの死後、彼らは罪の罰を受けた。ダ

ビデの子に対する宣告の執行によって、四倍の刑罰がここに完了し、父の罪を神がどんなに憎まれたかを示したのであった。

ダビデは、その治世の最初から、主の神殿を建築することを彼の念願の一つにしていた。彼は、この計画を実行することが許されなかったけれども、そのために非常な熱心と誠意を示した。彼は、金、銀、しめめのう、色のついた石、大理石、貴重な材木など、高価な材料を多量に準備した。彼は、こうした貴重な材料を人の手にゆだねなければならなかった。神の臨在の象徴である箱のために、他の者が家を建てなければならなかった。

王は、自分の最後の時が近いのを知って、イスラエルの長官たち、王国の各地からの代表者たちを集めて、この遺産を委託することにした。彼は、彼の遺言を彼らに伝えて、大いなる事業の完成のために、彼らの賛同と支持を得たいと望んだ。彼は、からだが衰弱していたので、この譲渡に当たって、その場に臨席することはできまいと思われていた。しかし、彼は神の霊に感じ、平常の熱と力以上の活気に満ちて、人々に最後の演説をするこゝとができた。彼は、自分が神殿を建てようと願ったけれども、主の命令によって、その事業はソロモンにゆだねられることを語った。神は、お約束になった。「おまえの子ソロモンがわが家およびわが庭を造るであらう。わたしは彼を選んでわが子となしたからである。わたしは彼の父となる。彼がもし今日のように、わが戒めとわがおきてを固く守って行ふならば、わたしはその国をいつまでも堅くするであらう」(歴代志上二八ノ六、七)。ダビデは言った。「それゆえいま、主の会衆なる全イスラエルの目の前およびわれわれの神の聞かれる所であなたがたに勧める。あなたがたはその神、主のすべての戒めを守り、これを求めなさい。そうすればあなたがたはこの良き地を所有し、これをあなたがたの後の子孫に長く嗣業として伝えることができる」(同・二八ノ八)。

ダビデは、神を離れる者の道が、どんなに苦しいものかを、自分自身の経験からよく知っていた。彼は自分が破った律法の罪の宣告を実感し、罪の実を刈り取っていた。であるから、彼は、イスラエルの指導者たちには、神に忠実に仕えること、そして、ソロモンには、神の律法に従うことをまごころから切に望み、ダビデ自身の權威を弱め、彼の生涯をみじめにし、神のみ栄えを汚したこうした罪を避けるように訴えるのであった。高い地位につくソロモンを必ず襲ってくる誘惑に勝つためには、心を低くして常に主に信頼し、絶えず目をさましていなければならぬことを、ダビデは知っていた。こうした目立つところの人物をサタンは特に攻撃してくるのである。すでに王位の後継者と認められているむすこに向かって、ダビデは言った。「わが子ソロモンよ、あなたの父の神を知り、全き心をもって喜び勇んで彼に仕えなさい。主はすべての心を探り、すべての思いを悟られるからである。あなたがもし彼を求めるならば会うことができる。しかしあなたがもしかれを捨てるならば彼は長くあなたを捨てられるであろう。それであなたは慎みなさい。主はあなたを選んで聖所とすべき家を建てさせようとされるのだから心を強くしてこれを行いなさい」(同・二八ノ九、一〇)。

ダビデは、靈感によって示されたとおりに、神殿の各部の計画、いろいろな務めに用いる器物など、神殿建築の細かい指示をソロモンに与えた。ソロモンは、まだ年が若かった。そして、神殿の建築と神の民の統治の重責が負わされて、しりごみするのであった。ダビデは、むすこに言った。「あなたは心を強くし、勇んでこれを行いなさい。恐れてはならない。おののいてはならない。主なる神、わたしの神があなたとともにおられるからである。主はあなたを離れず、あなたを捨てず」(同・二八ノ二〇)。

ダビデは、ふたたび会衆に訴えた。「わが子ソロモンは神がただひとりを選ばれた者であるが、まだ若くて経

験がなく、この事業は大きい。この宮は人のためではなく、主なる神のためだからである。そこでわたしは力をつくして神の宮のために備えた」(同・二九ノ一、二)。彼は、続けて、彼の集めた物資をあげた。さらに彼は言った。「なわたしはわが神の宮に熱心なるがゆえに、聖なる家のために備えたすべての物に加えて、わたしの持っている金銀の財宝をわが神の宮にささげる。すなわちオフルの金三千タラント、精銀七千タラントをそのもるもの建物の壁をおおうためにささげる」。「だれかきょう、主にその身をささげる者のように喜んでささげ物をするだろうか」と、多くのささげ物を持って、集会に集まった群衆に彼はたずねた(同・二九ノ三、四、五)。

群衆は、すぐにそれにこたえた。「そこで氏族の長たち、イスラエルの部族のつかさたち、千人の長、百人の長および王の工事をつかさどる者たちは喜んでささげ物をした。こうして彼らは神の宮の務のために金五千タラント一万ダリク、銀一万タラント、青銅一万八千タラント、鉄十万タラントをささげた。宝石を持っている者は…神の宮の倉に納めた。彼らがこのように真心からみずから進んで主にささげたので、民はそのみずから進んでささげたのを喜んだ。ダビデ王もまた大いに喜んだ」(同・二九ノ六 九)。

「そこでダビデは全会衆の前で主をほめたたえた。ダビデは言った、『われわれの先祖イスラエルの神、主よ、あなたはとこしえにほむべきかたです。主よ、大いなることと、力と、栄光と、勝利と、威光とはあなたのものです。天にあるもの、地にあるものも皆あなたのものです。主よ、国もまたあなたのものです。あなたは万有のかしらとして、あがめられます。富と誉とはあなたから出ます。あなたは万有をつかさどられます。あなたの手には勢いと力があります。あなたの手はすべてのものを大いならしめ、強くされます。われわれの神よ、われわれは、いま、あなたに感謝し、あなたの光栄ある名をたたえます。しかしわれわれがこのように喜んでささげる

ことができて、わたしは何者でしょう。わたしの民は何でしょう。すべての物はあなたから出ます。われわれはあなたから受けて、あなたにささげたのです。われわれはあなたの前ではすべての先祖たちのように、旅びとです、寄留者です。われわれの世にある日は影のようで、長くともまることはできません。われわれの神、主よ、あなたの聖なる名のために、あなたに家を建てようとしてわれわれが備えたこの多くの物は皆あなたの手から出たもの、また皆あなたのものです。わが神よ、あなたは心をためし、また正直を喜ばれることを、わたしは知っています。』(同・二九ノ一〇 一七)。

『わたしは正しい心で、このすべての物を喜んでささげました。今わたしはまた、ここにおるあなたの民が喜んで、みずから進んであなたにささげ物をするのを見ました。われわれの先祖アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、あなたの民の心にこの意志と精神とをいつまでも保たせ、その心をあなたに向けさせてください。またわが子ソロモンに心をつくしてあなたの命令と、あなたのあかしと、あなたのさだめとを守らせて、これをことごとく行わせ、わたしが備えをした宮を建てさせてください。そしてダビデが全会衆にむかって、『あなたがたの神、主をほめたたえよ』と言ったので、全会衆は先祖たちの神、主をほめたたえ、伏して主を拝し』(同・二九ノ一七 二〇)。

王は、非常な関心をもつて、神殿の建築と装飾のために豊富な資材を集めた。後年、神殿の庭に鳴り響くことになる荘嚴な賛美歌を彼は作曲した。今、氏族の長たちやイスラエルの部族のつかさたちが、りっぱな態度で彼の訴えにこたえ、彼らの前にある重大な事業に献身したので、彼の心は、神にあつて喜びに満たされた。そして彼らはささげれば、さらに多くささげたくなるのであつた。彼らは、自分たちの所有を宮の倉に納めて、ささげ



ダビデは神殿の完成を見るまで生きることが許されなかったが、その設計と資材を集める特権が与えられた。

物をますます増し加えた。ダビデは、神の家の資材を集める価値が自分にないことを自覚していたが、全国のかさたちが喜んで彼にこたえて忠誠を表明し、心から彼らのたからを主にささげて、神のご用に献身したので、喜びに満たされた。しかし、神の民にこうした精神を与えたのは、神だけであつた。人間にではなくて、神に栄えを帰さなければならぬ。民に地の富を与えたのは神であつた。そして、彼らの宝を喜んで神殿のためにささげさせたのは、神の霊であつた。それは、すべて主のものであつた。もし神の愛が人々の心を感動させなかつたならば、王の努力もむなしく、神殿は建築されなかつたことであろう。

人間が神の豊かなものの中から受けるものは、すべて今なお神に属する。神が地上の価値ある美しいものとしてお与えになつたものは、何であつても彼らを試みるために、人間に与えられる。それは、彼らの神に対する愛と神の恵みに対する感謝をはかるためのものである。それが富であれ、あるいは知性であれ、喜んでイエスの足もとに心からのささげ物としておかれるべきである。ささげる者は、ダビデとともに、「すべての物はあなたから出ます。われわれはあなたから受けて、あなたにささげたのです」と言わなければならぬ(同・一九ノ一四)。

死ぬるときが近づいたことを感じたダビデは、なお、ソロモンとイスラエル王国のことを深く憂えていた。イスラエルの繁栄は、主として王が誠実であるか否かにかかつていた。「わたしは世のすべての人の行く道を行こうとしている。あなたは強く、男らしくなければならぬ。あなたの神、主のさとしを守り、その道に歩み、その定めと戒めと、おきてとあかしとを、モーセの律法にしるされているとおりに守らなければならぬ。そうすれば、あなたがするすべての事と、あなたの向かうすべての所で、あなたは栄えるであろう。また主がさきにわたしについて語って『もしおまえの子たちが、その道を慎み、心をつくし、精神をつくして真実をもって、わたし

の前に歩むならば、おまえに次いでイスラエルの位にのぼる人が、欠けることはなからう』と言われた言葉を確実にされるであろう」(列王紀上二ノ二―四)。

記録に残っているダビデの「最後の言葉」は歌である。それは、信頼の歌、高遠な原則と不滅の信仰の歌である。

「エッサイの子ダビデの託宣、

すなわち高く挙げられた人、

ヤコブの神に油を注がれた人、

イスラエルの良き歌びとの託宣。

『主の霊はわたしによつて語る、…

「人を正しく治める者、

神を恐れて、治める者は、

朝の光のように、

雲のない朝に、輝きでる太陽のように、

地に若草を芽ばえさせる雨のように人に臨む」。

まことに、わが家はそのように、

神と共にあるではないか。

それは、神が、よろず備わって確かな

とこしえの契約をわたしと結ばれたからだ。

どうして彼はわたしの救と願いを、

皆なしとげられぬことがあるうか¹⁾。

(サムエル記下二三ノ一 五)。

ダビデは、非常に墮落はしたが、深刻に悔い改めて、心をこめて愛し、信仰を堅く保った。彼は多くの罪をゆるされたので、多く愛した(ルカ七ノ四七、四八参照)。

ダビデの詩篇は、罪の自覚と自責の深淵から、最も高められた信仰と神との最も高められた交わりまでのあらゆる経験をうたっている。彼の生涯の記録は、罪がただ恥と災いだけをもたらすものであることを示している。

しかし、神の愛とあわれみは、どんな深みにも達し、信仰は、悔い改める魂を引き上げて、神の子としての身分にあずからせることを明らかにする。それは、神のみ言葉の中のすべての確証の中で、神の誠実と正義と神の契約のあわれみに関する最も強力なあかしの一つである。

人は、「影のように飛び去って、とどまらない。」「しかし、われわれの神の言葉はとこしえに変わることはない。」

「しかし主のいつくしみは、とこしえからとこしえまで、主を恐れる者の上にあり、その義は子らの子に及び、その契約を守り、その命令を心にとめて行う者にまで及ぶ」(ヨブ記一四ノ二、イザヤ書四〇ノ八、詩篇一〇三ノ一七、一八)。

「すべて神がなさる事は永遠に変わることがない」(伝道の書三ノ一四)。

ダビデと彼の家に与えられた約束は輝かしく、永遠のかなたを待望し、キリストにおいて完全に実現されるものであった。主は言われた。

「わたしのしもべダビデに誓った、…わが手は常に彼と共にあり、わが腕はまた彼を強くする。…わがまことと、わがいつくしみは彼と共にあり、わが名によって彼の角は高くあげられる。わたしは彼の手を海の上におき、彼の右の手を川の上におく。彼はわたしにむかい『あなたはわが父、わが神、わが救の岩』と呼ぶであろう。わたしはまた彼をわがういごとし、地の王たちのうちの最も高い者とする。わたしはとこしえに、わがいつくしみを彼のために保ち、わが契約は彼のために堅く立つ」（詩篇八九ノ三 二八）。

「わたしは彼の家系をとこしえに堅く定め、その位を天の日数のようにながらえさせる」。

（詩篇八九ノ二九）

「彼は民の貧しい者の訴えを弁護し、

乏しい者に救を与え、

しえたげる者を打ち砕くように。

彼は日と月とのあらんかぎり、

世々生きながらえるように。…

彼の世に義は栄え、

平和は月のなくなるまで豊かであるように。

彼は海から海まで治め、

川から地のはてまで治めるように」。

「彼の名はとこしえに続き、

その名声は日のあらん限り、絶えることのないように。

人々は彼によって祝福を得、

もろもろの国民は彼をさいわいなる者と

となえるように」。

(詩篇七十二ノ四 八、一七)

「ひとりのみどりこがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は、『靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君』となえられる。」「彼は大きいなる者となり、いと高き者の子と、となえられるでしょう。そして、主なる神は彼に父ダビデの王座をお与えになり、彼はとこしえにヤコブの家を支配し、その支配は限りなく続くでしょう」(イザヤ書九ノ六、ルカー一ノ三二、三三)。

8 : 2上 421
 : 5上 414, 420
 9 : 7下 517
 : 19, 20上 365
 : 21上 421
 : 24, 23上 405
 : 24上 422, 436
 : 28下 499
 10 : 26, 27
 上 490 下 638
 11 : 1上 122
 : 4上 68
 : 5上 85
 : 6上 85
 : 7上 92
 : 8上 122
 : 9上 124
 : 9, 10上 180
 : 13上 180
 : 13, 16上 77
 : 16上 180
 : 19上 156
 : 23上 275
 : 24—26上 280
 : 29上 333
 : 30下 605
 : 33, 34下 632
 12 : 11上 269
 : 16, 17上 196
 : 21上 354
 : 26上 401
 13 : 2上 141
 : 4上 21
 : 8下 790

ヤコブの手紙

1 : 5上 284, 460
 : 7上 460
 : 17上 1, 444 下 790
 : 27上 438
 2 : 17上 160
 : 21, 22上 160
 : 22, 17上 69
 : 23上 143, 160
 3 : 16上 462
 4 : 4下 562
 : 11上 462
 5 : 16下 835

ペテロの

第一の手紙

1 : 4上 179
 : 5下 564
 : 8上 403
 : 12 参上 162
 : 10, 11上 435
 : 13—15下 564
 : 19上 415
 2 : 9上 428
 : 9 参下 760

3 : 8, 9下 642
 5 : 2, 3上 208
 : 4上 209
 : 7上 339

ペテロの

第二の手紙

2 : 1, 2下 862
 : 10, 11上 462
 : 15下 536
 : 16下 540
 : 19上 59
 3 : 3, 4上 103
 : 6, 7上 100
 : 8上 179
 : 10上 104

ヨハネの

第一の手紙

2 : 4上 69
 : 15下 562
 : 22, 23下 863
 3 : 2上 54
 : 12上 70
 : 13下 696
 4 : 16上 1 下 751
 5 : 3上 160
 : 4下 632

ユダの手紙

9下 586
 11上 77
 14, 15上 82, 473

ヨハネの黙示録

2 : 4, 5上 173
 : 17上 344
 4 : 2, 3上 107
 : 5上 421
 5 : 11上 6
 : 13下 675
 6 : 14上 401
 : 15, 16, 17上 402
 8 : 3上 421
 11 : 19上 421
 12 : 9下 524
 : 10, 12下 866
 : 11, 9上 71
 13 : 8 詳上 54
 14 : 3上 86
 15 : 2, 3上 332
 : 3上 74
 16 : 17, 21下 626
 : 18上 111
 : 20, 21上 111
 17 : 18上 175
 18 : 2 参上 119
 : 2下 562
 : 4上 175

19 : 6下 893
 : 10上 435
 20 : 12上 422
 : 14下 565
 21 : 1上 52
 22 : 1, 17下 501
 : 3上 60
 : 11上 218
 : 14上 227

ハガイ書	20……………下 841	3:38……………上 18	6:7……………上 307
1:2—6……………下 652	48……………下 654	7:47,48 参……………下 958	エペソ人への手紙
9—11……………下 653	16:29,31……………上 435	10:27……………上 355	1:14……………上 60
2:8……………下 650	17:26,30……………上 104	12:15……………下 610	3:20……………下 690
16,17……………下 653	28,30……………上 174	5:1……………上 443	5:3……………下 610
18,19……………下 653	18:7,8……………上 221	6:23…上51,402下 938	5:5 参……………下 610
	8……………上 103	7:12……………上 118,433	29……………上 21
ゼカリヤ書	21:20,21……………上 175	8:1……………下 637	6:2……………上 359
3:2……………上 177	34—36……………上 174	3……………上 388	12……………下 904
6:13……………上 54	23:34……………上 143	3,4……………上 443	ピリピ人への手紙
13:1……………下 501	ヨハネによる福音書	18……………上 125	2:4……………上 132
14:7……………上 268	1:1,2……………上 2	22……………下 541,675	4:8……………下 565
9……………上 403	14……………上 319	32……………上 161	コロサイ人への手紙
マラキ書	51……………上 200	34……………下 637	1:16……………上 3
3:2……………上 400	3:14,15……………下 524	12:1……………上 415	2:14……………上 432
7……………上 173	15……………下 583	10……………上 132	3:3……………下 550
8……………下 611	16……………上 54	13:1……………下 907	5……………下 610
10……………下 655	20……………上 70	9……………下 514	
11,12……………下 652	36……………上 227	コリント人への	テサロニケ人への
18……………上 403	4:14…上 222下 500	第一の手紙	第一の手紙
4:1……………上 402	5:17……………上 34	2:9……………下 754	4:16—18……………上 86
	39……………上 435	3:9……………下 748	5:3 参……………上 104
マタイによる福音書	6:37……………下 524	17…上 429下 565	
4:16……………下 584	48—51……………上 344	4:5……………上 462	テサロニケ人への
5:8……………上 84	48—51参……………上 418	5:7……………上 318	第二の手紙
9……………下 840	53,54,63…上 319	7,8……………上 320	1:7,8……………上 401
14,15,16…上 439	7:17……………上 460	6:19,20……………上 429	2:9……………下 862
17,18……………上 433	37—39……………下 500	10:1,2 参……………上 325	
18……………下 576	8:29……………上 443	4……………下 498	
6:13……………下 562	39……………上 160	11,12……………下 561	テモテへの
24…上 175下 610	44……………上 397	20……………下 860	第一の手紙
7:2……………下 784	56……………上 161	31……………上 429	4:1 ……上 103下 862
21……………上 227	10:5……………上 207	11:1……………下 907	5:19……………上 462
10:8……………下 654	11—14……………上 207	15:32……………上 196	6:9……………上 177
26……………下 910	12:31,32……………上 62	51……………上 86	
11:28……………上 339	13:35……………下 642	52……………上 86	
29……………上 339	15:18……………下 697	コリント人への	
12:32……………上 490	17:20……………下 642	第二の手紙	
15:9……………上 174	19:30……………上 63	4:4 ……上 59下 541	
16:27……………上 400	36参……………上 319	17…上 125下 583	
18:16……………下 636	使徒行伝	5:19……………上 54,434	
22:39……………下 514	2:19……………上 111	20……………下 726	
23:38……………下 582	4:12…上 69下 525	6:14,17,18…上 186	
24:38,39……………上 101	6:15……………上 387	15,16……………下 702	
25:41……………下 577	7:5……………上 178	17……………下 562	
26:41……………下 866	22……………上 279	8:13—15……………上 342	
	25……………上 281	9:6,8……………下 653	
マルコによる福音書	44……………上 421	7……………下 655	
2:14……………下 693	17:25……………下 650	ガラテヤ人への手紙	
15:34……………下 583	28……………上 34	3:6,16参……………上 439	
	20:28,29……………上 208	7……………上 160	
ルカによる福音書	ローマ人への手紙	8……………上 160	
1:32,33……………下 960	1:20……………上 36	16……………上 179	
2:14……………上 56	21,28……………上 77	29……………上 179	
3:38……………上 18	3:31……………上 443	5:14……………下 514	
7:47,48 参……………下 958	4:3……………上 137	21……………下 565	
10:27……………上 355	11……………上 140,143		
12:15……………下 610	13……………上 179		

: 23.....上 333
51 : 1—14下 917
 : 7上 318
 : 10.....下 564
 : 16,17下 918
56 : 3下 871
61 : 2下 501
62 : 7下 501
66 : 18.....上 386
67 : 5上 333
68 : 8上 401
71 : 3下 501
72 : 4—8,17下 960
73 : 8上 119
 : 26.....下 501
77 : 17,18上 329
 : 19,20上 328
78 : 15,16上 346
 : 18—21.....上 451
 : 24,25上 344
 : 32—35.....下 496
 : 37—39.....下 497
 : 52.....下 681
 : 58.....下 681
 : 60.....下 681
 : 61.....下 681
81 : 11,12下 538
85 : 10.....上 411
89 : 3—28下 959
 : 13—18.....上 2
 : 14.....上 3
 : 29.....下 959
 : 31—33.....下 935
91 : 1,4,16.....上 176
 : 9,10.....上 111
 : 14.....上 111
92 : 12.....下 550
94 : 14,15下 560
 : 21.....下 560
 : 22.....下 501
 : 23.....下 560
96 : 6上 3
97 : 2上 16
103 : 1,2上 340
 : 17,18下 958
104 : 5上 17
 : 20,21,27,28 上 35
105 : 14,15上 130
 : 18,19上 238
 : 21,22上 244
 : 39.....上 325
 : 41.....下 498
 : 43—45.....上 393
106 : 16.....上 378
 : 19,20上 372
 : 28.....下 859
 : 33.....下 508
 : 35.....下 680
 : 36—40.....下 680
 : 37,38下 862
111 : 7,8上 403

: 9上 357
112 : 6下 589
113 : 3上 403
115 : 1上 332
 : 8上 89
116 : 12.....上 202
 : 18,19下 670
118 : 19.....下 670
119 : 9,11.....下 565
 : 89.....上 403,433
 : 104下 749
 : 172下 749
121 : 1,2下 669
 : 2—8.....下 837
122 : 1—6.....下 668
 : 2下 499
 : 7下 670
125 : 1,2下 669
132 : 14.....下 928
133 : 1下 826
141 : 5下 841
144 : 5,6上 111
 : 15.....上 113
145 : 9下 541
 : 17.....上 10
 : 18.....上 121
146 : 2上 333
 : 4下 860
147 : 8上 35
 : 16.....上 35
148 : 8下 626

箴言

1 : 24—31.....下 695
 : 30—32.....下 936
 : 33.....下 696
2 : 18,19下 566
3 : 17.....下 752
4 : 22.....下 752
 : 23.....下 564
5 : 3,4下 566
 : 8—11下 566
7 : 26.....下 560
8 : 22—30.....上 3
9 : 10.....下 749,816,936
 : 18.....下 566
11 : 24.....下 653
12 : 10.....下 541
 : 22.....下 622
14 : 12.....
 上 426下 797,908
15 : 27.....上 177
 : 33.....下 689
18 : 4下 501
19 : 23.....下 751
23 : 4上 177
 : 7 文, 参...下 564
27 : 4上 461
28 : 9下 734

伝道の書

3 : 14.....下 958
8 : 11.....上 119
9 : 5,6下 860
 : 18.....上 113

雅歌

2 : 11—13.....下 667

イザヤ書

2 : 20,21上 402
3 : 9下 558
4 : 5,6上 325
 : 6上 207
5 : 20—24.....上 426
8 : 19.....下 858,864
 : 20文.....下 864
 : 20新, 参...下 864
9 : 6上 2下 960
12 : 3下 499
13 : 7,8,11.....上 401
 : 9上 176
14 : 12.....下 610
 : 13,14上 4
24 : 20.....上 401
26 : 4下 501
 : 9,10.....上 390
 : 21.....上 400
27 : 5下 920
28 : 21.....上 141下 787
32 : 2下 501
35 : 1,2,5—10 ..下 677
 : 6下 501
40 : 8下 958
 : 12.....上 351
 : 26.....上 35
41 : 17.....下 501
44 : 3下 501
45 : 18.....上 60
48 : 21.....下 498
51 : 7上 399
 : 7,22,12上 403
53 : 4,5下 499
54 : 9,10.....上 108
 : 10.....上 403下 826
55 : 1下 501
 : 7下 920
57 : 15.....上 1
58 : 13.....上 358
61 : 11.....上 404
63 : 9下 493
64 : 1—3.....上 110

エレミヤ書

2 : 6上 449
 : 13.....下 501
7 : 12,14下 634
10 : 10—12,14—16
 上 396
 : 13.....上 35

13 : 20.....上 209
17 : 9下 865
 : 12.....上 3
25 : 30.....上 401
29 : 11.....上 128
30 : 5—7.....上 218
 : 6上 401
31 : 33,34上 442
50 : 25.....下 626

哀歌

3 : 37.....上 426

エゼキエル書

1 : 11参.....上 410
 : 28.....上 107
16 : 49,50上 164
20 : 11.....上 442
 : 13—24参...下 496
28 : 12—15.....上 4
 : 17.....上 4
31 : 8下 550
33 : 11.....下 788
34 : 16,22,28....上 207

ダニエル書

7 : 18.....上 403
 : 27.....上 179

ホセア書

4 : 17.....上 173
12 : 4上 215
13 : 11参.....下 758

ヨエル書

2 : 17.....下 558
3 : 16.....上 401,402
 : 18.....下 555

アモス書

3 : 3上 81,186

オバデヤ書

16.....下 674

ミカ書

4 : 8上 60
5 : 2上 2
6 : 4上 457
7 : 8,9下 934

ナホム書

1 : 3下 788
 : 3,4上 110
 : 5,6上 110

ハバクク書

2 : 3上 179
3 : 6 文.....上 1
 : 11—13.....下 625

: 8下 832	: 33, 34下 882	: 30, 31下 930	: 17—20.....下 954
: 9—11下 832	: 36, 37下 883	16 : 5—8.....下 930	歴代志下
: 16.....下 834	: 38, 39下 883	: 9下 932	24 : 4—13 参.....下 650
: 17—20.....下 834	4 : 1下 883	: 11, 12下 932	ネヘミヤ記
25 : 1下 835	: 8下 884	17 : 1—3.....下 937	9 : 6上 34
: 6—8.....下 837	: 11, 12下 884	: 7—9.....下 937	: 13.....上 433
: 10, 11下 838	5 : 1—3.....下 884	: 10.....下 937	: 19—21.....下 492
: 14—17.....下 838	: 10.....下 885	: 11—13.....下 938	10 : 32, 33 参.....下 650
: 23, 24下 839	: 19.....下 888	: 14.....下 937, 938	ヨブ記
: 26.....下 839	: 22.....下 888	: 15, 16下 939	9 : 5上 385
: 28.....下 839	: 23, 24下 888	: 22.....下 940	11 : 7—9.....上 36
: 29—31.....下 840	6 : 5下 889	: 23.....下 938	14 : 2下 958
26 : 6下 842	: 6, 7下 890	: 24.....下 941	28 : 28.....上 245
: 8下 842	: 11.....下 891	18 : 3, 4下 941	37 : 16.....上 26
: 9—12下 843	: 13.....下 892	: 5下 942	38 : 7上 22, 56
: 15, 16下 879	: 14.....下 892	: 7下 942	: 11.....上 94下 872
: 15—19.....下 843	: 16.....下 894	: 14—17.....下 943	: 22, 23下 626
: 21, 22下 844	: 20.....下 894	: 27—29.....下 943	詩篇
: 25.....下 844	: 21, 22下 895	: 31.....下 943	2 : 4下 936
27 : 12.....下 846	: 23.....下 895	: 32.....下 944	3 : 1—8.....下 940
28 : 1下 847	7 : 3下 895	: 33.....下 944	8 : 6—8.....上 18
: 2下 847	: 8—11下 896	19 : 2, 3下 944	9 : 5, 6上 402
: 4下 848	: 11—13.....下 896	: 5—7.....下 945	: 15.....下 560
: 5下 848	: 18, 19下 896	23 : 1—5.....下 958	11 : 1—5.....下 831
: 6下 849	8 : 15.....下 907	: 15.....下 931	15 : 4下 622
: 6 参.....下 857	9 : 1下 897	: 17.....下 931	17 : 5下 554
: 7下 850	10 : 2下 898	24 : 25.....下 949	18 : 46—50.....下 901
: 8—11下 851	: 3下 899	列王紀上	19 : 1上 36
: 12.....下 852	: 12参.....下 900	1 : 6下 950	: 1, 2上 23
: 13, 14下 851	11 : 15.....下 906	2 : 2—4.....下 957	: 14.....下 501
: 15.....下 852	: 19—22.....下 907	列王紀下	20 : 7下 903
: 16—19.....下 854	: 25.....下 908	12 : 4, 5 参.....下 650	23 : 2下 501
29 : 3下 868	: 27.....下 908	歴代志上	24 : 3下 622
: 4, 5下 868	: 27文, 参.....下 913	2 : 7下 609	: 7—10下 893
: 6, 7下 869	12 : 1—4.....下 909	10 : 13, 14下 858	25 : 9上 460
: 8下 869	: 5, 6下 909	14 : 16, 17下 889	: 14.....上 141, 386
: 9, 10.....下 869	: 6下 921	19 : 6, 7下 900	27 : 5上 111
30 : 4下 870	: 7下 909	: 13.....下 900	32 : 1—4.....下 915
: 6下 870	: 7—12下 910	21 : 1下 947	: 5—7.....下 919
: 8下 871	: 9下 909	: 3, 4下 948	33 : 6, 9上 17, 30
: 16.....下 871	: 9, 10.....下 913	: 8下 948	: 13, 14, 10, 11 上 120
: 18, 19下 872	: 11, 12下 936	: 11, 12下 948	: 16, 17下 902
: 20.....下 873	: 13.....下 910, 912	: 13.....下 948	34 : 7下 666
: 23, 24下 873	: 14.....下 912	: 16.....下 948	: 12—14.....下 751
31 : 1下 855	: 14文, 参.....下 913	: 17.....下 949	36 : 8, 9下 501
: 4下 855	: 17.....下 912	: 18.....下 949	37 : 11.....上 179
: 9下 856	13 : 30, 31下 922	: 24, 25下 949	: 18, 26上 114
: 10.....下 856	: 36.....下 922	: 26.....下 949	: 29.....上 60
: 12, 13下 856	14 : 7下 923	22 : 8—10下 896	: 37.....上 268
サムエル記下	: 14.....下 923	28 : 6, 7下 951	40 : 8上 443
1 : 2下 873	: 21.....下 923	: 8下 951	: 17.....上 413
: 11, 12下 874	: 25.....下 924	: 9, 10.....下 952	44 : 4—7.....下 902
: 13, 14下 874	15 : 3—5.....下 925	: 20.....下 952	48 : 1, 2下 670
: 16.....下 874	: 6下 925	29 : 1, 2下 953	: 2下 800, 927
: 19—27.....下 876	: 7, 8下 926	: 3, 4, 5下 953	50 : 3, 4上 400
2 : 1下 877	: 11.....下 926	: 6—9.....下 953	: 5, 6上 403
: 4下 878	: 19, 20下 928	: 10—17.....下 954	: 10.....下 650
: 5, 6下 878	: 21.....下 928	: 14.....下 956	
3 : 1下 880	: 24.....下 928		
: 28, 29下 880	: 25, 26下 929		
	: 27, 28下 929		

10 : 2下 622	: 20.....下 688	: 4下 737	: 16,17下 791
: 6下 624	8 : 1下 691	: 9下 738	: 20,21下 791
: 7下 624	: 2,3下 691	: 13,14,12.....下 739	: 22.....下 797
: 8下 624	: 4下 688	7 : 2下 741	: 22,23下 793
: 11.....下 624	: 18.....下 682	: 3下 741	: 23.....下 797
: 12,13下 625	: 23.....下 692	: 8下 741	: 24.....下 793
: 14.....下 625	: 34,35下 693	: 12.....下 742	: 25.....下 793
: 40—43.....下 627	10 : 10.....下 694	8 : 3下 756	: 26.....下 793
11 : 4,5下 627	: 11—14.....下 695	: 4,5下 757	: 28.....下 793
: 6下 628	: 16.....下 696	: 7,8下 758	: 29.....下 790
: 8下 628	13 : 4下 698	: 10.....下 759	: 33.....下 794
: 23.....下 628	: 5下 708	: 16.....下 759	16 : 1—5.....下 801
14 : 9下 629	: 8下 699	: 17,18下 760	: 7下 801
: 10—12.....下 630	: 12.....下 699	: 19,20下 760	: 11.....下 802
: 13.....下 630	: 13,14下 699	: 20.....下 771	: 12.....下 802
: 15.....下 877	14 : 3下 701	: 22.....下 761	: 13.....下 803
15 : 14.....下 632	15 : 8下 703	9 : 2下 762	: 18.....下 808,939
17 : 14.....下 633	: 14.....下 703	: 8下 762	17 : 7下 810
: 15.....下 633	16 : 4下 705	: 17.....下 763	: 8—10下 811
: 16.....下 633	: 15.....下 705	: 18,19下 763	: 20.....下 808
: 17,18下 633	: 16.....下 706	: 20.....下 764	: 25.....下 809
18 : 1下 634	: 17.....下 706	: 21.....下 764	: 26.....下 809
19 : 49.....下 634	: 20.....下 706	10 : 1下 764	: 28.....下 809
: 49,50下 634	: 24.....下 707	: 6,7下 764	: 29.....下 810
21 : 11参.....下 877	: 28.....下 707	: 8下 775	: 32.....下 810
22 : 8下 639	: 30.....下 708	: 11.....下 766	: 34,35下 808
: 34.....下 640	: 31.....下 708	: 23.....下 767	: 37.....下 810
23 : 1,2下 643		: 24.....下 767	: 39.....下 811
: 3下 643	サムエル記上	11 : 5下 768	: 43.....下 811
: 5,6下 644	1 : 8下 711	: 6,7下 769	: 44.....下 812
: 14.....下 644	: 10.....下 711	: 11.....下 769	: 45—47.....下 812
: 15,16下 644	: 14.....下 712	: 11下句.....下 769	: 48,49下 812
24 : 14.....下 646	: 15,16下 712	: 13.....下 769	: 52—54.....下 813
: 15.....下 646,647	: 17.....下 712	: 15.....下 770	18 : 1下 814
: 16.....下 647	: 27,28下 712	12 : 1—3.....下 770	: 4下 814
: 19.....下 647	2 : 1—10下 715	: 4下 770	: 5下 814
: 21.....下 647	: 17.....下 722,763	: 11.....下 771	: 6下 815
: 24.....下 647	: 25.....下 728	: 12.....下 771	: 7下 815
: 25.....下 648	: 26.....下 716	: 13.....下 798	: 8下 815
: 27,28下 648	: 27—35.....下 724	: 16,17下 772	: 13,16下 817
: 29.....下 648	: 30.....下 655,726	: 18.....下 772	: 17.....下 818
: 31.....下 648	3 : 1—4.....下 729	: 19.....下 772	: 18.....下 818
士 師 記	: 5下 729	: 20—22.....下 772	: 20.....下 818
1 : 28.....下 678	: 7下 730	: 23—25.....下 773	19 : 6下 818
2 : 12.....下 681	: 9,10.....下 730	13 : 5下 775	20 : 1下 821
6 : 1下 681	: 11—14.....下 730	: 9下 777	: 2下 821
: 5下 682	: 18.....下 731	: 10.....下 777	: 3下 821
: 12.....下 683	: 19,20下 740	: 11,12下 777	: 7下 822
: 13.....下 683	4 : 1下 732	: 13—15.....下 778	: 27—29.....下 822
: 14.....下 683	: 2下 732	: 14.....下 799	: 32.....下 822
: 20.....下 683	: 3下 732	14 : 6下 780	: 42.....下 824
: 31.....下 684	: 6—9.....下 733	: 11.....下 780	21 : 9下 825
: 33.....下 685	: 12.....下 734	: 12.....下 780	22 : 1下 826
: 36,37下 685	: 13.....下 734	: 24.....下 782	: 2下 827
7 : 2,3下 685	: 17.....下 734	: 44.....下 783	: 18.....下 828
: 4下 686	: 18.....下 734	: 45.....下 784	: 19.....下 828
: 12.....下 687	: 22.....下 735	15 : 2,3下 787	: 20—23.....下 829
: 13.....下 687	5 : 10.....下 736	: 7—9.....下 789	23 : 17.....下 830
: 14.....下 687	: 12.....下 736	: 11.....下 789	: 18.....下 830
: 15.....下 688	6 : 2下 736	: 13.....下 790	24 : 1,2下 831
	: 3下 737	: 14,15下 790	: 4下 832

12 : 28, 29 上 456	22 : 22 下 540	7, 8 下 571	32参 下 574
31, 32 上 457	25, 26 下 515	10 下 571	31 : 10—13 下 617
33 上 457	26 下 540	20 下 571	23 下 577
12 : 2 上 458	28 下 540	23, 24, 26 下 572	32 : 4 上 16
3 上 284, 460	29 下 540	32—35 下 569	10 下 493
5 上 460	31—33 下 541	6 : 4, 5 参 上 355	11, 12 下 576
8 上 479	34 下 542	4, 5 上 444	15参 下 500
8, 9 上 461	38 下 542	7—9 下 575	49, 50 下 578
10 上 461	41文 下 543	10—12 下 572	33 : 2, 3 上 355
13 : 27 上 465	23 : 7—10 下 544	20 下 575	13—16 下 581
30 上 466	9 下 545	24, 25 下 575	19 下 581
31—33 上 467	10 下 546, 554	7 : 2 下 604	26—29 下 579
32 上 467	11 下 546	7—9 下 570	34 : 1 下 580
14 : 1 上 467	12 下 546	9 上 114	3 下 555
2 上 467	17 下 547	8 : 2, 3 下 492	5, 6 下 585
3, 4 上 468	19—21 下 548	5 下 492	10—12 下 585
5 上 468	21 下 560	7 上 126	
7—9 上 468	23 下 548, 560	7— 下 572	ヨシュア記
12 上 469	25 下 548	15 下 521	1 : 2 下 591
17—19 上 469	24 : 4 下 541	18参 下 650	3 下 590
24 上 470	5—9 下 550	9 : 1 下 599	5, 6 下 590
28—31 上 470	11 下 552	10 上 367	7, 8 下 591
41—43 上 474	17 下 553, 582	20 上 378	16, 17 下 592
15 : 15 下 623	25 : 1—3 下 858	21 上 366	2 : 10, 11 下 592
35 下 495	3 下 557	10 : 6 下 518	11 上 438 下 605
16 : 3 上 481	8 下 558	11 : 10—12 下 572	24 下 591
5 上 481	11—13 下 559	18—21 下 617	3 : 3 下 592
9—11 上 482	15 下 558	19 下 618	5 下 592
13, 14 上 482	26 : 64, 65 下 559	22—25 下 680	7 下 595
19, 21, 22 上 483	27 : 16, 17 下 568	12 : 8, 28 下 796	10, 11 下 594
26 上 484	18—20 下 568	14 : 23 下 656	4 : 12, 13 下 638
28—30 上 484	21 下 568	29参 下 656	14 下 595
33 上 484	31 : 2 下 559	15 : 6 下 661	18 下 594
34, 41 上 486	7, 8 下 559	7—9 下 661	24 下 595
45 上 486	32 : 12 下 648	8 下 661	5 : 3, 10 下 596
46, 48 上 487	33 : 55 下 680	11 下 661	9 下 596
17 : 8 上 487	35 : 11, 12 下 635	13, 14 下 660	10—12 下 598
12 上 488	30 下 636	16 : 11—14参 下 656	13 : 15 下 600
18 : 15, 16 参 上 318	31 下 636	18 : 12 下 866	6 : 2 下 600, 605
21 下 656	33 下 637	15 下 588	17, 18 下 602
20 : 1 下 496		20 : 5—8 下 686	18 下 609
3 下 503	申 命 記	16 下 604	21 下 602
4, 5 下 503	1 : 15 上 446	23 : 7, 8 参 上 447	24 下 602
6, 8 下 503	16, 17 上 456	14 上 447	26 下 604
10 下 503	41 上 472	15, 16 下 660	7 : 5 下 606
12 下 504, 506	45 上 474	24 : 14, 15 下 660	6 下 607
14—17 下 511	2 : 3—6 下 502	19—22 下 659	7—9 下 607
18 下 512	4, 5 下 513	25 : 17—19 上 348	10, 11 下 607
19 下 512	7 下 492, 514	19 下 787	12 下 607
20 下 512	9 下 527	26 : 5 下 651	20, 21 下 608
29 下 518	14, 15 下 491	8—10 下 651	21 下 609
21 : 5 下 521	24, 25 下 528	12 下 658	22, 23 下 608
7 下 522	27, 28 下 528	27 : 26 上 442	25 下 608
22 : 4 下 535	3 : 1—11 参 下 530	28 : 1—8 下 573	26 下 609
6 下 536	2 下 531	15, 37 下 573	8 : 35 下 615
7 下 535	23—25 下 567	49, 50 下 573	9 : 7, 8, 12, 13 下 620
11 下 535	25 下 587	49—53 下 574	14, 15 下 620
12 下 536	26 下 506	56, 57 下 574	16 下 620
13 下 536	26, 27 下 567	64—67 下 573	18 下 620
16, 17 下 537	4 : 5, 6 下 570	29 : 29 上 32	25 下 622
20 下 537	6 下 758	30 : 19, 20 下 574	27 下 622

: 23.....上 272	: 9上 310	: 4, 5上 356	: 12, 13上 384
: 24.....上 272	: 10, 11上 311	: 5上 356 357	: 14.....上 384
: 26.....上 272	: 14.....上 311	: 6上 357	: 15, 16上 385
出エジプト記	: 16, 17上 311	: 7上 357	: 17.....上 385
1 : 7上 274	: 21.....上 312	: 8—11 ..上 29, 358	: 18.....上 385
: 8上 273	: 23.....上 312	: 10.....下 650	: 19.....上 385
: 9, 10.....上 274	: 26, 28, 29.....上 312	: 12.....上 359	34 : 6, 7 ..上 386下 788
: 13, 14, 12.....上 274	11 : 3上 313	: 13.....上 360	: 7下 577
: 22.....上 275	: 4—8.....上 315	: 14.....上 360	: 8, 10.....上 386
2 : 7上 277	12 : 1—28参 ..上 315	: 15.....上 360	: 24.....下 666
: 9上 277	: 5上 415	: 16.....上 360	: 28.....上 387
: 10.....上 278	: 11.....上 317	: 17.....上 361	: 30.....上 387
: 14.....上 281	: 12, 13上 317	: 19, 20, 21.....上 362	35 : 21, 22上 406
: 23—25.....上 285	: 14, 27上 317	21 : 14.....下 637	: 23—28.....上 406
3 : 5, 6上 285	: 27.....上 321	: 17.....下 493	36 : 6上 407
: 6 下句.....上 285	: 30, 29上 322	22 : 23, 24上 363	: 8上 407
: 7—10上 286	: 31, 32, 33.....上 322	: 31.....上 364	39 : 43.....上 411
: 11, 12上 288	: 37, 38上 323	23 : 9上 363	40 : 34.....上 411
: 13.....上 288	: 51, 40, 41.....上 324	: 10, 11下 659	
: 14.....上 288	13 : 17, 18, 20—22参.....	: 20—22.....上 364	レ ビ 記
: 18.....上 288上 324	: 20—21.....下 507	10 : 6, 7, 3上 427
: 20.....上 288	: 19参.....上 324	: 24.....上 438	: 9—11上 428
: 21, 22上 289	: 20—22.....上 325	: 24, 25下 679	: 17.....上 419
4 : 1上 289	14 : 5上 326	: 27—33.....下 679	16 : 16.....上 419
: 3, 6上 289	: 7上 326	24 : 1, 2上 365	: 19.....上 419
: 10.....上 290	: 11, 12上 327	: 3上 364	: 21, 22上 420
: 11, 12上 290	: 13, 14上 327	: 4上 365	18 : 5 参.....上 442
: 14.....上 378	: 15, 16上 328	: 7上 365, 442	19 : 8 参.....上 355
: 15—17.....上 291	: 23, 24上 329	: 10.....上 365	: 9, 10参.....下 659
: 21.....上 307	15 : 1—17 ..上 330, 331	: 12.....上 366	: 18.....上 136, 444
: 22, 23上 314	: 21.....上 331	: 15, 16上 366	: 18参.....下 514
: 28.....上 293	: 25.....上 336	: 17.....上 354	: 31.....下 866
: 31.....上 293	: 26.....上 336	: 18.....上 366	: 33, 34下 623
5 : 1上 293	: 27.....上 336	25 : 2上 406	20 : 6下 860
: 2 ..上 294, 322, 391	16 : 3上 336	: 8上 367, 405	23 : 40.....下 673
: 3上 294	: 4上 340	28 : 2上 412	: 42, 43 参.....下 673
: 4, 5上 294	: 8, 9, 10.....上 340	: 29.....上 413	24 : 15, 16下 494
: 8上 295	: 14, 31, 15.....上 340	29 : 45, 43上 367	25 : 5 参.....下 659
: 21.....上 295	: 18.....上 342	30 : 12—16.....下 650	: 8, 9, 10.....下 661
: 22, 23上 296	: 23.....上 342	31 : 17, 13, 14.....上 367	: 21, 22下 659
6 : 1上 296	: 25, 26上 342	32 : 1上 371	: 23.....下 662
: 9—13上 299	: 28.....上 344	: 4上 372, 378	: 35—37.....下 661
7 : 12.....上 301	: 31.....上 342	: 5上 372	26 : 4—17下 664
: 22, 23上 303	: 35.....上 344	: 6上 372	27 : 30, 32下 649
8 : 8上 303	17 : 2, 3上 345	: 7, 8上 373	
: 15.....上 304	: 4, 6上 345	: 10.....上 373	民 数 記
: 24.....上 304	: 7上 346	: 11, 12上 374	2 : 2, 17.....上 446
: 26.....上 305	: 14.....上 347	: 15, 16 参.....上 367	3 : 13.....上 317
9 : 6上 305	: 16英.....上 348	: 17.....上 375	4 : 15.....下 890
: 8上 305	18 : 16, 18上 349	: 18.....上 375	7 : 9下 890
: 9上 306	: 19, 20上 350	: 21.....上 376	8 : 16.....上 318
: 14—16.....上 306	: 21.....上 349	: 22—24.....上 376	10 : 33.....上 447
: 19.....上 308	19 : 4—6.....上 352	: 26.....上 379	: 35, 36上 448
: 24, 25上 308	: 5, 6上 441	: 28.....上 380	11 : 1上 452
: 27—30.....上 309	: 8上 352	: 30.....上 382	: 4—6.....上 452
: 33.....上 309	: 9上 353	: 31, 32上 382	: 8上 342
10 : 1, 2上 310	: 10, 11上 353	: 33.....上 383	: 11—14.....上 454
: 6上 310	: 18.....上 354	: 33, 34上 382	: 18—20.....上 455
: 7上 310	: 19.....上 354	33 : 3, 5上 383	: 21, 22上 455
: 8上 310	20 : 2上 355	: 6上 383	: 23.....上 455
	: 3上 356, 372	: 10.....上 384	: 25.....上 456

聖句索引

注・下巻は各ページの内側下の()内にある通しページ数を記載した。索引中にある略号は次の通り、参＝参照 英＝英訳聖書 文＝文語訳 新＝新改訳 詳＝詳訳。

創世記		13 : 8, 9上 132	: 33.....上 195	: 14, 15上 240
1 : 26, 27上 18	: 10.....上 132	: 34, 36上 196	41 : 15, 16上 242	: 17—25, 31 ..上 243
: 27.....上 75	: 11, 12上 133	28 : 13.....上 199	: 33—36.....上 243	: 38.....上 243
: 31.....上 22	: 13.....上 133	: 14, 15上 199	: 39, 40, 42, 43 上 244	: 54—56.....上 247
2 : 1上 22	14 : 19, 20上 165	: 16, 17上 200	42 : 6, 8上 248	: 9上 248
: 2, 3上 22	: 20.....上 136	: 17.....上 286	: 10, 11上 248	: 13.....上 248
: 4上 30	: 20参.....下 649	: 18.....上 201	: 18—20.....上 250	: 21.....上 250
: 8上 21	: 22, 23上 136	: 20—22.....上 201	: 22.....上 250	: 22.....上 250
: 17.....上 49	15 : 1上 137	: 22.....下 649	: 28.....上 250	: 36—38.....上 251
: 20, 18上 20	: 2, 3上 137	29 : 1上 202	43 : 2上 252	: 3—5, 8.....上 252
: 24.....上 21	: 5上 137	: 20.....上 205	: 3—5, 8.....上 252	: 11, 13, 14....上 252
3 : 1上 40	: 12.....上 138	30 : 25, 26上 209	: 22, 23上 253	: 26, 27, 28....上 253
: 2, 3上 40	: 13, 14上 324	: 27.....上 209	: 29, 30上 253	: 34.....上 254
: 4上 193	: 16.....下 529	: 30.....上 209	44 : 4, 5上 254	: 7—9.....上 256
: 4, 5下 860	: 18....上 138下 903	: 43.....上 209	: 10.....上 256	: 11.....上 256
: 6上 42	16 : 6上 151	31 : 1, 2上 209	: 15.....上 256	: 16.....上 256
: 9—11上 46	: 8, 9上 151	: 3上 210	: 17.....上 256	: 18.....上 257
: 12.....上 46	: 11, 10上 151	: 15.....上 203	: 30—34.....上 257	45 : 3上 257
: 13.....上 46	: 12.....上 185	: 29.....上 210	46 : 3, 4上 260	: 4, 5上 258
: 14.....上 47	17 : 1上 138, 440	: 38—40.....上 206	: 29, 30上 261	: 6—12, 14, 15 上 259
: 15.....上 47, 58	: 4上 138	: 43.....上 211	47 : 29, 30上 262	: 18.....上 259
: 16.....上 47	: 7上 440	: 49.....上 211	48 : 5上 263	: 26, 28上 259
: 17—19.....上 48	: 16.....上 138	: 51—53.....上 211	: 7上 225	49 : 2, 1上 264
: 19.....下 586	: 18.....上 151	32 : 2上 213	: 9上 263	: 3上 264
4 : 4上 66	: 19.....上 152	: 5上 213	: 15, 16上 263	: 4上 264
: 6, 7上 70	: 20.....上 152	: 7上 213	: 21.....上 264	: 5—7.....上 223
: 9上 71	18 : 17.....上 141	: 9—11上 214	49 : 2, 1上 264	: 7上 265
: 10.....上 72	: 19上 143, 149下 721	: 26.....上 215	46 : 3, 4上 260	: 8—10上 266
: 11, 12上 72	: 20.....上 141	: 28.....上 216	: 29, 30上 261	: 22—26.....上 268
: 25.....上 75	: 25.....上 142	33 : 4上 218	47 : 29, 30上 262	: 29—31英....上 268
: 26.....上 76	: 27.....上 142	: 18.....上 222	48 : 5上 263	: 30, 31下 877
6 : 2上 77	19 : 2上 167	: 19, 20上 222	: 7上 225	50 : 16, 17上 270
: 5 参.....上 73	: 7上 168	: 30.....上 223	: 9上 263	: 18, 19—21 ..上 271
: 5, 11.....上 89	: 11.....上 168	34 : 30.....上 223	: 15, 16上 263	
: 7上 89	: 13.....上 169	35 : 2, 3上 224	: 21.....上 264	
7 : 1上 96, 112	: 14.....上 169	: 4上 224	49 : 2, 1上 264	
: 9上 95	: 17.....上 170, 175	: 5下 615	: 3上 264	
: 11.....上 97	: 20.....上 170	: 14.....上 224	: 4上 264	
: 16.....上 96	: 21.....上 171	: 27.....上 226	: 5—7.....上 223	
8 : 13.....上 106	: 23.....上 172	36 : 7上 226	: 7上 265	
: 21, 22上 106	22 : 2上 154	37 : 7上 229	: 8—10上 266	
9 : 2, 3上 108	: 5上 157	: 8上 230	: 22—26.....上 268	
: 6下 636	: 7, 8上 157	: 9上 230	: 29—31英....上 268	
: 11—16.....上 107	: 11, 12上 158	: 10.....上 230	: 30, 31下 877	
: 25.....上 112	: 13, 14上 158	: 19, 20上 231	50 : 16, 17上 270	
: 26, 27上 113	: 16—18.....上 158	: 25.....上 232	: 18, 19—21 ..上 271	
11 : 5上 118	: 18.....上 439	: 27.....上 232		
: 8上 117	24 : 7上 182	: 30.....上 233		
12 : 1上 122	: 49.....上 184	: 32.....上 233		
: 2上 122, 127	: 50, 51上 184	: 33.....上 233		
: 3上 122	: 63—67.....上 185	: 34.....上 233		
: 5上 125	25 : 32, 34上 192	: 35.....上 233		
: 6上 126	26 : 5上 192	39 : 2, 3上 236		
: 7上 126	..上 143, 160, 431, 440	: 6上 236		
: 18, 19上 129	27 : 3, 4上 192	: 9上 237		
	: 31.....上 195	40 : 8上 239		

原著……………本書	原著……………本書
662 …………… 832,834	720 ……………907—909
663 …………… 834,835	721 …………… 909,910
664 ……………835—837	722 …………… 910,912
665 …………… 837,838	723 ……………912—914
666 ……………838—840	724 ……………914—916
667 …………… 840,841	725 ……………916—919
668 …………… 841,842	726 …………… 919,920
671 ……………842—844	727 …………… 921,922
672 …………… 844,845	728 …………… 922,923
673 …………… 845,846	729 ……………923—925
674 ……………… 847	730 …………… 925,926
675 …………… 848,849	731 …………… 926,927
676 …………… 849,850	732 ……………927—929
679 ……………850—852	735 …………… 929,930
680 …………… 852,854	736 …………… 930,931
681 …………… 854,855	737 …… 931,932,934
682 …………… 855,856	738 …………… 934,935
683 …………… 857,858	739 …………… 935,936
684 …………… 858,859	740 …………… 937,938
685 …………… 859,860	741 …………… 938,939
686 …… 860,862,863	742 ……………939—941
687 …………… 863,864	743 …………… 941,942
688 …………… 864,865	744 …………… 943,944
689 …………… 865,866	745 …………… 944,945
690 …………… 867,868	746 …………… 946,947
691 …………… 868,869	747 …………… 947,948
692 ……………869—871	748 …………… 948,949
693 …………… 871,872	749 …………… 949,950
694 …………… 872,873	750 …………… 951,952
695 …………… 873,874	751 …………… 952,953
696 …………… 875,876	752 …………… 953,954
697 …………… 877,878	753 …… 954,956,957
698 …………… 878,879	754 ……………957—959
699 …… 879,880,882	755 …………… 959,960
700 …………… 882,883	
701 …………… 883,884	
702 ……………… 885	
703 …………… 886,888	
704 …………… 888,889	
705 …………… 889,890	
706 ……………890—892	
707 …………… 892,893	
708 …………… 893,894	
711 …………… 894,895	
712 …………… 896,897	
713 …………… 897,898	
714 …………… 898,899	
715 ……………899—901	
716 ……………901—903	
717 …………… 904,905	
718 …………… 905,906	
719 …………… 906,907	

原著……………本書	原著……………本書	原著……………本書	原著……………本書
438 …………… 534,535	496 …………… 609,610	550 …………… 687,688	606 …………… 759,760
439 …………… 535,536	497 …………… 610,611	553 …………… 688,689	607 …………… 760,761
440 …………… 536,537	498 …………… 612,613	554 …………… 689—691	608 …………… 761,762
441 …………… 538,540	499 …………… 614,615	555 …………… 691,692	609 …………… 762—764
442 …………… 540,541	500 …………… 615,616	556 …………… 692,693	610 …………… 764,766
443 …………… 541—543	503 …………… 616,617	557 …………… 693—695	611 …………… 766,767
444 …………… 543,544	504 …………… 618	558 …………… 695,696	612 …………… 767—769
447 …………… 545,546	505 …………… 619,620	559 …………… 696,697	613 …………… 769,770
448 …………… 546—548	506 …………… 620,622	560 …………… 698,699	614 …………… 770,771
449 …………… 548—550	507 …………… 622—624	561 …………… 699,700	615 …………… 771—773
450 …………… 550,552	508 …………… 624,625	562 …………… 700—702	616 …………… 774,775
451 …………… 552—554	509 …………… 625,626	563 …………… 702,703	617 …………… 775,776
452 …………… 554	510 …………… 627,628	564 …………… 703,704	618 …………… 776,777
453 …………… 555,556	511 …………… 628,629	565 …………… 704,705	621 …………… 777,778
454 …………… 556,557	512 …………… 629,630	566 …………… 705—707	622 …………… 778—780
455 …………… 557,558	513 …………… 632,633	567 …………… 707,708	623 …………… 780,782
456 …………… 559,560	514 …………… 633,634	568 …………… 708,709	624 …………… 782,783
457 …………… 560,561	515 …………… 634,635	569 …………… 710,711	625 …………… 783—785
458 …………… 561,562	516 …………… 636,637	570 …………… 711,712	626 …………… 785
459 …………… 562,563	517 …………… 637,638	571 …………… 712—714	627 …………… 786,787
460 …………… 564,565	518 …………… 638—640	572 …………… 714—716	628 …………… 787,788
461 …………… 565,566	519 …………… 640,641	573 …………… 716,718	629 …………… 788,789
462 …………… 567,568	520 …………… 641,642	574 …………… 718,719	630 …………… 789—791
463 …………… 568,569	521 …………… 643,644	575 …………… 720,721	631 …………… 791,793
464 …………… 569,570	522 …………… 644,645	576 …………… 721,722	632 …………… 793—795
465 …………… 570—572	523 …………… 645—647	577 …………… 722,723	633 …………… 795,796
466 …………… 572,573	524 …………… 647,648	578 …………… 723—725	634 …………… 796,797
467 …………… 573,574	525 …………… 649,650	579 …………… 725,726	635 …………… 797,798
468 …………… 574,575	526 …………… 650,651	580 …………… 726,728	636 …………… 798,799
469 …………… 576,577	527 …………… 651—653	581 …………… 729,730	637 …………… 800,801
470 …………… 577,578	528 …………… 653,654	582 …………… 730,731	638 …………… 801,802
471 …………… 578—580	529 …………… 654,655	583 …………… 731—733	641 …………… 802,803
472 …………… 580,581	530 …………… 656,658	584 …………… 733,734	642 …………… 804,805
475 …………… 581—583	531 …………… 658,659	585 …………… 734,735	643 …………… 806,807
476 …………… 583,584	532 …………… 659—661	586 …………… 735,736	644 …………… 807,808
477 …………… 584,585	533 …………… 661,662	587 …………… 736—738	645 …………… 808,809
478 …………… 585,586	534 …………… 662,663	588 …………… 738,739	646 …………… 809—811
479 …………… 586,587	535 …………… 663—665	589 …………… 739,740	647 …………… 811,812
480 …………… 587,588	536 …………… 665	590 …………… 740—742	648 …………… 812,813
481 …………… 589,590	537 …………… 666,667	591 …………… 742	649 …………… 814,815
482 …………… 590,591	538 …………… 667—669	592 …………… 743,745	650 …………… 815,816
483 …………… 591,592	539 …… 669,670,672	593 …………… 745,746	651 …………… 816,817
484 …………… 594,595	540 …………… 672,673	594 …………… 746,747	652 …………… 817—819
485 …………… 595,596	541 …………… 673—675	595 …………… 747,748	653 …………… 819,820
486 …………… 596,598	542 …………… 675—677	596 …………… 749,750	654 …………… 820,821
487 …………… 599,600	543 …………… 678,679	599 …………… 750,751	655 …… 821,822,824
488 …………… 600,601	544 …………… 679,680	600 …………… 751,752	656 …………… 824,825
491 …………… 601,602	545 …………… 680,681	601 …………… 752,753	657 …………… 825,826
492 …………… 604,605	546 …………… 682,683	602 …………… 753,754	658 …………… 826,827
493 …………… 605,606	547 …………… 683,684	603 …………… 755,756	659 …………… 827,828
494 …………… 606,607	548 …………… 684,685	604 …………… 756,757	660 …………… 829,830
495 …………… 608,609	549 …………… 685—687	605 …………… 757,758	661 …………… 830—832

原著……………本書	原著……………本書	原著……………本書	原著……………本書
217 …………… 236,237	273 …………… 314,315	331 …………… 389,390	385 ……………460—462
218 …………… 238,239	274 …………… 315,317	332 …………… 390,391	386 …………… 462
219 …………… 239,240	277 ……………317—319	333 …………… 391,392	387 …………… 463,465
220 …………… 240,242	278 …………… 319,320	334 …………… 392,393	388 …………… 465,466
221 …………… 243,244	279 ……………320—322	335 …… 393,394,396	389 ……………466—468
222 …………… 244,245	280 …………… 322	336 …………… 396,397	390 …………… 468,469
223 …………… 245,246	281 …………… 323,324	337 …………… 397,398	391 ……………469—471
224 …………… 247,248	282 …………… 324,325	338 …………… 398,399	392 …………… 471,472
225 …………… 248,249	283 …………… 325,326	339 …………… 399,400	393 ……………472—474
226 ……………249—251	284 …………… 327,328	340 …………… 401,402	394 …………… 474,475
227 …………… 251,252	287 …………… 328,329	341 …………… 402,403	395 …………… 477,478
228 ……………252—254	288 ……………329—331	342 …………… 403,404	396 …………… 478,479
229 …………… 254,256	289 ……………331—333	343 …………… 405,406	397 …………… 479,480
230 ……………256—258	290 …………… 333,334	344 …………… 406,407	398 ……………480—482
231 …………… 258,259	291 …………… 335,336	347 …………… 407,408	399 …………… 482,483
232 …………… 259,260	292 …………… 336,337	348 …………… 408,410	400 …………… 483,484
233 …………… 261,262	293 …………… 337,338	349 …………… 410,411	401 ……………484—486
234 …………… 262,263	294 ……………338—340	350 ……………411—413	402 …………… 486,487
235 ……………263—265	295 …………… 340,342	351 …………… 413,414	403 …………… 487,488
236 ……………265—267	296 ……………342—344	352 …………… 414,415	404 …………… 488,489
237 ……………267—269	297 …………… 344,345	353 …………… 415,416	405 …………… 489,490
238 …………… 269,270	298 …………… 345,346	354 …… 416,418,419	
239 …………… 270,271	299 ……………346—348	355 …………… 419,420	406 …………… 491,492
240 …………… 271,272	300 …………… 348,349	356 …………… 420,421	407 …………… 492,493
241 …………… 273,274	301 …………… 349,350	357 …………… 421,422	408 …………… 493,494
242 …………… 274,275	302 …………… 350,351	358 …………… 422,423	409 ……………494—496
243 …………… 275,277	303 …………… 352,353	359 …………… 424,425	410 …………… 496,497
244 ……………277—279	304 …………… 353,354	360 …………… 425,426	411 …………… 498,499
245 …………… 279,280	305 ……………354—356	361 ……………426—428	412 …………… 499,500
246 …………… 280,281	306 …………… 356,357	362 …………… 428,429	413 ……………500—502
247 ……………281—283	307 ……………357—359	363 …………… 430,431	414 …………… 502,503
248 …………… 283,284	308 …………… 359,360	364 …………… 431,432	417 …………… 503,504
251 …………… 284,285	309 …………… 360,361	365 …………… 432,433	418 …………… 504,506
252 …… 285,286,288	310 …………… 362,363	366 ……………433—435	419 …………… 506,507
253 …………… 288,289	311 …………… 363,364	367 …………… 435,436	420 …………… 507,509
254 ……………289—291	312 ……………364—366	368 …………… 436,437	421 …………… 509,510
255 …………… 291,292	313 …………… 366,367	369 …………… 437,438	422 …………… 511,512
256 …………… 292	314 …………… 367,368	370 …………… 439,440	423 …………… 512,513
257 …………… 293,294	315 …………… 369,370	371 …………… 440,441	424 …………… 514,515
258 …………… 294,295	316 …………… 370,371	372 ……………441—443	425 …………… 515,516
259 ……………295—297	317 …………… 371,372	373 …………… 443,444	426 ……………516—518
260 …………… 297,298	318 …………… 373,374	374 …………… 445,446	427 …………… 518,520
263 …… 298,299,301	319 …………… 374,375	375 …………… 446,447	428 …………… 520,521
264 …………… 301,302	320 …… 375,376,378	376 …………… 447,448	429 …………… 521,522
265 …………… 302,303	323 …………… 378,379	377 ……………448—450	430 ……………522—524
266 …………… 304,305	324 …………… 379,380	378 …………… 450,451	431 …………… 524,525
267 …………… 305,306	325 …………… 380,381	379 …………… 451,452	432 …………… 525,526
268 …………… 306,307	326 ……………381—383	380 …… 452,454,455	433 …………… 527,528
269 ……………307—309	327 …………… 383,384	381 …………… 455,456	434 …………… 528,529
270 …………… 309,310	328 ……………384—386	382 ……………456—458	435 …………… 529,530
271 …………… 310,311	329 …………… 386,387	383 …………… 458,459	436 ……………530—532
272 ……………311—313	330 …………… 387,388	384 …………… 459,460	437 …………… 532,533

英和ページ対照表

E・G・ホワイトの全著書に対して、英文のインデックスが発行されていますので、そのインデックスを使用して本書から引用されたいかた、および、英文原著を対照、または引用なさりたいかたのために、原著のページと本書のページとの対照表を作成しました。

原著……………本書	原著……………本書	原著……………本書	原著……………本書
33 …………… 1,2	77 …………… 71,72	123 ……………117—119	169 …………… 178,179
34 …………… 2,3	78 …………… 72,73	124 ……………119—120	170 …………… 179,180
35 ……………3—5	79 …………… 73,74	125 …………… 121,122	171 …………… 181,182
36 …………… 5,6	80 …………… 75,76	126 …………… 122,124	172 …………… 182,183
37 …………… 6,7	81 …………… 76,77	127 …………… 124,125	173 ……………183—185
38 ……………8,10	82 …………… 77,78	128 ……………125—127	174 …………… 185,186
39 …………… 10,11	83 …………… 78,79	129 …………… 127,128	175 …………… 186,187
40 …………… 11,12	84 ……………79—81	130 …………… 128,129	176 …………… 187,188
41 …………… 13,14	85 …………… 81,82	131 …………… 129,130	177 …………… 189,190
42 …………… 14,15	86 …………… 82,83	132 …………… 131,132	178 …………… 190,191
43 …………… 15,16	87 …………… 83,84	133 …………… 132,133	179 …………… 191,192
44 …………… 17,18	88 …………… 84,85	134 …………… 133,134	180 …………… 194,195
45 …………… 18,20	89 …………… 85,86	135 …………… 135,136	181 …………… 195,196
46 …………… 20,21	90 …………… 87,88	136 …………… 136,137	182 …………… 196,197
47 …………… 22,23	91 …………… 88,89	137 …………… 137,138	183 …………… 198,199
48 …………… 23,24	94 …………… 89,90	138 …… 138,140,141	184 …………… 199,200
49 …………… 24,25	95 …………… 90,92	139 …………… 141,142	187 ……………200—202
50 …………… 25,26	96 …………… 93,94	140 …………… 142,143	188 …………… 202,203
51 ……………27	97 …………… 94,95	141 …… 143,144,146	189 …………… 203,205
52 …………… 37,38	98 …………… 95,96	142 …………… 146,147	190 ……………205—207
53 …………… 38,39	99 ……………96—98	143 …………… 147,148	191 …………… 207,208
54 ……………39—41	100 ……………98,100	144 …………… 148,149	192 …………… 208,209
55 …………… 41,42	101 …………… 100,101	145 …………… 150,151	193 ……………209—211
56 …………… 43,44	102 ……………101—103	146 …………… 151,152	194 …………… 211
57 …………… 45,46	103 …………… 103,104	147 ……………152—154	195 …………… 212,213
58 …………… 46,47	104 …………… 104	148 …………… 154,155	196 …………… 213,214
59 ……………47—49	105 …………… 105,106	151 …………… 155,156	197 ……………214—216
60 …………… 49,50	106 …………… 106,107	152 ……………156—158	198 …………… 216,218
61 …………… 50,51	107 …………… 107,108	153 …………… 158,160	201 …………… 218,219
62 …………… 51,52	108 …………… 108,109	154 …………… 160,161	202 …………… 219,220
63 …………… 53,54	109 ……………109—111	155 …………… 162	203 …………… 220,221
64 …………… 54,55	110 …………… 111	156 …………… 163,164	204 …………… 222,223
65 ……………55,56,58	111 …………… 29,30	157 …………… 164,165	205 …………… 223,224
66 …………… 58,59	112 …………… 30,31	158 …………… 165,167	206 …………… 224,225
67 …………… 59,60	113 ……………31—33	159 ……………167—169	207 …………… 226,227
68 ……………60—62	114 …………… 33,34	160 …………… 169,170	208 …………… 227,228
69 …………… 62,63	115 …………… 34,35	161 …………… 170,171	209 …………… 228,229
70 …………… 63,64	116 …………… 35,36	162 …………… 171,172	210 …………… 230,231
71 …………… 65,66	117 …………… 112,113	165 …………… 173,174	211 …………… 231,232
72 …………… 66,68	118 …………… 113,114	166 …………… 174,175	212 …………… 232,233
73 …………… 68,69	119 …………… 114,116	167 …………… 175,176	213 …………… 234,235
74 ……………69—71	120 …………… 116,117	168 ……………176—178	214 …………… 235,236

ホワイト選集

- 1 人類のあけぼの (上巻)
- 2 人類のあけぼの (下巻)**
- 3 国と指導者 (上巻)
- 4 国と指導者 (下巻)
- 5 各時代の希望 (上巻)
- 6 各時代の希望 (中巻)
- 7 各時代の希望 (下巻)
- 8 患難から栄光へ (上巻)
- 9 患難から栄光へ (下巻)
- 10 各時代の大争闘 (上巻)
- 11 各時代の大争闘 (下巻)

N D C 194/480P/22cm

転載複製を禁ず

1971年10月25日 発行

著者	エレン・G・ホワイト
訳者	清野喜夫
発行者	安河内寿
印刷所	福音社

〒241 横浜市旭区上川井町1966

発行所 福音社
電話(045)921-1414 振替横浜 599番

〒241 横浜市旭区上川井町846

発売所 健康と品性向上協会本部
電話(045)921-1121

製本・関山製本社 PRINTED IN JAPAN